

君が演じ、僕は歌う

ソウリン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼い頃から、天才子役と称えられた少女白鷺千聖

小さな頃から、天才歌手と賞された少年黒城雅

成長して、演技派女優と呼ばれるようになった少女

大きくなり、シンガーソングライターとなった少年

違う道を歩む二人

支え合い歩む二人

奏でるは愛の二重奏

愛しくも儂い歌劇の幕が今上がる

目次

第一章 君が愛し、僕は夢見る

第1演目	あさきゆめみし君と	1
第2演目	桜笑み君想う	16
第3演目	歩み	31
第4演目	愛唄	47
第5演目	フェイク	66
第6演目	彩り	83
第7演目	瞬く星の下で	101
第8演目	ヒトリノ夜	116
第9演目	夢であるように	135
第10演目	そして僕にできるコト	

152

第11演目 Re:STARRT

170

第12演目 夢の続きへ

第13演目 夢のうた

第14演目 愛のうた

第15演目 ガラスを割れ!

第16演目 世界には愛しかない

265

第二章 君が笑み、僕も笑う

第17演目 集結の運命

第18演目 集結の園へ

第19演目 走り始めたばかりのキミ

第28演目	愛のかたまり	468	第36演目	夕日坂	639
第27演目	フラワー	446	614		
第26演目	御手紙	434	第35演目	歌に形はないけれど	588
第25演目	嘘	419	第34演目	ゆずれない願い	567
		401	d	Is Love	
第24演目	みんなあなたを愛してる	386	第33演目	All You Need	
第23演目	Best Friend	370	547		
第22演目	いちばん星	354	第32演目	Moonlight	530
s!!			第31演目	打上花火	
第21演目	Legend Girl	327	508		
第20演目	前へススメ!	306	第30演目	微笑みサンセット	491
に			シアワセ☆ハイテンション		
			第29演目		

oment	848	第43演目	Catch the	M
	826	第42演目	DEDICATE	
	804	第41演目	いけないボーダーライン	
	765	第40演目	君の顔が好きだ	—
	739	第39演目	歌うたいのバラッド	
u!	698	第38演目	NO, Thank You	
	668	第37演目	お花畑に連れてって	
	898	第44演目	一番の宝物	—
		第45演目	Y. O. L. O	!!!!!!
	871	第46演目	ゆら・ゆらRing	D
	928	ong Dance		
	958	第47演目	涙サプライズ!	—
	984	第48演目	あなたがいてくれたから	
	1016	第49演目	すきなことだけでいい	
	1040	第50演目	シツクシツクシツク	
		第51演目	星に願いを君との愛を	

第一章 君が愛し、僕は夢見る
第1演目 あさきゆめみし君と

夢を見ていた

幸福しあわせな夢を見ていた

望みゆめが叶う夢

明しあわせなるい未来の夢

愛する歌で、世界の頂点トップに立つ夢

愛する女ひとが、隣で笑っている夢

正に、思い描いた理想の未来ゆめだった

これは夢だ

それはわかっている

だが、だかもしも願いが叶うならば、このまま夢よ覚めないでくれ

そう願わずにはいられない、理想郷ゆめがそこにはあつた

ああ、どうか僕を夢の住人にしてはくれないだろうか？

願わくば、この世界ゆめで、人生を・・・

「び・・・やび・・・」

だが、それはどうやら許されならしい。誰かの声が聞こえる。優しい声だ。聞き慣れた声だ。愛しい声だ。僕の意識が、その声に引っ張られていくのが手に取るようにわ

かる。おそらく、目覚めの刻なのだろう。浮上する意識の中、僕は最後の時まで夢に浸っていた。

「雅、起きなさい」

意識が覚醒する。見慣れた部屋だった。見間違はずがない、僕の部屋の見慣れたベッドの上で、僕は寝ていた。そして、そんな僕を覗き込む見慣れた少女がいる。僕を起こしたのは間違いない彼女だ。薄黄色の綺麗な髪が特徴の彼女。僕とは、所謂いわゆる幼なじみという関係にある。

「おはよう雅。朝ご飯できてるわよ」

「おはよう千聖。いつもごめんね。君も忙しいのに」

彼女の名前は白鷺千聖。真正正銘の現役女優だ。何故彼女がここにいいのか？それは僕の生活を助けてもらっているからだ。僕は現在一人暮らしだ。両親は健在だが、父が仕事の関係上海外を拠点にしているため、二人で現在ロンドンに住んでいる。僕も最初は一緒に行くことを勧められた。だが、結局この国に残ることを決めた。

理由としては、この国で音楽活動を続けたかった為だ。僕は生粋の音楽バカだ。

寝ても覚めても音楽のことばかり考えている筋金入りの音楽バカだ。そんな僕には目標としている人物がいる。日本、いや世界の音楽史に残るほどの実績と実力を持つ、

生きる伝説と呼ばれる人物だ。せめて、その人がこの国で残した伝説、その足下にも近づかない限りはこの国を離れる訳には行かない。故に、残った。

一人暮らしを初めて早5年になる。最初はひどいものだった。先述した通り、僕は生粋の音楽バカだ。言い換えれば、今まで音楽以外してこなかったとも言える。もちろん、必要な分の勉強は修めてきたが、それでも人生のほぼ全てを音楽に注いできたと言つてもいい。

もちろん、家事など一切したことがない。

人間、誰しもできない物事はあるだろう。だが、それが生きていくのに必要不可欠な事ならば、必死に習得しようとするだろう。だが、僕はそうしなかった。その時間も無駄だと言わんばかりに、音楽に時間を割いたのだ。スーパーの惣菜で補う生活。溜まる洗濯物。時には、食事も忘れて音楽に打ち込んだこともあった。

焦りもあつたのだろう。目標としている人物は、あまりにも偉大すぎた。いくら自分が成長しても、全く影すら見えない。あまりにも遠すぎる存在。故に焦った。今よりもっと、さらにもっと音楽に時間を割かねば。そのためには、食事の時間も、寝てる時間ももつたらない。いつの間にか僕は、不眠不休の生活を続けるようになっていた。

だが、いくら若いとはいえ、そんな無茶な生活が長続きするわけがない。当然の結果として僕は倒れた。中学校の授業中だった。それはもう盛大に倒れたのを今でも覚え

ている。そして、その後救急車で運ばれたことも。

病院に運ばれた僕は、そこで過労と診断された。2、3日安静にしてれば治ると医者
は言う。大抵の人はたかが2、3日と思うだろう。だが、僕にとつてはあまりにも長
すぎる時間だった。病院から抜け出すことも当然考えた。だが、それは許されなかつた。

どうやら僕の行動は読まれていたらしい。医者でも看護師にでもない。正直、彼らだ
けだったなら、僕は抜け出すことに成功していただろう。そしておそらくまた倒れるま
で音楽に没頭していたはずだ。では誰に読まれていたのか？今日の前にいる彼女、白鷺
千聖にだ。

彼女、なんと24時間体制で僕の監視をすると言い出したのだ。そのために、泊まり
込みの許可を医者にとつたらしい。それどころではない。当時から、いや、幼い頃から
彼女は子役として活躍していた所謂芸能人である。それは当然中学校に入っても変わ
らない。毎日のように学業と仕事に追われる日々を送っていた。その仕事を僕の退院
予定日までの分全てキャンセルしたと言うのだ。さらには学校にまで休みの連絡を入
れる徹底ぶり。当時聞いた時は開いた口が塞がらなかつた。

だが、その時の僕にはそれがただの嫌がらせにしか感じられなかつた。今思い返せ
ば、どう考えても僕を心配しての行動なのだが、その時の僕にはその考えを導き出す程
度の余裕すら無かつた。それどころか、彼女の行動がストレスに感じるほどだつた。今

思い返すと、当時の自分を本当に殴り飛ばしたくなる。この後した行動を思い返すと余計にだ。何をしたのか。それは千聖に対する暴言の嵐だ。自分の鬱憤を全てぶちまけるかのように、彼女に対して散々怒鳴り散らした。

それに対する返答は言動では無く行動だった。ビンタだった。間違いなく跡が残るほどの本気ビンタが飛んできた。泣きそうな程痛かったのを今でも覚えている。だが、当時はそれで彼女が愛想を尽かしてくれるなら有り難いと思っていた。その時、すでに頭の中で病院から抜け出す計画を考えていたのをよく覚えている。

だが、次に彼女が見せた行動はさすがに予想外だった。抱擁してきたのだ。泣きながら抱きついてきたのだ。その姿を見た瞬間、僕は何も考えられなくなった。いや、思考が追いつかなくなったと表現するべきだろうか？頭の中に疑問が浮かんでは答えを出す前に消えていくばかり。結果的に何も考えられなくなったのと同じようなものだ。そうしてようやく、今更ながらに、はつきりとした疑問が頭に浮かぶ。どうしてこんな行動を？という、当たり前な疑問だ。

そこから、泣きながら彼女が語った言葉は当時の僕には衝撃的だった。延々と、僕を心配する言葉が続く。あんなに暴言を吐いた僕を責めるどころか、氣遣う言葉ばかりが出てくるのだ。その段階になって、愚かな僕はようやく気づく。彼女が心の底から、本気で僕を心配してくれていたのだと。気づくと同時に、自分の愚かさに嫌気が指した。

それと同じぐらい、彼女に申し訳なくなつた。そう感じると、僕も涙が溢れてくる。彼女を抱きしめ返し、延々と謝罪の言葉を繰り返す。そして、その後は看護師さんが病室に入ってくるまで二人で泣き続けたのをよく覚えてゐる。僕にとつて、苦い思い出であると同時に、忘れられない大切な思い出だ。

その3日後、僕は無事に退院することになる。これは余談だが、本当に彼女3日間一緒に泊まつていった。別々のベッドとはいへ、その病室に患者は僕しかいない。要するに、彼女と二人だけの空間というのは非常に理性がきつかつた。逆に病状悪化するんじゃないかと思つた程だ。夜に寝付けなくて、昼に寝るを繰り返す3日間だつた。まあ、夜も当然僕は寝てると彼女は思つてたみたいで、安静にするのはいいけど、寝過ぎじゃない？と彼女に聞かれたときはどう答えたらいいものか非常に困つた。まあなんとかはぐらかしたが、それはともかくだ。

僕は、退院を機に、食事睡眠はしつかり取ることを決意する。倒れて数日行動不能になるのはさすがに音楽に対する支障が大きいし、何より、これ以上彼女に心配をかけたくなかつた。さすがに、家事の習得に時間を割く気は一切無かつたが、それでも最初に比べて大きな変化だつたと思う。洗濯物だけどうしようかなと考へていたのだが、ここで思わぬ提案が千聖からきた。なんと、彼女が家事の全般を受け持つてくれると言うのだ。いや、それは僕としてはものすごく有り難いのだが、それはそれで彼女に申し訳な

い気持ちが強くなる。最初はもちろん断つたのだが、どうせ、家事覚える気ないんでしょ?と、ジト目で言われ、何も言い返せなくなってしまう。だが、せめてもの抵抗として、彼女の多忙スケジュールを問題に挙げたのだが、さすがに主婦みたいに専念はできないけど、朝食と弁当、夕食作りに洗濯、週に1度の掃除ぐらいする時間はあると論破されてしまう。口では彼女に勝てないのはわかりきっていたことだ。因みに、彼女が主婦と言つた時に少しドギマギしてしまつたのは内緒だ。

結局僕には彼女の提案を受け入れる以外の選択は無くなつてしまふ。洩々、許可をした僕。その時に彼女が浮かべた笑顔はまるで太陽のように眩しかった。それはもう直視できないほどだ。さらに直射日光に当てられたからか、僕の顔が真っ赤になつていくのを実感できる。今になつてわかる。その時には僕はもう恋に落ちていたのだろう。当時はまだ、はつきりと自覚はしていなかつたが、自分の気持ちを自覚できている今ならわかる。そう、僕は白鷺千聖という少女に恋をしている。今も、おそらくこれから先も、ずっと。と、長くなつてしまつたが、このようにいきさつがあつて今につながる。あの日以来、彼女には全く頭があがらない。それも仕方ないことだとは思ふが。

「気にしないで、私が好きでやっていることだもの。それより、謝るなら自分で起きてもらえたらありがたいのだけれども?」

「うっ、ごめん昨日遅くまで作曲活動してたから」

僕は現在シンガーソングライターとして活動している。もちろん、高校にも通っているが、時に仕事で休むこともある。これでも、人気は高いと思うから、仕事も割と多いからだ。

「ふふつ、冗談よ。ほら、朝ご飯冷めちゃうから早く着替えてきなさい」

彼女、時にいじわるだ。僕の弱いところをいじってくる。最も、彼女に頭が上がりない僕は何も言い返すことができないのだけれど。そして、彼女が出ていった部屋で制服に着替えつつ、昨日作曲に用いたノートとギターケース、学生鞆を準備する。

「あ、あれも忘れないようにしないと」

さらに、一つの白い箱を用意して、僕は部屋を出た。目指すは千聖が待つリビングだ。リビングに来ると、そこにはすでに、朝食の配膳を終えた千聖が微笑みながら待っていた。わざわざ僕が来るのを食べずに待っていてくれたらしい。これも、いつものことながら申し訳ない気持ちになる。

「ごめん。待たせちゃったかな?」

「ううん、大丈夫。今準備が終わったところよ? さあ食べましょう?」

彼女に促されるまま、いただきますの挨拶を早々に済ませ、朝食を口に含む。おいしい。どうやら彼女はまた料理の腕を上げたらしい。実は彼女、家事を受け持ってくれた時点では、料理があまり得意ではなかった。最初に出された料理も、お世辞にもおいし

いと言える品ではなかった。だが、一週間もすれば彼女の料理は信じられないほど上達していた。もはや別人かと思えるほどだ。今となつてはほんとに胃袋を捕まれている。

「うん。今日もおいしいね。ほんとにいつもありがとね」

「どういたしまして。それよりも、また夜遅くまで起きてたみたいだけれど、体調は大丈夫なの？」

「あはは。また心配かけちゃったかな？ごめん。体調は大丈夫だよ。ちよつとね、事務所から作曲依頼受けてね、それだけならいいんだけど、依頼内容が不慣れな分野でね」

「不慣れな分野？」

「うん。アイドルソングを数曲作ってほしいってね」

事務所からの楽曲提供依頼。その程度なら過去にも何度も行ってきた。別段なんの問題も無いことだ。だけど、今回の依頼内容、アイドルソングという分野は僕にとつて未知の領域だった。基本、僕が作る楽曲はロックだ。これには僕の強いこだわりもある。と言つても、単純に憧れの人がロックバンドのボーカルだというだけだが。他に作つてもバラード系ぐらいだろう。アイドルソングなんてこれまで手がけるどころか、聞いたことすらほとんど無い。だからこそ、僕は依頼を快諾した。未知の分野。それだけ聞けば、未知への恐怖を感じる人も当然いるだろう。だが、ポジティブに考えれば、知らない世界を知ることができるとも言える。これは、僕の新たな成長につながるかもし

れないと考えた。依頼を受けて早一ヶ月になる。期限は来週まで。進行状況としては、すでに最後の曲の最終調整に入ってる段階だ。十分間に合う。

「アイドルソング？ 私達の事務所からアイドルがデビューするのかしら？」

「さあ？ 僕も詳しいことは聞いてないんだよね」

正確には、知らないのではなく聞かなかった。依頼は確かに受けた。だけど、正直それ以外には興味が無かった。僕は今回の件を自身の成長の為としか考えていない。まあ、僕が作った曲を歌う人の力量が気にならないと言えば嘘になるが、それでも聞いてまで確認するほどのことでも無いと思った。僕が目指すのは日本一、いや世界一のミュージシャンだ。そんな最高のミュージシャンが作る曲が、歌い手の力量に左右されてどうする。誰が歌っても、誰の心にでも響く曲。それが僕が目指す一つの到達点だ。もちろん、僕はまだその領域に至ってはいない。だが、常にそう心がけている。故の無関心。

まあさすがに事務所もそんなアイドルをデビューさせないとは思うが、いや、アイドルだからビジュアル優先で歌唱力には目を瞑るのだろうか？ そういった事情には疎い僕にはよくわからない。

「ふう、（ち）そうさま」

「はい、お粗末様でした」

そんな思考にふけつてゐる内に、僕達の食事は終わる。洗い物を始める千聖を眺めながら、僕は今日の予定を考える。今日は始業式だ。僕達二人は高校2年生になる。最も、彼女は花咲川女子学園、通称花女に通い、僕はそのご近所にある花咲川高校、通称花高に通つてゐる。通学路はほぼ一緒だが、高校は違う。それはともかくだ、始業式の日と言うのは、大抵半日で終わる。部活がある人ならともかく、僕達二人は仕事がある都合上帰宅部だ。そして、事前に確認してゐたのだが、今日はお互い仕事が無いらしい。うん、たまには気晴らしに遊びに行つてもいいかもしれない。それに、今日は特別な日なのだから。作曲の続きをしたいという気持ちもあるが、締め切りに追われているわけでもない。今日ぐらい許されるだろう。

「さて、終わったわ。行きましょ？」

予定が纏まつたところで、彼女の準備も終わったらしい。僕は椅子から立ち上がり、玄関へと向かう彼女を追う。僕が外に出たのを確認して、鍵を閉める千聖。彼女には、家の合い鍵を渡してある。いつも僕が起きる前に朝食の準備をできるようにだ。

「あら、ネクタイがゆがんでるわよ？」

そう言つて僕のネクタイを直してくれる彼女。まるで、新婚夫婦みたいだな。と、想像して恥ずかしさから顔が徐々に赤くなつていくのがわかる。

「あ、そうだ。千聖に渡しておく物があつたんだつた」

「渡しておく物？」

「うん。ちよつと待つてね」

顔の赤みがばれないように、彼女から顔を隠して、白い箱を用意する。これが僕が彼女に渡す物だ。

「千聖。誕生日おめでとう。いつも本当にありがとうね。君のおかげで今の僕がいる。本当に、生まれてきてくれてありがとう」

少しキザだっただろうか？まあ、それも今日ぐらいいいだろう。そう、本日4月6日は彼女の誕生日だ。そのために僕は作曲活動の合間に、プレゼントを必死に探していた。こういった行為になれていない僕には、本当に難しい捜し物だった。彼女に似合いそうな物を必死に探したのだが、気に入ってくれるだろうか？

「雅、覚えて、くれていたのね？ありがとう。開けてみてもいいかしら？」

「うん。気に入ってもらえるかわからないけど」

目につすら涙を溜めながらしゃべる彼女。どうやら掴みは良かったらしい。ここからが問題だ。内心、ドキドキしながら彼女が箱を開けるのを待つ。

「これは、ポーチ？」

「うん、千聖に似合いそうな物を必死に探したんだけど、どうかな？」

僕が用意したのは、千聖の髪色と同じ薄黄色のポーチ。アクセントとして、黄色い花

の飾りが付いている。僕的には、かなり千聖に似合うと思うのだけど。

「うれ、しい。ありが、とう！大事にするわ！」

どうやら、かなり気に入ってくれたようだ。泣きながら笑顔を浮かべる彼女が何よりの証拠だろう。その笑顔は、涙に塗れながらも、とても眩しかった。僕の大好きな笑顔だ。音楽と同じくらい大切な笑顔。この笑顔を絶やしたくない。絶やしてなるものか。僕は、この時そう強く決意する。僕の人生は音楽と千聖だけで構成されていると言ってもいい。この二つのために、僕はこれからも尽力していく。そういえば、寝ている間に夢を見ていた気がする。今となつては、その内容を覚えてはいない。だが、幸せな夢だったということだけは何故か覚えている。それだけで十分だ。それだけわかつていれば夢の内容もだいたい予想がつく。音楽か千聖、もしくはその両方がいい方向に進展した夢だったのである。

音楽で世界の頂点に立つか、もしくは千聖と恋人関係にでもなれたといったところだろうか。僕は千聖のことが好きだ。大好きだ。だが、正直、彼女が僕のことをどう思っているのかはわからない。嫌われているというのではないだろうが、僕に対して恋愛的感情を持つてくれているのかどうかはわからない。かといって、今の関係が壊れるのが怖くて彼女に聞くこともできていない。恋愛経験が全くない上に奥手なのだから、救いようが無いというものだ。だけど、いつかは必ず自分の気持ちを真っ直ぐに伝えよう

かと思う。僕の人生には必ず彼女が必要だ。そのためには、絶対関係を進展させなければいけない。望むところだ。今は僕に勇気が足りない。だが、ここに誓おう。あの夢のように、幸せを掴み取ってみせると、夢を現実に見せると、僕は彼女の笑顔を見ながら強く、強く誓うのだった。

第2演目 桜笑み君想う

私の朝は早い。

家族がまだみんな寝ている時間帯。日もまだ登り切っていない時間に家を出る。4月になったとは言っても、まだ朝は肌寒い。外に出ると、震えたくなる寒気が私を襲ってきた。私は、その寒気から逃げるように、足早に目的地を目指す。目指す先は歩いて数分の場所にある。どこにでもあるような一軒家。そこが私の目的地。私は、持ってきた鍵を使い、扉を開ける。家の中は静かだった。この住人は今一人しかいない。その彼も今はまだ夢の中。ふと、本当にちゃんと寝ているのか、という疑問が浮かぶ。私は、その疑問を確かめてみたかったけれど、今は横に置いておいて、私がすべきことを優先することにした。

手慣れた動きで、朝食作りと洗濯を済ませていく。朝食作りの合間に、お弁当も作らなきやと考えて、ふと思ひ出す。そういえば今日学校は半日で終わる。お弁当を作らなくても問題ない。それに、お互い今日は仕事も入っていない。彼とどこかで食べるのも悪くないかもしれない。そう判断し、私は洗濯物を片付けることにした。溜まった洗濯物をまとめて洗濯機に入れて洗剤を入れてスイッチを押す。毎回のことながら、洗濯物

の中にある、男性物の下着を見て少しドキツとしてしまう。いつも、顔を赤くしてるのがよくわかる。そんな思考を払いのけるように、私は朝食の準備をする。いい感じに仕上がった。これなら彼も喜んでくれるはず。朝食を完成させた私は、彼の部屋に向かう。

部屋に入ると、ベッドの上で穏やかな寝息をたてている少年がいた。よかつた、ちゃんと寝ていた。時に彼は、大好きな音楽に没頭しすぎて、寝ることを忘れていたことがある。最近あまりそういったことは無くなつたけれど、中学校の時はひどかつた。あの時の彼の追い詰められたかのような顔を思い出すと、今でも泣きそうになる。それほど、見たくない光景だつた。

ベッドの上の彼を見下ろす。同い年の男の子にしては低めの、160センチほどの身長。顔つきも童顔で、艶のある黒い髪をしている。高校生には見えない幼い外見をしている。その内面も子供のように純粹無垢で、音楽に対してどこまでも一途な彼。名前は黒城雅くろぎょうみやび。私の幼なじみだ。彼は今、高校生シンガーライターとして人気の人になつている。最近では、テレビや雑誌に毎日のように取り上げられているほどの人気。私も負けていられない。

そんな彼と私の出会いは、小学生のころになる。とあるテレビ番組で共演したのがきっかけだつた。今話題の子供が集まつた番組で、私は演技力、彼は歌唱力をそれぞれ

披露した。その時の彼の歌が衝撃的だった。同い年とは思えない力強い歌声を見せたかと思うと、逆に心にしみるような静かな歌声を見せたり、同じ曲の中でいくつもの情景が浮かぶかのようにだった。私の演技力よりも上だと思つた程。彼の歌唱力ではない。彼の演技力が上だった。私は、そんな彼から目が離せなくなつていた。彼のパフォーマンスが終わった後も、彼の姿が目から離れない。彼の歌が耳から離れない。収録が終わり、帰る時間になつても離れなかつた。モヤモヤした気持ちの中で帰路につきうかとした時だった。テレビ局の外で彼を見つけた。私が彼に声をかけたのは、見つけると同時。反射的に声が出ていた。その時の私は、ただ彼と話してみたい。彼のことが知りたいという思いだけで行動していた。そして彼と話す内に、意外な事実が次々と出てくる。実は彼、私と同じ小学校に通つていた。しかも、家もご近所さんだった。その時私は、何か運命的な物を感じた。きつと、彼との出会いは私の将来に大きく関わってくることになる。そんな予感がした。

それからの私は、彼と一緒にいる時間が多かつた。と言つても、私が一方的に彼に近づいていた気がする。彼はどこまでも音楽に、夢に一途だった。学校にいる時間も、ほとんど音楽関係の練習につきこんでいた。ギターを練習したり、作曲活動に取り組んだり、とことんまでに音楽に一途だった。そんな彼だからこそ、休み時間に誰かに話しかけたりするなんてことは無かつた。だから、私から積極的に話しかけた。クラスは違つ

たけれど、そんなことは関係無い。私は、彼への興味が尽きなかった。幸いにも、彼は自分から人に話しかけることは無いけれど、話しかけられたら応対は普通にしてくれた。だけど、私は彼を見るだけで、会話は最小限に抑えていた。彼の邪魔をしたくないというのもあるし、彼が夢に向けて歩く姿を見ていたかったというのもある。

夢に向かつて一途に進む彼がどこまでも眩しかった。そんな彼を眺めているのが好きだった。そして私は、いつしか彼に恋をしていた。もしかしたら最初に共演した時にはすでに恋に落ちていたのかもしれない。自覚したのは中学校にあがってからのことだった。彼の両親が突然海外に引越すことになった。当然、彼も引越す。最初に聞いたときに私はそう考えた。彼からその話を聞いた日、私は目の前が真っ暗になった。たしか、一日部屋に閉じこもって泣いていたと思う。正直、はつきり覚えていない。次の日、本当は彼に会いたくなかったけれど、このままじゃいけないと思い、勇気を振り絞って彼に別れの挨拶を告げにいった。そこで、私は彼から日本に残ることを知らされることになる。その時の私は、嬉しさのあまり、彼に抱きついて泣いたことを今でもよく覚えている。思い出すと恥ずかしい、でも大切な思い出。その時からだった。私が雅への想いを自覚したのは。彼が日本に残るのがすごく嬉しかった。だけど同時に不安もあった。彼は最近暗い顔をするのが多くなっていた。心配になって聞いてもはぐらかされるばかり。そして、音楽に没頭する時間も増えて行っている気がする。理由は

私にはわかった。彼は焦っている。彼の目標は大きすぎた。いくら成長しても近づかない目標に焦っている。ずっと彼を見てきた私にはわかる。だからこそ心配だった。今までは、彼の両親がストッパーになっていたからまだ大丈夫だった。でももし、一人暮らしを始めたらどうなるのだろうか？倒れるまで音楽に没頭するんじゃないかという不安が私の中にはあった。

その不安は現実となる。日が経つにつれて、段々顔色が悪くなっていく彼。それを見て私は、不安が的中したことを悟る。心配になり、彼に何度も無茶を止めるように催促したけれど、彼に届くことは決して無かった。彼のことを想い、眠れない日々が続く中、ついに彼が倒れた。直ぐさま救急車で病院に運ばれる彼。私も無理を言って同乗させていただいた。そこで診断された結果は予想通り過労だった。病室で静かに寝ている彼。だけど、私にはある確信があった。彼は起きたら必ず病院を抜け出す。そして、また倒れるまで音楽に没頭する。かといって、彼が抜け出さないように、看護師さんをお願いするにしても、さすがに見張っていられる限度がある。彼らにも仕事があるし、患者は雅だけでは無いのだから当然。だからこそ、私は一つの決断をした。お医者さんに泊まる許可を取り、マネージャーに無茶を言つて今日から3日間の仕事を全てキャンセルしてもらい、学校にも休む許可を取った。これで、彼を常に監視することができる。

目を覚ました彼は、私が常に側にいることを不思議がっていた。早く出ていってほし

いと、ソワソワしてるのがよくわかる。そこで、彼に私が帰らないことを説明する。最初は驚愕の表情を浮かべた彼。だけど次第に、その表情は怒りに変わっていく。長い付き合いになるけれど、彼がそんな顔をするところを私は見たことが無かった。彼は基本何があっても怒らない。いつでもニコニコしているような人だ。そんな彼が初めて見せた怒りの表情。次に彼が見せたのは、暴言の嵐だった。今まで彼の口から聞いたことも無いような言葉が次々と出てくる。だけど私には、それがただの悲鳴にしか聞こえなかった。彼の軋む心があげた悲鳴。私は、そんな彼を見たくなかった。それと同時に怒りがこみ上げてきた。だからこそ、怒り任せに彼にビンタをした。別に彼が吐いた暴言に対して怒っているわけではない。怒りの対象は、こうなるまで何も相談してくれなかった彼と、彼がこうなるまで、何もできなかった自分自身にだ。それと同時に、申し訳なきが私を包み込み、我慢できずに彼を抱きしめて泣いた。そこからは、ただただ申し訳なきに身を任せて、彼に言葉をかけていく。正直、何を言ったのかまではよく覚えていない。だけど、その後に彼が抱きしめ返してきて、泣きながら謝ってきたのだから、私の言葉は彼の心にきつと届いた。そこからは延々と二人で泣き続けた。看護師さんに止められるまで、延々と。

そして、3日が経ち、彼が退院することになった。彼はあれから憑きものが取れたかのようにスッキリした顔をしている。もう、心配はいらない。いえ、心配はあった。彼

の家事についての心配が。彼はおそらく、家事を習得する気は無い。一人暮らしになつたのだから、それはまずいこと。どうするか考えて、私はこの3日間で一つの答えを導き出していた。それは彼の代わりに私が家事を習得して、彼の身の回りの家事をすること。それを彼に提案した時、当然最初は断つてきた。だけど、彼が私に口で勝てるわけがない。彼を口で丸め込み、許可を取つた。

だけど、最初はひどいものだった。ご飯は焦がすし、洗濯物には穴を開けるし、彼に心配されてばかりだった。だから、必死で練習した。お母さんに手伝つてもらつて、料理も洗濯も掃除も必死に練習した。その甲斐あつて、1週間もすれば及第点を取れるような出来にはなつた。彼には私がすごい速度で成長したように見えたはず。だけど、その裏で私は必死に努力をしていた。努力はして当然。そんなことを一々人に知らせるのもおかしい話。だから彼には言わない。て、長くなつてしまつたけれどこれが私と彼の出会いから、今までの経緯いきざつ。懐かしくて、愛しい思い出の数々。これからも彼との思い出を増やしていきたい。

「雅、雅」

彼の体を揺すりながら、彼の名前を呼ぶ私。彼は身じろぎをするけれど、まだ起きない。

「雅、起きなさい」

揺する力を少し強めて彼を呼ぶ。すると、彼の眼が開いてこちらを見つめてきた。寢起きで潤んだその瞳と、童顔が相まって可愛いと思ってしまう。

「おはよう雅。朝ご飯できてるわよ」

「おはよう千聖。いつもごめんね。君も忙しいのに」

朝起こすと、彼は必ずこのようなことを言ってくる。私が好きでやっていることだから気にしなくていいのに。だけど、こういうことを彼に言われると、ついからかってみたくなる。

「気にしないで、私が好きでやっていることだもの。それより、謝るなら自分で起きてもらえたらありがたいのだけれども？」

「うっ、ごめん昨日遅くまで作曲活動してたから」

少し申し訳なきように言い淀む彼。その姿がまた可愛いと思った。男の子に思うのもおかしいかもしれないけれど。だけど、また夜遅くまで音楽活動していたって体調は大丈夫なのか心配になる。後で聞いてみよう。

「ふふっ、冗談よ。ほら、朝ご飯冷めちゃうから早く着替えてきなさい」

そう言い残して、私は彼の部屋を出る。リビングに着くと、作っておいた朝食の配膳をする。彼が来るまでに食べられる状態にしておかないといけない。なんとか、彼が来るまでに並べ終えて、一息ついていると、ちょうど彼がやってくる。いいタイミグ。

「ごめん。待たせちゃったかな？」

「いいえ。今準備が終わったところよ？さあ食べましょ？」

いただきますの挨拶を早々に済ませ、彼が口を付けるのを待ってから私も食べ始める。うん、おいしい。彼の表情を見ると、どうやら満足してくれているみたい。私は、安心して胸を撫で下ろした。安心したところで、私は先ほど彼に聞こうとしていたことを、早々に聞いてみることにした。

「うん。今日もおいしいね。ほんとにいつもありがとうございます」

「どういたしまして。それよりも、また夜遅くまで起きてたみたいだけれど、体調は大丈夫なの？」

「あはは。また心配かけちゃったかな？ごめん。体調は大丈夫だよ。ちよつとね、事務所から作曲依頼受けてね、それだけならいいんだけど、依頼内容が不慣れな分野でね」

「不慣れな分野？」

「うん。アイドルソングを数曲作ってほしいってね」

どうやら体調は大丈夫なようで安心した。顔色も見たところ悪くないし、本当に大丈夫なはず。それよりも、今彼は少し気になることを言っていた。彼が楽曲提供を事務所にお願いされるのは割とよくあること。だけど、アイドルソングを彼が作っているところなんて見たことが無い。自慢では無いけれど、彼が過去に作った曲を私は全て知って

いる。彼自身のリリースした曲はもちろん、提供した楽曲も全て知っている。だからわかる。彼が初めての分野に挑戦していると言うことが。因みに、私の部屋の棚が彼の発売したCDで埋め尽くされているのは内緒の話。全て自費で購入している。彼に言えば、間違いなく無料で入手できるだろうけど、それだと売り上げに貢献できないため、自費で購入している。こういう時は、高校生ながらに仕事を持っていて助かったと思う。経済的メリットが大きい。因みに、部屋の本棚に彼が事務所に懇願されて唯一出した写真集が隠されていて、いつも身悶えながら赤面して見ているのも内緒の話。こんなこと誰かに知られたら恥ずかしくない。一度妹に見られてしまった時は恥ずかしくて死にたくなつた。全部あの写真集が悪い。いつもは幼く見える彼がすごく大人っぽく撮られているのだから。そのギャップの破壊力は恐ろしい。余談だけど、写真集第2弾が来月発売することが決まっており、すでに予約を済ませてある。

「アイドルソング？ 私達の事務所からアイドルがデビューするのかしら？」
「さあ？ 僕も詳しいことは聞いてないんだよね」

アイドルと言うからにはきつと女の子だと思ふ。彼の提供した曲でデビューできる女の子。かなり羨ましく思う。

「ふう、ぐちそうさま」

「はい、お粗末様でした」

そんなことを考えている内に、私達の食事が終わる。洗い物に取りかかる私。チラッと彼の方を見たけど、何か考えごとをしている様子。さっき言つてたアイドルソングのことでも考えているのかと思う。

「さて、終わったわ。行きましょ?」

そして、洗い物を終えた私は、彼より先に玄関へと向かう。外に出ると、幾分気温は上がっていた。春らしい爽やかな気候が私達を包む。彼が外に出たのを確認すると、私は持つていた合鍵で玄関の施錠をする。そして、彼の方に視線を向けると、彼のネクタイがゆがんでいるのが見えた。

「あら、ネクタイがゆがんでるわよ?」

そう言つて彼のネクタイを直す私。なんだか少し新婚夫婦みたいだなつて思つて少し恥ずかしくなる。

「あ、そうだ。千聖に渡しておく物があつたんだつた」

「渡しておく物?」

「うん。ちよつと待つてね」

そう言つて後ろを向き何かを取り出そうとする雅。その際に微かに見えた彼の顔が赤くなつている気がした。たぶん私と同じことを考えていたのだと思う。私の顔も少し赤くなつている気がする。赤くなつた顔を、心を落ち着かせることで元に戻そうとし

っていると、彼が一つの白い箱を取り出した。あれがおそらく私に渡しておく物なのだと
思う。

「千聖。誕生日おめでとう。いつも本当にありがとうね。君のおかげで今の僕がいる。
本当に、生まれてきてくれてありがとう」

正に不意打ちだった。雅が私の誕生日を覚えてくれていたこともそうだけど、彼の言
葉で私は思わず泣きそうになってしまう。それを言うならば、私だってそう。雅のおか
げで今の私がいる。本当に、生まれてきてくれてありがとう。

「雅、覚えて、くれていたのね？ありがとう。開けてみてもいいかしら？」
「うん。気に入ってもらえるかわからないけど」

必死で涙を堪えて、箱を開ける。彼は私が気に入るかどうか心配しているみたいだけ
れど、そんな心配は必要ないこと。雅が私にくれたプレゼント。その事実だけで私には
かけがえのない宝物になる。

「これは、ポーチ？」

「うん、千聖に似合いそうな物を必死に探したんだけど、どうかな？」

それは薄黄色のポーチだった。どこにでもあるような普通のポーチ。だけど、アクセ
ントとして付けられた黄色い花を見た瞬間、私は我慢しきれずに泣いてしまった。それ
は私の大好きな花だった。私の誕生花でもある花、フクジュソウ。その花言葉は、幸せ

を招く、永久の幸福。本当に、今の私は幸せすぎて怖いくらいだった。こんなに幸せでいいのかと疑問に思ってしまうくらいに幸福。だけど、まだこの幸せは終わらない。なぜなら、私達はまだスタートにすら立っていないのだから。

「うれ、しい。ありが、とう！大事にするわ！」

泣きながら笑顔を浮かべる私を見て、笑顔になる彼。その彼を見るだけで、幸せを感じられる。しばらくはこのままでいたい気持ちもあるけれど、そうは言っていられない。早くしないと学校に遅れてしまう。必死に涙を抑える私。普段はこんなことは無いのだけれども、彼といると涙腺が緩みやすくて困る。それほどまでに私が彼に気を許しているのだと思う。

必死に涙を抑えた私は、彼と並んで歩き始めた。歩きながらする、彼との何気ない会話さえも愛おしい。かけがえのない時間。いつもの通学路。ふと周りを見渡すと、綺麗な桜が咲き誇っていた。毎年、この道は綺麗な桜並木ができる。春の季節にこの道を通るのが大好きだった。

「そういえば千聖。今日放課後予定ある？」

「ううん、特にないけれど？」

ふと、彼が話しかけてくる。そういえば、今日のお昼は二人で外食しようと思っていたのを忘れていた。朝から色々あったから仕方ないことだと思ふ。

「だったらたまには気晴らしに遊びにいかない？」

「あら、デートのお誘いかしら？」

雅から遊びに誘われるのは珍しい。いつもは私から誘うものだから少し新鮮に感じ
てしまう。彼の中でも何か変化があったのかもしれない。

「で、ででで、デートなんてそんなつ、つつつもりじゃ」

「ふふつ、冗談よ」

彼の慌てふためく姿が可愛らしくて、そして面白かった。こういう彼を見ると、つい
からかいたくなってしまう。デートと言われて意識したのか、耳まで真っ赤にしてい
る。私は雅のことを愛している。それと同じように、雅も私のことを愛してくれてい
る。私にはわかる。だけど、おそらく彼は私が雅のことを愛していることを知らない。
彼は、音楽以外のことには疎いせいいか、人の気持ちを察するのが得意ではない。所謂、鈍
感だ。私のこの気持ちがわかってもらえないのはもどかしい。だけど、私から彼に気持
ちを伝える気は決して無い。私は彼の夢を応援したい。隣で支えたい。だけど、私の気
持ちを知ることが彼の夢への妨げになる可能性だってある。それだけは絶対したくな
い。だから、私は彼の夢が叶うか、彼が私との関係を進展させる決心をしてくれるその
時まで待つ。それまで、自分の気持ちを抑えながら待つ。そう決意を固めて上を見上げ
ると、桜の枝が視界に入る。その枝に咲く桜が、一瞬笑ったような錯覚を覚えた。自分

で言つてて、詩的すぎる表現だなど思った。だけれど私には何故かそのように感じた。もしかしたら、この桜たちも私達のことを応援してくれているのかもしれない。そうだとしたら素敵だなど感じつつ、彼の隣を歩く。桜吹雪が私達の未来を祝福するかのよう
に舞う。その桜を見ながら私は静かに桜に誓った。未来永劫彼を愛し続けると、彼を想
い続けると、何故なら私の人生に雅は欠かせないのだから。静かに、けれど強く、強く、
そう誓った。

第3演目 歩み

気持ちのいい快晴だった。

雲一つ無い青空の下、僕は桜並木を一人歩いていった。穏やかな春らしい気候と、風に舞う桜吹雪が僕の気分を最高潮にまで上げてくれていた。

始業式を終え、今僕は千聖と待ち合わせた場所に向かっている。これから千聖と遊びに行く。そう考えただけで僕の顔がニヤつきそうになる。どうやら今日は学校でも顔に出ているらしい。友人に、いつもニコニコしてる僕が、今日はニヤニヤしてるって言われた程だ。気味が悪いと言われてしまつて、高2になつて早々シヨツクをうけてしまつた。だけど、それも仕方がないことだと思う。千聖は、今朝は冗談だと言っていたが、よく考えてみれば、間違いなくこれはデートだ。女の子と二人きりで遊びに行くという行為そのものがデートだということは、いくら恋愛に疎い僕でも知っている。千聖と二人で遊びに行くということは、確かに過去に幾度となくあつた。だけど、デートと意識したことは一度も無かつた。

それが今回、デートだと意識している。僕のことだから、緊張するなり、恥ずかしくなるなり、そういった反応をするだろうと自分でも思っていたのだが、僕が出した感情こたえ

は意外にも嬉しきだった。そのおかげで、放課後が楽しみすぎて顔に出てしまっていたという訳だ。そう考えると少し恥ずかしくなる。

そんな思考を続けているうちに、待ち合わせ場所である駅前に着いた。どうやら千聖の方が早かったらしい。すでに彼女の姿があった。ギターケースを置きに、一旦家に帰っていた分の差だろう。距離的に数分のロスだったのだが、負けてしまったようだ。

因みに、家に帰ったとは言っても、僕の服装は制服のままだ。音楽以外の情報に疎い僕は、普段オシャレなんてしない。服もオシャレとはほど遠い服が数着あるぐらいだ。確かに、以前に千聖がコーディネートしてくれたオシャレ感満載の服も何着かあるのだが、普段あまりそういった服を着ないため、クローゼットの奥に仕舞われていて取り出すのに少し時間がかかる。すぐに用意できる服の中で一番オシャレなのが制服なほどだ。遊ぶ約束を事前しておくべきだったと少し後悔する。とはいっても、今日は彼女の服装も制服だ。なので、これはこれでありかもしれない。以前、どこかで制服デートに憧れる人が増えてきていると聞いたことがある。その憧れている人たちには悪いけれど、僕達で実践しよう。彼女がデートだと思ってくれているかわからないが。

「ごめん。待たせちゃったかな」

「心配しないで。今来たところだから。さあ行きましょ?」

そう言って、僕の隣に並ぶ千聖。正直、彼女の顔を見ただけで満足している僕がい

る。これは本格的に、彼女に骨抜きにされているかもしれない。だけど、こんなところで満足はしてられない。今からが本番なのだから。そして、僕と彼女は次なる目的地へと向かった。

向かった先はショッピングモール。その中にある小洒落たイタリア料理店に僕達は来ていた。ここは最近オープンした、イタリアで修行を積んだシェフが経営する店らしい。少し値段が高めに設定されているものも多いが、味はどれも間違いなくおいしい。もちろん僕はそんなこと知らない。全て千聖情報だ。今僕達はマルゲリータを二人で共有しつつ、ここの看板メニューだというクリームパスタに舌鼓を打っていた。非常にうまい。さすが千聖が紹介するだけのことはある。

「あら、雅、ほつぺたにクリームが付いてるわ」

そう言つて千聖は、僕のほつぺたのクリームを指で取ってくれた。夢中で食べ過ぎて全く気づかなかつた。

「本当に子供っぽいんだから。うん、おいしい！」

取ったクリームをそのまま自分の口に運ぶ千聖。その後見せた彼女の笑顔も非常にかわいくて、僕の胸が高鳴る。人が見たら間違ひなく恋人同士だと思われるような光景だろう。そう意識すると、自然と僕の顔が赤くなる。

「雅、顔が真っ赤だけど大丈夫？ やっぱり体調悪いんじゃない？」

「だ、大丈夫だよ。このお店ちよつと暑くないかな？ うん、そのせいだから」

千聖にもバレてしまつて必死にごまかす。うまくごまかせただろうか？

「ふふつ、じゃあそういうことにしておくわ」

なんだか見透かされたような言い方だ。恥ずかしすぎる。

「ごちそうさま。お会計は僕が払っておくから、大丈夫だよ」

「それは悪いわよ。私も払うわ」

「大丈夫だよ。これでもお金には困つてないし、何より今日の主役は千聖なんだ。気にしなくていいし、主役を引き立てるのが演出家の仕事だろ？ まあ僕の場合音楽家だけど、劇中曲も役割自体は一緒さ。僕にまかせておいてよ」

今日は千聖の誕生日だ。それなのに彼女に支払わせるわけにはいかない。今日一日の会計は僕が全部支払うつもりだ。それに、お金に困つていないというのも本当のことだ。今まで出したCDの印税などで、僕にはそれなりの蓄えがある。音楽以外に金をつぎ込むこともほとんど無いし、楽器なども、僕についてくれるスポンサーが提供して

くれるので費用を心配する必要も無い。要するに、貯まっていくなのだ。

「雅、ありがとう。あなたがそう言ってくれるのなら、お言葉に甘えるわ」

嬉しそうに微笑む千聖。彼女の笑顔が見られるなら、これぐらいの出費、逆に僕が得したようなものだ。僕と千聖は、そのまま上機嫌で店を後にした。

次に僕達が訪れたのは、モール内にある服屋だ。千聖の趣味はシヨツピングだ。色々お店を見て回って、彼女が気に入ったのをいくつか買ってあげようと計画していたのだけれど、その計画は1店舗目で破綻しそうになっている。何故かという、時間的問題だ。昼食を済ませてお店を出たのが1時だったのに対して、今の時間は3時半。なんと、1店舗目で2時間半も使っている。これはさすがの僕も予想外だった。彼女の買い物は確かに長い。それは過去にも身をもって知っている。だけど、ここまで長いのはさすがに初めてだった。しかも、状況が少々特殊だ。どういふことかと言うと

「うん、これも良さそうね。あ、これも。こっちも似合いそうね。雅、次はこれとこれとこれお願いね」

「千聖、さすがにこれで終わりにしてよ」

僕が着せ替え人形にされているのだ。最初は千聖も普通に自分の服を見て回っていた。僕もその後ろについて回っていた。そして、彼女が気に入った数着を購入したところまでは良かった。せっかくだから、僕の方もまたコーディネートしてくれることになり、メンズ売り場に來たのだけれど、そこに出ていた看板が彼女の何かに火を付けてしまった。

『本日メンズ特価！全品半額！』

最初は僕もへー今日はお得だなー程度に考えていたのだけれど、彼女の目を見て嫌な予感がした。燃えていた。見事なまでに燃えていた。彼女がこんな目をするところなんて、ドラマ等の撮影中ぐらいいしか見たことがない。あ、これはマズいと思い、振り返って逃走しようとした時にはすでに遅かった。振り返った僕の肩を、誰かに後ろから掴まれた。今この状況で、僕の肩を掴むような人なんて一人しかいない。振り返ると、僕が大好きな笑顔を浮かべた千聖がいた。ただ、その時の笑顔は何故か怖かった。いつもは見るだけで幸せになるはずの笑顔が、何故か怖かった。そして今に至る。果たしてこれで何着目だろうか？10着を超えてから数えていない。

「そうね、めばしいものはこれで全てだから最後にしようかしら」

どうやら、ようやく解放されるようだ。まさか、千聖の買物に使う時間より、僕の

買い物に使う時間の方が長くなるなんて思いもしなかった。今日の主役は千聖なのに、こんなことしてていいのだろうか？

「気にしなくていいわよ？ 私は十分楽しんでるもの」

僕の考えていることは彼女に筒抜けらしい。だけど、それを聞いて僕は安心した。正直、僕からしたら何が楽しいのかわからないけど、彼女にはそれがいいらしい。まあ彼女がいいと言うのだから僕に文句は無い。はつきり言つてかなり疲れたけど、これも必要労力と割り切ろう。その後結局、彼女が気に入った3着だけを購入し、服屋を出た。

確か、数十着は試着したかと思うんだけど、そんなに着た意味はあったのだろうか？

服屋を出た僕達は、次にアクセサリーショップを訪れていた。どうやら、彼女は最初からここで買ったかかったものがあるらしい。だったら前の店にそんな時間をかけなくてもよかつたのと思ったが、彼女に笑顔で肩を掴まれたのでその思考は遠い彼方に封印した。なんで声に出してないのにわかるんだろう？ 怖すぎる。

「で、千聖は何が買ったかかったの？」

「そうね、雅、今日は何の日か覚えてる？」

今日が何の日か。そんなのもちろん当然覚えてる。今朝もプレゼントを渡したのだから忘れるわけがない。

「千聖の誕生日でしょ？それがどうかしたの？」

「そうね、それはもちろんそうなのだけれど、他に思い当たることない？」

他に思い当たること？彼女との誕生日以外で何か今日あったっけ？ふと記憶を辿って、僕はようやく一つの答えを出す。そうだ、あの日も4月6日だった。

「そうだ。ごめんすっかり忘れていたよ」

「いいのよ。私は自分の誕生日だったから覚えてるだけだから。気にしないで」

今日が何の日か。それは僕と千聖が初めて出会った日だ。小学生の時のテレビ収録。そこで千聖に話しかけられたのがきっかけだった。懐かしい。あの日から、僕達は二人で歩み始めたと言っても過言ではないと思う。今まで一人だった夢への歩みが二人での二人三脚に変わる。ただ、それだけのことが僕のおかげがえのない支えになってくれた。彼女に出会っていないければ、今の僕は存在していないのだから。

「そうだったね。今日は二つの記念日だったんだ。誕生日おめでとう千聖。そして僕と出会ってくれてありがとう千聖。けど、それがこのお店とどうつながるの？」

「私達の出会いを記念して、お揃いのアクセサリーを買おうと思ったの」

お揃いのアクセサリ。いいと思う。素晴らしいアイデアだと素直に感じた。

「いいね。で、何買うの?」

「これよ」

彼女が指さしたのは天然石の指輪だった。どうやら、アメトリンという石の指輪らしい。

「この石は私の誕生日石なの。これを二人でつけてみない?」

どうやら誕生日日石という物があるらしい。知らなかった。花は知ってたから、千聖へのプレゼントにも、彼女の誕生花を調べて取り入れたけど、石は知らなかった。でも、素敵なアイデアだと思う。

「いいね。そうしようよ」

「さすがに指輪はまだ早いけど、ここのお店はお願いしたら指輪をネックレスに加工してくれるの。お願いしましょ?」

ネックレスか。それもいいアイデアだと思う。やっぱり彼女のセンスは素晴らしいと思う。指輪はまだ早いって意味がよくわからなかったけれども。年齢的にってことかな?

その後僕達は、店員さんに加工してもらったネックレスをさっそく付けて、店を後にした。加工してもらった際に、店員さんに素敵な恋人さんですね、と言われて二人して

顔を真っ赤にしてしまったことだけお伝えしておく。

アクセサリーショップを出た僕達は、千聖の提案でカラオケに来ていた。カラオケなんて随分久々に来た。最後に来たのは中学生の時だろうか？その時も千聖と二人で来たのを覚えている。そもそも、僕は千聖以外とカラオケに来たことが無い気がする。うん、覚えている限り無い。別に友人がいないわけではない。ただ、カラオケに行く機会が無かったただけだ。

「カラオケなんて随分久しぶりだね。何歌おうかな」

「そうね、雅、先に歌ってもらえるかしら？」

「僕から？そうだね。千聖が言うならそうするよ」

とは言ったものの、何を歌おう？カラオケに来てまで自分の曲を歌うのもなんだか味気ない気がする。よし、ここは最近聴いた曲にしよう。そして僕は曲を入力する。流れてきたのは、人気アイドルグループの代表曲だ。

「これは、^マMa^マr^マma^レi^ドade？」

「うん。今作ってる曲のための参考にさせてもらったんだ」

画面には歌詞とアイドルグループ自身の映像が流れている。こういった方面の曲を、僕は作ったことがないと以前にも言ったと思う。当然歌ったことなどあるわけが無い。だけど、何故か僕はこの曲を歌うのが楽しかった。映像で踊る彼女たちを見るのが楽しかった。音楽の世界は深い。それこそ、底なんて存在しないと切り切つていいほどに。僕にとつて未知の領域であるアイドルという分野。僕はこの分野を知ることによって、自身の世界が広がったように感じた。やっぱり未知を知るということは、気持ちがいい。自身の成長を実感できる。こんな機会をくれた事務所には感謝しないとイケない。曲はラストのサビに突入する。ふと、千聖の方を見てみると、映像のアイドルに合わせ見様見真似で楽しそうに踊っていた。そんな彼女を見て、本物のアイドルみたいだなと思う。言葉にできないぐらいかわいくて、輝いて見えた。そして、曲が終わる。そういえば、千聖は僕が歌っている間に何か曲を入れていた。何を入れたかまでは見えなかったけど。そして、彼女が入力した曲が流れてくる。それは、すごく懐かしくて、思出深い一曲だった。

「これは、メモリア？」

「そう、私の大好きな曲よ」

千聖は、カラオケにくると僕の曲を好んで歌う。それは、非常に嬉しいのだけれど、少

し恥ずかしくもある。この曲も僕がリリースした1曲だ。曲名は『メモリア』僕が初めて自身で作って、歌ってリリースした曲だ。それまでにも、僕は歌手としては活動していた。だけど、自身で作った曲では歌うことができなかった。もちろん、作曲自体はずっと以前から行っていたのだけれど、それでも所詮子供が考えたレベルの曲だ。事務所に披露しても、歌う許可が出ることは無かった。そんな中、初めて事務所からの許可が出たのがこの『メモリア』だ。作ったのは中1時代。僕が倒れた後の話だ。メモリアはポルトガル語で記憶という意味がある。これには、絶対に忘れてはいけない記憶という意味が込められている。僕が犯してしまった過ちの記憶。彼女に対する感謝の記憶。彼女に対する愛の記憶。それらの記憶を1曲に込めて作ったのがこの曲だ。事務所からも絶賛される1曲に仕上がった。僕の代表曲と言ってもいいだろう。

ここから、僕のシンガーソングライターとしての歩みは始まった。シンガーソングライターとは、一言で言うなら自分が歌う大半の曲を自分で作る歌手のことだ。この曲以降、僕は事務所に作曲許可を得た。僕の所謂原点だ。

「うまいな」

千聖の歌は、作った本人からしても聴るほど上手かった。なにより、歌に込められた感情が大きい。彼女にも、この曲は僕の過ちの記憶と、千聖への感謝の記憶を歌にしたものだと教えてある。そして、千聖自身もこの曲に同じような想いを抱いてくれてい

るのだろう。歌に乗せた想いが、彼女の歌を何倍にも昇華させていた。そして、曲はラスサビを迎える。

「忘れないよ 雅の罪を」

「え？」

「忘れないよ 雅への感謝を」

「千聖？」

ビックリした。彼女の歌が急に替え歌になったのだから。本来の歌詞は、『忘れないよ 僕の罪を 忘れないよ 君への感謝を』なのだけれど、急に僕の名前が出てくる物だから驚いた。だけど、その歌詞は何故か僕の中にすんなり入ってきた。最初は驚いたけど、今は最初から千聖が歌った歌詞が正しかったんじゃないかとすら思える。それだけ、彼女が乗せた感情が大きかった。間違いなく、彼女は歌った歌詞の通りの感情を込めていた。本気で僕に感謝してくれている。本気で僕の罪を共有しようとしてくれている。普段は、人の気持ちに疎いなんて言われる僕だけど、歌に込めた感情に関してはその類いではない。もちろん、確実にわかるなんてことは言わないけど、高確率で読み解くことができる。だからこそ彼女の気持ちかわかるし、すごく嬉しかった。

「うん、やっぱり素敵な曲ね。私の歌、どうだった？変じやなかったかしら？」

「すごく良かった！作った本人が聞いても思わず唸っちゃうほどだったよ！乗せられた

感情もすぐく伝わってきたよ！」

「ふふっ、ありがとう」

彼女の歌が終わる。もつと聞いていたかったとすら思えるほど、素晴らしかった。これならいつでも歌手デビューできるんじゃないだろうか？きつとできるはずだ。その時は、ぜひとも僕が作った曲を歌ってもらいたいものだ。ただ、一つだけ彼女の歌を聴いてて疑問に感じたことがあった。

「だけど千聖？僕は千聖に対して感謝の気持ちでいっぱいだけど、僕は千聖に対して感謝されるようなこと全くしてないよ？」

そう、感謝の想いだ。千聖は確かに歌に僕への感謝の気持ちを込めていた。だけど、僕は彼女に感謝されるようなことを、言つてはなんだけど全くしていない。自分で言つてて本当に情けなくなってくる。一体どうやったら返せるのだろうか？

「そんなこと無いわよ。雅が気づいてないだけで、私はたくさんのものをあなたにもらつてるわ。それこそ、私に負けないほどのね」

そうなのだろうか？全く覚えが無い。

「本当に？全然わからないや」

「そうね、じゃあ一つだけ教えてあげるわ。雅がアクセサリーショップで言つたことをそのまま返すわね？私と、出会つてくれてありがとう」

「千聖……」

思わず泣きそうになってしまった。笑顔でそんなこと言われるとは思ってもしなかった。だけど、どうやら彼女も僕と同じで、感謝したいことがたくさんあるらしい。重ね重ね全く覚えはないけど。ただ、それが知れただけでも、少し救われたような気がした。僕が一方的にもらっていたわけでは無かったようだ。本当によかった。

その後は、僕と千聖は心ゆくまでカラオケを満喫した。彼女とデュエット曲を歌った時は非常に楽しかった。

そして時間は過ぎ、現在時刻は7時を回っている。僕達はカラオケを出て、帰路についていた。

「今日はすごく楽しかったわね。晩ご飯どうしましょうか？」

「そうだなー千聖の手料理が食べたいな」

僕は今無性に千聖の料理が食べたかった。彼女の味が好きなんだから仕方ない。

「いつも食べてるじゃない」

「だって好きなんだから仕方ないじゃないか。今日のお昼のイタリアンもおいしかったけど、僕には千聖の手料理の方が合ってるや」

「ふふつ、そこまで言うなら仕方ないわね。じゃあ、材料買って帰りましょうか」

そう言つて、嬉しそうに僕の隣を歩む千聖。今日という1日は本当に楽しかった。彼女も心の底から楽しんでくれていたように思う。隣で機嫌良さそうに鼻歌まで歌っているほどだから間違いないだろう。今日は色々なことを思い出す日だった。彼女との出会いから、犯した過ちのこと。決して良い思い出ばかりではない。辛い記憶もあつた。でも、どんな時もいつも隣には千聖がいた。彼女と出会つてからは、常に二人で歩み続けてきた。それはこれからも変わつてほしくない。これから先も、叶うことならば彼女と共に歩み続けたい。それが僕の心からの願い。だから僕は、1歩を強く踏み出した。二人の歩みが止まつてしまわぬよう、強く、強く。その歩みの先がどうなっているかなんて誰にもわからない。だけど僕は信じている。果てしないこの道をどこまでも、4本の足で歩んでいることを。そう信じて強く踏み出した。最高の未来^{みち}を目指して、強く、強く。

第4演目 愛唄

その日の私は上機嫌だった。

朝から嬉しいことの連続。そして、放課後には雅とのデート。これで上機嫌にならない方がおかしいと思う。私は逸る気持ちを抑えて、始業式に臨んだ。式中も、放課後のことばかり考えてしまう。先生方の話もほとんど頭に入っていない。雅とどこに行くか、何をするか、そればかり考えていると気がついたら式が終わっていた。隣にいた親友に名前を呼ばれるまで気がつかなかったほどに考え込んでいた。

「千聖ちゃん、式、終わったよ?」

「え? あ、ほんと、気づかなかったわ。ありがとう、花音」

彼女は松原花音。私の親友だ。まさか、彼女に言われるまで気づかないなんて、さすがに私らしくないと思う。雅のこととなると、よくあることだから今更な気もするけど。

そして、教室に戻った私達は、ホームルームを終えて、待望の放課後に突入する。待ちに待った時間がやってきた。私は急いで帰り支度をしていると、横から誰かに話しかけられた。

「千聖ちゃん、何かいいこと、あった？」

花音だった。花音に言われるまで気づかなかったけれど、どうやら私の上機嫌は外にまで漏れていたらしい。

「あら、わかる？」

「だって、千聖ちゃん、なんだかにやけてるもん」

どうやら顔にまで出ていたみたいで、すごく恥ずかしい。思わず顔を赤くしてしま
う。

「あはは、実はこれから雅とデートなの。そう考えるとつい嬉しくて」

「ふえ？雅君と・・・？」

花音は、雅と私の関係を知っている数少ない人物だ。私達の家族を除くと、おそらく花音含めて二人だけだと思う。花音は、雅に会わせたこともある。その際は、事前にも伝えていなかったから、すごく慌てふためいていた。花音はいつも慌てふためいてることが多いけれど、その時はその比ではなかった。失神しそうになつていたほど。後で花音に聞いてみると、急にテレビの中の芸能人が目の前に現れて、話しかけられたから驚いたと言っていた。今思えば、私も一応芸能人なのだけれど、そのような反応を花音にされたことがない。私は花音に芸能人と思われていないのかしら？今日は時間が無いけれど、後日確認してみよう。

「そうなの。しかも、雅から誘ってくれたのよ？ 今日はいいい一日だわ」

「そうなんだ。あ、ごめん、急いでるのに引き留めちゃったよね・・・？」

「気にしないで。時間にはまだ少し余裕があるから大丈夫よ」

「よかった、あ、じゃあ今のうちにこれ渡しておくね？ 千聖ちゃんお誕生日おめでとう」
そう言つて花音が渡してきたのは茶葉だった。上質な紅茶だった。見るからに高そう。

「花音、ありがとう。でも、こんな上質な茶葉いただいてもいいの？」

「大丈夫だよ。いつも千聖ちゃんにはお世話になつてるから。よかつたら雅君といつしよに飲んで・・・？」

「ありがとう。大切に飲ませていただくわ」

「うん。じゃあ私、いくね？ 楽しんできてね？」

そう言い残し、花音は教室を出て行つた。私は本当にいい親友に恵まれた。花音からのプレゼントを手に、私も颯爽と教室を出る。目指す場所は駅前。雅との待ち合わせ場所。

正直、早く着きすぎてしまった。

私は今、駅前で一人佇んでいた。待ち合わせ時間まではまだ30分ある。雅に連絡してみたところ、彼の学校は今終わったばかりらしい。どうやら、私の学校の方が終わるのが早かったみたいだ。花音と少し話していたとはいえ、寄り道もせず、真っ直ぐ目的地に来たこともあり、暇を持てあましていた。現在は、持ってきていたiPodで音楽を聴きながら時間をつぶしている。聴いているのはもちろん雅の曲。彼の歌を聴いていると、なんだか私も歌いたくなってきた。今日はカラオケも予定に入れようかしら？そして、雅の曲を3曲ほど聴き終えたころ、遠目ながら雅の姿が見えた。彼も私に気づいたのか、急ぎ足でこちらに向かっている。予定の時刻にはまだ少し早い。遅刻では無いかからそんなに急がなくてもいいのと思う。

「ごめん。待たせちゃったかな」

「心配しないで。今来たところだから。さあ行きましょ？」

デートの定番セリフを口にして、私は彼の隣に並ぶ。それだけで私の胸は高鳴り、幸せな気持ちになれる。これは本格的に彼に骨抜きにされている気がする。でも、こんなところで幸せに浸ってるわけにはいかない。なぜなら、これからさらなる幸せが待っているのだから。そして、私と彼は次の目的地に向かった。

向かったのはショッピングモール。その中にある最近オープンしたイタリア料理店。ここは、イタリアで修行を積んだシェフが経営していて、本格的なイタリアンが食べれると、この前読んだ雑誌に載っていた。それを見て是非食べてみたかったお店だったので、今日のランチに選んだ。その味は噂以上だった。今食べているマルゲリータも、クリームパスタも、この辺りのお店では相手にすらならないほどの絶品だった。今度花音も連れてきてあげよう。今日の茶葉のお礼もしないといけない。チラツと雅の方を見てみると、夢中になってパスタを食べていた。そのほっぺにクリームがついているのを発見する。雅はそれに気づいていない様子。よっぼど夢中になって食べているようであるで子供みただなど感じた。その姿がまたかわいい。

「あら、雅、ほっぺたにクリームが付いてるわ」

私はそう言つて、彼に付いたクリームを指で取った。なんだかこういうシーンをドラマで見た気がする。

「本当に子供っぽいんだから。うん、おいしい！」

指についたクリームをそのまま口に運び、笑顔を浮かべる私。以前見たドラマでは、私のポジションが男側だった。された側の女性はこの行為で赤くなっていたけれど、逆の場合どうなんだろう？ 雅の方を見てみると、あの時の女性と同じように顔を真っ赤にしていた。どうやら効果はあったみたい。

「雅、顔が真っ赤だけど大丈夫？ やっぱり体調悪いんじゃない？」

「だ、大丈夫だよ。このお店ちよつと暑くないかな？ うん、そのせいだから」

顔を真っ赤にして言い訳をする雅。少し、あざとかっただろうか？ と、思ったけれど、雅の反応を見る限り、喜んでくれたみたいなので、これで良かったのだと思う。

「ふふっ、じゃあそういうことにしておくわ」

なんだか不服そうな顔をしている雅。おそらく、私に見透かされているような気がして恥ずかしいのだと思う。雅の考えていることは私には大体わかる。だから間違いないと思う。そして、私達は食事を終えた。本当においしかった。また絶対に来よう。

「ごちそうさま。お会計は僕が払っておくから、大丈夫だよ」

「それは悪いわよ。私も払うわ」

「大丈夫だよ。これでもお金には困ってないし、何より今日の主役は千聖なんだ。気にしなくていいし、主役を引き立てるのが演出家の仕事だろ？ まあ僕の場合音楽家だけ

ど、劇中曲も役割自体は一緒さ。僕にまかせておいてよ」

彼は、音楽家としての性さがなのか、時折気障きざな言い回しをする。それがまるで、子供が背伸びしてゐるみたいに見えて、少しかわいくておもしろい。

「雅、ありがとう。あなたがそう言ってくれるのなら、お言葉に甘えるわ」

ここは、素直に彼の優しさに甘えておこう。このお返しは、雅が主役の時に返せばいい。とは言つても、それはまだまだ先の話。雅の誕生日は3月3日だ。すでに先月終えたばかり。その時も二人でお祝いしたけれど、雅が仕事だったため、仕事後に彼の家でケーキを囲むことしかできなかった。来年はデートしたいと思う。来年はどこに行くのかな、なんて思い浮かべながら、私達は店を出た。その際に、来年もまたこのお店に来るのもいいかもしれないなんて考えながら私達は上機嫌で店を出た。

次に私達は、モール内の服屋を訪れた。私の趣味はショッピング。様々な商品を眺めているだけでも楽しい。ここのお店は品揃えも豊富でサービスもいいから、気に入っている。今日も数着気に入った物を買った。ここでも、支払いは雅が持つてくれた。今日

は全部のお会計を支払うつもりらしい。ありがたいけど、少し申し訳ない気持ちになる。だけど、断るのもなんだか雅に悪い気がする。そう思い、私は彼の好意を享受することにした。だったら、せめてものお札に、今日も雅の服を選んであげようと思う。彼は、はつきり言つて、服のセンスが悪い。着れたらなんでもいいと思つている。だから、いつも私が選んであげている。密かな私の楽しみだったりもする。

そして、メンズコーナーに來た私達は、そこで驚愕の看板を目にする。

『本日メンズ特価！全品半額！』

前々から、サービスのいい店だとは思つていたけれど、まさかここまでするなんて。これは俄然やる気が出てくる。長丁場になりそうな予感がする。ふと、雅の方を見てみると、何故かどこかに駆けていこうとしていた。一体どこに行こうとしているのかわからない。これから楽しくなりそうなのに。だから、私は彼の肩を掴んだ。そのときの雅が、何かに怯えているように見えただけで、きつと気のせいだと思う。

その後私達は、心ゆくまで雅のファッションショーを楽しんだ。雅は容姿は幼いけれど、分類としてはイケメンに入る。かわいい系でも、かつこい系でもいけるから本當に着せ替えてて楽しい。どれもよく似合う。ちらつ、と時計を見ると、時刻は3時半を回つていた。さすがに長くなりすぎたかもしれない。次で最後にしよう。

「うん、これも良さそうね。あ、これも。こつちも似合いそうね。雅、次はこれとこれと

これお願いね」

「千聖、さすがにこれで終わりにしてよ」

彼がどこか疲れた声で言う。さすがに、時間をかけすぎたかもしれない。さすがに私も少し疲れてきた。

「そうね、めぼしいものはこれで全てだから最後にしようかしら」

私がそう言うのと、彼は少しホツとしたような表情を見せた後、少し申し訳なさそうな表情を見せた。雅の考えていることはわかる。大方、彼の服ばかり選んで、私の好きなことをできていないんじゃないか？楽しんでいないんじゃないか？とでも考えているのだと思う。そんなことはいらない心配だというのに。

「気にしなくていいわよ？私は十分楽しんでるもの」

私がそう言うのと、雅は少し安心したような表情を見せた。本当にわかりやすい。けど、それもまた彼の魅力だと思う。裏表の無い性格。だからこそ、一緒にいて心地良い。だからこそ、彼に魅^ひかれた。もちろん、これだけが理由ではないけれど、これが彼が好きになった理由の一つなのも事実。

昔から私は、何を内に秘めているかわからない大人たちが跋扈^{はつこ}する、芸能界という荒波の中で育った。気の抜けない環境の中において、彼という存在は一種のオアシスだった。彼の隣にいる時だけが、気を抜ける、心休まる時間だった。だから、彼のことが好

きになった。重ね重ねになるけれど、これだけが理由ではない。だけど、この点が重要なのも事実。最大の魅力だとも思う。

そして、雅の最後の試着が終わった。うん、やっぱりこれも似合う。その中でも、最も似合っていた3着を私は選ぶ。うん、この3着は一際輝いて見えた。是非また彼に着てほしい。そして、早々にお会計を済ませて、私たちは次のお店に向かった。

次にやってきたのはアクセサリーショップ。私にとって今日最も来たかったお店。雅にはすでに、ここで買いたいものがあると伝えてある。だけれど、その前になんとか失礼なことを考えてそうだったから、笑顔で注意しておいた。なんだか怖いものを見たような表情をしていたけれど、何を見たのかまではわからない。

「で、千聖は何が買いたかったの?」

「そうね、雅、今日は何の日か覚えてる?」

今日は特別な日。私にとって、雅にとっても特別な日。今日は私の誕生日。だけど、それに負けず劣らずの重要事項がある。

「千聖の誕生日でしょ？それがどうかしたの？」

「そうね、それはもちろんそうなのだけれど、他に思い当たることない？」

「やっぱり忘れていた。おそらく、私が誕生日だということばかり考えていたから、もう一つの記念日のことまで気が回っていなかったのだと思う。プレゼントも必死になつて私に合うものを探してくれたみたいだし、私は別に気にしていない。」

「そうだ。ごめんすっかり忘れていたよ」

「いいのよ。私は自分の誕生日だったから覚えていただけだから。気にしないで」

今日は、私が彼と初めて出会った記念日でもある。偶然にも、あのテレビ収録の日は、私の誕生日だった。番組の中で、サプライズでケーキも用意してもらつて、出演者のみんなにお祝いしてもらつた覚えもある。あの日のことは一生忘れないと思う。私にとつて、今までの人生でも1、2位を争うぐらいに特別な日。私と彼の人生が繋がつた日。

「そうだったね。今日は二つの記念日だったんだ。誕生日おめでとう千聖。そして僕と出会つてくれてありがとう千聖。けど、それがこのお店とどうつながるの？」

「私達の出会いを記念して、お揃いのアクセサリーを買おうと思つたの」

「そう、私はあの出会いを忘れないように、そして今日という日を忘れないように、記念にお揃いのアクセサリーを買おうと計画していた。買うものも既に決めている。」

「いいね。で、何買うの?」

「これよ」

私が指さした先には、天然石の指輪があった。紫色と黄色が混ざったような色合いをした綺麗な石が付いている。

「この石は私の誕生日石なの。これを二人でつけてみない?」

この石の名前はアメトリン。パワーストーンと呼ばれる石の一種。パワーストーンっていうのは、特殊な力があるとされている石で、身に着けているだけで様々な恩恵があるって言われている。その効果は石によって様々。

このアメトリンはそんなパワーストーンの中でも少し特殊な石。同じパワーストーンのアメジストとシトリンが混ざり合ってきた石。その効果も、二つの石の特徴が反映されている。アメジストは、愛の守護石とも呼ばれるほど、愛と密接な関係にある石。そしてシトリンは、太陽を象徴する石と呼ばれていて、精神状態を浄化する効果があるなんて言われている。そして、そんなシトリンの宝石言葉は『夢を追って』すごく、雅に似合う。

そして、そんな二つの石を合わせ持ったアメトリンは、自己の能力を伸ばしたり、心身への癒しを与える効果があるとされている。そして何より、その宝石言葉が私たちに似合う。その宝石言葉は、『愛情』。調べれば調べるほど、私たちに相応しい石だと思

う。

「いいね。そうしようよ」

「さすがに指輪はまだ早いけど、ここのお店はお願いしたら指輪をネックレスに加工してくれるの。お願いしましょ？」

指輪はまだ早い。それは、私たちが晴れて恋人同士になってからがいい。だから、今はネックレスで我慢しておく。でも、近い将来に、雅とお揃いの指輪を左手の薬指にしてみたい。そんなささやかな願いが叶う日を夢見て、私たちは会計に進んだ。加工を依頼したときに、店員さんに素敵な恋人さんですね、と言われて顔を赤くしてしまったのは、仕方がないことだと思う。

アクセサリーショップを出た私たちは、私の希望でカラオケに来ていた。カラオケも随分久しぶりに来た気がする。おそらく、最後に来たのは中学時代に、雅と来て以来だと思う。今度、花音でも誘ってみよう。だけど、雅と二人でカラオケなんて、彼のファンが聞いたら卒倒しそうなイベントな気がする。夜道で刺されないか警戒しなくては

いけない。

「カラオケなんて随分久しぶりだね。何歌おうかな」

「そうね、雅、先に歌ってもらえるかしら？」

「僕から？ そうだね。千聖が言うならそうするよ」

最初は、雅に歌ってもらうことは来る前から決めていた。理由は単純。彼の歌が聞きたかったから。彼の歌っている姿が見たかったから。歌っているとときの雅は、一際輝いて見える。そんな彼を見ているのが、私は好きだった。思えば、初めて彼に魅かれた時も、彼の歌う姿、歌う声に魅かれた。今では、彼のあらゆる面が好きだけれど、やっぱり一番つてなると、歌っている時の彼が好き。そして、彼が入れた曲が流れてくる。その曲は、意外な選曲だった。

「これは、Marmalade？」

「うん。今作ってる曲のための参考にさせてもらったんだ」

それは、人気女性アイドルグループの代表曲だった。そういえば、雅は確かに今アイドルソングを作っていると言っていた。さすがに、何も枠組みが無い状態から完成させるのはいくら雅でも無理なはず。だとすると、枠組みになる曲を何曲か探し、それを参考にして完成に近づけるのがベストだと思う。この曲も、その中の1曲なのだと思う。彼の歌を聞いた感想は、当然ながら上手い。雅の声は中性的で、歌い方によつては女性が

歌っているように聞こえる場合もある。今歌っているように。よく通るその歌声は、聞いている者を老若男女関係なく魅了する。実際、彼のファン層には全く一貫性が無い。支持層が性別年齢関係なしにバラバラだ。ここまで支持層がばらけるのもめずらしいと、この前テレビで言われていた。

そんな彼の歌と、映像に移るアイドルの姿が、何故か非常にマッチして見えた。彼の歌を聞いていると、映像のアイドルのダンスを見てみると、なんだか私も踊ってみた気分になってきた。試しに、映像のアイドルを見て見様見真似で、踊ってみる。すごく楽しい。たまには、こうやって体を動かすのも悪くないかもしれない。少し踊っている内に、曲が最後のサビの終わりに差し掛かる。私は、そこでまだ自分が曲を入力していることに気づき、慌てて入力する。歌う曲はもう事前に決めてある。そして、雅の歌が終わり、私の歌う曲が流れてくる。

「これは、メモリア?」

「そう、私の大好きな曲よ」

この曲は雅の曲で、私が大好きな曲。私は、カラオケに来たら9割方雅の曲を歌う。彼以外の曲を歌うのは稀なこと。その中でも、この曲は私たちにとつて特別な曲。記憶という意味を持つこの曲。中学時代の雅の過ちを戒めるために作ったと雅は言っていた。自分の過ちを忘れないように。それを正してくれた私への感謝を忘れないように。

彼はそう言っていた。私も同じ気持ち。彼の過ちを忘れず、共有していきたい。罪も、二人で分けければ半減されるはずだから。彼からの感謝も素直に受け入れる。そして、私の感謝も彼に贈る。これでおあいこ。そして、彼は言わなかったけど、私にはわかる。彼がこの曲に綴った、もう一つの忘れてはいけない感情を。

「忘れないよ 雅の罪を」

「え？」

「忘れないよ 雅への感謝を」

「千聖？」

忘れないよ、雅への愛を。忘れないよ、雅からの愛を。彼が、この曲に、隠した最後の記憶。愛の記憶。私にはちゃんとわかる。だから、私も愛をこめてこの曲を唄う。あなたに捧ぐこの愛の唄を。私が乗せることができるだけの愛情を声に乗せて、雅に贈る。この想いが少しでもあなたに届くように。そして、曲が終わる。

「うん、やつぱり素敵な曲ね。私の歌、どうだった？変じゃなかったかしら？」

「すごく良かった！作った本人が聞いても思わず唸っちゃうほどだったよ！乗せられた感情もすごく伝わってきたよ！」

「ふふっ、ありがとう」

なんだか照れ臭い。雅本人にこんなに褒められると、嬉しいを通り越して照れてしま

う。でも、私がこんなに上手く歌えるのは、雅の曲だからこそ。他の人が作った曲を歌っても、こんなに上手くはいかないと思う。歌を歌う時に、想いというのは非常に重要な役割を持つ。曲を作った人が、込めた想いを歌い手が感じ取り、歌に込めることができれば、その歌は何倍にも昇華される。雅のことはだれよりもよく知っている私だからこそできることだと思う。

「だけど千聖？僕は千聖に対して感謝の気持ちでいっぱいだけど、僕は千聖に対して感謝されるようなこと全くしてないよ？」

不意に、彼がそんなことを言い出す。雅は、自分が私にどれだけの影響を与えているのかをわかっていない。雅に出会っていないければ、今の私という存在はいなかったはず。

「そんなこと無いわよ。雅が気づいてないだけで、私はたくさんものをあなたにもらってるわ。それこそ、私に負けないほどのね」

「本当に？全然わからないや」

「そうね、じゃあ一つだけ教えてあげるわ。雅がアクセサリーショップで言ってたことをそのまま返すわね？私と、出会ってくれてありがとう」

「千聖・・・」

だからこそ、教えてあげる。雅は、人の気持ちに疎い。だから、実際に教えてあげな

ければ理解できないことも多い。だから、こうして、真つ直ぐに私の正直な気持ちを伝えてあげる。それが一番の方法だから。1番理解してほしい気持ちは伝えないけれども。

その後は、二人で思う存分カラオケを楽しんだ。雅とデュエットもしちやつたけれど、フアンの子に知られたら本気で刺されそうで怖い。

そして、時間は過ぎて既に時計は7時を回っている。時間的にもそろそろ帰らなければいけない。

「今日はすごく楽しかったわね。晩ご飯どうしましょうか?」

「そうだなー千聖の手料理が食べたいな」

ふと、彼に晩御飯の予定を聞いたら、そんな返答がきた。少しときめいてしまった。

「いつも食べてるじゃない」

「だって好きなんだから仕方ないじゃないか。今日のお昼のイタリアンもおいしかったけど、僕には千聖の手料理の方が合ってるや」

「ふふつ、そこまで言うなら仕方ないわね。じゃあ、材料買って帰りましょうか」

言葉では仕方ないと言っているけれど、内心嬉しくてしようがなかった。こんな些細な日常が幸せで堪らなくなる。そんな些細な幸せから、愛を感じる。雅といるだけで、私の心は温かくなる。隣に立って居れるだけで、私が生きる意味になる。もう、これらの人生、雅無しで生きる私の姿が想像できない。だから、これからの長く果てしない人生も、あなたと歩んでいきたい。そして、いつまでも二人で唄って生きよう。二人で紡ぐ、この愛の唄を。

第5演目 フェイク

千聖とのデートから、1週間が過ぎた。

ありふれた、平凡な1週間だった。

朝、千聖に起こしてもらい、千聖の作ってくれた朝食を食べ、千聖と一緒に登校し、授業中に作曲に勤^{いそ}しみ、千聖の作ってくれた弁当を食べ、雑誌の取材や、テレビ収録などの仕事を行い、帰って千聖の作ってくれた晩飯を食べ、楽器や歌の練習をして寝る。

誰の日常と比べても、変わり映えしないようないたって平凡な日常だと思う。

そんな日常を繰り返した1週間だった。そして、今日はそんな日常にアクセントが加わる。

今日は依頼されていたアイドルソングの作成締切日だ。僕は今、曲を提出するため事務所向かっていた。僕は普段、事務所に顔を出すことはあまりない。出すにしても、事務所に呼び出された時ぐらいだ。そして今日は、時間まで指定して呼び出された。なんでも、作った曲に関してのミーティングを行うらしい。間違いなく、僕の作った曲を歌う人もくるだろう。会うのが少し楽しみだ。

「おはようございます」

事務所に入ると、中ではスタッフの人たちがなにやら慌ただしく動いていた。僕が入ってきたことに気づいていない人もいるほどだ。

「おはようございますっ！」

スタッフさんの様子を伺っていると、僕に話しかけてくる声が聞こえた。そちらを振り向くと、ピンクの髪をした女の子が立っていた。見たところ、事務所スタッフではないようだ。となると、所属芸能人だろうか？正直、見覚えがない。

「あの、黒城雅さんですよ？私、丸山彩つて言います！事務所の研究生をしています！黒城さんのことは、いつもテレビで見えますっ！」

事務所の研究生。通りでテレビなどでも見たことが無いわけだ。まだ芸能人デビューしていないのだから。

「彩ちゃんだね？見たところ同年代だし、敬語もいらぬし、雅でいいよ。正直、あまり苗字は好きじゃないんだ。これからよろしくね」

「雅君だね？よろしく！」

彩ちゃんと、軽く挨拶をしていると、事務所の扉が開き、また新たな人物が姿を現した。その人物は、非常に見慣れた少女だった。

「おはようございます。すみません、前の仕事が押しちゃって」

「おはようございますっ！」

「あれ？千聖も呼ばれたの？」

入ってきたのは千聖だった。朝から仕事があるとは聞いていたけど、終わってすぐに駆け付けたらしい。

「あら、雅も来てたのね。そういえば、今日が締め切りって言ってたわね。その日に私が呼ばれたってことは、もしかして、私がデビューするのかしら？」

嬉しそうに言う千聖。僕の作った歌で、千聖がデビューしてくれるのなら、それは嬉しい。だけど、僕は事前に歌うのは個人ではなく5人グループということだけは聞いている。だから、千聖がデビューするにしても、個人デビューでは無い。ということは、ここにいる彩ちゃんと組むのだろうか？後のメンバーはまだ来ていないみたいだけど。一体どんな子達なのか少し気になる。

気になると言えば、事務所から曲に使う楽器も指定されていたんだけど、何か意味はあるのだろうか？事務所の意図がよくわからない。

「おはようございますー！」

他のメンバーのことを考えていると、また新たな参加者が現れた。おそらく、ハーフと思われる整った容姿と、銀の髪が特徴の少女だ。

「全員揃っていますか？」

そして、時間になったのだろうか？スタッフの人が参加者の確認を取る。聞いていた

人数より少ない気がする。

「まだ一人来てないみたいですね」

やっぱり、足りないみたいだ。だけど、一人だけなのだろうか？聞いていたのは5人だけど、ここにいるのは、彩ちゃん、千聖、ハーフの子の3人だけ。一人増えても4人だ。さらに一人足りない。まさか、僕もアイドルデビューしろなんて言われるんじゃない……

「あれー？ミーティングがあるって聞いてきたんだけどー、今日じゃなかった？」

世にも恐ろしい思考をしていると、新たな少女が現れた。水色の髪をした少女だ。なんだか、得体のしれない独特な雰囲気を感じた。

「むしろ遅刻ですよ」

「あ、そうなんだ。ってことはー、あたし以外はみんな揃ってたりする？じゃあじゃあミーティングはじめようよー」

やはり独特だ。だけど、悪い子ではないと思う。確証は無いけれど。

「では、改めて。今日はみなさんにお話があつて集まってもらいました。みなさんには、新人アイドルグループPastel*Palettesとしてデビューしていただきますー！」

やはり、ここにいるメンバーで間違いなかったようだ。ここにいる5人でPastel

1*Palettes・・・いや、ちよつと待つてほしい。明らかにおかしい。5人目が見当たらないのだけれど、本当に僕が5人目だとも言うのだろうか？

「それって、ホントですか!？」

「ええ、本当ですよ! 彩さんは、事務所の研究生としての経験を活かして頑張ってくださいね」

「はいっ! ありがとうございます!」

僕が心の中で不安になっている内に、スタツフさんと彩ちゃんの会話が続く。5人目さん、いるのなら隠れてないで出てきてほしい。

「それでは、初めましての方が多くでしょうし、自己紹介をしましょう。彩さんから」

「は、はい! 丸山彩です! えーと、昔からアイドルになることが夢だったのでごく嬉しいです! その、精一杯がんばるのでよろしくお願いしますっ!」

彩ちゃんの自己紹介は、緊張からか、少しぎこちなかった。だけど、アイドルに対する熱意はすごく伝わってくる。彼女ならいいアイドルになれるかもしれない。

「私の名前は若宮イヴです! モデルをやっていました。ブシドーの気持ちを忘れずに、がんばります!」

「ブシドー?」

思わず声に出してしまった。ブシドー? 武士道のことだろうか? どうやら、彼女も非

常に個性的な人物のようだ。

「白鷺千聖です。子役時代から、ドラマや映画に出ていました。だから、みんなより芸歴だけは長いんだけど、アイドルとしては新人だから、よろしくね」

次は千聖だ。確かに、彼女は芸歴で見ればここにいるメンバーで最も長い。まあ、僕も同じぐらいだけれど、彼女は女優。共演者等を通じてこの業界での交友関係も多い。僕はそうでもないんだけど。そんな彼女だからこそ、メンバーの助けにきつとなれるだろう。

「さっき、千聖ちゃんが入ってきた時に思ったんだけど、千聖ちゃんと雅君って仲良さそうだよな?」

彩ちゃんが言う。確かに、僕と千聖が二人でいるところを初めて見た人は、大抵の人がそう言う。なんでも、雰囲気がそう感じるらしい。

「それはそうよ。だって、私と雅は将来を誓い合った仲だもの」

そう。僕と千聖は将来を誓い合った仲だ。だから仲がいいのは当たり前・・・ってちよつと待つてほしい。千聖?

「しよしよしよ将来!?!」

「なるほど、これが事実婚というものですな!」

「イヴちゃん。それはちよつと違う・・・いや、意味的に違わないのかな?でも、ビック

りしたなー。二人とも大人だねー」

いや、おかしい。確かに、将来的にはそういつた仲間になりたいとは毎日夢見ているけど、そんな誓いまだした覚えは無い。もしかして、僕が忘れてるだけ？だとしたら悲しい。なにやら動揺しすぎておかしな方向に思考が進んでいる気がする。

「ふふっ、冗談よ。雅とはただの幼馴染よ」

「な、なんだー冗談かー」

「普段のお二人を見てると、冗談とも思えませんがね・・・」

何故か、安心したように息を吐く彩ちゃん。僕も、忘れていたわけではなくて安心した。そして、千聖にただの幼馴染と言われて少しショックだったりする。後、スタッフさんが何か言った気がするけれど、僕にはよく聞こえなかった。なんだったんだろう？「じゃあ気を取り直して、次はあたしかな？名前は氷川日菜・日菜でいいよ。なんかー、バンド？のオーディションに出てみたら受かったんだよねー」

「バンド？でも、これはアイドルニットの集まりだよ？」

バンドのオーディション、確かに彼女はそう言った。そこで、僕はある可能性に辿り着いた。5人組。指定された楽器。バンドのオーディション。これだけの要素があれば間違いないと思う。

「言うのを忘れていましたが、みなさんにはアイドルバンドとしてデビューしていただ

きます」

やはりだ。僕の予想は正しかった。5人組アイドルバンドPastel*Palettes。それが彼女たちに与えられた仕事だ。確かに、アイドルと言うだけあって、ビジュアルに優れた子達が集められている。だけど、演奏に関してはどうだろう？日菜ちゃんはバンドのオーデイションからの生え抜きということもあり、演奏技術に問題は無いだろう。千聖も、昔から僕と過ごす時間が長かった影響で、大抵の楽器の演奏は問題なくこなせる。ボーカルだって問題無いだろう。むしろ、本音を言うのと千聖に歌ってもらいたい気持ちが強かったりする。

問題は後の二人だ。彩ちゃんはアイドルを目指していたらしいので、おそらくボーカルは問題ないだろう。だが、楽器に関してはどうだろうか？おそらく経験が無いだろう。予想では、彼女がボーカル担当になる。千聖に歌ってもらいたい気持ちは確かに強いが、仕方ないことだ。

最大の問題はイヴちゃんだ。彼女に関しては、モデルをやっていたことと、ブシドー以外の情報が今のところわからない。先ほど、スタツフさんにアイドルバンドという情報を聞かされた時の反応を見る限り、おそらく楽器未経験者だろう。見たところ、ガッツはありそうだし、努力でなんとかしてもらえない。

「では、詳しい説明に入る前に雅さんも自己紹介お願いします」

僕が考え事をしていると、スタッツさんに自己紹介を催促された。そうだった。僕はまだしていなかった。だが、その前に聞かなければいけないことがある。5人目のメンバーについてだ。

「その前に、一ついいですか？僕は、事前に5人組グループだと聞いていたんですけど、見たところ、ここには4人しか女の子がいません。まさか、僕もこのグループに入れとか言いませんか？」

「え？何を言ってるんですか？そう言うに決まってるじゃないですか？」

そう、そんなことは当たり前。僕がこのグループに入ることは確定事項……いや、ちよつと本気で待ってほしい。

「ちよつと、え？何言ってるんですか!?僕は男ですよ!?明らか女性アイドルグループに相応しくない人種ですよ!」

「あはは、冗談ですよ。今現在5人目のメンバーは探している段階です。見つかるまでは臨時のメンバーで対応します。その子も後で紹介しますね？」

全く、質たちの悪い冗談だ。本気で失神するかと思うほどの寒気が背中を通り抜けた気がした。そして、僕は見逃さなかった。視界の端に映る千聖が、何やら残念そうな表情を浮かべたことを。まさか、僕のアイドル姿を見たかつたとも言えるだろうか？冗談ではない。他の誰に見られても、千聖にだけは絶対見られたくない。もし万が一見られた

ら1週間は部屋に引きこもる自信がある。

「はあ、早く見つかるといいですね。まあそれは置いておいて自己紹介ですね？初めましての方は初めまして。そうじゃない方はお世話になってます。Pastel*Palettesの作曲を受け持つことになった黒城雅です。以後お見知りおきを」

「え？雅君が私達の曲を作ってくれるの？」

「まあ事務所にそう言われたからね。おそらく、今後もそうなるんじゃないかな？」

「はい、その予定です」

やはりそうだった。ここまでの流れでなんとなく察してはいた。このバンドを売り込むにあたって、事務所は黒城雅というネームバリユを活用するつもりのようなだ。演技派女優の白鷺千聖が所属し、今話題の高校生シンガーソングライター黒城雅が楽曲提供をする。話題性とインパクトは十分すぎるぐらいだろう。それこそが事務所の狙い。

「ミヤビさんのことは知っています！まるで、侍の刀のように、切れ味鋭いギターを使われていますね！」

いや、その例えはどうなんだろう？切れ味鋭いギターってなんだろう？それはただの凶器では無いだろうか？それかあれだろうか。昔流行った某ギター侍みたいに鋭い口撃で人を一網打尽にしていくのだろうか？実際にはしないけど。

「あたしも雅君の曲はいつも聞いているよ。先月出したアルバムもるんってきたから

買ったっちゃった！」

るん？ルーン？古代文字のことだろうか？いや、それはさすがに無いだろう。おそらく、彼女なりの感情表現なのだろう。意味まではわからないけど。それはそうと、僕のCDを買ってくれたのは非常にありがたい。嬉しい限りだ。

「あれ買ってくれたの？日菜ちゃんありがとう。これからもどうぞご贔屓にね？それで、話は変わりますけど、彼女達のお披露目はいつになるんですか？」

「二週間後の日曜日を予定しています」

2週間？ありえない。そんな短時間で曲を覚えるなんて、プロでもない限り無理だ。ましてや、楽器初心者だっているのに、信じられない。

「2週間はさすがに短すぎませんか？彼女たちが演奏を覚えるには無理があると思います」

「覚える必要はありません。いえ、正確には演奏ではなく、違うことを覚えていただきませう」

必要が無い？僕には全く理解ができなかった。どういうことだろうか？だめだ、考えても答えが出そうにない。

「アイドルバンドなのに、演奏を覚える必要が無い？それってどういうことですか？」
彩ちゃんが聞く。それは、僕も気になっていたので、非常にありがたい質問だ。

「みなさんには、演奏しているフリを覚えていただきます。曲自体は、プロの方に演奏していただいたものをバックに流します」

スタツフさんが言ったことが、僕は最初理解ができなかった。演奏しているフリ？ 口の演奏を流す？ 頭の中で情報を一つ一つ整理していく。そうして、ようやく僕は答えを導き出す。それはつまり……

「演奏はフェイクということですか」

「それは、ブシドーに反します！」

「私も、ちゃんと練習してお客さんに聞いてもらった方がいいと思います」

反対意見を言うイヴちゃんと彩ちゃん。彼女たちの意見は正しいと僕も思う。

「……私も、できることならば、ちゃんとした演奏を聞かせたいと思います」

千聖もその意見に続く。正直、これには驚いた。千聖は、上昇志向が強い。自身が階段を上るのに不利益になるようなことはまずしない。当然、事務所の意向に背くような発言はしない。そんな彼女が、事務所の意向に異議を唱えた。少なくとも、僕が知る限りでは初めてのケースだ。だけど、驚いたと同時に、彼女がそう言うなら、背中を押しあげたいと思っている僕がいる。今スタツフさんは、予想もしなかった千聖からの反対意見に動揺している。だからこそ、最後の一押しを加える。

「スタツフさん。確かに僕は楽曲を作りました。自分の成長のために、楽曲を作りました

た。だけど、僕はこんなニセモノの演奏を聴かせるために作ったわけではないです。自分の成長のことしか考えていなかったとはいえ、僕も音楽家としてのプライドがある。こんな猿芝居に使われるぐらいなら、提供の話は無かったことにしていたいただきたいです」

「千聖さんだけじゃなく雅さんまで・・・す、少しお待ちください」

そう言つて、集まって話し合いを行うスタッフさん達。最後の僕の一押しはよつぽど効いたらしい。その表情には明らかかな焦りが感じ取れる。

「わ、わかりました！みなさんがおっしゃるのであれば、その方針で進めていきます！ですが、みなさんの中には、楽器未経験の方もおられます。それなのに2週間でまともな演奏ができるようになるのはさすがに無理があると思います。なので、最初のお披露目ステージに関してだけはプロの演奏を使わせてください。何分、延期することができないものでして・・・」

なるほど、確かにスタッフさんの言うことも一理あると思う。さすがに、2週間で素人がまともな演奏できるようになるには無理がある。延期もできないのであれば、それは仕方がないことだろう。最初の一度は目を瞑るしか無いみたいだ。

「そういう理由ならば、仕方が無いと私は思います」

「わ、私も千聖ちゃんと同じです！」

「なるほど、これが武士の情けというものですね！」

「イヴちゃんそれは全然違うと思う。僕もそれならば仕方が無いと思います」

「あたしはちゃんと弾けるんだけどなー。ちなみに、ほかの子達は何の楽器やるの？」

「はい、今からそれを説明しますね。まず彩さん、あなたがボーカルです」

「わ、私ですか!?!」

「・・・」

予想通り、彩ちゃんはボーカルだった。予想通りなのだけど、残念に思う。だけど、こればかりは仕方がない。なぜなら、これがベストの形なのだから。

「ボーカルも、2週間後はすいませんが事前に収録したものを流します。」

収録のスケジュールは追ってお伝えしますね」

「・・・はい」

「他の方は、日菜さんがギター。千聖さんはベース。イヴさんはキーボード。ドラムは雅さんです」

なるほど、僕はドラムか。ドラムを叩くのは久しぶりだ。少し楽しみ・・・いや、もうこの流れはいいから。

「なんで僕がメンバーに入ってるんですか!?!」

「あはは、だから冗談ですよ。ドラムの子は今探してます」

「私はベースですか。得意な楽器で安心しました。縁の下の力持ちとして、精一杯、頑張りますね！」

千聖は確かにベースが得意だ。僕が今回作った曲ぐらいなら、全て卒なく熟すだろう。

「それと、今から臨時のメンバーを紹介します。大和さーん！いる？」

スタツフさんがそう呼ぶと、奥から一人の女の子が現れた。茶髪のメガネをかけた女の子だ。

「は、はいっ！この事務所で、サポートドラムを務めている大和麻弥といいます。メンバーが見つかるまでの間ですが、よろしくお願ひしまっす！」

なるほど、サポートドラムの子か。彼女ならドラマーとして問題無いだろう。いっそ、正式なメンバーになってもらえないだろうか？

「それでは、今日はこれで解散にしますね！後日、お披露目イベントの詳しい説明を行います！お疲れさまでした！」

「お疲れさまでした。雅、せっかくだからお昼食ベに行きましょ？」

「そうだね。行こうか。それじゃあみんなお疲れ様。これからよろしくね」

そして、僕は千聖といっしょに事務所を後にした。だけど、本当に大変なことになった。个性的すぎるメンバー。フェイクの演奏で臨むお披露目イベント。無事に乗り切

れたらいいのだけど、どうも胸騒ぎがする。このイベント、一筋縄では終わらないような、そんな胸騒ぎが。そして僕にはもう一つ懸念事項があった。お披露目イベントがある2週間後の日曜日。この日に何かがあった気がする。とても、大事な何かがある。

「そういえば雅。お披露目イベントは2週間後の日曜日って言ってたけれど、あなたその日ライブの予定じゃなかったかしら？」

「あ」

そうだった。千聖に言われるまですっかり忘れていた。今日色々ありすぎたせいだ。だけど、これはまずいことになった。現在進行形で、得体のしれない胸騒ぎが僕を襲っている。過去、感じたことのないような胸騒ぎ。これは、おそらく、間違いなくお披露目イベントで何かが起こる。それなのに、僕は彼女たちの側にいてあげることができない。それが非常にもどかしかった。どうか、この胸騒ぎがフェイクであってほしい。そう願いながら、僕はその日を過ごすのだった。

だが、後に知ることになる。この胸騒ぎは、この予感を決してフェイクなどでは無かったのだと。

後に後悔することになる。あの時、もう少し何か手を打てなかったのかと。

今の僕には知る術はない。

そして後に気づくことになる。

この時すでに、僕たちは絶望への道を歩んでいたということをして……

第6演目 彩り

雅とのデートから1週間が過ぎた。

私にとつては、ありふれた平凡な1週間だった。

いつも通り、仕事と雅のお世話を熟していると、気づけば過ぎていた感覚。正直、1週間も過ぎた気がしない。

そして、今日も朝から雅の家で時間を過ごし、仕事に向かう。ただ、今日はいつもと違う点が一つだけあった。事務所からの呼び出しメールが私のスマホに届いた。ただそれだけ。だけど、そのわずかな変化が、私には何かの始まりに感じられた。これから、何か私にとつて特別な出来事が起こる気がする。そんな予感じみたものを感じながら、私は事務所の扉を開いた。

「おはようございます。すみません、前の仕事が押しちゃって」

「おはようございますっ！」

「あれ？千聖も呼ばれたの？」

扉を開けると目に飛び込んできたのは、慌ただしく動くスタッフさん達と、ピンクの髪をした女の子と、見慣れた男の子の姿があった。そういえば、今日が例の締切日だと

忘れていた。朝から仕事があると言っていたけれど、どうやら私と同じ仕事だったみたい。そして、彼と同じ仕事ということは、もしかして私が・・・

「あら、雅も来てたのね。そういえば、今日が締め切りって言ってたわね。その日に私が呼ばれたってことは、もしかして、私がデビューするのかしら？」

だとしたら、はつきり言ってますごく嬉しい。正直、アイドルという職業にはあまり興味がない。だけど、その歌う曲を雅が作るならば、話が変わってくる。なりたい。素直にそう思える。

「おはようございますー！」

私が、アイドルについて考えていると、銀の髪をした女の子が入ってきた。彼女も呼び出されたのかしら？だとすると、彼女もアイドルの関係者？そういえば、最初からピンの髪の子もいる。もし、彼女もアイドルの関係者なのだとしたら、一つの可能性が出てくる。アイドルは一人ではないという可能性が。つまり、グループである可能性が。

「全員揃っていますか？」

そして、ここでスタツフさんの声がかかる。どうやら、時間みたいだ。

「まだ一人来てないみたいですね」

後一人、ということとは、このグループは4人構成なのかしら？まだ情報が少ないため、

確証は持てない。

「あれー？ミーティングがあるって聞いてきたんだけどー、今日じゃなかった？」

そして、また新たな入場者が現れた。水色の髪をした少女、彼女からは何か独特な雰囲気を感じる。

「むしろ遅刻ですよ」

「あ、そうなんだ。ってことはー、あたし以外はみんな揃ってたりする？じゃあじゃあミーティングははじめようよー」

やっぱり、独特な子。この子と一緒にのグループで大丈夫なのか少し不安になる。まあ、まだ一緒にのグループになると決まったわけではないけれど。

「では、改めて。今日はみなさんにお話があつて集まってもらいました。みなさんには、新人アイドルグループPastel*Paletteとしてデビューしていただきます！」

やっぱり、このメンバーで一つのグループ。私と、ピンクの髪の子と、ハーフの子と、独特な子。この4人でPastel*Palette。アイドルは初めての経験だけど、私にできるのか少し不安になる。だけど、きつと大丈夫。なぜなら、私たちの曲を雅が作ってくれるのだから。それだけで勇気が湧いてくる。

「それって、ホントですか!？」

「ええ、本当ですよ！彩さんは、事務所の研究生としての経験を活かして頑張ってくださいね」

「はいっ！ありがとうございます！」

彩と呼ばれた子と、スタッフさんの会話、その内容を聞く限り、彼女はどうかやら研究生らしい。これが実質の芸能界デビューということになる。見た目、頼りなさそうな雰囲気があるけれど、大丈夫かしら？

「それでは、初めましての方が多いでしょうし、自己紹介をしましょう。彩さんから」

「は、はい！丸山彩です！えーと、昔からアイドルになることが夢だったのですごく嬉しいです！その、精一杯がんばるのでよろしくお願いしますっ！」

緊張からか、少しきこちなく自己紹介をする彩ちゃん。こんなところで緊張してて、本番は大丈夫かしら？！心配になる。

「私の名前は若宮イヴです！モデルをやっていました。ブシドーの気持ちを忘れずに、がんばります！」

「ブシドー？」

思わず声に出してしまう雅。その気持ちはすぐわかる。モデル出身らしいイヴちゃんという子も、これまた独特な子みたい。このメンバーが一つにまとまることなんてできるのか心配になる。いざという時は、私がなんとかしないと。そう決意し、私も

自己紹介をする。

「白鷺千聖です。子役時代から、ドラマや映画に出ていました。だから、みんなより芸歴だけは長いんだけど、アイドルとしては新人だから、よろしくね」

そう、私はここにいるメンバーの中で最も芸歴が長い。私と肩を並べられるのはこの中では雅ぐらいだと思う。だけど、私は雅に無いものを持っている。それは交友関係。共演者などを通じて、私は多くの交友関係を持つている。それは、きつとこのグループの助けになると思う。

「さっき、千聖ちゃんが入ってきた時に思ったんだけど、千聖ちゃんと雅君って仲良さそうだよな?」

不意に彩ちゃん聞いてくる。確かに、昔から私と雅が二人でいると、大抵の人にそう言われる。雰囲気からそう感じると前に聞いたことがある。いつもなら、そう聞かれたら幼馴染だからだとだけ答えているのだけど、ここで私は一つのいたずらを思いつく。ここにいる子たちは、アイドルに選ばれるだけあつて可愛い子ばかり。ありえないことだとは思うけれど、雅が取られないとも言いきれない。ありえないことだとは思うけれど。そのための牽制を仕掛ける。

「それはそうよ。だって、私と雅は将来を誓い合った仲だもの」

要は、雅は私のものだとか皆に教えてあげる。これで、雅と私の仲を印象付けることが

できたはず。

「しよしよしよ将来!？」

「なるほど、これが事実婚というものですね!」

「イヴちゃん。それはちよつと違う……いや、意味的に違わないのかな?でも、ビツクリしたな。二人とも大人だね」

予想以上の効果だったみたい。メンバーのみんなは大混乱に陥っている。雅でさえも百面相を顔に浮かべている。あの様子を見るに、たぶんそんな誓いしたつけ?もしかして僕が忘れてるだけ?忘れてるんだったショックすぎる。とでも考えているのだと思う。ただ、気になるのはスタツフさん達は全く動じていないのが気になる。どうしてかしら?けどそれは置いといて、メンバーの混乱は収まりそうにない。まさかここまで効果があるなんて。これは真実を教えないと収まりそうにない。

「ふふつ、冗談よ。雅とはただの幼馴染よ」

「な、なんだー冗談かー」

「普段のお二人を見てると、冗談とも思えませんかね……」

本当は冗談にしなくてもよかったのだけれど、仕方ないから真実を教えてあげる。自分でただの幼馴染と言つて悲しくなってきた。そして何故か安心したように息を吐

く彩ちゃん。まさかね？これは要注意人物に入れておかないといけないかもしれない。後、スタツフさんが何か呟いてた気がするけれど、よく聞こえなかった。なんだったのかしら？

「じゃあ気を取り直して、次はあたしかな？名前は氷川日菜！日菜でいーよ。なんか、バンド？のオーディションに出てみたら受かったんだよねー」

「バンド？でも、これはアイドルニットの集まりだよ？」

次に自己紹介した日菜ちゃん。メンバー全員の自己紹介を聞いた感想は、よくこんな彩り豊かなメンバーが揃ったところ。強い個性の集合体といったところかしら？自分の色が強すぎて、周りの色に交わらない。それが結果的に彩りの多いグループになっている。だけど、本当にこんなグループで結束を育むことってできるのかしら？難しいことだと思う。だけど、もし、この個性の集合体が一つの色になれたなら、それはきつと綺麗な彩りになると思う。

だけど、その話は一旦置いておいて、日菜ちゃんの自己紹介の中に気になる点があった。彼女は、バンドのオーディションに出たらしい。なのに、どうしてここにいるのだろうか？このグループはアイドルグループ。バンドのオーディションは関係ない。もしかして彼女は、グループメンバーではなく、バックバンドのメンバーなのかしら？

「言うのを忘れていましたが、みなさんにはアイドルバンドとしてデビューしていただきます」

アイドルバンド？なるほど、それなら彼女がバンドのオーディションを受けたのも納得できる。ただ、歌って踊れるだけでなく、楽器もできないと話にならない。逆に私にとつてはそつちの方がいい。私はダンスよりも楽器のほうが自信がある。昔から、雅といつしよにいる時間が長かった私は、自然と音楽に関わる時間も長くなつていた。当然、楽器に触れて、弾く機会も多かった。その結果、大抵の楽器は弾けるようになっていた。ちなみに、一番得意なのはベースだったりする。

でも、私と日菜ちゃんは大丈夫だとしても、他の二人は大丈夫かしら？彩ちゃんはアイドルを目指しているって言うてたから、ボーカルぐらいなら大丈夫だと思う。だけど、演奏はできないと思う。なんとなく、そんな気がする。だとすると、彼女をボーカルに置くのが一番理想な形だと思う。はつきり言うて、ボーカルは私がやりたい。私の女優としての階段を上るためにも、ボーカルというバンドの華は喉から手が出るほど欲しいポジション。それに、曲を作ったのが雅だとするとなおさら歌いたい。

私にはいくつか目標がある。女優として大きなステージに立つという目標。今よりももっと、さらに大きなステージに。そして、雅との関係を進展させること。要するに、

恋人関係になるということ。そして、雅が主題歌を担当する映画の主演女優を務めること。これは大きなステージに立つことの延長線上。そして最後の一つ、これが今回一番重要な目標。それは、雅が作った曲を、私が歌ってデビューすること。いつの日からか、私は雅と同じステージにも立ってみたいと思うようになっていた。そのための歌手デビュー。だけど、もし事務所から歌手デビューを依頼されても、雅以外が作った曲ならば断る。歌うなら、雅の曲がいい。我儘わがままだと思われるかもしれないけれど、それでもいいと思う。それほど、私にとって雅が作る曲というのは重要事項に該当する。

— そのチャンスが今回巡ってきた。ソロデビューでは無いけれど、雅が作った曲でデビューする大チャンス。絶対ボーカルを務めたい。それが私の本心。だけど、頭で理解はしている。このグループを最も効率よく動かすには、彩ちゃんがボーカルを務めるべきだと。それが一番、練習時間等の短縮化にも繋がる。だけど、それを私の心が拒む。どうしたらいいのか、私にもわからない。

「では、詳しい説明に入る前に雅さんも自己紹介をお願いします」

私が自分のコントローラーができずにいる間に、スタッフさんが話す。どうやら、雅の自己紹介もするみたい。

「その前に、一ついいですか？僕は、事前に5人組グループだと聞いていたんですけど、見たところ、ここには4人しか女の子がいません。まさか、僕もこのグループに入れと

か言いませぬよね?」

「え?何を言ってるんですか?そう言うに決まってるじゃないですか?」

雅の質問でわかったことだけれど、どうやらこのグループにはもう一人メンバーがいるみたい。雅は事前に情報を聞いていたのかしら?そしてそのメンバーは雅。

・・・雅?雅がアイドルグループのメンバー?私は想像してみた。かわいい衣装を着て、愛嬌を振りまきながらギターを弾く雅の姿を。・・・何それ?すごく見たい。

「ちよつと、え?何言ってるんですか!?!僕は男ですよ!?!明らか女性アイドルグループに相応しくない人種ですよ!?!」

「あはは、冗談ですよ。今現在5人目のメンバーは探している段階です。見つかるまでは臨時のメンバーで対応します。その子も後で紹介しますね?」

どうやら5人目は別にいるみたい。雅のアイドル姿が見れないとなると、すごく残念に思う。急に悲しくなってきた。だけど、この和やかに変わった空気のおかげか、幾分かつた時の覚悟もできたと思う。完ペキではないけれど。

「はあ、早く見つかるといいですね。まあそれは置いておいて自己紹介ですね?初めましての方は初めまして。そうじゃない方はお世話になってます。P a s t e l * P a l e t t e sの作曲を受け持つことになった黒城雅です。以後お見知りおきを」

「え？雅君が私達の曲を作ってくれるの？」

「まあ事務所にそう言われたからね。おそらく、今後もそうなるんじゃないかな？」

「はい、その予定です」

事務所の狙いにはある程度気づいていた。わざわざ、アイドルソングを作った経験も実績も無い雅に、作曲を依頼した理由。それは彼の名前を使うため。彼は、現在ブレイク中のシンガーソングライターだ。彼が曲を作ったとなれば、それだけでも、かなりの話題性ができあがる。それに、私だっている。女優白鷺千聖が所属するアイドルグループ。この二つの話題性が合わされば、かなりの集客率が予想される。

「ミヤビさんのことは知っています！まるで、侍の刀のように、切れ味鋭いギターを使われていますね！」

イヴちゃんと言う。その例えはどうなのかと思うけれど、言いたいことはわかる。雅のギターはキレがすごい。ギターの質も良いけれども、彼の演奏技術がそのキレを実現している。一度聴いたら、耳から離れなくなることも間違いなしの音色が体験できる。

「あたしも雅君の曲はいつも聞いてるよー。先月出したアルバムもるんってきたから買っちゃった！」

るん、つて意味はよくわからないけれど、雅のアルバムを買ってくれたことはありがたい。彼女も雅のファンということかしら？雅は絶対に渡さないけれど。ちなみに、そ

のアルバムは当然私も5枚購入している。

「あれ買ってくれたの？日菜ちゃんありがとう。これからもどうぞご最良にね？それで、話は変わりますが、彼女達のお披露目はいつになるんですか？」

「二週間後の日曜日を予定しています」

お披露目の予定を聞く雅。スタッフさんからの回答は信じられない内容だった。2週間？あまりにも時間が短すぎる。私はなんとかなると思うけど、他の子は正直わからない。日菜ちゃんはオーディションで合格するほどだから、たぶん大丈夫だと思うけど、彩ちゃんとイブちゃんに関しては全くの未知数。無茶じゃないかと思う。

「2週間はさすがに短すぎませんか？彼女たちが演奏を覚えるには無理があると思います」

「覚える必要はありません。いえ、正確には演奏ではなく、違うことを覚えていただきます」

覚える必要が無い？言ってることが全然わからない。覚えずに、どうやって演奏するというのだろうか？

「アイドルバンドなのに、演奏を覚える必要が無い？それってどういうことですか？」

彩ちゃんが聞く。たぶん、ここにいるみんなが同じことを疑問に思っていると思う。

「みなさんには、演奏しているフリを覚えていただきます。曲自体は、プロの方に演奏し

ていただいたものをバックに流します」

演奏をしている、フリ？ 実際には演奏せず、違う音源でお客さんを騙すということ？
それって……

「演奏はフェイクということですか」

「それは、ブシドーに反します！」

「私も、ちゃんと練習してお客さんに聞いてもらった方がいいと思います」

みんなが次々に言う。当然だと思ふ。普通はそう思うはず。だけど、私は成功に近い道を選ぶ。成功に近いのは、スタッフさんの指示にしたがい、うまくなるかわからない素人の演奏を聴かせるより、確実にうまいプロの演奏を聴いてもらい、自分たちの評価を上げる。それが成功に最も近い道。普通の私ならばその道を選ぶ。普通の私ならば。だけど、それを、私たちが歌う曲が拒む。雅が作った曲を、雅をこんな客騙しに巻き込みたくない。なにより、私自身がちゃんと演奏したい。歌いたい。だからこそ、私は生まれて初めて、事務所の意向に反対する。

「……私も、できることならば、ちゃんとした演奏を聞かせたいと思います」

初めて反対意見を言うものだから、簡潔な言葉しか思い浮かばなかった。だけど、言葉なんて重要じゃない。白鷺千聖が反対したという事実が今は重要なだけだから。その証拠に、スタッフさん達は見てわかるレベルに動揺しだした。

「スタッフさん。確かに僕は楽曲を作りました。自分の成長のために、楽曲を作りました。だけど、僕はこんなニセモノの演奏を聴かせるために作ったわけではないです。自分の成長のことでしか考えていなかったとはいえ、僕も音楽家としてのプライドがある。こんな猿芝居に使われるぐらいなら、提供の話は無かったことにしていただきたいです」

「千聖さんだけじゃなく雅さんまで……す、少しお待ちください」

そして、雅からの追撃が入る。集まって慌ただしい雰囲気話し出すスタッフさん達。私達からの反対意見はよっぽど効いたみたいね。

「わ、わかりました！みなさんがおっしゃるのであれば、その方針を進めていきます！ですが、みなさんの中には、楽器未経験の方もおられます。それなのに2週間でも演奏ができるようになるのはさすがに無理があると思います。なので、最初のお披露目ステージに関してだけはプロの演奏を使わせてください。何分、延期することができないものでして……」

延期ができないのならば、仕方ないかもしれない。本当は絶対にいやだけど、完成度の低い雅の曲を聞かせるのもつといや。それならば、一度だけはと目を瞑って、次回から本物の演奏を聞かせよう。次で、プロを超えてればいいのだから。

「そういう理由ならば、仕方が無いと私は思います」

「わ、私も千聖ちゃんと同じです！」

「なるほど、これが武士の情けというものですね！」

「イヴちゃんそれは全然違うと思う。僕もそれならば仕方が無いと思います」

「あたしはちゃんと弾けるんだけどなー。ちなみに、ほかの子達は何の楽器やるの？」

「はい、今からそれを説明しますね。まず彩さん、あなたがボーカルです」

「わ、私がですか!？」

「・・・」

そして言い渡される担当。予想通り、ボーカルは彩ちゃんだった。わかってはいた、わかってはいたのだけれど、すごく悔しいし、すごく悲しい。思わず、唇を噛みしめて俯いてしまう。せめて涙だけは流さないようにと必死に堪える。

「ボーカルも、2週間後はすいませんが事前に収録したものを流します。」

収録のスケジュールは追ってお伝えしますね」

「・・・はい」

「他の方は、日菜さんがギター。千聖さんはベース。イヴさんはキーボード。ドラムは雅さんです」

他の人の担当は、涙を堪えるのに必死でよく聞こえなかった。かろうじて、自分が

ベースだということだけ聞き取れた。それだけわかれば充分。

「なんで僕がメンバーに入ってるんですか!？」

「あはは、だから冗談ですよ。ドラムの子は今探してます」

「私はベースですか。得意な楽器で安心しました。縁の下の力持ちとして、精一杯、頑張りますね!」

雅とスタッフさんが話してるけど、内容まではよくわからない。とりあえず、悔しさを撥ね退けるように大きな声で決意表明をする。うん、少しマシになった気がする。周りの声もよく聞こえるようになってきた。

「それと、今から臨時のメンバーを紹介します。大和さん! いる?」

そうスタッフに呼ばれると、事務所の奥の方から茶髪でメガネの女の子が出てきた。おそらく、この子が大和さんでしょう。

「は、はいっ! この事務所で、サポートドラムを務めている大和麻弥といいます。メンバーが見つかるまでの間ですが、よろしくお願いします!」

なるほど、サポートドラムの子なら、問題は無いと思う。そして、私が気になったのは彼女の容姿だ。実際に見てみないとわからないけれど、この子、メガネをはずしたら

化けると思う。いつそのこと、メンバーに入ってくれないかしら？

「それでは、今日はこれで解散にしますね！後日、お披露目イベントの詳しい説明を行います！お疲れさまでした！」

「お疲れさまでした。雅、せっかくだからお昼食べに行きましょ？」

「そうだね。行こうか。それじゃあみんなお疲れ様。これからよろしくね」

そして、私たちは事務所を後にした。これから始まるアイドルとしての活動。正直、まだ期待より不安の方が大きい。この、彩り豊かなメンバーで大丈夫なのかしら？ニセモノの演奏で迎えるお披露目イベント、本当に成功するのかしら。それに、確かイベントのある日って……

「そういえば雅。お披露目イベントは2週間後の日曜日って言ってたけれど、あなたその日ライブの予定じゃなかったかしら？」

「あ」

この反応を見る限り、雅本人も忘れていたみたい。そう、イベント当日は雅自身のライブがある。つまり、雅は当日いない。私の晴れ舞台、雅に見て欲しかったなっていうのもあるけれど、雅がいなくて、万が一、不測の事態に陥ることになったらと思うと不安になる。それに、私には失敗が許されない。Pastel*Palettesの失敗は、そのまま楽曲を提供した雅にも降りかかる。私だけ叩かれるならいい。でも、私の

せいで雅まで叩かれるのだけは我慢できない。そうならないようにも、絶対失敗だけは許されない。私は強く決意する。このPastel*Palettesとしての活動を、絶対成功させてみせると。雅には絶対迷惑をかけないと。私のアイドルとしてのキャリアを、華やかに彩ってみせると。そう強く決意した。

その決意が無駄になるということも知らずに・・・

第7演目 瞬く星の下で

人の心理状態とは不思議なものだ。

例えば、楽しい、この時間が続いてほしいと感じれば、急に時間が経つのが早く感じる。

だが、苦痛だ、こんな時間早く過ぎてくれ、と思えば、逆に時間が経つのが遅く感じる。

平等に、全く同じ時間を過ごしているというのに、体感時間には大きな違いが生まれる。

人の心理状態とは不思議なものだ。

何故こんな話をしているのかというと、僕が実際に同じような体験をしているからだ。

今日は、ライブ当日。ついに来てしまったと感じた。この2週間、感じていた胸騒ぎは治まるどころか、逆に強まる一方だった。この日が来るなと思えば思うほど、時が過ぎるのが早く感じる。人の心理状態とは残酷なものだ。

普段なら楽しみで楽しみで仕方ないはずのライブ。それがこんな心持ちで臨まなけ

ればいけないとは思いませんでした。

この2週間、僕はパスパレの皆とは関わっていない。もちろん、千聖とは毎日会っているが、他のメンバーとは全く会っていない。単純に忙しかったからだ。学校はもちろん、ライブの準備やら、取材などの仕事に追われる日々を送っていた。経過報告は毎日千聖から聞いていたため、現在の状況は把握している。

麻弥ちゃんが正式にメンバーになってくれたことや、やっぱり演奏の習得にはまだ時間がかかることなど、情報自体は入っている。だけど、何一つ僕を安心させてくれるような情報は入ってこなかった。顔にも出ていたのか、千聖にも心配されてしまうほど、僕は今日という日が不安だった。

何に不安を感じているのかすらわからない。この胸騒ぎの正体が全く分からない。だけど、ここまで来たならやるしかない。僕は全力でライブに臨むだけだ。パスパレのみんなを信じて、僕は僕にできることをやろう。そう決意を固めて、僕はステージの上に立った。

「みんなー！おまたせー！」

「きやー！雅様ー！」

「雅様こっち向いてー！」

ファンの子の声援が気持ちいい。熱烈なファンの子は、何故か知らないけど僕のこと

を様付けで呼ぶ。敬意を込めてくれるのはありがたいけど、ちよつと恥ずかしい。

「今日は最高の一日にしようねー！それじゃいくぞー！ミュージックスタート！」

バックバンドの人たちと共に、最初の曲の演奏に入る。歌ってる間はいい。余計なことを考えずに、集中ができる。今は不安なんかふつ飛ばして、思いつきり歌おう。後のことは、後で考えればいい。そう結論をだして、僕は歌に意識を集中した。

結論からいうと、ライブは大成功に終わった。お客さんの盛り上がりも過去最高クラス。僕も最高に楽しかった。だけど、ライブが終了すると、もうそんな気持ちは吹き飛んでいた。パスパレのことが気になって仕方ない。彼女たちは果たして、無事にイベントを乗り切れたのだろうか？控え室に戻った僕は、スマホを手取る。千聖に連絡を取るためだ。

だけど、電話をかけようかと思えばスマホの画面を見た僕は、気になる情報を見つける。着信の通知だ。それだけならまだいい。後でかけることにして、千聖を優先しただろう。それだけなら。

知らない番号からだった。見たことも無い番号からの着信だった。それだけならまだいい。それでも、千聖より優先するだけの価値が無い。それだけなら。

その同じ番号からの着信が50件以上続いていたら？ただ事では無い。そう感じた。もしかしたら、よほど大事な電話なのかもしれない。ここまできると、千聖より優先すべきなのかもしれないと悩んでしまう。どちらにかけるか悩んでいる内に、またスマホが着信を知らせてきた。番号は先ほどの見知らぬ番号だ。一体誰から？何の目的で？僕は、その電話に応えることにした。

「もしもし？」

「あ、み、雅君！やつとライブ終わった!？」

その声は、非常に聞き覚えのある声だった。Pastel*Palettesのボーカル担当に任命された少女、丸山彩ちゃんだ。なんだ、彩ちゃんだったのか、と思いつつ、僕はそれがありえないことだということに気づく。

着信履歴に残った時間がおかしい。履歴に残った時間が正しいのならば、彼女が最初に電話をかけてきたのは、イベントが始まって十数分後のことだ。ありえない。当然、イベントはそんな短時間で終わらない。ならば、イベント中に態々電話してきたというのだろうか？何故？何が目的で？

そして気になる点がもう一つ。彼女の声だ。ひどく慌てたような、それでいて震えた

ような声だ。まるで、何か良からぬことが起こって、パニックを起こしているような、そんな声。そして、それは事実だったのだと、すぐに知ることになる。

「た、大変だよ！ち、千聖ちゃんが、千聖ちゃんが倒れちゃった！」

最初、僕は彼女が何を言っているのか理解できなかつた。いや、理解したくなかつた。頭が、心が、彼女の発言を受け入れることを拒むかのように働く。しかし、そんなその場しのぎの思考放棄が長く続くわけが無い。彼女の言葉の意味を完全に理解してしまつたとき、部屋には携帯電話が落ちる音だけが虚しく鳴り響いた。

マネージャーさんに車を出してもらい、僕は急ぎ千聖が運び込まれた病院へと向かつた。病院についた時刻はすでに午後9時。千聖が運びこまれてからすでに2時間が経過している。病院の前でマネージャーさんに降ろしてもらい、急ぎ病室を目指す。そんな僕を、入り口で出迎えてくれる影があつた。彩ちゃんだつた。

「雅君……っちだよ！」

「彩ちゃん、さっそくでごめん。一体何があつたの？千聖の容態は？他のみんなの様子

は？」

「わわっ！ そんなに一気に聞かれても答えられないよ！」

それもそうだ。どうやら僕も気が動転しているようだ。到底、冷静になんてなれそうもなかった。

「雅さん。気持ちはお察ししますが、まずは少しこれでも飲んで落ち着いて下さい。説明は、自分がしますね」

必死になって冷静になろうとしていると、横から声をかけられる。麻弥ちゃんだ。麻弥ちゃんに渡された冷たい水を一気に喉に流し込む。幾分、さつきより冷静になれた気がした。

「落ち着きましたか？ では、順を追って説明していきますね」

麻弥ちゃんから受けた説明を要約すると、こうなる。イベントは最初の数分は順調にいつていた。お客さんに演奏がフェイクだと思われることもなく、このまま順調に騙しきれるかと思っていた。しかし、そうはならなかった。音が突然消えたらしい。演奏が止まったことを訝しむ観客。なんとかしなければと、必死に打開策を考える。パスペレメンバー。何か方法はないかと考えているときに、不意にステージ上で何かが倒れる音が聞こえた。千聖だった。それは千聖が倒れた音だった。急に人が倒れたことにより、混

乱が発生する会場内。その混乱に乗り、イベントは終了となったらしい。

そして、直ぐさま救急車で運ばれる千聖。病院に着き、医者に診てもらったところ、特に異常は無かつたらしい。しばらくすれば、眼を覚ますだろうとのことだ。それを聞いてほんとに安心した。正直、その一言を聞くまで生きた心地がしなかつたほどだ。そして、今もイヴちゃんと日菜ちゃん、そして、千聖の妹が千聖のことを看てくれているらしい。ついさつきまで、千聖の両親もいたらしいのだが、千聖の着替えなどを取りに一旦家に帰つたらしい。ここから千聖の家まではかなりの距離がある。日付が変わる頃までは戻つてこないかもしれない。

麻弥ちゃんから、一通りの説明を聞き終えたころ、ちようど病室までついた。

「うー……私が迎えに行つた意味があつたのかな？」

そう口にする彩ちゃん。確かに、一通りの説明は麻弥ちゃんがしてくれたため、彼女から受けた説明はほとんど無かつた。強いて挙げるならば、千聖が倒れたことによつて、なんとかしなければと思ひ、それまでパニックに陥つていたのが嘘みたいに行動できたと教えてくれたぐらいだろうか？うん、確かにあまり意味は無かつたかもしれない。

病室の扉を開ける僕。中には、静かに眠る千聖と、彼女を見守る日菜ちゃんとイヴちゃんの姿があつた。

「あ、ミヤビさん！ やつと来てくれたのですね！」

「遅いよ雅君。遅くて待ちくたびれちゃったよ！」

「ごめんごめん。これでも急いで来たんだけどね。みんなありがとう。後は僕が看てるから、みんなはもう帰って休んで。色々あつて疲れたでしょ？ それに明日も学校だし」

もちろん僕だつて学校だ。だけど、千聖がこんなことになっているのに、暢気に学校に行く気にもならない。もつとも、千聖にこのことを言えば、私のことはいいからちゃんと学校に行け、と怒られると思うけど。それでも、千聖のことが心配だから仕方ない。怒られるのはいやだけど、それも仕方ないことだと割り切ろう。

「で、でも、私も千聖ちゃんのことを心配で……」

「彩ちゃん。君の言うこともわかるよ。でも、僕にまかせてほしいんだ」

「彩さん。ここは雅さんの言うとおりにしましょう。明日学校があるのも事実ですし、みなさんお疲れなのも事実ですからね」

「そうだねー。あたしもさすがにクタクタだよ……」

「私もです……」

やっぱり、みんなお疲れのようだ。渋っている彩ちゃんも、顔には疲れがにじみ出ている。

「そうだね、ごめん……」

「何も謝ることじゃないよ。みんな、ゆっくり休んでね」

「雅さんも、千聖さんのこと、よろしくお願ひしますね」

「千聖ちゃんによろしくねー」

「ミヤビさん、後はお任せしますね!」

そう言つて病室を出て行くみんな。部屋には、僕と未だ寝たままの千聖だけが残る。千聖の様子をしてみる。寝息も穏やかで、顔色も良好。異常が無いというのは本当のことのようなのだ。素人の見た目判断だから、絶対とは言えないけれども。

「おにいさん、来ていたんですね」

千聖の様子を見てみると、背後から声がかかった。僕のことを、『おにいさん』なんて呼ぶのはこの世に一人しかいない。振り向かずとも誰なのかわかる。

「千景。久しぶりだね」

「お久しぶりですね。おにいさん」

千聖と同じ、薄黄色の綺麗な髪をツーサイドアップにしている少女。彼女の名前は白鷺千景^{ちかげ}。正真正銘、千聖の実の妹だ。現在中学3年生。彼女は、昔から僕のことをおにいさんと呼ぶ。兄のように慕ってくれるのはうれしいけど、高校生ともなると少し恥ずかしくもある。一度、呼び方を変える気は無いのか聞いてみたら、近い将来のための予行練習だと言っていた。全くもって意味がわからない。それを聞いた千聖が、顔を真っ

赤にしてた理由も正直よくわからない。彼女の手には缶のミルクティーが握られていた。おそらく、それを買うために席を外していたのだろう。

「姉さんも、折角おにいきさんが来てくれたのにまだ起きないなんて。ここは一つ、無理矢理起こしちやいませうか?」

「いや、それはやめておこうね」

彼女、基本はお淑やかなのだけど、時折発言が過激になる。倒れた実の姉を無理矢理起こそうとするとは、なんて恐ろしい。

「うっ、ううん……」

千景の行動を止めようとしてしていると、危機でも感じたのか、千聖に反応があった。千聖の眼が少しずつ開いていく。

「姉さん? 気がついたの?」

「千聖? 大丈夫?」

「千景……? 雅……?」

確認するように呟く千聖。おそらく、寝起きでまだ視界が安定していかないのだろう。

「そうだよ。千景と僕、雅だよ。千聖、何があつたか覚えてる?」

「雅……。っ!」

安心したのか、僕の名前を呼んで微笑んだ千聖。だけど、すぐに何か思い詰めたかの

ような表情に変わると、急に布団の中に包まってしまふ。どこか痛むのだろうか？

「千聖？どうしたの？どこか痛いのか？」

「大丈夫。大丈夫だから。ごめんなさい。今は、一人になりたいの……」

どこか弱々しい声で言う千聖。一体本当にどうしたというのだろうか？

「千聖？本当に大丈夫？何か悩みがあるなら」

「お願い出ていって！今は……一人にさせて……」

それは、弱々しい叫びだった。ここまで弱々しい千聖は、初めて見た。すぐく、弱々しい。だけどそれと同時に、強い意志も感じた。一人になりたいという強い意志を。

「……わかったよ、千聖。でも、何か困ったことがあるんだっいたらいつでも言つてよ？

僕はいつでも千聖の味方だからさ。行こうか。千景」

「姉さん……」

「……」

千聖は何も答えなかった。だけど、布団の中から、微かにすすり泣く声が聞こえてくる。千聖は間違いなく泣いている。理由は正直、よくわからない。だけど、今日のお披露目イベントに関係があるのは間違いないと思う。お披露目イベントの失敗。それが彼女にどのような影響を与えたのか？考えてもわからない。こんな時、人の気持ちに疎い自分の性格が嫌になる。千聖のことでさえ、わからない。

「姉さん、どうしちゃったんでしよう・・・？」

心配そうな声で言う千景。僕も、千聖が心配だ。千聖は、僕に何も言ってくれなかった。僕は、千聖にとって、その程度の存在でしか無いのだろうか？決して、悩みを相談できるような、気の許せるような存在では無いのだろうか？そうだとすると、かなりショックだ。現在、僕と千景は病室の前で立ち尽くしている。中からは、まだすすり泣く声が聞こえてくる。聞いてると、僕まで泣きたくなってくる。

「正直、僕にもわからないや。だけど、今は一人にしてあげた方がいい気がするんだ。落ち着いたら、きつと千聖も話してくれるさ。今は千聖を信じて、行こうか？」

千景と二人歩き出す。二人の心模様は曇天だ。晴れる気も全くしない。太陽が顔を覗かせるのは一体いつになるだろう？それはきつと、千聖次第だろう。千聖が笑顔になれば、僕達の心も晴れる。単純なことだけど、それが全てだ。彼女は、僕達にとっての太陽なのだから。

「おにいさんはこれからどうするんですか？」

これからどうするか、正直決めていなかった。このまま千聖が復活するのを待つか。それとも今日のところは帰って出直すか。そうだね、今日のところは帰った方がいいかもしれない。あの様子を見るに、千聖の状態はすぐに回復するとは思えない。だったら、明日にでも出直そう。

「そうだね、今日のところは帰るよ。千景は千聖のこと、よろしくね?」

「はい。おにいさんの分も精一杯がんばって姉さんを元気にしてみせますね」

「それは頼もしいね。じゃあ明日にはもう大丈夫かな? 僕の予想では、明日にはもう退院すると思うから、その後家に伺うよ。それじゃまたね」

「はい。おにいさんもお気をつけて」

そして僕は病院を後にした。千聖のことは心配だけど、千景もいることだし、たぶん大丈夫だと思う。今は、明日以降に備えて僕も帰って休もう。パスパレのお披露目イベント失敗。それは、周りからの総パッシングを意味する。多くの観衆の前で、嘘がバレた。次回から真面目に演奏するつもりだったなんて言い訳は当然通用しないだろう。

あれから少し考えてみたけど、おそらく千聖の異変もこのことが関係している。成功に最も近い道を進む千聖。その道に大きすぎる壁が現れた。あまりにも大きすぎる壁が。それが、理由なんじゃないかとは思う。確信は持てないが。まあ、考えたところで答えが出てくるわけでもない。僕は思考を一旦投げ捨てて、マネージャーさんの車に乗り込んだ。

家の前で車を降ろしてもらった僕は、ふと晩ご飯を食べていないことに気がついた。そういえば、ライブ後から色々ありすぎてすっかり忘れていた。思い出すと、急に空腹感が僕を襲ってくる。千聖の料理が食べたい。そう思いつつも、それは叶わないこと。僕は、近所のコンビニでお弁当を買ってくることにした。

そして、買ってきたお弁当を家で一人で食べる。千聖のいない晩ご飯なんていつ以来だろうか？ふと、そんな疑問が思い浮かぶが、答えは出なかった。結論から言うと、思いつけなかった。それほどまでに、二人で食べる晩ご飯が当たり前になつていた。

だけど、僕はまだしも千聖には家族がいる。一度、両親達と一緒に食べなくて大丈夫なのか聞いたことがある。その際に、千聖は顔を真っ赤にしながら、両親に近い将来のための予行練習として今のうちに慣れておけ、と言われたから気にしなくていいと言われた。正直、意味がわからない。そして今思えば、千景のおにきん呼びの理由と被る。同じ理由なのだろうか？考えてもわからない。

まあ、こんなことを考えて、何が言いたいかというと、寂しかった。ただただ、寂しかった。一人での食事っていうのは、こんなに虚しいものだったのだろうか？お弁当の味も、どこか味気ないように感じる。喪失感とでもいうのだろうか。別に、失ったわけではないのだけど、それと似たようなものを僕は感じていた。

食事を終え、部屋に戻る僕。日課であるギターの練習をしようかと思ひ、ギターに手を伸ばそうかと思ひ、その手を引つ込める。普段ではありえないことだけど、ギターを引く気になれなかつた。今日はもう寝ようかと思ふ。寝ようかと思つたけど、何故か寝付く気にもなれない。何もする気が起きなかつた。

気分転換に、風に当たろうとベランダに出てみる。心地良い風が、僕の心を撫でてくれた。

「千聖・・・」

無意識に呟いてしまった。どうやら、僕も相当参っているらしい。理由はなんとなくわかる。もちろん、千聖のことが心配なものも当然だが、それだけではない。千聖は、病院で出ていってと僕に言った。彼女とは長い付き合いになるけれど、ここまで突き放す言い方をされたのは初めてだ。そのことが、より一層僕の心に突き刺さつた。悲しかった。

ふと、空を見上げてみる。そこには、瞬かんばかりの星空が広がつていた。今日の星空は、普段よりも輝いて見える。だけど、僕の心はそれとは対照的に、暗く、厚い雲に覆われていた。明日は晴れるのだろうか？僕は、まだ見ぬ明日のことを考えて、瞬く星の下で静かに涙を流すのだった。

第8演目 ヒトリノ夜

お披露目イベント前日。

私達はこの2週間。必死に演奏の練習を行ってきた。やれるだけのことはやってきた。麻弥ちゃんを説得して、私達の正式なメンバーにも加わってもらった。だけど、演奏の習得は間に合わなかった。私と日菜ちゃん、そして麻弥ちゃんは問題ないと思う。だけど、イブちゃんと彩ちゃんに関してはまだまだもう少し時間がかかりそうな気がする。「お疲れ様でした!」

そして、前日の練習も無事終了となった。後は、本番でやれるだけのことをやるだけ。きつと最高の結果にしてみせる。

「それじゃ、私は寄るところがあるから先に帰るわね?」

「千聖ちゃんは、今日も雅君のところ?」

彩ちゃんが聞いてくる。メンバーのみんなは私と雅の関係を知っている。本当は教えるつもりなかったのだけれど、雅とのかくしつこく聞かれたものだから、つい教えてしまった。まあ、これも雅に手を出させないための牽制になったと割り切っているけれども。

「ええ、そうよ。私の日課だもの」

「私聞いたことがあります！こういうのを通い妻って言うんですよね？」

「おーイヴちゃんよく知ってるねー。正解だよ」

「い、イヴちゃん違うわよ！ひ、日菜ちゃんも嘘を教えないで！」

「いやーでも千聖さん。自分もお二人の関係を知っていると、間違っていないんじゃないかな
いかと思いますよ」

麻弥ちゃんまでそんなことを言う。通い妻と言われて、私の顔が真っ赤になっている
のが自覚できる。

「と、とにかく私は帰るわね。明日はみんな、がんばりましょうね」

「うん、千聖ちゃんががんばろうね！」

彩ちゃんの声を背に受けて、私は一人帰路につくのだった。

雅はまだ帰っていないかった。最近雅は帰ってくるのが遅い。仕事が忙しいうえに、明日はライブなのだから仕方ない。帰ってくるまでに手早く晩ご飯を作り、お風呂を沸か

せる。思い出すのはさっきのイヴちゃんが発言。通い妻と言われて、すぐドキドキした。言われてみれば、確かに同じことのような気がする。違うことと言えばなんだろう？ 籍を入れてるか入れてないか？ い、いえ、そもそも通い妻も確か、籍を入れてるとは限らなかつたはず。ということとは、違いなんて何一つないんじゃない？

「ただいまー」

そんな赤面物の思考を続けている内に雅が帰ってきた。まずい。まだ頭がこんがらがってる気がする。とりあえず雅を出迎えないと。

「おかえりなさい雅。ご飯にする？ お風呂にする？ それとも私？」

「どうしちゃったの？ 千聖？」

私は何を言っているのだろうか？ 頭がこんがらがりすぎて、思いもよらぬ発言が口から飛び出してきた。いや、確かに以前ドラマで聞いて、一度は雅に言ってみたいと思ってはいたけれど、今？ 今言うの？ せ、せめて結婚するまでは言わないでおこうと思ったのに……

急に泣きたくなってきた。

「ち、千聖？」

「い、今のは忘れてえええええ！」

恥ずかしさの限界に達した私は、とりあえず雅を風呂場に突っ込み、リビングで顔を

真つ赤にしてしばらく身悶えるのだった。

「で、千聖さっきの」

「何かあつたかしら?」

「いえ、なんでもないです」

現在、私はお風呂から出てきた雅と一緒に晩ご飯を食べている。あれから、なんとか雅が上がってくるまでに落ち着くことができた私は、必死になって今の出来事を忘れようとしていた。雅にも忘れさせないといけない。

「でもびつくりしたよ。千聖が急にあんなことを」

「雅?」

「すみません、何も僕は見ませんでした。聞きませんでした」

どうしたのだろうか? 笑顔でやめるように、柔らかに忠告したつもりなのだけれど、何故かなにかに怯えたような反応を見せる雅。まあ、忘れてくれるというのなら、どうでもいいこと。

「それはそうと、明日は雅のライブの日ね。私も行きかけたわ。チケットも買ったのだけれど、どうしようかしら？」

「そうだね。明日はお披露目イベントの日だね」

そう呟く雅。どうしたのだろう？その顔は暗い。

「雅、どうかしたの？すごく暗い顔してるけど。悩みがあるなら聞かしてよ？」

「あ、ごめん大丈夫だよ。少し、明日がライブだと思うと緊張しちゃってね。ガラにもないよね」

雅がライブに緊張。確かに珍しい。普段の雅だったら絶対、楽しみで仕方が無いと思うはず。まあ、雅のことだから、当日になれば緊張が楽しみに変わっていると思う。心配は必要ないと思う。

「そう、珍しいわね。雅がライブに緊張なんて、でも、適度な緊張はいいものだと思うわ。過不足無い緊張はいいパフォーマンスを發揮するには必須なことだって以前に聞いたことがあるわ。だから、きつと明日は大丈夫よ」

「・・・うん、そうだね。ありがとう千聖」

雅の顔を見ると、暗かった表情も幾分か和らいだ気がする。これなら明日も問題ないでしょう。私は、明日のことを思いながら、残りの晩ご飯に手を付けた。

「ただいま」

「おかえりなさい、姉さん」

家に帰った私を出迎えてくれたのは千景だった。風呂上がりなのか、体からは湯気が立っている。

「ただいま千景」

「ええ、姉さん。今日もおにいさんのお世話お疲れ様です。本当にいつも思いますけど、通い妻そのものですよね」

「か、通い妻……」

千景の発言で、忘れかけていた記憶がまた蘇ってくる。恥ずかしい。ただただ恥ずかしい。穴があつたら飛び込みたい。

「どうしました？姉さん。そんなに顔を真っ赤にして」

「あなたのせいよー！」

ふふつ、と柔らかに微笑む千景。普段は優しい自慢の妹なのだけれど、時折、こうやって雅関係のことで私にいじわるを言ってくる。この時だけは憎たらしかった。

「うー」

「ほら、姉さんもそんなに頬を膨らませないの」

「本当に誰のせいだと思ってるのよ。あ、そうだわ、千景、あなた明日予定開いてるかしら？明日雅のライブがあるのだけれど、私行けなくなってしまうって、チケットが余ってるのよ。あなた、行かないかしら？」

「本当は私が行きたい。だけど、それは叶わないこと。だったら、千景に行ってもらおう。千景だったら、譲ってもいい。素直にそう思えた。」

「ごめんなさい姉さん。明日は大事な用事が入っているので、行けません」
「そう、雅より優先するなんて、よっぽど大事なのね」

千景も、雅のファンだ。ライブにも度々足を向けているのも知っている。その千景が雅のライブに食いつかないとは正直思わなかった。よっぽど大事な用事なのだろう。

「ええ、そうなんです。Pastel*Paletteという新人アイドルユニットのお披露目イベントなんですけどね、そのグループに大切な人が入っているのです是非見に行きたいんです」

「千景、あなた……」

不意打ちだった。まさかそんなことを千景に言われるなんて。まさに不意打ちだった。

「千景、わかったわ。明日は最高のイベントにするわね！」

「ええ、楽しみにしてますね。姉さん」

これで、余計に失敗は許されなくなつた。明日は絶対成功させてみせる。そう決意を固め直した。

だけど、本当にチケットどうしようかしら？

そして、イベント当日がやってきた。

慌ただしく動くイベントスタッフさん。私達も準備を進めつつ、現状確認を行つていく。

「今日の来場者数は何人ですか？」

「現状で2万人はいるかと思いません」

スタッフさんからの返答に少し驚く。2万人。想定していた数字よりも大幅に多い。これは嬉しい誤算。それほどまでに、私や雅の集客率は高かつたということ。この2万人全員に、今日は私達のことを覚えて帰ってもらわないといけない。好印象とともに。

「につ、2万!？」

「すごい人だねえー。このお客さん全員にあたし達を信じ込ませるって、考えただけでおもしろいね?」

「アヤさん、緊張していますか?」

「ふえっ!?!あ、今ので言うこと飛んじやったかも・・・」

緊張感があるのか、無いのかよくわからないメンバー。過度の緊張は不必要な失敗を招く。他の3人は問題なさそうだけど、彩ちゃんは少し心配。少しでも緊張を解いてもらわないと。

「彩ちゃん落ち着いて。今日からあなたは生まれ変わるのよ。研究生だった彩ちゃんではなく、Pastel*Paletteのボーカル、丸山彩として、ね」

「Pastel*Paletteのボーカル丸山彩・・・うん、そうだよね!ありがとう、千聖ちゃん。私、やれる気がしてきたよ」

彩ちゃんの顔を見てみると、さっきまで堅かった表情が、少し柔らかくなった気がする。これなら大丈夫だと思う。

「Pastel*Paletteさん、まもなく出番です!準備お願いしまーす!」

さあ、いよいよ私達の出番。決して失敗はゆるされない。お客さんを騙しきれるかどうかの勝負。雅の曲を、こんなことに使ってしまうのは心苦しいけれど、今日限りのこ

とと割り切り、今はステージに集中しよう。それが、今私にできる唯一のことだと思うから。

ステージに上った私達。見渡す限りの人の群れが私達の方を見ている。普段の演劇とは違う心地良い緊張感に包まれる。

「おい見ろよ。演技派女優の白鷺千聖だけ」

「ホントだ！ホントにアイドルやるんだな」

私のことを話題に出すお客さん。やっぱり、私目当ての人も多いみたい。少し嬉しい。

「みなさーんっ！はじめましてーっ！私達、Pastel*Palettesです！略してパスパレって呼んで下さいね！私達のことをよく知ってもらうためにー、まずは一曲きいてくださいっ！しゅわりん☆どり〜みん！」

始まる演奏。さあ、ここから勝負の始まり。お客さんにもしバレたら、それは即ち私達の存亡が初日にして危うくなるということ。それだけじゃない。この曲を作った

のは雅。ということ、間接的に、雅にも影響が出てしまう。それだけは絶対に嫌。絶対に最後まで騙しきってみせる。

「これ、もしかして生演奏？」

「思ってたよりすごいな」

「この曲作ったのってあの黒城雅なんだろう？こんな曲も作れたんだな」

「だな。しかもすげーいい曲じゃん。さすが天才高校生だな」

お客さんの反応は上々。ここまでは怖いくらいに順調。でも、イベントはまだ序盤。お客さんにはもつと私達の良さを伝えないと、そう考えていたときだった。

「なんだ？音が止まったぞ？」

「機材トラブルか？」

会場に鳴り響いていた音が急に消えた。最初、何が起こったのかが理解できなかった。どうして、音が消えた？どうして、お客さんが懐疑の眼で私達のことを見ているの？

「もしかして、今までの全部口パク？」

「演奏もニセモノだったのか？」

そのお客さんの声で私はやっと理解できた。嘘がバレたのだと。

それは即ち、私達の存続が危うくなったということ。

それは即ち、私が階段から足を踏み外したということ。

それは即ち、私が雅の夢の障害になったということ。

この曲を作ってくれた雅。その作ってくれた曲をニセの演奏を聴かせるために利用した。そのことが知られば、パッシングは私達だけではなく、雅本人にも向くかもしれない。ニセの演奏を聴かせるために協力したと。

それは、世界最高の音楽家を目指す雅にとって、あつてはいけない大きな傷となる。私のせいで、雅の経歴に傷が、雅の夢に壁が。夢を追いかける雅が大好きだった。ただ、純粹に夢に向かって歩く雅を見ているのが大好きだった。だけど、私が、その壁になった。

そのことを考えた瞬間、私の意識は真っ暗になった。

「うつ、うつん・・・」

私はどうしてしまったのだろうか？寝ていたということは理解できる。だけど、それ以外のことははつきり思い出せなかった。いつ、寝てしまったのだろうか？私は寝る前何を

していたのだろうか？まだ、意識がはつきりしていないのか、よく思い出せない。

「姉さん？気がついたの？」

「千聖？大丈夫？」

「千景……？雅……？」

そんな時、聞き慣れた声が二つ聞こえてきた。まだ、寝起きで視界がはつきりしていないため、顔までは見えないけど、誰かが寝ている私の横に立っているのはわかる。

「そうだよ。千景と僕、雅だよ。千聖、何があつたか覚えてる？」

「雅……。っ！」

やっぱり雅だった。その声を聞くとすぐ安心できた。そして同時に、全てを思い出してしまった。思い出してしまふと同時に、雅の顔が見たくなくなった。いえ、これは正確ではない。正確に言うとは、顔を合わせたくなかった。申し訳なくて、ただ申し訳なくて、雅の顔を見ていられなかった。私のせいで、雅の夢が。そのことばかりが頭の中で蠢うごめいている。私は、いてもたってもいられなく、布団の中に逃げ込んだ。

「千聖？どうしたの？どこか痛いなの？」

「大丈夫。大丈夫だから。ごめんなさい。今は、一人になりたいの……」

今はただ、一人になりたかった。ただ、一人でおもいきり泣きたかった。そして、自分の気持ちを整理する時間が欲しかった。

「千聖？本当に大丈夫？何か悩みがあるなら」

「お願い出ていって！今は・・・一人にさせて・・・」

今はただ、雅の優しさが辛かった。私らしくもなく、強い言葉が出てしまった。けど、そうでもしないと、雅は出て行ってくれない気がした。真摯しんしんに、私の悩みを聞こうとしてくるはず。今はその優しさが辛かった。こんな悩み、雅に言えるわけがない。私があなたの夢を邪魔しましたなんて、どんな顔をして言えというのだろうか？だから今は、ただただ一人になりたかった。

「・・・わかったよ、千聖。でも、何か困ったことがあるんだっいたらいつでも言つてよ？僕はいつでも千聖の味方だからさ。行こうか。千景」

「姉さん・・・」

「・・・」

いつでも私の味方。雅はそう言った。でも、おそらく雅はまだ気づいていないけど、私がかもし雅の夢の障害になったとしたら、それでも雅は私の味方でいてくれるのだろうか？わからない。いつもなら、雅のことならなんでもわかるはずなのに、今はわからない。そもそも、こんなこと今まで考えもしなかった。いつまでも、雅が夢を追いかけるのを眺めていられると信じて、疑いもしなかった。

それが今、私が壁になっている。どうすればいいのか、全くわからない。だから今は

ただ、泣くことしかできなかった。零れる涙一粒一粒に、謝罪の意を込めて、ただただ泣くことしかできなかった。

どれくらいの間泣いていただろう？はつきりとした時間はわからない。ただ、雅が出て行ってからそれなりに時間が経った気がする。零れる涙はまだ止まっていない。いくら流しても、枯れ果てる気配も見せない。

「姉さん、入りますよ？」

病室の外から、声が聞こえる。千景の声だった。今は正直、誰とも会いたくなかったけれど、かといって、止める気力も今の私には残っていないかった。

「姉さん本当にどうしてしまったの？」

すぐ隣から千景の声が聞こえる。いつの間にかそんな距離まで近づいていたみたい。全く気がつかなかった。だけど、その質問にはどう答えたらいいのだろうか？正直に話す気には当然ならない。なんてことのない、ありふれた質問だけど、今の私には難関私立大学受験問題級の超難問に感じた。

「・・・千景、私は雅の隣にいてもいいのかしら？」

「急にどうしたの？姉さん」

千景の反応は至極当然のものだと思う。私だって、千景の立場で急にそんなことを言われたら同じ反応をすると思う。私が今抱えている事情を知らない限りは、誰だってそうだろう。

「ごめんなさい、今のは忘れて」

「変な姉さん。おにいさんはもう帰りましたよ？明日退院したら家までお見舞いに来るそうです。愛されてますねー。姉さん」

どうやら雅は帰ったらしい。彼には悪いことをしたと思う。だけど、本当に彼に合わせる顔がなくて、会いたくなかった。本音を言うと、明日も会いたくない。もしかしたら、明日も理由を付けて会うのを断るかもしれない。

千景は、私が雅に愛されると言った。それは、間違いないと思う。雅は確かに私のことを愛してくれている。それと同じように、私だって雅のことを愛している。けど、これからも愛されていいのだろうか？これからも愛していいのだろうか？私は、雅の夢の邪魔をしてしまった。今回が初めてのことだとしても、これから先も同じようなことが起こらないと言えるだろうか？

私はそうは思わない。もしかしたら、私が雅を愛することで、私が雅の隣にいること

で、私が雅の夢の邪魔になるかもしれない。直接的に邪魔にならなくても、間接的なきっかけになる可能性はあると思う。私は、雅と距離を開けるべきなのかも知れない。彼の夢のために。

「それじゃあ私は行きますね。そろそろ母さん達が戻ってくるかと思えますので、迎えにいってきます。姉さんは無理せず寝ていて下さいね？」

「そう言つて部屋から出て行こうとする千景。でも私には千景にも謝らなければいけないことがあつた。」

「千景、ごめんなさい。最高のイベントにするつて言ったのに、最悪のイベントにしてしまったわ。本当に、ごめんなさい」

「そう、私は確かに彼女と昨日約束した。見に来てくれる千景のためにも、最高のイベントにすると。だけど、その約束は破られることとなつてしまった。」

「姉さん気にしないで下さい。私は、姉さんが無事なら、それだけでいいですから」
「千景……」

「ありがたかつた。あんなことをしてしまつたというのに、それでも、私のことを心配してくれる。私にはもつたない妹だと思つた。」

「それじゃ、私は行きますね。母さんと父さんを連れてまた戻ってきます」

そう言って今度こそ部屋を出て行く千景。部屋には私だけが残された。一人になったのを確認すると、私は側に置いてあった自分のスマホを手に取った。そして、インターネットを開く。今日の情報を仕入れるためだった。本当は見たくない。見るのが怖い。今すぐ画面を消したい。だけど、知らないわけにもいかなかった。私の、私達の今後に関わることなのだから。

「っ!？」

そして、私の恐れていたとおりの記事が次々と出てくる。

『P a s t e l * P a l e t t e s、話題沸騰のアイドルからの急転落 詐欺師集団としての今後の活動予想』

『演技派女優白鷺千聖圧巻の演技力 プロ顔負けの演奏を演じれば、急病人の演技まで』
『黒幕は黒城雅? 業界関係者が予想するアイドル虚偽演奏事件の真相』

私はそれらの記事を見て、急いでスマホを投げ捨てる。見るに堪えなかった。私が恐れていたこと全てが現実となった。こんなことが、こんなことがあつていいのだろうか？

涙がまた勢いよくあふれ出してくる。ただただ、泣きたかった。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

私の口からは、自然と謝罪の言葉が出ていた。今の記事を見て確信した。私は真正正

銘雅の壁となつてしまった。そのことがただただ申し訳なくて、ただただ、悔しくて、一人の夜、大粒の涙を流し続けた。一人で、ただ一人で、大粒の涙を流し続けた。一人で、これからも一人で。

第9演目 夢であるように

お披露目イベントから3日が経った。

あれから、雅とは一度も顔を合わせていない。

日課の家事も行えていない。

そもそも、この3日間私は家から一步も外に出ていなかった。到底、外に出る気にならない。学校も仕事も病気を理由に休み、Pastel*Palettesとしての活動も行っていない。

彩ちゃんからのメールで知った。どうやら、Pastel*Palettesは解散せず、活動休止状態にするらしい。もつとも、私としてはどちらでもよかった。

どちらにしても、私が犯してしまった過ちは変わらないのだから。

雅に関しても、やっぱりPastel*Palettes関係のことでマスコミに日夜質問攻めにされているらしい。これも、彩ちゃんからのメールで知った。

雅は何も教えてくれない。メールは来るのだけでも、全て私を心配する内容ばかり。自分のことは教えてくれない。とは言っても、度々、心配して家まで来てくれる雅を、千景に頼んで帰るようにお願いしてる私が、そんな雅のことを悪く言えるわけがな

い。

そもそも、今後、雅とどうやって接していくのかの答えもまだ見つけれられていない。

この3日間、必死で答えを探した。いえ、正確には違う答えを探した。私の中で、一つの答えはすでに出ている。3日前の、あの日にすでに。だけど、その答えだけはいやで、絶対にいやで、違う答えを必死で探した。

答えは見つからなかった。

いくら探しても、見つからない。最終的には、全部同じ答えに辿り着く。雅の横で、彼の夢を応援し続ける私の姿はどうあがいても想像できなかった。

やっぱり、雅の夢のためには、雅とはもうなるべく関わらなすべきなのかも知れない。このまま、雅の横にいと、今回みたいなきがまた起こらないとは言い切れない。その、起こりうる未来を回避するためにも、雅から離れるべきなんだと思う。

もちろん、私が距離を開けたところで、壁が現れないとは限らない。だけど、私が側にいるよりは、幾分マシだと思う。

問題は二つ。一つは雅の家事に関して。現状では、週に1度は訪問して、まとめて行おうかと思っている。その間の食事に関しては、外食などでなんとかしてもらおう。

そして、もう一つ。私の想い。距離を開けるといふのは、つまりそういうこと。私の想いを封じる必要がある。この3日間、答え探しと一緒に、私の気持ちを抑えるように

がんばってきた。結果は無理だった。いくら、忘れようとしても、無理だった。逆に、会わない日々が続くにつれて、想いは強まる一方。留まるところを知らない。どうやったら抑えられるのか、皆目見当もつかない。

気分転換に外に出てみるのもいいかもしれない。何か、思いがけないヒントが見つかるかもしれない。私はそう思い、立ち上がろうとしてバランスを崩してしまふ。この3日間、ろくに睡眠も食事も取つていなかったせいだ。少し足下がふらつく。ほどなくして、なんとか立ち上がることに成功した私は、そのまま外へ向かう。

「姉さん。どこに行くんです？そんなフラフラじゃ危ないですよー」

玄関までできた私を、千景が呼び止める。本来ならこの時間学校のはずだけど、確か今日は中学校の創立記念日。要するに、休みになっている。

「大丈夫よ。すぐそこまで散歩に行くだけだから。心配ないわ」

「それでも、そんなにフラついていたら危ないですよ！せめて私も一緒に歩きます」

「千景、お願い。少し一人で考える時間が欲しいの。一人で、行かせて」

「・・・わかりました。ですが、今日は夕方から雨が降ってくるそうです。早く帰ってきてくださいね」

「ええ、ありがとう千景。行ってくるわ」

千景にも相当心配をかけているらしい。それも当然かとも思う。彼女のためにも。

早く元の私に戻らないといけない。そのためにも、早く答えを見つけ出さないと。

千景は夕方から雨が降ると言っていた。現在時刻は13時過ぎ。夕方まではまだ時間がある。それまでに、ヒントが見つければいいのだけれど。私は、そんな可能性に縋すがる気持ちで、家を出た。

特に行き先も決めていない私は、早速困っていた。あまり遠出をする気にもならないし、そもそも、電車には乗りたくない。となると、歩いて行ける範囲に絞って移動することになる。適当にふらついていけば、何か見つかるかもしれない。

いつもは、何気なく歩いている街。だけど、意識して見てみると、さりげないところに、雅との思い出が刻まれている。

例えば、あのお肉屋。北沢精肉店というお店のコロッケは絶品で、いつも学校帰りに雅と買い食いしていた。食べていたコロッケを羨ましそうに見ていた子供がいたので、雅が新しいのを買ってあげていたのも懐かしい思い出。

そして、あの喫茶店。羽沢珈琲店というお店は私のお気に入り。あのお店は何を頼ん

でも美味しいからいつも鼻屑にしている。雅ともよく一緒に行った。花音と雅を初めて会わせたのもあのお店だった。あの時の花音の驚きっぷりは今でも忘れられない。見ていると本当に面白かった。

さらに、あの楽器屋。江戸川楽器店も私達の思い出の場所。小学校の時に、ギターを弾く雅に憧れて、私も楽器を弾いてみたいと思った。その際に、楽器を購入したのがあのお店だった。雅と試行錯誤して、二人で楽器を選んだのをよく覚えている。最終的に購入したのが、一つのベースだった。

選んだ理由は、雅に聞いた説明。雅は、楽器一つ一つの特徴を説明してくれたのだけれど、ベースの時にしてくれた説明を聞いて、私はこれしか無いと思った。ベースは、縁の下の力持ち。周りの楽器を支える、重要な楽器。

楽器を購入した後に、子供ながらに、いつか雅のことも支えてあげるなんて言ったことも覚えている。

その後二人で、思い切り笑ったのも懐かしい。

見渡してみれば、この街には本当にたくさんさんの雅との思い出が詰まっている。思い出巡りをするのも悪くはないかもしれない。私はそう思い立つと、早速行動に移した。まずは、あのテレビ局に行ってみよう。私と雅の始まりの場所へ。

テレビ局は、歩いて20分ほどの場所にあった。今の私には、その距離も遠く感じたけれど、少しでもヒントになればと思い、足を伸ばした。相変わらず、人の出入りが多い。その中には当然、知っている顔も多い。テレビ等で見た顔。実際に共演したことがある人。お世話になっていているテレビ局の関係者の方。私はそんな人たちになるべく見つからないように、遠目にテレビ局を眺めていた。

忘れるはずも無い。私と雅が初めて出会った場所。ここから全てが始まった。私の真の人生が始まった場所とも言える。初めて会ったのは、局内にある一つのスタジオオだった。そこで撮影されていた番組、その番組で共演した雅のことが気になった私は、偶然にもテレビ局外で雅と遭遇する。

あの時私は、本当に運命的なものを感じた。普段は占いだとか、運命だとか、そういった類いのものは一切信じないのだけれど、その時だけは別だった。そして、今でもそれは間違いでは無かったと思っている。よく、結婚する相手のことを運命の人と例える人がある。それは正しいと、今なら言える。

「あら？もしかして千聖ちゃんじゃない？」

不意に、後ろから声がかけられた。振り返ると、そこには妙齡の女性の姿があつた。その姿は見間違えるはずがない。芸能界の大御所に数えられるほどの人物。今でも、数多くのレギュラー番組で、司会を務めている名司会者。私と雅が出会つた番組、あの番組の司会を務めていた方でもある。

「お久しぶりじゃない。元気にしてた?」

「ご無沙汰しております。お陰様で元気に過ごしております」

「あらあら、そんなに畏まらなくてもいいわよ。あなたのことは私、娘みたいに思っているからね」

あの番組以来、本当にこの方にはお世話になつた。いつも相談に乗ってください、困っていることがあるといつも助けてくれた。私も、この方のことは芸能界での親のよう思っている。

「今日は雅君は一緒じゃないの?」

「いつも、一緒にいるわけではありませんから」

この方は、いつも雅とのことをよく聞いてくる。まあ、よく相談していた内容が雅関係のことが多かったから、そこから私達のことをバレてもおかしくないけど。

「あらあら、ふて腐れちゃつて、その様子だと、喧嘩でもしたかしら?・・・いえ、見たところもつと複雑な事情みたいね。そんなにやつれちゃつて、フアンの子が見たら卒倒

しちやうわよ?」

「よ、余計なお世話です」

芸能界という荒波の中で、頂点に近い位置に長年座り続けるだけあって、この方の洞察力は凄いの一言に尽きる。こと、人の心情を見抜く目に関しては、芸能界でもトップとの呼び声も高い。この方の前では、隠し事なんて不可能だとも言われているほど。おそらく、私の考えていることも既に見当が付いていると思う。

「そういえば、懐かしいわね。この局の入り口。あのあたりだったかしら?」
「何がでしょうか?」

不意に、局前の一点を指さす。その方向を見てみると、非常に見覚えのある地点だった。確かに見覚えがある。だけど、あの時のことは、私と雅しか知らないはず。この方にも言った覚えが無い。

「懐かしいわね。あなたと雅君が初めてお話した場所よね。違ったかしら?」
「な、なんでそのことを知っているんです?」

素直に驚いた。あの時のことを知っている人がいたなんて。あの番組で初めて共演したことを知ってる人は今までも数人いた。だけど、初めて話した時のことを知ってる人は初めてだった。

「もちろん、見ていたからに決まってるじゃない。ほんと、青春よねー。若いって羨まし

いわ」

「そ、そんなことは。でも、まさか見られていたとは驚きました」

まさか本当に見てた人がいたとは驚いた。全く当時気づかなかつた。いえ、そもそもあの時、私は雅と話すことに夢中で、周りのことなんて全く見えていなかった。誰かに見られていても、気づくわけがなかつた。

「本当に夢中で、楽しそうにお話してたものね。気づかないのも当然だわ。あの時から、あなた達二人は本当に仲が良かったわよね。あなた達は知らないと思うけど、業界でも有名だったのよ？あなた達の仲の良さ。まあ、今でも変わらず有名だけれどもね。まるで、長年寄り添い合つたおしどり夫婦みたいだ、つて言う連中もいるほどなもの」

「お、おお、おしどり夫婦……」

その言葉を聞いた瞬間、私の顔が真っ赤になったのを自覚できた。そもそも、業界でも私達の仲が有名になってるなんて初耳だった。恥ずかしいけど、少しうれしくもある。だけど、同時に辛くなる。私があつたのは雅への想いを捨てるため。そのヒント探し。なのに、余計想いが強まってしまっている。これじゃ本末転倒もいいところ。「あらあら、まだまだ初心つぶね。そう、あなた達は仲がいい。良すぎるほどにね。そんなあなた達だからこそ、別離は似合わないわ」

「え？」

そして、そんな時に言われたその一言に、驚愕が隠しきれなかった。まさか、そこまで読まれるなんて。

「あなた達の現状は私も知っているわ。だからこそ読めるわよ。あなたの考えなんて。大方、雅君の夢の邪魔をしてしまった。私がこの先も、雅君に親密に関わっていると、また同じように壁になってしまいかもしれない。それだけは絶対にいや。だからこそ、自分の気持ちを押し殺して、雅君から離れる。なんて考えてるんでしょ？」

「・・・」

私は言葉を失ってしまった。その洞察力はさすがの一言に尽きた。まさか、情報を知っているだけでそこまで看破されるなんて思いも寄らなかつた。一種の恐怖すら感じさせる。

「仮に、あなたはそれでいいとしましょう。それで、一方的に切られる雅君の気持ちはどうなるのかしら？ちゃんと考えたの？」

「・・・雅に取ってもこれが最善の道なはずです。私もちゃんと考えています。そうならないための、違う道だつてちゃんと考えています。それでも、これ以外の道が見つからないんです。すみません。長居しました。私はこれで失礼します」

そう言つて、その場を離れる私。誰の目から見てもわかる。私は逃げた。この場にいると、私は甘い蜜に縋つてしまう。そんな予感がした。だからこそ、逃げた。

「まあ、私の仕事はここまでかしらね。後はしつかりやりなさい」

そんな言葉が後ろから聞こえてくる。言われなくても、私は自分が信じる最善を目指して、しつかりとやりきってみせる。次はどこに行こうかと考える。そうだ、あの病院に行ってみよう。あの病院も、私達にとって、重要な思い出の場所だから。

その病院は、テレビ局と雅の家のちようど中間ぐらいいにあった。この街では一番大きな総合病院。そこが、私達の思い出の場所。中学一年生の時に、無理をした雅が運び込まれたのがこの病院。あの時は本当にお世話になった。この病院での、あの時の出来事のお陰で、私と雅の距離は急激に近づいた。私と雅との物語を語る上で、絶対に外せない場所。

「あれ？もしかして千聖ちゃん？」

私は、その言葉にデジャブを感じた。確か、先ほどのテレビ局でも似た場面に遭遇した。見つからないように、離れた位置にいるというのに、どうしてこうも知っている人に見つかるのだろうか？今日に限って運が無いみたい。

そして、振り返ると案の定知っている顔が合った。看護師さんだった。制服に身を包んだ、綺麗な女性の看護師さんがそこにいた。この人にも本当にお世話になった。雅が運ばれたときに、彼の担当をしてくれたのがこの看護師さんだった。よく気が利いて、患者第一を信条に掲げる、看護師の鑑とも言えるような人。あの時、泣きながら抱き合ってた私達を最初に発見した人でもある。

「こんなところでどうしたの？もしかして、うちの病院に来るところだった？」

「いえ、たまたま近くを通りかかっただけです」

「そう？それにしても顔色すごく悪いわよ？ちゃんと寝てる？ご飯食べてる？自分の体を大事にしなさいよ？」

「ええ、最近忙しかつた物ですから。ありがとうございます」

私の体調を気にかけて下さる看護師さん。確かに体調は良くない。だけど、そんなこと言ってる場合でも無い。早く答えを見つけないと、

「そういえば、雅君は元気？あの子も最近はテレビとかでしか見かけてないから、ちゃんと健康的な生活ができてるか心配だわ」

「それは心配ないです。私が保証します」

雅の食事を管理するのは私自身。もちろん、バランスには細心の注意を払っている。栄養面には、文句の付けようもないはず。と、そこまで考えて、ふと気づいた。も

し、私が食事を作らなくなったなら、どうなるんだろう？ 雅はおそらく、外食中心の食生活に変わる。果たしてそれが、健康的と言えるのだろうか？ いえ、これは今考えても仕方が無いこと。まずは、ちゃんと答えを導き出して、それから考慮しよう。

「そう？ まあ、自分の体調管理もしっかりできない子に言われても説得力ないけどね」
「そ、それは……」

「あなたが今大変な状況にあるのは、私もニュースで知ってるわ。もちろん雅君もね。それとね、今朝のニュースでも雅君出てたけど、テレビ越しに見た彼は体調万全そうだったわよ？ そんな彼が今のあなたを見たら、一体どう思うかしらね？ あなたの体は、あなた一人の物じゃないのよ？ ちゃんと周りの人のことも考えなさいよ？」

やはり、どこもかしこもニュースに取り上げられていられない。あれほどのことをしてしまっただけから、当然かとも思う。これも、私の罪が招いた結果。甘んじて受け入れるしかない。

「……わかっていきます。ありがとうございます。では、私はそろそろ行きます」
「ええ、後、雅君のことが好きなら、ちゃんと雅君のことも考えてあげなさいよ？」
「考えています。最初からずっと。誰よりも。それでは、失礼します」

そう言っただけ私はその場を立ち去る。もうそろそろ、雨が降ってきそうな気がする。結局なんの手がかりも見つからなかった。はつきり言ってしまったら、無駄骨だった。これ

なら、家に引きこもって考えていた方がマシだったかもしれない。

「うーん、意味はちよつと違うけど、これも一種の恋は盲目ってことなのかもしれないわね」

後ろからそんな声が聞こえた気がするけれど、私は気にせず足を進めた。目指すは我が家。今日はもう帰ろう。

帰るまでに間に合わなかった。夕方よりもまだ早い時間。すでに、激しい雨が降ってきていた。降ってくるまでに帰るつもりでいた私は、傘を持たずに来ていた。その結果が今の現状。私は、びしょ濡れになりながら、帰路についていた。

家までもう少し。後数分で着くという距離まできている。本来なら、数十秒の距離なのだけれど、今の私はゆっくりとした歩調でしか歩けない。体もフラつきながら、それでもなんとか前に進む。歩いて、歩いて、そして止まる。

本当は止まっている場合じゃない。私も、本来は止まるつもりなんて無かった。けど止まった。理由は公園だった。帰り道にあった公園に、私の足は束縛されていた。た

だの公園なら、こうはならなかった。だけど、その公園は、私にとって特別な場所だった。そして私は、まるで吸い寄せられるかのように、その公園へと足を向けた。

懐かしい。その公園は、あの日から何一つとして変わっていないかった。この公園は私にとって、特別な場所。私の想いに気づいた場所。

中学一年生の時、雅の両親が引越したあの日、私は雅の家を訪れた。雅と会って、別れの挨拶をしようかと思っていた私。その時に、別れの場に選んだのがこの公園だった。理由は特にない。たまたま、別れの言葉を切り出すタイミングを計って、二人並んで歩いていたときに、たまたま寄っただけ。本当にたまたま寄っただけだった。だけど、それでも、私にとってこの公園は特別な場所となった。

別れの言葉を言おうとした私。その言葉を遮って雅が言う。日本に残ることにした。と。その言葉があまりにも嬉しくて、彼に抱きつき、夢中で泣いた。その時に私は、自分の想いに気づいた。それまで私は、雅に抱いていた気持ち、ただの憧れだと思っていた。だけど違った。この気持ちは愛だった。それに気づいたのが、この場所。

今更ながらに思う。この気持ちを捨て去るのに、これ以上に相応しい場所は無いということに。始まりの場で、終焉を向かえる。なんとも、ドラマチックな話。

もしかしたら、役者ではなく、脚本家としてもやっていけるかもな、なんて考えて、自嘲じちようするように笑ってしまう。なんとも馬鹿らしい物語だこと。

だけど、これがそんな馬鹿らしい物語であつてほしいと願わずにはいられない。これが、夢であるようにと、何度願つたことか。

だけど、これは現実。その事実が変わることはない。この3日間は、悪い夢なんかではない。全て現実。むしろ、それまでの日々が幸せな夢物語だったのかもしれない。それが、今現実に戻つてきただけ。そう思うと、少しだけ自分の気持ちが楽になつたような気がした。

そろそろ、想いに決着を付けなければいけない。私は、せめて最後にと、瞳を閉じて、夢のようだったあの日々を想つた。毎日が、ただ毎日が幸せだった。雅がいる。それだけで私の心は暖かくなる。でも、その日々も終わり。

私は、そつと眼を開き、付けていたネックレスを外し、手に取つた。

このネックレスは私の誕生日に二人で買った物。アメトリンのネックレス。その石言葉は、『愛情』。私は、このネックレスをこの公園に置いていく。愛を置いていくという気持ちを込めて。

雨は未だやむ心配が無い。激しい雨が絶え間なく降り続けている。私はふと、この激しい雨が私の罪も洗い流してくれたら、こんなに悩む必要も無いのにな、なんて考えが頭を過ぎり、そんな都合の良い話があるわけないか、とまた考え直して、また自嘲気味に笑つた。

そろそろ帰らなければいけない。早く帰らないと、また千景に心配をかけてしまう。雨が降り始めてから、結構な時間が既に過ぎてている。私は、決心してネックレスを置こうとしやがもうとした。

すると、不思議な現象が起きた。あんなに激しく降っていた雨が急に止んだ。いえ、止んだわけではない。実際に、まだ周りは激しい雨が降っている。だけど、なぜか、私のいる場所だけは雨が降っていない。

何故？疑問に想った私は、上を見上げてみた。そこに答えはあつた。傘だつた。黒い傘が私に当たる雨を遮っていた。黒は好きな色。彼のことを連想するから。だけど、同時に今は見たくない色でもあつた。彼のことを連想するから。でも、何故傘が？一体誰がこの傘を？

「こんなとこで何してるの？そんなにびしょ濡れになつて、風邪引いちゃうよ！」

声は背後から聞こえた。聞き間違えるはずが無いその声。毎日、毎日、飽きることもなく聞いてきたこの中性的な声。振り返るとそこには、やっぱりいた。

今、最も、会いたくなかつた彼がそこにいた。

第10演目　そして僕にできるコト

あのお披露目イベントから3日が経った。

あれから、千聖とは一度も会っていない。会おうとは何度も思った。

実際に彼女の家まで何度も会いに行った。だけど、結局会うことは叶わなかった。

体調が悪いから会うことができないと、千景に断られるばかり。顔を見ることもできていない。

メールを送っても、返事が返ってくることは一度も無い。

なんとももどかしい日が続いていた。

あの日から、僕の方も大変だった。毎日マスコミの質問攻めにあう日々。学校どころではない。

僕はあの日以来学校を休んでいる。理由としては、マスコミのこともあるが、行く気にならなかつたというのが最大の理由だ。千聖が苦しんでいるというのに、のんびり学校に通う気になんて到底ならなかつた。

毎日、千聖が回復する方法を探す日々。千景が言うには、精神的な問題が原因らしい。具体的に、どういった問題なのか分からないと、復調は難しいだろうとも言っていた。

後は、千聖自身でなんとかするしかないらしい。

だけど、それを聞いても諦めきれず、僕は毎日回復方法を探した。結果はやっぱり見つからなかった。やっぱり、千聖に直接聞くしかないと思う。それができたら苦労しないんだけど。

だけど、方法がそれしかないのなら、やってみるしかない。僕は、千聖の家に行ってみようと思い、家を出ようとした。そして気づいた。雨が降っているということ。激しい雨だった。考え事をしていたせいで、全く気づかなかった。いつから降っていたのかもわからない。確か、お昼ご飯を食べ終わった時点ではまだ降っていなかったはずだけど。

行くか行かないか躊躇している時だった。チャイムの音が鳴り響いたのは。こんな雨の中一体誰が？チャイムの音は、よつぽど急用なのか、こちらを急かすように、2度、3度と連続して鳴り響く。まるでイタズラみたいだ。

「はいはい。そんな慌てなくても今出ますよ。どちら・・・様・・・？」

僕は玄関を開けて驚愕した。開けた瞬間に、誰かが飛びついてきたのだ。僕の服が、勢いよく水分を吸収していく。それだけで、その人物が現在びしょ濡れになっていることがわかる。よつぽど慌てていたのか、傘も差さずに来たのだろう。

そして、顔は見えないが、僕にはその人物が誰なのかがすぐにわかった。顔は見えない

くても、頭は見える。この、薄黄色のツーサイドアップ。見間違えるはずがない。

「千景？どうしたの？一体何があったの？」

そう、千景だ。僕にしがみつく千景の体は小刻みに震えている。泣いていた。千景は確かに泣いていた。そんな千景を見て、僕も段々と嫌な予感がしてくる。そして、その予感的中することとなる。

「姉さんが、姉さんが帰ってこないんです……！」

その言葉を聞いて、僕の頭に強い衝撃が走ったような気がした。千聖が帰ってこない？そもそも何故彼女は家を出たんだ？

「千景、手短に詳しい話を聞かせてくれる？」

僕は、出かける準備をしながら、千景に事情を聞くことにした。

千景が言うには、千聖は雨が降る前、昼過ぎに出かけたらしい。最初は、心配した千景も一緒に行こうとしたのだけれど、千聖に一人で考える時間が欲しいからと断られたらしい。せめてもの譲歩として、今日は夕方から雨が降ってくるから早く帰るように

言ったのだけれど、未だに帰ってこない。そして、慌てて僕の家に助けを求めにきたらしい。

僕は現在、傘を片手に千聖の捜索を行っている。千景は先に家まで送っていった。もし、探してる内に千聖が帰ってきてもいいようにだ。そして僕は、テレビ局まで足を運んでいた。

特にここに探しに来た理由は無い。当てもなく、手当たり次第に探していたら、たまにここに来たただけだ。

「お久しぶりね、雅君。そろそろ来る頃だと思っていたわ」

そして、この方と出会ったのも本当にたまたまだ。知る人ぞ知る名司会者。芸能界の大御所の一角であるこの方。どうやら僕が来るのを予知していたらしい。恐ろしすぎる。

「お久しぶりです。まるで、僕がここに来るのがわかっていたみたいですね」

「ええ、わかっていたわ。そのために、わざわざこんな雨の中、外で待っていたんですもの。目的は千聖ちゃんでしょ？彼女ならあつちの方向に行ったわよ」

そう言つて、ある方向を指差す大御所。本当に全てお見通しだったようだ。そして有益な情報が手に入った。どうやら、千聖はここに来たらしい。ここに来たのも無駄骨では無かったようだ。

「ありがとうございます。では、僕は急ぎますので」

「ええ、でしようね。雅君、ここからはあなたの仕事よ。後は、あなたにできることをしっかりとやりなさい。千聖ちゃんを、大切にするのよ」

「言われなくてもそのつもりです」

決意を込めた僕の言葉を聞くと、大御所さんは満足したかのように微笑みその場を後にした。本当に、あの人にはお世話になりっぱなしだ。この恩は、千聖を大切にすることですとしよう。そう改めて決意し、僕は足を動かした。

次にやってきたのは病院だった。この病院もなつかしい思い出の場所だ。千聖を探しながら、まるで思い出巡りをしているような気持ちになってくる。

「なんとなく来る気がしてたけど、やっぱり来たわね。雅君久しぶり。元気にしてた？」

そして、ここにもエスパーがいた。最近の看護師さんは予知能力でもあるのだろうか？いや、きつとこの人だけだろう。この看護師さんにも非常にお世話になった。僕が入院したときに、担当してくれたのがこの看護師さんだった。今でもたまにお世話になっ

ている。それにしても、どうしてみんな、僕の行動がわかるのだろうか？怖すぎる。

「お久しぶりです。僕が来るのがわかっていたんですか？」

「なんとなくだけどね。千聖ちゃんの様子を見てたら、なんとなくそんな気がしただけよ。千聖ちゃんならあつちに行つたわよ？早く行つてあげなさい」

そう言つて、指を指し教えてくれる看護師さん。なんとなく、千聖が近づいてる気がする。そんな予感がした。

「ありがとうございます。では、急ぎますので。それじゃ」

そう言つて、僕はその場を立ち去つた。きつと、もう少しで、彼女に辿り着ける。

「雅君！きつと、千聖ちゃんは心のどこかではあなたが来るのを待つているはずだから！千聖ちゃんのこと、大切にしなさいよ！」

その看護師さんの言葉に、僕は振り向かず、手だけを振つて応えた。振り向いてる時間をもつたない。千聖のもとまで走り抜ける。激しい雨に負けず、僕は足を前へと進めた。

いない。看護師さんに教えてもらった方向にひたすら走ったが、千聖の姿はどこにも見当たらない。看護師さんが示したのは、千聖の家がある方向だった。彼女がもうすでに帰ったのかとも考えたが、それは無いだろう。

理由としては千景の存在だ。白鷺家には、現在千景が待機している。彼女には、千聖が帰ってきたらすぐに電話してくるよう言っている。その彼女からの電話がない。千景に限って、連絡を忘れるなんてことは無いだろう。あの子は本当にしつかりした子だ。

いくら、千聖のことで、気が動転していたとしても、そんな初歩的な失敗を起こすような子じゃない。

故に、まだ千聖は帰っていない。だけど、千聖はどこにも見当たらない。段々、千聖の家が近くなってきた。このままでは、見つかる前に家に着いてしまう。まさか、途中で千聖と違う道に進んでしまったのだろうか？

僕の心に、不安が募る。そんな気持ちを押し殺して、僕はひたすら走った。走って、まだ走って、さらに走って、そして止まる。

止まるつもりなんて元々無かった。このまま、千聖の家までノンストップで駆け抜けるつもりだった。つもりだったのだが、僕の足は何か縛られるようにその動きを止めてしまった。

そこにあつたのは公園だった。懐かしい。ここも、千聖との思い出が残っている公園だ。

だが、それだけなら、僕の足はきつと止まらなかつただろう。懐かしいとは思いつつ、止まらず駆け抜けたはずだ。けどなぜか止まつてしまった。誰かに呼ばれたような気がした。何故だろう？別に声が聞こえたわけでは無い。ただ、何故か呼ばれたような気がした。僕は、自分でもよくわからない内に、まるで誰かに導かれるかのように公園の中へと足を進めた。

そこに、彼女はいた。公園の真ん中で、何をするわけでも無く、何かを大事そうに握りしめて立ち尽くしていた。その背中は、僕の知っている姿よりもかなり小さく見える。僕は、そんな彼女の背中を見て、いてもたつてもいられず、直ぐさま近づき、彼女に傘を差した。

「こんなとこで何してるの？そんなにびしょ濡れになって、風邪引いちゃうよ？」
そう声をかけると、ゆっくりこちらを振り向く彼女。振り向いた千聖の顔は、思わず目を背けてしまいたくなるほど、やつれていた。ここまで弱つていたとは、正直予想外だった。

そして千聖は、僕の姿を確認すると、逃げるかのように走り去ろうとした。その足はフラついていて、いつ倒れてもおかしくない。僕は、そんな千聖の腕を取り、自分の胸

に抱き寄せた。

「そんなフラフラな体でどこに行こうって言うの？ちゃんとご飯食べてる？睡眠取ってる？そんなんじゃない、すぐにでも倒れちゃうよ」

今の千聖の姿は、どことなくあの時の僕に似ている。別に、内面的な意味では似てないだろう。おそらく、あの時の僕が抱えいたものと、今の千聖が抱えているものは全く別種の物だ。

だが、外面的、身体的には似た状況に見える。睡眠も食事もろくに取らず、いつ倒れてもおかしくない。

「ほうっておいて！私がどうなっても、あなたには関係無いでしょ！」

「あるよー」

思わず大きな声を出してしまう。いけない。窘める側の僕まで興奮してしまつたら、説得力が無くなってしまう。だけど、それも仕方ないことだろう。それほどまでに、彼女が言った言葉は見過ごせなかった。

「あるに決まつてるでしょ！千聖の体は、君だけのものじゃ無いんだよ！千聖が倒れたら、どれだけの人が悲しむと思つてるの！千聖の両親に、千景ちゃん、パスパレのみんなに花音ちゃんや薫、もちろん僕だつてそうだ！それに、千聖だけはそれを言っちゃダメでしょ！それを千聖が言うということは、あの時の千聖を自分自身で否定することに

つながるんだよ！」

「っ！」

中学一年の時、僕は病院で千聖に暴言を浴びせた。その暴言の中には、今の千聖が言ったのと、全く同じ内容のものも含まれていた。そんな僕に、彼女が言った言葉。その言葉はすごく印象的で、今でもよく覚えていてる。

「この世に生を受けたからには、傷つくことを誰にも悲しまれない人間なんていない。そう言ったのは千聖、君自身だよ！その言葉を他でもない君自身が否定してどうする！もう一度言うよ！君が倒れたら、僕は悲しいんだ！」

「わ、私は……」

僕の胸の中で、千聖は震えている。その声も震えている。千聖は泣いていた。そんな千聖を見て、僕の目からも自然と涙が溢れてくる。

「僕は千聖が心配なんだ。ううん、僕だけじゃ無い。千景だって、パスパレのメンバーだって、みんな千聖のことが心配なんだ。教えて、千聖。一体どうしたの？何が君をそこまで追い詰めてるの？」

「そ、それは……」

千聖の口から答えは出そうにない。よほど言いたくないのか、一向に出てくる気配はない。だけど、聞き出さないわけにもいかない。そうしなければ、千聖はきつと前に進

めない。

「千聖、黙っててもわからないよ。わかっているでしょ？僕は人の気持ちに疎いんだ。千聖が考えてることなんてなんにもわからない。言ってくれなきゃわからないよ。ねえ千聖、悲しいなら言つてよ。僕も一緒に泣いてあげるからさ。嬉しいなら言つてよ。僕も一緒に笑つてあげるからさ。道に迷ったなら言つてよ。僕も一緒に悩んであげるからさ。ねえ千聖。なんでも言つてよ。僕も一緒に答えを探してあげるからさ。僕にできることなんて、たかがその程度のことだからさ」

「雅……」

千聖の声に、決意の色が浮かび上がった気がする。どうやら、ようやく言ってくれる気になったようだ。

「私は、怖い。この前のお披露目イベントの時、私達は嘘がばれた。そのせいで、私達だけじゃなくて、雅までもが罪を犯したと世間には思われている。雅、あなたの夢は世界一の音楽家。だけど、私はそんなあなたの経歴に傷をつけてしまった。私がああなたの夢の壁になってしまった。私は、怖い。このままあなたと一緒に居れば、今回だけではなく、またあなたの壁になってしまうかもしれない。それが怖くて、仕方が無いの。だから、あなたから距離を置こうかと考えた。それが、あなたの夢のために、私ができる、最良の道だと思う」

「なんだそんなことか」

「そ、そんなことって、私がどれだけ悩んで、苦しんだと思ってるの！」

僕の一言に怒ったのか、声を荒げる千聖。だけど、僕からしたら本当にその程度の悩みでしかなかった。いや、こんなのは悩むようなことでもない。答えはわかりきっているのだから。

「千聖、確かに、千聖が僕から離れることによって、僕の前に今後立ちふさがる壁は減るかも知れない。だけど、それは決してゼロにはならないっていうのは千聖も理解してるよね？もし、千聖が僕から離れて、一人で壁に立ち向かわないといけなくなった時、僕は自信をもつていえるよ。乗り越えることができなくてね。だけど、もし、千聖、君と二人だったら、例えより多く、より強靱な壁が立ち塞がっても、全てを乗り越えることができるって自信をもつて言えるよ」

「雅……」

これが僕の嘘偽り無い、心からの本音だ。千聖と二人だったら、どんな困難だって乗り越えられる。僕はそう信じている。僕個人は、数字で表すとたかが1でしかない。そんな存在が壁に向かっていっても、勝てる見込みは0だ。だけど、僕+千聖は、 ∞ の可能性があると思ってる。そんな二人の前だと、どんな壁だって太刀打ちできないだろう。

「だからこそ、言うよ。千聖、お願いだから僕から離れるなんて二度と言わないで。ずっと僕の側に居て欲しい。僕の一番近くで、僕の夢を見届けて欲しい。千聖がいないと、僕ダメみたいだからさ」

「雅……」

これならもう大丈夫だろう。千聖の迷いも消えたはずだ。そして、あんなに激しく降っていた雨も、いつのまにか止み、空には太陽が姿を現していた。雨は夕方からと言っていたのに、夕方になる前に降って、また夕方になる前に止んでしまった。当てにならない予報だ。いや、降ることには降ったのだし、当てにはなるのだろうか？

千聖の震えも止まった。どうやら落ち着いたらしい。これならもう離しても大丈夫だろう。僕は、今まで抱きしめていた千聖から少し離れた。千聖は大事そうに何かを握りしめて、静かに涙を流していた。どうやら、この前の千聖の誕生日に買ったお揃いのネックレスのようだ。僕も今同じ物を付けている。それを、大事そうに、愛おしそうに握りしめていた。

そんな彼女の顔には、笑顔が浮かんでいた。涙を流しながらも、その顔は太陽のように輝いて見えた。久々に見る彼女の笑顔だ。数日見なかっただけに、随分久々に見た気がする。まあ、これまで毎日見てきた物が、急に数日間も見れなくなったのだ。そう感じて仕方がない。僕は、この笑顔をもう無くしたくない、無くさない、と静かに決

意した。

その後、僕は千聖と一緒に帰路についていた。一緒といつても、千聖はフラフラで、歩くのも覚束ない。この体でよく今まで歩き回ったとある意味感心したほどだ。そんな彼女をこれ以上歩かせるわけにはいかない。では、どうやって一緒に帰っているのか？

「雅、大丈夫？重くないかしら？」

「大丈夫だよ。むしろ軽すぎて心配するほどなんだけど。ほんと、ちゃんと食事は取りなよ？」

僕の背中に乗っていた。所謂、おんぶだ。僕の背中に乗っている彼女は本当に軽い。本当に乗っているのかと疑問に思うほどだ。

「ふふつ、雅の背中、あつたかい」

そして、非常に機嫌がいい。甘えるかのような声が背中から聞こえてくる。普段、彼女が出すことの無いような、甘ったるい声。僕も滅多に聞いたことが無い。非常にレア

な声だ。手が使えたら録音するのに、と心の中で少し悔やむ。

「雅、本当にありがとう」

「いいよ、今の千聖を歩かせるわけにはいかないからね」

「いいえ、それもあるけど、違うの」

彼女のお礼。僕はそれが今行つてるおんぶに対するものだと思つた。けどどうやら違つたらしい。

「私は、雅が後少しでも来てくれるのが遅かつたら、取り返しの付かない選択をしてしまうところだった。雅のためと思つた選択が、雅を追い込む結果でしか無かつた。ここに来るまでに、ある人に私は、雅のことをちやんと考えてるつて言つたの。でも、実際は違つた。私は何も雅のことなんて考えてなかつた。そう思い込んでただけ。実際は、自身のことしか考えてなかつた。こんな私を、正しい選択に導いてくれて、ありがとう。そして、雅のことを考えずに、勝手に選択を選んでごめんなさい」

「何も謝ることじゃないよ。それに、千聖は千聖なりに僕のことを考えてくれてたでしょ？それで十分嬉しいよ。だから、これに関しては謝罪もお礼も無し。これでいい？」

「ふふつ、ええ。私は、雅のことならなんでもわかるつて思つてたのに、実際はそうでも無かつたみたいね。もっと雅のこと勉強するわ。雅、ここまででいいわ。もう家の前

よ」

「あ、本当だ。通り過ぎるところだったや」

僕は、すっかり千聖との会話に夢中になっていた。そのせいで千聖の家に着いたのに全く気づいていなかった。危うく通り過ぎてしまふところだった。僕は、家の前で千聖を背中から降ろした。

「雅、ありがとう。そうね、何かお礼をしなくてはいけないわね」

「だからお礼はいいよ。さつきも言ったでしょ」

「さつきのは私の選択に対するお礼の話よ。おんぶのことは別じゃないかしら？ そうだわ。雅、ちょっとだけこっちに近づいてくれる？」

「何？」

千聖に近づくように催促された僕。言われたとおりに、千聖に近づくと、僕の唇に、柔らかい何かが触れた。さらには、いつの間にか、千聖の顔が超至近距離にまで来ていた。そして離れる柔らかい感触。

「え？」

「雅、あなたのタイミングでいいから、いつでも言つて。私、待つてるわ」

そう言つて、家の中に入っていく千聖。先ほどの柔らかい感触が、千聖の唇だと気づいたのは、彼女が見えなくなった後のことだった。僕の脳が、ようやく先ほどの行為が

キスだったということを確認する。あまりにも遅い処理能力だ。まあ、フリーズ寸前まで行っていたから仕方ないのだけれど。

そして、先ほどの行為と、千聖の最後の言動を照らし合わせて、僕の中でようやく全ての答えが出た。

「なんだ。僕の片思いじゃなかったのか」

「気づくの遅すぎですよ。おにいさん」

不意に後ろから声が聞こえる。この声と、おにいさんという呼び方は間違いない。千景だ。

「千景、いちお聞くけど、見てた？」

「もちろん、最初から全部見てましたよ。お二人のことが心配で、外で待つていたら、遠目に何やら良さげな雰囲気のお二人が来たものですから、邪魔してはいけけないと思い、電柱の裏に隠れてこっそり見てました」

なんとということだろうか。これは恥ずかしすぎる。穴があつたら埋まりたい。いつそのこと埋葬してほしい。

「おにいさん。姉さんはずっと待つてるんですよ。おにいさんからあの言葉を言われるのを。姉さんは、鈍感なおにいさんとは違って、おにいさんの想いにずっと気づいていましたからね。姉さんのこと、大切にして下さいね？それでは、私は今から姉さんで遊

んできますので。姉さんのこと、本当にありがとうございました」

そう言つて、家の中に消えていく千景。この後、千聖は千景の餌食になるのだろう。僕には助けることができない。それにしても、千聖を大切にしてくださいか。今日一日で、3人に同じことをお願いされた。正直、僕はみんながなんでそんなことをお願いしてくるのかわからない。

「そんなの、お願いされなくたって、するに決まつてるじゃないか」

信用無いのだろうか？だとしたら悲しい。だったら、千聖をみんなの想像以上に大切にして、幸せに見返してやろう。そしていつか、千聖と二人でみんなに言つてあげようじゃないか。あなた達のお陰で幸せになりましたと。言つてあげようじゃないか。できるかぎりの、最大限の満面の笑みとともに。僕にできる恩返しなんて、それぐらいしかないのだから。

第11演目 Re : START

清々しい朝だった。

心につつかえていた物も無くなり、素晴らしい始まりを予感させるような、清々しい朝だった。

千聖との一件から一夜が明けた。

千景からのメールによると、千聖は昨日別れた後、食事を取ってすぐに寝たらしい。その寝顔は、憑きものが落ちたかのように穏やかだったらしい。なんで千景が千聖の寝顔まで知ってるのかはわからないけど。

まあ、それはともかくとして、今日からはまた一段と忙しくなる。千聖が復活したことにより、パスパレの活動再開に向けて本格的に動くことができるようになった。今日からパスパレはまた始まる。そのために、僕もできるかぎりの協力をしよう。

リビングに入ると、すでにそこには朝食の準備をしている千聖がいた。昨日の今日で、もう来てくれたらしい。僕としてはありがたいことだけど、体調が大丈夫なのか気になってしまう。昨日あんなにフラフラしてたのに、本当にもう大丈夫なのだろうか？「おはよう千聖。もう体調は大丈夫なの？」

「おはよう雅。ええ、昨日グッスリ寝れたおかげでもう、大丈夫……夫……？」
どうしたんだろう？ 千聖の様子がおかしい。やっぱり体調は万全じゃないのだろうか？

「どうしたの千聖？ やっぱり体調が悪いんじゃない？」

「いえ、それは大丈夫なのだけれど、本当に雅なの？」

「そうだよ。雅だよ。他に誰に見えるのさ？」

「だけど、雅が一人で起きてくるなんて……」

「うん、僕が普段どう思われてるのかよくわかったよ」

ひどい。さすがに僕だつて偶には一人で起きる。いつも千聖に起こしてもらつてい
るわけではない。この3日間だつてちゃんと一人で起きたんだから、少しは見直して
欲しい。その前に一人で起きたのはいつだったか記憶に無いけど。

「ま、まあ一人で起きてくれるなら私も助かるけれど、起こしに行くまで寝ててくれても
大丈夫よ？ 雅も疲れてるでしょうし」

「それを言うなら千聖もでしょ？ 僕と違って家事までしてくれてるわけだし、少しでも
負担を減らさないと申し訳ないよ」

「気にしなくていいわよ。それに、一人で起きられると私の朝の楽しみが……」

「楽しみ？」

なんだろう？千聖の楽しみって。僕が一人で起きると都合が悪い楽しみ？すごい気になる。

「い、いえ、なんでもないので。気にしなくても大丈夫よ」

「えー、すごく気になるんだけど。教えてくれてもいいじゃん」

「ほ、本当に大したことじゃないから。み、雅が気にするようなことじゃないわ」

「えー、そう言われると余計に気になるんだけど」

「ゴホン、お二人さん。ラブラブなのはよろしいことですが、私の存在を忘れないでいただけますでしょうか？」

素直に驚いた。千聖だけしかいないと思っていたのに、急に近くから声がした。よく見ると、千聖のすぐ近くに見慣れた姿があった。並んで見ると本当によく似ている。そこには、千聖の妹、千景がいた。

「えーと、おはよう千景。いちお聞くけど、いつからここに？」

「最初からいましたよ。どうやら、おにいさんの眼には愛しの姉さんの姿しか映ってなかったみたいですけど」

「ご、ごめん千景。僕が悪かったからそのオモチャを見るような眼をやめてもらっていいかな？」

千景の眼は何やら面白いオモチャを手に入れたように輝いて見えた。これはまずい

かもしれない。千景がこういう眼をする時は、彼女の気が済むまで対象になった人物は散々いじられる。それこそ、抜け殻になるぐらいまで。そして、今回の対象はどう考えても僕だ。僕の中の危険信号が警鐘を鳴らしている。このままではまずいと。

「ち、千景。ほ、ほら私の体調はもう大丈夫だから。先に学校に行っても大丈夫よ?」

「ええ、最初は姉さんが心配で来ましたが、こんなに面白そうな状況は見過ごせないじゃないですか。昨日の姉さんも面白かったですけど、今日は二人まとめてなんて、贅沢極まりない状況ですね」

「二人まとめてって、もしかして私も対象に入ってるのかしら?」

「何を言ってるんですか? 姉さん。当たり前じゃないですか」

どうやら被害者は僕だけではなかったようだ。千聖には悪いけど、少し安心した。だけど、その千聖の顔は段々と青くなってきた。昨日もかなり千景に遊ばれたんだろう。思い出すのは昨日別れ際に千景が見せた楽しそうな笑み。その後、どうなったのかはハッキリとわからないけど、おそらく今から体験することになるのだろう。今日は無事に学校に行けるのだろうか?

「ところで、おにいさんはいつ姉さんに告白するんですか?」

あ、これは無事に行けない気がする。いきなりぶつ込んだ質問が飛んできた。

「ち、千景。その質問はさすがに・・・」

千景の質問を止めようとしてくれる千聖。だけどその視線は、何かを期待するようにチラチラッと僕と千景を行き来してる。これは頼れるのは自分だけだと思おうべきだろうか。

「ち、千景、それにね、そういうのにはちゃんとした雰囲気やタイミングってものが」「そういえばおにいさん。昨日あの後家に入ったら何故か姉さんが玄関の隅で顔を真っ赤にしてしやがみ込んでたんですよ。なんででしょうね？」

「千景!?!」

何それ? 見たかった。おそらく、昨日別れ際にした最後の行為が後になって恥ずかしくなっちゃったんだと思う。何それ? すごくかわいい。

「み、雅違うの。昨日は、そう、あの後また体調が悪くなつて、少し玄関で休んだのよ」「それに姉さんったら、自分の口元に手を当てて、『ふふつ、雅』ってニヤけながら呟いてたんですから」

「千景!?!」

よっぽど僕に知られたのが恥ずかしいのか、ワタワタと、柄にも無く赤くなつて慌てふためく千聖。ここまで慌てる千聖は見たことない。彼女の新しい一面が見れた気がして

面白い。僕は思わず吹き出してしまった。

「み、雅？わ、笑わないですよ」

「ははは、ごめんごめん」

「さて、かわいい姉さんも十分堪能しましたし次はかわいいおにいさんの番ですね」

「あ、もうこんな時間だ。早く朝ご飯食べないと遅刻しちゃうよ」

「あら、ほんとだわ。千景、早く準備済ませるわよ」

「うーん、しょうがないですね。おにいさんを堪能するのはまたの機会にしますね」

助かった。ありがとう時間。僕はこの瞬間ほど、過ぎゆく時間に感謝したことはないだろう。早く過ぎてくれたお陰で悪魔からの口撃を先送りにすることができた。後はがんばって未来の僕。君の犠牲は無駄にしない。

そういえば、千景に聞かれたいつ告白するのかという質問。これに関して僕は、すでに明確な答えを用意している。正確な日時まではまだ定かでは無いけど、タイミングに關しては決めている。両思いだとわかった以上、恐れる必要は何も無い。臆せず僕の素直な気持ちを彼女に告げるだけ。簡単なことだ。

先ほど千聖から、期待するような視線を受けた。そんな彼女には悪いけど、もう少しだけ待ってもらおう。まずは、目先の問題を解決するのが先だ。パスパレを今度こそ成功させる。その暁には、僕の求めるタイミングがやってくる。だからこそ、今日からの活動が重要になってくる。もう休んでる暇は無い。

既に僕がやることも決めている。正直、パスパレ復活のためにも最も重要な働きになると思う。責任重大だ。だけど望むところだ。やってやろうじやないか。みんなが笑っていられる最高の結末(ハッピーエンド)を目指して、突き進む。清々しい朝に、僕はそう静かに決意するのだった。

放課後になった。現在、僕は一人でテレビ局まで来ていた。別に仕事で来ているわけではない。いや、これも仕事の一環になるのだろうか？僕はここである人物と会う約束をしていた。時間にはまだ少し早い。気長に待つとしよう。

「あら？・雅君早いわね」

と、思っていたのだけれど、どうやらお互いに早かったらしい。目的の人物はすぐに来た。その人物とは、昨日もお世話になった芸能界の大御所、大木内マリさん(おおきうち)だ。今日はこの方をお願いしたいことがあった。パスパレ復活のための第一段階だ。

「マリさん。多忙の中態々呼び出してしまつてすみません」

「あらあら、そんなに畏まらなくてもいいわよ。もうアポは付けてあるわ。行きましよ

う？」

「え？」

ビツクリした。この方には僕が呼び出した理由を全く説明していない。会ってお願いしたいことがあるとしか言っていないのだけれど、すでにアポを付けてくれているらしい。確かに、僕はこの方を通じて、とある人物に会いたいと思っていた。その人物も業界では大御所にカウントされるような人物。面識が無い僕なんかが直接会いに行ってもおそらく相手にされないだろう。

だからこそ、同じ土俵に立てるこの方に仲介をお願いしようと思っていた。まさか、そこまで予想されるなんて思いもしなかったけど。

「何驚いてるの？今あなたが私にお願いしたいことなんて、それぐらいしか思い浮かばなかっただけよ。雅君なら、絶対千聖ちゃんのことを前に進ませることができると信じてた。実際上手くいっただけでしょ？あなたの表情を見れば簡単にわかるわ。だったら次は千聖ちゃん達のために復活の舞台を用意しようと考えはせず。ステップを踏んで考えれば簡単にわかることよ。だから、もう昨日のうちにアポは取っておいたわ。後はあなた次第よ」

一般人の僕には何が簡単なのか全く理解ができない。これは僕の理解力が無いだけなんだろうか？何にせよ、人の心情に疎い僕からすれば、この人の心理的先見性は異次

元の領域に入っている。

「さあ行きましょう。彼もこの局に来ているわ」

そう言って歩き出すマリさん。僕はその後ろをついていく。これから会う人物は業界の大家。そんな人物を前に僕は重要な頼み事をしなければいけない。なんだか緊張してきた。だけど、臆してはいけない。臆したり、退いてしまったりしたら、おそらく僕の頼み事は受け入れてもらえない。そうなると、パスパレ復活の望みも薄くなってしまう。

それだけはダメだ。今朝も言った通り、僕の働きがパスパレ復活のために最も重要になる。ここからが大一番。運命の大勝負がもうすぐ始まる。

やってきたのは局内にある喫茶店だった。その人物はそこにいた。一目でわかる。室内であるにもかかわらず、頭に乗つけたテンガロンハットと、顎下に伸ばした髭が特徴の人物。名前は早乙女仁さおとめじん。アイドルという分野において、数多くの実績を残してきた音楽プロデューサーだ。

「仁ちゃん来たわよ。待たせちゃったかしら？」

「いいや、マリー。たった今来たところさ。で、そっちのボーイがミーにリクエストがあるっていう？」

「お初にお目にかかります。シンガーソングライターをしています黒城雅です。今日は早乙女さんにどうしてもお願いしたいことがあって、ご多忙の中お時間をいただきました」

「OKボーイ。堅苦しいのはナツシングだ。それで、ミヤツビー。ミーに何をリクエストしたい？」

「さあ、ここからだ。ここからの僕次第で全てが決まる。失敗は許されない。苦手分野だとか、慣れないことだとか、そういったことは一切言い訳できない。やるしかないんだ。」

「単刀直入に言います。あなたが手がけるイベントに、とあるアイドルグループを参加させて下さい」

早乙女さんは、数多くのアイドルを手がけてきた音楽プロデューサーだ。その活動内容は、アイドルの育成だけではなく、アイドル主体のイベントの運営にまでも伸びる。そんな彼だからこそ頼めるお願い。パスパレをそのイベントに参加させてほしい。もし、彼が手がけるイベントでパスパレが認められたならば、一発で今までの悪い空気を

吹き飛ばすことだって可能だ。それほどまでに、早乙女仁というネームバリューは大きい。

「やつぱりね。一応聞こう。そのグループのネームは？」

「Pastel*Paletteです」

「だろうね。アンダースタン。ではミヤツビー。教えてくれ。そのリクエストを受けて、ミーにどんなメリットがある？」

メリット。間違いなく聞かれるだろうとはわかっていた。だからこそ、僕はこれに対する答えも用意している。

「そんなもの、ありません」

「ほう？」

メリットなんてあるわけがない。この頼みを聞き入れるということは、ハイリスクローリターンだ。いや、ハイリターンになる可能性もある。だけど、リスクが高いのは変わりない。今のパスペレは言うならば爆弾みたいなものだ。それを抱え込むということは、自爆行為に等しい。

だけど、もし、もしもその爆弾が爆発しなかった場合、それは大きなリターンにもつながる。観客の爆発によって。パスペレはビジュアル面は当然として、演奏技術も高い。

千聖は当然として、ドラムの麻弥ちゃんは事務所のサポートドラムを務めるだけあって、その技術は優秀だ。日菜ちゃんも、その天才性で、僕の作った曲を全て短時間で完璧に弾けるようになってしまった。イヴちゃんだって、持ち前のガッツで、平均以上の演奏技術が身についた。彩ちゃんに関しては、愛嬌があつていいと思う。

そんな彼女たちが、もしお客さんに受け入れられたとしたら、それは大きなリターンになるだろう。問題の *Paste*Palettes* は実はすごかった。それを誰よりも早く受け入れた早乙女仁はやはりアイドルという分野では右に出る物はいない。そうみんな思うだろう。

「なるほどね。ノーメリットかつハイリスクローリターンか。ミヤツビー、ユーが言いたいことはわかった。だが、それをミーが受けると思うかい？」

「受けてもらいます。なんとしても」

僕は、人の心情に疎い。それは、交渉術などの、話術が下手だということにつながる。ならば、せめて自分の想いを包み隠さず、隠し事一切無しで、真つ正面からぶつかる。それぐらいしか、受け入れてもらえる可能性はないと思うから。

「受けてもらいます、か。正直、今の時点ではなんのチャームも感じない。ミヤツビーは、何かミーを振り向かせるアイデアを持つてるのかい？」

「そんなもの持つてないですし、存在しないとも思ってます。それでも、絶対に受け入れ

てもらわないといけないんです」

「強情こころじょうだな。では、もう一つ聞こう。ミヤツビー、ユーのドリームは知っている。目標として、いるパーソンのことも当然知っている。そのロードは険しいロードだ。生半可な覚悟や努力じゃ到達できない。ミヤツビー、ユーがこのPastel*Palettesのために、そこまでするのはユーのドリームのためかい？」

「夢のため。確かにそれもあるのかもしれない。無いとは言い切れない。だけど、夢よりも僕を動かす原動力が今はあった。」

「夢のため。確かにそれもあります。ですけど、今の僕にはそれよりも大事な原動力があります」

「ほう？ユーがドリームよりも大事と言うとは。で、それはなんなんだい？」

「愛です」

「パスパレのメンバーはもちろん大事だ。Pastel*Palettesというグループはもちろん大事だ。だけど、僕が一番の原動力はそれらじゃない。白鷺千聖という、一人の少女に対する愛。それが今、僕の原動力になっている。自分勝手だと思われるかもしれない。だけど、僕は決めていた。この場では一切隠し事しないと。それが、今僕にできる最善の選択だと思うから。」

「ラブ？ドリームよりラブをチョイスすると？あのユーが？・・・ふっ、ふふふ、ははっ、

あーははははは！そうか！そうか！そうか！ラブか！ドリームよりラブか！それは面白いー！」

「ふふつ、バカ正直な答えね雅君。でも、嫌いじゃないわ。仁ちゃん、そろそろいいんじゃない？」

「ははつ、そうだな。いやー数年分笑った気分だ」

「そろそろ？」

「雅君。仁ちゃんわね、最初からこのお願いを聞き入れるつもりだったのよ」

最初から聞き入れるつもりだった？それってつまり、僕の意気込みって無意味だったってことだろうか？

「無意味じゃ無いわよ。半端な覚悟しか持っていなかったら、もしかしたら仁ちゃんも気が変わってたかもしれないしね」

「ナチュラルに人の心読まないで下さい」

「ははつ、相変わらずマリーの読心術は恐ろしいねー。そもそも、ミーが受け入れるつもりだったってことも話してないんだが？」

え？なにそれ本当に怖い。この人の前では隠し事が一切できないって噂、やっぱり本当なのかもしれない。

「ふふつ、年の功つてもものよ」

「ユーはミーと同年だろうか」

「え？そんなんですか？」

「ああ、そうさ。ミーとマリーは同年、そしてハイスクール時代からの腐れ縁でもある。ユーが目標としてるパーソンも含めてね」

え？あの人も？あの人の年齢と同じだとすると、今のマリーさんの年齢は

「雅君、それ以上考えたらどうなると思うかしら？」

「すみませんでした。許して下さい」

怖い！怖すぎる！顔は笑ってるけど眼が笑っていない。千聖を彷彿とさせるものがある。千聖はマリーさんのことを親みたいな存在と言っていた。間違いないと思う。この二人、本当の親子みたいに似ている。

「ははっ、マリーは相変わらずだな。まあ、それは置いておいて、ユーが目標としているパーソンには、ミーは返しきれない恩がある。こんなことで、その恩を返しきれるとは微塵も思っていないが、少しでも、ほんの少しでも、返すチャンスがあったらミーは乗っかる。ユーをヘルプするということは、そのチャンスにつながるはずだ。もちろん、ユーのことが気に入ったというのも根底にはある。だが、最大の理由はミーの自分勝手な理由だということも理解してほしい」

「大丈夫です。どんな理由があれ、受け入れてもらえただけでも嬉しいです。それに、僕

だって自分勝手な理由で動いてるわけですから、お互い様ですよ？」

「ははっ、確かにそうだ。ラバーを大切にしろよ？ボーイ」

「まだ、正確には恋人になつてませんけどね。もちろん大切にしますよ」

「OK。では、出てもらうイベントの説明をしていこう」

ようやくだ。これでようやく、再びスタートラインに立つことができた。ここからまた始まる。彼女達の歩みがまた始まる。その歩む道のりは、決して楽なものじゃないだろう。だけど、その道の先にあるのは、きつと華やかで煌びやかな最高の世界ステージのはずだ。彼女達にはそれだけのポテンシャルが秘められている。

だったら僕は、舞台を用意してあげるだけでいい。それだけで十分だ。後は彼女達から自力で最高の結果に持つて行ける。僕にはもうすでに、見えている。大歓声の中で楽しんで演奏をする彼女達の姿が。

さあ、リスタートだ。ここから彼女達の物語はまた始まる。僕は、まだ見ぬ未来ステージを描きながら、仁さんの説明に耳を傾けるのだった。

第12演目 夢の続きへ

目覚めの気分は最高だった。

悪夢の3日間から解放され、気分は快晴だった。食事を取って、おそらく19時ぐらいいは夢の中に入ったはずが、現在の時刻はすでに朝5時半。私がいとも起床する時間になっている。ここまでぐっすり寝たのは生まれて初めてかもしれない。おかげで、体が少し重い。

だけど、早く家を出ないといけない。少しでも早く雅の家に行つて、溜まった洗濯物などを片付けないと。私は、倦怠感に包まれる体に鞭を打つて、急ぎ着替えを済ませ部屋を出る。

「姉さん無理はしちやダメですよ」

そして、いざ家を出ようかと思つた矢先に、私に話しかける声が聞こえてきた。振り返つてみると、そこにはすでに登校の準備を済ませた千景がいた。その姿に少し疑問を抱く。いつもならば、この時間千景はまだ夢の中にいる。その彼女が、起きてるどころか出かける準備まで済ませている。それに、疑問を抱かないわけがない。

「どうかしたの千景？こんな時間におきてるなんて、怖い夢でも見たのかしら？」

「そんな子供じゃないんですから。ただ、姉さんのことが心配だったので、私もついこのうかと。どうせ、無茶をしないように止めても無駄でしょうし。だったら、私もお手伝いして、少しでも負担を減らしますよ」

私のことを心配してくれる千景。本当は、体調も悪くないし一人でも大丈夫だと思うけれど、おそらく千景は手伝うと言つて譲らない。だったら、たまには手伝つてもらうのもいいかもしれない。今日は、いつもよりやる人が多いでしょうし。

「わかつたわ。お願いするわね、千景」

「はい。あ、私にかまわず二人だけのあまーい時間を過ごしていただいて大丈夫ですからね」

あ、これはやつぱりダメかもしれない。この子は置いていく方がいいかもしれない。蘇るのは昨日の恥ずかしい記憶。ダメ、思い出すだけで顔が真っ赤になりそう。

「千景、やつぱり私だけで大丈夫よ。あなたは家でおとなしく」

「さあ姉さん、時間は有限です。急ぎますよ」

「ちよつと、千景、私の話を聞きなさい、ちよつと、引つ張らないで」

千景がついてくるのを止めようとした私だったが、その発言は千景に阻止されてしまふ。それどころか、千景に手を引つ張られて連れて行かれてしまふ。今なら少し仔牛の気持ちができる気がする。そもそも、この子は私の体調を心配してくれてたはず。そ

れなのに、私を無理矢理引つ張つて、これでは余計に体調が悪くなってしまう。元々悪くないけれども。

まあ、たぶんこの子のことだから、私の体調よりも、私と雅で遊ぶことの方が重要なんだと思う。そう思うと、少し泣けてくる爽やかな朝だった。

「では、二人の愛の巢にお邪魔しますね」

「まだ住んでるわけじゃないわよ」

結局私は、そのまま引つ張られて雅の家まで来た。3日間来なかつただけだというのに、何故か久しぶりに来た気分になってしまう。それまでは、雨の日も風の日も、毎日通っていたのだからそれも仕方ないことだと思う。

「いや、でも実際同じようなものだと思いますよ？家に帰ってくるのなんて寝るためみたいなものじゃないですか」

確かに、私が自分の家に帰るのは遅い。特に、パスパレとしての活動を始めてからは、いつも雅にベースの練習を見てもらっていたからさらに遅くなっていた。そんな遅く

に、女一人で帰るのは危険だと思う人がいるかもしれない。

「ただ、私は決して一人で帰ってるわけではない。いつも、雅が家まで送ってくれている。中学一年生の時に、家事を初めて以来毎日の恒例になっている。」

「そうね、確かに最近はそうだったかもしれないわね」

「ええ、そうですよ。だからもう、新婚生活と変わらないんじゃないですか？」

「し、新婚生活？私と、雅が？た、確かに将来的にはそういう日が来ることを毎日のように夢に見ていたけれど、私達はまだ学生。し、新婚だなんてそんなこと考えるには少し早すぎる。」

「それに、父さんと母さんなんて、もうすでに孫の名前を考えてますよ？早く孫の名前が見たいっていつも言ってますから」

「ま、孫？それってつまり、私と雅のこ、子供？た、確かに将来結婚した暁には、そういう日も間違いなくやってくる。私的には、女の子と男の子一人ずつ欲しいと思ってる。でも、これは私の個人的意見。もし、雅が望むなら何人でも、つて私は何を考えるのだろうか。私達はまだ学生。学生のうちからこういうことを考えるのは早すぎる。」

「でも、将来的には間違いなくそういう日がやってくる。早い内から将来設計を建てておくのも決して悪い話じゃない。当然、子供のこともその中に含まれる。でも、そもそも、子供を作るといふことは、つまり、その、雅と、そういうことをするといふことで、

つまり、その、

「ふみゆう」

「え？ちよつと姉さん!？」

私は、そのまま思考がオーバーヒートしてしまい、そこで意識がシャットダウンした。後に千景から聞いた話によると、その時の私はリングが真つ青に見えるほどに顔が真つ赤になっていたらしい。

「う、うーん。．．．あら？私、どうしたのかしら？」

「あ、姉さんやつと気がつきましたか」

「どうやら、私は家事の途中で寝てしまっていたらしい。寝る前の記憶が思い出せない。私は一体どうしてしまったのだろうか？」

「姉さんが急に気を失うからビックリしちゃいましたよ。まあ、理由はなんとなくわかりませんが。姉さんが倒れて大体30分ぐらいですね。洗濯の方は大体終わりましたよ？さあ、朝ご飯を作りましょう」

「どうやら、私は30分も時間を無駄にしてみました。遅れた時間を取り戻さない。私は起き上がると直ぐさま朝食作りに取りかかった。千景と協力して作っていく。千景の家事スキルは、私が思っていたよりも高かった。いつの間にかこんなスキルを。」

「私も、姉さんみたいに運命の人に出会える日を夢見て、ちゃんと家事の勉強してるんですよ?」

「そういえば、千景は来年高校受験だけど、その志望校は私が通う花女ではなく、雅が通う花高になっていた。千景の学力なら、もつと上の高校を目指せるはずなのに、花高を選んだ理由、それが運命の人に出会うためらしい。」

「花高の生徒は、男女比が男の方が割合が多い。およそ8割は男子が通っている。そんな高校に進学することによって、運命の人に出会える確率を高めるらしい。将来、悪い男に捕まらないか心配になる。」

「姉さん、お味噌汁の味付けはこの程度でいいですか?」

「そうね、雅は、もう少し濃いめの方が好きだから、お願いできるかしら?」

「了解です」

「そうやって、二人で手際よく朝食を作っていく。たまには、こうやって誰かと料理するのも悪くない。なんだか、楽しくなってきた。」

料理が完成に近づいてきた頃、背後から誰かの足音がした。振り返ってみると、そこにはこの家の住人、雅がいた。

「おはよう千聖。もう体調は大丈夫なの？」

「おはよう雅。ええ、昨日グツスリ寝れたおかげでもう、大丈夫……夫……？」

「だけど、よくよく考えるとそれはおかしい。雅が今ここにいるということは、起こしにいかずとも一人で起きてきたということ。あの寝ぼすけ雅が？」

「どうしたの千聖？ やっぱり体調が悪いんじゃない？」

「いえ、それは大丈夫なのだけれど、本当に雅なの？」

「そうだよ。雅だよ。他に誰に見えるのさ？」

「だけど、雅が一人で起きてくるなんて……」

「うん、僕が普段どう思われてるのかよくわかったよ」

少し残念そうな表情をする雅。でも、事実だから仕方ないと思う。だけど、雅が一人で起きてくるということは、私の毎朝の楽しみが無くなるということ。雅の寝顔を眺めるといふ私の楽しみが。

「ま、まあ一人で起きてくれるなら私も助かるけれど、起こしに行くまで寝ててくれても大丈夫よ？ 雅も疲れてるでしょうし」

「それを言うなら千聖もでしょ？ 僕と違って家事までしてくれてるわけだし、少しでも

負担を減らさないと申し訳ないよ」

「気にしなくていいわよ。それに、一人で起きられると私の朝の楽しみが・・・」

「楽しみ?」

しまった。思わず口が滑ってしまった。雅が一人で起きてくるのを阻止したいあまり、つい言ってしまった。

「い、いえ、なんでもないの。気にしなくても大丈夫よ」

「えー、すごく気になるんだけど。教えてくれてもいいじゃん」

「ほ、本当に大したことじゃないから。み、雅が気にするようなことじゃないわ」

「えー、そう言われると余計に気になるんだけど」

「ゴホン、お二人さん。ラブラブなのはよろしいことですが、私の存在を忘れないでいただけますでしょうか?」

どうやって雅をごまかすかと考えていたときに、思わぬ助け船が入った。そういえば、千景がいたのをすっかり忘れてしまっていた。なんだか、この後のことを考えると無性に嫌な予感がするけれども、今は助かったから大目に見ることにする。

「えーと、おはよう千景。いちお聞くけど、いつからそこに?」

「最初からいましたよ。どうやら、おにいさんの眼には愛しの姉さんの姿しか映ってなかったみたいですけど」

「ご、ごめん千景。僕が悪かったからそのオモチャを見るような眼をやめてもらっていないかな？」

あ、これはダメね。千景の眼を見ればわかる。彼女がこういう眼をする時は、彼女の気が済むまで対象になった人物はいじり倒される。昨日被害にあった時は、本当にひどい目にあつた。救いなのは、今日の対象が私ではないこと。本当に助かつた。さすがに、

連日であんな目にはあいたくない。だけど、このままだと私にも被害が出る可能性が否めない。なんとか、千景を追い出せないだろうか？

「ち、千景。ほ、ほら私の体調はもう大丈夫だから。先に学校に行つても大丈夫よ？」

「ええ、最初は姉さんが心配で来ましたが、こんなに面白そうな状況は見過ぎせないじゃないですか。昨日の姉さんも面白かったですけど、今日は二人まとめてなんて、贅沢極まりない状況ですね」

「二人まとめてつて、もしかして私も対象に入つてるのかしら？」

「何を言つてるんですか？ 姉さん。当たり前じゃないですか」

その言葉を聞いて私は血の気が失せた。ま、まさか連日で対象になってしまうなんて。今日この後、無事に学校に行けるのかしら？

「ところで、おにいさんはいつ姉さんに告白するんですか？」

あ、行けない気がする。いきなりハードな質問が飛びだした。でも、私もその答えは気になってた。心の準備はすでにできている。いつ、言われてもいいように準備はできている。だけど、待つのもどかしい気持ちになる。できたら早く言つて欲しいと思つている私がいる。だけど、雅のタイミングでいいと言つたのは私。待つ覚悟はできてるはずだった。

「ち、千景。その質問はさすがに・・・」

そもそも、本来なら、私から気持ちさを雅に伝えるつもりは無かつた。それは、私の気持ちを知ることが雅の夢への壁になつてしまう可能性があつたから。だけど、昨日の一件で雅は言つてくれた。私と二人なら、きつとどんな壁だつて乗り越えることができる。と。

だから、私は思いきつて雅に伝えることにした。数日間雅に会わない日が続いたせいで、雅への想いがより膨らんでしまつていたのも影響し、自分の気持ちが抑えられなかつたというのもある。そして、強まつた気持ちは今も変わらない。

元々、年単位で待つつもりでいたのに、今では到底待てる気がしない。今か今かとソワソワしてる私がいる。このまままだと、私から告白してしまいそうなほどに、気持ちは膨らんでいた。だけど、決めたからには雅が言つてくれるのを待つ。待てる女は魅力的だと何かの雑誌で読んだ。だから、私は自分の気持ちを抑えて待つ。でも、タイミン

グが気になってしまふのは仕方ないことだと思ふ。

「ち、千景、それにね、そういうのにはちゃんとした雰囲気やタイミングってものが」
「そういえばおにいさん。昨日あの後家に入ったら何故か姉さんが玄関の隅で顔を真っ赤にしてしやがみ込んでたんですよ。なんででしょうね？」

「千景!?!」

え? この子は急に何を言ってるの? それを今ここで言うの? 私は顔から火が出てしまったのかと思うほど、熱くなっていた。恥ずかしすぎる。なんとかしてごまかさない
と。

「み、雅違うの。昨日は、そう、あの後また体調が悪くなって、少し玄関で休んでたのよ」
「それに姉さんだったら、自分の口元に手を当てて、『ふふつ、雅』ってニヤけながら呟いてたんですから」

「千景!?!」

この子は本当に何をしてくれてるの!?! た、確かに昨日は雅と別れてから急に自分のした行為が恥ずかしくなつて玄関で蹲つてしまつたし、雅と口づけした余韻を味わつて、すごく幸せな気持ちに浸つてたけど、それを雅の前で言うかしら!?! 私の顔は、おそらく今真っ赤になつてると思ふ。恥ずかしすぎて穴があつたら飛び込んだ上で掘り進めた
い。

そうやって、恥ずかしすぎて私が慌ててるときに、不意に吹き出す声が聞こえてきた。声の主は見なくてもわかる。

「み、雅？わ、笑わないでよ」

「ははは、ごめんごめん」

「さて、かわいい姉さんも十分堪能しましたし次はかわいいおにいさんの番ですね」

「あ、もうこんな時間だ。早く朝ご飯食べないと遅刻しちゃうよ」

「あら、ほんとだわ。千景、早く準備済ませるわよ」

「うーん、しょうがないですね。おにいさんを堪能するのはまたの機会にしますね」

助かった。これ以上は、本当に今日の学校に支障が出る事態になっていたかもしれない。努めて冷静になったように見せているけれど、内心では全く落ち着いていなかった。朝から本当に恥ずかしい目にあつた。こんなことなら、やっぱり千景を連れてくるんじやなかった。そう、少し後悔する慌ただし朝だった。

放課後になった。今日から、パスパレとしての私の活動が再開される。この3日間休

んでた分がんばらないといけない。雅は今日事務所にはこないらしい。仕事があるらしく、遅れて顔を出すかもとメールが来ていた。

本来なら私も、今日は遅れて事務所に寄るつもりだった。というのも、今日はパスパレが参加することができそうなイベントは無いか探そうと考えていた。だけど、雅に今日は真つ直ぐ事務所に顔を出して欲しいと頼まれた。

パスパレのメンバーも心配してるから、早く顔を見せてあげて欲しいらしい。それも当然かと思う。確かに、この数日間で本当に皆には心配と迷惑をかけたと思う。本当に申し訳なく思う。少しでも早く顔を出して、みんなを安心させてあげよう。

「お疲れ様です」

「あ、チサトさん！」

事務所に入って最初に見かけたのはイヴちゃんだった。私を確認するなり、いきなりハグをしてくる。少し苦しい。

「チサトさん！体調はもう大丈夫なのですか？」

「ええ、もう大丈夫よ。心配かけてごめんなさいね」

「本当だよー。彩ちゃんなんてここのところ毎日100回ぐらいは千聖ちゃんの名前出してたもんねー」

「そ、そこまで言っていないよっ！」

「いやー、でもそれぐらい言つてたと自分も思いますよ。何かある度に千聖さんの名前を呟いてましたからね」

「だ、だって、本当に心配だったんだから仕方ないよっ!」

イウちゃんの後ろから声が聞こえる。声の主は見なくてもわかる。日菜ちゃん、彩ちゃん、麻弥ちゃん、そこにはPastel*Palettesのメンバーみんなが揃っていた。みんなより早く来たつもりだったが、どうやら私が一番最後だったらしい。

「みんな、本当にごめんなさい。心配と迷惑をかけたわね。この分は、これからの仕事で返すわ」

「千聖ちゃん・・・うん!頑張ろうね!」

「ところで、彩ちゃんはちゃんと歌えるようになったの?」

「うっ、が、がんばって練習してるんだけど、なんだか上手くないかなくて・・・」

「あまりのんびりしていると、私がボーカルの椅子取っちゃうわよ?」

「えー!それは絶対ダメだよっ!」

「ふっ、冗談よ」

何気ないみんなとの会話が楽しい。何気ないこの時間が愛おしい。この場所を失いたくない。このメンバーでもっと高みを目指したい。このメンバーで、あの日見るはず

だった夢の続きを見てみたい。そのためにも、今は私にできることを全力でやろう。

「さあみんな、レッスンしましょ？遅れた分を取り戻すわ」

「そうですね。そろそろ時間ですし、スタジオに行きましょうか」

麻弥ちゃんの発言に続いてみんな部屋を出て行く。私も、気合いを入れてがんばろう。楽器というのは、毎日触らないと感覚が鈍ってしまう。いつもはなんの問題も無くできる演奏が、数日楽器に触れなければできなくなってしまうなんてこともよくある。

私は数日間楽器から離れてしまった。早くこの遅れを取り戻さないと。私もそう意気込んで、みんなに続いて部屋を出た。

「彩ちゃん、今のところ入るタイミングが少し遅いわ。もう一度やるわよ」
「ううっ、千聖ちゃんがスパルタだよー・・・」

スタジオでレッスンを続ける私達。すでに、決められていたレッスンは終了し、今は自主練の時間になっている。やっぱり、感覚がどうも鈍っている。数日も続ければ元に

戻れると思うけど、なんだか悲しい気持ちになる。

「千聖ちゃん、そろそろ休憩にしない？さすがにあたしも疲れちゃったよー」

「チサトさんも、無理してはダメです！」

「そうですよ。それに、千聖さんはまだ病み上がりなんですから、あまり無理をしすぎると、自分も含めてみなさんまた心配してしまいますよ」

「どうやら、私はまたみんなに心配をかけるところだったみたい。ダメね。私も、きつと内心では焦ってるのだと思う。次のチャンスは絶対に成功させないといけない、という思いが焦りにつながって、オーバーワークに発展しそうになる。気をつけないといけないわね。」

「ごめんなさい。少し焦っていたみたいね」

「ほんとだよー。千聖ちゃんにまた何かあったら、また彩ちゃん泣いちゃうからねー」

「な、泣いてなんかかないよ！」

「本当ですか？自分も泣いてる彩さんを見た気がするんですけど」

「私も見ました！」

「ううっ、みんながいじめるよー・・・」

「どうやら、彩ちゃんを泣かせないためにも、みんなに心配をかけるわけにはいかないみたい。気をつけないと。」

「あ、みんなまだ残ってたね？よかった」

と、その時スタジオの入り口の方から聞き慣れた声が聞こえてきた。その声の主はやっぱり雅だった。

「雅さん、お疲れ様です。こんな時間にどうされたんですか？」

「うん、ちよつと見て欲しいものがあった。みんなこのポスターを見て」

そう言つて、一枚のポスターを取り出す雅。そこには、とあるイベントの告知が描かれていた。

「Fresh♪ IDOL Festival vol. 8?なにそれ!?!」

「これつて、デビュー一年以内のアイドルしか出られないイベントだよ?これをきっかけに有名になる子が多いから、業界では注目されてるイベントだよ」

「アヤさん詳しいですね!でも、そのイベントがどうかしたのですか?」

「うん。このイベントに君たち、Pastel*Palette が出ることになつたんだ」

「え?雅さんそれつて本当ですか?すごいじゃないですか!」

私もビックリした。すごいことだと素直にそう思える。だけど、きつとこれは・・・

「雅、あなたこのために・・・」

「いいんだ千聖。僕にできるのなんてこんなことぐらいだから。だけど、ここから先は

君たちの力で切り開くんだ。僕にはどうすることもできないからね」

「雅君……うん、私達がんばるね！」

そう言って笑顔を見せる彩ちゃん。私もつられて笑顔になる。本来なら私がする予定だったのだけれど、雅にまた助けられてしまった。だけどそのおかげで、演奏の練習に集中できる。なおさら、失敗は許されなくなってきた。絶対にこのチャンス成功させてみせる。

前回の失敗で雅の夢への歩みは停滞してしまった。いえ、押し戻されたと言ってもいい。だけど、また歩き出すことはできる。この機会を逃すことは許されない。ここからまた、終わりなき夢の続きへの歩みが始まる。もう二度と、その歩みを止めてはいけない。私は改めて気持ちをこめて、そう誓うのだった。

第13演目 夢のうた

「うーん、この歌詞もしっくりこないな」

Pastel*Palettesのイベント参加が正式に決定した。それを彼女達に伝えて、事務所から帰ってから、僕はノートとギターを手に作曲活動に精を出していた。

別に今作ってるのは自分の歌う曲ではない。Pastel*Palettesのための新曲だ。新たなスタートを切る彼女達に、それを祝福して何か僕から贈れる物はないか？そう考えたときに、真っ先に浮かんだのが、新曲のプレゼントだった。

彼女達の演奏技術は高い。既存の曲は、ほぼマスターしてしまっている。後は細かい部分の修正さえできれば、完璧と言って差し支えないような演奏ができるようになる。

イベントまでの期間は一ヶ月。この新曲を一週間で作って、そこから練習。今の彼女達なら余裕で上げることが可能だろう。どちらかというと、問題は僕の方だ。以前に言った通り、僕にとってアイドルという分野は不慣れな分野だ。それは、数曲その分野の曲を作ったぐらいでは変わらない。

確かに、要領を掴むことはできた。作曲の方もイメージはできあがっている。難航し

ているのは作詞活動だ。どうもいい詞が思い浮かばない。アイドルらしい可愛い歌詞を考えるのが難しい。

「雅!?何をしてるの!?!」

試行錯誤を続けていると、急に大きな声が部屋の入り口から聞こえてきた。ビツクリした。そして、声を発した人物にもビツクリした。千聖だった。だけど何故彼女がここに?彼女はちゃんと、晩ご飯を食べた後送っていったはずなのに。

「何をしてるって、作曲活動だけ。千聖こそ、どうしたの?家までちゃんと送っていったはずだけ?」

「雅、今何時だと思ってるの?」

何時?そういえばしばらく時計を見ていなかった。千聖に言われて、時計を見てみると、その針は7時30分を示していた。・・・7時30分?それはおかしい。確か、僕の記憶が正しければ、千聖を送っていったのは9時を回っていた。となると、この時計が示している時刻はおかしい。時間が巻き戻っていることになる。そうで無いのだとすると、もしくは・・・

そこで、僕は一つの答えに辿り着いた。時間が巻き戻っていない。時計も正常。だとすると答えは一つ。僕は恐る恐る窓の外に目を向ける。するとそこには、すっかり明るくなった街の景色が映し出されていた。要するに朝になっていた。

「え？嘘？もうこんな時間？」

「雅……」

千聖の声に、僕はこれまた恐る恐る、千聖の方に顔を向けた。あ、これは絶対怒られる。言い訳の余地も無い。だけど、悪いのは間違いなく僕だ。甘んじて説教を受けようと思っていた矢先だった。

「体調は大丈夫なの？」

「え？」

説教では無く、飛んできたのは僕を心配する声だった。どこまでも優しく、それでいて不安が滲み出たような声。

「頭痛とか目眩は無い？立てる？朝ご飯、今からでもお粥に変える？学校に休みの連絡入れておくわね？病院に行く準備もしておかないと」

「いやいや、さすがにそこまでしなくて大丈夫だよ。体調もなんの問題も無いから」

心配してくれるのは素直にありがたいんだけど、些か過保護すぎた。一徹したぐらいで、病院に行くこともないし学校を休むようなことでもない。お粥にしなくても、食欲だってちゃんとある。

「だけど、何かあつてからじゃ遅いのよ!？」

「本当に大丈夫だって。一日ぐらい寝なかつたところで問題ないよ。それに、今日は

帰ってちゃんと休むから」

「・・・わかったわ。だけど、本当に無理をしてはダメよ？」

「うん。心配してくれてありがとう」

なんとか、渋々引き下がってくれた千聖。だけど、その顔にはわかりやすいまでに、不満の色が浮かんでいる。これは本当に、今日は帰ってから休まないと何を言われるかわからない。有り難いことに、明日は土曜日。学校は休みだ。作詞活動はこの休日二日間
でなんとかしよう。

「それじゃ、朝ご飯にしましょ？もう用意できてるわよ？」

「そうだね。僕もなんだかお腹が空いてきたよ」

もう朝になったと自覚すると、なんだか急にお腹が空いてきた。体が千聖の料理を欲している。僕は、その欲に抗うことないまま、千聖に続いて部屋を出た。

土曜日になった。休日だ。昨日帰ってから、ゆっくり休んだおかげで体調は万全だ。そして僕は、この休日を利用して朝からテレビ局に来ていた。別に仕事で来たわけでは

ない。ここで人と会う約束をしていた。

「来たか。ミヤツビー」

仁さんだ。早乙女仁さん、彼と僕は会う約束をしていた。彼に相談したいことがあったからだ。

「仁さん、おはようございます」

「ああ、グッドモーニング。で、ミーに相談したいこととは？」

「仁さん、アイドルソングを作るコツを教えてください」

仁さんは、アイドル業界にその名を轟かせる音楽プロデューサーだ。その活動には、アイドルソングの作曲も含まれる。今有名なところで言えば、Marmaladeだろう。彼女達の歌う曲の作曲は、全て仁さんが受け持っている。

「なるほどね。アンダースタン。Pastel*Palettesのためのメイクソングか。確かに、ユーのメイクするソングとは方向性が違うからな。ユーにとってディファレントだろうね」

「ええ、そうなんです。いちお、何曲か作っただんですけど、どうも慣れなくて。今度のイベントのために、彼女達に新曲を提供しようかと思ってるんです。だけど、どうも上手くいかなくて」

「なるほどね。OKミヤツビー、ユーはソングをメイクする時、どこに重点を置いている

「？」

「重点ですか？いちお、心がけてることは、聞いてくれる人に、何を伝えたいか、どう感じて欲しいかを心がけて作ってますね」

そう、僕は曲を作るとき、お客さんに伝えたいことを真っ先に考慮して作っている。最近も、それに合わせて、自分の曲を客観的に聴いて、どう感じるかを考慮して作っている。

「だろうね。ユーのソングをリッスンしていると、そう感じた。ミーとは真逆と言ってもいい」

「真逆？」

「ユーはオーディエンスのためにソングをメイクしている。だがミーは、アイドル達のためにソングをメイクしている」

「アイドル達のため？」

要するに、歌う人達のために曲を作っているということだけど、お客さんのことは考えていないのだろうか？だとすると、本当に僕とは全くの真逆だ。だけど、仁さんの作る曲を聴いてると、僕まで楽しい気持ちになった。

以前、千聖とカラオケに行ったときに、仁さんが作曲した *Marmalade* の曲を歌ったけど、すごく楽しい気持ちになった。こんな楽しい気持ちになれる曲なのに、お

客さんのことを考慮していないのだろうか？

僕は、人の感情に疎い。だけど、曲に込められた感情に関してはその類いではない。むしろ、得意なはずなんだけど、仁さんが作った曲からは、アイドル達の楽しいという気持ちは伝わってくるのだけれど、仁さんの込めた感情が全く伝わってこなかった。こんなことは、初めての体験だった。

「ミーのメイクしたソングに、ミーの感情なんてものは必要ない。そんなものは不純物だ。ミーのソングにカラーを付けるのは、ミーではなく、アイドル達だ。ミーは、オーディエンスに何を伝えたいか、オーディエンスが何を感じるか、そんなこと一切考えない。ただ、アイドル達のチャームを引き出すことだけを考えてソングをメイクしている」

「アイドル達のチャーム……」

チャーム。つまり、魅力だ。アイドル達の魅力を引き出す。確かに、言われてみればアイドルソングらしい重点の置き方だ。なるほど、僕はもしかしたら入り口からすでに間違えていたのかもしれない。

「アイドル達のチャームを引き出す。すると、オーディエンス達はそんなチャーム溢れるアイドル達に魅了されていく。そんなつもりは無くとも、結果的にオーディエンス達のハッピーにつながるわけだ」

考えもしなかった。お客さんのことばかり優先してた僕には思いつきもしないことだ。お客さんのことを考えずとも、結果的にお客さんの求める物に行き着くなんて、そんな答えわかるはずがない。

「そうだ。だから、ユーももつとシー達のことを考えてソングをメイクしてあげたらどうだ？ ニューワールドが拓けるかもしれないぞ？」

「そうですね。仁さんのおかげで、僕もなんだかできそうな気がしてきました」

「ああ、だがこれだけはラーンしておけ。最終的に、ソングにカラーを付けるのはミー達ではない。シー達だ。シー達のチャームがソングにカラーを付ける。ライフを与える。それだけラーンしておけば、ユーならノープロブレムだ」

「仁さん、はい、ありがとうございます！」

仁さんのおかげで、なんだか僕もできそうな気がしてきた。彼女達のことを考えて曲を作る。それが、結果的にお客さん達の求める物につながる。まずは、彼女達の魅力を探さないといけない。僕は今から事務所に向かうことにした。おそらく、そこに彼女達はいるはずだから。

テレビ局を後にした僕は、そのままの足で事務所に向かった。事務所にあるレッスンスタジオ、やっぱり彼女達はここにいた。

「あら？雅、どうかしたの？」

「うん、ちよつと曲作りのアイデアを探しててね。ここに来れば何か見つかるかと思つて」

そこには、パスパレのメンバー全員が揃っていた。今日は千聖も来ている。普段は、他の仕事があり、参加できないことも多い彼女だが、可能な限りは練習に参加するようにしていた。

「曲作り？へーおもしろそう！なんだかるんってきた！」

「でも、こんなところに何かアイデアなんてありますか？ただ、自分たちがレッスンしてただけですよ？」

「そうだね。だけど、アイデアっていうのは思いがけないところに潜んでるものだからね。案外、こういう場所にあるものなんだよ」

僕は、あえて今作ってる曲が彼女達の曲であることを伏せることにした。サプライズプレゼントとして贈ろうかと思う。

「じゃあさ雅君。私に歌のレッスンしてよ！」

「彩ちゃんに？」

「うん、なんだか、上手いかない部分があつて、曲を作ってくれた雅君に教えてもらつたら上手いかなつて思つて」

「だつたら私もキーボードのレッスンをお願いしたいです！」

レッスンか。確かに、5人の中では彩ちゃんとイヴちゃんに経験的ハンデがある。とはいえ、二人とも持ち前の根性と努力でそのハンデを感じさせないほど成長している。まあ、他の3人が上手いから実感できてないのだと思うけれど。

「二人とも、十分に上手くなつてると僕は思うけどね」

「ううん、今のままじゃダメ。みんなに比べて、ハンデがあるのもわかつてる。だけど、私はこのグループのボーカルなんだから、そんなこと言い訳にできないよ。ボーカルが1番ダメなグループなんて、バンドとしてダメだと思うから」

「私は、アヤさんよりもっと音楽の経験が少ないです。だから、アヤさんががんばつてゐるのに、私がんばらない訳にはいけません。旅は道連れ世は情けです！」

なるほど。二人とも自分が周りに比べてハンデがあるのを自覚して、それでいて3人に負けないように必死でがんばっているようだ。美しい努力だと思う。

「うん、彩ちゃんの気持ちはよくわかつたよ。イヴちゃんの言いたいことも、最後のはちよつと違う気もするけど、よくわかつた。いいよ、僕も何かのきっかけを掴めるかも

しれないし、レッスンしようか」

「雅君……うん、よろしくお願ひしますっ!」

「ミヤビさんありがとうございます! さあ頑張りますよ! ブシドー!」

「うん、二人とも頑張ろうね。ブシドー!」

よし、なんだか僕もやる気になってきた。がんばって二人を成長させて見せよう。
レッツ、ブシドー!

「イヴちゃん、リズムが少し走りがちになってるよ。もつと麻弥ちゃんのドラムをよく聞いて、それに合わせて。彩ちゃんは曲に入るタイミングが少し遅れがちだね。もつと周り全体の音を聞いて。その音に合わせて自分の中でリズムを刻むんだ。メトロノームみたいだね。そうすれば曲に入りやすいから」

レッスンを開始して、早くも一時間が経過した。やっぱり、彼女達の実力は素人とは思えないほど上達していた。正直、今のままでも十分通用するほどだ。

「音を聞いて、リズムを刻む……うん、雅君、もう一回お願ひ!」

「わ、私もお願いします!」

「うん、二人ともやる気があることはいいことだけど、少し休憩を挟もうか。他の皆が先に疲れちゃつてるよ」

「そ、そうですね。自分も少し疲れまして・・・」

「もうあたしもクタクタだよー・・・」

「そうね、みんな少し休息が必要だと思うわ。二人とも、ハードワークは禁物よ?」

練習熱心なのはいいことだけど、少し飛ばしすぎな気がする。心配なのは彩ちゃんだ。まるで何かに囚われたかのように練習に励んでいる。熱心なのは良いことだけど、このままだとハードワークにつながりかねない。

「そうだね、ごめん、ちよつと夢中になりすぎてた」

「私もです。すいません」

「二人とも、気にしないで。だけど、彩ちゃん一体どうしたの?今日は飛ばしすぎよ?悩みがあるなら言ってみて。一人で抱え込むのはよくないわよ?」

こういう時に、千聖がいてくれるのは助かる。彼女なら、彩ちゃんの悩みを解消できる。そんな安心感が湧いてくる。

「そ、そんな大したことじゃないから大丈夫だよ!」

「そんな大したことない悩みに私達は巻き込まれてるのだけれど?」

「うっ、それは……」

「ふふっ、冗談よ。誰もそんなこと気にしてないわ。だから、言ってみて？言うことで決する悩みだつてあるのよ？」

「……うん。実は、不安で仕方ないの」

「不安？」

「うん。この間、雅君がイベントの話を持ってきてくれたときはすごく嬉しかったの。だけど、それと同時にすごく不安になっちゃって。また、失敗しちゃったらどうしよう？つて。今度また失敗しちゃったら、今度こそ私達は解散することになっちゃやうと思う。それが不安で不安で仕方なくて、そう思うと、練習してないと落ち着かなくなっちゃって……」

なるほど、不安が原因か。確かに、もう今のパスパレには後が無い状態だ。もし、また何か問題が発生すれば今度こそ解散は免れないだろう。そんな状態に不安を感じるなどというのは無理な話かもしれない。

「いやーでも彩さんの気持ちもよくわかりますよ。自分も不安で不安でしょうがないですからね」

「そうかな？あたしはそうでも無いけどね。いつも通りやれば大丈夫だと思うし」

「ううっ、日菜ちゃんのその性格が羨ましいよ……」

「そうね、日菜ちゃんはともかくとして、みんなそれぞれに不安を抱えてると思うわ。失敗が許されない状況っていうのがプレッシャーにもなってると思う。だったら簡単な話よ。不安なら、不安が消えるまで頑張ればいいのよ」

「不安が消えるまで頑張る？」

正直、千聖の口からそんな解消法が出てくるとは思ってた。予想の斜め上だったと言ってもいい。千聖のことだから、もっと理論的な解消法が出てくるかと思えば、まさかの根性論的解消法だった。

「私も、昔から舞台の前日とかは不安で不安で仕方ないことがよくあったわ」

「千聖ちゃんでも？」

「ええ。私もよく不安で不安で仕方が無くなることがあるのよ。そういう時は、いつも不安が少しでも消えるまで、ひたすら練習したわ」

「チサトさんでもそんな時があるんですね！」

「ええ。完璧な人間なんていないもの。誰だって不安になるときはあるわ。だからこそ、不安を解消するために何かに取り組むのよ。だけど彩ちゃん、だからといってハードワークはダメよ？ハードワークにならない程度でね」

「ううっ、肝に銘じておきます・・・」

不安なら不安が消えるまで頑張るか。さすが千聖。いいことを言う。最初は根性論

かと思っただけ、言われてみれば確かにこれ以上の解決法は無い。なんだか僕のアイデアにもつながる気がしてきた。今ならいい詞が書けるかもしれない。やっぱり彼女達のことを知ることは大事なことだった。教えてくれた仁さんに感謝しないと。

その後も、僕は彩ちゃん達のレッスンに少し付き合っつて事務所を後にした。今の僕は、早く詞が書きたくて仕方が無かった。

「できた……！」

あの日のレッスンからちようど一週間が経った。ついに完成した。彼女達の新曲が。中々の完成度だと思う。自信作だ。

「雅、また朝まで起きてたの!？」

完成したタイミングで、ちようど千聖が来た。そう、現在の時間帯は朝だ。彼女がそう思うのも仕方が無いだろう。

「違うよ。今日は早起きしただけだよ。ちゃんと寝てたから心配しないで?。」

そう。僕は今日いつもより早めに起きて曲を完成させていた。まあ、睡眠時間を削つ

た事實は変わりないけど、それはこの際置いておく。

「雅が早起き？珍しいわね。まあちゃんと寝てたのならいいのだけれど……くしゅん！」
「千聖、大丈夫？風邪でも引いた？」

「大丈夫よ。昨日ちよつとね……くしゅん！」

千聖が風邪を引くなんて珍しい。僕にいつも言うだけあって、彼女は自身の体調管理もいつも怠っていない。だから、よつぽどなことが無い限り、彼女が風邪を引くなんてことは無い。

「あまり無理しちゃダメだよ？しんどかったら僕のことはいいから、自分のことを優先してね？」

「本当に大丈夫よ。ちよつとクシヤミが止まらないだけだから。しばらくすれば治ると思うわ……くしゅん！」

「ははは、だけどそんな状態じゃ、僕の体調管理のことも文句言えないね」

「ううっ、返す言葉も無いわ……くしゅん！」

見たところ、顔色も悪くない。本当にクシヤミだけみたいだ。大したことないみたいで安心した。これなら、新曲の練習も問題ないだろう。さあ、早く朝ご飯を食べて事務所に行こう。僕は千聖といっしょに、機嫌良く部屋を出た。

千聖といつしよに事務所に着くと、すでにそこにはみんなが揃っていた。これはちよ
うどいい。早速皆の前で発表しちやおう。

「あ、雅君、千聖ちゃんおはよう・・・くしゅん！」

「彩ちゃんおはよう。つて、彩ちゃんもクシヤミ？」

「私も？つてことは・・・」

「くしゅん！」

「やつぱり千聖ちゃんもなんだ・・・」

一体昨日二人は何をしてたんだろう？昨日と言えば、夕方すごい雨が降ってたけど、
それが関係あるのだろうか？

「お二人とも昨日は頑張つてましたもんね。むしろ、頑張りすぎですよ」

「はい！チサトさんもアヤさんもすごかったです！」

「だけど、それで体調崩してたら元も子も無いよねー」

「ううっ、ごめんなさい・・・」

「ごめんなさい、本当に返す言葉も無いわ・・・」

本当に昨日二人は何をしてたんだろう？すぐく気になってきたんだけど。

「それで、雅さんはどうしたんですか？朝から事務所に来られるなんて珍しいですね」

「あ、そうだった。実はみんなのために新曲を作ってきたんだ」

「え？私達の新曲!?!」

「へーすごい！うーん、るるるるんってきた！」

「新しい刀を手に戦に望むのですね！燃えてきました！」

「イヴさん、その表現は物騒ですよ。ですが、新曲は嬉しいですね！今から練習するのが楽しみですよ！」

「雅、あなたが最近作ってた曲って……ありがとう雅。必ず今度のイベント成功させてみせるわ」

皆思い思いに嬉しさを表現してくれる。作った甲斐があったというものだ。だけど、この曲はまだ完成していない。

「みんなで夢のうたを描こう！」

この曲は、みんなの、パスパレの色に染まってこそ完成する。僕が作ったのは、ただの無色透明な下地だ。そこに、彼女達の色が染まってこの夢のうたは完成する。それが聞けるのは、今度のイベントでだ。僕は今からイベントが楽しみで楽しみで仕方なくなっていた。

彼女達はどうかやら、イベントが成功するか不安なようだけど、僕は既に確信している。イベントの成功を。その先の夢の世界で歌う彼女達を想像して、僕の顔にも自然と笑みが浮かぶのだった。

第14演目 愛のうた

「うん、今日も上出来だわ」

私達のイベント参加が決定してから、一夜が明けた。今日も私は、雅の家で朝食を作っていた。昨日と違う点として、今日は千景がいない。昨日の様子を見て安心したのか、今日は起きてくる様子が無かった。まあ、単純に寝坊しただけかもしれないけれども。

朝食の完成度も申し分ない。そろそろ雅を起こしに行こう。昨日は雅の寝顔を拝むことができなかった。なんだかんだで、もう一週間近く雅の寝顔を見れていない。私の朝の最大の楽しみが実行できていない。だから、今日こそは必ず拝んでみせる。そんな、自分でも少しおかしいと思う意気込みをして、雅の部屋に向かった。

雅の部屋からは、電気の明かりが漏れていた。昨日消し忘れて寝たのだろうか？私はいこっそり部屋の中を覗いてみる。するとそこには、椅子に座り、ノートとにらめっこをしている雅がいた。なんだ、起きてたのね。残念、今日も寝顔を拝めなかった。と考えながら、私は疑問に思う。

何故雅が起きているの？ふと、雅の様子を見てみる。服装は寝間着のままだ。それだ

けなら何もおかしいことは無い。ふと、ベッドに目を向けてみる。そこには、昨日の状態のままのベッドがあった。昨日干した布団をベッドに置いたのは私だから、雅のベッドが昨日どのような状態になっていたかわかる。

結論から言うと、ベッドを使った痕跡が無かった。そこから導き出される答えは一つ。

「雅!?!何をしてるの!?!」

彼は昨日寝ていない。最近はそういったことが無かったから油断してた。彼の悪い癖。音楽のことに夢中になりすぎて寝ることを忘れてしまう癖。

「何をしてるって、作曲活動だけ。千聖こそ、どうしたの?家までちゃんと送っていったはずだけ?」

「雅、今何時だと思ってるの?」

どうやら、今日は寝るのを忘れていたどころか、時間の経過にすら気づいていなかったらしい。私に言われて時計を見て、それから窓を見て、そして驚愕の表情を見せる。

「え?嘘?もうこんな時間?」

「雅……」

そんな雅を見て、私は心配する気持ちが強くなった。昔なら、間違いない第一声に説教から入っていただろう。だけど、今の私は違った。そもそも、雅のこの癖が出たのは

随分久しぶりなことだった。もう私は、この癖が発現することは無いと密かに安心もしていた。

「体調は大丈夫なの？」

「え？」

だけど、その癖がまた出た。私は、この時またこの癖が習慣化してしまつたらどうしようかと、それが怖くて仕方が無かつた。そして、唯々ただただ彼の体調が心配で仕方が無かつた。「頭痛とか目眩は無い？立てる？朝ご飯、今からでもお粥に変える？学校に休みの連絡入れておくわね？病院に行く準備もしておかないと」

「いやいや、さすがにそこまでしなくて大丈夫だよ。体調もなんの問題も無いから」

確かに、雅の顔色は悪くないように思う。だけど、それだけでは安心できない。何かがあつてからでは遅いのだから。

「だけど、何かあつてからじゃ遅いのよ!？」

「本当に大丈夫だつて。一日ぐらい寝なかつたところで問題ないよ。それに、今日は帰つてちゃんと休むから」

「・・・わかつたわ。だけど、本当に無理をしてはダメよ？」

「うん。心配してくれてありがとう」

私は、今は雅の言うことを信じることにした。本当は、今すぐに寝て欲しいし、病院

に行つて欲しい。だけど、今は信じることにした。この前まで、雅のことを信じ切れずに迷惑をかけた。だからこそ、雅の言うことはなるべく信じたい。彼の体調管理は、私が細心の注意をしておけばいい。

「それじゃ、朝ご飯にしましょ？もう用意できてるわよ？」

「そうだね。僕もなんだかお腹が空いてきたよ」

そして、私達は雅の部屋を後にした。彼の体調の僅かな変化も見逃さないと、目を光らせつつ、部屋を出た。

次の日になった。雅は約束通り昨日帰つてからちゃんと休んでくれた。今日の朝の様子を見る限り、心配は無さそうに見える。そして今日私は、朝から事務所に来ていた。みんなと一緒にレッスンをを行うのが目的だった。

私は、普段から他の仕事の影響でレッスンに参加できないことが多い。だけど、可能な限りはこうやってレッスンに参加するようにしていた。

そして、今日のレッスンを続けていて気になったことが一つある。彩ちゃんの様子が

おかしい。普段から、人一倍努力をしたがる彩ちゃんだけど、今日はいつもの比じゃない。このままだと、ハードワークで倒れてしまふんじゃないかと不安になる。

「彩ちゃん。ちよつと休憩を入れたらどう？やる気があるのはいいことだけど、無理はよくないわよ？」

「うん、もう少ししたら休憩するよ」

さつきからこれの繰り返し。いつになったらそのもう少しが来るのだろうか？私が何か彩ちゃんに休憩させるいい方法は無いかと思案していると、スタジオの入り口から誰かが入ってきた。その姿を見間違えるわけがない。それは雅だった。

「あら？雅、どうかしたの？」

「うん、ちよつと曲作りのアイデアを探しててね。ここに来れば何か見つかるかと思つて」

曲作りのアイデア。確かに、雅は昨日から夢中になって曲作りに励んでいた。雅に今朝聞いたところによると、作詞の方が難航しているらしい。だけど、こんな場所でそんなアイデアが見つかるのかしら？

「曲作り？へーおもしろそう！なんだかるんってきたー！」

「でも、こんなところに何かアイデアなんてありますか？ただ、自分たちがレッスンしてただけですよ？」

「そうだね。だけど、アイデアっていうのは思いがけないところに潜んでるものだからね。案外、こういう場所にあるものなんだよ」

アイデアは思いがけないところに潜んでいると雅は言う。確かに、過去にも雅はこんな場所です？と思うような場所で曲作りのアイデアを見つけてたりする。例えばスパーのレジ。あるいは、中学時代の放課後の理科室。なんでそんなところでアイデアが見つかるのか、作曲経験の無い私には皆目見当も付かない。

「じゃあさ雅君。私に歌のレッスンしてよー」

「彩ちゃんに？」

「うん、なんだか、上手いかない部分があつて、曲を作ってくれた雅君に教えてもらつたら上手くいくかなつて思つて」

「だつたら私もキーボードのレッスンをお願いしたいですー」

これを機にと、雅にレッスンをお願いする彩ちゃん。あれだけレッスンを続けておいて、まだ続けるみたい。本当にハードワークで倒れないか心配になる。それに続こうとするイヴちゃんも心配だ。

「二人とも、十分に上手くなつてると僕は思うけどね」

「ううん、今のままじゃダメ。みんなに比べて、ハンデがあるのもわかつてる。だけど、私はこのグループのボーカルなんだから、そんなこと言い訳にできないよ。ボーカルが

「一番ダメなグループなんて、バンドとしてダメだ思うから」

「私は、アヤさんよりもっと音楽の経験が少ないです。だから、アヤさんががんばってるのに、私がんばらない訳にはいかないです。旅は道連れ世は情けです！」

確かに、二人の経験が周りに比べて不足しているのは事実。だけど、今の二人はレッスンの成果で十分に上手くなってるのも事実。そんなに焦る必要は無いと思う。

「うん、彩ちゃんの気持ちはよくわかったよ。イヴちゃんの言いたいことも、最後のはちよつと違う気もするけど、よくわかった。いいよ、僕も何かのきっかけを掴めるかもしれないし、レッスンをしようか」

「雅君……うん、よろしくお願ひしますっ！」

「ミヤジさんありがとうございます！さあ頑張りますよーブシドー！」

「うん、二人とも頑張ろうね。ブシドー！」

二人のお願いを引き受けた雅。雅は、今の彩ちゃんの状態を知らないから仕方が無いと思う。もう少し様子を見てみよう。そして、必要ならば私が必要なのかしないと。こういうことに一番長けているのは、メンバーの中でおそらく私だと思うから。世話のかかる子が周りに多いと大変だな、と思いつつ、私は彩ちゃんの様子を見守るのだった。

「イヴちゃん、リズムが少し走りがちになってるよ。もつと麻弥ちゃんのドラムをよく聞いて、それに合わせて。彩ちゃんは曲に入るタイミングが少し遅れがちだね。もつと周り全体の音を聞いて。その音に合わせて自分の中でリズムを刻むんだ。メトロノームみたいだね。そうすれば曲に入りやすいから」

雅のレッスンが始まってから一時間が経過した。その間、みんな休憩を挟むこと無くレッスンに励んでいる。といっても、彩ちゃんが続けるので、仕方なく回りもそれに付き合っているという感じになっている。みんなの様子を見ると、それぞれに疲労の色が濃くなってきた。

「音を聞いて、リズムを刻む．．．うん、雅君、もう一回お願い！」

「わ、私もお願いします！」

「うん、二人ともやる気があることはいいことだけど、少し休憩を挟もうか。他の皆が先に疲れちゃってるよ」

「そ、そうですね。自分も少し疲れました．．．」

「もうあたしもクタクタだよー．．．」

「そうね、みんな少し休息が必要だと思うわ。二人とも、ハードワークは禁物よ？」

レッスンに夢中になるのは、悪いことでは無いけれども、あまりにも周りが見えていない。このままだと、本当にその内誰かが倒れてしまうかもしれない。そうなつてからは遅い。そろそろ頃合いね。彩ちゃんの抱えてる物をなんとかしないと。

「そうだね、ごめん、ちよつと夢中になりすぎてた」

「私もです。すいません」

「二人とも、気にしないで。だけど、彩ちゃん一体どうしたの？今日は飛ばしすぎよ？悩みがあるなら言ってみて。一人で抱え込むのはよくないわよ？」

言うことによつて解決する悩みだつてある。そもそも、その正体を知らないことには、どうすることもできない。まずは、彩ちゃんの口から聞き出さないと何も始まらない。

「そ、そんな大したことじゃないから大丈夫だよ！」

「そんな大したことない悩みに私達は巻き込まれてるのだけれど？」

「うっ、それは……」

「ふふっ、冗談よ。誰もそんなこと気にしてないわ。だから、言ってみて？言うことで決する悩みだつてあるのよ？」

「……うん。実は、不安で仕方ないの」

「不安？」

「うん。この間、雅君がイベントの話を持ってきてくれたときはすごく嬉しかったの。だけど、それと同時にすごく不安になっちゃって。また、失敗しちゃったらどうしよう？って。今度また失敗しちゃうたら、今度こそ私達は解散することになっちゃうと思う。それが不安で不安で仕方なくて、そう思うと、練習してないと落ち着かなくなっちゃって……」

その正体はどうやら不安だったみたい。私もわからないわけでは無い。私も、昔からよく不安に駆られることがあった。舞台の前日などは不安で寝れないこともよくあった。そんな時に、私がいとも不安を拭い去る為に行っていたことがある。

「いやーでも彩さんの気持ちもよくわかりますよ。自分も不安で不安でしようがないですからね」

「そうかな？あたしはそうでも無いけどね。いつも通りやれば大丈夫だと思うし」

「ううつ、日菜ちゃんはその性格が羨ましいよ……」

「そうね、日菜ちゃんはともかくとして、みんなそれぞれに不安を抱えてると思うわ。失敗が許されない状況っていうのがプレッシャーにもなってると思う。だったら簡単な話よ。不安なら、不安が消えるまで頑張ればいいのよ」

「不安が消えるまで頑張る？」

不安が消えるまで頑張る。それは、一種の肯定。そう、彩ちゃんがしていることは何

も間違っていない。私も昔は同じ方法で不安を拭い去っていたのだから。舞台の前日などは、ひたすらに練習に励んだ。だけど、もちろん練習量の管理は怠っていない。ハードワークにならない範囲でひたすらに練習に励んだ。

「私も、昔から舞台の前日とかは不安で不安で仕方ないことがよくあったわ」

「千聖ちゃんでも？」

「ええ。私もよく不安で不安で仕方が無くなることがあるのよ。そういう時は、いつも不安が少しでも消えるまで、ひたすら練習したわ」

「チサトさんでもそんな時があるんですねー」

「ええ。完璧な人間なんていないもの。誰だって不安になるときはあるわ。だからこそ、不安を解消するために何かに取り組むのよ。だけど彩ちゃん、だからといってハードワークはダメよ？ハードワークにならない程度でね」

「ううっ、肝に銘じておきます・・・」

そのことだけは釘を刺しておく。これで彩ちゃんはおそらく大丈夫だろう。これ以後顧の憂いを絶つことができたと思う。後は、前進あるのみ。不安を拭い去るには、どのみち前進しないことにはどうすることもできないのだから。だから、今は前だけを見据えてレッスンに励んでいこうと思う。もちろん、ハードワークにならない範囲で。

「みんなで今度のイベントのチケットを配ってみない？」

次の日のことだった。事務所に集まった私達に向かって、彩ちゃんが急にそう言った。

「彩さん。いきなりどうしたんですか？」

「うん。昨日、千聖ちゃんに不安が無くなるまで頑張ればいって言われて、私なりに考えたんだ。何も、頑張る方法ってレックスンだけじゃ無いんじゃないかなって。それで、こういうった地道な活動も頑張るってことにつながるんじゃないかなって思って。ダメかな？」

「ダメなんかじゃないわ。私はいいいことだと思おうわよ？」

「私もアヤさんに賛成です！」

「へーいいんじゃない？なんだか面白そう！」

「自分も、素晴らしいアイデアだと思いますよ」

「みんな、ありがとう！よし、頑張るぞー！」

どうやら、彩ちゃんなりに、昨日の私の言葉の意味を考えた結果らしい。いい傾向だ

と思う。悩んで足踏みするよりも、悩んで前進する方がいいに決まっている。これは、一種の前進。これを機に、不安が一気に拭い去れたら最高だと思う。さあ、私も頑張らないといけない。配るからには、全部売り切ってしまう心持ちで挑まないと。そんな強い気持ちで、私は事務所を後にした。

チケットを配り始めてから、早くも一週間程が経過した。売れ行きは芳しくない。やはり、私達に悪い印象を持っている人が多いのか、日に数枚程度しか売れない。それどころか、心ない言葉を投げかけてくる人もいるほど。正直、気が滅入りそうになる。

「みなさん！今度、私達 Pastel*Palettes がイベントに出演しますっ！今そのイベントのチケットを販売していまっすっ！是非見に来て下さいねー！」そんな中でも、彩ちゃんはめげなかった。毎日、大きな声で呼び込みを続けていた。本当に凄い子だと思う。普通ならすでに諦めていてもおかしくないと思う。売れないチケット、心ないヤジ。こんな状況で笑顔を保つだけでも大変なこと。だけど、彩ちゃんから笑顔が消えることは決して無かった。

「彩ちゃん、辛くないの?」

私は、堪らず彩ちゃんにそんな疑問を投げかけた。単なる好奇心だったかもしれない。聞かずにはいられなかった。

「もちろん辛いよ。だけど、私にできることなんて、こんなことしか無いと思うから。それに、まだ不安が消えてないから、だから消えるまで辛くても頑張らないと」

そう言う彩ちゃんの顔は確かに辛そうだった。だけど、笑顔だけは消えることが無かった。そんな彼女が眩しかった。そんな彼女の笑顔に見とれている時だった。突然雨が降ってきたのは。その雨は、瞬く間に激しさを増していった。

「あつちやー凄い雨だね。早く帰ろー?」

「そうですね。さすがにこの雨の中続行するのは無理がありますね」

「アヤさん、チサトさん、早く帰りましょう!」

「皆は先に帰ってて! 私はもうちよつとだけ頑張ってみるよ!」

「彩さん、無茶ですよ! こんな雨の中じやお客さんも来てくれませんよ!」

「それでも、私にはこんなことぐらいしかできないから、頑張らないと!」

「彩ちゃん・・皆、彩ちゃんには私が着いておくから、先に帰ってて!」

「そうだね。千聖ちゃんが着いたら大丈夫じゃないかな? あたし達は早く帰ろうよ」

「アヤさん、チサトさん、無理はしないで下さいね!」

「千聖さん、彩さんのことお願いしますね!」

そう言つて、事務所へと引き返していく皆。雨は今もなお激しさを増している。はっきり言つてこんな中でチケットを売るなんて無謀だった。

「千聖ちゃんごめんね?また巻き込んだじゃつて」

「気にしないで。不安が消えるまで頑張るんでしょ?気持ち私は私も一緒よ。お互いがんばりましょう?」

「一緒?」

「ええ、一緒よ。私も、今度のイベントが不安で不安で仕方が無いの。もし、また失敗してしまつたらどうしよう?また、雅の壁になつてしまつたらどうしよう?つて不安で不安で仕方が無いの」

これは事実だった。先週、雅がイベントの話を持ってきてくれたから、私の中でも不安という感情が膨れあがっていた。だから、私もこの一週間、不安を消し去るために練習を頑張つてきた。家に帰つても、時間が許す限りベースの練習に励んできた。

「千聖ちゃんも?」

「ええ、だから、私も彩ちゃんに負けられないように頑張るわ。さあ、声を出していきましよう?少しでもチケットを買ってもらおうわよ?」

「うん！ そうだね！ みなさーん！ 今度、私達 Pastel*Palette がイベントに出演しまーすっ！ 今そのイベントのチケットを販売していまーすっ！ 是非見に来て下さいねー！」

「お願いしまーすー！」

雨の中という悪天候にもかかわらず、私達の心は逆に晴れていくような気がした。気づけば、雨も勢いが衰えてきている気がする。おそらく、一時的なものだったのだろう。雲間からも、光が漏れ始めた。空には虹も見える。雨上がりに見られるその幻想的な光景が、私達の心の不安を拭い去る手助けをしてきているような、なんだかそんな風に感じた。今の私達なら問題ない。そう思える雨上がりの風景だった。

翌日、今日も私は雅の家に来ていた。むしろ、来ていない日なんてほぼ無いのだけだ。そして、今日も雅の寝顔を拝もうかと思っていた私は、雅の部屋から電気が漏れているのをまた発見してしまった。まさか？ と思い部屋の中を覗き込むと、そこにはノートを持って満足そうな顔をしている雅がいた。間違いない。また寝ずに作曲活動

に没頭していたのだろう。

「雅、また朝まで起きてたの!？」

私は堪らず、雅の部屋に入るなり、大きな声を出してしまった。そんな私を見るなり、雅はやつと来たか、とでも言いたげな顔を浮かべる。なんだかちよつとムツときた。

「違うよ。今日は早起きしただけだよ。ちゃんと寝てたから心配しないで?」

早起きしたという雅。珍しい。過去に雅が早起きして作曲活動をしているなんてことは無かった。寝ずに行っていることはあつても、早起きしてということは無。けど、ベッドの状態を見る限り、使用していた痕跡がちゃんと残っている。寝ていたというのは本当なのだろう。

「雅が早起き? 珍しいわね。まあちゃんと寝てたのならいいのだけれど……くしゅん!」

「千聖、大丈夫? 風邪でも引いた?」

「大丈夫よ。昨日ちよつとね……くしゅん!」

突然クシヤミをする私を心配してくれる雅。流石に昨日の行為は無茶だったみたいで、私は朝からクシヤミが止まらない事態に陥っていた。別に、他に症状は無いから大丈夫だとは思。う。

「あまり無理しちゃうダメだよ? しんどかったら僕のことはいいいから、自分のことを優先してね?」

「本当に大丈夫よ。ちよつとクシヤミが止まらないだけだから。しばらくすれば治ると思うわ……くしゅん！」

「ははは、だけどそんな状態じゃ、僕の体調管理のことも文句言えないね」

「ううっ、返す言葉も無いわ……くしゅん！」

全くその通りだと思う。こんな状態だと、この前雅に注意したことの説得力が無くなってしまふ。早く治さないといけないと思いながら、私は雅と部屋を出るのだった。

朝食を済ませた私と雅は、二人で事務所まで来ていた。私は元々来るつもりだったのだけれども、雅も何か事務所に用があるらしい。内容までは何故か教えてくれないけれども。

「あ、雅君、千聖ちゃんおはよう……くしゅん！」

「彩ちゃんおはよう。つて、彩ちゃんもクシヤミ？」

「私も？つてことは……」

「くしゅん！」

「やつぱり千聖ちゃんもなんだ・・・」

どうやら、彩ちゃんも私と同じ状態になっているらしい。予想通りだった。さすがに昨日のは無茶が過ぎたみたい。

「お二人とも昨日は頑張つてましたもんね。むしろ、頑張りすぎですよ」

「はい！チサトさんもアヤさんもすごかったです！」

「だけど、それで体調崩してたら元も子も無いよねー」

「ううっ、ごめんなさい・・・」

「ごめんなさい、本当に返す言葉も無いわ・・・」

今日の私の立場はグループ内でも低そうな気がする。まあ、昨日無茶した結果、こんな状態になってたら仕方が無い。だけど、その無茶の結果は悪い話ばかりでは無い。昨日のチケットの売り上げは上々だった。

というのも、どうやら昨日雨の中頑張つてチケットを販売してた私達の情報をネットに流してくれた人がいたみたいで、その情報を見た人達がパスポレの努力を認めてくれてチケットを買いに態々来てくれたらしい。おかげで、密かにファンが増えたらしい。

「それで、雅さんはどうしたんですか？朝から事務所に来られるなんて珍しいですね」

「あ、そうだった。実はみんなのために新曲を作ってきたんだ」

「え？私達の新曲!？」

「へーすごい！うーん、るるるるんってきた！」

「新しい刀を手に戦に望むのですね！燃えてきました！」

「イヴさん、その表現は物騒ですよ。ですが、新曲は嬉しいですね！今から練習するのが楽しみですよ！」

「雅、あなたが最近作ってた曲って……ありがとう雅。必ず今度のイベント成功させてみせるわ」

「これは思わぬサプライズだった。まさか、雅が最近作っていたのが私達の新曲だったなんて。素直に嬉しかった。」

「みんなで夢のうたを描こう！」

「夢のうた？雅は確かに夢のうたと言った。どういう意味なのだろう？」

「雅、夢のうたってどういうことなの？」

「うん、実はこの曲はまだ完成してないんだ。この曲は、みんなの色に染まることによつて初めて完成する。さらに言うなら、皆の色次第ではどんな曲にだつてなるまるで夢のようなうただよ。だから夢のうた」

「へーなんだか面白そうですね！」

「私も麻弥ちゃんに同意見だ。何色にでも変わる夢のうた。本当に面白そうだと思う。」

「あ、じゃあさじやあさ、千聖ちゃんの雅君に対する愛の色で染めて愛のうたにしちゃお

うよ！」

「ひ、ひひひ、日菜ちゃん!?急に何を言ってるの!?!」

急に、面白いイタズラを思いついたとでも言いたそうな表情でとんでもないことを言ってくれる日菜ちゃん。本当にこの子は何を言ってくれてるのかしら？

「チサトさん、顔が真つ赤ですよ?」

「い、イヴちゃん、そういうことは言わなくていいのよ?」

真つ赤になつてるのは自分でもわかつてる。いきなり、あんなことを言われたら真つ赤になつてしまふに決まつている。そう、これは不可抗力。抗うことができない自然現象。

「だけど、私の愛で染めた愛のうた。それも悪くないかもしれない。むしろ、雅が作つたそんな曲をいつか歌つてみたいとすら思う。」

「あ、千聖さん今、満更でも無さそうな顔しましたね?」

「千聖ちゃんんだか嬉しそうだよね?」

「ま、麻弥ちゃん、彩ちゃん!そんなこと無いわよ!」

「あはは、千聖ちゃんそんなに取り乱しちゃつてー。ねえ?雅君も千聖ちゃんの愛で染めてほしいよね?」

「え?ここで僕に振るの!?えつと、その、あ、そうだ!僕この後用事があつたんだつた!

みんなレッスンがんばってね！」

「あ、ミヤビさん行っちゃいました」

バタバタと慌ただしい朝の事務所。だけど、それがどことなく心地よかった。恥ずかしい思いはしたけれども、悪くないと思ってる私がいる。段々とパスパレが、私にとつての居場所になってきている気がする。

いい傾向だと思う。だからこそ、この場所を無くしたくない。雅の思いに応えたい。そのためにも、今度のイベントに失敗は許されぬ。だけど、私の中に不安はもう無かった。今なら確信を持って言える。間違いなく成功すると。私は、その後の明るい未来に想いを馳せて、その日のレッスンに臨んでいくのだった。

第15演目 ガラスを割れ!

時の早さを実感する日々だった。

早いもので、今日はイベント前日、もっと言うなら前夜になった。

この3週間やれることは全てやってきた。僕は知らないのだけど、彼女達が密かに行っていた行動により、パスパレのイメージも良い方向に傾いているらしい。演奏の方も、新曲も含め全曲完璧と言っているほどの完成度に到達した。

やれることは全てやってきた。後は皆を信じて見守るだけ。彼女達ならきつと大丈夫だ。心配する必要は無い。最高の結果を出してくれるに決まっている。

「いよいよ、明日だね」

「ええ、そうね。明日で、全てが決まるわ」

そう言う千聖の表情は、どことなく楽しそうに見える。見たところ、緊張なども特にしてなさそうだ。

「不安とかはない?」

「ええ、大丈夫よ。これまで頑張ってきたんだもの。いつも通りやればいいだけ。問題も不安ももう無いわ」

本当に彼女達は頑張ってきた。時には心ない声に涙した日もあった。時には練習が上手くいかず、挫けそうになった日もあった。だけど、誰一人として折れることは決して無かった。彼女達はもう、偽物バンドのPastel*Palettesではない。真正正銘、アイドルバンドのPastel*Palettesだ。あの日忘れてきた栄光を、今こそ取り戻す時が来た。そう思うと、なんだか感涙がこみ上げてきそうになる。「なんで雅が泣きそうになってるのよ」

「だって、みんなが本当に頑張ってきたことは僕も知ってるからさ、その努力が報われる時がやつと来たのかと思うと、なんだか感動しちゃって」

「ふふつ、昔から雅はそうだったわね。感動物の映画とかに弱くて、映画館でも関係無しにすぐ泣いちゃって」

「だ、だってしようがないじゃん!泣いちゃうものは泣いちゃうんだから!悪い?」

「誰も悪いだなんて言っていないわよ。それだけ、雅が私達のことを想ってくれてるってことだもの。感謝することはあっても、悪いなんて思うことは絶対に無いわ。雅、ありがとう」

その千聖の言葉がとどめとなってしまった。そんなセリフ今言われたら、僕の涙腺が耐えられるわけが無い。

「ふふつ、やっぱり泣いた」

「千聖、ぜ、絶対確信犯でしょ」

優しいまなざしで僕のことを見てくる千聖。その顔がなんだか憎たらしい。

「だけど、本当に長かったわ。あのお披露目イベントから、言葉にしたらたつた一ヶ月の出来事なのだけれど、本当に長く感じたわ。それはもう、まるで時間が止まってしまっていたかのように」

長く感じたと言った千聖。その意見は僕とは真逆だ。僕は最初に言った通りこの3週間、いや、お披露目イベントからの一ヶ月、本当に時間の流れが速く感じた。

いや、正確にはお披露目イベントからでは無い。あの日からの3日間は、僕の時間が止まっていたかのように長く感じていた。そう、あの日、千聖の気持ちを知ることになったあの日までは。

あの日から僕の時間は再び動き出した。それまでの遅れを取り戻すかのように、まるで駆け抜けるかのような勢いで時間は過ぎていった。

だけど、おそらく千聖の中の時間はまだ止まったままなのだろう。あの日、あのイベントの失敗は未だ彼女の中で燻^{くすぶ}り続けている。僕や、周りの誰もが気にしていなくても、彼女の中で罪悪感として残り続けている。

あの日、彼女が僕に言った通り、おそらく僕の夢の壁になってしまったことが最大の要因なのだろう。あの際の僕の言葉だけでは、まだその時を動かすまでには至らなかつ

たようだ。

だけど、それも明日までのこと。明日のイベントの成功は、そのまま彼女達、そして僕の復権に直結する。それは即ち、僕の夢が再び歩みを始めるということ。彼女の時が止まっている理由は、僕の夢があの日から止まってしまっているため。

だったら僕の夢が再び動き出せば、彼女の時もまた動き出す。単純なことだ。

「千聖、明日で全て終わりにしようね」

「ええ、当然よ」

明日で全てに決着をつける。僕はそう誓い、千聖との和やかな前夜を過ごすのだ。た。

そして、イベント当日になった。いつも通りの朝だった。いつも通り千聖に起こしてもらい、いつも通り身だしなみを整え、いつも通り千聖の用意してくれた朝食をいただく、いつも通りの朝だった。そして、いつも通り二人で家を出た。

今日は僕もイベント会場で皆を見守る。お披露目イベントの時は、いてあげたくても

側にいることができなかつた。だけど、今日僕は仕事が入っていない。いや、正確には全て断つた。今日だけは、どうしても彼女達の側にいたかつた。

そして、僕と千聖はイベント会場に到着した。中々大きな会場だ。さすが仁さんがプロデュースするイベントなだけはある。

「姉さん、おにいさん」

会場の規模に感嘆している時だつた。背後から聞き慣れた声が聞こえてきた。その声とおにいさんという呼び方。間違いなく彼女だ。

「どうもです」

振り返ると、案の定そこには千景がいた。どうやら、今回のイベントを見に来てくれたようだ。

「千景、態々見に来てくれたのね」

「ここまで結構遠いのに。千景、お疲れ様」

「本当にお疲れです。いやーこんなに姉思いな妹を持って、さぞその姉は幸せ者なんですようね」

「ええ、そうかもしれないわね」

「そこは否定しないんだね」

素直に肯定する千聖に思わずツツコミを入れてしまった。だけど、千景が見に来てく

れたからか、本当にその顔は幸せそうに見える。

「では姉さん。私は客席で姉さんの勇姿を見守ってますね」

「ええ、お願いするわ」

「姉さん、最高のイベントを期待してますね」

「・・・ええ、必ず今度こそ、最高のイベントにしてみせるわ。千景のためにもね」

その言葉を聞くと、千景は満足そうに会場の中に入ってしまった。その姿を見送り、僕達も関係者入り口へとその足を向ける。そして、そのさらに先にある控え室に着くと、そこにはすでに他のメンバー4人全員が揃っていた。どうやら、僕達が一番最後だったようだ。

「あ、雅君、千聖ちゃん、おはよう!」

「おはよう彩ちゃん。みんな早いね」

「おはよう。待たせてしまったみたいね。ごめんなさい」

「いえいえ、自分たちが早かっただけで、千聖さんが遅刻したわけでは無いですから。謝ることは無いですよ」

確かに、僕達は遅刻していない。むしろ、僕達も早かったぐらいだ。当然のことながら、どうやら今日は皆やる気十分みたいだ。これなら、本当に今日は最高のイベントが期待できそうだ。

「失礼するよ」

そして、僕達が到着してからしばらく経ったところだった。控え室に一人の男性が入ってきた。特徴的な男性。頭に乗せられたテンガロンハットと顎下に伸びた髭が特徴の男性。紛う事無き人物、早乙女仁さんだ。

「仁さんおはようございます。今日はよろしくお願いします」

「グッドモーニングミヤツビー。ああ、トウデイは頼むよ。ユー達」

「早乙女仁さん。お会いできて光栄です」

「OK。堅苦しいのはナツシングだ。ミーはそういうのが苦手なんでね。ユーがミヤツビーのラバー、チーサだね？よろしく頼むよ」

ちよつと待つてほしい。ナチュラルにこの人僕達のことをラバーつて言ったよ。チラツと千聖の方を見ると、顔がトマトのように真っ赤になっていた。

「ら、らーらららーらら、ららら、ら、らー、ら」

「おー千聖ちゃんがモールス信号しゃべってるよ」

「日菜さん、モールス信号はしゃべる物ではないですよ」

「まるで壊れた蓄音機みたいですね！」

「イヴちゃん、なんで古くなってるの。普通は壊れたラジオつて言うところだと思ふよ」

「彩さんもそういう問題では無いと思ひますよ」

「ははっ、マリーから聞いてたとおり、見かけによらずウブなガールのようだな」

あ、この人確信犯だったんだ。なら余計質が悪い。千聖はまだ元に戻りそうに無いし、困った物だ。

「まあ、千聖さんに関して、戻ってくるのを待つしか無いみたいですのでお先に挨拶をしますね。ドラムを担当している大和麻弥です。早乙女さんのことはいつもテレビ等で見ています。今日はよろしくお願いしますね」

「ボーカル担当の丸山彩です。Marmaladeのプロデュースをしている早乙女さんに会えて、感激していますっ！今日は本当に、イベントに招いていただいてありがとうございますっ！」

「キーボード担当の若宮イヴです！早乙女さんに感謝の気持ちを込めて、今日はブシドーの気持ちでがんばりますね！」

「ギター担当の氷川日菜だよ。今日はキラッとしたイベントに絶対するからね！」

「OK。マリーにアーヤにイヴにサンガールだな。トウデイはエクセレントなステージを頼むよ」

うん。マリーやアーヤにイヴはまだいい。というより、イヴちゃんだけ普通なものも気になるけど、サンガールって何？なんで日菜ちゃんだけ原形とどめてないような呼び方になってるの？仁さんの人の呼び方はいつも謎だ。

「サンガール？」

「ああ、ソーリー。昔フランスに留学してた影響でね、イングリッシュが抜けないんだ。許してほしい」

「フランスなのに、英語？フランス語じゃなくて？」

「日菜ちゃん、気にしても仕方が無いよ。仁さんはこういう人なんだって思っておいたらしいよ」

「おいおいミヤッビー。さすがのミーも少しシヨックを受けるぞ」

「あ、すいません。そういうつもりじゃなかったんですけどね」

「ら、ラバー!？」

「あ、チサトさんが帰ってきました！」

「ずいぶんと長い旅でしたね。自分少し心配になってきてましたよ」

本当にそう思う。今までも頻度は少ないけど、割と千聖は今回のようにどこかにトリップすることがあった。千聖の気持ちを知る前の僕は、千聖がどうしてしまったのか、何がそうなるスイッチなのかもわかってなかったけど、今になるとスイッチも理由もわかる。わかるからこそ、嬉しくもなる。僕のことをそれほど想ってくれてることなのだから。まあ今回のはさすがに長かった気がするけど。

だけど、仁さんのおかげなのはわからないけど、みんなに緊張は無さそうだ。心配

だった彩ちゃんも楽しそうにしている。これなら良い感じにリラックスしてみんな本番に臨めるかもしれない。本番の時は刻一刻と近づいてる。もうすぐ本番がやってくる。そんな本番前とは思えないような、和やかな事務所の様子だった。

「Pastel*Paletteさん、スタンバイお願いします!」

ついにこの時が来た。僕達は現在舞台袖に來ている。そして、スタッフさんに呼ばれたということは、ついに出演が回ってきたということだ。

「ううっ、なんだか緊張してきたよ・・・」

「ふふっ、彩ちゃんは本当に本番に弱いよね。でも、それも彩ちゃんらしくていいと思うわ」

「千聖ちゃん、それって絶対ホメてないよね?」

まあ、これも千聖なりの彩ちゃんへの配慮だったんだろう。心なしか、彩ちゃんの表情に少し余裕ができたように思う。

「あ、そうだ! みんなであれやってみない? あの、本番前にみんなで輪になって手を重ね

るやつ」

「円陣ね。いいんじゃないかしら？」

「自分もいいと思いますよ。なんだか、アイドルって感じがしますね！」

「私やつてみたいです！これで士気向上ですな！」

「おーイヴちゃん難しい言葉知ってるねー。いいんじゃない？あたしもなんだかるんつてきた！」

そう言つて、みんなが順番に手を重ねていく。一番下が彩ちゃん。その上に、イヴちゃん、日菜ちゃん、麻弥ちゃんの順で続き、最後に千聖がみんなを包み込むように手を重ねる。

普通なら、これでかけ声を言つて手を離して終わり、なはずんだけど、みんな何も言う気配がない。それどころか、全員で何かを期待するように僕のことを見ている。どうやら、彼女達の中では僕も頭数に入っているらしい。

僕は実際にステージに立つわけではないんだけど、そんな彼女達には関係無いらしい。だったら、せめて彼女達の期待には応えよう。僕の手を、千聖の手の上に置く。せめて、僕の想いだけは一緒にステージに立たせる。この想いが少しでもみんなに伝わるように。そういう意を込めて、僕は静かに手を重ねた。

「ついに、この時が来たんだね。私、Pastel*Palettesの丸山彩になれ

て、本当によかった!」

「アヤさん、まだ終わったわけでは無いですよ!今から修行の成果をみなさんにお見せしましょう!」

「そうだね!今日は絶対、みんなピカツとして、お客さんがグツとくるようなキラツとしたステージにしようね!」

「最初は、自分なんかアイドルなんて絶対無理だって思っていました。だけど、みなさんと一緒に汗を流して、笑っているうちに、なんだか自分でもできるんじゃないかと思えてきました。みなさん本当にありがとうございます。ふへへ」

「麻弥ちゃんなら立派にアイドルとしてやっていけるわよ。私が保証するわ。だけど、ふへへは禁止ね。みんな、本当にこの一ヶ月頑張ってきたわ。やれることは全部やってきた。だから、本番だからといって特別何かが変わるわけでは無いわ。レッスン通りやれば私達ならきつと大丈夫よ。みんなで、夢の続きを見ましょう?」

「僕は、みんなと一緒にステージに立つことはできない。本当に残念だけどね。だけど、覚えてて。僕の魂はみんなと一緒にいつもいる。みんなの中に置いていくから。だからこそ、あえて言うね。僕達は6人でP a s t e l * P a l e t t e sだ。僕の方も思いつき楽しんできて?」

みんなの表情に不安の色は一切見えない。ここにいる全員、この一ヶ月不安が消える

まで頑張ってきた。千聖の言う通り、やれることは全部やってきた。後は結果で示すだけだ。みんな気合いは十分だ。そして、最後の一押しに彩ちゃんの掛け声が入る。

「よし、みんな！がんばるぞー！」

そして、全員でずっこけた。いや、彩ちゃんらしいけど。

「え？みんなどうしたの？」

「あ、彩ちゃん。もうちよつと皆引き締まるような掛け声はなかったのかしら？」

「えー！そんなの私わかんないよ！」

「あはは！いつそのことブシドー！とかの方がよかったかもね！」

「ひ、ヒナさん！ブシドーは掛け声では無いですよ！」

「ま、まあこの方が自分たちらしくていいんじゃないですか？」

「ははっ、そうかもしれないね。僕もそんな気がするや」

確かに、この方が僕達らしいかもしれない。Pastel*Palettesらしい色が出ていると思う。緊張感はないけれど、その方が本当にPastel*Palettesらしい。

「Pastel*Palettesさんお願いします！」

「はいっ！いこう、みんな！」

そして、ついにお呼びがかかった。さあ、泣いても笑ってもここで全てが決まる。

「みんな、頑張つてね!」

返事は無かった。だけど、みんなが振り返つて微笑んでくれた。それだけで、皆の気持ちがよく伝わってきた。なんだろう、いつもは人の気持ちに疎いつて言われる僕だけど、今日は何故かみんなが言いたいことが言葉にせずともよくわかる。不思議な感じだ。

「みなさーん! こんにちはつ! 私達、Pastel*Palettesです! まずは一曲聞いて下さい! しゅわりん☆どり〜みん!」

ついに、始まった。彩ちゃんの歌声が聞こえてくる。その歌声は少しだけ堅い。だけど、気になるような問題でもない。むしろ、そちらの方が逆にリアリティがあつていいと思う。演奏も完璧と言つていいレベルだ。心配してたイヴちゃんも、素人だと言われなくても誰も信じないような演奏を披露してくれている。これなら、なんの問題も無さそうだ。

お客さんの声はここからだ少し遠くて聞こえない。だけど、反応を見る限り、どうやらみんな驚いてくれているようだ。それもそうだろう。今までただのエアバンドだと思つていた少女達が今日は、生演奏でプロ顔負けの演奏を披露しているのだ。みなそれぞれに鳩が豆鉄砲を喰らつたような表情をしているのがわかる。そして、一曲目は無事に終了した。

「みなさん、改めましてPastel*Palettesのボーカル彩です！今日は来てくれてありがとうございます！最初に、みんなに謝りたいことがあります。私達は、前回のステージで歌も演奏もしていませんでした。みなさんに嘘をついてしまったこと、とても申し訳なく思っています。本当に、ごめんなさいっ！」

彩ちゃんの声に合わせて全員が頭を下げる。誰にも見られていないのはわかってるけど、つつい僕まで一緒に頭を下げてしまった。

「本当は演奏するつもりだったけど、練習が間に合わなかった……って言っても言い訳にしかならないですよ。ごめんなさい、忘れて下さい。こうしてまたチャンスをいだけたことをとても嬉しく思っています！本当にありがとうございます！そして、これからもPastel*Palettesをどうぞよろしくお願いしますっ！」

その言葉に合わせてまた頭を下げるみんな。僕もまた一緒に頭を下げる。誰も見ていないとしても、下げずにはいられなかった。だけど、安心した。多くの歓声が客席の方から聞こえてきている。それが意味することは、皆が受け入れられたということ。安心した。

そして、みんなの様子をしてみる。みんな思い思いに安心したような表情をしている。これまでの努力が無駄じゃなかったとわかったんだ。当然だろう。そして、彩ちゃんの様子を見ると、感極まって今にも泣きそうになっていた。これはまずいかもし

れない。彩ちゃんはMCだ。MCが泣いてしまつてはまともに進行ができない。彩ちゃんをなんとかしないと。

「みなさん、ベース担当の白鷺千聖です。こんにちば。生演奏ならではの臨場感をみなさんに楽しんでいただけたみたいで、何よりです!彩ちゃんのおかげね」

「ええっ!?そ、そうかな?ていうか、喜んでいいのかな?それ」

「私達はまだまだ未完成ですが、少しづつ、夢に向かって前に進んでいます。もつともつと前に進むために、応援よろしくお願いします!」

さすが千聖、ナイスフォローだ。正直、彼女がいないと大変なことになっていたかもしれない。無事、彩ちゃんも回復できたみたいだ。本当によかった。

「ねーねー、お客さんたちー!白菜ちゃんの演奏もちゃーんと見ててよねー!」

「私も、ブシドーのすばらしさがみなさんに伝えられるようにがんばります!」

「じ、自分もが、がんばります。す、すいません緊張してて。ふ、ふへへ、あつ、またふへへって言つちやいました。本番前にも千聖さんに注意されてたのに・・・」

「それじゃ、次もちろん生演奏でみなさんにお聴かせしたいと思います。彩ちゃん、曲紹介よろしくね」

みんなの機転で会場のボルテージはMAXになった。ここまで大歓声が聞こえてくる。さあ、ここからが本当の見せ場だ。次の曲はあの曲だ。

「は、はいっ！この曲は、今日のために私達のたーいせつなお友達が態々作ってくれた新曲です！聞いて下さい！」

この曲で、お客さんの心を完全に掴む。この曲で、世間が持つている彼女達に対する悪感情という壁を壊す。いや、今となつてはそんなもの壁ですらない。彼女達の地道な活動や、今日のここまでの彼女達のステージによつて、そんなものはすでに存在しない。あるとしても、それはもはや壁ではない。軽くたたけば割れるようなただのガラス板だ。さあ、今こそ目の前のガラスを割ろう。これから起こるのは革命だ。Pastel

*Pastellesによる革命だ。だからこそ名付けた。この曲の名前は

「パスパレポリューションず☆」

色が付いたその曲は、僕の想像を超えていた。

「すごい……」

ただただ、感嘆の声しか出てこない。まず最初に驚いたのは、その曲に付いた色は決して1色では無かった。彩ちゃんの努力の色。麻弥ちゃんの優しさの色。イヴちゃんの向上心の色。日菜ちゃんの自由の色。そして、千聖の愛の色。この5色が高いところで混じり合い、見事な共存を果たしている。聞いてて楽しくなってくる、まさに感情のフルコースだ。

「これが、アイドル……」

僕は今までその分野に対してあまり踏み込んだことは無かった。だけど、彼女達に出会い、そして仁さんに出会い、アイドルという分野の奥深さに驚嘆した。僕の知らない音楽の世界。僕の知らない音楽の色。ああ、本当にあの時、事務所の依頼を受けて大正解だった。こんな素晴らしい経験ができてるのだから。

そして、演奏が終わる。客席からは惜しみない拍手と歓声を送られている。彼女達の表情も満足そうだ。これで、全ての不安は割れて砕けた。惜しみない拍手に見送られながら、彼女達が舞台袖に帰ってくる。

「みんな、お疲れ様。最高のステージだったよ!」

「雅君、ありがとう!私、ほんつとうに楽しかった!」

「ミヤビさん、ありがとうございます!私も本当に楽しかったです!さあみなさん勝ち鬨を上げましょう!おー!」

「おー!雅君、あたしのステージどうだった?可愛い日菜ちゃんに見取れちゃったかなー?」

「じ、自分は緊張して気が気じゃ無かったです・・・ですが、雅さんが自分の中にもいてくれていると思うと、自然と勇気が出てきました。雅さん、本当にありがとうございます!」

「雅、本当にありがとう。ここまで来れたのも本当にあなたのおかげよ。今までも、今日も、本当にありがとう。これからも、よろしくお願いするわね?」

口々にお礼を言ってくれるみんな。今そんなこと言われたらダメだ。必死に堪えていたけど、もう限界だ。

「ふふっ、そろそろ限界だろうと思っていたけど、やっぱりね」

「あ、ミヤビさんが泣きました!」

「おー千聖ちゃんが言ってた通り、ほんとーに感動的場面に弱いんだねー」

「ところで、なんで彩さんも泣いてるんですか?」

「ふええ!?だ、だつて、なんだか安心しちやつて、それに雅君の涙を見たらつられちゃつて、ううっ……」

二人して涙を流す僕と彩ちゃん。それを優しく見守る4人。なんだか恥ずかしくなってきた。でも、泣いている場合でもない。まだ、決着は付いていないのだから。いや、Pastel*Paletteとしての決着自体はもう付いた。それに関しては、もう懸念事項は無い。

今日で全てに決着を付ける。昨晚僕はそう決意した。全てとは、何もPastel*Paletteのことだけでは無い。僕達の関係にも決着を付ける。今日のステージにより、僕達の汚名は返上できた。つまり、僕の夢も再び歩みを始めた。唯一の懸念も無くなった。僕達の関係を進展させるときだ。僕達の関係を妨げるガラスも割る。

さあ、最後の大会だ。黒城雅、今までの人生最大の大会が待っている。僕は、静

かに、
だが熱く決意を込めて、
流す涙を拭うのだった。

第16演目 世界には愛しかない

「ここまで本当に長かった。」

イベント前夜がやってきた。この一ヶ月、私の時計は壊れてるんじゃないか?と思うほどに長かった。

「いよいよ、明日だね」

「ええ、そうね。明日で、全てが決まるわ」

明日で私達の全てが決まる。泣いても笑っても、明日で結果が出る。私達が続けてもいいのか? 解散しなければいけないのか? 雅の夢が動き出すのか? 全て明日で決まる。

「不安とかはない?」

「ええ、大丈夫よ。これまで頑張ってきたんだもの。いつも通りやればいいだけ。問題も不安ももう無いわ」

「ここまで、不安が消えるまでやれるだけのことはやってきた。私の中の不安は、もう全て綺麗に消えて無くなっている。明日はいつも通りの演奏をするだけ。レッスンと何も変わらない。ふと、雅の方を見てみると、今にも泣きそうな顔をしていた。昔から雅は感動的場面に弱い。今も、私達のことを考えて感動してくれているのだろう。これ

は、後一押しで泣いちゃいそうね。

「なんで雅が泣きそうになってるのよ」

「だって、みんなが本当に頑張ってきたことは僕も知ってるからさ、その努力が報われる時がやっと来たのかと思うと、なんだか感動しちゃって」

「ふふっ、昔から雅はそうだったわね。感動物の映画とかに弱くて、映画館でも関係無しにすぐ泣いちゃって」

「だ、だってしょうがないじゃん！泣いちゃうものは泣いちゃうんだから！悪い？」

「誰も悪いだなんて言っていないわよ。それだけ、雅が私達のことを想ってくれてることだもの。感謝することはあっても、悪いなんて思うことは絶対に無いわ。雅、ありがとう」

案の定、私のその言葉が引き金になった。抑えていた涙があふれ出している。

「ふふっ、やつぱり泣いた」

「千聖、ぜ、絶対確信犯でしょ」

そんな雅が、有り難く思う。それだけ、私達に感情移入してくれているということなのだから。

「だけど、本当に長かったわ。あのお披露目イベントから、言葉にしたらたった一ヶ月の出来事なのだけれど、本当に長く感じたわ。それはもう、まるで時間が止まってしまっ

ていたかのように」

本当にこの一ヶ月長かった。それこそ、永久にも感じるぐらい長かった。理由はわかる。私の時間はあの日のお披露目イベントから動いていない。あの日、あの場所ですまっています。明日のイベントは、その止まった時間を動かす契機になる。失敗はゆるされない。

「千聖、明日で全て終わりにしようね」

「ええ、当然よ」

そう、明日で全てを終わらせる。明日で、全てに決着を付ける。私は改めてそう決意し、前夜を過ごした。

そして当日になった。いつも通りの朝を過ごし、いつも通り雅と家を出る。今日は雅も会場で見守ってくれる。そう思うと、自然と力が湧いてくる。雅に良いところを見せないといけない。やる気は十分だ。

「姉さん、おにいさん」

会場に着いた時だった。背後から聞き慣れた声が聞こえた。今まで毎日のように聞いてきた声。

「どうもです」

振り返ると、案の定そこには千景がいた。態々、会場まで見に来てくれたらしい。有り難い。

「千景、態々見に来てくれたのね」

「ここまで結構遠いのに。千景、お疲れ様」

「本当にお疲れです。いやーこんなに姉思いな妹を持って、さぞその姉は幸せ者なんでしょうね」

「ええ、そうかもしれないわね」

「そこは否定しないんだね」

否定できるわけが無い。私は、本当に自分が幸せ者だと感じている。千景がいて、雅がいて、Pastel*Palettesのみんながいる。これ以上望むのは贅沢なんじゃ無いかと思うぐらいに幸せだと思う。だけど、望まないといけないことはいくらでもある。

もつと大きなステージに立ってみたい。雅との関係を進展させたい。いくらでも望みが出てくるのだから、我ながら欲深い女だと感じてしまう。

「では姉さん。私は客席で姉さんの勇姿を見守ってますね」

「ええ、お願いするわ」

「姉さん、最高のイベントを期待してますね」

「・・・ええ、必ず今度こそ、最高のイベントにしてみせるわ。千景のためにもね」

その千景の言葉に、私は思わず感極まりそうになってしまった。あの日叶えられなかった千景との約束。最高のイベントを見せるという約束。それを果たすときが来た。今日で、あの日に置いてきた物全てを返してもらおう。利子も付けて返してもらおう。

そして、千景が会場内に入っていったのを確認して、私達も関係者入り口から中に入った。そして、私達の控え室に着くと、そこには既に私達を除くメンバー全員が揃っていた。

「あ、雅君、千聖ちゃん、おはよう！」

「おはよう彩ちゃん。みんな早いね」

「おはよう。待たせてしまったみたいね。ごめんなさい」

「いえいえ、自分たちが早かっただけで、千聖さんが遅刻したわけでは無いですから。謝ることは無いですよ」

本当にみんな早い。気合い十分といったところかしら？これなら最高のパフォーマンスが期待できそう。

「失礼するよ」

そんなみんなに感心していると、控え室に一人の男性が入ってきた。実際にその人物に会うのは初めてのことだった。テレビ等ではよく拝見しているし、マリさんからよく話は聞いていた。マリさん曰く、変人と天才の境目で彷徨つてる人物、早乙女仁さんがそこにはいた。

「仁さんおはようございます。今日はよろしくお願いします」

「グッドモーニングミヤツビー。ああ、トウデイは頼むよ。ユー達」

「早乙女仁さん。お会いできて光栄です」

「OK。堅苦しいのはナツシングだ。ミーはそういうのが苦手なんでね。ユーがミヤツビーのラバー、チーサだね？よろしく頼むよ」

私のことをチーサと呼ぶ早乙女さん。いえ、それは今はどうでもいい。今私達のことをなんとなく言ったかしら？確かラバーと言った。ラバー、L o v e r、それが表す意味は恋人。誰と誰が？私と雅が。その思考に辿り着いた瞬間、私の顔は真つ赤になり、頭は真つ白になっていった。

「ら、らーらららーらら、ららら、ら、らー、ら」

言葉が上手く出ない。みんなが何か言ってるけど聞こえない。だけど、そんなの今は気にならない。私と雅が恋人？確かに、似たような関係だとは思うけど、まだ正確には

なれていない。いつかはなりたいと思っ
ているけれど、雅はまだあの言葉
を言ってくれない。だけど、私
は雅のことを信じて、愛して、いつ
までだつて待つ。本当は、そろそ
ろ我慢の限界が来そうだけど、堪
えて待つ。そんな思考が延々と続
いて、そして現実
に引き戻された。

「ら、ラバー!？」

「あ、チサトさんが帰つてきま
した!」

「ずいぶんと長い旅でしたね。自
分少し心配になつてきてましたよ」

どれぐらいの時間が経つたのか
わからないけど、私はそれなりの
時間現実から離れていたらしい。
かなり恥ずかしい。それにしても、
緊張感の無い本番前だと思
う。まあ、私が原因の一端なの
だけけれど。こんな雰囲気で大
丈夫かしら?と少し心配になる
本番前の空気だつた。

「Pastel*Palettesさん、ス
タンバイお願いします!」

ついにこの時が来た。現在、私
達は舞台袖に来ている。そして、
そこでスタッフさん

に呼ばれたということは、私達の出番が近いということ。さすがに少し、緊張してくる。ううつ、なんだか緊張してきたよ……」

「ふふつ、彩ちゃんは本当に本番に弱いよね。でも、それも彩ちゃんらしくていいと思うわ」

「千聖ちゃん、それって絶対ホメてないよね？」

緊張してる彩ちゃんのおかげで、逆に私の緊張が少し和らいだ気がする。こんな時に、彩ちゃんの存在は本当に助かる。

「あ、そうだ！みんなであれやつてみない？あの、本番前にみんなで輪になって手を重ねるやつ」

「円陣ね。いいんじゃないかしら？」

「自分もいいと思いますよ。なんだか、アイドルって感じがしますね！」

「私やつてみたいです！これで士気向上ですね！」

「おーイブちゃん難しい言葉知ってるねー。いいんじゃない？あたしもなんだかるんってきた！」

彩ちゃんの意見に賛同して、みんな順番に手を重ねていく。一番下に彩ちゃん、その上に、イヴちゃん、日菜ちゃん、麻弥ちゃんの順で重ねていく。そして、私の手を重ねる。少しでも、少しでもみんなの支えになれたら。そう想いを込めて、手を重ねた。そ

して、重ねるべき人物はもう一人いる。私達のことを、いつも影から支えてきてくれた、大切な人。雅の手が重なったのを確認すると、みんな嬉しそうな、満足そうな表情を見せた。

「ついに、この時が来たんだね。私、Pastel*Palettesの丸山彩になれて、本当によかった!」

「アヤさん、まだ終わったわけでは無いですよ!今から修行の成果をみなさんにお見せしましょう!」

「そうだね!今日は絶対、みんなピカツとして、お客さんがグツとくるようなキラツとしたステージにしようね!」

「最初は、自分なんかアイドルなんて絶対無理だって思っていました。だけど、みなさんと一緒に汗を流して、笑っているうちに、なんだか自分でもできるんじゃないかと思えてきました。みなさん本当にありがとうございます。ふへへ」

「麻弥ちゃんなら立派にアイドルとしてやっていけるわよ。私が保証するわ。だけど、ふへへは禁止ね。みんな、本当にこの一ヶ月頑張ってきたわ。やれることは全部やってきた。だから、本番だからといって特別何かが変わるわけでは無いわ。レッスン通りやれば私達ならきつと大丈夫よ。みんな、夢の続きを見ましよう?」

「僕は、みんなと一緒にステージに立つことはできない。本当に残念だけどね。だけど、

覚えてて。僕の魂はみんなと一緒にいつもいる。みんなの中に置いていくから。だからこそ、あえて言うね。僕達は6人でPastel*Palettesだ。僕の方も思いつき楽しんできて?」

6人でPastel*Palettes。雅のその言葉にまた感極まってしまいうになる。今日は、涙を堪えるのに忙しい。本当は堪えずにそのまま泣いてしまいたい気分。だけど、どうせ泣くなら全てが終わった後がいい。みんなで、笑って涙を流そう。「よし、みんな!がんばるぞー!」

そうやって、一人で気を引き締めてたからこそ、そんな彩ちゃんの掛け声に思わずずっこけてしまった。がんばるぞー!って……

「え?みんなどうしたの?」

「あ、彩ちゃん。もうちよつと皆引き締まるような掛け声はなかったのかしら?」

「えー!そんなの私わかんないよ!」

「あはは!いつそのことブシドー!とかの方がよかったかもね!」

「ひ、ヒナさん!ブシドーは掛け声では無いですよ!」

「ま、まあこの方が自分たちらしくていいんじゃないですか?」

「ははっ、そうかもしれないね。僕もそんな気がするや」

確かに、この方が私達らしいかもしれない。変に緊張感を保ってるよりもいいかもし

れない。けどなんだか、泣きそうになってた自分がバカみたいに思えてきた。

「Pastel*Palettesさんお願いします！」

「はいっ！いいこう、みんな！」

そして、ついにスタツフさんからの呼びがかかった。私達の出番が来た。ここで、全てに決着を付ける。私達は、彩ちゃんの声が続いてステージに向かった。皆の表情は気合い十分。約束された最高の舞台が今から待っている。

「みんな、頑張つてね！」

雅のその声に、全員振り返って微笑みかける。雅には一番近くで見守つてほしい。私達の最高の演奏を。

「みなさん！こんにちわっ！私達、Pastel*Palettesです！まずは一曲聞いて下さい！しゅわりん☆どりくみん！」

そして運命のステージが始まった。最初の曲は、あの日最後まで演じることが叶わなかった曲。けど、今日は何も演じる必要は無い。お客さんには私達の本当の音を聞いてもらう。なんの偽りも無い、本当の音を。

私も含めて、みんなの演奏は、完璧と言つてもいいと思う。レッスンの時よりも、さらに高レベルな演奏が出来ていると感じる。弾いてて、気持ちいい。彩ちゃんの歌に聞かしては、緊張のせいかな、時折音が外れることがある。だけど、それが逆にリアリティが

あつていい。

「これってまた口パク？」

「いや、違うだろ。今音はずれたし」

「演奏も生っぽいな。すげーレベルたけー！」

お客さんの反応も上々。彩ちゃんの歌がやっぱリアリティを引き出してくれたみたい。そのまま、1曲目は無事に終了した。

「みなさん、改めましてPastel*Palettesのボーカル彩です！今日は来てくれてありがとうございます！最初に、みんなに謝りたいことがあります。私達は、前回のステージで歌も演奏もしていませんでした。みなさんに嘘をついてしまったこと、とても申し訳なく思っています。本当に、ごめんなさいっ！」

そして、彩ちゃんのMC。彩ちゃんの謝罪に合わせて、みんなで頭を下げる。あの時は、本当に申し訳ないことをお客さんにしてしまった。あのような失態はもう見せない。必ず、お客さん全員に満足していただけるような演奏を今日は、いえ、これからはしてみせる。必ず。

「本当は演奏するつもりだったけど、練習が間に合わなかった……って言っても言い訳にしかならないですよ。ごめんなさい、忘れて下さい。こうしてまたチャンスをいただけたことをとても嬉しく思っています！本当にありがとうございます！そして、これ

からもPastel*Palettesをどうぞよろしくお願いしますっ!」

そして、彩ちゃんのお願いに合わせて、またみんなで頭を下げる。そんな私達に送られたのは、暖かい歓声と拍手だった。

「パスパレいいぞー!がんばれー!」

「彩ちゃん応援してるよー!」

お客さんの声に、つい嬉しくなってしまう。私達は、みんなに無事受け入れられた。これを喜ばないわけにはいられない。ふと彩ちゃんの方を見てみる。その表情は、今にも泣きそうになっていた。これはまずい。彩ちゃんはMCを務めている。そのMCが泣いてしまつては進行が滞つてしまう。ここは私がなんとかしないと。

「みなさん、ベース担当の白鷺千聖です。こんにちは。生演奏ならではの臨場感をみなさんに楽しんでいただけたいので、何よりです!彩ちゃんのおかげね」

「ええっ!?そ、そうかな?ていうか、喜んでいいのかな?それ」

「私達はまだまだ未完成ですが、少しずつ、夢に向かって前に進んでいます。もつともつと前に進むために、応援よろしくお願いします!」

なんとか大丈夫そう。今の内に、持ち直すように彩ちゃんにアイコンタクトを送る。その私からの信号をちゃんと受信してくれたのか、彩ちゃんは必死に涙を堪えようとしていた。様子を見る限り、あと少し時間が稼げれば大丈夫そうに思う。

「ねーねー、お客さんたちー！日菜ちゃん演奏もちゃんとしてよねー！」

「私も、ブシドーのすばらしさがみなさんに伝えられるようにがんばります！」

「じ、自分もが、がんばります。す、すいません緊張してて。ふ、ふへへ、あつ、またふへへって言っちゃいました。本番前にも千聖さんに注意されてたのに・・・」

「それじゃ、次ももちろん生演奏でみなさんにお聴かせしたいと思います。彩ちゃん、曲紹介よろしくね」

私の意思を汲み取ってくれたのか、みんなも次々にお客さんに言葉を投げかけてくれる。その行為が、お客さんのボルテージを上げる手助けもしている。それでいて、彩ちゃんが持ち直す時間稼ぎにもなった。まさに一石二鳥といえる。

「は、はいっ！この曲は、今日のために私達のためーいせつなお友達が態々作ってくれた新曲です！聞いて下さい！」

あの日、雅が私達に贈ってくれた夢のうた。それを披露する時がきた。この曲が意味するところは私達による革命。今こそ、どん底からの大革命を起こそう。

「パスパレポリューションず☆」

すごい。演奏している私もそう感じてしまうほどの、最高の演奏だった。個性豊かな別々の色が、高い点で一つに交わり、最高のきらめきを体現している。雅は、この曲にはまだ色が無いと言っていた。そして、今この曲には確かな色が付いていた。目も眩む

ような色が。

「すげー。曲も演奏もすげーレベルたけー」

「これってひよつとしたらプロレベルじゃないか?」

「ああ、間違いないって。俺、一気にファンになっちゃったわ」

「この曲作つたのって、大切なお友達って言ってたけど、黒城雅だろ? パスパレの曲は全部担当するって雑誌のインタビューで確か宣言してたし」

「え? 黒城って、あの黒城?」

「ああ、あの黒城だよ」

「へーすげーな。さすがは黒城ってもんだ」

「雅様ってロック専門かと思ってたけど、こんな曲も作れるんだ!」

「すげーな。アイドルソング作らせてもこれ、あの早乙女仁に匹敵するんじゃないか?」

お客さんから聞こえてくる声も、賞賛ばかり。私達の演奏や、曲を作った雅に対する賞賛の嵐が飛び交っていた。私も、その声に応えないといけない。最高の演奏で。

そして、私達の全ての演奏が終了した。客席からは惜しみない拍手と歓声が巻き起こっている。私達は、その声に手を振りながら応えると、舞台袖に入った。そこには、もう一人の私達のメンバーが待っていてくれる。最愛のメンバーが。

「みんな、お疲れ様。最高のステージだったよ!」

「雅君、ありがとう！私、ほんつとうに楽しかった！」

「ミヤビさん、ありがとうございます！私も本当に楽しかったです！さあみなさん勝ち鬨を上げましょう！おー！」

「おー！雅君、あたしのステージどうだった？可愛い日菜ちゃんに見取れちゃったかなー？」

「じ、自分は緊張して気が気じゃ無かったです……ですが、雅さんが自分の中にもいてくれていると思うと、自然と勇気が出てきました。雅さん、本当にありがとうございます」「雅、本当にありがとう。ここまで来れたのも本当にあなたのおかげよ。今までも、今日も、本当にありがとう。これから、よろしくお願いするわね？」

その言葉を聞いて、もう一人のメンバー、雅は堪えきれずに涙を流した。そろそろ限界なんじゃないかと思っていたけど、案の定だったみたい。

「ふふつ、そろそろ限界だろうと思っていたけど、やっぱりね」

「あ、ミヤビさんが泣きました！」

「おー千聖ちゃんが言ってた通り、ほんとーに感動的場面に弱いんだねー」

「ところで、なんで彩さんも泣いてるんですか？」

「ふええ!?だ、だって、なんだか安心しちやって、それに雅君の涙を見たらつられちゃって、ううっ……」

そこからは、みんなで笑い合った。最高のステージだった。本当に、楽しかった。改めて感じる。私はきつと幸せ者なんだと。こんな最高の仲間と、最高のステージに立つことができたのだから。だけど、決してこれは終わりじゃない。これは始まり。私達の道はここから始まる。私達の栄光への道が。私はそんなまだ先も見えない道を想像して、幸せな気持ちに浸るのだった。

辺りはすっかり暗くなっていた。イベントが終わってから、それなりに時間が経過した。メンバーも、私と雅を除いてすでに帰途についた。現在私は、会場の入り口付近で雅を待っていた。その雅はというと、仁さんに挨拶にいつている。私も行こうかと思っていたのだけど、雅に二人で話したいこともあるからと断られた。少し悲しい。

「姉さん」

そんな、突っ立って雅を待っている私を呼ぶ声が背後から聞こえた。今日二度目の背後からのその声。そこには当然、千景がいた。

「千景、まだ残っていたのね」

「ええ、姉さんに一言声をかけて帰ろうかと思ひまして。姉さん、本当に最高のイベントでした。約束を守ってくれて、ありがとうございます」

その言葉に、今日何度目かの感動の波が来てしまう。だけど、ここでも必死に涙を堪えて千景に応じる。

「そんな、私はあなたとの約束を一度破つたのよ？ 非難を受けることはあつても、お礼を言われるようなことじゃないわ」

「あれ？ 私つて約束破られましたっけ？ そんな昔のこともう忘れちゃいました」

「本当にあなたは……」

おど 戯けたように軽く舌を出して言う千景。その優しさが今は嬉しかった。私は、本当にいい妹に恵まれたと思う。今度、彼女の大好きなミルフィーユをプレゼントしよう。喜んでくれるといいけど。

「では、私はそろそろ帰りますね。おにいさんも来たみたいですし」

そう言つて千景が指差す方向には、確かにこちらに向かつて歩いてくる雅の姿があつた。そんなの気にしなくても、千景も一緒に帰ればいいのに。

「気にしなくても、千景も一緒に帰って大丈夫よ？」

「いえいえ、私はまだ馬に蹴られたくはありませんので。では、姉さん。なんでしたら、今日は姉さんが帰つてこないと母さん達に伝えておきますけど？」

「ちや、ちやんと帰るわよ！」

そう言つて、手を振りながら帰つていく千景。最後に投下された爆弾発言のせいで、私の顔は赤くなつてゐる。

「おまたせ、千聖。どうしたの？顔を赤くして」

「な、なんでもないわ」

雅にもやっぱり指摘された。恥ずかしい。

「さつきここにいたのつて、千景だよね？どうやら、気を使わせちやつたかな？」

「そうみたいね。別に、気にしなくてもいいのに」

「うん、普段ならそうなんだけどね。今日は、有り難かつたかな」

どういふことだろう？雅なら、そんなこと気にしなさそうなのに。何か千景がいたらまずいこともあるのかしら？

「千聖、今までよく頑張つてきたね。お疲れ様」

「ええ、ありがとう。でも、皆が、雅がいてくれたおかげよ。本当にありがとう」

本当に、みんなで頑張つてきた。今日の成果は、皆の努力の結晶。本当に、みんなよく頑張つた。

「千聖、僕が鈍感だったせいで、今まで待たせてごめんね」

「雅・・・本当よ。ま、待ちくたびれすぎて、おばあちゃんに、なるかと思つた、わ」

雅のその言葉で、私はようやくやく雅が今から言うことを察することができた。察すると同時に、今日一日堪えていた涙が堰を切らして溢れそうになる。だけど、まだ堪える。彼の最後の言葉を聞くまでは。

「千聖、本当におまたせ。良いことを言おうかと思つたけれど、なんにも思いつかないや。だからシンプルにいくよ。好きだ。愛してる。僕と付き合つてほしい。そして、いつまでも僕の側にいてほしい」

その言葉を聞いて、ついに私の涙腺は決壊した。それは、私が今まで彼の口から聞きなかつた言葉。愛してる。単純にして、幸せになれるその言葉。ああ、私は本当に幸せ。もう、おかしくなつてしまいそうなほどの幸福感が今の私を包み込んでいた。

「ええ、ええ……！私も、愛してる。本当に、この日を毎日、夢に見ていた。私も、ずっと、雅に側にいてほしい。二人、しわくちやになつてもね」

そう言つて二人して笑い合つた。だけど、二人の目からは止めどなく涙があふれ出している。そんなの気にしないとばかりに、二人の距離が近くなる。そして、お互いの唇が重なり、涙が混じり合う。

この瞬間、この世界には愛しかなかつた。私達のいるこの場所が世界の全て。他のものなんてどうだっていい。ただただ、幸せだつた。ただただ、愛おしかつた。この幸せがいつまでも続いてほしい。そう願ひながら、私達は星空の下、愛を誓い合つたのだつ

た。

君が演じ、僕は歌う

僕は夢見る

《終》

第1章 君が愛し、

第二章 君が笑み、僕も笑う

第17演目 集結の運命

あのイベントから二週間が過ぎた。

僕と千聖が付き合い始めて二週間。この二週間、思った程の変化は無かった。

周りの親しい人にも、僕達のことは報告したけど、何を今更?とか、今までと何が違うの?とか、そういう反応ばかりが返ってきた。

確かに、言われてみれば今までとあまり大きな違いは無い気もする。今まで、そんなこと考えたことも無かったけど、付き合い合った今だからわかる。以前からまるで恋人みたいな生活を送ってきてたんだと。

「雅、準備できたわよ。行きましよう?」

そして、今日も僕は千聖と家を出る。今日は平日。当然これから学校だ。暦の上ではすでに夏に入った。それを証明するかのように、外に出ると気が滅入るような熱気が僕達を襲う。まだ6月上旬だというのにこの気候。この先の気候が本当に怖い。

そして、外に出ると、直ぐさま千聖が、僕の指に自身の指を絡めてきた。所謂、恋人つなぎというやつだ。これが、僕達が付き合い始めてからの些細な変化。そんな些細な

変化が、僕に幸福を実感させる。夢の一つが叶ったんだという実感を。

音楽家の頂点という夢は、まだまだ遙か先にある。それこそ、雲に覆われて見えないほどの高みだ。だけど、今の僕はそんな距離に絶望も焦りも感じない。隣に愛する人がいつまでもいてくれる。それだけで、どんな困難だって乗り越えられる気がするから。

「そういうえば、あの話はどうなったの?」

「あの話ね。私としては、どちらかというに参加に反対なのだけれど、皆で話し合った結果、参加することに決まったわ」

「あらあら、がんばってね」

あの話というのは、先日参加を持ちかけられたイベントのことだ。なんでも、近々とするライブハウスにて、今話題のガールズバンドを集めてライブイベントを行うらしい。参加者だという、とあるガールズバンドのメンバーが態々事務所まで招待に来たらしい。

「本当は、もっと大きなステージで演奏したいのだけれども、こういった地道なライブ活動からファンを獲得していく方向でいくそうよ。スタツフさんの決定だから従うけれども、ガールズバンドである以前に、私達はアイドルでもあるのだから、もう少し出るステージを考えてもいいと思うのだけれど……悪評が広まっていた時ならまだしも、今はそれでも無いのだから」

確かに、彼女達の評価は、前回のイベントで鰻上りになっている。ビジュアルも演奏も高レベルな新世代アイドルとして、毎日のようにテレビや雑誌で取り上げられているほどだ。

「でも、他のバンドの人達と交流を持つのはいい刺激になると思うよ。大きなステージとかは今は置いといて、他バンドとの交流を優先してみたら？」

「・・・そうね、確かに、他のバンドの人達の演奏技術も気になるわ。ガールズバンドというカテゴリーの中ではライバルになるものね。私達も、バンドとして負けてるつもりは無いけれども、得られるものは多いかもしれないわね」

僕も、今まで多くの音楽イベントに参加してきた。その度に、多くのアーティストの人達と共演し、多くの技術を学んできた。誰もが皆、自分には無い技術を持っている。それを見て学ぶことができるから、こういったイベントは割と好きだ。

「そうそう。だから、成長の為のプロセスと考えて、気軽に参加してみてもいいと思うよ？」

「そうね、わかったわ。これも良い経験と考えて、参加してみるわね」

これがまた彼女達の成長につながる。僕はそう思う。僕だつて負けていられない。今よりももつといい曲を作つて売り出していかないと。千聖との関係を進展させるという夢は叶った。だけど、その甘い夢に溺れている場合ではない。

音楽家の頂点に立つというもう一つの夢はまだまだ終着点すら見えない遙か頂にある。その頂に辿り着くまで、立ち止まっている暇なんて無い。目指す先が例えどんなに遠くても、僕は必ず到達してみせる。僕はそう決意を新たに、今の幸せを噛みしめるのだった。

「ああ、夢い……」

放課後、変人に出くわした。いや、見方によっては僕も変人に思われることもあるから、これだと彼女と同類になってしまう。別にそれはそれでいいんだけど、なんだか複雑な気持ちになってしまう。

彼女とはいちお顔なじみだ。というより、幼なじみだ。名前は瀬田薫。僕が音楽バカであるように、彼女は演劇バカと言っていていいような人種だ。どうして彼女とエンカウントしたかというと、単純に学校帰りに道で出くわしたただけだ。

いや、僕が一方的に発見してしまっただけで、彼女はまだこちらに気づいていない。今なら見つからずにやり過ぎせるかもしれない。今日は別の道から帰ろうと、僕は来た

道を引き返した。

「おや？そこにいるのは間違いない。雅じゃないか」

「人違いです」

どうやら逃走は失敗したらしい。すぐに見つかってしまった。儂い。

「ふつ、相変わらず連れられないね。今日は、麗しのお姫様は一緒じゃないのかい？」

「千聖？千聖は今日も仕事みたいだからね。一緒じゃないよ」

「ああ、やっぱり私と千聖は、すれ違う運命にあるのだね・・・儂い・・・」

「帰っていいかな？」

うん、別に彼女のことを嫌いとかそういうわけではないんだけど、一人で彼女の話し相手になるのはすごく疲れる。誰か一緒にいてくれればいいんだけど。

「薫さん。一人で勝手にいなくなるから教えてください・・・ってあれ？」

「おや？どうしたんだい美咲？そんなに慌てて」

「薫さんが一人で勝手にいなくなるからですよ。ってそんなことよりこの人はもしかして・・・」

と、そんなことを考えてる時だった。僕の知らない子だったけれど、思わぬ助け船が入った。艶やかな黒髪をした少女。今の僕には、その子がまるで神様のように思えた。

「薫の知り合いかな？初めまして。黒城雅です。よろしくね」

「あ、どうも、奥沢美咲です。よろしくお願いします。つて、え？本当にあの黒城雅さんですか？」

「おや？美咲、雅のことを知っているのかい？」

「当たり前ですよ！有名人じゃないですか！そもそも、薫さんと黒城さんが知り合いつてことの方がビックリなんですけど」

「なに。私と雅は、昔運命的な出会いを果たしてね。それ以来、苦楽を共にしてきたのさ」

「うん、単に共通のもう一人の幼なじみを通じて出会っただけだからね。苦楽を共にした経験も特に無いからね」

そう、僕と薫は、共通の幼なじみ、つまり千聖を通じて出会った。千聖と出会って間もない頃だった。あの頃の薫は、素直で良い子だったのになあ、としみじみ思う。今でも良い子だとは思うけど、少し育つ方向を間違えてる気がする。千聖も頭を抱えてため息をついていた。

「ふつ、そんなことは些細な事さ。私は確かに、雅との出会いは運命だと感じた。今でも、私がかから信頼できる数少ない友人だと思ってるよ」

「へー。薫がそんなこと言うなんて珍しいね。誰とでもすぐに信頼関係を築きそうなの。一方的に」

「わあ。辛辣」

「私だつて人は選ぶさ。シェイクスピアだつてこう言っている。愛は万人に、信頼は少数に、と。つまり、そういうことさ」

薫は、会話中にこうやって時折シェイクスピアの格言を引用する。だけど、言葉の意味はあまりよくわかっていないらしい。

「ははっ、薫は相変わらずだね。変わりないようで安心したような、ガツカリしたような」

「あはは、黒城さんも苦労されてるみたいですね」

「雅でいいよ。名字はあまり好きじゃないんだ。美咲ちゃんは薫とはどういう関係なの？見たところ学校も違うみたいだし、薫のファンってわけでも無いでしょ？」

薫と美咲ちゃん、二人は今制服を着ている。その制服を見る限り、美咲ちゃんは千聖と同じ花女に通っているようだ。そして薫は、麻弥ちゃんや日菜ちゃんと同じ羽丘女子学園、通称羽女に通っている。この時点で接点が無さそうに思える。

だけど、薫の場合例外がある。彼女のファンだ。薫は演劇部に所属しており、その王子様然りとした、ルックスと仕草で学内学外学年問わず、女性ファンが多い。その例に漏れず、美咲ちゃんも彼女のファンだと言うのなら接点として納得もいくけど、美咲ちゃんの様子を見る限りそれでも無さそうだ。全く二人の接点がわからない。

「薫さんとは、まあ、その、バンド仲間ですね」

「バンド？」

「ああ、そうさ。どうやら、私の美しさが、また可愛い子猫ちゃんを魅了してしまったみたいだね。スカウトを受けてしまったのさ。ああ、偉い・・・」

うん、素直にビツクリした。まさか、あの薫がバンドを組むなんて。彼女は先述した通り演劇バカだ。四六時中役を演じることしか考えてないような筋金入りの演劇バカだ。そんな彼女が誰かとバンドを組む。どういう風の吹き回しだろう？

「薫がバンドを組むなんて、どうしたの？演劇はいいの？」

「なに、私にかかれれば些細な事さ。それに、かのシェイクスピアだってこう言っている。何もしなかったら、何も起こらないと。つまり、そういうことさ」

「うん、全くわからないよ」

「あはは、ですよね」

誰か、通訳が欲しい。彼女が言いたいことを僕に教えてくれないだろうか？美咲ちゃんの様子を見る限り、バンド内でもこんな感じなんだろう。本当に、バンドとしてそれは成立するのだろうか？

「美咲ちゃん、バンドの方は大丈夫？ちゃんと活動できてる？」

「ええ、ちゃんとかどうかはこの際置いておいて、今のところはなんとかなってます。自

由人が集まったバンドですから、すごく大変ですよ」

「あはは、美咲ちゃんも大変みたいだね」

「ええ、常識が通じない世界ですからね。何を信じていいのかわからないですよ」

美咲ちゃんの話の話を聞き限り、どうやらぶっ飛んでいるのは薫だけという訳ではないようだ。もし、薫級にぶっ飛んだメンバーが複数いるのだとしたら、それはもう地獄絵図と言えるだろう。大惨事だ。

「そうだ、雅。この後、私達のバンドのレッスンを行うのだが、君も参加してみないかい？ 王子様と共演できるとなると、私も嬉しい限りだ」

「残念だけど、この後僕も仕事が入ってるんだ。またの機会にね」

仕事が入ってるというのも本当だ。この後、一度家に帰って準備を行い、すぐに家を出る予定だ。というより、そろそろこの場を離れないと本気で時間が無くなってきた。急がないと。

「ふっ、振られてしまったか。ああ、君はいつもそうやって私の心を弄ぶ。なんて儂いんだ……」

「うん、ごめん薫。そろそろ急がないと時間なくなってきたや。また今度ね。美咲ちゃんもまたね。薫のことよろしくね」

「あ、はい。さようなら」

「ああ、運命の下に、また会おう」

彼女達のその言葉を聞き届けて、僕はその場を後にした。まあ、彼女の言葉を借りるなら、また近いうちに運命の下に会う気がする。なんとなくそんな気がする。まあ、その際は僕だけではなく、千聖も揃って、幼なじみ三人組集結となる気がする。

それはそれで楽しいと思う。むしろ、薫と二人じゃなかったらなんでもいいや。先述したように、別に僕は薫が嫌いなわけではない。むしろ、幼なじみとして好感を持っていて。だけど、彼女と二人でいると無性に疲れるから、誰かと一緒にいい。昔はそうでもなかったのに、本当にどこでこんな道に迷い込んでしまったんだろう。

僕はそんな些細な疑問を感じながら、家への帰路に着くのだった。

第18演目 集結の園へ

あのイベントから二週間が過ぎた。

私と雅が付き合い始めたことはすでに周りの主立った人には報告した。だけど、返ってくる反応は予想通り、何が変わったのかわからないという意味合いの反応ばかりだった。私本人としても、何が変わったのかよくわからないような状態だから仕方ない。

わかっていたことではあるけれども、やっぱり私と雅は、付き合い前からかなり近い距離にいた。それこそ、恋人と同じくらい近い距離に。だから、いざ付き合いうってなくても、あまり以前との違いを実感できないでいる。

「雅、準備できたわよ。行きましょー?」

朝の家事を済ませて、私達は家を出た。そして直ぐさま、私は雅の指に、自分の指を絡めにかかる。絶対に離さないという意を込めて、強く握る。私達が付き合いようになってからの些細な変化がこの恋人つなぎ。

付き合い前は、付き合い前までは我慢すると決めて、手をつなぐ行為を自制していたけれど、やっとの思いで付き合い前までに至った今は、もう自制する必要は無い。思う存分つないでいる。握っている。

「そういえば、あの話はどうなったの？」

「あの話ね。私としては、どちらかというに参加に反対のだけれど、皆で話し合った結果、参加することに決まったわ」

「あらあら、がんばってね」

あの話というのは、とあるイベントへの参加以来のこと。先日、私達の事務所にとあるガールズバンドのメンバーが訪ねてきた。彼女達が言うには、今度、最近話題のガールズバンドを集めてライブイベントを行うから、私達にも参加して欲しいとのこと。

皆は楽しそうだと参加に前向きになっている。だけど、私は決して肯定的では無かった。

「本当は、もっと大きなステージで演奏したいのだけれども、こういった地道なライブ活動からファンを獲得していく方向でいくそうよ。スタツフさんの決定だから従うけれども、ガールズバンドである以前に、私達はアイドルでもあるのだから、もう少し出るステージを考えてもいいと思うのだけれど……悪評が広まっていた時ならまだしも、今はそれでも無いのだから」

そう、私達は、一ガールズバンドであるのは確かだけれど、一アイドルグループでもある。聞いた限りでは、そのイベントとはあるライブハウスで行うらしい。私の偏見かもしれないけれど、ライブハウスで行うイベントと言うからには、あまりイベントの規

模に期待はできない。

今の私達には、間違いなく勢いがある。前回のイベントの成功による勢いは計りしれない。早乙女仁が主催するイベントでの成功というのはそれまでに大きな意味を持つ。今なら、それなりに大きな規模のステージにだって立てるはず。

だから、私は今回の件に関して比較的反対意見を挙げている。もつと大きな規模のイベントを探そうと。

「でも、他のバンドの人達と交流を持つのはいい刺激になると思うよ。大きなステージとかは今置いていて、他バンドとの交流を優先してみたら？」

「・・・そうね、確かに、他のバンドの人達の演奏技術も気になるわ。ガールズバンドというカテゴリーの中ではライバルになるものね。私達も、バンドとして負けてるつもりは無いけれども、得られるものは多いかもしれないわね」

確かに、雅の意見もわかる。私達は、今まで他のバンドと同じイベントに出たことは無い。前回のイベントも、共演者は全てアイドルだった。バンドとはまたジャンルが違う。だから、私達の今の実力を計る比較対象がいなかった。

だけど、今度のイベントは違う。私達と同じ、ガールズバンドが集まるイベント。ということ、周り全てが比較対象になる。私達の現在の実力を知り、足りない部分を知ることが出来るかもしれない。そういう意味では、他バンドと交流を持てる今回のイベ

ントは有意義かもしれない。

「そうそう。だから、成長の為のプロセスと考えると、気軽に参加してみてもいいと思うよ？」

「そうね、わかったわ。これも良い経験と考えると、参加してみるわね」

そもそも、事務所のスタッフさんや、他のメンバーの意見ですでに参加は決まっている。だったら、参加するならするなりに、意味のあるイベントにしよう。雅のおかげで、私がすべきことも見つかった。私達はまだまだ成長できる。今は、その成長を優先しよう。大きなステージは、今じゃなくても上がれるのだから。

「ふええ……」

仕事の帰り、迷子に会った。そもそも、仕事の帰りという表現は正しくない。今日は、ライターさんの取材の仕事だったのだけれど、約束をしたフリーライターの人が急遽風邪を引いてしまい、取材できなくなったと連絡が入った。そのため、無駄足になったと少しイラツとしながら約束していた喫茶店を後にした時だった。

出た瞬間に迷子にいくわしてしまった。迷子と言っても、つい先ほどまで一緒に学校で授業を受けていたのだけれども、どうしてこんな所にいるのだろうか？確か、彼女は今日、最近始めたバンドの練習があったと言っていた。

練習を行う予定のスタジオは、学校を出てから、この喫茶店と反対方向なはず。相変わらずの方向音痴のようで、安心したような、ガツカリしたような、微妙な心境になる。「花音、こんなところでどうしたの？」

「あ、千聖ちゃん。よかったあ」

私を見るなり、安心したように笑顔を浮かべる彼女、私の親友松原花音。どこか放っておけないような、少し心配になる性格だけど、心から気を許せる数少ない子。そういう意味では、雅に非常に似通っている気がする。

「実は、スタジオに行こうと思って道に迷っちゃって、スタジオって、どこ？」

「花音、あなた学校から逆方向に来てるわよ」

「ふえ？」

気が抜けたような声を出す花音。その声を聞いて、私も気が抜けそうになる。

「花音は相変わらずね。いいわ、スタジオまで一緒に行きましよう？私もちようどその方向に行こうと思ってたし、話し相手がいた方が、私も嬉しいわ」

「千聖ちゃん、ありがとう」

そして、私達は二人でスタジオに向けて歩き出した。一人でつまらなく歩く予定だった距離も、花音と二人なら、楽しく歩くことができる。私としても有り難い。

「そういえば、千聖ちゃんは、今から雅君のところ？」

「ええ、そうよ。本当は私も仕事だったのだけど、急に無くなってしまって、だから雅の家は今から行くわ。とは言っても、雅も今日は仕事なそうだから、行ってもいないでしょうけど、たまには掃除でもしておこうかと思ってるわ」

「あははっ、本当に、千聖ちゃんは雅君思いだよね」

「そうかしら？ いえ、きつとそうね。最近、益々雅のことが愛おしくて仕方ないの。きつと、恋人関係になれたことが理由でしょうね。愛おしくて愛おしくて、仕方ないの」

「いいな、そういうの、すごく羨ましく思う。私も、いつか、そういう人に出会えるかな？」

「花音ならきつと出会えるわよ。私が保証するわ」

「千聖ちゃん、ありがとう」

「でも、雅より素敵な人は現れないでしょうけど」

「あはは、本当に千聖ちゃん、雅君のこと大好きだよね」

私は、雅以上に素敵な男の人なんていないと思ってる。だから、例えば花音であろうと、私より素敵な人に出会えるとは思えない。これは、千景にも言えること。千景も、毎日

のように運命の人に会いたいつて言っているけど、私より素敵な人に出会うことは決して無い。確信を持って言える。

「でも、本当に時々、千聖ちゃんが羨ましく思うの。私には無いものを一杯持つてて、素敵な恋人さんもいて、本当に羨ましく思う時があるの」

「花音・・・」

そう語る、花音の表情は少し悲しそうだった。本当に、私のことを羨ましく思っているのだろう。本当に、余計な羨望だと言うのに。

「花音。人は誰しも、得手不得手つてもものがあるのよ。持っている物、持っていない物つていうのがあるのよ。私には無いけれど、花音にあるものだけだつてある。私のことを羨ましく思うのは、花音自身が持つてない部分だから、余計に目立つてるだけよ。花音にしかない魅力だつて、たくさんあるのだから、あまり自分を下に見る物じゃないわよ？」

「千聖ちゃん・・・そうだね。ごめん、少し弱気になってみたい。私ももつと、変わらなないと。ハッピー、ラッキー、スマイルイエイ！」

独特な掛け声。これは、最近花音が入ったバンドで使われている掛け声らしい。花音は、この掛け声を言うと、なんだか元気が出てくるといつて、普段からよく使う。花音がいいのなら、それでいいけど、正直日常的に使うのはどうかと思う。

「ほら、花音。着いたわよ」

そして、二人で他愛ない会話に花を咲かせていると、目的地であるスタジオにはすぐに到着した。一人だと長く感じる距離も、二人だと、短く感じる事が出来た。迷子になつてくれた花音に感謝しないと。

「あ、ほんとだ。千聖ちゃん、ありがとう」

「いいのよ。私も、花音がいてくれたおかげで、楽しかったわ。それじゃあ、練習がんばってね」

「うん、千聖ちゃん、また明日」

そう言つて、花音はスタジオの中に入っていった。集合時間に遅れているために、その足は速い。私も、早く雅の家に行こう。雅が帰つてくるまでに、終わらせておきたい家事もある。そう思い、私も足を急がせるのだった。

今日一日も無事終わった。私は今、雅と二人で夕食後の憩いの時間を過ごしている。仕事は中止になり、迷子の花音を見つけたりと、色々あったけれども、やっぱり雅と二人でいる時間が一番落ち着く。私が一番幸せを感じる時間。

「そういえば今日、偶々薫に出くわしたよ」

「薫に？ 珍しいわね」

薫は私の幼なじみだ。私達の両親に親睦があり、その縁で知り合った。雅と出会ってからは、三人で過ごすことが多かった。中学に上がった頃からは、連絡を取る回数も減っていたけれど、どうやら元気にしているらしい。

「うん、相変わらずだったよ。それとビックリなんだけど、薫もなんとバンドを始めたんだって」

「薫がバンドを？ どういう風の吹き回しよ」

薫を一言で表すならば、演劇バカという言葉がしっくりくる。それほどまでに、薫という人間は、演劇に力を注いでいる。それこそ、一日二十四時間役を演じているほどに。それほどまでに、演劇に時間を割いていて、尚かつ天才でもあるのだから、手に負えない。私も一表現者として、負けているつもりは無いけれど。時折羨ましくもなってしまう。

ダメね。これじゃ、今日の花音と一緒に。自分が持っていない部分だからこそ、その部分が目立って羨ましくなるだけ。私と薫では、演じ方のベクトルが違う。薫の演技を私が真似できないように、私の演技を薫も真似できない。要するに、演技に関してはお互い様。そこに優劣は無い。

「だけど、演劇の方は大丈夫なのかしら？ 薫の事だから、バンドも演劇の一環とか言いそうだけれど」

「あはは、確かに言いそうだね。薫も、意味のわからない言い回しで、問題ないって言うてたし」

「ふふつ、本当に相変わらずみたいね。花音もバンドを始めたみたいだし、段々周りの皆がバンドを初めていくわね。その内、薫や花音と集まって、セッションするのもいいかもしれないわね」

「ははっ、それいいね。その時はギターボーカルは務めるよ。薫も見たところギターみたいだし、花音ちゃんやんがドラム、千聖がベースで、バランスを考えてキーボードのイブちゃんでも誘ってみようか。楽しそうだね」

「ええ、きつと楽しくなるわ」

きつと楽しくなる。私はそう確信していた。私達幼なじみが集結して一つのことに取り組むなんていつ以来だろう。きつと楽しい時間になると思う。そこに花音とイブちゃんが加わればなおさらだ。

私は、いつかそんな日が来てもいいな、と考えながら、まったりとした時間を過ごした。近い未来にきつとそんな日が来るはず。そんな期待に胸を膨らませて、私は今の幸せを享受するのだった。

第19演目 走り始めたばかりのキミに

爽やかな朝だった。

季節は初夏に差し掛かり、本格的な夏の訪れを予感させる、暑い日々が続いている。そんな中、この日は比較的涼しい朝を迎えていた。

「えーつと、あれは……」

「はい、雅お醤油」

「あ、ありがとう」

そして、いつもと変わらぬ朝を僕達は過ごしていた。穏やかな、いつもの朝。

「おやおや、『あれ』だけで意思が伝わるなんて、本当にもうどう見ても夫婦ですよね」

「ちよ、ちよつと、千景！ かかかからかうのはやめなさい！」

ただ一つ、千景の存在を除いて。本当になんているの？

「千景、今日はどうしたの？ 休日とはいえっても、朝から僕の家に来るなんて珍しいよね？」

「あ、すいません。熱いお二人の邪魔になってますよね」

「いや、誰もそんなこと言っていないから」

ダメだ。朝から調子が狂いそうになる。彼女も方向性は違うけど、薫に似たものを持つている。つまり、長時間絡んでると疲れる。二人とも実際には良い子なんだけど、長時間傍にいるのは勘弁して欲しい。

「まあそれはおいておいて、今日はおにいさんライブですよね？」

「そうだね。ライブだね」

確かに今日僕は、ライブの予定が入っていた。ただし、僕の単独ライブというわけではない。あの *Mar m a l a d e* との共同ライブだ。どうしてこんなことになっていくかという、約一月前のあのパスパレ復権イベントの日、なんとわざわざ仁さんからお声かけいただいたのだ。彼女達とのいい記念になるからとのことだったけど、その真意まではさすがにわからなかった。なんの記念なんだろう？

そして、本来なら打ち合わせやらチケットの販売準備などの関係で、もつと時間がかかるところを、なんと約一ヶ月でライブを行う強行日程になった。これも仁さんの要望で、時間が無いからと言っていた。何の時間なのかはさっぱりだ。

「それでですね、私も今日はライブを見に行きますので、今日のおにいさんの状態を確認しに来たのです。体調に異常は無いですか？ちゃんと睡眠は取れましたか？」

「大丈夫だよ。コンディションばっちり！今日のライブ、期待しててね！」

「ふふっ、がんばってね。私もレッススが終わってからすぐに行くわ」

「うん、満足してもらえそうなライブに絶対するよ！」

千聖が来てくれるのは知っていたけど、どうやら今日は千景も来てくれるらしい。これは、絶対今日のライブは成功させないといけない。なんだかやる気が漲ってきた。今からライブが楽しみだ。

「……続いてのニュースです」

その後も僕達三人は、朝のニュースをBGMに、穏やかな朝を過ごしていた。今日も千聖の作る朝食はおいしい。それは当然わかっていることなんだけど、以外にも千景も千聖に負けず劣らずの料理の腕前をしている。

まあ、千聖は僕の好みを僕以上に熟知している。その分、やっぱり千聖の料理の方がおいしく感じてしまう。だけど、実際に違う人が口にし、審査した場合、甲乙付けがたいんじゃないだろうか？運命の人を料理で釣れそうなほどの腕前だ。

「……ここで臨時速報が入ってきました」

そんな、脳内で二人の料理勝負を思い描いてるときだった。テレビのアナウンサーが臨時速報と銘打って、何かを伝えようとしている。人間誰しも、そんな前置きをされたら内容がどうしても気になってしまっただろう。僕だってそうだ。今まで聞き流していたニュースに耳を傾ける。

「人気アイドルグループMarmaladeが、来月のライブを最後に電撃解散するこ

とを發表しました」

「……え？」

僕の耳はおかしくなってしまったのだろうか？確かに、アナウンサーは、電撃解散と口にした。誰が？人氣アイドルグループが。グループ名は？M a r m a l a d e。聞き間違いで無ければ、確かにアナウンサーはそのように伝えた。僕は、いや僕は、その後のアナウンサーの声が全く耳に入ってこなかった。誰も動くことすら忘れて、ただ呆然としていた。

「嘘……ですよね……？」

最初に声を出せたのは千景だった。その声のおかげで、少しづつ現実に思考が帰ってくる。

「わからない。でも、確かめなくちゃいけない」

今日は、ちょうど彼女達に会える。その時に確認すればいい。正直に言うと、嘘だと言つて欲しい。だけど、これが現実なのだろう。僕達は、その後も口数少なく、不穏な朝を過ごすのだった。

ライブ会場に到着した。会場にはすでに多くのお客さんが押し寄せている。今日の合同ライブは話題性もあり、聞いた話によると、チケットも即日完売したらしい。欲しくても手に入らなかつたファンも多いとのことだ。

「雅君、久しぶり！去年の音ステ一緒に出て以来かな？」

控え室に入つて数分のことだった。一人の女性が入つてきた。彼女はあゆみさん。Marmaladeに所属するアイドルだ。彼女とは何度かテレビ番組などで共演したことがある。去年の音楽ステーションという番組に共演したのが最後の共演となつていたが、こうやつて今日、また同じステージに立つことができる。間違いなく、今日が最後の共演になるのだろうか。

「あゆみさん、お久しぶりです。今日は誘つていただいてありがとうございます」

「いいのよ。私も、いい思い出になるから」

「あゆみさん、解散するっていうのは……」

「雅君、暗い話は終わつてからにしよう？今は、ステージをおもいつきり楽しみましょ？」
「……そうですね。今日はよろしくお願いします」

簡単に挨拶を済ませると、あゆみさんはそのまま控え室を出て行つた。彼女にしては珍しい。いつもなら、控え室に来るともつと長居していくのだが、非常に短い挨拶

だった。

「まあ、アーミーにも複雑な事情があるんだ」

「あゆみさんは兵隊かなんかですか」

あゆみさんと入れ替わるように、一人の男性が入ってくる。仁さんだ。そして、相変わらずのネーミングに思わずツッコんでしまった。何？アーミーって。いつからあゆみさんは兵隊になったのだろう。

「まあ、シー達に関しての事情はラバーも交えてトークしようか。入ってきたらどうだ
い？」

仁さんが誰かに対して入室を促す。仁さんはラバーと言った。その時点で誰のことは検討がつく。だけど、どうして彼女がここにいるんだろう？ここは関係者専用の控え室。いくら彼女とはいえ、入室は許されないと思うのだけれど。ほどなくして一人の少女が入ってくる。予想通り、そこにいたのは千聖だった。

「千聖？どうしてここに？」

「ミーが呼んでおいたのさ。今からするトークはシーにも一緒にリッスンしてほしかったからね」

「ええ、会場に着いたら雅の控え室に来るように早乙女さんに呼ばれたのよ」

どうやら千聖のことを呼んだのは仁さんらしい。だけど一体、仁さんが千聖にも聞か

せたい話とは一体なんだろう？

「まず、今回のMarmalade解散のリーズンからだ。それは、とあるメンバーのマリッジだ」

マリッジ。つまり結婚。ニュースではそこまで報道はされていなかった。おそらくまだ、情報規制をかけているのだろう。そんなことを今僕達に言ってもいいのだろうか？

「ユー達にはリッスンして欲しかったんだ。シー達も今回のことで悩みに悩んだ。解散か、残りのメンバーで活動継続か。そしてメンバー全員で出したアンサーが解散だった。Marmaladeは全員揃ってこそMarmalade。例え一人でも欠けたらそれはもうMarmaladeじゃ無い。それがシー達のアンサーだ。アーミーもそう認めた。だが、シーは本当にMarmaladeのことがベリーライクだった。今もそれがベストだと理解はしている。メンバーのマリッジを祝福すべきだということとはわかってるし、実際祝福している。だが、解散したくないと思ってるシーが、シーの中にいるんだ。このままだと、シーは解散することをリグレットしてしまうだろう。なんとカリグレットの残らない方法は無いかと考えてはいるのだが、全くグッドなアンサーが出てこない。シー達のフリーダムを尊重したい。そう思って、シー達の事務所ともトークして、ラブに対する規制を設けてなかった弊害が今回の解散だ。ミーも、

その措置がベストだと思っていた。実際に、シー達のフリーダムを尊重することによって、シー達のパフォーマンスはエクセレントなものになった。だが、このままだと、ミーも、アーミーもリグレットしてしまうかもしれない。ユー達の事務所もラブに対する規制は設けていないだろ？だからこそ、ユー達の関係が認められているわけだから。だが、チーサ、ユーもアイドルなのだからこれだけはラーンしておいてほしい。ラブは、少なからず周りにも影響を与えると。ユー達の関係は応援しているが、そのことだけはラーンしておいてほしい。ロングトーク失礼した」

仁さんの言葉が心に響く。愛は周りにも影響を与える。確かにそうなのだろう。影響を与えた上で、それが決して良い影響とも限らない。あゆみさんも、仁さんも、このまま解散してしまったら後悔が残る結果になってしまうのだろう。何かいい打開策は無いのだろうか。

「では、ミーもこれで失礼するよ。今のミーのトーク、よく考えてみてほしい。では、また後で会おう」

そう言い残して、仁さんは事務所を出て行った。今思えば、おそらく一ヶ月前のあの復権ライブの時にはもう解散が決まっていたのだろう。だからこそ、今回の合同ライブを仁さんは企画した。少しでも、あゆみさん、それに仁さんの後悔を無くすために。

「愛って、重いよね」

「そう、だね」

愛は重い。だからこそ、大切にしたい。だからこそ、影響が大きい。おそらく、この先も僕達の関係が進展、まあつまり本当に夫婦になるとすると、その時パスパレのみんなはどうするんだろう？ やっぱり今回のあゆみさん達のように解散という選択をするのだろうか？ 彩ちゃんあたりは間違いなく大泣きするだろうな、と思う。

「雅、Marmaladeのことも気になるのだけど、実は彩ちゃんも今問題なのよ」
「彩ちゃんが？」

彩ちゃんに一体何があつたんだろう？ 昨日も会つたけど、その時はいつも通り元気そうだったけど。

「実は、彩ちゃん、Marmaladeのあゆみさんに憧れてたそうなのよ。それで、解散することを知って、元気が無くなっちゃって、レッスンにも全く気が入ってないみたいで……」

「あらら、それは大変だね」

言われてみれば、アイドルとしての彩ちゃんのスタイルはあゆみさんに似ている。彼女に憧れているというのにも納得できる。そこで、僕はふと、あるアイデアを思いつく。うん、上手くいくかはわからないけど、もしこれが上手くいけば彩ちゃんは元気になり、あゆみさん達の後悔も無くせるかもしれない。

「そうだね。彩ちゃんに元気になつてもらうために、一つサプライズプレゼントを用意しようか」

「サプライズプレゼント?」

そう、サプライズプレゼント。そのために、彼女達の協力が必要だ。それがサプライズのための第一条件。それさえクリアできればきつと上手くいく。僕は、頭の中で計画を組み立てつつ、ライブの準備を進めていった。余談にはなるけど、その日の合同ライブは、大成功に終わった。千聖も、ずっと興奮しっぱなしだったと終わってから僕のかっこよさについて熱弁してくれた。かなり恥ずかしかった。

そして、それから一ヶ月ほどが過ぎた。今日はMarmaladeの解散ライブの日だ。今はまだ開場一時間前にも関わらず、すでに多くのお客さんで入り口前は溢れかえっている。そんな中、僕は関係者入り口前にいた。ここで今は人を待っている。

「雅、連れてきたわよ」

ほどなくして、千聖が来る。千聖だけでは無い。そこには日菜ちゃん、イヴちゃん、麻

弥ちゃん、そして彩ちゃん、Pastel*Palettesメンバー全員がそこにいた。

「み、雅君? どうしてここに? それにここって関係者入り口だよな? こんなところにいたらまずいんじゃない」

今から行うことは彩ちゃんにだけは伝えていない。当然だ。これはサプライズなのだから。教えてしまつては意味が無い。

「大丈夫だよ。事前に仁さんに許可はもらつてるから。さあ、こつちだよ。着いてきて」
 そう言つて、先頭を歩く僕。途中にはMarmaladeの控え室もあり、彩ちゃんの顔が段々緊張で堅くなつているのがよくわかる。この先のことを考えると、少し心配だ。

「さあ、着いたよ」

「ここつて? …… ぱ、Pastel*Palettes控え室!? な、なんでこんなのがあるの!?!」

そう、ここは正真正銘Pastel*Palettesの控え室。ここまで来れば、大体の察しはつくだろう。

「さあ、みんな。そんなに時間は無いんだから準備を早くしちやつてね」

「ええ、さあ、みんな、いきましょ?」

千聖に促されて部屋の中に入っていくみんな。そんな中でも、彩ちゃんは未だに何が何やらわかっていないようだ。このままで大丈夫だろうか？

しばらくすると、彼女達が部屋から出てくる。そこには、メイクを整え、ライブ衣装に身を包んだPastel*Palettesの姿があった。

「雅、おまたせ」

「へへへー、さあ、今日はがんばっちゃうよー！」

「私も、今日はやる気十分です！さあ、いざイクサへ！」

「じ、自分は彩さんほどじゃないですけど、なんだか緊張してきました・・・」

「ちよ、ちよっと待って。衣装にまで着替えて、ほ、本当にどういうこと!？」

「彩ちゃん、本当はもうわかってるでしょ？」

「わ、わかっているけど、わかっているけど、そんなのって・・・」

「さあ、もう時間だよ？行こう？」

そう言つて、またもみんなの前を歩く僕。目指す先はライブステージ。その舞台袖にはすでに先客がいた。いや、お客さんなのは僕達なのだから、この表現はおかしいかな。主役の姿がそこにはあった。

「あゆみさん、今日はありがとうございます」

「ううん、お礼を言うのは私の方よ。一度、Pastel*Palettesのみんなと

は共演してみたかったの。雅君、ありがとうね？」

「あ、あ、あゆみ、さん……!?!」

「うん、Marmaladeのセンター、柑橘系な桃こと、あゆみです！」

やっぱり緊張している彩ちゃん。さつきから、言いたいことはいっぱいあるけど、なんて言っているのかわからないように、口をパクパクさせている。そして、やつとの思いで出てきたのは彼女の名前だった。

「な、なんで……」

「最近、彩ちゃんの元気が無かったから、雅がサブライズプレゼントとしてこの舞台を用意してくれたのよ。彩ちゃんにとつても良い思い出になるだろう、って」

「うん、私もPastel*Palettesのみんなと、彩ちゃんと最後に共演してみたかったから嬉しいわ」

「雅君……」

「さあ、そろそろライブが始まるわ。私が合図したら入ってきてね？ 思いつきり楽しみましょう？」

そう言つて、入場の準備をするあゆみさん達、Marmalade。今も彩ちゃんは緊張で堅くなっている。これじゃちよつと心配だ。

「彩ちゃん緊張する気持ちもわかるけど、そんなんじゃないよパフォーマンスできないよ

「？」

「ううっ、でも……」

「それに、泣いても笑っても、あゆみさん達 *Marmaid* と共演できるのは今回が最初で最後なんだよ。楽しまなくちゃ絶対後悔するよ」

「後悔、する……」

「そう、だから、最高の思い出になる、最高のステージにしようよ！」

「最高の思い出……うん、そうだよね！こんなチャンス絶対にもう来ないよね！雅君、ありがとう！私、おもいつきり楽しんでくる！」

そう言う彩ちゃんは最高の笑顔をしていた。これならもう心配無いだらう。そして、ついにラストライブが始まった。

「みんなー！今日は私達のライブに来てくれてありがとうー！最後まで全力で楽しんでいてね！そして、今日はなんとサプライズゲストがきてまーす！まずは、彼女達とのオープンングイベントを行うよー！入ってきてー！」

「さあみんな、後悔の無いようにね！」

みんながあゆみさんの声に従ってステージに入っていく。これが、僕が彼女に贈るサプライズプレゼントだ。アイドルとしての道を走り始めたばかりの彼女に贈る、最高級のプレゼント。その瞬間、客席にはざわめきが起こる。彼女達のごときは、お客さんにも

伝えていない。まさにサプライズだ。

「知っている人も多いと思うけど、いちお紹介するね！Pastel*Palettesのみんなです！今日私は、どうしても最後に彼女達と一緒にステージに立ちたかったから、わざわざ呼んじやいました！じゃあ彩ちゃん、軽く自己紹介よろしくね！」

「はいっ！みなさんこんにちは！Pastel*Palettesボーカル担当の丸山彩です！今日は、憧れのあゆみさんに呼んでもらってここに立たせていただいています！本当は、今すぐ泣きたい気持ちですけど、がんばって歌います！」

その瞬間に客席から歓声が飛んでくる。どうやら、お客さんにも歓迎されているようだ。実をいうと、お客さんに受け入れられるのか少し心配していた。でもその心配は杞憂だったようで、安心した。

「私達、Marmaladeは今日で解散します！だけど、Marmaladeのバトンは、Pastel*Palettesのみんなに、私、あゆみのバトンは彩ちゃんに託します！みんな！これからはPastel*Palettesのことをもつと応援してあげてね！それじゃ一曲歌うよ！Pastel*Palettesで、しゅわりん☆どり〜みんな！」

曲が始まる。あゆみさんは、今日のためにわざわざこの曲を練習してくれた。二人で歌う彩ちゃんとあゆみさん。演奏するPastel*Palettesのみんな。振

り付けを踊る *Marmalade* のみんな。素敵なステージだった。まるで、初めて共演するなんて嘘かのような息の合いよう。本当に素晴らしいパフォーマンスだ。

曲が終わり、最後の挨拶を済ませてからパスポレのみんなが舞台袖に帰ってくる。みんなの表情は本当に明るいものだった。本当にステージを楽しんだのが容易にわかる。

「みんなお疲れ。どうだった？」

「素晴らしかったわ。本当に、いいステージだったわよ」

「もうみんなびかってたよね！ *Marmalade* もあたし達も本当にみんなびかってたー！」

「最高の舞台でした！みなさん本当に武士のように輝いてましたー！」

「じ、自分は緊張しました・・・でも、それでも本当に素晴らしいステージでした。楽しかったですね」

「うん、本当に、楽しかった！雅君本当にありがとう！最高の思い出になったよ！」

みんな満足してくれているようだ。本当によかった。これでみんなの思い出に、*Marmalade* は強く残っただろう。その後も舞台袖からライブを僕達は見ていた。そして、ついにその時は来た。

「みんなー！楽しんでくれてるかなー？・・・次で最後の曲になります」

「次で・・・最後・・・」

彩ちゃんのもの悲しい眩きが聞こえる。泣いても笑つてもこれで最後。これで、Marmaladeは解散する。

「その前に、少しだけいいかな？ 今日で、Marmaladeは解散します。だけど、Marmaladeがこの世界から消えるわけじゃないよ。もちろんあゆみも！ みんなのなかで、Marmaladeは、あゆみはどんな存在ですか？ きつと歌が苦手で、きめポーズがへんでこで、感動してすぐ泣く、だけど、何があつても絶対にめげない、諦めない！ どんな時だつていつも笑顔！ みんなにとつて、そんな存在になれていたらうれしいです！ そしてあゆみも、Marmaladeもみんなの中でずっと生き続けます！ もしもつらいことがあつた時、ぼんこつなりにがんばつてた変なアイドルがいたな、つて思い出して元気になつてくれたら嬉しいかな」

「・・・つ、あゆみさん・・・」

彩ちゃんは堪えきれずに泣いていた。客席からもあゆみさんに対する熱い声援が飛び交っている。暖かくて、熱い声援が。

「ううっ、みんな、ありがとう！ それでは最後の曲、全力で楽しんで下さい！」

最後の瞬間まであゆみさんから笑顔が消えることは無かった。その顔は涙でグチャグチャになり、アイドルとしてどうかと思うほど汚れていた。だけど、笑顔だけは消えることが無かった。そんな彼女は、まさしく最後までトップアイドルのあゆみだった。

そして、最後の曲が終わる。それが意味することは、Marmaladeの解散。ついに、彼女達のアイドル活動は終わりを迎えたのだ。

「・・・みんな行くこうか」

そして、僕達は舞台袖を後にし、控え室に向かった。泣きじやくる彩ちゃんをあやしなから。

控え室に戻ってきたみんなは、すでに着替えを済ませて帰り支度を整えていた。僕はこれからまたあゆみさんの所に寄つていこうと思う。今日のお礼を改めてしないとイケない。だけど、その前に控え室の扉がノックされて、二人の人物が入ってきた。あゆみさんと仁さんだ。

「あ、あゆみさん!？」

「うん、あゆみです。彩ちゃん、みんな、今日は本当にありがとうね」

「そ、そんな、お礼を言うのは私の方で、あう、その、」

「あはは、緊張しなくても大丈夫よ。今はもう、アイドルのあゆみじゃなくて、普通のど

「こにでもいる女の子のあゆみだから」

「あゆみさん……」

その言葉に、少し緊張が解けたのか、彩ちゃんの表情が少し柔らかくなる。だけど、同時に解散した事実がまた悲しくなってきたのか、少し悲しそうにも見える。

「あの、私あゆみさんの言葉に勇気をもらって、アイドルを目指したんです！いつも言っていたあの言葉に感銘を受けて」

「どんな人でも、努力すれば夢は叶う。だからみんな、自分なんかなんて思わないで夢を見て欲しい、ってやつね。私もこの言葉を信じてがんばってこれたの。私の言葉、届いてる人がいてうれしいな。それでかな、彩ちゃんが私に似ている気がしたのは」

「えっ！」

「最初はお披露目イベントのことニュースで見えて知ったの。そして、仁さんのイベントに出てる姿を見て、その中で彩ちゃんを見ているうちに、自分に似ている気がして。決して完璧なタイプではないけれど、それでもいつも笑顔で一生懸命なところとか、すぐ泣いちゃうところとか、他人な気がしなくて、それで一緒に共演してみたくなったの。彩ちゃんに興味があつたっていうのが本音ね」

「あゆみさん、私、」

「彩ちゃん、今日のライブで、私はあなた達にバトンを託した。だけど、私達と同じ道を

走らなくても大丈夫だからね？あなた達なら、私達を超えていける。だから、私達に囚われないでね」

「あゆみさんを、超える……」

「そう、大丈夫彩ちゃんなら絶対私達を超えるアイドルになれる。だって、彩ちゃんは何かあつても絶対にめげない、諦めない、どんな時だっていつも笑顔！彩ちゃんなら絶対大丈夫！」

「……わかりました！私、あゆみさんを超えるそんなアイドルになつてみせます！」

「うん、楽しみにしてる！本当は、今まで私も解散することを後悔してたの。だけど、彩ちゃんのおかげでその後悔ももう無くなった。私の言葉が届いてくれる人がいた。私の思いを受け継いでくれる人がいる。そう思うと、もう未練は無いわ。後悔は無いわ。よし、今から彩ちゃんに私直伝のとおきおきの決めポーズ教えてあげるわね！」

「はい！お願いしますっ！」

どうやら、あゆみさんの後悔も消えて無くなったようだ。安心した。彩ちゃんも元気になってくれたみたいだし、今回の計画は全て上手くいったと言えるだろう。いや、まだ仁さんの後悔が残っている。これを無くさないことには、成功とは言えない。

「ミヤッビー。本当にサンキューベリーマッチだ。ユーのおかげでアーミーのリグレットは無くなったようだ」

「はい。でも、まだ仁さんの後悔が残っています」

「それこそ、ノープロブレムだ。ミーのリグレットは、アーミーにリグレットが残ってしまふことだからね。アーミーのリグレットが無くなった今、ミーのリグレットも無くなったということさ」

そういえばそうだった。仁さんに関してはなんの問題も無いんだった。これで全て万事解決だ。本当によかった。これで、誰一人後悔する人はいない。今回の計画は大成功に終わった。彩ちゃんも、パスパレのみんなも喜んでくれたみたいで何よりだ。これで、彩ちゃんもまた走り出すことが出来る。

パスパレのみんなは、アイドルとしての、アーティストとしての道を走り始めたばかりだ。これでも僕は、アーティストとしては彼女達の大先輩。可能な限り、彼女達を支援していかないといけない。それが、先輩の努めだと思うから。だからこそ、困ったときはいつでも手を差し伸べよう。また彼女達が走り出せるように。後に仁さんが言うには、みんなを見つめるその時の僕の瞳は、ひどく穏やかだったそうだ。

第20演目 前へススメ!

変わり映えしない、穏やかな朝だった。

初夏という季節にしては涼しく、過ごしやすい朝。

「えーっと、あれは……」

「はい、雅お醤油」

「あ、ありがとう」

私と雅も、この平和な朝を満喫していた。本当に穏やかな、心安らく朝。

「おやおや、『あれ』だけで意思が伝わるなんて、本当にもうどう見ても夫婦ですよね」

「ちよ、ちよっと、千景! かかかからかうのはやめなさい!」

ただ一つ、千景の存在を除けば。ほんと、なんでこの子は着いてきたのかしら?

「千景、今日はどうしたの? 休日とはいっても、朝から僕の家に来るなんて珍しいよね?」

「あ、すいません。熱いお二人の邪魔になってますよね」

「いや、誰もそんなこと言っていないから」

雅も、千景相手にたじたじになっている。今の千景の顔なんて、中学生と言うよりは、

どこにでもいる恋愛ネタ大好きの熟年主婦の顔そのもの。こんな調子で、本当に運命の人を見つけたつもりはあるのか疑問に思う。

「まあそれはおいておいて、今日はおにいきさんライブですよね?」

「そうだね。ライブだね」

そう、今日雅はライブの予定が入っている。しかも、ただのライブじゃない。あの人気アイドルグループ *Mar malade* との合同ライブ。当然、話題性は十分。 *Mar malade* のファン、雅のファンがチケットを求めたおかげで、チケットはもの数時間で完売したらしい。

因みに、私は販売開始前から雅にチケットを頂いた。通常購入をしようと思ったら、購入できたかどうかもわからないから、本当にありがたい。実際に、販売開始前から待機してたファンの多くがチケットを入手できない事態に陥っていたらしい。

「それですね、私も今日はライブを見に行きますので、今日のおにいきさんの状態を確認しに来たのです。体調に異常は無いですか?ちゃんと睡眠は取れましたか?」

「大丈夫だよ。コンディションばっちり!今日のライブ、期待しててね!」

「ふふっ、がんばってね。私もレッススが終わってからすぐに行くわ」

「うん、満足してもらえようなライブに絶対するよ!」

どうやら、千景は正規ルートでチケットを購入できたらしい。一部からは、戦争とも

擲揄されたあの過酷な戦場を勝ち抜いたということだろうか。だとすると中々の猛者ね。

「……続いてのニュースです」

その後も、私達はニュースを聞き流しながら、朝食に舌鼓を打っていく。今日の朝食も中々の出来。本当においしい。私の料理は置いておいて、千景の料理も非常においしい。

本当にこの子も料理が上手い。うかうかしていると、私も負けてしまうかもしれない。この際、料理学校にでも通ってみようかしら？正直、そろそろ一人で勉強するのも限界を感じてきていた。そう思うと、いい機会かもしれない。

「……ここで臨時速報が入ってきました」

そんなことを考えているときだった。ニュースのアナウンサーが臨時速報を報せてきた。何かあったのかしら？そんな前置きを置かれたらすごく気になってしまう。私は、それまで聞き流していたニュースに耳を向けた。

「人気アイドルグループ *Marma la de* が、来月のライブを最後に電撃解散することを発表しました」

「……え？」

最初、そのアナウンサーが何を言っているのかがわからなかった。だって、信じられ

るはずが無い。彼女達は、今日雅とライブを行う。そんな、彼女達が、解散? 何かの間違いかと思った。

「嘘……ですよね……?」

千景の呟きがやけに耳に残る。私だってそう思いたい。嘘だと今すぐ言って欲しい。「わからない。でも、確かめなくちゃいけない」

その後の私達は、口数も少なく朝食を口にしていった。穏やかな朝が、急に不穏なものに変わる。そんな、やるせない朝だった。

朝食を食べ終えた私は、事務所にあるレッスンスタジオに来ていた。今日はここでスパレのレッスンが行われる。ここに来るまでに、Marmaladeの情報を調べてみた。その結果、やっぱり解散は嘘でなかったことがわかった。Marmalade本人も、事務所も認めているらしい。そうなると決定的だろう。

「おはようございます」

「あ、千聖ちゃんおはよう!」

スタジオに入ると、すでにそこにはメンバー全員が集まっていた。私が一番最後だったらしい。なんだか、最近私が最後になる確率が高い気がする。ほぼほぼ、私か気まぐれな日菜ちゃんの二択。日菜ちゃんは、早いときは早いんだけど、遅いときはとことん遅い。本当に気まぐれな存在。だけど今回は、私の方が遅かったみたい。

「千聖ちゃん遅いよー。早くレッスンを始めようよー」

「日菜ちゃんには言われたくないのだけれども、今日は私の方が遅かったみたいだから、あまり強く言えないわね」

ちよつと悔しいけど。そして、私の準備が完了すると、レッスンを開始された。みんな気合いが入ってる。今日はいつも以上に音が合っている気がする。演奏していて楽しい。そして、一時間ほどレッスンを続けたところで、休息に入る。

「はー、疲れたー、私クタクタだよー」

「アヤさん、今日はすごく頑張っていました！」

「うん、なんだか、レッスンを頑張つてないと、今日は落ち込みじゃいそうだからさ」「彩さん、何かあったんですか？相談なら聞きますよ？」

彩ちゃんが落ち込むなんて珍しい。何かあったのかしら？

「実は今日私が憧れてる人のライブがあるんだけど、そのチケットが買えなくて・・・行きたいのに行けないんだよね」

「憧れてる人?」

「そう。Marmaladeっていうグループのあゆみさんって言うんだけどね。私は、その人に憧れてアイドルを目指したの」

あゆみさん。それはMarmaladeのセンターを務める、正しくトップアイドル。なるほど、言われてみれば彩ちゃんのアイドルとしての姿勢は彼女に似ている。本当に憧れているんだということがよくわかる。

「それに、今日は雅君との合同ライブなんだよ。私、実はあゆみさんと同じぐらい、昔から雅君に憧れてたの。同じ年で、こんなに頑張つて、夢を叶えようとしてる子がいるんだ、つて。そんな雅君の姿を見てたらずごく勇気をもらえて、私も頑張らなくちゃ、つて気持ちになれたんだよね。雅君の前では恥ずかしくて言えないけど」

彩ちゃんが雅に憧れていたというのは初耳だった。以前から、雅に熱い視線を向けていることがあったから、恋愛感情を持つているのかと思つて警戒していたけど、なるほど、憧れからくる視線だったのね。少し安心した。

「でも、雅君のライブなんだつたら、千聖ちゃんならチケットなんかなるんじゃないの?」

「さすがに無理よ。私も、自分の分のチケットしか持つてないわ」

「え?!千聖ちゃん今日のチケット持つてるの!?お願い!私に売つて!」

「彩ちゃん・・・何か言ったかしら？」

「ひつ、ご、ごめんなさい、な、何も言ってません・・・」

「ち、チサトさんの顔がまるで般若みたいになってます・・・」

「顔は笑ってますけど、目と心は全く笑ってないですね・・・」

全く、私が今日のライブをどれだけ楽しみにしてきたと思ってるのかしら？前回の雅のライブは、お披露目イベントと被っていたため行けなかった。だから、今日は本当に久しぶりの雅のライブ。正直言って、昨日の晩は興奮してあまり寝付けなかった。我ながら子供っぽいと思う。

「でも、残念だったわね、彩ちゃん。あゆみさんに憧れてたのに、今回みたいなことになっちゃって・・・」

「え？ライブのチケット買えなかった事？だったら私は大丈夫だよ。本当は行きたかったけど、来月のMarmaladeのライブのチケットはちゃんと買えたから、それまで我慢するよ。来月が楽ししみだなー」

・・・これはもしかして、彩ちゃんは、解散のことを知らないのだろうか？もし、朝からニュースを見ていないのだとしたら、わからなくもないけど。

「そういえば、そのMarmaladeっていうグループ、解散するんだよね？朝ここにくる電車の中でお客さんが噂してたよー」

「……え? ……う、そ?」

「彩ちゃん、本当の事よ。今朝のニュースで発表されたの。事務所も M a r m a l a d e 本人も認めてるそうよ。来月のライブを最後に解散するって」

「そんな……」

彩ちゃんは目に見えて落ち込んでいた。それも当然だろう。楽しみにしていた来月のライブが、まさかの解散ライブになってしまった。それが、彩ちゃんの原因にもなった、憧れの人のライブとなったら当然だろう。

「アヤさん……」

「彩さん、その、うーん、こればかりはなんて声をかけていいのかわからないですね」

皆そうだろう。誰も彩ちゃんに対してかける言葉が見つからない。その後、彩ちゃんはレッススが再開しても、元気が戻ることは無かった。レッスンに対しても、ミスが多く、心ここにあらずといった状態だった。そして、結局その日は最後までその調子のままなのだった。

ライブの時間が迫っていた。私は会場に着くなり、とある場所に向かっていた。それは、関係者入り口の奥にあるとある人物の控え室。ここに来るように、メールが来た。中にはすでに人がいた。この控え室の使用者雅と、私を呼び出した張本人の早乙女さんがいた。

「まあ、シー達に関しての事情はラバーも交えてトークしようか。入ってきたらどうだ
い?」

私が部屋に近づいたのを気配で察したのか、仁さんは振り返ることもせず私の入室を促す。恐ろしいまでの察知能力だと思う。中に入ると、雅は私の登場が予想外だったのか、少し驚いた表情をしている。それも当然。ここは関係者以外立ち入り禁止の場所。いくら芸能人とはいえ、おいそれと入れる場所じゃない。

「千聖?どうしてここに?」

「ミーが呼んでおいたのさ。今からするトークはシーにも一緒にリッスンしてほしかったからね」

「ええ、会場に着いたら雅の控え室に来るように早乙女さんに呼ばれたのよ」

呼ばれた理由は正直よくわからない。だけど、仁さんは彼女達の事情、そして私にも一緒に聞いて欲しかったと言った。ということは、おそらく *Marmaïade* の解散と関係あるのだろう。

「まず、今回の Marmalade 解散のリーズンからだ。それは、とあるメンバーのマリッジだ」

マリッジ。それが意味するところは、結婚。つまり、アイドルの結婚。そこで、私は早乙女さんの伝えたいことを大まかに察することができた。なるほど、確かに私達にも関係があるかもしれない。

「ユー達にはリッスンして欲しかったんだ。シー達も今回のことで悩みに悩んだ。解散か、残りのメンバーで活動継続か。そしてメンバー全員で出したアンサーが解散だった。Marmalade は全員揃ってこそ Marmalade。例え一人でも欠けたらそれはもう Marmalade じゃ無い。それがシー達のアンサーだ。アーミーもそう認めた。だが、シーは本当に Marmalade のことがベリーライクだった。今もそれがベストだと理解はしている。メンバーのマリッジを祝福するべきだということとはわかってはいるし、実際祝福している。だが、解散したくないと思っっているシーが、シーの中にいるんだ。このままだと、シーは解散することをリグレットしてしまうだろう。なんとかリグレットの残らない方法は無いかと考えてはいるのだが、全くグッドなアンサーが出てこない。シー達のフリーダムを尊重したい。そう思っ、シー達の事務所ともトークして、ラブに対する規制を設けてなかった弊害が今回の解散だ。ミーも、その措置がベストだと思っっていた。実際に、シー達のフリーダムを尊重することによっ

て、シー達のパフォーマンスはエクセレントなものになった。だが、このままだと、ミーも、アーミーもリグレットしてしまうかもしれない。ユー達の事務所もラブに対する規制は設けていないだろ？だからこそ、ユー達の関係が認められているわけだから。だが、チーサ、ユーもアイドルなのだからこれだけはラーンしておいてほしい。ラブは、少なからず周りにも影響を与えると。ユー達の関係は応援しているが、そのことだけはラーンしておいてほしい。ロングトーク失礼した」

早乙女さんから私達に伝えられたメッセージは大方私の予想通りのものだった。確かに、私はアイドルという立場だけでも、雅と現在恋仲にある。これは、事務所が恋愛規制を設けていないからなのは間違いない。聞いた話では、私と雅のことはよくわかからないけれど、私としてはありがたい。何が無駄だと思ったのかはよく

「では、ミーもこれで失礼するよ。今のミーのトーク、よく考えてみてほしい。では、また後で会おう」

そう言い残して、早乙女さんは控え室から出ていった。早乙女さんの言葉を私は反芻はんすうする。しつかりと、焼き付けるように。

「愛って、重いよね」

「そう、だね」

愛は重い。だからこそ大切にしたい。愛はガラス細工のように繊細でいて、壊れやすい反面、まるで鉄材のような重さも合わせ持つている。要するに、扱いが非常に難しい。だけど、扱い方さえ誤らなければ、それはどのような芸術品よりも美しく輝く。それこそ、高級ジュエリーよりも美しく。だからこそ人は愛を求める。だからこそ人は愛に溺れる。愛は壊れやすい。そして同時に、人をも壊してしまう。

と、愛のことばかり考えていたけれど、私にはもう一つ気がかりがあった。彩ちゃんのことだ。

「雅、Marmaladeのことも気になるのだけど、実は彩ちゃんも今問題なのよ」
「彩ちゃんが?」

彩ちゃんは今、おそらく自分の投げ所、目標を失った状態になってるんだと思う。悔しいけど、私には何もいい打開策が思い浮かばない。自分のふがいなさが情けない。

「実は、彩ちゃん、Marmaladeのあゆみさんに憧れてたそうなのよ。それで、解散することを知って、元気が無くなっちゃって、レッスンにも全く気が入ってないみたいで……」

「あらら、それは大変だね」

だけど、雅ならもしかしたら、何か思いついてくれるかもしれない。彩ちゃんが前に進めるような名案を。そして、その私の期待に雅はちゃんと応えてくれた。

「そうだね。彩ちゃんに元気になつてもらうために、一つサプライズプレゼントを用意しようか」

「サプライズプレゼント?」

雅は、その内容まではまだ教えてくれなかった。だけど、きつと大丈夫だろう。こういうときの雅は本当に頼りになる。間違いなく成功するだろう。私はすでにそう確信していた。もう心配することは何もない。後は、ライブを楽しむだけ。私は、ライブが始まるのをワクワクしながら待つのだった。

今日のライブは本当にすごかった。過去のライブももちろんすごかったのだけれど、今日は一段とすごかった。何がすごいつて、とにかくすごかった。それしか言えないぐらいにすごかった。

「本当に今日の雅はかっこよかったわ! 日菜ちゃん風に言うと、本当にぴかっただ!」
「あはは、そんなに言われると照れちゃうよ」

さつきからずっとこんな調子で二人で帰ってる。例のように、今日も千景は一人で

帰った。本当にいつからあんなに気を使う子になったのか。

「でも本当にすごかったわ! 本当にかつこよかったわ! もう、本当にギターが比喻表現とかではなく、光ってるように見えたわ!」

「あはは、大げさだよ」

「でも、本当にそう見えちゃうぐらい、雅が輝いて見えたわ!」

「ちよつと千聖、本当に僕照れちゃうから」

「だって、私が言わないと気が済まないもの」

「いや、でも僕もう恥ずかしくなってきたんだけど」

「だって、それぐらいかつこよかったんですもの。だけど、いくら演出といつても、あゆみさんと背中をくつつけて歌うのは見てていい気がしなかったわ」

「ありやりや、ごめん。妬いちやった?」

「・・・そうね。少し妬いたわ。だから、今度は私ともステージでやってね」

「あはは、もちろん。千聖とだったらいつでも大歓迎だよ」

「ええ、約束よ」

「だけど、本当に今日の雅はかつこよかった。これは、もしかしたら今日も興奮して眠れないかもしれない。そして、この私の読みは的中し、次の日も寝不足で朝を迎えるのだった。」

そして、それから一ヶ月が経過した。Marmaladeの解散ライブ当日、私はこの日彩ちゃんと一緒にライブ会場に来ていた。彩ちゃんだけではない。日菜ちゃん、イヴちゃん、麻弥ちゃん、パスパレ全員で会場に来ていた。

「でも、みんなどうしたの？ライブのチケット持つてるの？」
「ううん、持つてないよー」

日菜ちゃんの言う通り、彩ちゃん以外の私達は、ライブのチケットを持っていない。当然、真正面から会場に入ることはできない。だけど、私達には会場に入る術があった。「彩ちゃん。ちよつと着いてきてくれる？」

彩ちゃんを先導し、会場の裏側に回る。そこにはすでに、待ち合わせをしていた人物が来ていた。

「雅、連れてきたわよ」

私達の姿を確認すると、雅はこちらに近づいてくる。そして、彩ちゃんの様子を見て満足そうにしている。彩ちゃんにまだ今回のサプライズがバレてないようで、安心して

いるのだろう。顔は完全にイタズラ少年のそれだけだ。

「み、雅君? どうしてここに? それにここって関係者入り口だよな? こんなところにいたらまずいんじゃない」

雅に疑問を投げかける彩ちゃん。その質問は至極当然のもの。だけど、すでに手続きは済ませてある。

「大丈夫だよ。事前に仁さんに許可はもらってるから。さあ、こっちだよ。着いてきて」
 そう言つて、雅は先頭を歩いて行く。しばらく歩くと、とある部屋の前で立ち止まる。ここが目的の部屋。その部屋には、あるグループ名が書かれていた。

「さあ、着いたよ」

「ここって? …… ぱ、Pastel*Palettes控え室!? な、なんでこんなのがあるの!?!」

そう。私達Pastel*Palettesの名前が。今から行うことを考えると、さすがに私も少し緊張する。だけど、それと同じぐらい楽しみでもある。おそらく、このような機会は今回が最初で最後。楽しまなきゃ損だと思う。

「さあ、みんな。そんなに時間は無いんだから準備を早くしちゃってね」

「ええ、さあ、みんな、いきましょ?」

そう言つて、みんなで部屋の中に入る。中には、すでにメイクさん達、スタッフの方

が準備をしてくれていた。スタッフさんの助けを借りて手早く準備をしていく。だけど、彩ちゃんだけは未だに何が何だかわかっていない様子で、準備に手間取っていた。その姿にスタッフさんも苦笑いを浮かべる。そして、準備を終えた私達は直ぐさま外に出る。そこでは、雅がずっと待機してくれていた。

「雅、おまたせ」

「へへへー、さあ、今日はがんばっちゃうよー!」

「私も、今日はやる気十分です! さあ、いざイクサへ!」

「じ、自分は彩さんほどじゃないですけど、なんだか緊張してきました・・・」

「ちよ、ちよつと待って。衣装にまで着替えて、ほ、本当にどういうこと!」

「彩ちゃん、本当はもうわかってるでしょ?」

「わ、わかっているけど、わかっているけど、そんなのって・・・」

「さあ、もう時間だよ? 行こう?」

ここまで来たら、さすがの彩ちゃんも状況を理解してきたのだろう。だけど、そんなことはありえないと思っているみたい。それもそうだろう。私だって、逆の立場だったらそう思うかもしれない。それほどまでに、衝撃的な事態になっっているのだから。そして、私達はステージの舞台袖にやってきた。そこには既に、主役の姿があった。

「あゆみさん、今日はありがとうございます」

「ううん、お礼を言うのは私の方よ。一度、Pastel*Palettesのみんなとは共演してみたかったの。雅君、ありがとうね？」

「あ、あ、あゆみ、さん……!?!」

「うん、Marmaladeのセンター、柑橘系な桃こと、あゆみです！」

Marmaladeのセンター、あゆみさん。日本中に、その名を轟かせるトップアイドル。そんな彼女が、すぐ目の前で笑顔を振りまいていた。彩ちゃんの様子を見ると、何を言っているのかわからなくなっているようだった。まあ、いきなり憧れの人と話せる機会が来たらそうなるでしょう。心の準備もできてないでしょうし。

「な、なんで……」

「最近、彩ちゃんの元気が無かったから、雅がサプライズプレゼントとしてこの舞台を用意してくれたのよ。彩ちゃんにとっても良い思い出になるだろう、って」

「うん、私もPastel*Palettesのみんなと、彩ちゃんと最後に共演してみたかったから嬉しいわ」

「雅君……」

「さあ、そろそろライブが始まるわ。私が合図したら入ってきてね？ 思いつきり楽ししましょ？」

そう言っつて、ステージに入っていくMarmaladeとあゆみさん。雅に聞いた話

によると、あゆみさんは今回の申し入れを二つ返事で許可したらしい。なんでも、元々あゆみさんは *Paste*Palette*、強いては彩ちゃんと共演したいと思っていたらしい。その機会が最後にやってきた。逃す手はないとあゆみさんは言っていたらしい。雅が教えてくれた。

彩ちゃんは、未だに緊張が抜けない様子。そういう私も少し緊張している。だけど、彩ちゃんの緊張は度を過ぎていた。このままだと、まともなパフォーマンスは期待できないだろう。

「彩ちゃん緊張する気持ちもわかるけど、そんなんじゃないパフォーマンズできないよ？」

「ううっ、でも……」

「それに、泣いても笑っても、あゆみさん達 *Marma laide* と共演できるのは今回が最初で最後なんだよ。楽しまなくちゃ絶対後悔するよ」

「後悔、する……」

「そう、だから、最高の思い出になる、最高のステージにしようよ！」

「最高の思い出……うん、そうだよね！こんなチャンス絶対にもう来ないよね！雅君、ありがとう！私、おもいつきり楽しんでくる！」

雅のおかげで、彩ちゃんの緊張は和らいだみたい。これなら、大丈夫かしら。このラ

ライブは彩ちゃんにとっても大切なライブになる。彩ちゃんは今、自分の支えと目標を失い、アイドルとしてなすべき事が見つからず、迷走している。だけど、きつとこのライブを契機に、前に進める。新たな道を歩んでいける。

「みんなー!今日は私達のライブに来てくれてありがとうー!最後まで全力で楽しんでいてね!そして、今日はなんとサプライブゲストがきてまーす!まずは、彼女達とのオープニングイベントを行うよー!入ってきてー!」

「さあみんな、後悔の無いようにね!」

雅の声が背中を押してくれる。その声に押され、私達はステージに飛び出した。Mr. m a
r m a l a d e と同じステージに。その瞬間、観客席にざわめきが起きる。

「おい、あれってP a s t e l * P a l e t t e s だよな?」

「P a s t e l * P a l e t t e s ? なんだそれ?」

「知らねーのかよ。アイドルなのに、プロ級の演奏をするアイドルバンドだよ」

「やべー、俺この前のイベントでパスパレのファンになっちまったんだよ。正直、今日のライブ、ナイーブな気持ちで来てただけど、なんかテンション上がってきちまった!」

観客からの声は軒並み上々。どうやら、私達の登場は皆に受け入れられたみたい。少し安心した。

「知っている人も多いと思うけど、いちお紹介するね！Pastel*Palettesのみなです！今日私は、どうしても最後に彼女達と一緒にステージに立ちたかったから、わざわざ呼んじやいました！じゃあ彩ちゃん、軽く自己紹介よろしくね！」

「はいっ！みなさんこんにちは！Pastel*Palettesボーカル担当の丸山彩です！今日は、憧れのあゆみさんに呼んでもらってここに立たせていただいています！本当は、今すぐ泣きたい気持ちですけど、がんばって歌います！」

「彩ちゃん！俺も泣きたーい！」

「日菜ちゃん今日も髪型かわいいー！」

「イヴちゃん今日も髪型かわいい！」

「千聖さん僕のことを蔑んでください！」

「麻弥ちゃんふへへって言って！ふへへ！」

観客も、私達に声援を送ってくれている。グループ全体に送ってくれている人が多いけれど、中には個人に送ってくれている人もいる。素直に嬉しい。若干名声援がおかしい人もいるけれども。

「私達、Marmaladeは今日で解散します！だけど、Marmaladeのバトンは、Pastel*Palettesのみなに、私、あゆみのバトンは彩ちゃんに託します！みんな！これからはPastel*Palettesのことをもつと応援

してあげてね!それじゃ一曲歌うよ!Pastel*Palettesで、しゅわりん☆どりくみん!」

あゆみさんの声に合わせて、演奏を始める。少し緊張するけれども、動きは悪くない。むしろ、ほどよい緊張感が私の、いいえ、みんなのパフォーマンスを上げてくれている。Marmaladeの振り付けに、彩ちゃんとあゆみさん、二人の歌声も合わさり、最高級のパフォーマンスを実現できている。こんなステージで演奏できるなんて、なんて素敵なのだろう。

そして、演奏が終了する。非常に短く感じる時間だった。本音を言うともっと演奏していたい。だけど、今日の私達はあくまで引き立て役でしかない。助演には助演の役割がある。自分の仕事を終えたら、後は主演にバトンを託すだけ。後のことは、Marmaladeにまかせて、私達は挨拶を終えらるとステージを後にした。ステージを出て、舞台袖に戻ると、そこには当然のように雅が待つてくれている。ステージを出て、

「みんなお疲れ。どうだった?」

「素晴らしかったわ。本当に、いいステージだったわよ」

「もうみんなぴかっていたよね!Marmaladeもあたし達も本当にみんなぴかっていた!」

「最高の舞台でした!みなさん本当に武士のように輝いてました!」

「じ、自分は緊張しました・・・でも、それでも本当に素晴らしいステージでした。楽しかったですね」

「うん、本当に、楽しかった！雅君本当にありがとう！最高の思い出になったよ！」

間違いない、今回のステージは最高の思い出になった。私は、今日という日のことを将来忘れることは無い。そう言い切れるほど、素敵な、最高のライブだった。演奏したのはたったの一曲だったけれど、それでも本当に素晴らしいステージだった。

そしてその後も、Marmaladeのライブは続く。ステージの中央で一際輝きを放つあゆみさん。彼女の姿に、皆釘付けになっていた。唯々、美しかった。綺麗だった。今までテレビでは何度も見たことはあったけれど、実際に生で見る彼女のステージは、本当に言葉に出来ないほど輝いて見えた。そんな彼女の虜になっていた。

その時、私は少し後悔をしていた。もっと、もっと早く彼女達のファンになりたかった。そうすれば、今日だけと言わず、過去に行われたライブにも、幾度か足を運んでいたかもしれない。そう思ってしまうほどに、私は彼女に魅了されていた。だけど、終わりとはいっつか必ず来てしまう物。

「みんなー！楽しんでくれてるかなー？・・・次で最後の曲になります」

「次で・・・最後・・・」

ついに、その時が来た。彩ちゃんの眩きが、切なさを呼び込む。

「その前に、少しだけいいかな? 今日で、Marmaladeは解散します。だけど、Marmaladeがこの世界から消えるわけじゃないよ。もちろんあゆみも! みんなのなかで、Marmaladeは、あゆみはどんな存在ですか? きつと歌が苦手で、きめポーズがへんでこで、感動してすぐ泣く、だけど、何があっても絶対にめげない、諦めない! どんな時だっていつも笑顔! みんなにとって、そんな存在になれていたらうれしいです! そしてあゆみも、Marmaladeもみんなの中でずっと生き続けます! もしもつらいことがあった時、ぽんこつなりにがんばってた変なアイドルがいたな、つて思い出して元気になってくれたら嬉しいかな」

「・・・つ、あゆみさん・・・」

堪えきれずに涙を流す彩ちゃん。私も泣きたい気分だった。だけど、涙を必死に堪え、彩ちゃんのことをあやしにかかる。私なんて、今日ファンになっただけの俄ファン。そんな私が、彼女達と同じ気持ちと共有しようとするなんて、少し都合のいい話な気がする。だからこそ、私は堪える。

「ううっ、みんな、ありがとう! それでは最後の曲、全力で楽しんで下さい!」

そして最後の曲が始まる。ステージの方のあゆみさんを見てみると、彼女の顔も、涙に塗れていた。だけど、その輝きは最後まで消えず、それどころか、より強く輝きを放つ。その姿を見て私は感じる。ああ、これがトップに立つ者の証なのかと。私もいつ

か、あの境地に達することは出来るのだろうか？出来ることなら、達してみたい。今日のステージを見て、私はその気持が強くなっていた。

そして最後の曲が終わる。これで、Marmaladeは解散した。彼女達は、私達にトップアイドルのあるべき姿というものを見せてくれた。果てしなく遠い、頂の輝きを教えてくれた。

「……みんな行くのか」

雅の声に従い、私達は舞台袖を後にした。私の両眼に焼き付いた彼女の輝き。私にも新たな目標ができた気がした。今はまだ、その場所には届かない。だけど、いつか必ず、辿り着いてみせる。立ち止まってる暇は無い。一歩ずつ前に進もう。私は、いつか来るその日を夢見ながら、彩ちゃんをあやしつつ、控え室への道を前に進むのだった。

会場からの帰り道。私は、すっかり暗くなった道を雅と二人並んで歩いていた。彩ちゃんはその後、あゆみさんと交流を持てたことですっかり元気になった。今では、以前よりも元気かもしれない。あゆみさんと早乙女さんの後悔も、彩ちゃんを通じて解消

されたみたいなので、本当に安心した。全て丸く収まり、最高の結末を迎えることができた。

「本当によかったわね。彩ちゃんも、あゆみさんと早乙女さんも。みんな本当によかったわね」

「・・・そうだね」

だけど、それと対照的に、会場を後にしてから雅の元気が無くなっていた。今度はどうしたのかしら？

「雅、何かあったの？元気が無いみたいだけど」

「・・・うん、ちよつとね。さつき、仁さんと話してるときに、この前仁さんが話してくれた内容思い出しちゃってさ。この先、千聖に負担をかけることもあるかもしれないと思うと、不安になっちゃって」

なるほど。雅は、私と恋仲にあることよって、将来アイドルとしての私の迷惑になるかもしれない。壁になるかもしれないと考えてるみたい。だけど、そんなの私からしたら余計なお世話。いらぬ心配だというのに。

「雅、あなたは私に言ってくれたわ。私と一緒になら、どんな壁だって乗り越えられるって。それは私も一緒よ。私も、雅と一緒になら、どんな壁だって乗り越えられることが出来る。だから、そんなのは余計な心配よ？」

「千聖……うん、そうだね。ありがとう。うん、二人でどんな壁だつてぶつ壊して前に進んじやおう！」

そう言う雅に、もう迷いは見えなかつた。そう、私達ならきつと、この先どんな壁にぶつかつても、きつと乗り越えるどころか壊すことが出来る。態々、高い壁を乗り越えるなんて遠回りをしなくても、壊して直進距離を進めばいい。私達ならきつと可能だろう。だから、心配は何もいらぬ。私達は、私達らしく毎日を過ごせばいい。私はつないだ右手を、強く握り直し、月光りの照らす道を二人並んで歩いて行くのだつた。

どこまでも。どこまでも。

第21演目 Legend Girls!!

「ああ、夢い……」

ある日、学校の帰り道に、変人に出くわした。ひどくデジャブを覚える光景だった。つい最近も、似たような光景に出くわした気がする。しかも、同じ人物、同じ場所、同じ時間に、同じシチュエーション。まるで、一月ほど前のあの日に巻き戻ったかのような光景。そして、未だに彼女に見つかっていないという現状まで一緒だった。

おそらくこれは、神様が僕に与えたなんらかの試練の形なのかもしれない。昔、友人に見せてもらった漫画で読んだことがある。同じ時間を繰り返し主人公の話を。その友人が言うには、そのような設定は漫画などではよくあるものらしい。あまり、そういったものを読まない僕には詳しいことまではわからないが、大体の場合、ある一定の条件を達成しない限り、永遠と同じ時間が繰り返し返されるものらしい。

もしかしたら、この光景もその漫画のように、ある条件を達成しなければ永遠に繰り返し返されるのかもしれない。なんて、バカなことを考えてしまうぐらいに似たような光景だった。さすがに、本気で時間が巻き戻ったなんてことはありえないと思うけれど、折角やってきたチャンスだ。今回は見つからないように気をつけよう。

「おや？雅じゃないか。私に会いに来てくれたのかい？」

「帰り道に偶々薫がいただけだよ」

気をつけようと言った矢先に見つかってしまった。儂い。

「今日は美咲ちゃんは一緒じゃないの？」

「ああ、私一人だよ。最も、この後バンドの練習があるため、そこで会う事になるだろう。

雅、君も一緒に来るかい？王子様の入場なら大歓迎さ」

「残念だけど、この後お姫様との約束があるからね。また今度ね」

どうやら、今日は薫一人らしい。だったら、なおさら早くこの場を離れるに限る。以前も言ったけど、別に僕は薫が嫌いなわけじゃない。むしろ、大切な幼なじみとして、親愛の情も向けている。だけど、彼女と二人きりというのは、非常に疲れる。彼女のペー
スに付き合うのは非常に疲れる。5年前までは、それでも無かったはずなのだけれど、
どうしてこうなってしまったのだろうか？彼女に一体何があったのか、本当に謎だ。

「ふっ、振られてしまったか。だが、彼のお姫様が相手なら仕方あるまい。ああ、失恋と
いうのはいつの時代も、心に堪えるものだ。儂い・・・」

「いつ、どのタイミングで失恋したのか全く理解できないんだけど」

しまった。思わず彼女のペースにつられてしまった。思わずといった形でツツコミ
を入れてしまった。

「はあ、まあいいや。じゃあ僕は千聖との約束があるから行くよ。またね、薫」

「何がまあいいのかわからないが、私も待たせている子猫ちゃん達がいるのでね。しばしの別れを惜しもう。ああ、儂い……」

「うん、じゃあね薫」

「疲れた。ただ一言疲れた。今度から薫と会うときは、千聖と一緒にいいな。そう実感した放課後の一幕だった。」

「今日は本当に大変だったのよ。放課後に飼育小屋のウサギが逃げ出して、その捕獲に付き合わされてたのよ」

「へー、それで待ち合わせに遅れちゃったんだ。それは仕方ないね。千聖、お疲れ様」

今、僕と千聖は羽沢珈琲店という喫茶店にきている。この店は千聖のお気に入り、昔からよく通っていた。このメニューは何を頼んでも美味しい。軽食はもちろん、スイーツも本当に一級品だ。正直、ただの喫茶店とは思えない。そして何よりも、珈琲店の名が示すとおり、ここのコーヒーは至高の一品だ。マスターが厳選した豆を、絶妙な

バランスでブレンドした究極の一杯。それをお手頃価格でいただけるのだ。

実のところ、僕はコーヒー通だ。コーヒーを飲むと、いつだって曲作りに集中できる。夜遅くまで音楽活動をすることも多い僕の必需品だ。昔からコーヒー片手に音楽に励んでいると、気づいたら通と言えるほどに詳しくなっていた。そしてもちろん味にもうるさい。

その影響もあって、千聖はコーヒーを煎れるのが上手い。彼女は、僕の好みを僕以上に熟知している。本当に、彼女が煎れる一杯は、僕が最も好む香り、味を再現されている。本当に、普通のコーヒーじゃ満足できなくなるぐらいにうまい。

だけど、上には上がいるのは世の常だ。僕の好みをいくら再現しても、この店の一杯には敵わない。そんなのおかまいなしと言わんばかりに、僕の心を掴んでくる。正直、千聖のものよりもうまい。というよりも、この店の一杯よりもうまいコーヒーに未だ出会ったことが無い。今までに、数多くの店を制覇してきたけれど、どこもダメだ。この店はおろか、千聖を超える店さえほんの一握りだった。その一握りも、この店の一杯には届かないわけだけだ。

それはともかく、今日はこの店で千聖と待ち合わせしていた。だけど、その待ち合わせに珍しく千聖が遅れてきた。僕が覚えている限りでは、今まで千聖が遅刻してきたことなんて皆無だった。それなのに今日は時間を過ぎても来なくて、何かあったのかと心

配していたわけだけれど、どうやら放課後に飼育小屋のウサギが逃げ出すハプニングがあったらしい。その捕獲に、イヴちゃん達と参加していた、もとい巻き込まれていたら遅れてしまったらしい。なんとも微笑ましい遅刻理由だ。

「まあ、千聖に何もなくてよかつたよ。珍しく時間になつても来ないから、少し心配しちゃつた。こつちも、ここに来る途中で薫に捕まつてね。少し疲れちゃつたよ」

「心配かけてごめんさいね。薫に？それは災難だつたわね。薫といえば、知ってるかしら？実は薫の参加しているバンド、花音と一緒にだつたのよ。この前参加したイベントで知つてビックリしたわ」

「え？花音ちゃんど？」

それは本当にビックリした。まさかあの薫と花音ちゃんが一緒にバンドに参加しているなんて。花音ちゃんに迷惑かけてないだろうか？今度、こつそり様子でも見に行つてみよう。

そうやって、花音ちゃんの心配をしている時だつた。店に、来店を報せるカランカランという音が鳴り響いた。入り口近くの席にいた僕には、自然とその来客の顔が見えた。知つている顔だつた。茶髪のボブカットの少女だつた。薫と同じ羽女の制服を着ている。この店の常連であるならば、知らないわけが無い少女だつた。

「あー千聖さん、雅さん、来て下さつてたんですね！いらつしやいませー！」

「つぐみちゃん、おかえりなさい」

「お邪魔してるよ」

彼女の名前は羽沢つぐみ。この羽沢珈琲店オーナーの一人娘だ。頑張り屋な人一倍優しい子で、よくお店の手伝いもしている。それでいて、学校では生徒会に在籍しており、幼なじみ達とバンド活動もしているらしい。少し、頑張りすぎじゃ無いだろうか？

「み、み、み、み……」

つぐみちゃんの心配をしているときだった。彼女の後ろから、正確には店の入り口から何か声が聞こえてきた。見てみると、そこにはつぐみちゃんと同じ羽女の制服を着た、ピンクの髪の毛の女の子がいた。そんな彼女が、何かを口にしようとしては、上手く声に出来ないようで、同じ言葉、いや文字を繰り返して呟っていた。

「ひまりちゃんどうしたの？」

つぐみちゃんが心配して、彼女に声をかける。ひまりと呼ばれたその少女は、ようやく落ち着いてきたのか、まともな言葉が口から出てきた。

「み、みみ、みや、雅様!？」

「うん、なんとなく君のことがわかったよ」

まさか、いきなり様付けで呼ばれるとは思わなかった。だけど、それでなんとなくだかわかる。僕を様付けで呼ぶということはつまり、僕のファンなのだろう。それも熱狂

的な。嬉しいけど、恥ずかしい。

「そういえば、ひまりちゃんって雅さんのファンだったんだね」

「ファンなんて生半可なものじゃ無いよ！業界では、雅様ファンクラブに属している人達のことを従者って呼ぶんだから！」

え？何それ？初めて聞いたんだけど。そもそも、なんの業界なんだろう？それに、僕は誰も従えてるつもりは無いんだけど。

「確かに、ステージに立つ雅はカリスマ性があるものね。わかる気もするわ」

「なんか、千聖にそう言われると照れちゃうね」

「で、なんでつぐは雅様と知り合いなの？」

「雅さんと千聖さんは、昔からよくウチを利用してくれてるから。常連さんなんだよ？」
確かに、僕達はこの店を昔からよく利用していた。おそらく、小学生のころからだろうか？つぐみちゃんとも、その頃からの仲だ。そういう意味では、彼女も所謂幼なじみに該当するのかもしれない。

「ええええええ！でも、私一度もここで会ったことないよ！」

「そういえば、皆とは一度もタイミングが合ったこと無かったね。昔から週に一度は来てたと思うけど」

「何でそれで会わなかったの!?! つぐも教えてよ!?!」

「あはは、ごめんね?」

「あー取り込み中のところ悪いけど、アタシ達もいるの忘れてないよな?」

ひまりちゃんの後ろから、また聞き覚えの無い声がある。そちらを見てみると、三人の知らない女の子達がいた。赤い髪をした、同年代とは思えない大人びた少女。おつとりした印象を受ける、銀髪の少女。取っつきにくそうな、黒髪の一部に赤いメツシユを入れてる少女。その三人がこちらに目を向けていた。

「すみません。まずは自己紹介からですね。アタシは宇田川巴です。よろしくお願います」

「あたしはー青葉モカだよー。よろしくー」

「美竹蘭。よろしく」

「あ、そういえば自己紹介まだでしたね!上原ひまりです!憧れの雅様とお話できて本当に感激してます!よろしくお願います!」

「巴ちゃんにモカちゃん、蘭ちゃんにひまりちゃんね。僕は黒城雅。気軽に雅でいいよ。僕も気軽に呼ばせてもらうから」

「でも、まさか雅様がこの常連だったなんて・・・決めた!私これから毎日つぐん家に通う!」

「そんな金あるのかよ」

「・・・つぐん家でバイトする！」

「ウチは今バイト募集してないよ？」

「そこをなんとか！つぐん様！」

「ひーちゃん雅さんも戸惑ってるよー？」

「つぐみにも迷惑かかっている」

「あはは」

「どうやら、かなり仲のいい集まりのようだ。僕の予想が正しければ、おそらく彼女達
が、つぐみちゃんとバンドをしているという幼なじみなのだろう。」

「ふふつ、相変わらずみんな仲良さそうね」

「あれ？千聖はみんなのこと知ってるの？」

「ええ、この前のイベントで一緒だったのよ」

「なるほど。薫達のバンドだけではなく、つぐみちゃん達のバンドとも一緒だったの
か。意外と世間は狭いものだ。」

「Afterglowの強みは幼なじみだからこそその仲の良さ。息もピッタリ合つてて
聞いてて気持ちいいバンドよ」

「Afterglow。それが彼女達のバンド名なのだろう。そして、そのバンド名
に、僕は非常に聞き覚えがあつた。なるほど、あのバンドは彼女達だったのか。」

「Afterglow、なるほど。みんな、この前のガールズバンドジャムに出てたよね？」

「はい、出ましたけど、雅さん知ってるんですか？」

「うん、直接見たわけじゃ無いけど、関係者の人にイベントの音源を聞かせてもらったんだ。有名なイベントだからね。どんなバンドが出てるのか気になってね」

このイベントに出てるバンドは総じてレベルが高い。だからこそ、毎回僕はこのイベントが開かれる度に、関係者の人に音源を聞かせてもらっていた。勉強のためだ。直接見に行く時もあるのだけれど、今回は仕事の関係で見に行くことができなかったため、音源を借りた。そして、その中でも彼女達、Afterglowの演奏は印象に強く残っていた。特に、ボーカルの歌声は非常に心に來た。

「ボーカルは蘭ちゃんだよな？正直、あのイベントの中で、君の歌声が一番印象的だった。力強く、それでいて繊細な、そして誰かに何かを伝えたいって想いがヒシヒシと伝わってきたよ。思わず、聞き入っちゃった」

「あ、ありがとうございます」

「おー蘭が照れてるー」

「べ、別に照れてない！」

「顔を真っ赤にして言っても説得力が無いぜ？」

正直、最初は蘭ちゃんのことを取っつきにくそうな子だと思っていた。だけど、どうやらそうでも無いようだ。見た目だけで判断するのはやっぱりよくない。実際に話してみないとわからない。その後も、僕達は他愛も無い会話に花を咲かせていく。

「それにしても、白鷺さんと雅さんってすごく仲良さそうですね」

「千聖さんと雅さんは、昔から仲が良いんだよ」

「僕達も、君たちと同じ幼なじみの関係にあたるからね」

「それにしても仲が良すぎるような・・・はっ、まさかあの噂は本当だった!?!」

突然大きな声をあげるひまりちゃん。噂ってなんだろう？

「噂?」

「今、雅様ファンクラブの掲示板で噂になってるんです。雅様と女優の白鷺千聖が交際してるって」

「そ、そんな噂にもなってるのね」

「あはは、少し恥ずかしいね」

「おー二人とも顔が真っ赤だよー」

「この反応は・・・」

「どうやらその噂は本当っぽいな」

「ええええええ!!?大スキヤンダルだよ!?!」

「でも、付き合い始めたのって確か最近でしたよね？」

「そうだよ。ここ数ヶ月でのことだね」

「え？ つぐ知ってたの？」

「うん。この前ウチに来た時に教えてもらって」

「だったら教えてよ!？」

「あはは、ごめんね？」

まさか、僕と千聖の関係が噂にまでなってるなんて思わなかった。まあ、僕も千聖も、別に関係を隠すつもりは無い。だから、噂されても別に問題は無い。その後も、他愛無い会話は続いていく。

「へー つぐみちゃんってそんな特技があったんだね」

「そうなんですよ! つぐって本当に一番星を見つけるのが上手なんですよ! いつもみんなで探すんですけど、絶対つぐが一番最初に見つけるんです!」

「それだけ、今のつぐみちゃんが幸せを感じてるってことじゃないかしら? 一番星は、見つけると願い事が叶うと言われているけれど、今に幸せを感じてる人しか見つけられないとも言われているのよ?」

へー知らなかった。一番星にはそんな言い伝えがあるんだ。願い事が叶うっていうのも知らなかった。願い事を叶える力があるのは流れ星だけじゃないんだ。

「へーつぐつて今幸せなのー?」

「うん! 幸せだよ! 皆と一緒にバンドができて、本当に毎日が楽しくて本当に私幸せだよー!」

「ははっ、つぐつて本当に良い子だよな」

うん、僕もそう思う。前から思ってたけど、本当につぐみちゃんって良い子すぎる。誰よりも頑張り屋で、誰よりも優しく、素直に尊敬に値する。僕もつぐみちゃんに負けないぐらい頑張らないと。

「そういえば、星つていえばこの前蘭ちゃん達と行った天体観測ツアーを思い出すね」
「あのツアーか。そうだね」

「天体観測ツアー? それって、この前日菜ちゃんが言ってたツアーかしら?」

「たぶんそうだと思います。蘭ちゃんと香澄ちゃんと一緒に参加したんですけど、途中で天文部の活動に来てたころちゃんと日菜先輩に会ったんです」

へー、そんな事があったんだ。天体観測か。子供の頃に、一度だけ千聖と流星群を見に行ったのを思い出す。夜空を幾筋もの光の線が連なつて、本当に美しい光景だった。思わず、ギターを取り出してその場で演奏をしてみましたもの。それほどまでに魅了される光景だった。

「その時に皆としたお話がすごく印象に残ってるんです」

「どの話？」

「うん、今見てる星の輝きは、何百年、何千年も前の輝きなんだって話」

「ああ、あたし達もその星みたいに、何年も、何百年も消えない輝きを残せたらいい、って話ね」

「何百年、ね。その時代まで皆の記憶に残っていると、もはや伝説のガールズバンドって呼ばれてるかもしれないわね」

「伝説のガールズバンド！いいですねそれ！私達も雅様に負けないぐらいの伝説を残そうよー！」

「いや、僕もまだ何も伝説を残してないから」

「でも、どうせバンドをやるなら何か大きい爪痕を残したいよな」

「モカちゃんの可愛さがー、未来の人達にも知れ渡っちゃうのかー」

「いや、それは無いと思う」

「ははっ、蘭ちゃん辛辣だね」

でも、伝説か。確かに、僕も世界一の音楽家を目指す以上、後の世にいくつもの伝説を残しておくかといけない。僕が目標としている人は、間違はなくこの先何百年経っても残り続けるような偉大な記録を幾つも残している。僕も、それに負けないぐらいの記録を幾つも残さないと、あの人を超えるなんてできるはずがない。

「あら？もうこんな時間ね。雅、そろそろ」

「うん、そうだね。じゃあ皆、僕達はそろそろお暇いとまするよ。またね」

「あ、はい！お会計しますね！」

「雅様！また絶対ライブ行きます！ファンイベントも絶対行きます！絶対またお話しして下さいね！」

「またねー」

「今度は、あたしの歌を聞きに来て下さい。是非生で」

「今日はありがとうございます。あ、そうだ。最後に、サイン御願ごんいしていいですか？
妹も、雅さんのファンなんです」

「あ！だったら私もお願いします！」

「ひまりはもう持つてるでしょ」

「こういうのは何枚あってもいいの！」

「あはは、いいよ。妹さんの名前は？」

「あこです」

「あこちゃんね。了解」

準備のいいことに、つぐみちゃんが色紙とペンを用意してくれる。本当に気が利く。

僕はその色紙に、サインを書いていく。

「はい、できたよ。妹さんにもよろしくね？」

「はい、ありがとうございます！」

「雅様！一生大事にしますね！」

「あはは、うん、大事にしてね。それじゃ行くか千聖」

「ええ、それじゃ、みんなまたね」

そうして、僕と千聖は店を後にした。帰る最中に思い出すのは、先ほどの伝説の話。僕も、本当にいつか、後の世にも確実に残るような伝説を作れるといいな。そうだ、もしもの話だけど、あの最後に書いたサイン。僕がもし伝説を残したなら値打ちものになるんじゃないだろうか？そうすると、そのサインの値段がまた伝説級になって、伝説から伝説への連鎖が続いていく、なんていうことにならないだろうか？

とは言っても、口で言うのは簡単だ。問題は、それを実行できるかどうかだ。いくら口で言っても、実際に残せなきや意味が無い。でも、本当にそれぐらいのことができなると、到底目標には辿り着けない。

良いじゃないか。目標は、大きければ大きいほど燃えてくる。そして、達成した際の感動も大きくなる。もとより、簡単な道では無いのは覚悟の上。問題なのはやるかどうか。面白い。やってやろうじゃないか。伝説への挑戦を。僕は、気合いを込めて歩みを進めるのだった。伝説への歩みを。

第22演目 いちばん星

「今日は本当に大変だったのよ。放課後に飼育小屋のウサギが逃げ出して、その捕獲に付き合わされたのよ」

「へー、それで待ち合わせに遅れちゃったんだ。それは仕方ないね。千聖、お疲れ様」
今日私は、普段から臍肩にしている喫茶店、羽沢珈琲店に雅と来ていた。だけど、私はその待ち合わせに数分とは言え遅れてしまった。普段なら絶対にありえないこと。だけど、今日は事情があった。事情と言っても、少し厄介ごとに巻き込まれただけ。

学校で飼っているウサギが、飼育小屋から逃げ出してしまったため、その捕獲に協力していた。最初は待ち合わせがあったため断ったのだけれど、少しでも時間があったため、渋々協力することを了承したら、見事に時間に遅れてしまった。儂い。

気を取り直して、コーヒーを啜る。美味しい。私は紅茶派なのだけれど、こののコーヒーは一般的な紅茶よりも美味に感じる。雅はコーヒー通だ。コーヒーのことが本当に好きで、美味しいコーヒーの噂を聞きつけると音楽活動の片手間にいつも店に立ち寄っている。

雅はコーヒー通だ。そのために私は、コーヒーの煎れ方を徹底的に勉強した。この、

羽沢珈琲店で。マスターに事情を説明すると、快く了承して下さい、懇切丁寧に美味しいコーヒーの煎れ方を説明して下さい。その甲斐もあり、今では雅も唸るほどのコーヒーを煎れるようになった。

雅が言うには、私の煎れる一杯を超える店なんてほとんど無いらしい。だけど、それも雅限定での話だと思う。私は、雅の好みを雅以上に熟知している。普段の些細な変化も逃さず、雅のコーヒーを飲む表情を観察し続けた結果、雅が求める香り、味に限り無く近づけることができた。だからこそ、私のコーヒーは雅専用。他の人が飲めば、また感想は変わると思う。

だけど、それでもこのお店の一杯には敵わない。雅の表情を見ればわかる。私の煎れる一杯を飲んでいるときよりも、この店の一杯を飲んでいるときの方が明らかに幸せそうに見える。雅が言うには、この店のコーヒーは特別らしい。この店を超える味には出会ったことが無いと言っていた。

だけど私は、それなら仕方ないなんて思わない。いつか、この店の一杯を超える究極の一杯を雅のために煎れてみせる。雅の一番は、全て私のもの。いつか必ず、この店を超える一番になってみせる。

「まあ、千聖に何もなくてよかったよ。珍しく時間になっても来ないから、少し心配しちゃった。こつちも、ここに来る途中で薫に捕まってね。少し疲れちゃったよ」

「心配かけてごめんなさいね。薫に？それは災難だったわね。薫といえば、知ってるかしら？実は薫の参加しているバンド、花音と一緒にだったのよ。この前参加したイベントで知ってビックリしたわ」

「え？花音ちゃんど？」

「どうやら、雅はここに来るまでに薫に会ったらしい。それは災難だったわね。その薫とは、この前私達が参加したガールズバンドパーティというイベントで遭遇した。驚いたことに、薫の所属するバンドは花音と一緒にだった。本当に、最初見たときはビックリした。花音の迷惑になってなければいいのだけれど。おそらく無理な話でしょうね。」

「そうやって、薫に対して呆れてる時だった。店内に、カランコロンという来店を報せる音が鳴り響いた。音を鳴らし入ってきたのは、見知った少女だった。茶髪のボブカットの少女。彼女とこの店で会うのは何も珍しいことでは無い。」

「あー千聖さん、雅さん、来て下さってたんですね！いらっしやいませー！」

「つぐみちゃん、おかえりなさい」

「お邪魔してるよ」

彼女の名前は羽沢つぐみ。この店のオーナーの一人娘。すごく頑張り屋で、すごく優しい女の子。仲の良い幼なじみ達とバンドを組んでおり、この前のイベントにも一緒に参加した。

「み、み、み、み……」

そして、そんな彼女の後ろから、別の声が聞こえてくる。ピンクの髪をした女の子。彼女のことも知っている。先ほど言った、つくみちゃんの参加しているバンドのメンバー。

「ひまりちゃんどうしたの?」

彼女は上原ひまり。その彼女は、どうしたのか先ほどから同じことを繰り返して眩いている。どうやら、何かを言おうとして、でも言えずにいるみたいだけれど。そして、ようやく落ち着いたのか、言おうとしてた言葉が彼女の口から飛び出す。

「み、みみ、みや、雅様!」

「うん、なんとなく君のことがわかったよ」

雅様。それは雅のファンが雅を呼ぶときの呼び方。所謂愛称のようなもの。要するに、ひまりちゃんは雅のファンだったということね。それも、熱烈な。

「そういえば、ひまりちゃんって雅さんのファンだったんだね」

「ファンなんて生半可なものじゃ無いよ!業界では、雅様ファンクラブに属している人達のことを従者って呼ぶんだから!」

これは、実の所有名な話。雅のファンクラブメンバーはみんな従者と呼ばれている。つまり、私も、千景も会員に入っているから従者ということになる。そもそも、雅が様

付けで呼ばれる理由だけれど、それはステージ上での雅の姿にある。

雅の歌声は、聞くものを皆跪かせてしまうような、従えさせてしまうような、威厳にも満ちた圧倒的カリスマ性を持っている。正に王様の歌声。それでいて、女性的な歌声も出せる。この、女性的な歌声を出しているときの雅を女王様と呼ぶ従者もいるらしい。

そして、その幼さを感じさせるけれども、甘いルックスは正に王子様。つまり、雅は王様であつて、女王様であつて、王子様でもあるということ。それほどの王族的顔を持つ雅に敬意を込めて、熱烈なファンは皆雅様と呼ぶ。従者と呼ばれるのも同じような理由から。雅王に永遠の忠誠を誓うという騎士道的な意味合いを持つ。実の所、私もこの表現には理解を示していたりする。

「確かに、ステージに立つ雅はカリスマ性があるものね。わかる気もするわ」

「なんか、千聖にそう言われると照れちゃうね」

「で、なんでつぐは雅様と知り合いなの？」

「雅さんと千聖さんは、昔からよくウチを利用してってくれるから。常連さんなんだよ？」

私と雅は、昔からよくこの店を利用していた。おそらく、小学校中学年のころにはもう利用していたと思う。つぐみちゃんとも、その頃からの付き合い。そう考えると、本当に長い付き合いになる。もう一人の幼なじみと言ったところね。

「えええええ!?でも、私一度もここで会ったことないよ!」

「そういえば、皆とは一度もタイミングが合ったこと無かったね。昔から週に一度は来てたと思うけど」

「何でそれで会わなかったの!?つぐも教えてよ!」

「あはは、ごめんね?」

「あー取り込み中のところ悪いけど、アタシ達もいるの忘れてないよな?」

そんなつぐみちゃんとひまりちゃんのやり取りを見ているときだった。ひまりちゃんの後ろからまた知っている声が聞こえてくる。そちらに目を向けると、案の定知っている子が三人いた。

「すみません。まずは自己紹介からですね。アタシは宇田川巴です。よろしくお願いします」

「あたしはー青葉モカだよー。よろしくー」

「美竹蘭。よろしく」

「あ、そういえば自己紹介まだでしたね!上原ひまりです!憧れの雅様とお話できて本当に感激します!よろしくお願ひします!」

「巴ちゃんにモカちゃん、蘭ちゃんにひまりちゃんね。僕は黒城雅。気軽に雅でいいよ。僕も気軽に呼ばせてもらおうから」

「でも、まさか雅様がここの常連だったなんて……決めた！私これから毎日つぐん家に通う！」

「そんな金あるのかよ」

「……つぐん家でバイトする！」

「ウチは今バイト募集してないよ？」

「そこをなんとか！つぐん様！」

「ひーちゃん雅さんも戸惑ってるよー？」

「つぐみにも迷惑かかってる」

「あはは」

相変わらず仲が良さそうね。この仲の良さが彼女達の強みだと思う。息もピッタリな彼女達だからこそ、高レベルな演奏が可能なんだと思う。

「ふふつ、相変わらずみんな仲良さそうね」

「あれ？千聖はみんなのこと知ってるの？」

「ええ、この前のイベントで一緒だったのよ」

この前のイベントでは、本当に色んな子達と知り合った。そして、私達のレベルを再確認することもできた。参加したバンドは皆、自分たちの長所を最大限に発揮できるバンドばかりだった。もちろん、私達も含めて。だからこそ、レベルが高い。負けてるつ

もりは無いけれど、勝っているとも一概には言えない。もっと、レベルを上げていかな
いと。

「Afterglowの強みは幼なじみだからこそその仲の良さ。息もピッタリ合つて
聞いてて気持ちいいバンドよ」

そう、これが彼女達の長所。そして魅力。彼女達のパフォーマンスは、この長所を最
大限に活かしていた。

「Afterglow、なるほど。みんな、この前のガールズバンドジャムに出てたよね
？」

「はい、出ましたけど、雅さん知ってるんですか？」

「うん、直接見たわけじゃ無いけど、関係者の人にイベントの音源を聞かせてもらったん
だ。有名なイベントだからね。どんなバンドが出てるのか気になってね」

ガールズバンドジャム？聞いたことが無いイベントだった。だけど、雅が言うには有
名なイベントらしい。私もまだまだ勉強不足かしら。

「ボーカルは蘭ちゃんだよな？正直、あのイベントの中で、君の歌声が一番印象的だつ
た。力強く、それでいて繊細な、そして誰かに何かを伝えたいって想いがヒシヒシと伝
わってきたよ。思わず、聞き入っちゃった」

「あ、ありがとうございます」

「おー蘭が照れてるー」

「べ、別に照れてない!」

「顔を真っ赤にして言っても説得力が無いぜ?」

やっぱり、雅が聞いても蘭ちゃんの歌声は魅力的だったのね。私もそう思う。蘭ちゃんの歌声は私も好き。魅力的に感じる。だけど、彼女の歌声の方がすごいんじゃないかとも思う。蘭ちゃんに言ったら怒るでしょうけど、彼女、湊友希那ちゃんの歌声はすごい。それこそ、雅と同種のカリスマ性を感じる。雅は、彼女の歌をどう感じるだろう?是非聞いてみて欲しい。そして、その後も私達は、他愛も無い会話に花を咲かせていく。「それにしても、白鷺さんと雅さんってすごく仲良さそうですね」

「千聖さんと雅さんは、昔から仲が良いんだよ」

「僕達も、君たちと同じ幼なじみの関係にあたるからね」

「それにしても仲が良すぎるような・・・はっ、まさかあの噂は本当だった!」

突然、大きな声を出すひまりちゃん。噂って何かしら?

「噂?」

「今、雅様ファンクラブの掲示板で噂になってるんです。雅様と女優の白鷺千聖が交際してるって」

「そ、そんな噂にもなってるのね」

「あはは、少し恥ずかしいね」

「おー二人とも顔が真っ赤だよー」

「この反応は・・・」

「どうやらその噂は本当っぽいな」

「ええええええ!!?大スキヤンダルだよ!!?」

「でも、付き合い始めたのって確か最近でしたよね?」

「そうだよ。ここ数ヶ月のことだね」

「え?つぐ知ってたの?」

「うん。この前ウチに来た時に教えてもらって」

「だったら教えてよ!?!」

「あはは、ごめんね?」

噂にまでなつてたのは少し恥ずかしい。だけれど、私も雅も、別に関係を隠すつもりは無い。いいじゃない。見せつけてあげましょう。私達の関係を。そして、その後も他愛ない会話は続いていく。

「へーつぐみちゃんってそんな特技があつたんだね」

「そうなんですよ!つぐつて本当に一番星を見つけるのが上手なんですよ!いつもみんなですけれど、絶対つぐが一番最初に見つけるんです!」

「それだけ、今のつぐみちゃんが幸せを感じてるってことじゃないかしら？一番星は、見つけると願い事が叶うと言われているけれど、今に幸せを感じてる人しか見つけられないとも言われているのよ？」

昔、本で読んだことがある。一番星を発見できるのは今幸せな人だけだって。だったら、見つけるのが上手なつぐみちゃんは、今に十分な幸せを感じているということでしょうね。

「へーつぐつて今幸せなのー？」

「うん！幸せだよ！皆と一緒にバンドができて、本当に毎日が楽しくて本当に私幸せだよー！」

「ははっ、つぐつて本当に良い子だよな」

私もそう思う。つぐみちゃんって本当に良い子ね。人一倍頑張り屋で、人一倍優しくて、本当にすごい。私も、つぐみちゃんを見本にして生きていこうかしら。

「そういえば、星つていえばこの前蘭ちゃん達と行った天体観測ツアーを思い出すね」

「あのツアーか。そうだね」

「天体観測ツアー？それって、この前日菜ちゃんが言ってたツアーかしら？」

「たぶんそうだと思います。蘭ちゃんと香澄ちゃんと一緒に参加したんですけど、途中で天文部の活動に来てたころちゃんと日菜先輩に会ったんです」

この前、日菜ちゃんにこの話は聞いた。羽女で唯一の天文部員だった日菜ちゃんと、花女で唯一の天文部員だったころちやんが合同で活動をしていたらしい。そして、活動に赴いた場所で、天体観測ツアーに来ていた三人と偶然出会ったらしい。

天体観測と言えば思い出す。昔雅と流星群を見たのを。あの時の光景は今でも忘れない。本当に、夢のような美しさだった。そして、その光景を背景に、ギターを奏でる雅は幻想的だった。

「その時に皆としたお話がすごく印象に残ってるんです」

「どの話？」

「うん、今見てる星の輝きは、何百年、何千年も前の輝きなんだって話」

「ああ、あたし達もその星みたいに、何年も、何百年も消えない輝きを残せたらいい、って話ね」

「何百年、ね。その時代まで皆の記憶に残ってるとなると、もはや伝説のガールズバンドって呼ばれてるかもしれないわね」

「伝説のガールズバンド！いいですねそれ！私達も雅様に負けないぐらいの伝説を残そうよー！」

「いや、僕もまだ何も伝説を残してないから」

「でも、どうせバンドをやるなら何か大きい爪痕を残したいよな」

「モカちゃん可愛い、未来の人達にも知れ渡っちゃうのか」

「いや、それは無いと思う」

「ははっ、蘭ちゃん辛辣だね」

伝説のガールズバンド。悪くないかもしれない。だけど私は、女優として伝説になりたいと思う。私は、雅は間違いなく将来、伝説として語り継がれる存在になつていてと思う。だからこそ、私は伝説の女優になる。ガールズバンドという団体では無く、個人で伝説になる。そしていつか、伝説の夫婦と呼ばれるように、なんて考えていると少し恥ずかしくなつてきた。時計を見てみると、そろそろいい時間になつていた。

「あら？もうこんな時間ね。雅、そろそろ」

「うん、そうだね。じゃあ皆、僕達はそろそろお暇いじまするよ。またね」

「あ、はい！お会計しますね！」

「雅様！また絶対ライブ行きます！ファンイベントも絶対行きます！絶対またお話しして下さいね！」

「またねー」

「今度は、あたしの歌を聞きに来て下さい。是非生で」

「今日はありがとうございました。あ、そうだ。最後に、サイン御願ひしていいですか？妹も、雅さんのファンなんです」

「あ！だったら私もお願いします！」

「ひまりはもう持つてるでしょ」

「こういうのは何枚あつてもいいの！」

「あはは、いいよ。妹さんの名前は？」

「あこです」

「あこちゃんね。了解」

そう言つて、雅はつぐみちゃん用の意してくれた色紙に、サインを書いていった。さすがにその手は手慣れていた。

「はい、できたよ。妹さんにもよろしくね？」

「はい、ありがとうございます！」

「雅様！一生大事にしますね！」

「あはは、うん、大事にしてね。それじゃ行こうか千聖」

「ええ、それじゃ、みんなまたね」

そして、私達は店を後にした。楽しい一時だった。またみんなと一緒にコーヒーでも飲めたらいいな。そう思える楽しい時間だった。

帰り道、私は雅と二人並んで歩いていった。その手は強く握り、雅を離すまいとしている。その雅は、何かを考え込んでいるようだった。大方、さっきの伝説のことを考えているのでしょうか。果たして、自分は本当に伝説になれるのだろうか？といったところかしら？

「大丈夫よ。雅なら間違いなく伝説を残せるわ。私が保証するわよ」

「あはは、何を考えてるか千聖にはバレバレだね。ありがとう。そうだね。僕ならきつとやれる。がんばらないと」

雅の表情に明るさが戻った。これできつと大丈夫でしょう。雅なら、大きな伝説を残してくれる。間違いなく。

「あら？一番星よ」

私は空に輝く一つの星を見つけた。周りにはまだ星は出ていない。あれが一番星ね。

「あ、本当だ。一番星を見つけれらるってことは、千聖は今幸せなの？」

「幸せに決まってるじゃない。隣に雅がいてくれる。それだけで私は幸せよ」

「千聖・・・うん、そうだね。僕も千聖がいつも一緒にいてくれるおかげで幸せだよ！」

本当に私は幸せ者。パスパレのみんながいて、雅がいて、本当にこれ以上何を望めと

いうのか。だけど、折角一番星を見つけたわけだし、お願いをしましょう。雅と、いつまでも一緒にいられるようにと。私はそう、強く、強く願うのだった。強く、強く。

第23演目 Best Friend

熱い。ただただ熱かった。

僕の周りを熱気が包み込んでいる。季節は初夏。熱いのは当然のことだ。

だが、その熱気は気候からくるものではない。気候から来る、茹だるような暑さでは無い。心地こちちよかった。気分が良くなる、高ぶるような熱気だった。

そもそもこの話、この熱気の発信源は上空に存在するあの憎たらしい火の玉では無い。僕の周りを覆い尽くした群衆だ。その群衆が、叫んでは跳ねる。その際に発される熱気。それが僕と千聖を包み込んでいた。

今僕達がどこにいるかというのと、とあるライブハウスに來ている。千聖に勧められとあるバンドのライブに來ていた。観客席側こちちから見るライブは久しぶりだ。そして、彼女達のパフォーマンスは僕の想像を大きく超えて、非常にレベルの高い物になった。

この群衆の熱気も頷ける。僕も、同じだ。彼らと同じように、彼女達の演奏、彼女の歌声に魅了されていた。彼女達のバンド名は『Rosealia』。千聖に是非聞いてみて欲しいと言われたバンドだ。そして、その実力に驚かされていた。間違いなく、プロ

に匹敵する実力。特にボーカルの彼女の歌声は聴く者を問答無用で惹きつけるカリスマ性を含んでいた。

そういえば、以前に知り合いの音楽関係者に聞いたことがある。彼は、とあるイベントのオーディションで審査員を務めていた。そのイベントの名前は、FUTURE WORLD FES.

プロでも落選が当たり前と言われている、業界でも有数の超難関オーディションだ。その審査員の彼が、今から来年の審査が楽しみで仕方が無いと言っていた。理由を尋ねると、今年の参加者に希に見る逸材を見つけたという。

そのバンドは、結成からほんの僅かな期間で、辛口審査員達を思わず唸らせる演奏を披露したらしい。本当ならば、文句なしで合格を与えられるレベルだった。しかし、審査員達が下した判決は落選だった。理由は、彼女達にはトップで合格してほしいから。

今のままでも、確かに合格だった。しかし、トップには僅かに及ばない。だが、驚くことに彼女達は結成間もない。ならば、彼女達に一年という長い時間を与えたらどうなるか？今から、来年彼女達の審査をするのが楽しみで仕方ない。と、彼は熱弁してくれた。

確か、その時に彼が口にしたバンド名が Rosealia だった。そして、今彼女達の演奏を実際に聴いてみて、彼の語ったことは、誇張表現でもなんでも無かったということ

とがよくわかる。

「凄い……」

僕だって、プロの端くれだ。現時点では、決して彼女達に負けているつもりは無い。だが、もしも一年という期間が空いたらどうだろう？もし、彼の言うように、一年という猶予を彼女達に与えた場合、その時も僕の方が上だと、胸を張って言えるだろうか？いや、僕だってその時はきつと成長している。先のことなんて誰にもわからない。その時になればわかることだ。今は、余計なことを考えず彼女達のパフォーマンスを目に焼き付けたい。

その後も、彼女達の高レベルな演奏は続く。数曲演奏した彼女達だが、全ての曲が高次元。高い水準で纏められていた。そして、僕はその全てに魅了されていた。そして、彼女達に対する興味にも似た感情が僕の中に芽生えていた。彼女達と会って、話がしてみたい。そう、僕は思っていた。そして、最後の曲が終わりを迎える。

「雅、彼女達に会ってみない？」

千聖からの、その提案に、今の僕が異を唱えるわけが無い。二つ返事で了承を示し、僕は彼女の案内でライブハウスの控え室に向かうのだった。

とある一室。その扉の前に僕は来ていた。千聖が事前に話を通してあつたよう名前を出せば関係者エリアにスムーズに入れてもらえた。壁一枚を隔てた向こう側に、先ほどステージに立っていた彼女達がいる。そう思うと、なんだか楽しみになってきた。早く会って話がしてみたい。僕はそう思っていた。おそらく、僕の予想が正しければ、彼女は……

「はい」

千聖のノックに対する返事が室内から聞こえてくる。ほどなくして、扉が開き、一人の女の子が顔を覗かせた。当然のことながら、見覚えがある。先ほどのステージでギターを担当していた子だ。水色の髪に、綺麗な薄緑の瞳をした女の子。

「……どうしてだろう？ 彼女の顔を初めて見た気がしない。非常に見覚えがある気がした。」

「お疲れ様、紗夜ちゃん。素敵な演奏だったわ」

「白鷺さん、ありがとうございます。それで、私達に会わせたい人物がいるとのことですが……あら？ そちらの方は……」

「まさか、黒城雅？」

「えええええええ！雅様!」

千聖が紗夜ちゃんと呼んだ彼女の後ろを見ると、そこには僕が最も会いたいと思っていた人物、Roseliaのボーカルの姿があった。その横には、ドラムを担当していた紫髪の少女もいる。先ほどの発言から、間違いなく僕のファンなのだろう。この前のひまりちゃんといい、どこのバンドにでも一人はいるのだろうか？嬉しいことだけだ。

「え？おーほんとだ！テレビで見た顔がいるよー!」

「黒城……雅さん……あこちゃんの、憧れの人……」

さらには、ベースを担当していたギャルっぽい子と、キーボード担当の大人しそうな子も集まってくる。いや、キーボードの子だけ離れた場所にいるけど。ん？今彼女あこって言わなかっただろうか？あこ、最近どこかで聞いた名前な気がする。

「とりあえず、中に入ってもいいかしら?」

「そうね。私も、彼とは話してみたかったからいいわ」

ボーカルの子の許可をもらい中に入る僕達。どうやら、ここは彼女達専用の控え室だったらしく、中に他のバンドの姿は無かった。それは都合の良いことだ。

「まずは自己紹介だね。皆知ってると思うけど、僕の名前は黒城雅。気軽に雅と呼んで欲しい。僕も気軽に呼ばせてもらおうから」

「そう、わかったわ。私は湊友希那。このバンドのボーカルよ」

「私は氷川紗夜。ギターを担当してしています」

氷川。なるほど、それでか。彼女を初めて見た気がしなかったのは。

「そうか、君は日菜ちゃんの……」

「っ！……ええ、日菜は私の妹です」

ん？なんだろう？今日菜ちゃんの名前を出したとき、紗夜ちゃんの様子がおかしかった気がする。気のせいだろうか？

「アタシは今井リサ。よろしくー。いやー、でもまさかテレビでよく見る芸能人にこんなところで会えるなんて思わなかったよー」

リサちゃんはどうやらフレンドリーな子のようだ。非常に話しやすく助かる。

「んんっ、……わらわは闇を統べる王。今宵の汝との血肉騒ぐ宴席、堪能させて頂くぞ。……どう、りんりん？雅様の前でカツコよく決まった？」

「うん、あこちゃん……すごくカツコよかったよ？」

「ほんと？やったあ！」

「あはは、でもあこ。それじゃ、憧れの雅様に自分の名前が伝わってないぞー？」

「あ、そつか。あこは、宇田川あこって言います！憧れの雅様に会えて感激です！」

あこ……宇田川……なるほど、彼女の名前、聞き覚えがあると思っていたけど、そういうことか。

「なるほど、巴ちゃんの妹っていうのは……」

「そうです！あこです！この間はサインありがとうございました！絶対大事にしますね！」

なるほど、どうやらこのバンドとは僕の知らないところで繋がりができていたようだ。日菜ちゃんを通じて紗夜ちゃんと、巴ちゃんを通じてあこちゃんと、友人の親族という繋がりが。

「うん、大事にしてね。良いお姉さんを持ったね」

「はい！自慢のおねーちゃんです！」

姉妹仲もどうやら良好みたいだ。白鷺家みたいだね。

「あの……私は、白金、燐子、です……よろしくお願いします……」

「うん、よろしくね、燐子ちゃん」

燐子ちゃんは人見知りなのだろうか？どうやら、あまり人と話すのが得意では無さそうだ。

「雅さん、一つ質問してもいいかしら？」

「なに？友希那ちゃん。僕に答えられることなら答えるよ」

「あなたの曲は以前から聞かせてもらっているわ。それで、あのような曲が作れるあなただからこそ聞いてみたい。雅さん、あなた一日にどれくらいの時間音楽のことを考え

て過ごしているの?」

音楽のことを考えている時間? そんなこと考えたことも無かったや。そうだね、記憶を辿ってみると……

「あはは、恥ずかしながら、ほんの数度……」

「数度? そんなに少ないのですか?」

「意外……です……」

驚く紗夜ちゃんと燐子ちゃん。そんなに少ないだろうか? 僕からしてみれば多いぐらいなんだけど。

「うん、どうしても一日に数度、音楽から意識が離れちゃう時があるんだ」

「て、え? そっちの数度? いやいや、どれだけ音楽のことばかり考えてるのさ?」

「さ、さすが雅様!」

周りを見てみると、友希那ちゃんも含めて Roselia の面々が驚愕していた。そんなに驚くことだろうか? 僕としては、常に音楽のことを考えているのは当然のことだ。いつ、いかなる時に音楽のアイデアが浮かぶかわからない。

日常の至る所にヒントは転がっているのだ。そのヒントを見逃さないように、聞き逃さないように、いつだってアンテナを張って、いつだって頭の中には譜面を思い浮かべている。今だってそうだ。彼女達の会話を楽しみつつも、この会話の中にだって詞につ

ながるヒントは無いかと模索している。

学校でも、食事中でも、千聖とのデート中でも、頭の片隅にはいつだって音楽のヒントに対するアンテナを設置している。だけど、日に数度ふとした拍子に、頭の中から音楽のことが消えて無くなる瞬間が訪れる。本当に残念なことに。僕としては、一日二十四時間常に音楽のことを考えていたのだけれども、そうはいかない。いつかはその領域にまで踏み込めるのだろうか？

「そんなに驚くことかな？友希那ちゃんだって似たようなものじゃないの？」

「・・・さすがに私もそこまででは無いわ」

「そう？友希那ちゃんならありえると思っただけだね？だって君は・・・」

これは、彼女の歌を聴いていたときから思っていたことだ。歌を聴けば、その人のこととはある程度わかる。だからこそ、彼女に対して、僕はこう感じていた。

「僕に似ているから」

そう、僕に似ている。まず彼女の歌声に含まれるカリスマ性。これは、実際に僕も持ち合わせているものだ。と言っても、自分ではそんなものあるのかどうかなんてわからない。周りのみんながそう言うから、おそらくあるのだと思っただけだ。

そして何より、彼女の技量。ギターの紗夜ちゃんとボーカルの友希那ちゃん、この二人の技量は目を見張るものがある。もちろん、他の3人の技量も高いが、この二人は特

別だ。おそらく、相当な時間を音楽に費やしている。もちろん、元からの才能も含まれているだろう。だけど、それだけでは、あの技術は身につかない。その技術が才能から来るものなのか、努力から来るものなのかなんて、見抜くことぐらい僕にはできる。

彼女達の技術は後者だ。どこまでもストイックに音楽につき込んだものだけが得ることのできる技術。それを彼女達は有していた。だからこそ、僕に似ている。音楽に対する妥協を許さない点は非常によく似ている。だけど、僕と友希那ちゃんには決定的な違いがあった。

「だけど、君は僕と違って見つけたんだね。最高の仲間達を」

実は僕にもバンドを組んでいた時期があった。高校に入ってからからの僅かな時間だったけど。今でこそシンガーソングライターとして活動している僕だけど、実は元々バンドマンとして活動するのを夢見ていた。

というのも、僕の目標とする人物が、ロックバンドのボーカルを務めているためだ。要するに、彼を超えるために、同じバンドという土俵で挑みたかったがためだ。そのために、僕は高校に入ってからすぐに仲間を集めてバンド活動を始めた。元々の技量も高く、志も高いメンバーを集め、活動を始めた。

だけど、その活動は一ヶ月もしない内に終わりを迎える。理由は、メンバーの不満だ。何に不満を抱いたかというと、練習量だ。僕にとっては至って普通の練習量だった。だ

けど、どうやら彼らからしたらそうでも無かったらしい。

一人、また一人といなくなり、一ヶ月もしない内に誰もいなくなつた。その後、何度かバンドメンバーを募り、集まるには集まるのだけど、誰も続かない。そういったことを繰り返して、いつしか僕はソロでの活動に落ち着いていた。

だからこそ、彼女が羨ましかつた。自分の理想に着いてきてくれる、理想的なメンバー。それを彼女は手に入れていた。僕が望んでも手に入れることが叶わなかつたそれを。

「本当に、羨ましいよ。自分の理想を支えてくれる、一緒に追つてくれる仲間がいて。本当に、羨ましいよ」

ただただ、羨ましかつた。ただただ、眩しかつた。僕がもう手に入れることを諦めてしまったものを、手に入れた彼女が、ただただ羨ましかつた。僕には、無いものを持つた彼女が。

「ふつ、あなたにもちゃんといえるんじゃない？隣で支えてくれる人が」
「え？」

彼女の言葉の意味を考えていると、僕の手が、誰かに握られたのを感じた。暖かくて、安心する手。いつも、僕の支えになってくれていた手。そこまで考えて、僕は彼女の言葉の意味がわかる。

そもそも、どうしてわからなかったのだろうか？何も、理想を支えてくれるのは、夢を追ってくれるのはバンドメンバーだけとは限らないじゃないか。どうやら、彼女達の演奏を見て、バンドとして高みに登る彼女達を見て、短絡的思考しかできなくなっていたらしい。

隣に目を向けると、僕の手を優しく包み込んでくれている千聖がいる。僕をいつまでも支えてくれると約束してくれた彼女が。僕の夢をいつまでも応援してくれると約束してくれた彼女が。どんな壁だつて一緒に壊してくれると約束した彼女が。僕のことを何も言わずに見つめていた。ああ、本当に僕という男はどうしようもないバカらしい。今に始まったことでは無いが。

「・・・そうだったね。ごめん、千聖。何も、僕を支えてくれるのは、一緒に夢を追ってくれるのは同じステージに立つ人だけじゃ無かったね。こんなバカな僕だけど、これからも支えてくれる？夢を応援してくれる？」

彼女からの言葉は無かった。だけど、彼女の満開の笑顔を見ればそんなものはいらない。言葉にせずともわかる。僕はその笑顔を見て、我慢できずに彼女をきつく抱きしめた。

「おーあつついねー」

「おねーちゃんから聞いてたけど、お二人って本当にそういう関係だったんですね・・・」

「お、大人です・・・」

「白金さん、いちおうあの二人は同じ年ですよ？大人もなにもないと思います」

皆が何か言ってるけど、気にしない。今の僕には千聖のことしか考えられなかった。音楽のことも頭に無い。日に数度ある、音楽の事を考えていない瞬間、その大多数は千聖のことしか考えていない時なのだから、本当に困ったものだ。無くしたい瞬間とは言っただけど、正直悪い気はしない。

「そうだね、ありがとう友希那ちゃん。君のおかげでなんだかスッキリした気がするよ。そうだね。何も支えてくれるのはバンド仲間だけじゃない。それを思い出させてくれてありがとう。どうも、君たちの演奏を見ると、昔の嫌な記憶を思い出しちゃってね。思考が短絡的になってたよ」

「別に、私は何もしてないわ。あなた達が勝手に気づいただけ。だから気にする必要は無いわ」

友希那ちゃんはクールな子のようだ。それでいて、良い子だな。ああ、彼女に出会えて良かった。彼女と話せて良かった。今日という一日は素敵な一日になった。

「友希那ちゃん・・・いや、友希那、君とはどうやら最高の友人になれる気がするよ」

「そうね、私もそんな予感がするわ、雅」

そう言う僕達の顔には笑みが浮かんでいた。ああ、今日の出会いに感謝しないと。こ

の場をセッティングしてくれた千聖には本当に感謝しないと。

「おーこんな良い笑顔した友希那なんて久しぶりに見たよー。これはあれかなー？ ついに友希那に男の陰が！ つていうやつかなー？」

「ちよ、ちよつとりサ。変なこと言わないで」

「友希那さん、ちさとさんは強敵ですよ？ 頑張ってくださいね！」

「ちよ、ちよつとあこまで何を言ってるの？」

「ゆ、友希那さんも、大人です・・・」

「湊さん、微力ながら応援しています。ですが、練習に影響の出ない範囲でお願いしませう」

「り、燐子に紗夜まで・・・」

「あら？ 面白そうな話してるわね？ もっと詳しく聞かせてもらってもいいかしら？ 友希那ちゃん？」

「し、白鷺さん、その顔は何？ 笑顔なのに、目と心だけは笑っていないわよ・・・」

「あちゃー、友希那、骨が残ってたら拾ってあげるから頑張つてね」

「り、りサ、元はといえば誰のせいだと思つて・・・」

「友希那ちゃん？ お外でお話ししましょうか？ 二人で」

「ま、待つて。今あなたと二人になるのは・・・」

「湊さん。では、先に解散してますので、ごゆっくりしてきてください」

「さ、紗夜、あなた・・・」

「行くわよ、友希那ちゃん？」

「ちよ、ちよつと白鷺さん？手を離して？潰れそうだから、ちよ、ちよつと？」

そして、千聖と一緒に外へ消えていく友希那ちゃん。僕には、彼女の無事を祈ることしかできない。無力な僕を許して欲しい。何はともあれ、今日は素晴らしい一日になった。

最上の演奏を聴け、最愛の人の大切さを改めて認識でき、そして、最高の友人ができた。本当に素晴らしき日になった。今日という日に感謝しないといけない。僕は、その日の幸せを噛みしめながら、思考を音楽に切り替えるのだった。

第24演目 みんなあなたを愛してる

それは、とある初夏の日曜日だった。

その日、私は久しぶりに暇を持てあましてた。日曜日にも関わらず、珍しく仕事は入っておらず、パスパレとしての活動もレッスン含めて一日オフ。だけど、雅は今日一日中仕事。折角のオフなのにデートもできない。私は、暇を持てあましていた。

「暇ね……」

「あはは、千聖ちゃん、さつきからそればかりだよ」

今私は、とあるファミレスに花音と来ていた。さつきまではウインドウショッピングを満喫していたのだけれども、数時間も楽しむとさすがに見るものが無くなり、このファミレスに二人できていた。時刻は夕方。雅の仕事が終わるまでは数時間ある。私はそれまでの時間、特にすることもなく、暇を持てあましていた。

確かに、花音とのおしゃべりは楽しい。それは間違いない。だけど、今日一日、私は何か物足りなさを感じていた。原因はわかっている。雅が隣にいないことだ。実の所、私は最近同じ現象をよく感じている。学校でも、事務所でも、雅が隣にいないと思うと、なんだかとんに虚しい気持ちになってしまう。

それが、今感じてる物足りなさの正体。雅と数時間離れている。それだけで、どうやら私は寂しさを感じるようになってしまったらしい。自分でも、恋人になることによつてここまで雅に依存してしまうとは思つてもいかなかった。今はただ、寂しい。

「あれー？千聖と花音じゃん」

寂しさを感じていると、急に誰かに名前を呼ばれた。その方向に目を向けると、そこにはこの前のイベントで知り合った子、バンドでは私と同じベースを担当している女の子、リサちゃんがいた。

よく見ると、彼女の後ろにはそんな彼女が所属するバンド、Roselliaのメンバーが勢揃いしていた。今来たのかと思つたが、どうやらそうでは無いらしい。リサちゃんの手には伝票が握られていた。おそらく、今からお会計なのだろう。来ていたことに全く気づかなかつた。

「こんにちは、みんな。今日も練習かしら？」

「いいえ、来週近くのライブハウスでライブを行うため、今日はその打ち合わせに来ていました」

私の質問に答えてくれたのは紗夜ちゃん。あの日菜ちゃんのお姉さんだ。日菜ちゃんが才能の人だとするなら、彼女は努力の人。弛まぬ努力で今の実力を手に入れた。その分、なんでも才能一つで熟してしまう日菜ちゃんに劣等感を抱いているみたいだけ

ど。

「そうだわ。来週のライブ、私も見に行つていいかしら？」

「もちろんいいけれど、急にどうしたの？」

ボーカルを担当する友希那ちゃんの質問が飛んでくる。彼女の歌声は凄い。雅にも負けず劣らずのカリスマ性を秘めている。だからこそ、雅に彼女の歌を聴いてみてほしかった。これが本音だ。

「みんなに、会つてほしい人がいるの。ライブが終わつてから、控え室に伺つてもいいかしら？」

これが建前。というわけでもなく、実は両方本音。雅に友希那ちゃんの歌を聴いてほしい。そして、彼女に会つてみてほしい。きっと、素敵な出会いになると思うから。

「わかつたわ。スタッフにはこちらから話を通しておくわ」

「ありがとう。助かるわ」

それだけ言つて、友希那ちゃん達は出口に向かう。来週が楽しみになってきた。雅は、一体どんな反応を見せてくれるだろう？今から楽しみで仕方ない。

「千聖ちゃん、今雅君のこと考えてるでしょ？」

「あら？花音、よくわかつたわね」

「だつて千聖ちゃん、雅君が関わつてるときが、今みたいに一番楽しそうなんだもん」

どうやら私は雅のこととなるとすぐ態度に出てしまうらしい。気をつけなさいといかない。と思いつつ、次の瞬間には来週の雅の顔を想像して、また態度に表れてしまうのだった。

それから一週間が経過した。今日はRosealiaのライブの日。そして、そのライブはすでに始まっている。目の前で繰り広げられる目を見張るような素晴らしい演奏。友希那ちゃんの聴く者を問答無用で惹きつける歌声。熱気に包まれる観客達。

心地良い空間だった。一体感に包まれた観客と、夢中になって叫んで跳ねる。これも全て、彼女達のレベルが高いからできること。観客達が心の底から彼女達の演奏を楽しんでいるのがよくわかる。

隣の雅に目を向けてみると、彼もまた彼女達の演奏に夢中になっていた。彼女達の一挙手一投足を見逃すまいと目を見開いている。おそらく、彼女達の技術を自身の糧にしようとしているのだろう。

「凄い……」

雅が呟く。やっぱり、彼女達の演奏はレベルが高い。プロである雅ですら、思わずこ
う呟くのだから、もはや疑いようが無い。彼女達は、すでにプロのレベルに達している
のかもしれない。

「雅、彼女達に会って見ない？」

そして、そんな彼女達と雅に会ってほしかった。理由はいくつもあるけれども、一番
の理由は、雅に友希那ちゃんと話してみてほしかった。私の抱いた印象では、友希那
ちゃんは雅によく似ている。だから、雅に実際に会ってほしかった。きつと、二人に
とっていい出会いになるから。私はそのような確信を抱きつつ、雅を引き連れて関係者
エリアに向かった。

事前に友希那ちゃんに言っていたこともあり、私達は関係者エリアにスムーズに入
ることができた。といっても、入り口に立っていたスタッフさんに雅がサインを求めら
れたりしていて、スムーズかどうかは正直判断に困るけれども。

何はともあれ、私達は彼女達の控え室の前まで来ていた。雅の様子を窺うと、どうや

ら早く中に入りたくてソワソワしている様子。まるで、子どもみたいにワクワクしているということが一目でわかる。

「はっ」

扉をノックすると、中から女の子の声が返ってくる。この声は紗夜ちゃんかしら？ほどなくすると、扉が開き、中から水色の髪をした女の子が顔を出した。案の定、紗夜ちゃんだった。

「お疲れ様、紗夜ちゃん。素敵な演奏だったわ」

「白鷺さん、ありがとうございます。それで、私達に会わせたい人物がいるとのことですが・・・あら？そちらの方は・・・」

「まさか、黒城雅？」

「えええええええ！雅様!?!」

当然のことのように、皆がそれぞれ驚愕の表情を見せてくれる。あこちゃんは、確かに雅のファンだと言っていた。その、憧れの人物がいきなり目の前に現れたのだから、驚くのも無理も無いでしょう。あの友希那ちゃんですら、声には出していないものの、その目が大きく見開かれている。

「え？おーほんとだ！テレビで見た顔がいるよー!」

「黒城・・・雅さん・・・あこちゃんの、憧れの人・・・」

そして遅れて、リサちゃんと隣子ちゃんも中から顔を出してくる。出してくれるのはいいのだけれども、私達は今通路に立っている。いい加減中に入れてくれないかしら？まあ、いきなり目の前に雅が現れて驚くのも無理は無いけれども。

「とりあえず、中に入ってもいいかしら？」

「そうね。私も、彼とは話してみたかったからいいわ」

友希那ちゃんからの許可が出て、部屋の中に通される。どうやら、友希那ちゃんも雅と話してみたかったらしい。やっぱり、友希那ちゃんも、自分が雅と似ていると感じていたのかしら？

「まずは自己紹介だね。皆知ってると思うけど、僕の名前は黒城雅。気軽に雅って呼んで欲しい。僕も気軽に呼ばせてもらおうから」

「そう、わかったわ。私は湊友希那。このバンドのボーカルよ」

「私は氷川紗夜。ギターを担当しています」

紗夜ちゃんの自己紹介を聞いて、納得いったような表情を見せる雅。どうやら、氷川という名字と、その似通った容姿から、気づいたみたいね。日菜ちゃんと紗夜ちゃんの関係に。

「そうか、君は日菜ちゃんの・・・」

「っ！・・・ええ、日菜は私の妹です」

日菜ちゃんの名前が出ると、紗夜ちゃんは一瞬だけど、確かに表情をゆがめた。やっぱり、二人の関係はまだ上手くいっていないみたい。日菜ちゃんは、今度ある七夕祭りに紗夜ちゃんを誘いたいって言うていたけれど、上手く行くかしら？断られるのが怖くてまだ誘えていないみたいだけれども。

「アタシは今井リサ。よろしくー。いやー、でもまさかテレビでよく見る芸能人にこんなところで会えるなんて思わなかったよー」

リサちゃんは相変わらずフレンドリーね。雅も、見かけによらずコミュニケーション力は高いけれども、それを差し置いても彼女のコミュニケーション力は非常に高いと思う。

「んんっ、．．．わらわは闇を統べる王。今宵の汝との血肉騒ぐ宴席、堪能させて頂くぞ。．．．どう、りんりん？雅様の前でカッコよく決まった？」

「うん、あこちゃん．．．すごくカッコよかったよ？」

「ほんど？やったあー！」

「あはは、でもあこ。それじゃ、憧れの雅様に自分の名前が伝わってないぞー？」

「あ、そっか。あこは、宇田川あこって言います！憧れの雅様に会えて感激です！」

あこちゃんも相変わらずね。正直、先ほどの口上はかっこいいのかどうかよくわからないけれども。

「なるほど、巴ちゃんの妹っていうのは．．．」

「そうです！あこです！この間はサインありがとうございます！絶対大事にしますね！」

どうやら、宇田川という名字からあちゃんと巴ちゃんとの関係に気づいたらしい雅。よくよく考えると、知らないうちに雅は、Roseliaとの繋がりができていた。本当に、世間というのは狭いものなんだと実感する。

「うん、大事にしてね。良いお姉さんを持ったね」

「はい！自慢のおねーちゃんです！」

相変わらず姉妹仲も良好みたいね。日菜ちゃん達の仲も良好になってくれればいいのだけれども。

「あの・・・私は、白金、燐子、です・・・よろしくお願いします・・・」

「うん、よろしくね、燐子ちゃん」

燐子ちゃんも相変わらず人と話すのが苦手みたいね。ライブ中の彼女を見ると、彼女のこういつた一面を忘れそうになるけれども。

「雅さん、一つ質問してもいいかしら？」

「なに？友希那ちゃん。僕に答えられることなら答えるよ」

「あなたの曲は以前から聞かせてもらっているわ。それで、あのような曲が作れるあなただからこそ聞いてみたい。雅さん、あなた一日にどれくらいの時間音楽のことを考え

て過ごしているの?」

友希那ちゃんがこんな質問を投げかけたくなるのもわかる。雅の作る曲は、基本的に日常の中の風景をモデルにしている。町中で繰り広げられる他愛も無い会話。外を歩けば誰もが出くわすような日常的光景。逆に、家の中で起こるよくある現象など、本日に一日生活していれば誰も見かけられるようなシチュエーションをテーマに作られることが多い。

だからこそ、多くの人からの共感を得ている。歌詞からまるでドラマを見ているように情景が浮かんでくると。だけど、そんな曲を作り続けるには、日常の中で音楽のことを考えて生活していないと難しい。些細な事にもすぐに反応して曲に取り込めるように、アンテナを張ってないと難しい。だから友希那ちゃんは聞きたかったのだろう。一体、雅は一日の内に、どれぐらいの時間アンテナを張って生活しているのかと。

「あはは、恥ずかしながら、ほんの数度……」

「数度? そんなに少ないのですか?」

「意外……です……」

ほんの数度。たしかにそれだけ聞けば意外に思うでしょう。だけど、これは雅の言葉足らず。たぶん、雅のことでしようから、普通それぐらいは考えて生活してるものじゃないの? とか、自分を普通だと考えて質問に答えてそうね。

「うん、どうしても一日に数度、音楽から意識が離れちゃう時があるんだ」

「て、え？そつちの数度？いやいや、どれだけ音楽のことばかり考えてるのさ？」

「さ、さすが雅様！」

驚愕の表情を浮かべる面々。雅のことを知らないと、驚くでしょうね。だけど、雅に取ってはこれが普通。何一つおかしいことはない。だって、私とのデートの時ですら、頭の片隅にはいつも音楽のことを置いてあるのだから。だけど、そんな雅でも日に数度は音楽のことが意識から離れる時があるらしい。一体いつなのかしら？こればかりは私にもわからない。

「そんなに驚くことかな？友希那ちゃんだって似たようなものじゃないの？」

「……さすがに私もそこまででは無いわ」

「そう？友希那ちゃんならありえると思っただけだね？だって君は……」

そこで私は思わず、はっ、となった。まさか、雅もそう感じていたとは思わなかった。思い返せば、雅も友希那ちゃんの歌声を聞いていたのだから、当然かもしれない。その歌声から、雅なら何かを感じ取ってもおかしくない。そう、例えば……

「僕に似ているから」

自分に似ているとか。雅と友希那ちゃんはよく似ていると思う。そのカリスマ性、音楽に対する姿勢。音楽に関しては人に厳しく、それ以上に自分に厳しい面。非常によく

似ていると思う。音楽に関して違う点を上げるとするならば……

「だけど、君は僕と違って見つけたんだね。最高の仲間達を」

そう、バンドかソロかの違いだろう。といっても、雅にだってバンドを組んでいた時期はあった。本当にわずかな期間で終わってしまったけれども、確かにバンドを組んでいた時期はあった。

やめた理由は仲間が練習に着いて来れなかったから。そもそも雅は、音楽に関しては自分が一般的だと考える傾向にある。練習量だってそう。自分の練習量は普通だと思いい、仲間に課したわけなのだけれども、誰もその練習に着いてこれなかった。

雅はいつも、その倍の練習量を熟していたというのに、誰も着いてこれなかった。だからこそ、現在雅はソロで活動している。雅が言うには、もうバンドは諦めたらしい。無理も無い話だとは思う。

「本当に、羨ましいよ。自分の理想ゆめを支えてくれる、一緒に追ってくれる仲間がいて。本当に、羨ましいよ」

その雅の言葉を聞いて、私は凄く悲しい気持ちになった。羨ましい？それじゃ、まるで今はそんな人物一人もいないみたいじゃない。じゃあ私は何？私じゃ、雅の支えにならない？一緒に夢を追いかけてない？

「ふっ、あなたにもちゃんといえるんじゃない？隣で支えてくれる人が」

「え？」

いてもたつてもいられず、雅の手を握る。私の存在に気づいてほしかった。私のことを見てほしかった。雅が静かにこちらを振り向く。その顔には、懺悔の色が浮かんでいような気がする。私のことに、気づいてくれたのだろうか？

「・・・そうだったね。ごめん、千聖。何も、僕を支えてくれるのは、一緒に夢を追つてくれるのは同じステージに立つ人だけじゃ無かったね。こんなバカな僕だけど、これからも支えてくれる？夢を応援してくれる？」

返事は返さなかった。そんな当たり前なこと、一々声に出す気にもならない。言われなくても、いつまでだって隣で支えてあげるのだから。だからこそ、言葉の代わりに笑顔を送る。それだけで、察してくれたのか、雅がきつく抱きしめてくれた。暖かくて、安心する胸。私の大好きな場所。

「おーあつついねー」

「おねーちゃんから聞いてたけど、お二人って本当にそういう関係だったんですね・・・」
「お、大人です・・・」

「白金さん、いちおうあの二人は同じ年ですよ？大人もなにもないと思います」

皆が何か言っているけれども、今はどうでもよかった。今はただ、この温もりに溺れたい。だけど、その時間も終わらしい。雅の胸が私から離れていく。凄く残念に思

う。

「そうだね、ありがとう友希那ちゃん。君のおかげでなんだかスッキリした気がするよ。そうだね。何も支えてくれるのはバンド仲間だけじゃない。それを思い出させてくれてありがとう。どうも、君たちの演奏を見てると、昔の嫌な記憶を思い出しちゃってね。思考が短絡的になってたよ」

「別に、私は何もしていないわ。あなた達が勝手に気づいただけ。だから気にする必要は無いわ」

友希那ちゃんは良い子ね。言動で勘違いされることもあるみたいだけど、本当に優しい子。今はその優しさを享受しよう。

「友希那ちゃん・・・いや、友希那、君とはどうやら最高の友人になれる気がするよ」
「そうね、私もそんな予感がするわ、雅」

そう言って、互いに笑顔を浮かべる二人。出会ってそんなに間もないけれども、友希那ちゃんのあんな顔初めて見た。・・・これはひよつとすると、雅に惚れちゃったかしら？ そうなると、さっきの優しきは別問題ね。少しお話しする必要が出てくるわね。

「おーこんな良い笑顔した友希那なんて久しぶりに見たよー。これはあれかなー？ ついに友希那に男の陰が！ っていうやつかなー？」

「ちよ、ちよつとりサ。変なこと言わないで」

「友希那さん、ちさとさんは強敵ですよ？頑張ってくださいね！」

「ちよ、ちよつとあこまで何を言ってるの？」

「ゆ、友希那さんも、大人です・・・」

「湊さん、微力ながら応援しています。ですが、練習に影響の出ない範囲でお願いしま
す」

「り、燐子に紗夜まで・・・」

「あら？面白そうな話してるわね？もつと詳しく聞かせてもらってもいいかしら？友希
那ちゃん？」

「し、白鷺さん、その顔は何？笑顔なのに、目と心だけは笑ってないわよ・・・」

「あちゃー、友希那、骨が残ってたら拾ってあげるから頑張つてね」

「り、リサ、元はといえば誰のせいだと思つて・・・」

「友希那ちゃん？お外でお話ししましょうか？二人で」

「ま、待つて。今あなたと二人になるのは・・・」

「湊さん。では、先に解散してしますので、ごゆっくりしてきてください」

「さ、紗夜、あなた・・・」

「行くわよ、友希那ちゃん？」

「ちよ、ちよつと白鷺さん？手を離して？潰れそうだから、ちよ、ちよつと？」

その後、私と友希那ちゃんはお外で仲良くお話をした。終始、友希那ちゃんの声と体が震えていたような気がするけれども、気のせいかしら？

時刻は既に夜に差し掛かろうとしていた。私は今雅と二人、帰途についていた。今日という一日は素晴らしい日になった。雅と友希那ちゃんを会わせる作戦は大成功。今日出会ったばかりなのに、早くも親友と呼べる関係にまでなっていた。気がかりは、友希那ちゃんが雅に対して今以上の関係を求めないかだけれども、あれだけお話ししたのだから大丈夫でしょう。

そして、その雅は現在、私の隣で何かを考え込んでいた。また悩み事かしら？最近雅はよく悩みを抱えていると思う。

「雅？どうかしたの？」

「うん、ちよつとね。千聖が僕のことをいつも支えてくれるのはよくわかったよ。だけど、逆に言うと、千聖しか僕の支えになつてくれないのかな？千聖の支えにしか僕はなつてないのかな？つて思っちゃって。パスパレのみんなや、フアンの人達。多くの人

のことを想つて僕はここまで音楽活動が続けてきたけど、逆に僕のことを想つてくれる、支えようとしてくれてる人つているのかな、つて考えちゃつて。あはは、なんだかあつかましい悩みだよね」

「雅、それはちよつと視野が狭いわよ？音楽のことばかり考えてるせいかしら？そうね、例えば今日のおちゃん。あなたに会えてすごく喜んでたわよね？雅に会えただけであんなに喜べるのつて、あなたのことを想っている証拠じゃないかしら？この間のひまりちゃんだつて同じよ。それに、あの二人だけじゃない。パスパレのみんなだつて、千景だつて、今日会つたばかりの友希那ちゃんだつて、言葉にしなくても、ちゃんと雅のことを想つてる。支えようとしている。愛しているわよ。ちよつと考えればわかることよ？少しは音楽以外のことにも目を向けてみたら？」

本当に、視野が狭くなつていくんじゃないかしら？千景やパスパレのみんなも、雅といる時、本当に楽しそうにしている。それはもう、心の底から。そんなこと、本当に雅のことを想つていないとできないんじゃないかしら？そんなこと、一々声にするようなことでも無い。だから誰も言わない。だけどちゃんと、みんな雅のことを想っている。みんな雅のことを愛してる。それは間違いない事実なのだから。

「あはは、手厳しいね。でも、それも仕方ないことか。そうだよ。ごめん、変なこと聞いいて。どうも最近ナイーブになつてる気がするや。音楽活動の方が難航してるからか

な?ごめんね」

「いいのよ、気にしないで。だけど、一番雅のことを想っているのは、愛してるのは私だから。それだけは、覚えていて?」

「あはは、忘れるわけじゃないじゃないか。逆もまた然りだよ。千聖のこと一番想っているのは、愛してるのは僕だからね」

「ええ、わかつていいわ」

誰も言わない。だからこそ、言葉にするのは私の特権。いつだって、言葉にしてあげる。だから、いつだって言葉にしてほしい。愛してる。それは魔法の言葉。人を簡単に幸せにする呪文。私は今日もその呪文を唱える。雅が幸せになりますように。夢が叶いますようにと、願いを込めて呪文を唱える。二人が、いつまでも幸せでいられるように。呪文を唱える。明日も。来年も。いつまでも。

第25演目 嘘

「ああ、儂い……」

学校からの帰り道、僕は変人に出くわした。2度あることは3度あるとはよく言ったものだ。正にその通りだった。またも、同じ時間帯、同じ場所、同じシチュエーションで遭遇することになった。デジャヴを感じる。だけど、まだ見つかつていないという状況も一致している。つまりは、逃亡するチャンスもまた与えられているということだ。これは過去からの脱却。逃れられずに奴に捕らえられた、過去の自分との決別。僕は、今ここで前に進む。

「おや？ 雅じゃないか。こんなところで出会うなんて、これも運命かな？」

「双子の弟です」

早くも失敗した。今回も儂い運命だった。

「なに？ まさか、雅に双子の弟がいたなんて知らなかったよ。初めましてだね。私の名前は瀬田薫。こんなところで会えるなんて、感動的じゃないか。ああ、儂い……」

「え？ 信じちゃうの？」

いや、こんなモロわかりの嘘を信じられたらこっちも困るんだけど。薫らしいといえ

ば薫らしいけど。

「もちろん信じるさ。疑心からは何も生まれない。かのシェイクスピアもこう言っている。誰の言葉にも耳を傾けよ。口は誰のためにも開くなと。つまり、そういうことさ」「いや、それは使いどころがさすがにおかしいと思うんだけど。普通に口動いてるじゃん?」

「つ、つまり、そういうことさ……」

いつものことながら、どうやら意味もわからず言葉を引用してゐるらしい。まあ確かにそれっぽく聞こえなくもない……のかな? いや、やっぱり聞こえないかもしれない。

「それよりも、弟君の名前はなんと言うんだい? 私に、君の声を聞かせてほしいのだが」「え? 僕の名前?」

どうしよう? なんだか、このまま実は僕本人ですって言っても信じそうにない。はあ、しょうがない。元はといえば僕が蒔いた種だ。蒔いたつもりは全くないけど。今日はどことん付き合つてあげようか。どうせ、帰るまでの数分だけだろうし。

「えーと、雅まさです」

「雅まさか。いい名前だね。兄上に負けず劣らずの」

うん、僕の名前の読み方を変えただけだからね。劣つてはいないんじゃないかな? まあ、僕は『みやび』という名前が割と気に入ってるから、断然そっちの方が良いけど。

「薫さん！また一人で勝手にいなくならないで下さいよ！」

そして、薫の戯れに付き合っていると、助け船が現れた。この状況をなんとか打開してほしい。そういう思いを込めて、僕は現れた彼女、奥沢美咲ちゃんに視線を向けた。

「おや？美咲？どこに言つてたんだい？勝手にいなくなつてはダメじゃ無いか」

「それはこつちのセリフです……つて、雅さん？」

「ああ、美咲。彼はよく似ているが、雅ではない。彼の双子の弟君、雅だ」

「え？いや、どう見ても雅さん……ああ、そういうことですか」

そこで、美咲ちゃんは何か気づいたように、納得したと言わんばかりの表情を見せた。どうやら、僕が今置かれている現状に気づいてくれたようだ。ならば話は早いと言うように、僕は直ぐさま、美咲ちゃんに、助けを求める眼差しを向ける。答えはすぐに彼女の口から帰ってきた。

「そういうえば、最近よく思うことがあるんですよ。人生時には諦めることが肝心だつて」

「急にどうしたんだい？美咲」

「いえ、なんとなく言つてみたくなつただけですよ」

つまり、そういうことだ。うん、美咲ちゃんに諦めろと言われました。儂い。

「そうだ、雅。紹介しよう。彼女は、奥沢美咲と言つてね。私と共にバンドを組んでいる

んだ」

「あー、えっと、奥沢美咲です。とりあえず、よろしくお願いします?」

「どうしたんだい美咲? なんだか挨拶がぎこちないじゃないか」

「あはは、そんなこと無いですよ?」

まあ、美咲ちゃんとしては当然だろう。僕だって、見知った相手にいきなり自己紹介することになったら同じようなぎこちない挨拶になってしまいう気がする。挨拶をするという違和感が凄い。

「そうだ雅^{まこと}。私達はこれからバンドのメンバーでティータイムをする約束をしているのだが、君も来ないかい? 雅の弟^{みやび}なら大歓迎さ」

「え?」

どうしよう。僕はこの数分の会話だけで帰るつもりだったのに、まさか長期戦の誘いが来るなんて。ここは、なんとしてでも断らないと。

「なに。遠慮することは無いさ。こころもきつと歓迎するだろう。さあ、行こうか」

「え? いや、ちよつと待って」

そのまま薫は、僕の腕を引っ張って行く。どうやら、僕に拒否権は存在しないらしい。儂い。

「諦める事って、大事だと思うんですね。そうすることで、気持ちが楽になれる気がし

ますから」

美咲ちゃんはその語る。ただ、その言葉は僕じゃ無い誰かに向けられている気がしたことだけ追記しておく。

そしてやってきたのは、僕もよく知る場所、羽沢珈琲店だった。どうやら、バンドのメンバーとここで待ち合わせているらしい。

「いらつしやいませー!」

店に入った僕達を出迎えてくれたのはよく知る人物だった。この店の一人娘つぐみちゃんだ。

「あ瀬田先輩、美咲ちゃん、それに・・・雅さん?」

「おや? つぐみちゃんも雅のことを知ってるのかい?」

「はい。雅さんは家の常連さんですから。そうじゃなくても、有名人ですから知らない人は少ないと思いますよ?」

「そうか。雅も立派に成長したものだね。儂い・・・」

なんで薫が誇らしげにしてるんだろう？まるで今にも、雅は私が育てたとても言わんばかりの表情を浮かべている。いや、だれも薫には育ててもらってないからね？

「だけど残念ながら、彼は雅ではない」

「え？雅さんじゃない？」

「ああそうさ。彼の名前は雅。雅の双子の弟さ」

「双子の・・・弟？」

まるで、何言ってるんだこの演劇バカとでも言いたげな表情で、僕と薫に交互に視線を送るつぐみちゃん。僕も同感だ。本当にこの演劇バカは何を言ってるんだろう？助けを求めるように、僕はつぐみちゃんにアイコンタクトを送る。助けて下さいつぐみ様。

「えっと、お、弟さんとは会うの初めてですね？羽沢つぐみです。これからどうぞよろしくお願いします」

結論を言うと、見捨てられた。もうダメだ。おしまいだ。つぐみちゃんにまで見捨てられてしまったら僕は誰に頼ればいいんだ・・・

「やつぱり、人生って時には諦めることによつて前に進むるときもあると思うんですね。羽沢さんもそう思いますよね？」

「あはは、そうだね」

いや、ここで諦めてしまったら僕はもう黒城雅みやびに戻れない気がするんだけど。ああ、こういうときに千聖がいてくれたら。そう思わずにはいられない。

「ところで、こころ達はもう来ているかな?」

「あ、はい!こころちゃんとはぐみちゃんが先に来ますよ」

「そうか。ということは、花音はまだ来ていないのか」

ん?花音ちゃんがまだ来ていない?あれ?なんだか嫌な予感がするんだけど。花音ちゃんって、確かかなりの方向音痴だったような。大丈夫かな?

「では、私達も先にこころのものもとへ行くとしよう」

「あ、はい!奥の席にいますよ」

そう言って奥の席を指差すつぐみちゃん確かに、そちらの方からは賑やかな話し声が聞こえている。薫の先導に従い、そちらの方に向かうと、そこには二人の少女がいた。

「薫、美咲、遅かったじゃない!」

「これで後はかのちゃん先輩だけだね!あれ?そつちの人は?どこかで見たことあるよな・・・」

そう言って考え込むオレンジの髪をした子。だけど、どうやら思い出せずにいるようだ。

「まあ、はぐみが見たことあるって言うのも当然だと思うよ。有名人だからね。黒城

「雅みやびって言えばわかる？」

「あ、そうだ！はぐみ、テレビで見たことあるよ！本当に、その黒城雅みやびって人にそっくり！」

「そっくりも何も、本人だから」

「へー本人なんだ！・・・で、そんな有名人がなんでこんな所にいるの？」

うん。それは僕が一番聞きたいんだけど。なんで僕はこんな所に連れてこられてるの？

「美咲、嘘はよくないんじゃないかな？はぐみ、彼は実際には雅みやびでは無い。彼の双子の弟、雅みやびだ」

「え!?弟なんだ！すごいそっくり！」

「あーはい。そうでしたね」

本当に誰かこの演劇バカを止めてくれ。僕はいつになったら雅みやびに戻れるんだ？

「へー、あなたのお兄さんって有名なのね！あたしは知らないわ！」

「うん。素直でいい答えだね」

知らないことを恥じることも無く、言い切つて見せた。下手に知つたかぶられるよりも好感が持てるね。

「ごめん！遅れちゃった・・・」

そして彼女達の談笑に付き合っていると、見知った少女がやってきた。花音ちゃんだ。だが、来たのは彼女だけでは無かった。彼女の横にもう一人、見慣れた少女がいた。千聖だ。

「おや？千聖じゃないか。君も一緒だったんだね」

「ええ。あなたがみんなに迷惑をかけてないか確認しにきたのだけれど……あら？みよび雅も来てたの？」

そう、僕も来ていたんです。救世主が現れたことを、僕は大いに喜んだ。

「おや？千聖、さすがの君も間違えてしまうのだね？それほどそっくりということか。ああ、愛しのお姫様にまで見間違えられるなんて、なんて儂いんだ……」

「えっと、何が言いたいのかしら？」

「千聖、彼は雅みやびでは無い。双子の弟の雅まさだ」

「はい？」

いかにも、この頭のおかしな幼なじみは何を言っているんだ？とでも言いたげな顔で薫のこのを見る千聖。僕も全面的に同意見です。そんな千聖に向けて、助けを求める視線を僕は送る。本当になんとかしてください。千聖様。千聖も、何かを探るような視線を、僕と薫、そして周りに向ける。そして、意を決したかのような表情かおを見せる。その表情を僕は知っている。千聖のその表情かおは……

「ごめんなさい。一時帰国するって聞いてたのをすっかり忘れていたものだから、間違えてしまったわ。相変わらずお兄さんにソックリね。久しぶり、元氣だったかしら？」
女優としての白鷺千聖の表情だ。つまり、彼女はこの場を演技で乗り切ることを決断したので。だがそれが意味することはつまり、僕が双子の弟だと肯定したということだ。夢い。だが、彼女はなんの意味も無くこのような決断をすることは決して無い。

彼女がそう決断したということはつまり、その方がこの場では得策と踏んだということ。下手に真実を伝えるよりも丸く収められると判断したということ。ここは、彼女の判断に従うのが吉だろう。

「うん。ひ、久しぶりだねー千聖。た、偶々そののに、兄さんのお知り合いの人？に出会ってここに来たんだ」

ダメだ。僕に演劇は向いていない。ものすごくぎこちなくなってしまった。それを見た千聖の頬が笑いを堪えるためか、ヒクヒク動いている。思わずつついてみたくなつた。

「そういえば雅。まだみんなに自己紹介してないんじゃないかい？」

「え？あ、そ、そうだね。えっと、初めまして、僕は黒城みや・・雅です。どうぞよろしく」

危ない。思わず雅として自己紹介するところだった。なんとか持ち堪えて助かった。

だけど、それを見た千聖が、ついに堪えるのが辛くなってきたのか下を向いて、口元を手で抑えて震えだした。花音ちゃんと美咲ちゃんも引きつった笑みを浮かべている。

「次ははぐみだね！はぐみの名前は北沢はぐみだよ！よろしく！」

北沢。もしかして、商店街にある北沢精肉店の子だろうか？あのお店も昔からお世話になつてゐる。千聖とよくコロツケを買い食いしたものだ。

「あたしの名前は弦巻こころよ！」

弦巻？え？弦巻つてあの弦巻？通りで育ちが良さそうなわけだ。日本有数のお金持ちじゃないか。

「さあ、次は花音の番だ」

「え？あ、はい。えっと、松原花音です。よ、よろしくお願いします」

花音ちゃんも、自分まで自己紹介することになると思つていなかったからか、少しぎこちない。

「そういえば美咲。ミッシェルはまだかしら？」

「え？ああ、ミッシェルは今日急用ができたから来れなくなつたらしいよ」

「あら？それは残念ね」

「ミッシェル？」

「ミッシェルははぐみ達のバンドメンバーなんだよ！」

へー。まさか外国人までバンドに参加しているなんて。随分とラインナップの豊富なメンバーだことだ。

「そういえば、雅は演奏はできるのかい？」

「お兄さんは凄く歌が上手いよね！はぐみ、いつもテレビで聞いてビックリしちゃうよ！」

「ああ、まあそれなりに」

「あら？。だつたらあたし達のバンドに入らないかしら？」

え？。なんで僕いきなり勧誘受けるの？。いや、入らないけど？。

「いや、こころ、さすがにそれは無理だと思うよ」

「あら？。どうして無理だと決めつけるのかしら？。やつてみなくちやわからないわ！」

うん、丁寧に断りさせて頂こう。と、思っていたのだけれど、何やら後ろの方からひそひそ声が聞こえてきた。僕はその声が気になり、後方に目を向けてみる。見てみると、少し離れた席に黒い服に身を包んでサングラスをした数人の人物が座っていた。その人達がなにやらひそひそ声で話し込んでいる。僕はその声に聞き耳を立ててみた。

「・・・今すぐ黒城雅の事務所連絡を。旦那様から、金ならいくらでも用意するとの申しつけも頂いている。なんとしても、黒城雅を事務所から引きはがす」

なんだって？。いやいや、待つて下さい。いくらなんでもそれはダメだ。僕の人生にも

関わってくる。どうすればいいんだ……

横にいる千聖も、今の声が聞き取れたのか顔を青くしている。さすがにこのままじゃ大変な事態に発展してしまう。

「こ、こころちゃん？ 残念だけど、雅は今イギリスに住んでるの。さすがに彼にも向こうでの生活があるし、ハロハピに入っても真面目な活動ができないわよ？」

「そう？ それなら仕方ないわね」

た、助かった……千聖のナイスプレーによりなんとか難を逃れた。それを聞いた黒服の人達も、予定を変更してくれたようで、携帯に向かって慌ててキャンセルを入れている。本当に寸前のところだったようだ。

「ま、雅？ そろそろ便の時間じゃ無かったかしら？」

「えっ？」

便？ 便って一体なんの便だろう？ そこで、僕はこれまでの千聖の話を思い出す。確か、千聖は僕の設定として、現在イギリスに住んでいるという設定を設けていた。さらには、一時帰国しているという設定を。そこから導き出される結論は、イギリスに帰る飛行機の便のことだろう。つまり、この場を去る口実を作ってくれているのだ。

「あ、そうだったね。もうそんな時間か。ごめんねみんな。もう帰らなくちゃ」

「あら？ それは残念ね。また会いましょう！」

「はぐみも、今度はお兄さんのお話しも聞かせてほしいな！」

「雅。また会おうじゃないか。この出会いも、きつと運命なのだから。きつと輝かしい私達の一ページ目となるだろう。かのシェイクスピアも言っている。輝くもの、必ずしも金ならず、と。つまり、そういうことさ」

「まあ、何はともあれお疲れ様でした」

「あはは、私はあんまり話せなかつたけど、またね？」

「雅。送つていくわ。それじゃ、みんなまたね」

「うん。ありがとう。じゃあみんな、元気でね。また手紙でも書くよ。じゃあね」

そう言い残して、僕と千聖は店を後にした。店を出るときに、つぐみちゃんにんだか申し訳なさそうな顔をされてしまった。おそらく、僕のことを助けられなかったことを申し訳なく思っているのだろう。本当に良い子だ。だから、去り際に気にしないで、とだけ言葉を添えて店を出た。

まさか、一つの何気ない嘘からこんなことになってしまうとは思ひもしなかった。結局、みんなに助けを求めることしかできなかつたし、千聖がいなかつたらもつと大変な事態に陥っていたかもしれない。本当に千聖がいてくれて助かった。

今回の件から僕が得るべき教訓は、如何なる場合でも、嘘をつくのはよくないとうことだ。周りの人まで巻き込んでしまう。うん、やっぱり僕に嘘は似合わない。今度から

は薫と遭遇してしまっても普通に対応しよう。そう誓った、ある夏の一場面だった。

第26演目 御手紙

「ふええ……どこどこ?」

シヨッピングの帰り、迷子に出会った。なんだか、以前にも同じような場面に出くわした気がするのだけれど、気のせいかしら? 確か、以前は仕事の帰りに、そして今回はシヨッピングの帰りに。微妙なシチュエーションの違いはあるけれど、デジャブを感じずにはいられない光景。そんな光景が今私の目前で展開されていた。

「えつと、花音? 何をしているのかしら?」

「あ、千聖ちゃん!」

私を見つけると、とたんに笑顔を開かせる少女。私の親友、松原花音。その性質は極度の方向音痴。一体今日はどこに行こうとしていたのかしら?

「はあ、また迷子になったのね」

「あはは、ごめんなさい……」

「なんで謝るのよ。それで、どこに行こうとしていたのかしら?」

「うん、今日はハロハピのみんなと羽沢珈琲店でお茶する約束をして……」

羽沢珈琲店? また学校から真逆の方向じゃない。普段からこんな調子で、生活に支障

は無いのかしら？少し心配になる。

「はあ、まあいいわ。それじゃあ行きましようか」

「え？一緒に来てくれるの？」

「ええ、私もたまにはハロハピの皆とお茶したかつたし、薫が皆に迷惑かけてないか見張る必要もあるわ」

「あはは、ありがとう、千聖ちゃん」

「気にしないで。それじゃ、行きましようか？」

そう言つて、私は羽沢珈琲店への道を歩む。ここからは少し距離があるけれど、歩かない距離では無い。電車を使う方が早いけれども、電車にはあまり乗りたくない。理由？そんなこと言う必要があるかしら？

「でも、本当に千聖ちゃんがいてくれて良かったよ。いてくれなかったら、私どうなつてたかわからないよ……」

「そ、そうね。偶然とはいえ、ここで花音を見つけることができてよかつたわ」

本当に、ここで花音を見つけていなかつたら、この子はどこまで言つていたのかしら？そう考えたらずつとする。その内、警察に捜索願を出さなければ行けない日が来るかもしれない。いつそのこと、発信器を仕掛けておこうかしら？それは、名案かもしれない。

「千聖ちゃんは、今日は雅君と一緒にじゃないの?」

「ええ、今日は私個人のお買い物に来たの。雅の家からは少し遠いし、私の個人的な買い物に付き合わせるのもさすがに悪いかと思って、今日は声をかけてないの。この後、雅の家には行くけれども。花音も来る?」

「それはさすがに遠慮するよ。二人の邪魔はしたくないし」

賢明な判断ね。実の所、誘ってはみたけれど、花音を雅の家に招き入れるつもりは最初から無かった。というのも、いくら花音とはいえ、雅の家に他の女の子が入るのは嫌。千景だけは、妹だし仕方なく、本当に仕方なく認めているけれど、できることなら、他の女の子は入ってほしくない。例え、花音やパスパレのメンバーだって例外では無い。

「そう? 気にしなくてもいいのに」

「あはは、千聖ちゃん、顔に本音は招き入れるつもりありませんって書いてあるよ」

あら? それは大変、急いで消しておかないと。それにしても、そんなにわかりやすかったかしら?

「千聖ちゃんって、普段はポーカークォーフェイスが得意だけど、雅君のこととなると急に思考が筒抜けになるよね?」

そんなこと・・・あるかもしれない。そういえば、普段から雅のことになると、皆に考えていることを簡単に言い当てられていた気がする。そう思うと、なんだか恥ずかし

くなつてきた。

「あまり気にしなくてもいいんじゃないかな？ それも、千聖ちゃんの良いところだと思
うよ？ それだけ、雅君のことを大切に思っているってことだもん。羨ましく思うな。そ
ういうの」

そうね。花音の言う通りだと思う。雅のことを考えると、どうしても想いが先走つて
しまっている気がする。それだけ雅のことが愛おしいってことでしようけど。

「さあ、着いたわよ」

そんな他愛も無い会話を繰り返している内に、私達は目的の場所、羽沢珈琲店に着い
た。きつと、もう他の皆は着いているころでしょう。

「ありがとう、千聖ちゃん」

「どういたしまして。さあ、入りましょう？」

そう言つて、店の中に入る私達。中ではつぐみちゃんが出迎えてくれた。どうやら今
日は家の手伝いをしているみたいね。

「いらつしやいませ！ あ、花音さん！ 千聖さんも一緒に来られたんですね！」

「つぐみちゃん、こんにちは」

「つぐみちゃん、お邪魔するわね」

「もう皆さん来てますよ！ ただ、ちよつと大変なことになつてゐるみたいですけど」

「大変なこと?」

「あはは、見る方が早いと思います。一番奥の席にいますので、どうぞ」

つぐみちゃんに言われるままに、一番奥の席に足を進める私達。そこには、ハロハピの皆がすでに集まっていた。薫もすでに来ており、相も変わらず態とらしい演技をしている。

「ごめん!遅れちゃった・・・」

花音の後ろから皆の席へ向かう私。席に辿り着いて気づいた。そこに一人、この場にいると思わなかった少年がいることに。

「おや?千聖じゃないか。君も一緒だったんだね」

「ええ。あなたがみんなに迷惑をかけてないか確認してきたのだけれど・・・あら?雅も来たの?」

どうしてここにいるのかしら?そして、どうしてそんな救いを求めるような瞳で私のことを見ているのかしら?

「おや?千聖、さすがの君も間違えてしまうのだね?それほどそっくりということか。ああ、愛しのお姫様にまで見間違えられるなんて、なんて夢いんだ・・・」

「えっと、何が言いたいのかしら?」

「千聖、彼は雅では無い。双子の弟の雅だ」

「は、う？」

この頭のおかしな幼なじみは何を言ってるのかしら？双子の弟？そんなのいるわけないじゃない。これは一体どういう状況なのかしら？そういえば、店の入り口でつぐみちゃんが大変なことになっていると言っていた。これが、その大変なことなのでしょう。本当に厄介な事態になっているみたいね。

冷静になって、事の経緯を考えてみることにしましょう。薫が雅のことを、双子の弟の雅と言った理由。それは間違いなく、雅自身がそう名乗ったからでしょう。それ以外は考えられない。そう名乗られて信じる薫も薫だけ。

そこから導き出される結論は、おそらく偶々薫と出くわしてしまった雅が、咄嗟に付いた嘘だったのでしょうか。それを、薫が嘘だと思わず、信じてしまい、今に至ると。

改めて思うと、どうしてこんな事態に発展してるのかしら？周りを見渡してみる。様子を見るに、こころちゃんとはぐみちゃんは嘘を信じていて、美咲ちゃんと花音はこの事態に呆れているみたいね。

だけど、問題はこの事態にどうやって收拾をつけるかね。真実を皆に知らせるのは簡単なこと。だけど、それはあまりいい手では無い。それはつまり、雅が嘘を付いたと皆にバレるということ。要するに、雅が嘘つきだと思われるかもしれない。それは本意ね。

だったら、取る手段は一つ。嘘を真実にしてしまえばいい。ここからは、演技力の勝負。如何に、皆にこの嘘を真実だと信じ込ませるか。私は静かに決意を固める。必ずこの場を丸く収めて見せると。

「ごめんなさい。一時帰国するって聞いてたのをすっかり忘れていたものだから、間違えてしまったわ。相変わらずお兄さんにソックリね。久しぶり、元気だったかしら？」
うん、良い感じね。ここからは私の舞台。どんなアドリブにだって必ず応えて見せる。

「うん。ひ、久しぶりだねー千聖。た、偶々そののに、兄さんのお知り合いの人？に出会ってここに来たんだ」

ダメ、応えられないかもしれない。雅の演技はお粗末なものだった。声は平坦で棒読み。セリフがぎこちなく、何度も噛みそうになっていた。思わず笑いそうになってしまった。ダメよ白鷺千聖。ここは舞台の上。決して演技を崩してはダメ。堪えなさい。

「そういえば雅。まだみんなに自己紹介してないんじゃないかい？」

「え？あ、そ、そうだね。えっと、初めまして、僕は黒城みや・・雅です。どうぞよろしく」

ダメ、限界。なんで本名を言おうとしているの？ホント、ごまかす気あるのかしら？私は、ガマンできずに、下を向いて必死に笑うのを堪えていた。

「次ははぐみだね！はぐみの名前は北沢はぐみだよ！よろしく！」

はぐみちゃんの声がある。はぐみちゃんは、商店街にある北沢精肉店の子。あそのこのロッケは私も雅みやびも好き。中学校のころはよく、学校の帰り道に買い食いしていた。

「あたしの名前は弦巻ことまきころよ！」

この声はころちゃん。ころちゃんは、あの弦巻の家の子。その影響か、少し世間離れた発言や行動が目立つ。根は良い子なのだけれど。

「さあ、次は花音の番だ」

「え？あ、はい。えっと、松原花音です。よ、よろしくお願いします」

そして、次は花音。花音については、特に語る必要も無いでしょう。あえて言うならば、その自己紹介は雅みやびと同じようにぎこちなかった。

「そういえば美咲。ミッシェルはまだかしら？」

「え？ああ、ミッシェルは今日急用ができたから来れなくなったらしいよ」

「あら？それは残念ね」

「ミッシェル？」

「ミッシェルははぐみ達のバンドメンバーなんだよ！」

ミッシェルは、ハロハピのマスコットキャラクターの熊の着ぐるみ。その正体は美咲ちゃんなのだけれど、ハロハピのメンバーは花音以外その正体に気づいていないらしい

い。本当にこのバンドは大丈夫なのかしら？

「そういえば、雅は演奏はできるのかい？」

「お兄さんは凄く歌が上手いよね！はぐみ、いつもテレビで聞いてビックリしちゃうよ！」

「ああ、まあそれなりに」

「あら？だつたらあたし達のバンドに入らないかしら？」

うん、どうしてそうなるのかしら？そんな勧誘まで考慮していなかったわ。どうやって断ろうかしら？

「いや、こころ、さすがにそれは無理だと思うよ」

「あら？どうして無理だと決めつけるのかしら？やってみなくちゃわからないわ！」

そこはわかつてほしい。だけど、困ったわね。こころちゃんはどうかやら本気っぽい。上手く断れないかしら？そうして、断る方法を考えていると、後方の席から何やらひそひそ声が聞こえてきた。振り返ってみると、そこには黒い服を着た人達がいた。あの人達って、確かこころちゃん周りの周りにいつもいる人達よね？何を話しているのかしら？私は気になって、その声に聞き耳をたててみる。

「・・・今すぐ黒城雅の事務所連絡を。旦那様から、金ならいくらでも用意するとの申しつけも頂いている。なんとしても、黒城雅を事務所から引きはがす！」

あの人達は何を言っているの？そんなことをされたら、雅みやびの夢に支障が出てしまう。そう考えると、私の体から血の気がすつと抜けていくのがわかった。それだけは絶対ダメ。また雅みやびの夢に支障が出てしまったら、今度こそ私は耐えられないかもしれない。

「こ、こころちゃん？残念だけど、雅まさは今イギリスに住んでるの。さすがに彼にも向こうでの生活があるし、ハロハピに入っても真面まともな活動ができないわよ？」

「そう？それなら仕方ないわね」

私の言葉に納得してくれたのか、こころちゃんは素直に引き下がってくれた。本当に良かった。このままだと、本当に取り返しの付かない事態に陥っていたかもしれない。それだけは避けられて、本当によかった。後ろを見てみると、先ほどの黒服の人達が、慌てて行動を変更しているのがわかる。もう少しで、本当に取り返しの付かない事態になっていたかもしれない。それよりも、またピンチに陥る前にこの場を去った方が賢明かもしれない。

「ま、雅まさ？そろそろ便の時間じゃ無かったかしら？」

「え？」

便？なんのこと？とでも言いたげな表情で私のことを見てくる雅みやび。だけど、私の言いたいことを察してくれたのか、何かを思いついたかのように発言をする。

「あ、そうだったね。もうそんな時間か。ごめんねみんな。もう帰らなくちゃ」

「あら？それは残念ね。また会いましょう！」

「はぐみも、今度はお兄さんのお話しも聞かせてほしいな！」

「雅。また会おうじゃないか。この出会いも、きつと運命なのだから。きつと輝かしい私達の一ページ目となるだろう。かのシエイクスピアも言っている。輝くもの、必ずしも金ならず、と。つまり、そういうことさ」

「まあ、何はともあれお疲れ様でした」

「あはは、私はあるまり話せなかつたけど、またね？」

「雅。送っていくわ。それじゃ、みんなまたね」

「うん。ありがとう。じゃあみんな、元気でね。また手紙でも書くよ。じゃあね」

そう言い残して、私達は羽沢珈琲店を後にした。本当に疲れたわ。まさかこんな目に遭うなんて思いもなかった。だけど、なんだかんだで楽しかったかもしれない。つぐみちゃんに別れを告げて、私達は店を後にする。そういえば、結局何も注文しなかったわね。つぐみちゃんに申し訳なくなる。また近いうちに寄らせてもらいましょう。

「そういえば雅。本当に手紙を書く気あるのかしら？」

「え？無いけど？そもそも、千聖の設定だと、僕はイギリスだよ？手紙なんて書けないよ？どうやってエアメールを日本から日本に向けて飛ばすのさ？」

「はあ、またそんな半端な嘘をついて。薫達、たぶんあなたから手紙が来るものだと思

てるわよ?」

私の言葉を聞いて、急に顔を青くする雅^{みやび}。本当に、何も考えていなかったみたいね。

「い、イギリスの父さんにでもお願いしようかな」

「まあ、それしか方法は無いでしょうね。」

「あはは、千聖がイギリスに設定しておいてくれて助かったよ」

まあ、こうなる可能性も考慮して、雅^{みやび}の両親が暮らすイギリスに設定したのだから当然ね。それにしても、手紙ね。やっぱり、メールで伝えるよりも、手紙で伝える方が、想いは伝わるものよね。

私も、たまには雅にお手紙を送ってみようかしら? 普段は言えないような想いを文字に変えて伝えるのも、また一興かもしれない。

・・・やっぱり無いわね。そもそも、言えない想いというものが無かった。普段から、包み隠さず口にして伝えてるのだから、当然ね。だって、手紙で伝えるよりも、口で伝える方が想いは伝わるのだから。

だから私は、自分の想いを包み隠さず雅に言う。私達の間で隠し事は無し。これから、伝えたい言葉を、声にして伝えていこう。それが、私達らしいと思うから。

第27演目 フラワー

それは、美しい歌声だった。

聴く者を問答無用で惹きつける声。それを助長する立ち姿。一言に纏めるならば、カリスマ性に溢れていた。

プロにもここまでの歌声を持ったものはそう多くは無い。プロである僕が言うのだから間違いない。そんな歌声を、目の前の少女が発していた。彼女は湊友希那。最近僕の親友になった少女だ。そして、この場にいるのは僕達2人だけではない。

彼女の歌声を後押しし、魅力を最大級にまで引き上げる奏者達、つまり彼女が率いるガールズバンド、Roseliaのメンバーが集結していた。

ここはとあるスタジオ。ここで僕は、合同練習を行っていた。友希那と出会って以降、僕はことあるごとにメールで音楽談義に花を咲かせていた。あの時予想したとおり、僕は非常に気が合った。まだ出会ってほんの数週間。だけど、僕はまるで数年来の友人であるかのように意気投合していた。

そして、この日僕は合同練習を行う約束をしていた。直接会うのはあの初めて出会ったライブの日以来となる。今日千聖は、パスパレのみんななどのレッスンがあるため

にいない。ここにいるのは、僕と Roselia のみんなだけだ。そして、今響いているのは彼女達の演奏^{こえ}。

合同練習するにあたって、音を合わせるためにまずは彼女達の現在の技量を再確認するため、演奏を聴かせてもらっていた。とはいえ、そんなのはただの建前だ。彼女達の技量なんて、今更再確認なんてしなくてもわかっている。

単純に僕は一人のファンとして、彼女達の演奏を聴きたかっただけだ。ただ、面と向かってそう伝えるのが恥ずかしかっただけ。だけど、本当に聴いててよかった。あれから数週間しか経っていないというのに、彼女達の演奏は予想を上回る成長を遂げていた。

あの日の演奏をベースに考えていたなら、僕は彼女達の演奏に遅れていただろう。現時点では僕の演奏は彼女達にまだ負けていない。だからこそ、彼女達に合わせる余裕が僕にはまだある。だけど、このままのペースで彼女達が成長を遂げるとすると、遠くない未来には追い抜かれてしまうかもしれない。そんなネガティブな思考が嫌でも思い浮かぶ。そう思ってしまうほどに驚異的な成長スピードだった。

そして、演奏が終わる。現実とは思えない、素晴らしき演奏^{ゆめ}が。

「雅、どうだったかしら?」

「正直、驚いたよ。あの日見たバンドとはもはや別人みたいだった。恐怖すら覚える程

長スピードだね」

「友希那つてば最近、誰かからのメールのおかげで張り切っちゃって、おかげでみんなの練習もハードになったからねー。嫌でも成長しちゃうよー」

「ちよ、ちよつとりサ。余計なことは言わなくていいの」

「どうどう雅様——？あこ、かつこよかつたー？」

「うん、あこちゃんもすつごく決まってたよ」

「ほんと？やつたー！雅様に褒められた！」

「ええ、全体的に良かったと思います。ですが宇田川さん、最後のパート、少しリズムが走りすぎていました。ドラムのリズムが崩れると、周りの演奏にも悪影響が出ます。決まったリズムから外れないように気をつけて下さい。白金さんは、最初の入りが僅かに遅れていました。演奏の入りは、お客さんの印象にも強く残ります。決してタイミングがズレることの無いように気をつけて下さい」

「は、はい、ごめんなさい……」

「うう、ごめんなさい……」

相変わらず紗夜ちゃんは周りにも自分にも厳しいみたいだ。確かに彼女の指摘する部分は的確だけど、あまり気にならないぐらいに演奏は完璧だったから、もつと褒めてあげればいいのに。まあ、だからこそ彼女達はここまで成長できたんだろうけど。

「あはは、でも、これは僕もうかうかしてられないね。みんなに遅れを取らないようにもつと頑張らないと。のんびりしているとあつという間に追いつかれちゃいそうだよ」

「おー現役バリバリのプロにそんなこと言われるとテンション上がってくるー！アタシも、みんなの足を引つ張らないようにもつと頑張るぞー！」

「あこも、もつともつと頑張つて、雅様やおねーちゃんにもつともつと近づきたいー！」

「わ、私も、せ、精一杯頑張ります……」

「ふつ、みんな良い状態のようね」

「ええ、全員がやる気に満ちあふれているようです。これならば、予想を上回る成長も期待できそうです」

お？紗夜ちゃんからそんな言葉が出てくるなんて。これは、今後の Roselia のパフォーマンスからは目が離せないね。近い将来に、僕と同じ舞台に立つているかもしれない。むしろ、僕から合同ライブにでも誘ってみようかな？うん、それも面白いかもしれない。

「さあ、立ち止まっている時間は無いわ。練習を再開しましょ」

その後、僕達はお互いの技術を高め合うかの様に、練習に精を出した。友希那と僕の歌声が室内に響き渡る。素晴らしい時間だった。本気で、僕達が組めば世界の頂点だつて夢ではないんじゃないかと思えるような、素敵な時間だった。

だが、友希那には否定されてしまった。いや、否定という訳ではないか。頂点を取るにしても、それは僕とでは無いらしい。決して彼女は誰と取るかまでは言わなかった。だけど、そんなことは言わずとも、皆がわかつてるだろう。

いつの日か、響き渡る日が来るかもしれない。頂点へ狂い咲く、青い薔薇の旋律が。彼女達と、頂点を争う日を夢見ながら、僕はその後にも歌い続けた。まだ見ぬ頂点の光景を、想像しながら、歌い続けたのだった。

彼女達との合同練習を終え、家に帰宅する。我が家では、すでに千聖達が晩ご飯の用意をしてくれていた。そう千聖『達』が。今日は千聖一人では無かった。家に帰ると、そこにいたのは……

「あ、ミヤビさんが帰ってきました！」

「あ、雅君！おかえりなさいっ！」

「雅さん、お邪魔してますね」

「雅君遅いよー。あたしもうお腹ペコペコだよー」

パスパレのみんなが見事に勢揃いしていた。うん、なんで？

「雅、おかえりなさい」

「ただいま千聖。で、この状況は一体何？」

「それが・・・」

「千聖ちゃん、雅君も帰ってきたんだから早く食べようよ。ご飯冷めちゃうよー！」

どうやら日菜ちゃんはかなりお腹を空かせているようだ。とりあえず事情は後で聴けばいいか。と思い、僕は手早く手を洗い、席に着いた。そこには、普段よりも豪勢な料理が所狭しと並べられていた。今日なんかあったっけ？

「それじゃ、雅君も帰ってきたことだし、乾杯するよ！千聖ちゃん！宮川タカユキ先生の舞台に出演おめでとう！千聖ちゃんの成功を祈願して、乾杯っ！」

なるほど、千聖の舞台出演が決まったのか。これはそのお祝いのお場ということか。しかも、あの宮川先生の？さすがの僕でも知っている。今の日本演劇界を代表する大物監督の一人だ。まさか、そんな大先生の舞台に出演することになるなんて。驚いて、言葉も

出ない。だけど、言葉が出なかつたのは僕だけじゃ無かつた。みんなが彩ちゃんのことを見て固まっていた。

「あれ？みんなどうしたの？私、なんか変なこと言った？」

「いえ、決して変ではなく、むしろその逆と言いますか……」

「アヤさんは素晴らしかったです！素晴らしかったのですが……」

「普通彩ちゃんだったならこういうこと言う時噛むよねー？なんで噛まなかったのー？」

「ひ、日菜ちゃんひどいよ！あ、もしかして皆も日菜ちゃんとおんなじこと思ってたの？わ、私だっていつも噛んでるわけじゃないよ！」

「そ、そうよね。彩ちゃんだって偶々噛まない時だってあるわよね。彩ちゃん、ごめんなさい」

「ち、千聖ちゃんそれフォローにもなんにもなつてないよ……」

むしろ止めとどめだね。見るからに落ち込む彩ちゃんの姿がそこにはあった。

「そんなことより、このエビフライ本当に美味しいよー？彩ちゃんも食べなよ！」

「ひ、日菜ちゃんそんなことって……あ、でも本当だ。すごく美味しい」

「このタルタルソースがまた絶品ですね。エビの美味しさを押し上げてるような感覚がしますよー！」

「さすがチサトさんです！料理のウデマエは天下一品ですね！」

どうやら、エビフライがみんなから好評のようだ。僕も一口嚙つてみたけど、本当に美味しい。そして、この安心感すら浮かぶかのような食べ慣れた味付け。間違いない。千聖の料理だ。て、千聖のお祝いの為の場なのに、千聖が作ったの？

「あはは、最初は私達が作ろうとしたんだよ？ だけど、千聖ちゃんの手際が凄すぎて……」

「結局ジブンたちは何も手伝えませんでした……」

「面目ありません……」

「そんなこと無いわよ。食器だつて用意してくれたし、このサラダだつて野菜を切つてくれたのはみんなじゃない」

「あたしもそう思うなー。皆気にしすぎじゃない？ なんでも適材適所だよ。一番適してたのが偶々主役の千聖ちゃんだつたつてだけだよ。それに、千聖ちゃんも愛しの雅君に自分の料理を食べて欲しいだろうしねー。でも、本当に千聖ちゃん料理上手だよねー。これならいつでも雅君のお嫁さんにいけるねー」

「お、お嫁さん!?! ちよ、ちよつと日菜ちゃん、急に何言つてるの……?」

「あ、千サトさん顔が真っ赤です!」

「こんな千聖さんも貴重ですよね」

「そうかな? なんだか雅君が絡むとよく見かけるような……」

そう言つてる間にも、千聖の顔は更に赤くなつていく。でも、千聖がお嫁さんにか。もちろん、僕だつてそんな日を想像したことがある。いつも夢に見てきた。だけど、誰かに声に出して言われると、余計に想像が膨らむ。いつか、純白のドレスに身を包んだ千聖と、並んで歩きたいものだ。

「あ、今雅君も満更でも無いって顔してたよねー？」

「ひ、日菜ちゃん、な、なんのことかな？」

「雅さんも顔が真っ赤ですね」

「ミヤビさんもチサトさんも、日の丸弁当みたいになってます！」

「イヴちゃん、それは違うと思うよ。だってご飯の部分が無いもん」

「彩さんもそういう問題では無いと思いますよ」

その後も僕達は、楽しく千聖の料理に舌鼓を打った。だけど、大先生の舞台に抜擢されるなんて、千聖も本当に階段を順調に上ってるんだと認識する。僕も遅れるわけにはいかないね。Roseliaといい、千聖といい、皆いい刺激を与えてくれる。僕は一人気合いを入れ直し、料理へと箸を伸ばすのだった。

それから数日経った。

その日、僕は久しぶりに事務所に来っていた。理由はパスパレのレッスンを見るためだ。ついこの間、僕は彼女達の新曲を完成させた。今日はその曲の初レッスンを行って

いる。その様子を見に来たのだ。だけど、そこには千聖の姿は無い。彼女は今、宮川先生のもとで、舞台の稽古を行っている。ここ数日の彼女は、本当に忙しそうだ。風の噂で聞いた話によると、舞台の仕上がりも順調とは言えないらしい。千聖のことだから、大丈夫だろうとは思うけど、ちよつと心配だ。

「みなさん、レッスンはお疲れ様です。突然ですが、今この近くのスタジオで千聖さんが舞台の稽古をしているんです。見学したい方はおられますか？」

ちよつと今日のレッスンは終わったタイミングだった。事務所スタッフさんの一人がそんな話題を持ちかけてくる。そうか、確かに千聖も練習スタジオが事務所から近いと言っていた気がする。

「え？ 私達がお邪魔してもいいんですか？」

「私、行ってみたいです！」

「ジブンも、行ってみたいです。演劇部の裏方をやっているの、プロの裏方に興味があります！」

「そうだねー。あたしも行こうかなー。このまま帰ってもやることないし、なんだか面白そうだしね」

「それじゃ、みんなで差し入れを持って邪魔しようか」

そして、僕達は近くのコンビニで差し入れを調達し、スタジオへと向かうのだった。

スタジオに入ると、そこは緊迫した空気に包まれていた。スタッフ、役者、ありえないことだが、演劇に関わる道具までもが過度の緊張感に包まれているように感じる。これが宮川先生の稽古。過去、幾度となく千聖の舞台稽古風景は目にしてきた。だが、ここまでの緊張感を帯びた稽古は初めてだ。見たことが無い。

「す、すごい緊迫感ですね。まるで時代劇の殺陣シーンのようですよ！チサトさんの今度の舞台は時代劇なのですか？」

「ううん、確か病弱な姉思いの妹と、女優を目指す妹思いのお姉さんの物語だよ。千聖ちゃんはその妹役なはず」

「設定を聞くからに、シリアスなお話みたいですけど、こんな緊迫した空気になりますか？」

「あたしにはこんなの無理だねー。女優にならなくてよかったですー」

女優なんてそう簡単になれるものじゃないっていうツツコミと、日菜ちゃんなら簡単になれそうだという感想が同時に出てくる。まあ、それは置いておいて、本当にこの空

気は異常だと思う。だけど、原因はなんとなくだがわかる。

「ストップ！白鷺君！そこはもつと感情を押し上げないとダメじゃないか！役にもつと感情を込めるんだ！」

おそらくこれが原因だろう。僕達に来て、まだ僅かな時間しか経過していないが、

もう幾度目かになる宮川先生の叱咤が飛ぶ。素人目に見る分には、千聖の演技には一切のミスがあるようには見えない。それどころか、さすが演技派女優。素晴らしい演技に見える。だが、それでもどうやら宮川先生の出す合格点には届いていないらしい。

「チサトさん、大丈夫でしょうか？」

「宮川先生、厳しい先生だとは聞いてたけど、ここまでだなんて・・・」

「千聖ちゃん大丈夫かなー？なんだかるんってこない雰囲気だけど」

「休憩時間に励ましてあげるのがいいかもしれないね」

「いや・・・」

千聖のあの目。長い付き合いがある僕だからわかる。不満の色が在り在りと浮かんでいる。おそらく、自分でも何が悪いのかわかっていないのだろう。千聖的には完璧に仕上がっているはずの役作り。それが全く通用しない舞台。千聖も悔しいはずだ。理由もわからぬまま、一方的に叱咤されて、千聖としてのプライドも傷つけられているに違いない。

千聖には、気持ちを整理する時間が必要だろう。今、僕達が話しかけるのは千聖にとつて逆効果になりかねない。ストレスを与えるだけの結果になりかねない。

「今日の所は帰ろう。千聖も、一人で考える時間が必要だと思ふよ?」

「それもそうですね。ジブン達の存在が今は千聖さんに余計な負担を与えることになりかねないですもんね」

「そうだねー。今の千聖ちゃんなんだかるんつてこないし、それでいいんじゃない?」

みんなからの許可も得て、僕達はその日は事務所に帰ることにした。差し入れだけを舞台スタッフさんに預け、事務所への帰途につく。その間も、千聖の表情は晴れないままだった。

「そうだ!千聖ちゃんに皆で気がついた点を教えてあげようよ!」

事務所に帰るなり、そう提案したのは彩ちゃんだった。ここに帰ってくるまでの道すがらでも、ブツブツと何かを考え込んでいる様子だった彩ちゃん。どうやら千聖のために自分達ができることをずっと考えていたようだ。

「気がついた点？アヤさん、どういうことですか？」

「うん、なんだか千聖ちゃん、何が悪いのかわからなくて苦しんでるように見えたの。こういう時つて、自分一人の意見じゃいくら考えても答えが出ないものだと思うの。だから、皆で色んな視点から気づいたことを千聖ちゃんに伝えてあげるの！」

「なるほど、それはいい案かもしれないね」

「へー面白そう！なんだかるんつて来たよ！」

確かに、彼女の案は名案に感じる。千聖のことを想つて、自分たちができることを一杯考えてくれる。本当に千聖は良い仲間に恵まれた。

「それじゃ、みんなで手紙に書こう！」

「え？直接伝えるんじゃないんですか？」

「うん、直接伝えるのもいいかもしれないけど、それだとまた千聖ちゃんに余計な気を使わせちゃう気がするの。それに、普段しないことだからこそ、余計に伝わる気持ちってあると思うんだ」

「私は、アヤさんに賛成です！なんだか果たし状みたいで楽しそうです！」

「あはは、イヴちゃん果たし状は送っちゃダメだよ！でも、手紙かー。面白そうだね！またまたるんつてきたよ！」

手紙かー。確かに、普段しないようなことだからこそ、その思いが相手に強く伝わる

ことつてあるよね。彩ちゃんなりに色々考えてくれているみたいだね。さすがパスパレのセンターだね。その後、僕は彼女達が書いた手紙を預かって事務所を後にした。僕の手で千聖に渡して欲しいらしい。これは重大な任務だね。僕は、彼女達からの手紙あを大切にカバンにしまい、我が家へと向かうのだった。

そして、それからさらに数週間が経過した。

今日は舞台の公開初日だ。僕達は今日、千聖からの招待を受けて舞台を見に来ていた。

あの日以降、千聖のレッスンは見ていない。だけど、千聖からの話を聞く限りは、皆からの手紙を受け取って以降、それまでの状態が嘘だったかのように順調に仕上がっていったらしい。

彼女曰く、今までの私は蕾のような存在だったらしい。今日、その蕾が進化を遂げるとも言っていた。それは是非見てみたいものだ。蕾ちさとの新たな姿をこの目で見させてもらおう。

そして、待ちに待った舞台の幕が今上がり、美しき花が咲き誇る時間がやってきた。
「すいい……」

それは誰の声だったのだろうか？ 僕の声だったかもしれないし、共に舞台を見に来たパスパレの誰かの声かもしれない。はたまたその他大勢の観客の声かもしれないだろう。だけど、そんなことは些細な事だ。誰の声だったかなんてそんなのどうだっていい。何故ならその感想は、等しく全ての観客が感じていることなのだから。

圧巻の演技だった。今まで千聖の演技は数え切れないほど見てきた。だけど、今回の千聖は、どの千聖とも重ならない。正に、新しい千聖。いや、そもそもあれは千聖なのだろうか？ 姿は正しく千聖そのものだ。だが、そこにいるのは病弱で姉思いな少女。千聖とは何一つ被らない。

最初からそのような存在の少女だった。千聖としての生は偽りの生だった。そう思わせるほどに、彼女の演技は完璧で、全ての観客を等しく魅了していた。これが、進化した千聖の演技。今までの、演技が静だとするならば、今の千聖は激。むき出しにした感情が観客の心に訴えかけてくる。彼女の、病弱な少女の想いを。

「これが、千聖……」

正直、惚れ直した。僕は千聖の演技から目が離せなくなっていた。もちろん、他の役者さんの演技も総じてレベルが高い。だが、彼女のそれは特別だ。まるで、高校野球の

トーナメント表に、1チームだけメジャーの球団が混ざっていたような、そんな圧巻の演技。カーテンコールの幕が下りるその瞬間まで、僕は千聖から目が離せなかった。

「す、凄かったですね・・・ジブンもう感動しすぎて言葉も無いですよ・・・」

「ま、まるでチサトさん私の憧れる侍のようでした・・・」

「うん、間違つてないかも知れないよー。演技という刀一本で多くの観客の心を切つて落としていく侍そのものだね。雅君も千聖ちゃんの刀にメロメロで、恋に落とされちゃったでしょ?」

「うん、そうだね。まあ、僕の場合もうとつくの昔から落とされてるけど」

「えっと、ごちそうさまです?」

「あはは、彩ちゃんその言い面白い!」

何はともあれ、やっぱりみんな千聖の演技に魅了されたみたいだ。周りを見ると、舞台が終わつてもなお余韻を噛みしめるかのように残っている観客も多い。

「それじゃ、千聖のところに行こうか」

僕の言葉に続いて皆が立ち上がる。皆千聖に早く会いたくて仕方が無いのだ。僕も含めて。僕達はそのまま、千聖がいる控え室を目指した。

「皆、見に来てくれていたのね。ありがとう」

控え室の扉を開けると、そこにいたのは千聖だった。何を当たり前のことを、と思うだろうが、僕はそれに安心感を覚えた。正直、中にいるのが千聖ではなく、病弱なあの少女だったらどうしようと思っていた。そんなわけが無いんだけど。

「千聖ちゃん！ほんつつつつつとうに良かったよ！私感動しっぱなしだった！」

「彩ちゃん、舞台の間ずっと泣きっぱなしだったもんねー。それが面白くてあたしは舞台上に集中できなかつたよー」

「だ、だって本当に感動したんだもん！」

「まあ、ジブンは彩さんの気持ちもわかります。本当に言葉にするのも困難なぐらい素晴らしい演技でしたからね。ジブンも思わず泣いちゃいましたよ」

「はい！私もです！鬼の目にも涙ですぬ！」

「いや、いつからイヴちゃんは鬼になったの。でも、皆の言うことは本当だよ。本当に、今までも最高の演技だった。正に進化形白鷺千聖だね」

「皆、ありがとう。私自身も、本当に素晴らしい舞台にできたと思うわ。皆のおかげね。本当にありがとう」

そう言う千聖の顔には、満開の花が咲いていた。本当に、満足のいく完成度だったの
だろう。そこには、自分のことを蕾に例えていた少女は存在しなかった。

「白鷺君、失礼するよ。初日の上演ご苦労だった。客の反応も盛況だ。明日からも期待
しているよ」

千聖との談笑に花を咲かせている時だった。控え室の扉を開き、一人の男性が姿を現
した。この舞台を演出した人物、宮川タカユキ先生だ。

「はい、ありがとうございます！」

「ん？この子達は……」

「私が所属しているバンド、Pastel*Palettesのメンバーと、お世話にな
っているシンガーソングライターの黒城雅さんです」

「おー！君が噂の白鷺君の彼氏さんか！」

よし、ちょっと待ってもらおうか。どこだ、どこでそんな噂が広まってるんだ？あの
例の掲示板か？あの掲示板が原因か？

「み、宮川先生、一体どこでその噂を……？」

「うん？この前飲みに行ったときに大木内君が言っていたが？」

あの大御所さん一体何してるの？もしかして色んなところで言いふらしてるんじゃない
だろうか？僕と千聖が付き合う上で、大変お世話になったから付き合うことになっ

たと報告したけど、それが間違いだったかな？

「マリさん、本当に何をしているのかしら……」

「わはは、まあ若い間は存分に青春しなさい！ということは、白鷺君の本気を引き出してくれたのも彼氏君だったかな？」

「いえ、今回僕は何もしていませんよ。今回は千聖本人と、Pastel*Palett
esの皆の功績ですよ」

「そ、そんな、私達もそんな大したことはしてないですよ！」

「そうそう、あたし達は何もしてないですよ。千聖ちゃんががんばっただけ！」

「そうです！チサトさんはすっごく努力してました！」

「そうですね。ジブンたちはただ見守っていただけです！」

「そうか。白鷺君はいい友人に恵まれたみたいだな。では、私は挨拶まわりがあるから失礼するよ」

そう言つて、宮川先生は部屋を後にしようとする。これから全員に挨拶まわりを行うのだろう。公演が終わったばかりだと言うのに忙しいことだ。

「宮川先生、待つて下さい！一つだけ、聞かせて下さい。どうして私を起用してくださったのですか？私と似通った演技力、容姿の女優はいくらでもいます。その中で、どうして私だったのかと」

「そうだな。君が開花したら、面白いものが見れそうだと思つたからだ」

「面白い?」

「以前からテレビ等で君のことは知つていたよ。年齢の割に、とても器用な演技をする子だと思つていたが、役に対する熱意や本気というものがあまり見えなかつた。そんな君が本気になつた時、何が観られるんだろうと興味があつたんだよ。だが、結果を見る限り、どうやら私の目は曇つていたようだ」

「え?」

その言葉はあまりにも予想外なものだつた。あの演技では、宮川先生の求めるものに届いていなかったと言ふのだろうか?だとしたら、厳しすぎる。

「ああ、曇つていたようだ。君の本気は、私の想像をはるかに凌駕りようがしていた。私の予想も当てにならないものだ。良い意味でね。明日の公演もこの調子でよろしく頼むよ。それだけじゃない。また君に私の作品をお願いしたい。これからも期待しているよ、白鷺君」

「宮川先生……はい、よろしくお願ひします!」

それだけを言い残すと、宮川先生は笑みを浮かべて部屋を後にした。本気の千聖。確かに、その演技力は他の追隨を許さない演技力を秘めていた。宮川先生が今後に期待するのも頷ける。

開花した千聖の演技は、おそらく今後も各方面で話題になるだろう。進化を遂げた演技派女優として。彼女も順調に、女優としての階段を上っていつている。ほんと、嫉妬すら覚えるほど順調に。

僕も遅れを取るわけにはいかない。僕だって、少しずつ、本当に少しずつだけど、音楽家としての階段を上っていつている。今は、彼女に比べて、遅れを取っているかもしれない。だけど、必ずいつか追いついてみせる。彼女が頂点に辿り着く前に。最後のゴールテープは二人で並んで切りたいから。

そう、彼女の笑顔を見ながら改めて誓った。それがいつになるかはわからない。けど、いつかは、きっと。必ずきっと……

第28演目 愛のかたまり

夏のとある一日の出来事だった。

その日、私はバスパレのメンバーとのレッスンに明け暮れていた。メンバーの演奏は日々成長している。私も含めて。以前に参加した、ガールズバンドパーティーというイベントが私達に良い刺激を与えてくれた。同年代のガールズバンドの演奏を生で体感し、そのレベルの高さに驚嘆させられたイベント。

私達も負けていられないと、あのイベント以来全員に熱が入っていた。私も含めて。最初は参加に反対していたけれども、雅の言う通りに参加して本当に良かったと今では思う。やっぱり、音楽のこととなると、雅の意見は本当に参考になる。さすがは天才シンガーソングライターと言ったところかしら？

「みなさんお疲れ様です。千聖さん、次のお仕事の話をしたいのでこの後事務所に残っていたらよろしいでしょうか？」

その日のレッスンが終わった瞬間だった。おそらく、終わるタイミングを待っていたのだろう。一人の事務所スタッフが私に話しかけてくる。次のお仕事。一体どのような仕事が入ったのかしら？

「ええ、わかりました」

私は迷う様子も見せず、二つ返事で返す。その反応を見て、事務所スタッフさんはレッスンスタジオから出ていった。私も、片付けを済ませてスタジオを後にした。なんだか、次の仕事が気になって仕方が無い。あまりそういったことは信じない性格なのだけれど、なんだか良い予感がする。私はその予感に胸を躍らせながら、事務室へと向かった。この時の私はまだ知る由も無い。この新たな仕事が、私にとつての、いいえ、私達にとつての人生のターニングポイントになることになるなんて。知る由も無かった。

「お待たせしました。それで、新しい仕事とはなんですか？」

私は、事務室に着くなりスタッフさんにそう問いかける。いてもたつてもいられない気持ちだった。ここに来るまでの間に、抱いた予感は膨らむ一方だった。

「はい、実は舞台のお話が来ています。あの有名な演出家の宮川タカユキ先生から、千聖さんにびつたりりの役があるのでぜひ出演してほしいと」

「え？あの有名な劇団の宮川タカユキさんですか!? どうして私に・・・」

スタッフさんの話を聞いて、真つ先に浮かんだのは驚愕だった。宮川タカユキ。劇をかじってる者で、知らない者はまずいまいであるう、知らなければ問答無用でにわかのリッテルを貼られるような著名な人物。現在の日本の演出家では、間違いなく五指に入る程の人物。

そんな大先生からオフアアが来た。こんな、女優名利に尽きることがあるだろうか？ 少なくとも、私の女優人生の中に、これほどの大きな仕事は無かった。過去にも、数多くのドラマや映画には出演してきたし、成功を収めてきた自負はある。だけど、その出演作の全てにおいて、宮川先生に並ぶほどの演出家さんの作品には呼ばれていなかった。

もちろん、著名な方の作品にも数多く出演はしている。だけど、言い方は悪くなるけれども、宮川先生とは格が違う。これは、私が出世する上でのまたとない大きな好機となるでしょう。

だけど、どうしても気になってしまふ点が一点だけ存在する。一体、どうして私を選んでいただけたのか？ 大変光栄なことなのは間違いないのだけれども、正直理由が全くわからなかった。

「聞いた話によると、以前に劇場でライブの演出チェックを行った際、たまたま同じ建物内に宮川先生がおられて、リハーサルを見られたそうなんです。その時の千聖さんがと

でも印象に残ったそうで、今回お声をいただいたそうです」
「そ、そんな偶然が……」

驚いた。偶然が重なったことによる大抜擢。これは、まさに天運ではないかしら？ だが、私に授けて下さった転機。なんて、神なんて信じたことなんて一度も無いのに、そう思いたくなってしまふ。だけど、こんな機会逃す手は無いわね。必ず物にしてみせる。

「そのお仕事、喜んでお受けします。宮川先生にはよろしくお伝え下さい」

「わかりました。こちらが台本です。先生のオリジナルストーリーだそうです。稽古が始まる日までに読み込んでおいて下さい」

受け取った台本をその場で軽く流し読みをする。どうやら、病弱で姉想いな妹と、女優を夢見る妹想いの姉を中心にした物語のようだ。女優を目指し、オーディションを受けた妹だけでも、お金も無い上に病弱の妹を放っておけない。そんな姉に対して、自分は負担になってると思ひ、姉に自分の夢を自由に追いかけて欲しい妹。その二人が、様々な困難を乗り越えつつ、互いの絆を確認し合い、最終的には妹の想いを汲んだ姉がオーディションを受け、見事女優としてデビューを果たす物語のようだ。さすが宮川先生。素晴らしい脚本ね。

「それで、私はどの役を担当するのでしょうか？」

「妹さんの方だと聞いていますね」

病弱な妹。今までに体験したことも無いような役ね。ますますやる気が漲ってくる。未知の経験は、いつだって自分の成長に大きな刺激を与えてくれるもの。大歓迎ね。

「千聖ちゃん、お仕事のお話は終わった?」

私が、台本に目を通してしている時だった。自主練習をしていたのだろう。私よりも遅れて彩ちゃんが事務室に入ってくる。本当に努力熱心ね。その後ろには、彩ちゃんに付き合っていたのでしょうか。他の3人の姿も見える。

「そうね、他に連絡事項はありますか?」

「いいえ、特にないので終わりにしましょう」

「わかりました。ありがとうございます。ええ、彩ちゃん今終わったわよ」

「ねえねえ千聖ちゃん、今度はどんなお仕事なの? るんってくるお仕事だった? あれ? 何読んでるの?」

「おや? 千聖さんが読んでるのってもしかして台本では無いですか?」

「台本? ということは、チサトさんの次のお仕事はドラマですか?」

「イヴちゃん、違うわよ。ドラマではなくて、舞台なの。宮川タカユキ先生からご指名を頂いて、出演することになったのよ」

「ええええええええええええ!? あの宮川先生の舞台に!」

彩ちゃんの絶叫が事務所内に木霊する。最も、その気持ちも理解できるので驚きは無い。他にも麻弥ちゃんが目を大きく見開いているのが印象的だった。日菜ちゃんも驚いているけれども、そこまで大きなアクションでは無いわね。イヴちゃんに至っては凄さがわかっていないみたい。

「すみません。舞台には詳しくないので、そのミヤカワさんという方は凄い方なので
すか？」

「ハッキリ言つて凄いなんでもものじゃ無いですね。日本に数多いる演出家先生の中でも、間違いなく五指に入る程の大先生ですね」

「あたしもテレビとかで見たことあるよー。そんな人から指名されるなんて、さすが千聖ちゃんだねー」

「ええ、本当に光栄なことだと思つたわ。これも、みんなと頑張つてきたおかげかしらね」
「そんな、私達は何もしてないよ！これも全部千聖ちゃんの努力が実つただけだもん！
うう、なんだかそう思うと泣きそうになつてきた」

そう言つて涙目になる彩ちゃん。本当に感受性豊かだね。こんなにすぐに泣けるなんて。女優としては少し羨ましい。泣き演技つて大変なのよね。役者は大抵、泣くほど悲しいことを想像して、涙を無理矢理出している。私の場合は、雅と長期間会えないことを想像して泣いている。だけど、この想像やりすぎると落ち込みすぎてその後撮影どこ

ろじゃ無くなるから危険なのよね。もちろんこれは体験談。

「でも本当によかったあ。そうだ！皆今日この後時間ある？もし良かったら千聖ちゃんのお祝いしない？皆でご飯食べにいいこうよ！」

「いいですね！ジブンは賛成です！」

「私も行きたいです！チサトさんのお祝いみんなでしましょう！」

「へーいいんじゃない？るんってくるアイデアだと思うよ」

そう言ってくれるみんな。その気持ちはありがたい。だけど、私には帰ってからやらなければいけないことがある。

「ごめんなさい。気持ちはありがたいのだけれども、帰ってから雅の晩ご飯を用意しなければいけないの。気持ちだけありがたく受け取っておくわ」

「そうですか。それなら仕方ないですね」

「チサトさんとご飯行きたかったです・・・」

「イヴちゃん、無理は言えないよ。ここは引き下がるのが千聖ちゃんのためだと思うよ」
「あ、じゃあさ、皆で雅君の家に行けばいいんじゃない？そこで皆でご飯作ろうよ！」

この天才少女は一体何を宣ってるのかしら？雅の家に皆で来る？そんなの許すわけ無いじゃ無い。雅の家にパスパレの皆とはいえ、他の女の子を招くなんてそんなことありえない。それに、他の皆だつてきつと反対してくれるに決まつてる。

「日菜ちゃん、それナイスアイデア！」

「いいですね！ジブンも賛成です！」

「そうと決まればチサトさん！早く行きますよ！」

「え、イヴちゃん押さないで。ちよつと待つて。私はまだ許可してな、お願い話を聞いて、ちよつとイヴちゃんどこ触つてるの、ちよつと待つて・・・」

そのまま私の話は受け入れられず、結局雅の家まで案内することになった。本当にどうしてこうなったのかしら？

「着いたわ。ここが雅の家よ」

結局、雅の家まで皆を案内することになった私。黒城家は、鍵がかかったままになっており、雅の不在を報せてくれた。今日は確か、Roseliaのみんなとの合同練習に行っていたはず。少し遅くなるかもとは確かに言っていた。最近、雅は友希那ちゃんと非常に仲が良い。雅のことだから、変な方向に関係を発展させるとは思わないけれど、少し注意しておいた方がいいかもしれないわね。今度友希那ちゃんにでも聞いてみよ

うかしら？何故か青ざめた友希那ちゃんが頭に浮かんだけれども、きつと気のせいね。

「へーここが雅君の家かー。思ったよりも普通の一軒家だね」

「私も、ココロさんの様な家を想像してました」

「弦巻さんのですか？ジブンは弦巻さんのご実家は見たことが無いので知りませんけれども、あの弦巻家ですからね。さぞ豪邸なんでしょうね。さすがにそれを雅さんに求めるのは酷だと思えますよ」

「中が一面楽譜だらけとかだったらどうしよう？」

「ちゃんと定期的に掃除してるから大丈夫よ。楽譜も全部剥がしてあるわ」

「むしろ、掃除しなければ彩さんの予想通りになってるわけですね・・・」

「さすがミヤビさんです・・・」

「そんなことより早く中に入ろうよ。あたしお腹空いてきちゃったー」

そんな日菜ちゃんの言葉に促され、全員で家の中に足を踏み入れる。慣れた足取りで、ダイニングキッチンに向かい、テーブルの上に今日のために買った食材を置く。

さて、やりましょうか。

「千聖ちゃん、何からしようか？」

「そうね、皆はサラダ用の野菜でも切ってくれるかしら？」

「え？それだけでいいのですか？」

「ええ、十分よ。後、食器の用意だけお願いね。その戸棚に入ってるから」

それだけ指示すると、私は調理に取りかかった。今日用意するのはいつもよりも多い6人分。頑張りましょう。

「す、凄い手際……」

「じ、ジブンたちの手伝う余地がありません……」

「ち、チサトさん凄いです……」

「あはは、これは千聖ちゃんに任せの方がいいね！あたしたちは言われた通り野菜を切つてよう？」

その言葉を皮切りに、皆も野菜の準備に取りかかってくれた。これなら、予想よりも早く完成しそうね。その後も、私達は雅が帰ってくるまで談笑しながら調理を進めていった。皆の気持ちがありがたい、自分が恵まれてると思えた夜の一時だった。

そして数日が経過した。遂に、舞台の初稽古の日がやってきた。この日のために、私にできるだけのことはやってきた。セリフは自分のパートだけで無く、他の人のパート

も全て覚え、相手の演技パターンを数個思い浮かべ、それに合わせた演技パターンの練習も行ってきた。相手がどのようなタイプの役者でも、スムーズに演技ができるように。まあ、相手の姉役が薫で無い限り、誰でもいいけれども。

「おはようございます。お初にお目にかかります、宮川先生。白鷺千聖です。この度は素敵な舞台にお招きいただいて、とても光栄です。私にできる限り、精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします!」

「おお、白鷺君、よろしく頼むよ。熱い芝居、期待しているよ!」
「はい。」期待に添えるよう頑張ります」

宮川先生への挨拶を済ませ、私は空いた時間で台本に目を通す。全て暗記しているとはいえ、何か思わぬ見落としがあるかもしれない。念には念を入れ、細かな部分までチェックしていく。そして、最初の稽古が始まった。だが、その稽古は私の想定とは大きくかけ離れたものとなっていた。

「ストアップ!白鷺君!そこはもつと感情を押し上げないとダメじゃないか!役にもつと感情を込めるんだ!」

まただ。これで何回目だろうか?数えるのも億劫になっていた。数回セリフを演じれば似たようなことの繰り返し。具体的な改善案等も無く、感情論のような注意ばかり。正直、どうすればいいのか正解のビジョンも全く見えてこない。

「止めて！そこはもつと熱く演じないとダメじゃないか！それだとお客さんに何も伝わらないぞ！」

何が伝わらないのだろうか？私は、私なりに熱く演じてるはず。何が足りないのだろうか？これで十分だと思つて演技をしているのに。その証拠に、注意されてる私以外の役者さんにも、宮川先生に対する困惑が在り在りと浮かんでいた。

「よし！ここで一旦休憩にしよう！夏場だからしつかり水分を取つておくように！」

そしてかかる休憩の合図。助かった。少し自分なりに整理する時間が欲しかった。おそらく、このままの演技を続けても宮川先生の求めるようなものには届かないのだろう。じゃあ、一体どうすれば？

「白鷺さん、これを渡して欲しいとあの黒城雅さんから預かりましたよ。お知り合いませんですね」

そう言つて、スタッフの方が私に何かを差し出してくれる。雅、来ていたのね。もう帰つてしまつたのかしら？話しかけてこなかったということは、気を使わせちゃつたかしら？今は一人で考えたかつたから、その気遣いがあるがたい。差し入れを見てみると、天然水と塩キヤラメルだつた。熱中症対策ね。私のことをよく考えてくれて、ありがたい。その気遣いに応えるためにも、私の演技で結果を出さないと。その後も私は気持ちを切り替え、稽古に望んだ。だけど、その結果は散々なものとなつてしまった。

稽古を終え、夕食も終えた時間だった。私は、雅の家で台本に目を通していた。未だに、宮川先生の求めるものがわからない。一体何がいけないの？私に何が足りないの？何度考えても答えが出ない。一体、何だというの？

「お困りみたいだね」

「そうね、今回は私もお手上げだわ。自分に足りないものがなんなのかさえ全く見えてこない。これじゃ、女優失格ね」

「そんなことないさ。千聖は十分良くやってるよ。だけど、少し一人で頑張りすぎかな？そんな千聖に素敵なおプレゼントだよ」

そうやって雅は、数枚の便箋を取り出す。これは一体？

「雅、これは一体何かしら？」

「そうだね、一言で言うならば、愛のかたまりかな」

「愛の……かたまり……？」

私は、その便箋に目を通してみることにした。そこに書かれていたのは、皆から私へ

の愛だった。

日菜ちゃん流の視点から言うと、千聖ちゃんが演じてた妹役、どつちかというときと千聖ちゃんがしゃべってるように見えたよ。もつと大げさな演技でもいいと思うな。千聖ちゃんの舞台、楽しみにしてるからね！るんつてくる最高の妹期待してるよ！

氷川 日菜

ジブンは、お姉さんへの気持ちをもつと前面に出してもいいかと思えます。日菜さんを参考に見てみてはいかがでしょう？最も、病弱な日菜さんなんて想像もできないですけどね。ですが、姉思いな部分のイメージとしては日菜さんに近いかと思いました。下手なイメージですみません。完成した千聖さんの演技、楽しみにしてますね！

大

和 麻弥

私は、演技については何もいい意見が言えません。ですが、チサトさんに対する想いはみなさんにも負けません！チサトさん、ブシドーです！ミヤカワさんに、最高にネッ

ケツな妹さんを見せてあげましょう！

宮 イヴ

千聖ちゃん、最後まで諦めないで！熱い千聖ちゃん、すつごく見てみたいよ！諦めなければ、きつと千聖ちゃんならできるよ！私、千聖ちゃんがすつごく努力してるの知ってるから！努力すれば夢は叶う。だから、自分なんかなんて絶対思わないで！最高の舞台期待してるからね！

丸山 彩

「みんな・・・」

それは、正しく愛のかたまりだった。皆の、私に対する愛が詰まったかたまり。たかが薄っぺらい紙切れだと言う人もいるだろう。だけど、私にはわかる。この紙切れに込められた想いは、両手で抱えきれないほどに重いと。その思いが嬉しくて、嬉しくて、思わず泣きそうになってしまう。そして私は気づく。もう一枚、便箋が残っていることに。もう、パスパレの皆の分は読み終わった。では、この便箋は一体誰の？

楽しんでいこう。

若

その便箋には、たった一言だけ、そう書かれていた。その筆跡は非常に見慣れたものだった。目の前でこちらに笑顔を向けている彼のものだ。そして、私は堪えきれずに泣いてしまった。皆からの愛が嬉しくて、愛おしくて、堪えきれずに涙を流してしまった。そんな私を、隣に来て彼は優しく抱きしめてくれる。その温もりがまた、愛おしい。楽しんでいこう。彼は私にそう書いた。楽しむ。最後に、演技を楽しいと思つたのはいつだったかしら？ 私は少なくともここ数年、演技に楽しみを求めたことは無かつた。ただ、自分の成長の為。ただ、義務感。ただ、責任感。それらのためだけに演技を行つてきたし、実際成功してきた。

仕事と割り切つて役を熟す日々。それが普通だと思つていた。最後に本気で演技に取り組んだのはいつだろう？ 私は、知らぬ間に演技に対して手を抜いていたのかもしれない。責任感と義務感だけで台本を覚え、上つ面の演技だけで通す日々。実際、それで認められてきたのだから、これでいいものだと思つていた。

今回の舞台は、私にとっての大きな転機になるだろう。

「……雅、どうやら私の演技は今までただの蕾だったみたいだわ」
「蕾？」

「ええ、蕾よ。だけど、皆の愛が雨となり、私の演技は花開く。今度の舞台で、満開の花

となつた私を見せるわ」

「うん、期待してるよ」

私の演技が花開く、その瞬間をみんなに見てもらおう。私の体を、今まで感じたことの無いほどの熱意が支配していた。今なら、きつと最高の演技ができる。私は、この時点で舞台の成功を確信していた。

そして、その日がやってきた。公演初日、その日の客席は満席となっていた。宮川先生の新作舞台なのだから、当然だろう。そして、その多くの人に新生白鷺千聖を見てもらおう。これが、私の晴れ舞台。今、芽吹いた愛の花が、咲き誇る。

舞台の幕が上がり、順調に物語が進行していく。なんだろう？体が凄く軽い。それに、頭が驚くほど冴え渡っている。好都合だ。余計役を演じやすくなる。一瞬たりとも集中を緩めず、私の熱意を余すところなく声に、体に乗せる。

もつと、大きな演技を。もつと、姉への気持ちを前面に。熱血的にブシドーに。決して諦めず、楽しんでいく。

みんなから受け取った愛を、余すところなく声に、体に乗せる。自分でもわかる。今の私は、過去全ての白鷺千聖の中でも、最高の白鷺千聖になっていると。

そして、舞台の幕が下りる。あつという間の公演だった。楽しい時間ほど、時間が経つのは早いもの。そう、私は今回の舞台を本当に心から楽しんだ。楽しかった。本気で演じるということが、こんなに楽しいことだなんて忘れていた。本当に最高の経験だった。

他の役者の方も皆笑顔が浮かべている。その笑顔が述べている。今回の舞台は大成功だったと。そう思うと、私の顔にもまた自然と笑顔が浮かぶのだった。

「皆、見に来てくれていたのね。ありがとう」

控え室に私が戻ると、しばらくしてから雅達が訪ねてきてくれた。今回の舞台の成功はなんといいても皆のおかげ。だからこそ、見に来てくれて本当に嬉しい。

「千聖ちゃん！ほんつつつつつとうに良かったよ！私感動しっぱなしだった！」

「彩ちゃん、舞台の間ずっと泣きっぱなしだったもんねー。それが面白くてあたしは舞

「台に集中できなかつたよー」

「だ、だつて本当に感動したんだもん！」

「まあ、ジブンは彩さんの気持ちもわかります。本当に言葉にするのも困難なぐらい素晴らしい演技でしたからね。ジブンも思わず泣いちゃいましたよ」

「はい！私もです！鬼の目にも涙ですわね！」

「いや、いつからイヴちゃんも鬼になったの。でも、皆の言うことは本当だよ。本当に、今までも最高の演技だった。正に進化形白鷺千聖だね」

「皆、ありがとう。私自身も、本当に素晴らしい舞台にできたと思うわ。皆のおかげね。本当にありがとう」

「皆、私の演技を見て感動してくれたみたいね。良かった。これで何も感じなかつたって言われたら凹んでいたわ。」

「白鷺君、失礼するよ。初日の上演ご苦労だった。客の反応も盛況だ。明日からも期待しているよ」

「しばらく、雅達が見た舞台の感想を中心に話をしていると、宮川先生が控え室を訪れて下さった。まさか、先生自ら訪ねてきて下さるなんて。」

「はい、ありがとうございます！」

「ん？この子達は……」

「私が所属しているバンド、Pastel*Palettesのメンバーと、お世話になつているシンガーソングライターの黒城雅さんです」

「おー！君が噂の白鷺君の彼氏さんか！」

ちよつと待つて。なんでそんな噂になつてるのかしら？発信源はどこ？まあ、私もそこまで隠す気も無いからいいけれども。

「み、宮川先生、一体どこでその噂を・・・？」

「うん？この前飲みに行つたときに大木内君が言つていたが？」

あの人は一体何をしてるのよ・・・確かに、口止めはしていなかつたけれども・・・「マリさん、本当に何をしているのかしら・・・」

「わはは、まあ若い間は存分に青春しなさい！ということは、白鷺君の本気を引き出してくれたのも彼氏君だったかな？」

「いえ、今回僕は何もしていませんよ。今回は千聖本人と、Pastel*Palettesの皆の功績ですよ」

「そ、そんな、私達もそんな大したことはしてないですよ！」

「そうそう、あたし達は何もしてないですよ。千聖ちゃんがんばっただけ！」

「そうです！チサトさんはすつごく努力しました！」

「そうですね。ジブンたちはただ見守つていただけです！」

「そうか。白鷺君はいい友人に恵まれたみたいだな。では、私は挨拶まわりがあるから失礼するよ」

ええ、宮川先生のおっしゃるとおり、本当に素晴らしい友人に恵まれたと思う。私には勿体ないほどに。そして、それだけ言い残して宮川先生は部屋を出て行くこうとする。だけど、私にはまだ、宮川先生に聞いてみたいことが残っていた。

「宮川先生、待って下さい！一つだけ、聞かせて下さい。どうして私を起用してくださいましたのですか？私と似通った演技力、容姿の女優はいくらでもいます。その中で、どうして私だったのかと」

「そうだな。君が開花したら、面白いものが見れそうだと思つたからだ」

「面白い？」

「以前からテレビ等で君のことは知っていたよ。年齢の割に、とても器用な演技をする子だと思っていたが、役に対する熱意や本気というものがあまり見えなかった。そんな君が本気になった時、何が観られるんだろうと興味があつたんだよ。だが、結果を見る限り、どうやら私の目は曇っていたようだ」

「え？」

その宮川先生の言葉に愕然とする。まさか、この演技でも宮川先生の望むレベルには到達していなかったと言うの？私は、唯々困惑していた。だがそれも、次の宮川先生の

お言葉で綺麗に吹き飛ぶこととなる。

「ああ、曇っていたようだ。君の本気は、私の想像をはるかに凌駕りようがしていた。私の予想も当てにならないものだ。良い意味でね。明日の公演もこの調子でよろしく頼むよ。それだけじゃない。また君に私の作品をお願いしたい。これからも期待しているよ、白鷺君」

「宮川先生……はい、よろしくお願いします！」

お褒めいただいた上での、また別の作品に呼んでいただけるというお言葉までいただいた。凄く嬉しい。それは、私が日本でも五指に入る演出家先生に認めていただけたということ。これを、喜ばずにいられるだろうか？嬉しくないという人は、きつと役者では無いのだろう。

今回の舞台で、私は多くのことを学んだ。それこそ、数え切れないほどの。そして、多くの愛を受け取った。パスパレの皆からの、雅からの、舞台を見に来て下さったお客さんからの、そして宮川先生からの。多くの愛を頂いた。だけど、受け取るばかりでは私の性に合わない。私もこの先多くの人に私の演技あひで返していこう。

それが私にできる、一番の恩返しだと思うから。だから私はこれからも女優として進化し続ける。一人でも多くの人に、少しでも恩返しができるように。私の愛を届けよう。私の生が続く限り。

第29演目 シアワセ☆ハイテンション→

皆は、夏といえばまず最初に何を連想するだろうか？

みずみずしく育ったスイカ。

空を彩る鮮やかな花火。

球児達の思いが籠もった甲子園。

人によつて様々な物を連想することかと思う。

だが、そんな中でも今僕の目の前に広がる風景を連想する人は多いのではないだろうか？

嫌でも人の体を焼き付ける太陽。

きめ細かな姿が美しくもある、白い砂浜。

その辿り着く先が全く見えない水平線。

つまり、真夏のビーチ、海の光景が僕の目の前に広がっていた。

「予想してたことだけでも、すごい人ね」

もちろん、こんな場所に僕一人で来たわけではない。隣には、千聖がいる。今日は所謂デートに来ていた。二人揃って休みが被った休日。夏休み中にそう何度もある訳で

はない。こんな日を有効活用しない手はないと、僕達は即断即決の精神でここまでやってきていた。

もちろん、こんな場所に来たのいつまでも私服でいるわけがない。僕達は既に水着に着替えていた。千聖も、今は薄黄色を基調とした花柄のワンピーススタイルの水着に着替えている。ものすごく可愛い。

「雅、どうしたの？ そんなに見られると恥ずかしいんだけど・・・」

「あ、ごめん。その、凄く似合ってて可愛かったからつい・・・」

「そ、そう。あ、ありがとう・・・」

そう言つて顔を真っ赤にして俯く千聖。その仕草がまた可愛らしかった。

「そ、それより折角来たんだから泳がないと勿体ないよね！ いこう？ 千聖」

「ええ、そうね」

そして、僕達は手をつなぎ、海の中に入っていく。行こうとしたのだが・・・

「待つて雅。準備運動がまだだわ」

千聖に止められた。言われてみれば確かに着替えたばかりで、僕達は何も準備を行つていなかった。

「そうだったね。ごめんごめん。忘れてたよ」

「逸る気持ちもわかるけれども、何事も準備が肝心よ。しっかりと準備をしましょう？」

そして、念入りに準備運動を行っていく。体をほぐしていくけれど、なんだか以前より固くなってる気がする。最近あまり運動をしていないせいかな？僕は普段から、人並みに体力作りに励んでいた。長時間のライブを行うには、技術云々うんぬんよりもまず体力がいる。そのために、体力作りには力を入れている。

といつても、たまにランニングを行っている程度だけど。因みに、僕の運動能力は同年代の平均以上にはあるつもりだ。といつても、あくまで平均より少し高い程度。決して高いわけではない。泳ぐのも平均並の能力というわけだ。逆に千聖は運動が苦手だったりする。泳ぐのもあまり得意では無かったはずだけど。

「さて、このぐらいでいいかな？じゃあ、改めて行こうか？千聖」

「ええ、そうね。行きましょ？雅」

そして僕達は遂に念願の海に足を踏み入れた。その途端に、太陽によつて熱せられた体を癒やすかのような、心地の良い感覚が足に伝わってくる。

「あー気持ちいい……」

「ふふっ、そうね。風も、波も、何もかもが気持ちいいわ」

海に来た。その実感を嫌でも僕達に与えてくれた。

「さて、それじゃ思いっきり楽しみましょ？明日の仕事のことなんて考えないで」

「あはは、そうだね。明日の仕事は二人して日焼けと筋肉痛で苦しんじゃおうか」

日焼け止めはしっかりと塗った。とはいえ、この照りつける忌々しい存在の前では気休め程度にしかならないだろう。今朝の天気予報を信じるなら、今日の気温はこの夏最高をマークするらしい。全くもって知りたくない情報だ。

「雅」

「ん？何千聖？つてぶふっ！」

千聖に呼ばれ、そちらに振り向くと急に水の塊が飛んできた。飛ばした犯人は言うまでも無いだろう。

「ふふっ、今の雅の顔、ふふっ、ふふふっ！」

「千聖、笑いすぎだよ！よーし、こうなったら、えいっ！」

「きゃっ！やったわねー！お返しよ！」

「わあっ！やったなー！負けないよ！」

その後も、僕達はお互いに負けじと水をぶつけ合う。そんな他愛も無いことが楽しかった。海に来たからだろうか？なんだかテンションが高まつてる気がする。いつになく、やけにハイテンションになっている気がする。だけど、嫌な気はしない。むしろ幸せに感じるほどだった。

「ふふっ、こういうのもたまには悪くないわね」

「そうだね。なんだか楽しくなってきたや」

「そうだわ、雅。今から私に泳ぎを教えてくれないかしら?」

「泳ぎを?でも千聖、別に泳げないわけじゃ無いじゃん」

「泳げるけれども、苦手なものは苦手なのよ。こういう機会でもないと教えてもらえないし、お願いできないかしら?」

「うーん。そうだね。たまにはいいかな。わかったよ。教えるよ」

「本当?ありがとう。うれしいわ」

「とは言っても、僕も人並み程度にしか泳げないからね。上達しなくても僕のせいにしてないですよ?」

「ふふつ、勿論よ」

そんな成り行きで、僕は千聖に泳ぎを教えることになった。教えるにあたって、まず最初に千聖の泳ぎを見せてもらった。泳げるには泳がている。しかし、その動きはどこかぎこちなかった。

「雅、どうかしら?」

「うーん、ちゃんと泳がてるには泳がてるんだけどね。どこか違和感があるよね。たぶん足の動きかな?もつと水を強く蹴るように心がけてみようか?」

そのアドバイスを聞き、再び泳ぐ千聖。しかし、その動きは先ほどとあまり変わりはなかった。

「どうかしら?」

「千聖、たぶん手の方に意識を持っていきすぎなんだよね。もつと足に意識を持っていて、力強く水を蹴る練習をしようか? 初歩的な練習だけど、僕が手を持つてるよ。足だけに集中して、強く蹴ってみよう」

僕が、千聖の手を持って沈まないようにし、千聖には足だけに集中させる。その練習が功を奏したのか、千聖の動きは段々と良くなつていつていた。

「うん、良い感じだよ千聖」

「本当? ふふつ、雅のおかげね。……って、み、雅! 後ろ!」

「え? 後ろ?」

その千聖の悲鳴にも似た叫びに誘われ、後ろを振り向く。そこには、こちらに迫る波があった。ただの波だったらこんな千聖も騒がないだろう。ただの波であつたならば。その波は、この海岸では珍しい、平均男性の肩辺りまである大きな波だった。それも、平均男性の身長で計算した場合の話。

僕の身長は160センチほど。千聖に至っては150センチほどしかない。つまり、二人ともその平均よりも下回っていた。僕達二人とも、頭までスッポリ入ってしまうだろう。そんな波がすぐ目の前にまで迫っていた。

周りを見れば、他の客も一目散に砂浜へ向かつて逃げている。僕達もすぐに逃げよう

にも、気づくのが遅すぎた。次の瞬間、僕達は大波に飲まれた。

「うわっ！」

「きゃっ！」

その衝撃で、思わず千聖の手を離してしまふ。波に飲まれ流される僕達。そんな急流の中でも、僕は懸命に泳ぎ、千聖を追いかけた。千聖は、波に飲まれ泳ぐこともままならないようだ。このままだと、危ないかもしれない。後数メートル。それだけの距離だ。決して届かない距離では無い。僕は、必死の思いで千聖に手を伸ばした。届け、届いてくれと祈りを込めた右手。そして、千聖もそんな僕の姿に気がついたのか、こちらに向かって手を伸ばしてくれる。これなら届く！後数メートル。後数センチ。後数ミリ。そして・・・届いた。千聖の腕を掴み、引き寄せる。そして直ぐさま海面に顔を出す。

「ぶふあっ！」

空気が美味しい。素直にそう思えた。青空の下、僕達二人は無事生還を果たした。今は、あの憎らしい火の塊ですら有り難く感じる。そしてしばらく経ち、思考が冷静になつてくると、一つの違和感を覚えた。

違和感を覚えたのは、自身の手にだ。僕の右手は今も千聖の手を掴んだままになっている。その反対の左手が原因だ。何かを触っている。安心感を覚えるような柔らかさ

を伴った、何かを掴んでいる。一体これはなんだ？僕の左手は一体何に触れているんだ？

「あの、雅、手が……」

「え？」

その千聖の言葉を聞き、僕は恐る恐る自身の左手に視線を向けた。そこにあつた真実に、僕の思考は一瞬間まつてしまう。見事に僕の左手は掴んでいたのだ。千聖の胸を。おそらく、千聖を引き寄せた際に、無意識に千聖を掴まなくてはいけなかった僕は、あろうことか千聖の胸を掴んでしまったのだろう。愚かにも程がある。

「ご、ごめん……」

そして、思考が復活した僕は、千聖から手を離し、距離を取った。僕はなんてことをしてしまったのだろうか。

「いい、いいのよ。気にしないで、雅は私を助けてくれたわけだし、何も悪いことはしてないわ。むしろ、お礼を言わなくてはいけないわ。ありがとう、雅」

そう言いながらも、顔を赤くしたままの千聖。その優しさが、今は有り難くも気まずかった。気まずい沈黙が僕達の間で発生する。

「そ、そうだわ！もうそろそろお昼の時間よね？海の家に行かないかしら？私、お腹が空いてきたわ」

「そ、そうだね！行こうか！」

気まずい沈黙を、千聖が破ってくれる。そんな千聖の提案に、僕が反対できるわけが無かった。僕達は顔を赤くしたまま海から上がり、海の家へ向かうのだった。

海の家は大盛況していた。飛び交う注文。満遍なく埋まった席。外にまで並んだ客。見覚えのある店員。これは席にありつくまで時間がかかりそうだ。それよりも、気になるのはあの店員達。どこからどう見ても知り合いなんだけど……

「いらつしやいませ！特別コラボカフェへようこそ！」

そして見覚えのある顔は外にもいた。こんな所で何してるの？

「えっと、彩ちゃんこんな所で何してるの？」

「あ、雅君！千聖ちゃん！今日は私ここの一日店長なの！」

そう、僕らの友人丸山彩は言う。なるほど、よく見てみれば確かに胸にそう書かれた名札を付けている。

「そういえばそんな仕事が入ってるって彩ちゃん言ってたわね。まさかこの海の家だっ

たなんて。ふふっ、面白い偶然ね」

「ほんとだね。まさかこんな所で知り合いに会うと思わなかったよ。知り合いといえ
ば、中で見知った顔が働いてるみたいなんだけど、アルバイトか何か？」

「それが・・・」

「彩ちゃん、悪いんだけど、もう少し中を手伝ってくれないかな？」

彩ちゃんが何かを言いかけると、奥から一人の男性が出てくる。その顔には疲労の色
が在り在りと浮かんでおり、体からも忙しいですと言わんばかりの雰囲気があふれ出
していた。

「あ、店長！わかりました！」

「店長・・・なるほど、本物の店長さんなのね」

「ん？君たちもしかして彩ちゃんのお友達かな？」

「ええ、そうですけど」

その言葉を聞くと、途端に安心したかのような表情を見せる店長さん。君たち『も』と
聞く辺り、おそらく中で働いている彼女達のことを指しているのだろう。その時点で、
僕達にはある程度の予想が付いていた。なるほど、だから彼女達はこんな所で働いてい
るのか。

「ああ、それはちょうど良かった！どこかで見たことあるような子達な気がするけど、

きつと大丈夫だろう。よし、突然で申し訳ないんだけど、今手が足りなくて、少しお店を手伝ってもらうことはできないかな？」

そして、店長さんの口から予想通りのお願いが飛んできた。おそらく、中で動き回っている彼女達も同じ理由で店長さんに頼まれたのだろう。

「そうね、雅、どうしようかしら？」

「そうだね。店長さんも困ってるみたいだし、少し手伝っていいこうか」

「おー！手伝ってくれるか！すまない！お願いするよー！」

店長からのお願いに応えることにした僕達は、彩ちゃんに案内され、厨房に入ることになった。ここに来る途中、店内をせわしなく走り待っていたひまりちゃんとあこちゃんに軽く手で挨拶をした。二人ともかなり驚いてたけど、それも当然かとも思う。

そしてやってきた厨房には、これまた見知った顔があった。

「あれ？雅と千聖じゃん。はっはーん。さては店長に捕まっちゃったねー」

「雅さん、白鷺さん……こ、こんにちわ……」

リサちゃんと燐子ちゃんだ。二人ともどうやら厨房を担当していたらしい。

「リサちゃん、燐子ちゃん、ご苦労様。私も料理を手伝うわ」

「千聖が手伝ってくれるの？それは助かるよー。この前ヒナから千聖が料理上手だって話を散々聞かされたからねー。期待しちゃうよー」

「もう、日菜ちゃんったらまた勝手に言いふらしちゃって。だけど、私も日菜ちゃんからリサちゃんが料理上手だって話を聞いてるわ。期待してるわね」

「あはは！ヒナの口はふさげないねー！」

楽しんでに会話を弾ませる千聖とリサちゃん。だけど、その手は既に手際よく料理を始めていた。千聖の実力には疑いの余地もないけれども、リサちゃんも見たところ負けず劣らずの実力をしているようだ。さて、僕は何をしようか？正直、気合いは十分なんだけれど、厨房じゃ役に立てるようなことが無い気もする。

「千聖、僕は何をしようか？」

「雅は何もしなくても大丈夫よ。大人しくしてて」

うん、ここだと戦力になれないことは重々わかっていたけれども、悲しい。何か力になれることは無いかな？そう思い、僕は厨房を少し離れ、店内の様子を見てみることにした。

「すみませーん」

そして、様子を見てみると、僕のすぐ近くの席で店員を呼ぶお客さんがいた。店内を見渡してみると、他の店員さんは皆どうやら手が空いていない様子だ。ここは僕が出るべき場面じゃないかな？注文を聞くぐらいなら僕にだってきつとできる。よし！やつてやるぞ！

「はい、お呼びでしょうか」

「あ、すみません注文したいんですけど……ってあれ？店員さんどこかで見ましたことあるようない？」

「あ！もしかしてあの黒城雅じゃね？」

「あ、ほんとだ！黒城雅だ！でも、なんでこんなところに？」

「ほら、あつちで丸山彩が一日店長として接客してるし、その関係じゃね？それよりも俺フアンなんだよ！一緒に写真お願いしてもいいっすか？」

「あ、えっと……」

そうだ。僕だつて役に立てるといふ気合いが空回りしてすっかり失念していた。僕っていちお芸能人じゃないか。芸能人がいきなり注文を取りに来たら誰だつて同じような注文をするだろう。

「え？あれつて黒城雅？」

「あ、ほんとだ。こんなところにいるなんて」

そして、その騒ぎは周りのお客さんにも伝播していく。ダメだ。このままだと注文を取るどころの話じゃない。僕はどうすれば。そう考えているときだった。後ろからいきなり腕を引っ張られて、僕は店の奥に引っ張り込まれた。

「ね？似てるでしょーあの黒城雅に！あの子実はそっくりさんでねー！アタシ偶々おん

なじ学校に通ってるんだけどさー、校内じゃ有名なんだよー! あ、学校は秘密ね! 今の時代そういう身バレっていうやつ? がなんか問題になってるみたいだしさー。あ、お待たせしてごめんない! 注文お伺いしますねー!」

「あーごめんありがとう」

「それにしてもソックリさんだったのかー。それにしては似すぎてたような?」

「でしょー? ほんと似てるよね」。皆絶対言うことだからよっぽどだよー」

店内からは先ほどのお客さんと会話するリサちゃんの声が聞こえてくる。どうやら、僕を助けに来てくれたのはリサちゃんみたいだ。だけど、彼女だけでは無い。彼女は今でもお客さんと話している。じゃあ、僕の腕を今でも掴んでいる人物は誰なのか? 掴まれている先に目を向けてみると、そこには予想通りの人物が立っていた。

「もう、何をやってるのよ・・・」

「ごめん、何か皆の役に立てることは無いかと思うと、つい・・・」

そう、ため息を吐く千聖に謝る僕。全て僕の浅慮せんりょが招いた結果だ。何の言い逃れもできな

「本当に雅は何もしなくても大丈夫よ。本当に音楽関係以外の事はポンコツなんだから大人しくしてて」

「ほ、ポンコツ・・・」

千聖の言葉が心に深く突き刺さる。いや、それに関してには本当に何も否定できないけれども、いざ面と向かれて千聖に言われると心に来る物がある。今すぐ泣きたいほどに。僕は思わず、その場に膝を着いて、蹲ってしまった。

「ふう、終わった終わったー。……って雅、何してるの？」

「あら、リサちゃんお疲れ様。ありがとうね」

「リサちゃんありがとう。それと、僕がポンコツでごめんなさい……」

「いや、それは別にいいけど……ポンコツ？雅本当にどうしちやつたのさ？」

リサちゃんに心配げな目で見られる。本当にリサちゃんって優しい子だな。僕が迷惑をかけたのに、何も気にした様子も無く、逆に心配をしてくれる。僕には勿体ない友人だよ。

「はあ、しようがないわね。リサちゃん、調理の方は私に任せて、燐子ちゃんとドリンクの方をお願いしていいかしら？」

「おーけー。でも一人で大丈夫？かなりの重労働だと思うけれど」

「別に一人じゃ無いわよ。雅にもちゃんと働いてもらおうわ」

その言葉を聞き、僕のやる気がまたグツと上がってくる。千聖が僕を頼ってくれた。その事実だけで凄く嬉しかった。

「千聖、僕が手伝ってもいいの？」

「ええ、といつても、簡単なことを教えてあげるだけだから、大した仕事では無いわよ？」
「それでも嬉しいよ！よし！頑張るぞ！」

「あはは！じゃあこっちは問題なさそーだね！じゃあ千聖、雅、まかせたよー」

そう言つて、リサちゃんは燐子ちゃんの方へと向かつていく。さて、リサちゃんにもああ言われた訳だし、「頑張らないと！」

「それじゃ、やるわよ」

「うん！何でも言つてね！」

そして、そこから僕達の共同作業が始まる。と言つても、ほとんどの作業は千聖がしてくれている。僕は本当に誰でもできるような簡単な作業を淡々と熟しているだけだ。だけど、そんな時間がなんだか楽しかった。千聖と一緒に何かをしている。その事実だけで幸せに感じた。

気づいたのはその時だった。海で遊んでるときから、今も続いているこの謎のハイテンションの正体に。今日の失態もこのハイテンションから来るやる気の空回りが原因だった。そして、そのハイテンションの原因は、千聖だった。正確には千聖とのデートだった。

実は今日のデート、僕達が付き合い始めてから初めての、本格的なデートだった。あれから、僕達二人は共に仕事に忙しく、中々デートに出かけることができずにいた。

あつても、羽沢珈琲店等で、限られた時間を過ごしたぐらいだ。

そして、そんな初めてのデートという事実には、僕は浮かれていたのだ。それが、この謎のハイテンションの正体。全ての元凶。元凶なんだけれども、そう考えると途端になんだか勝手に顔に笑みが浮かんだ。

「雅、急に笑つたりしてどうしたの？」

「ん？うん、なんだかこんな時間が幸せだなんて思つて」

「・・・そうね、凄く幸せだと思うわ。こんな、何気ない日常がいつまでも続けばいいのに」

「そうだね。本当に、続いてほしいね。この幸せが」

数日後も、数年後も、数十年後も、いつまでも、いつまでも、永遠に続いてほしい。ありふれた、一般的なこの日常。隣に千聖がいる日常。それだけでいいのだ。千聖がいるだけで、僕は幸せになれる。僕という人間は、そんな単純な男なのだ。だから願う。いつまでも、いつまでも千聖が隣にいてくれますようにと。切に願う。この終わりなき日常の存続を。いつまでも、いつまでも。

第30演目 微笑みサンセット

気が滅入るような猛暑が続く、八月のとある一日のことだった。

その日も私は、普段と変わらない日常を過ごしていた。夏休みに入っても変わることの無い日常。朝起きて、雅の家に赴き、朝食を作るいつも通りの朝の一幕。

何も普段と変わらない一日の始まりだった。ただ、違うことが一つだけ存在した。

「千聖、今日の仕事は？」

「今日は私は休みよ。特に仕事は入っていないわ」

「あら？奇遇だね。僕もだよ」

それは、普段なら必ずどちらかは入っている仕事で、二人揃って休みだったということ。普段から、雅と休みが被ることは少ない。それが意味することは、デートできる時間が少ないということ。

そんな私達が、今日は二人揃って休み。これは、デートに出かける以外の選択肢は無いわね。折角の夏休み、何もしないなんて勿体ないわ。

「ねえ千聖。だったら今日はデートに行こうか」

と、思っていた矢先に、雅がデートに誘ってきてくれた。どうやら、私と一緒にのこと

を考えてくれていたようだ。

「ふふつ、奇遇ね。私も今誘おうと思っていたわ」

「ははつ、今日みたいな日を逃す手は無いもんね。で、どこに行こうか?」

「そうね、折角だから夏つぽいことをしたいわね」

夏つぽいこと。いくつか選択肢はある。だけど、一番行つてみたい場所は私の中で決まっていた。そのタイミングで、都合良くテレビのアナウンサーの声が聞こえてくる。

「私は今、観光客で多く賑わうビーチに来ています。こちらのビーチは、現時点で既に昨年の利用者数を上回っており、例を見ないほどの大盛況に見舞われております」

「これね」

「これだね」

私達の声がタイミング良く被る。それがなんだか面白くて、私達はどちらからともなく、笑い出した。決まったならば早速準備をしないと。私は、一度雅の家を出ると、自宅へと支度をしに戻った。実は、こういう時のために先日新しい水着を購入していた。まさか、本当に着る機会があるなんて思っていなかったけれども、嬉しい誤算ね。私の足取りは、自身の気分を表すかのように、早足になっていたのだった。

そして、やってきた。青と白のコントラストが美しい、魅惑のビーチへと。そこは、予想通りの賑わいを見せていた。

「予想してたことだけれども、すごい人ね」

見渡す限りの人、人、人。これだけ人が多いと、私達も一般人の中に紛れることができて都合が良いかもしれないけれども、さすがに多すぎる気もする。そんな人混みに少しうんざりしていると、隣から向けられている視線に気がついた。視線の主は雅だ。

「雅、どうしたの？ そんなに見られると恥ずかしいんだけど……」

「あ、ごめん。その、凄く似合つてて可愛かったからつい……」

「そ、そう。あ、ありがとう……」

突然の雅からの発言に、私は恥ずかしくなってしまった。思わず、俯いてしまう。おそらく、顔も真っ赤になっているだろう。すごく熱い。私を買った水着は、ワンピースタイプの物だった。ビキニタイプの物と悩んで、こちらの水着を私は購入した。理由はこの花柄だ。この花が、私の大好きなフクジュソウに似ていた。ただそれだけ。

フクジュソウは元々大好きな花だった。だけど、今年の誕生日以来、更に特別な花に変わっていた。理由は雅からの誕生日プレゼントに頂いたポーチ。そのポーチに付け

られていた花飾り、それがフクジュソウだった。

雅が態々私の誕生花を調べて、買ってくれたポーチだった。私の大切な物。だけど、普段は全く使っていないなかったりする。勿体なくて使えないというのが本音。実際に、今日も私の部屋に大事に保管して、持ってきていない。

「そ、それより折角来たんだから泳がないと勿体ないよね！いこう？千聖」

「ええ、そうね」

そして、程なくして雅から声がかけられる。その頃には既に顔の温度も元に戻っていた。私達は、そのまま手をつなぎ、海に向かう。向かおうと思っただけでも・・・「待つて雅。準備運動がまだだわ」

そう、準備運動をまだ済ませていなかった。危なかった。準備運動は非常に大事なこと。特に私は、運動はからっきしなので、準備ぐらいはしっかりしておかないと。

「そうだったね。ごめんごめん。忘れてたよ」

「逸る気持ちもわかるけれども、何事も準備が肝心よ。しっかり準備をしましょう?」

そして、私達は念入りに柔軟運動を行っていく。元々だけでも、私の体は固い。今はそのような役を演じていないからいいけれども、役によつては演技だけではなく、体の柔軟さも求められることがある。いくら柔軟な演技ができて、それだけではいけない場面がある。少しは体も鍛えた方がいいかしら? 本当に運動は苦手なのだけでも。

「さて、このぐらいでいいかな？じゃあ、改めて行こうか？千聖」

「ええ、そうね。行きましょ？雅」

そして、私達は十分な準備運動を行い、今度こそ念願の海に足を踏み入れた。足を踏み入れた瞬間に、伝わってくる冷感が心地よい。

「あー気持ちいい……」

「ふふっ、そうね。風も、波も、何もかもが気持ちいいわ」

本当に、呆れるほどの暑さが気にならないほどの心地よさだった。叶うことならば、このまましばらく何もせずになりたいほどの。

「さて、それじゃ思いっきり楽しみましょ？明日の仕事のことなんて考えないで」

「あはは、そうだね。明日の仕事は二人して日焼けと筋肉痛で苦しんじゃおうか」

だけど、このままという訳にはいかない。私達は今日、思い出の一ページを作りに来たのだ。こんなことで時間をつぶしている訳にはいかない。

「雅」

「ん？何千聖？つてふふっ！」

名前を呼んで、振り向いた雅に向かって水をぶつける。海で行う、ありきたりなことだけれども、そんなありきたりなことが掛け替えのない思い出に変わる。

「ふふっ、今の雅の顔、ふふっ、ふふふっ！」

「千聖、笑いすぎだよ！よーし、こうなったら、えいっ！」

「きやつ！やったわねー！お返しよ！」

「わあっ！やったなー！負けないよ！」

こんな些細な時間が愛おしかった。堪らなく幸せだった。いつまでも続けば良いと思えた。

「ふふっ、こういうのもたまには悪くないわね」

「そうだね。なんだか楽しくなってきちゃったや」

「そうだわ、雅。今から私に泳ぎを教えてくれないかしら？」

「泳ぎを？でも千聖、別に泳げないわけじゃ無いじゃん」

「泳げるけれども、苦手なものは苦手なのよ。こういう機会でもないと教えてもらえないし、お願いできないかしら？」

「うーん。そうだね。たまにはいいかな。わかったよ。教えるよ」

「本当？ありがとう。うれしいわ」

「とは言っても、僕も人並み程度にしか泳げないからね。上達しなくても僕のせいにしてないでよ？」

「ふふっ、勿論よ」

私は、ふとした思いつきで雅に泳ぎを教えてもらうことにした。準備運動の時に、私

は少しは運動をした方がいいかもと思った。これはその一環。これで、少しは運動力アップにつながればいいけれども。

そして、私は手始めに雅に泳ぎを見てもらうことになった。泳いでみて思うけれども、なんだかきこちないと自分でも思う。だけど、何がおかしいのかまではわからない。

「雅、どうかしら?」

「うーん、ちゃんと泳げてるには泳げてるんだけどね。どこか違和感があるよね。たぶん足の動きかな?もつと水を強く蹴るように心がけてみようか?」

雅に言われたように、足を強く蹴ろうと心がける。だけど、上手く蹴れてる気がしない。さつきと変わりが無いような気がする。

「どうかしら?」

「千聖、たぶん手の方に意識を持っていきすぎなんだよね。もつと足に意識を持っていて、力強く水を蹴る練習をしようか?初歩的な練習だけど、僕が手を持つてるよ。足だけに集中して、強く蹴ってみよう」

そう言つて、雅は私に両手を差し出す。言われたとおりに、私は雅の両手に全てを委ねて、足だけに意識を集中する。すると、なんだか先ほどまでよりも足の動きが良くなっている実感があつた。

「うん、良い感じだよ千聖」

「本当？ふふつ、雅のおかげね。．．．って、み、雅！後ろ！」
「え？後ろ？」

雅は私の声につられて後ろを振り返る。私も気づくのが遅すぎた。そこには、すぐ近くまで迫った大きな波が押し寄せていた。それこそ、雅の頭まで飲み込まれてしまうような大きな波が。気づいたときには、私達には何をすることもできなかつた。

「うわっ！」

「きやつ！」

波の衝撃により、私と雅の手が離れてしまう。咄嗟のことに何もできず、私は波に流されてしまった。幸いなのは、流されたときに水を飲んでしまわなかつたことだろうか。だけれども、体が思ったように動かない。これは本格的にマズいかもれない。そう思っていたときに、薄らと見えた視界の中に救世主の姿が映った。私はその救世主に向かつて、ゆつくりと、しっかりと手を伸ばす。果たして、私の願いは叶えられたのか、手を掴み、誰かに引き寄せられる感覚が体に伝わってきた。

「ふふあつ！」

そして私達は、無事生還を果たした。数秒間の出来事だったというのに、太陽を見るのがそれはそれは凄く久しぶりに感じる。意識もハッキリしている。どうやら、二人とも何も問題なかつたようだ。

そして、安心して気づく。何かが、私の胸に当たっていることに。恐る恐る胸元に目を向けてみると、そこには私の胸を掴む手があった。その手の主には心当たりがある。その答えを確認するために手を上に辿っていくと、案の定それは雅の物だった。様子を見るに、どうやらまだ現状に気づいていないようだ。

「あの、雅、手が・・・」

「え？」

その私の声に誘導され、雅が自身の手に目を向け、そして現状に気づく。その間も、私の顔は凄いい勢いで熱くなっていた。おそらくまた真つ赤になっていることだろう。

「ご、ごめんー！」

気づいた雅が、勢いよく手を離して私から離れる。それは、その、凄く恥ずかしかったけれども、そのいつかはそういうことをする日もやってくるわけだし、そうなったら、間違いないく触ってもらおう訳だし、これは、その、遅かれ早かれの問題。ただ、できることならその時まで取っておきたかったというのはあるけれども、過ぎてしまった事は仕方ない。それに、雅になら謝られるようなことでも無い。むしろ、私がお礼を言わなければいけない。

「いい、いいのよ。気にしないで、雅は私を助けてくれたわけだし、何も悪いことはしてないわ。むしろ、お礼を言わなくてはいけないわ。ありがとう、雅」

そうお礼を述べる私。だけれど、雅はまだ納得がいつていない様子。雅が変に意識してしまふから、私まで変に意識してしまつてゐる。正直、かなり気まずい。

「そ、そうだわ！もうそろそろお昼の時間よね？海の家に行かないかしら？私、お腹が空いてきたわ」

「そ、そうだね！行こうか！」

そんな気まずい空気を払拭するために、私は雅に一つの提案を出す。正直な話、そこまでお腹は空いていないんだけど、この際四の五の言つてられない。私達は、その空気から逃げ出すように、真つ赤な顔で海の家へ向かった。

海の家は人で溢れかえつてゐた。店内は見渡す限り人だらけ。座れなかつたお客さんが外にも長蛇の列を並べてゐる。そして、そんな店内で接客してゐる店員さん。その中に見知つた顔が二人ほど混ざつてゐた。あれはひまりちゃんとかちちゃん？どうしてこんなところに？

「いらつしやいませ！特別コラボカフェへようこそ！」

そしてもう一人見知った顔が外にも。えっと、あなたはこんな所で何をしてるのかしら？

「えっと、彩ちゃんこんな所で何してるの？」

「あ、雅君！千聖ちゃん！今日は私ここの一日店長なの！」

一日店長。その言葉に私は合点がいった。そういえば昨日、そのような仕事が入っていると言っていた気がする。だけれども、それはあくまで彩ちゃんだけの話。中で働いている二人は関係無いはずだけれども。

「そういえばそんな仕事が入ってるって彩ちゃん言ってたわね。まさかこの海の家だったなんて。ふふっ、面白い偶然ね」

「ほんとだね。まさかこんな所で知り合いに会うと思わなかったよ。知り合いといえど、中で見知った顔が働いてるみたいなんだけど、アルバイトか何か？」

「それが……」

「彩ちゃん、悪いんだけど、もう少し中を手伝ってくれないかな？」

彩ちゃんが私達の疑問に答えようとしたときだった。タイミング良く一人の男性が彩ちゃんに話しかけてくる。この人は一体？

「あ、店長！わかりました！」

「店長……なるほど、本物の店長さんなのね」

「ん？君たちももしかして彩ちゃんのお友達かな？」

「ええ、そうですけど」

その言葉を聞いて、心底安心したかのような表情を浮かべる店長さん。そこではある程度の事情を把握した。なるほど、それである子達は中で働いているのね。

「ああ、それはちょうど良かった！どこかで見たことあるような子達な気がするけど、きつと大丈夫だろう。よし、突然で申し訳ないんだけど、今人手が足りなくて、少しお店を手伝ってもらうことはできないかな？」

そして、飛んでくる予想通りのお願ひ。私はその返答を雅に委ねてみることにした。まあ、少しお人好しの気がある彼がどんな答えを出すかなんてわかりきっているのだけれども。

「そうね、雅、どうしようかしら？」

「そうだね。店長さんも困ってるみたいだし、少し手伝っていいこうか」

「おー！手伝ってくれるか！すまない！お願いするよ！」

そう言うのと、店長さんは私達の案内を彩ちゃんに任せ、接客をしに店の中に入ってしまった。本当に忙しそうだ。そして、彩ちゃんに案内された私達。厨房まで案内すると、彩ちゃんも接客をしにフロアに出て行った。そしてその厨房内には、これまた知っている顔が二人いた。

「あれ？雅と千聖じゃん。はっはーん。さては店長に捕まっちゃったねー」

「雅さん、白鷺さん……こ、こんにちわ……」

リサちゃんと燐子ちゃんだ。どうやら、二人が厨房を担当しているみたい。リサちゃんはともかく、燐子ちゃんは大丈夫かしら？

「リサちゃん、燐子ちゃん、ご苦労様。私も料理を手伝うわ」

「千聖が手伝ってくれるの？それは助かるよー。この前ヒナから千聖が料理上手だつて話を散々聞かされたからねー。期待しちゃうよー」

「もう、日菜ちゃんつたらまた勝手に言いふらしちゃって。だけど、私も日菜ちゃんからリサちゃんが料理上手だつて話を聞いているわ。期待してるわね」

「あははーヒナの口はふさげないねー」

そんな軽口を言い合いながらも、私達の手は忙しく動いている。リサちゃんの手際もいい。日菜ちゃんの言う通り、どうやらリサちゃんも本当に料理上手みたいね。

「千聖、僕は何をしようか？」

「雅は何もしなくても大丈夫よ。大人しくしてて」

私に、手伝うことは無いか尋ねてくる雅。だけど、今のこの状況で雅に手伝ってもらえることなんて何も無い。大人しくしててくれるのが一番助かる。そして、その後もリサちゃんと二人で手際よく注文を片付けていく。片付けていくのだけでも、そこで一

つの問題が発生した。

「あれ？　そういえば雅は？」

「え？」

雅の姿が厨房から無くなっていた。リサちゃんに言われるまで気がつかなかった。どこに行つたのかしら？

「お手洗いにでも行つたのかなー？」

「そうだといいんだけども・・・」

リサちゃんの言う通り、お手洗いに行つていただけだったら問題は無い。だけれども、なんだろう？　なんだか少し嫌な予感がする。

「リサちゃん、なんだか嫌な予感がするの。少し、着いてきてもらつてもいいかしら？」

「そうだね。千聖がそう言うならいいよー。大切な大切な雅のことだもんねー」

「もう、リサちゃんからかわないの」

「だけど、本当に嫌な予感がする。雅は本当に何をしているのかしら？　そして、リサちゃんと一緒にフロアを覗いたとき、私の予感は確信に変わった。」

「はい、お呼びでしょうか」

「あ、すみません注文したいんですけど・・・ってあれ？　店員さんどこかで見ましたことあるような？」

「あーもしかしてあの黒城雅じゃね？」

「あ、ほんとだ！黒城雅だ！でも、なんでこんなところに？」

「ほら、あつちで丸山彩が一日店長として接客してるし、その関係じゃね？それよりも俺フアンなんだよ！一緒に写真お願いしてもいいっすか？」

「あ、えっと・・・」

あの有名人は何をしているのかしら？少し考えれば自分が接客をすればどうなるかわかるでしょう。このままだとまずい。

「え？あれって黒城雅？」

「あ、ほんとだ。こんなところにいるなんて」

案の定、その話題は周りにも伝播していく。これは本格的に早くなんとかしないとまずい。かといって、私がお客さんの間に割って入るのは論外。私も雅と同じ芸能人。火に油を注ぐだけになる。ここは心苦しいけれども、彼女に任せるしかない。

「リサちゃん、本当に申し訳ないのだけれども、あのお客さん達をなんとかすることはできるかしら？」

「うーん、そうだねー、やれるだけの事はやってみるよー」

「ありがとう、それと、ごめんなさいね」

「いいっていいって、困ったときはお互い様ってやつ？まあ、千聖が気にすることじゃな

いつて」

リサちゃんは本当に良い子ね。今から難しい仕事をお願いするというのは、こんな簡単に快諾してくれるなんて。

「それじゃ、私が急いで雅を中に引つ張り入れるから、その後よろしくお願いするわね」
「おーけー。任しときなつて！」

「それじゃ、行くわよー！」

その声と同時に、私は誰にも顔を見られないように細心の注意を払いつつ、最速の動きで雅の腕を掴み、厨房の方へと逃げ込む。後はリサちゃんに任せるだけ。

「ね？似てるでしょーあの黒城雅に！あの子実はそっくりさんでねー！アタシ偶々おんなじ学校に通ってるんだけどさー、校内じゃ有名なんだよー！あ、学校は秘密ね！今の時代そういう身バレっていうやつ？がなんか問題になつてみたいだしさー。あ、お待たせしてごめんない！注文お伺いしますねー！」

「あーごめんありがとう」

「それにしてもソックリさんだったのかー。それにしても似すぎてたような？」
「でしょー？ほんと似てるよねー。皆絶対言うことだからよっぽどだよねー」

リサちゃんはどうぞやら上手いことやってくれてみるみたいだ。本当に、しばらくあの子には頭が上がりえない気がする。そして、事の発端となつた雅は、反省するかのよう

俯いている。

「もう、何をやってるのよ……」

「ごめん、何か皆の役に立てることは無いかと思うと、つい……」

「どうやら、皆の役に立ちたくて行った行為が、先ほどの接客だったみたいね。やる気が空回った結果といった所かしら？何にしても、少し浅慮な気がするけれども。」

「本当に雅は何もしなくても大丈夫よ。本当に音楽関係以外の事はポンコツなんだから大人しくしてて」

「ほ、ポンコツ……」

雅は、その私の言葉を聞いて膝から崩れ落ちてしまった。少し言い過ぎたかしら？だけれど今は心を鬼にして雅の反省を促さないと。といっても、十分反省してるようにも見えるけれども。

「ふう、終わった終わった……。……って雅、何してるの？」

「あら、リサちゃんお疲れ様。ありがとうね」

「リサちゃんありがとう。それと、僕がポンコツでごめんなさい……」

「いや、それは別にいいけど……。ポンコツ？雅本当にどうしちやったのさ？」

心配げな目で私と雅を交互に見てくるリサちゃん。心配させちゃったかしら？そうね、じゃあ雅も十分反省してるみたいだし、それに皆の力になりたいという思いも十分伝

わって来た。しようがないわね。

「はあ、しようがないわね。リサちゃん、調理の方は私に任せて、燐子ちゃんとドリンクの方をお願いしていいかしら？」

「おーけー。でも一人で大丈夫？かなりの重労働だと思っただけよ」

「別に一人じゃ無いわよ。雅にもちゃんと働いてもらおうわ」

その私の言葉を聞くと、途端に雅は顔を上げ、まるで犬が尻尾を振りそうな勢いで私の方に詰め寄ってきた。正直、少し可愛い。

「千聖、僕が手伝ってもいいの？」

「ええ、といつても、簡単なことを教えてあげるだけだから、大した仕事では無いわよ？」

「それでも嬉しいよ！よし！頑張るぞ！」

「あはは！じゃあこっちは問題なさそーだね！じゃあ千聖、雅、まかせたよー」

その言葉だけを告げて、リサちゃんは燐子ちゃんの元へと向かっていった。さて、気合を入れていかないと。

「それじゃ、やるわよ」

「うん！何でも言っただけよ！」

正直な話、雅はやろうとしないだけで、教われれば大抵のことはそつなく熟せる能力がある。料理だって当然そう。ちゃんと学べば私レベルにはすぐ到達できるほどの能力

はある。最も、今は教えてる時間が無いから、すぐに教えられることだけをお願いして、大方の作業は私が行っている。

「ただ、私はそんな何気ない時間が凄く幸せに感じていた。今思えば、雅と何か一つの作業を共同でやることなんて、そう滅多にあることでは無い。それが料理となると、まるで夫婦みたいだなんて思って、凄く幸せになる。普段から、夫婦みたいと揶揄される私達だけれども、自分でもそう思うのだから、否定できない部分も多い。そして、ふと雅の方を見てみると、その顔には満面の笑みが浮かんでいた。」

「雅、急に笑ったりしてどうしたの？」

「ん？うん、なんだかこんな時間が幸せだなんて思ってた」

「……そうね、凄く幸せだと思うわ。こんな、何気ない日常がいつまでも続けばいいのに」

「そうだね。本当に、続いてほしいね。この幸せが」

「どうやら、雅も私と同じ事を思ってくれていたみたいね。本当に、こんな日々がいつまでも続けば良いのに。そう考えていると、背後から視線を感じた。振り向いてみると、そこにいたのはリサちゃんと、燐子ちゃんだった。」

「二人とも、どうかしたの？」

「いやー二人がまるで夫婦みたいだなーって思ってたねー」

「仲睦まじいです……」

「ふ、夫婦って……」

「そうね、私もそう思うわ」

「え？千聖も肯定するの？」

「あはは、これはごちそうさま、かな？」

「お、お幸せに……」

本当に幸せな時間だった。最初は、このお願いをデートの邪魔をされたと思った瞬間もあつたけれども、最終的には受けて良かったと思えた。大切な時間を再認識させてくれた幸せな一時だった。

そして、お手伝いを終わった時には既に夕暮れ時になっていた。海は綺麗なオレンジ色に染まっている。

「やっと終わったよ——あー海でもっと遊びたかった——！」

「まあまあひまり。たまにはこういう思い出も悪くないんじゃない？海ならまた来れる

訳だしさ」

「あこもそう思うー！なんだかあこね、途中からお客さんとお話するのが楽しくなっちゃったの！」

「わ、私は、欲しかったものがもらえたから、やって良かったと思います・・・」

皆それぞれに感じたものがあつたようね。私も、なんだかんだで今日は楽しかったわ。でも、今度はゆつくり、雅と二人で過ごしたいわね。

「みんな！今日はありがとうー！ほんとに助かったよー！」

そんなことを思っていると、最後に彩ちゃんが合流してきた。これで全員揃ったわね。

「そうだ！皆で今日の記念に写真撮ろうよ！」

「お？記念写真？いいねー！撮ろう撮ろう！」

「私も撮りたい！これで少しでも海で遊んだ気になっておかないと！」

「はいはい！あこも撮りたい！」

「わ、私は皆が撮るのなら・・・」

「記念写真か。たまにはそういうのもいいかもね」

「そうね。私も賛成だわ」

「それじゃ、皆寄って寄って！撮るよ！」

そして、私達は今日一日の思い出を一枚の写真に保存した。今朝、急遽決まった今日のデートだったけれども、本当に来て良かったと思う。素晴らしい思い出のページがまた刻まれた一日だった。

欲を言えば、今度は雅と二人でゆったりとした時間を満喫したい。そんなことを考える一日の終わり。微笑み絶えない、夕暮れ時の一幕だった。

第31演目 打上花火

もうすぐ夏が終わる。

八月末の一日だった。とはいえ、暦の上では既に立秋が過ぎ、秋を迎えている。つまり、夏は既に終わっているということになる。だけど、それだと風情が無くなってしまう。まだ八月だから夏でいいでしょう。なんせ今日は、この夏最後の一大イベントなのだから。

「予想していた通りだけど、凄い人だね」

「そうね、はぐれないように気をつけないといけないわね」

今日はこの街恒例の花火大会の日。私は、仕事が終わるなり浴衣に着替えて雅と一緒に街に繰り出していた。街はすでに多くの客で賑わっており、綺麗に並んだ縁日には、長蛇の列ができあがっていた。

「これは縁日に寄ってる場合じゃ無さそうだね」

「そうね、寄ってたら買う前に花火が始まってしまいわ」

それに、普通の何気ない道ですら、多くの人で溢れかえっているというのに、縁日の並ぶ路地がその数を下回るわけが無い。路地に入っただけで人の波に押し出されそう

な勢いだ。

「だけど、このままじゃ花火大会どころじゃないね。花火が綺麗に見えるような所は、きつと既に人がいっぱいだよ」

「そうね、やっぱり出かけるのが遅かったわね。どこか隠れスポット的な場所があればいいのだけれど・・・」

今日、私達は家を出るのが少し遅れてしまった。というのも、二人揃って仕事が長引いてしまったのが原因。仕事なのだから仕方ないと言えば仕方ないのだけれども、少し複雑な気になる。おかげで、こうやって他の人達に出遅れてしまったのだから。

「うーん、なんだかこのまま人の波に従って進んでもダメな気がするな」

「そうは言っても、逆に進んでも、そんな都合の良いスポットがあるとは思えないわ」

人が向かうということは、そちらの方向が最も花火が見やすいからに他ならない。実際に、事前に確認した花火大会のガイドブックでも、おすすめスポットはこの人混みを進んだ先に集中していた。今更、逆の道を進んだところで、良いスポットがあるとは思えない。そもそも、この人工的波に逆らって進めるとは到底思えない。

「ううん、逆走するわけでは無くてさ、どこか人も入らないような脇道の先に実は秘境的丸秘スポットがありましたって感じだね」

「さすがに、そんな都合の良い話があるとは思えないけれども・・・」

そんなスポットは流石に誰もが知っているとと思う。この花火大会もここ数年で始まったという訳では無い。数十年続く伝統的な行事になっている。そんな歴史を持つ場なのに、未だに発見されていない丸秘スポットがあるとは到底思えない。流石に都合が良すぎると思う。

「だよー。うーん、このまま波に従って進むしかないのかな」

「そうね、それしか打つ手は無いように思えるけれども・・・あら？」

何か打つ手は無いかと雅と考えているときだった。前方に見知った顔が二つ見えた。いつもとは違い、その身は浴衣に包まれているけど、間違いない。これだけ多くの人が来ているのだから、知り合いが来ていても何もおかしくないでしょう。だけど、まさか実際に出会うとは思ってもいなかった。どうやら、向こうもこちらの存在に気づいたようで、こちらに軽く手を上げてくる。

「こんばんは、沙綾ちゃん、たえちゃん」

「こんばんは、千聖先輩、と、もしかして、隣の人は？」

「あ、テレビの中の住人だ」

「うん、間違っていないかもしれないけど、それだと千聖だってそうだし、まるで現実に残してないみたいになってるからね」

出会って早速、雅のツツコミが冴え渡る。本当に、彼女は不思議な雰囲気を持つてる

わね。

「と、まあまずは自己紹介だね。知ってると思うけれど、僕は黒城雅。気軽に雅って呼んで欲しい」

「初めまして。花咲川女子学園一年生の山吹沙綾です。よろしくお願いします」

「同じく、花園たえです。サインは有料ですか？」

「いやいや、僕はそんなケチな人種じゃ無いからね」

沙綾ちゃんとたえちゃん。この二人とは、以前私達が参加したイベント、ガールズバンドパーティーで知り合った。彼女達は、五人組ガールズバンド、Poppin、Partyのメンバーだ。ドラム担当の沙綾ちゃんと、ギター担当のたえちゃん、ここに残り三人を加えたメンバーで活動をしている。

「今日は二人だけなの？」

「それが、他のみんなとはぐれてしまいました・・・」

「手、つなぎたかった・・・」

たえちゃんの言っていることはよくわからないけれども、どうやら他の三人も一緒に参加していたみたいね。この人混みならはぐれてしまってもおかしくないでしょう。

「ありやりや、それは大変だね。連絡は取れないの？」

「それが、さつきから携帯の電波がずっと圏外になってまして・・・」

「あら？本当ね。私も圏外になつてゐるわ」

おそらく、原因はこの人混みでしょう。人が多く集まつた場所では、同じく多くの電波が入り交じり、それが原因で電波障害が生じることがある。今が正にその状態でしょう。

「うーん、困つたね。何か居そうな場所に心当たりとか無いの？」

「全員はわからないですね。一人はたぶんわかります。推測ですけど」

「蔵みたいな所」

「蔵？」

蔵？どうして蔵なのかしら？そもそも、こんな所にそんな場所があるとは思えないけれども。

「あはは、おたえ、それじゃわからないよ。ところで、先輩方はこれからどうされるんですか？」

「そうだね、この人混みに従つて進んでも、たぶん良いポジションを取るのは無理だと思つてたんだよ。どこか隠しスポット的な場所があればいいんだけど……」

「それなら、たぶん今から私達が行く場所がいいと思いますよ。確実とは言えないですけども」

確実とは言えない？それは、さつき推測と言つていたことと関係があるのかしら？確

か、はぐれたメンバーの一人がいるかもしれない場所だと言っていたけれども。そこが隠れたスポットだとしても言うのかしら？

「確実とは言えないって、どういふことかしら？」

「実は私達のメンバーの一人が、誰も知らない絶好のスポットを知ってるみたいなんです。ですが、その場所を聞く前にはぐれてしまいました。それで、その子の趣向からそのスポットを推測してみたんです」

「それが、蔵みたいな所」

「どうしてそれが、蔵に繋がるのかはわからないけれども、理由はわかったよ」

蔵が好きな子って一体誰の事かしら？残りのメンバーにそんな子いたかしら？まあ、それは今は置いておいて、これはまたと無いチャンスかもしれないわね。もしかしたらあるのかもしれない。私達の求めていた場所が。

「そうね、雅どうしようかしら？」

「うん、このままだと人波に流されるだけだろうし、いいんじゃないかな。可能性があるならそれに賭けてみようよ」

「決まりね。沙綾ちゃん、たえちゃん、私達もご一緒していいかしら？」

「ええ、私はいいですよ。有咲には怒られそうですけど」

「どうせなら、皆で怒られよう」

「あはは、よくわからないけど、怒られたくは無いな」

有咲ちゃん？あの子が見つけたスポットということかしら？紹介したら怒られるということとは、あまり人には教えない方が良さそうね。

「それじゃ、行きましようか。こつちです」

そして、私達は沙綾ちゃんとたえちゃんの先導に従って、人混みの中を抜けていった。一体、本当にそんな都合の良いスポットはあるのだろうか。そんな、誰もが思うような疑問を胸の中に秘めながら。

二人に案内されやってきたのは、古びた神社だった。昼間でさえ、あまり誰も近寄らないような神社。沙綾ちゃんが言うには、ここが推測した丸秘スポットらしい。けど、確かその推測って有咲ちゃんの趣向から推測したのよね？その結果がこの寂れた神社って、あの子の趣向って一体どうなっているのかしら？

「たぶん、ここで間違いないと思うんですけど、有咲——！」

「有咲、いないね」

「あはは、やっぱりこの推理は無理があつたかな？」

「ううん、この場所、凄く有咲っぽい。沙綾の推理、間違つてないと思うよ」

「でも、その有咲がないんじゃないかね」

確かに、その場所には有咲ちゃんどころか、人影らしき物は一切見当たらなかった。だけど、ここでは無いとしても、もう今からだと、新たに探している時間は無いでしょう。何故なら……

ドーン！

「あ、始まつちやつたね」

花火大会開始の時間になつてしまつたのだから。だけど、私はその光景を見て驚愕し、そして感嘆してしまつた。あまりにも美しいその光景に。

「す、凄い……」

それは皆の気持ちを代弁した眩きだった。皆が、その光景に釘付けになつていた。漆黒のキャンバスに描かれた、色とりどりの芸術達の虜になつていた。美しい。唯々美しい。心を奪われるとは正に今のような状態を指すのでしょうか。この光景を見て皆が確信

する。正にここが、丸秘スポットだったのだと。

「あ、沙綾、あれ」

「どうしたのおたえ？つて、あれは……」

その時、沙綾ちゃんとたえちゃんが何かに気づいた。二人が見ているポイントに目を向けてみる。そこは、境内の陰だった。そこには、誰かの影が見えていた。暗くて、人物の特定まではできない。だけど、そのシルエットには見覚えがあった。そして、夜空にまた照明が打ち上がった。その明かりで、シルエットにも色が灯る。それは、美しい金髪をツインテールにした少女、紛う事なき市ヶ谷有咲ちゃんだった。

「有咲！」

「良かった、ここで合ってたみたいだね」

「おたえ、沙綾、どうしてここが……つて」

こちらの存在に気がつき、近づいてくる有沙ちゃん。そして、私達の存在に気がつき、驚きで目を見開く。当然でしょう。沙綾ちゃんはあくまで推測でこの場所を導き出しただけ。当然、有咲ちゃんは誰も来ないものだと思っていたでしょう。

そこに、突然やってきた沙綾ちゃんとたえちゃん。二人の登場だけでも想定外なもの。それなのに、さらには部外者とも呼ぶべき私と雅がいるのだから仕方ない。

「私なりに考えてこの場所を探し出したよ。あ、ごめん、ここに来る途中でお二人に会って、良いスポットを探してたみたいだから連れてきちゃった」

「旅は道連れ世は情けだよ、有咲」

「それは意味がちげーだろ．．．って、は、初めまして、市ヶ谷有咲です．．．」

「あ、どうも初めまして。黒城雅です。気軽に雅って呼んで下さい」

「こんばんは、有咲ちゃん」

「こ、こんばんは、白鷺先輩」

その容姿も相まって、大和撫子という表現が非常によく似合う女の子。更に、今は花火大会に合わせて浴衣に身を包んでいる。完全無欠の大和撫子、に普通は見えるでしょう。雅にももしかしたら、そのように見えているのかもしれない。だけど、私は彼女の本性を知っている。いえ、気づいているとすべきかしら？有咲ちゃんも、私が気づいていることに、気づいているでしょう。まあ、その本性を含めても可愛い女の子なんだけれども。むしろ、そちらの方が私は好感を持っていたりする。

「あー！りみりん！ここすつごく花火がよく見えるよ！」

「ま、待つてよ香澄ちゃん！」

そして、更に二人の見学客がやってくる。といっても、その二人も私が、いえ、ここにいる雅以外の全員が知っている人物。Poppin, Partyのボーカル担当、戸山香澄ちゃん。そして、同じくベース担当、牛込りみちゃん。これで、Poppin, Partyの五人が全員揃った。よくあの人混みの中ではぐれて、全員またこんな場所で再会できたものだと感心してしまう。彼女達の間には、何か見えない糸のような物が

括り着いているのかもしれない。

「か、香澄、りみ……」

「あ、有咲！みんなあ！」

「こら、抱きつくな……抱きつかないで下さい……」

「あ、千聖先輩も来てたんですね！こんばんは！それと、あれ？どこかで見たことあるような……」

「あ、香澄ちゃん、この人、黒城雅さんだよ！」

「おー！ホントだ！テレビで見たことある有名人にソックリ！」

「ソックリも何も、本人だ……」

「へー本人なんだ！……で、そんな有名人が何でこんな所に？」

「元々、私と雅で花火を見に来ていたのだけでも、途中で沙綾ちゃんに会って、いいスポットがあるってこの場所を教えてもらったのよ」

ほんとに、あの時沙綾ちゃんに会っていなければ、こんな綺麗に花火を見れなかったかもしれない。もしかしたら、今頃はまだ人波を流されていたかもしれない。そう考えると、本当に有り難い偶然があったものだと思う。

「あ、自己紹介がまだでしたね！私は戸山香澄です！キラキラドキドキしたくて、このメジャーでバンドをやってます！よろしくお願いします！」

「わ、私は牛盛りみです。はあうー、ゆ、有名人さんが目の前にいるなんて、わ、私、緊張して・・・」

「あはは、そんなに気にしなくても大丈夫だよ。僕だって、皆と同じただの高校生だから」

雅はこう言うけど、流石に一般人だと思えつて言うのは無理があると思う。それほどまでに、雅の存在は大きくなってきている。正直、私よりも知名度は高いのでは無いかしら？

「それより香澄、こんな所で立ち話して、花火見なくていいの？」

「は！そうだった！あ！おたえもう特等席に座ってる——ずるい——」

「早い者勝ちだよ、香澄」

「じゃあ私有咲の隣——」

「こら、だからくつつくなく・・・くつつかないで下さい」

「有咲、今更猫被つても無理があると思うけど？」

「・・・うるさい」

「ふふつ、ほんとに皆仲がいいわね。それにしても香澄ちゃんとりみちちゃん、この場所がよくわかったわね」

これは、先ほどから私が抱いていた疑問。香澄ちゃん達は、あのうんざりするほどの

人混みではぐれてしまった。その上、連絡手段も無い状況でどうやってこの場所に辿り着いたのか？

沙綾ちゃん、有咲ちゃんの趣向から見事に推理して、この場所に辿り着いた。けど香澄ちゃんとりみちちゃんは、りみちちゃんは自分の意見を押し寄せて無にし、香澄ちゃんにはそんな推理ができるようには思えない。ならばどうして？

「私は香澄ちゃんに着いてきただけで、何も・・・」

「なんとなく、花火が見えやすそうな場所を目指してたらここに着きました！」

「なんとなく・・・」

呆れたように呟く雅。私も同じ気持ちだった。なんとなく目指してたら辿り着いたって、どんな感覚をしているのかしら？本当にこれは、何か見えざる力に引き寄せられたのとはとつい考えてしまう。そんなことはありえないのだけれども。

「あはは、香澄らしいね。でも、ホントにこの場所凄いね。有咲もよくこんな場所見つけたよね」

「まあな。花火が見えやすそうな場所は無いか適当に探してたら、偶々見つけたんだ」
「有咲、香澄と同じようなこと言ってる」

「・・・うるさいおたえ」

「あはは、本当に皆仲が良いんだね。うん、いいバンドみたいだね。音を聞かなくてもわ

かるよ。君たちの奏でる音色は、きつと希望で溢れてるんだらうってね」

「おー！有咲！私達、プロの人に褒められたよ！」

「あーもう、だから抱きつくくなって！」

「あはは、有咲、素に戻ってるよ」

「それに、ウサギの目みたい我真っ赤になって照れてる」

「はあ？べ、別に照れてねーし！」

「で、でも、私もすごく嬉しいよ。プロの人に褒められるなんて、凄いいことだと思うよ」

「うー、弾きたい弾きたい！今、すっごくギターが弾きたい！」

「弾くな。それにギター持ってきてないだろ」

「じゃあ歌う！」

「歌うな！」

「あはは、香澄、私達今日は花火を見に来たはずなんだけど」

「はっ！そうだった！」

「もうそれ二回目だろうが・・・」

そこで、ようやく夜空に意識を戻す香澄ちゃん。最も、香澄ちゃん以外の皆は話しつつも、視線はずつと、夜空に向けられていたわけだけでも、夜空にはずつと、色とりどり、形様々な芸術品が断続的に描かれている。本当に、言葉を失う美しさね。

「すっごい！ねえねえ、星型の花火は無いのかな？」

「あってもおかしくは無いと思うけどね」

「じゃあウサギ型は？」

「ふふっ、もしかしたらあるかもしれないわね」

「りみりんも、チョココロネ型の花火とか見たいよね？」

「チョココロネ型……」

「なんでりみはうつとりしてるんだ」

皆が思い思いの形を思い浮かべる。近年、花火の造形技術も様々な進化を遂げている。今では、表現できない物は無いんじゃないかと思えるほど。皆が思い浮かべる形の花火も、もしかしたら打ち上がるかもしれない。チョココロネはさすがに無いと思うけれど。

「あ！香澄ちゃんあれ！」

「どしたのりみりん？あ、あれは！」

りみちゃんが指差した先。そこには、夜空を彩る五つの花火が輝いていた。星型の。

「星型！しかも五つ！」

「うん、まさに私達って感じだね」

「ポピパ花火だね」

「凄く、綺麗・・・」

「まあ、こういうのも悪くないよな」

「あ、有咲がデレた」

「デレてねーつての!」

ポピパ型花火。それは本当に、夜空に一等星の如く輝きを放っていた。正直、羨ましかった。まさにそれが、彼女達の絆がもたらした奇跡のように思えて、羨ましかった。果たして、私達も彼女達に負けない程の絆で結ばれているのだろうか? そう思うと、少し不安にもなった。

「あ、千聖、あれ」

「え?」

「ただ、その答えは直に導きだれた。夜空を彩る五つのハートによって。雅が指差す先。そこには確かに、五つのハートが浮かび上がっていた。それだけでは無い。その色はピンク、水色、緑、紫、黄色の五色。これを、奇跡と言わずしてなんと云えばいいのだろうか?」

「まさに、パスパレ花火だね」

「・・・ええ、そうね」

私達の花火。私達の絆が導いた奇跡。皆もこの空を見ているのかしら? どうせなら、

皆とこの奇跡を見たかった。そう思ってしまう。

「綺麗だね」

「ええ、凄く」

そう言つて、雅の肩に頭を預ける。そんな私の頭を、雅は優しく撫でてくれた。それがとても気持ちよく、夢見心地になる。確かに、今は皆はいない。だけど、雅がいてくれるなら、なんでもいいかと思ってしまう。

だけど、私達の絆は、本当にこの奇跡を起こすのに相応しい物になっているのかしら？心配性な私には、ふとそんな疑問が浮かび上がってしまう。浮かび上がっては、そんなことを考えてしまう自分に少し自己嫌悪してしまう。

そもそもの話、そんなことはどうだつていいじゃない。もし方が一相応しくなかったとしても、これから更に絆を深めて、相応しい物にすればいいだけじゃない。なんて考えては、何簡単な疑問で悩んでるんだと自嘲してしまう。

要するに、相応しい物になつていようがなつていなかろうが、どちらにしても更に絆を深めていけばいいだけ。パスパレの未来をこの花火のように明るく彩りたい。私はそう、五つの打上花火に思いを馳せるのだった。

第32演目 Moonlight

その日、僕はとある音楽番組の収録に来ていた。

と言つても、現在はもうそれも終わり、帰途についているところなのだが。夏ももう終わる。それでも、まだ茹だるような暑さは続いていた。既に夕刻を迎えているというのに、まだ熱は冷めそうにない。

「あら、雅。今帰りなの？遅かったわね」

そして、その帰り道で、僕は千聖に出会った。彼女も今日は仕事。どうやら今はその帰りらしい。聞いていた帰宅時刻よりも遅いけど。

「うん、ちよつと収録が長引いちゃってね」

「私もよ。雑誌の取材が長引いちゃつてもうこんな時間だわ。急がないといけないわね」

「そうだね。早く行こう」

今日は、毎年恒例の花火大会がある。僕達はそれに共に参加する約束をしていた。この夏最後の思い出作りだ。だけど、僕らは二人して仕事で長引いてしまい、このままでは打ち上げに間に合わないかもしれない。自然と僕達の足は速くなる。そしてその時

だった。急に千聖の体が傾いたのは。

「あつ」

「おっと、大丈夫？」

倒れそうになった千聖を、慌てて支える。何かに蹴躓いたようには見えなかった。急に糸が切れたかのように倒れた千聖。これは心配になる。

「ごめんなさい。大丈夫よ。少し、疲れてるだけだから」

「本当に大丈夫？無理をしちゃダメだよ？なんなら、今日はゆっくり休んだ方が」

「本当に大丈夫よ。少しふらついただけだから。それよりも、早く行きましょ？花火、始まつちやうわよ」

そう言つて、また早足で歩き始める千聖。確かに、その姿には心配する要素が見当たらないようにも思える。まあ、僕がすっかり彼女のこゝろを見てたら大丈夫かな。いざとなれば、無理にでも彼女を休ませよう。僕は、一抹の不安を胸に抱きながら、彼女の後を着いていくのだった。

花火大会がもうすぐ始まる。僕達は一旦別れ、それぞれ準備をし、再び待ち合わせる手はずになっていた。その待ち合わせ場所に、すでに彼女は来ていた。彼女のイメージカラーとも言える、薄黄色の浴衣に身を包んだ彼女。千聖の容姿も相まって、それは幻想的な美しさを纏っていた。

「お待たせ、千聖」

「来たわね雅。どう？変じゃないかしら？」

「変なわけ無いじゃないか。思わず、その、見とれちゃってたよ」

「ふふっ、ありがとう。雅も素敵だわ。その浴衣、凄く似合ってる」

「うん、ありがとう」

そして、どちらからとも無く、お互い手を繋ぎ、人波の中に駆け込んでいく。予想していたことだけど、すでに多くのお客さんで一般道も溢れかえっていた。やっぱり、出遅れたのは手痛かったかな。

「予想していた通りだけど、凄い人だね」

「そうね、はぐれないように気をつけないといけないわね」

人波に流されながら、ひたすら会場を目指す。その途中に、縁日の出ている通りも見える。だけど、一般道ですらこの人混みなのだ。縁日通りなんて、入ったら帰ってこれる気がしない。

「これは縁日に寄つてゐる場合じゃ無さそうだね」

「そうね、寄つてたら買う前に花火が始まつてしまふわ」

縁日の誘惑を断ち切り、二人で一般道を進む。だけど、このままだといくら進んでも、いいスポットが見つかるようには思えない。

「だけど、このままじゃ花火大会どころじゃないね。花火が綺麗に見えるような所は、きつと既に人がいっぱいだよ」

「そうね、やつぱり出かけるのが遅かつたわね。どこか隠れスポット的な場所があればいいのだけれど……」

仕事だから仕方ない。それは僕達二人ともわかっている。働く者なのだから。だけど、今日ばかりは恨み言も言いたくなる。

「うーん、なんだかこのまま人の波に従つて進んでもダメな気がするな——」

「そうは言つても、逆に進んでも、そんな都合の良いスポットがあるとは思えないわ」

千聖はそう言う。確かに、今の僕の言い方だと、そう捉えても仕方ないだろう。けど、僕が言いたいのはそういうことじゃない。

「ううん、逆走するわけでは無くてさ、どこか人も入らないような脇道の先に実は秘境的丸秘スポットがありましたって感じだね」

「さすがに、そんな都合の良い話があるとは思えないけれども……」

それは僕もわかっている。自分が言っていることが荒唐無稽な話だということは。ただ、それ以外に道が無いようにも思う。まあ、そんな都合の良い話あるわけないんだし、素直にこのまま進むしか無いのだろうか。

「だよー。うーん、このまま波に従って進むしかないのかな」

「そうね、それしか打つ手は無いように思えるけれども・・・あら？」

その時、千聖が何かを見つめる。その先に目を向けてみると、そこには二人の少女が立っていた。見たこの無い少女達だった。どうやら、その子達も千聖と面識があるようで、こちらに軽く手を上げて、近づいてくる。

「こんばんは、沙綾ちゃん、たえちゃん」

「こんばんは、千聖先輩、と、もしかして、隣の人は？」

「あ、テレビの中の住人だ」

「うん、間違っていないかもしれないけど、それだと千聖だってそうだし、まるで現実存在していないみたいになってるからね」

その内の一人が、出会い頭に放った一言に思わず突っ込んでしまった。なんだか、最近ツツコミが板に付いてきた気がする。个性的な人達と接する機会が最近多いせいかな？あまり嬉しくは無いけど。

「と、まあまずは自己紹介だね。知ってると思うけれど、僕は黒城雅。気軽に雅って呼

んで欲しい」

「初めまして。花咲川女子学園一年生の山吹沙綾です。よろしく願います」

「同じく、花園たえです。サインは有料ですか？」

「いやいや、僕はそんなケチな人種じゃ無いからね」

もし、僕にそんなケチなキャラが定着しているんだつたらショックだ。沙綾ちゃんとたえちゃんという少女。その中でも、たえちゃんという子はとてもキャラが強い子のように。面白い子だと思う。沙綾ちゃんはなんだか、あくまで僕の第一印象だけどしっかりしてて、面倒見の良さそうな雰囲気がある。

「今日は二人だけなの？」

「それが、他のみんなとはぐれてしまいました・・・」

「手、つなぎたかった・・・」

たえちゃんの発言はよくわからないけれども、どうやら彼女達は他にも何人かと来ていたのだけれども、そのメンバーとはぐれてしまったらしい。この人混みの中だ。搜索は困難だろう。

「ありやりや、それは大変だね。連絡は取れないの？」

「それが、さつきから携帯の電波がずっと圏外になってまして・・・」

「あら？ 本当ね。私も圏外になっているわ」

言われて、僕も自分の携帯を確認してみる。そこには確かに、圏外と表示されていた。どうやら、集団での電波障害が発生しているらしい。これもこの人混みのせいだろうか。

「うーん、困ったね。何か居そうな場所に心当たりとか無いの？」

「全員はわからないですね。一人はたぶんわかります。推測ですけど」

「蔵みたいな所」

「蔵？」

蔵とは一体どういうことだろうか？どうしてそんな場所が浮かび上がるのかわからない。今日は花火を見に来たんじゃ無かったのかな？

「あはは、おたえ、それじゃわからないよ。ところで、先輩方はこれからどうされるんですか？」

「そうだね、この人混みに従って進んでも、たぶん良いポジションを取るのは無理だと思つてたんだよ。どこか隠しスポット的な場所があればいいんだけど・・・」

「それなら、たぶん今から私達が行く場所がいいと思いますよ。確実とは言えないですけども」

「確実とは言えない？どういうことだろうか？今から行くところといえは、推測で導き出した友人がいる場所じゃないだろうか？あ、推測だから確実じゃ無いのか。だけ

ど、それが、花火とどう関係があるのだろうか？

「确实とは言えないって、どういうことかしら？」

「実は私達のメンバーの一人が、誰も知らない絶好のスポットを知ってるみたいなんです。ですが、その場所を聞く前にはぐれてしまいました。それで、その子の趣向からそのスポットを推測してみたいです」

「それが、蔵みたいな所」

「どうしてそれが、蔵に繋がるのかはわからないけれども、理由はわかったよ」

趣向から導き出したら、蔵に辿り着いたってどういうことだろう？ 全くもって謎なんだけど。だけど、これで僕達は、目の前に一つの選択肢を提示されたことになる。これは、またとない好機だ。

「そうね、雅どうしようかしら？」

「うん、このままだと人波に流されるだけだろうし、いいんじゃないかな。可能性があるならそれに賭けてみようよ」

「決まりね。沙綾ちゃん、たえちゃん、私達もご一緒していいかしら？」

「ええ、私はいいですよ。有咲には怒られそうですけど」

「どうせなら、皆で怒られよう」

「あはは、よくわからないけど、怒られたくは無いな」

さて、後は沙綾ちゃんの推測に賭けるだけ。その推理が正しいといいんだけど。「それじゃ、行きましようか。こつちです」

その沙綾ちゃんの声と共に、皆で移動を開始する。さあ、丁と出るか半と出るか。賽は既に投げられた。後はその答えを待つだけ。僕達は、心を躍らせながら、目的の場所を目指した。

その場所は、寂れた神社だった。昼間でも、誰も近づかないような寂れた神社。趣向から推測したら、こんな場所が導き出されるなんて、一体その友人はどんな趣向をしているんだろう？まあ、僕はこういう雰囲気嫌いじゃ無いけど。音楽のヒントというのは、こういう場所こそ眠つてたりするからね。

「たぶん、ここで間違いないと思うんですけど、有咲——」

「有咲、いないね」

「あはは、やっぱりこの推理は無理があつたかな？」

「ううん、この場所、凄く有咲っぽい。沙綾の推理、間違つてないと思うよ」

「でも、その有咲がないんじゃないかね」

「どうやら、件の友人はこの場所にいないらしい。となると、この場所は外れだったの
だろうか？僕達は賭けに敗れたのだろうか？そう思っていた時だった。」

ドーン！

「あ、始まつちやつたね」

花火大会開始の合図を告げる音が響く。腹の奥底に響くような心地よい音。そして、
その見えた光景に一同が愕然とする。

「す、凄い……」

まさに、絶景だった。生まれてこの方、ここまで綺麗に花火を見たことがあつただろ
うか？圧巻の光景だった。そこで、皆が確信する。ああ、ここが彼女の言っていた場所
なんだと。

「あ、沙綾、あれ」

「どうしたのおたえ？つて、あれは……」

神社の陰だった。たえちゃんが何かを見つけたのは。そこには、人影があつた。周囲
が暗くて、シルエットしか拝むことはできない。だが、今は花火大会の真つ最中だ。明
かりなんて、待ってればすぐに打ち上がる。そして、その打ち上がった明かりが照らし
出したのは、金の髪をツインテールにした少女だった。

「有咲！」

「良かった、ここで合つてたみたいだね」

「おたえ、沙綾、どうしてここが・・・って」

どうやら、彼女が件の友人で間違いないようだ。良かった。どうやら再会は叶つたようだ。最初は驚いていた彼女も、なんだか安心したような表情を見せる。だけど、その表情もすぐに疑問の色に変わる。その目はこちらに向けられていた。だけど、それも当然のことだろう。この場には関係の無い人間までいるのだから。

「私なりに考えてこの場所を探し出したよ。あ、ごめん、ここに来る途中でお二人に会つて、良いスポットを探してみたんだから連れてきちゃつた」

「旅は道連れ世は情けだよ、有咲」

「それは意味がちげーだろ・・・って、は、初めまして、市ヶ谷有咲です・・・」

「あ、どうも初めまして。黒城雅です。気軽に雅つて呼んで下さい」

「こんばんは、有咲ちゃん」

「こ、こんばんは、白鷺先輩」

市ヶ谷有咲という名前の少女。僕の抱いた第一印象としては、大和撫子を絵に描いたような少女。だけど、なんだろう？なんだか、それは違うような気がする。なんとなく違和感のようなものを覚える。

「あー！りみりん！ここすつごく花火がよく見えるよ！」

「ま、待つてよ香澄ちゃん！」

そして、そんなことを考えていると、またもやこのお祭りの参加者がやつてきた。猫耳のような髪型をした、見るからに元気そうな少女と、少し気の弱そうな少女だ。

「か、香澄、りみ……」

「あ、有咲！みんなあ！」

「こら、抱きつくな……抱きつかないで下さい……」

「あ、千聖先輩も来てたんですね！こんばんは！それと、あれ？どこかで見たことあるよ
うな……」

「あ、香澄ちゃん、この人、黒城雅さんだよ！」

「おー！ホントだ！テレビで見たことある有名人にソックリ！」

「ソックリも何も、本人だ……」

「へー本人なんだ！……で、そんな有名人が何でこんな所に？」

「元々、私と雅で花火を見に来ていたのだけれども、途中で沙綾ちゃんに会って、いいスポットがあるつてこの場所を教えてもらったのよ」

なんだか、こんなやり取り前にもあつた気がするな。確かはぐみちゃんと初めて会った時だっけ？そういうえば、はぐみちゃんとこころちゃんには、僕はまだ会ったことが無

いことになってるんだっけ？今度もし会った時、初対面の振りをするように気をつけな
いと。

「あ、自己紹介がまだでしたね！私は戸山香澄です！キラキラドキドキしたくて、このメ
ンバーでバンドをやってます！よろしくお願ひしまーす！」

「わ、私は牛込りみです。はあうー、ゆ、有名人さんが目の前にいるなんて、わ、私、

緊張して……」

「あはは、そんなに気にしなくても大丈夫だよ。僕だって、皆と同じただの高校生だか
ら」

皆と何も変わらない。ただ、音楽ができて少し知名度が高いだけのただの男子高校
生。それが僕。だから、そんなに緊張しなくてもいいのに。それにしても、キラキラド
キドキか。確かにバンドってキラキラしてて、ドキドキするもんね。わかる気がする。

「それより香澄、こんな所で立ち話して、花火見なくていいの？」

「は！そうだった！あ！おたえもう特等席に座ってる——ずるい——」

「早い者勝ちだよ、香澄」

「じゃあ私有咲の隣——！」

「こら、だからくつつくな……くつつかないで下さい」

「有咲、今更猫被つても無理があると思うけど？」

「・・・うるさい」

「ふふつ、ほんとに皆仲がいいわね。それにしても香澄ちゃんとりみちちゃん、この場所がよくわかったわね」

本当に仲が良さそうだ。今まで出会ってきたバンドの中でも指折りかもしれない。これなら、きつと素晴らしいハーモニーを奏でることができだろう。そして、千聖の発した疑問も気になる。本当によくこの場所に辿り着けたものだ。普通はこんな場所に全員が集まるなんてあり得ないと思うけど。

「私は香澄ちゃんに着いてきただけで、何も・・・」

「なんとなく、花火が見えやすそうな場所を目指してたらここに着きました！」

「なんとなくって・・・」

なんとなくって理由だけでこんな場所に辿り着くだろうか？ほんと、どんな嗅覚をしているんだろう。

「あはは、香澄らしいね。でも、ホントにこの場所凄いいね。有咲もよくこんな場所見つけたよね」

「まあな。花火が見えやすそうな場所は無いか適当に探してたら、偶々見つけたんだ」

「有咲、香澄と同じようなこと言ってる」

「・・・うるさいおたえ」

「あはは、本当に皆仲が良いんだね。うん、いいバンドみたいだね。音を聞かなくてもわかるよ。君たちの奏でる音色は、きつと希望で溢れてるんだらうってね」

「おー！有咲！私達、プロの人に褒められたよ！」

「あーもう、だから抱きつくくなって！」

「あはは、有咲、素に戻ってるよ」

「それに、ウサギの目みたいに真っ赤になって照れてる」

「はあ？べ、別に照れてねーし！」

「で、でも、私もすごく嬉しいよ。プロの人に褒められるなんて、凄いことだと思うよ」

「うー、弾きたい弾きたい！今、すっごくギターが弾きたい！」

「弾くな。それにギター持ってきてないだろ」

「じゃあ歌う！」

「歌うな！」

「あはは、香澄、私達今日は花火を見に来たはずなんだけど」

「はっ！そうだった！」

「もうそれ二回目だろうが・・・」

そして、漸く全員の意識が明るい夜空に向く。今もなお、その空には断続的に芸術品達が明滅していつている。色も形も様々な、芸術品達が。

「すっごい！ねえねえ、星型の花火は無いのかな？」

「あってもおかしくは無いと思うけどね」

「じゃあウサギ型は？」

「ふふつ、もしかしたらあるかもしれないわね」

「りみりんも、チョコココロネ型の花火とか見たいよね？」

「チョコココロネ型・・・」

「なんでりみはうつとりしてるんだ」

星型、ウサギ型、チョコココロネ型。様々な形を思い描く皆。楽しそうで良いことだ。僕だったらどんな形がいいかな？やっぱりギター型かな？うん、僕らしくていいかもしれない。

「あ！香澄ちゃんあれ！」

「どしたのりみりん？あ、あれは！」

りみちゃんが指差した先。そこには、夜空に浮かび上がった五つの星が存在した。夜空に輝く、五つの星が。

「星型！しかも五つ！」

「うん、まさに私達って感じだね」

「ポピパ花火だね」

「凄く、綺麗・・・」

「まあ、こういうのも悪くないよな」

「あ、有咲がデレた」

「デレてねーつての!」

楽しげにはしゃぐ皆。だけど、僕の隣で花火を見ている千聖だけは、どこか浮かない顔をしていた。一体どうしたんだろう? やっぱり、体調が悪いのだろうか? そんな心配をしていたとき、僕の視界に、また五つの煌めきが飛び込んできた。

「あ、千聖、あれ」

「え?」

夜空に浮かびあがる五つのハート。それもご丁寧に、ピンク、水色、緑、紫、黄色の五色。正に奇跡的光景。正にパスパレ的光景だった。

「まさに、パスパレ花火だね」

「・・・ええ、そうね」

そう呟く、千聖の横顔はとても美しかった。先ほどまで帯びていた憂いも無くなり、ただ純粹に花火に見とれている横顔。僕は、そんな千聖に見とれていた。

「綺麗だね」

「ええ、凄く」

そう言つて、僕の肩に頭を預けてくる千聖。僕はその千聖の頭を、軽く撫でてあげる。綺麗だね。そう呟いた僕。だけど、果たしてそれは、何を対象に呟いた言葉だったのだろうか？正直、自分でもよくわかつていなかった。夜空に輝くあの美しき花々に大してだったのか？それとも・・・

「千聖？」

そこで、僕は少し違和感を覚えた。隣の千聖が全く身動きをしなくなつたのだ。心配になり、隣に顔を向けてみる。するとそこには、静かに寝息を立てて、僕の肩を枕にして眠る千聖がいた。

「ありや、寝ちやつたか」

まあ、それも仕方ないだろう。千聖は疲れている。今日、倒れそうになつていたほどだ。彼女は頑張りすぎだと思う。僕の世話もしてくれていて、それでいて、パスパレの活動に、舞台活動等々、さすがに頑張りすぎだと思う。今日はこのまま寝させてあげよう。と考えていると、周囲からの視線に僕は気がついた。目を向けてみると、ポピパの皆の視線が僕達に集まつていた。

「どうしたの皆？」

「いえ、なんと言いますか、その」

「出会つてそんなに間は無いですけど、千聖先輩のこんなに安心しきつた顔初めて見ま

した！」

香澄ちゃんの言葉に合点がいった。確かに、千聖は普段から気を張り詰めていることが多い。私が皆を支えないと。そう考えている節が強い。

「相当、雅先輩に心を許してゐるんですね」

「早く結婚した方がいいのでは？」

「いや、おたえそれは気が早すぎるだろ」

「でも、なんだか羨ましいな」

「わかるよりみりん！なんだか、今の千聖先輩、凄く幸せそうー！」

幸せそう、か。本当に千聖が今に幸せを感じてくれてるなら、僕は嬉しい。言うまでもなく、僕は幸せだ。だけど、果たして本当に千聖は今に幸せを感じてくれてるのか？そう感じてしまうことが時折ある。と、こうしてる場合じゃ無いね。花火大会はまだ終わっていない。だけど、千聖をこのままにしておくわけにはいかない。僕は、千聖を起こさないように、慎重に肩から千聖の頭を降ろし、彼女を背中に負ぶった。

「それじゃ、僕達は先に帰るけど、皆は花火大会楽しんでいてね」

「はい！ありがとうございますー！」

「お幸せに」

「千聖先輩にもよろしく伝えて下さい」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます。あ、この場所は秘密にしていただけ」と

「あはは、わかつてるよ。今日はありがとうございます。それじゃバイバイ」

そう言つて僕は、千聖と共に、夜道に足を向けた。その間も、夜空には煌めく花がもたらす人工的な明かりと、僕達を見守つてくれているかのような、美しい月からもたらされる、天然的な明かりが道を照らし出してくれている。

「うーん、雅……」

背中から、そう呟く声が聞こえてくる。一体どんな夢を見ているんだろう？少し気になつてしまう。その寝顔は、さすがに今の体勢だと見ることが叶わない。

「千聖、僕は幸せだよ。凄く」

その呟きに帰つてくる言葉は無い。千聖、君は幸せに感じてくれているのだろうか？なんて、ちよつとナイーブになりすぎかもしれない。そんなこと今はどうだつていいじゃないか。もし、今に幸せを感じてくれないのだとすれば、これから先、忘れられないような幸福を与えてあげればいいだけ。その方法までは流石に思いつかないけど。だけど、今はそれでいいじゃないか。考えることは、いつだつてできる。きつと僕らの未来は、この夜空のように明るいはずだ。そう考えて、僕は明るく照らされた夜道を、千聖と一緒に歩んだ。月明かりが祝福する、未来へと繋がる道を。

第33演目 All You Need Is Lov

e

「千聖、私と共に演じてはくれないだろうか？」

そんな話を持ちかけられたのは、季節が秋口に差し掛かったとある放課後のことだった。それは仕事のために、事務所に向かう際の出来事だった。突然の着信。それだけなら何も大した問題では無い。おかしいこともない。

ただ私は、その画面に映し出された発信者の名前を見て思わず顔を歪めてしまった。そこには、ハッキリと、一文字とて間違ひなく、瀬田薫と表示されていた。正直、あまり話したい相手では無かった。別に彼女のことを嫌いなわけでは無い。むしろ、幼なじみとして好感も持つている。だけど、唯々、面倒くさい。そんな相手だった。

だけど、彼女から着信が来るのは非常に珍しいことだった。もしかしたら、何か大切な緊急の用件かもしれない。そう思うと、出ないわけにはいかない。私は、渋々ながらその着信に応えることにした。

「もっもっ。」

「やあ、魅惑のお姫様。今日の「ご」機嫌はいかがかな？」

「切ってもいいかしら?」

思わず、反射的に電話を切りそうになってしまふ。そんな私はきつと悪くは無いと思ふ。

「あはは、相変わらず手厳しいお姫様だね。だが、君の時間を少し私に恵んでくれないだろうか?」

「はあ、それで私に何の用かしら?」

「率直に言おう。千聖、私と共に演じてはくれないだろうか?」

薫はそう言う。つまり、私と共に舞台に立ちたいと言うことだろう。要するに、これは共演のお誘いということ。

「えっと、どういうことかしら?」

「なあに、君もわかっているのだろうか? 言い換えるならば、私と舞台の上で踊って欲しいということさ」

「そういうことを聞いている訳ではなくて、どうして私を誘うのかしら? ハッキリ言つて、私とあなたでは立つ舞台が違う。決して、同じ壇上に上がることはないのよ」

これは、私の正直な気持ちだった。薫と私では、立つ舞台が異なる。薫が演じるのは大衆演劇。私が演じるのはメディア演劇。もちろん、私だって大衆演劇に出演することはある。以前の、宮川先生の舞台が良い例だろう。

だけど、私と薫が同じ舞台に立つことはない。そもそも、立っている舞台ステージが違う。薫は、才能と実力は申し分なくても、立つのはあくまで学生レベルの舞台。対する私は、銀幕やドラマにも数多く出演している、ある程度名の売れた女優。そんな私が彼女の出る学生レベルの舞台上がれば、それこそ大混乱になるに決まっている。

「今度私達が学園祭でする演目が、お姫様に似合うと思つてね。是非、君と演じてみたくなつたのさ」

「はあ、つまりは只の思いつきということね。話にならないわ。これから仕事なの。切るわよ」

「あ、千聖、少し待って」

その薫の言葉を最後まで聞かず、私は通話終了の文字に指を当てた。そんな彼女の思いつきに巻き込まれたくはない。私は、その後の仕事もそつなく熟し、雅の家に向かうのだった。その頃には、薫との通話の内容など完全に忘れ去っていたことを追記しておく。

次の日のことだった。その日も私は、放課後事務所に向かっていた。最近では、パスパレとしての仕事も増えてきていた。この間の宮川先生の舞台。その大成功がバンド活動にも影響を与えていた。

宮川先生の舞台を切欠に、私の知名度は更にながっていった。あの演技力が評価され、私への出演依頼も増加した。それに引つ張られる形で、パスパレの知名度も上がることとなった。あの白鷺千聖が所属しているバンド。それだけで興味を持った人達が、私達の演奏を聴いて、その本格的な演奏に惹かれた訳だ。

そして、今日も私はパスパレとして雑誌の取材を受けるために事務所に向かっていた。そんな私のスマホに、また今日も着信がかかってくる。そして、そのディスプレイに表示されていた名前は、昨日と同じ彼女の名前だった。

「はあ、もしもし」

「やあ、お姫様。昨日ぶりだね。その後、ご機嫌はいかがかな?」

「ええ、とても機嫌良く過ごせていたわ。あなたの声を聞くまではね」

「ははっ、これはまた手厳しいね」

「それで、何か用かしら? 共演のお誘いなら、昨日も断つたはずよ?」

「なあに、私はその程度ではめげないさ。かのシェイクスピアも言っている。成し遂げんとした志をただ一回の敗北によって捨ててはいけけない、と。つまり、そういうことさ」

「はあ、まだ諦めていないというわけね。本当に、昔からあなたは一度決めたことに関しては、徹底しているんだから。しつこいにも程があるわ。まあ、きつとそれが長所でもあるのね。嫌いじゃ無いわ。そういうの」

「千聖、それじゃ」

「ええ、謹んでお断りするわ」

「え？千聖、お断りって」

そして私は、その薫の言葉を最後まで聞かずに通話を終了した。確かに彼女の勧誘はしつこい。だからと言って、ここで折れるわけにはいかない。折れてしまえば、仕事にも支障が出る可能性だつてある。それだけはダメ。仕事は大事。決して蔑ろないがしにすることはできない。最も、優先順位は雅の方が高いけれども。

だけど、それからも薫の勧誘はしつこく続くことになる。来る日も来る日も、彼女からの勧誘は続いた。まるで、決して諦めないという彼女の意思を体現するかのよう。

私は、その日花音とショッピングに訪れていた。今日は仕事も学校も休み。ノンビリ

とした休日を親友と楽しく過ごしていた。本当は雅も誘っていたのだけれども、彼は生憎と仕事が入っていたためここにはいない。

そして、その時は帰り際に訪れた。

「やあ千聖。こんな所で会うなんてまるで運命だね。ああ、私達はやはり天命の元に会う運命だったんだ。なんて儂い・・・」

「さあ、花音行きましようか」

「え? いいの?」

まるで待ち伏せしていたかのように薫が突然現れた。いえ、彼女はおそらく本当に待ち伏せていたのでしょう。ということは、私の今日の予定を把握していたということ。おそらく、情報を流した犯人は私の隣にいる彼女でしょう。

「花音、あなた薫に今日のこと言ったのね」

「ああは、聞かれたからつい。千聖ちゃんごめんね?」

「はあ、まあいいわ。それで薫、大体わかるけれども、用件は何かしら?」

「なあに、お姫様の察してる通りさ。千聖、私は君と演じたい。私と高みに登ってはくれないだろうか?」

「ええ、いいわよ」

「そうか、だが私は決して諦めない。君がいいと言うまで・・・千聖、今なんて?」

「あら？聞こえなかったかしら？いいわよ、って言ったのよ」

正直、私は薫の本気度を甘く見ていたかもしれない。最初の電話から数週間。その間薫は毎日飽きもせず電話をかけてきた。何度断つても諦めもせず、電話をかけてきた。そして今日、私に直接会いにきた。勧誘するためだけに。

そこまでするのであれば、許可することも吝かやぶよでは無い。電話だけでの勧誘では、私はきつと動かなかつた。それが今日、こうして直接勧誘に訪れ誠意を見せてきた。そこまでされては、断り続けるのも申し訳なくなってくる。

「千聖、本当かい？」

「ええ、ただし今回だけよ。それに、私も暇では無いの。練習も最低限に留めるわ。それでもいいかしら？」

「ああ、私と千聖なら、短い時間で最高級の完成度に達することができるだろう。問題ないわ」

「それともう一つ条件があるわ。今私が計画していることにも協力してもらおうわ。花音もね」

「ふええ？私も？」

「もちろんよ。薫に今日のことを教えたのだから、それなりの報いをうけてもらおうわよ。安心して。きつとこの計画は楽しくなるし、いい経験になると思うわ」

「うう、ごめんなさい……」

「もちろん、私も問題ない。それで、計画というのはなんだい？」

「ええ、実は……」

その後、私は二人に計画の詳細を語っていく。とはいっても、この計画を実行に移すのはまだ先のこと。今は関係無い。今は、目の前の舞台に集中しよう。文化祭の舞台とはいえ、演劇に妥協はしたくない。限られた時間で最高の舞台に仕上げてみせる。私は、自分の計画を語り終えた後、薫から舞台の詳細を聞いて、役に入りこんでいくのだった。

そして、演劇部との初顔合わせの日となった。その日、私は学校が終わるなり急ぎ羽女に向かった。本番までに、演劇部の皆と合同練習ができる日は限られている。その数少ないチャンスが無駄にはできない。一分一秒を惜しむかのように、私は足を進めた。「こんにちは。今日はよろしくお願います」

演劇部の扉を開けると、そこには薫と麻弥ちゃん、そして多くの生徒が既に待機して

いた。おそらく、ここにいる人達が演劇部の全メンバー、つまり私と共に舞台を作っていく人達でしょう。

「千聖さん！お待ちしてました！今日からよろしくお願いしますね！」

「麻弥ちゃん、こちらこそよろしくね」

「千聖、君とこうしてまた同じ舞台に立てるなんて、夢みたいだよ。ああ、なんて偉い……」

「私は、できることなら遠慮したかったのだけれどもね」

その後も、部の人達と軽く挨拶を行い、さつそく読み合わせを行う。私はこの日のために、ありとあらゆるロミオとジュリエットを読み漁り、ジュリエットとしての私をイメージしてきた。その甲斐あって、初めてのセリフ合わせは及第点には到達できていたと思う。だけど、完成度としてはまだまだ。到底白鷺千聖として人前で披露できるほどの完成度には至っていない。

対する薫のロミオは、さすがといった完成度だった。彼女は紛れもなく天才だ。こと演技に関する才能は私よりも上。正直、嫉妬すら覚えてしまう。彼女は天才だ。一度台本に目を通せば、その瞬間に役に入ることができる。私にはそんなことできない。

私は、ありとあらゆる情報をかき集め、その登場人物の生い立ちから全てを完璧に把握して、その上でその人物として生きる私をイメージして役に入る。薫と違い、非常に

時間と労力がかかる。何度、彼女みたいな才能があれば、と彼女のことを妬んだことだろう。両の指ではきつと足りないでしょう。

「そろそろ休憩にしませんか？みなさんも疲れているでしょう」

「そうね。私も少し疲れたわ」

「では、そうするとしよう。私は、もう少しだけ個人練習をしてくるよ」

そう言つて、薫は部屋の隅へと向かった。本当に演技熱心。普段の彼女からは想像できないけれども、彼女は演劇に関しては純粹なまでに真面目で努力家だ。普段からは本当に想像もできないけれども。

「千聖さんお疲れ様です」

「麻弥ちゃんお疲れ様。それと、薫の思いつきに付き合わせてしまつてごめんなさい」

「思いつき？」

「ええ、私を舞台に出演させるつていう薫の思いつきに」

「ああ、そのことですか。それなら大丈夫ですよ。別に薫さんの思いつきでは無いですから」

「あら？違うの？」

「はい。実は、今回の公演は演劇部創部十周年の記念公演でして、皆の総意で、客演を誰か招くことが決まっていたんです。それで、実力、話題性にも富み、部内に知り合いも

いる千聖さんに白羽の矢が立ったという訳です」

なるほど。私はてつきり、今回の件が薫の思いつきだと思っていた。だけど、それはどうやら私の思い込みだったらしい。それなら、もつと早く引き受けていても良かったかもしれない。まあ、何も説明しなかった薫が悪いけれども。

「それと、今回の演目を決めたのは薫さんなんですが、その選考基準が千聖さんに相応しい、似合う役だったんですよ」

「私に似合う役？」

「はい。部長からの指示で、千聖さんと面識のあるジブンと薫さんが選ぶことになったのですが、実はほとんど薫さん一人で決めちゃったんですね。ジュリエットの奔放な所が千聖さんに似合うと言って」

「私が、奔放？」

薫の自己評価だろうか？思わずそう思ってしまった。自分で言うのもおかしいかもしれないけれど、奔放なんて私から最も遠い言葉な気がする。

「ええ、ジブンはそうは思わなかったんですけれども、やっぱり幼なじみにしかわからないう一面つて言うのがあるんですかね。なんだかそういうの羨ましいですね！」

「幼なじみにしかわからない一面……」

そういうえば、昔の私は好奇心旺盛な腕白娘な一面があつたかもしれない。よく、薫や

雅を連れ回して、迷惑をかけていた気もする。その頃の私を知っていれば、確かに奔放という言葉が出てくるかもしれない。もう、忘れてしまっていたほど昔のことだけれども。

そのことを思い出して、ふと私は考える。私は、薫が昔に比べて変わってしまったと感じていた。だけど、変わってしまったのは私も一緒なのではないだろうか？ 私は、薫が瀬田薫という人物を演じているように感じていた。だけど、その一方で私も白鷺千聖という人物を演じていたのではないだろうか？

「さて、そろそろ休憩も終わりにしましょうか」

麻弥ちゃんのその声で、不意に現実に戻される。我ながら、おかしなことを思考していたと思う。そんなことは結局の所、どうでもいいこと。必要ならば、私はなんだって演じる。例えばそれが、白鷺千聖という役だったとしても。それが手段として必要ならば、私は迷わず演じよう。それが、白鷺千聖という女優なのだから。

それからさらに数日が過ぎた。あれから、私の演技力も洗練されて、段々と納得の出

来る完成度に近づいてきている。

「ふう」

「千聖さん、今日もお疲れ様です」

「麻弥ちゃん、ありがとう。段々と理想に近づいてきた気がするわ」

「やつとですか？今でも十分すぎるほどの完成度に見えるのですが、さすが千聖さんですわね」

「ええ、この程度の演技で妥協してられないもの。まだまだ上を目指すわ」

「さすがだね千聖。私も負けてられないな。どうだい？今日は久々に共に帰らないかい？」

「薫と？」

それは突然の誘いだった。薫からの誘い。普段の私ならば、間違いなく断っていただろう。だけど、今の私は違った。

「そうね。たまにはいいかもしれないわね」

私はその誘いに乗ってみることにした。何か、楽しくなりそうな予感がする。その予感に従い、薫の横に並び歩くのだった。

「しかし、以外だね。千聖が私の誘いに乗ってくれるなんて」

「ええ、私もそう思うわ」

「ふっ、これは丁重にエスコートしないといけないな」

薫との帰路は、至って普通のものであった。ただ、薫の話に適当に相槌を打つだけの帰路。これが普通と言えるのかわからないけれども、思っていたよりも普通の帰路だった。

「それで、急に私を誘ったりして何を考えているの？」

「なあに、たまには大切な幼なじみとの親睦を深めようとしたまでさ」

「そう。説明する気は無いのね」

「ふっ、私の考えはどうやらお姫様には筒抜けみたいだね。ああ、私の想いも見透かされているわけだ。なんて偉い……」

「とぼけないで。それで、目的は何？」

何か目的があつて私に声をかけてきていたのは最初からわかっていた。それでも無い限り、薫が態々私を帰りに誘うことは無いでしょう。いつも練習時間が過ぎても自主練をするために残っている薫が、態々私と帰る為だけに定刻で練習を切り上げるとは思

えない。

「そうだな。では、言わせて頂こう。千聖、少し思い詰めすぎではないかい？」

「思い詰めすぎ？」

「ああ、そうさ。今日の君の演技は、何やら思い詰めているように感じてね。何かに囚われたかのように、鬼気迫る演技だった。何が千聖、君をそこまでさせる？」

「そんなことね。それは、私が白鷺千聖だからよ。白鷺千聖に妥協は許されない。私は、演技で妥協するわけにはいかないのよ。彼に相応しい女でいるために」

そう、私に妥協は許されない。私は雅に相応しい女でないといけない。雅は、将来世界一の音楽家になる。だったら、私はせめて日本一の女優にでもならないと釣り合いが取れない。そのためにも、たかが文化祭の劇でも妥協は許されない。舞台の上では、常に全力の白鷺千聖で取り組んでみせる。

「なるほど、君の言い分はよくわかったよ。だけど、さすがに力が入りすぎだ。そんな演技だと、君の目指す高みには行けない。今の君は、ジュリエットを演じているように見える。力みすぎて、まるでジュリエットを演じる白鷺千聖を演じているかのようだ。それじゃ、君の目指す高みには辿り着けない」

「私が、ジュリエットを演じていない？」

そう考えたことは無かった。確かに、言われてみればそうだったかもしれない。私は

ジュリエットのことなんてすっかり忘れていたかもしれない。私は、ジュリエットを無視して、いかに上手く演じることができるかばかり考えていたかもしれない。ジュリエットを無視した先に、そんなもの有るわけ無いのに。

最初は確かにジュリエットを意識していた。そのために、ありとあらゆるロミオとジュリエットを読み漁ってきたのだから間違いない。いつからだろう。そのことを忘れて、口先だけで上手く演じようとしていたのは。そんなことしても、上手くなるわけ無いと言うのに。

「確かに、そうかもしれないわね」

「わかつてくれたかい？」

「ええ。あなたに言われるのは悔しいけれども、何も間違ったことを言っていないのだから仕方ないわね」

「ふつ、これで漸くジュリエットを演じてくれそうかな？」

「ええ、そうね。認めるわ。私は今まであなたの言う通り、ジュリエットを演じる白鷺千聖を演じていた。白鷺千聖としての重圧が私にそんなバカな演技をさせていたのね」

「だが、普通は見抜けないほどに君の演技は完璧だったよ。現に、麻弥は君の演技を褒めていただろう」

「ええ、そうね。それだけが救いだわ。こんなことを皆に知られたら恥ずかしすぎるも

の。だけど、一つだけ言わせてくれるかしら？」

「なんだい？」

「あなたも、瀬田薫を演じるのをやめたら？」

「・・・え？」

薫は瀬田薫という人物を演じている。昔の薫を知る私だからこそわかる。今の薫は、作られた人物。架空の存在。本当の薫は、こんな人物では無い。

「私の知る瀬田薫は、あなたのような人では無い」

「な、何を言ってるんだい？ 千聖。私は私だよ」

「ええ、そうね。あなたも瀬田薫かもしれないわね。だけど、少なくとも私の知る瀬田薫では無い。私の知る瀬田薫は、お化けと高いところが苦手で、少し物音がするだけで私や雅の後ろに隠れていた臆病な子だった。そんな瀬田薫はどこにいったのかしら。ねえ？ かおちゃん？」

「っ！」

かおちゃん。それは瀬田薫に対する昔の呼び方。今ではもう呼ばなくなった呼び方。私達、幼なじみだけが共有している懐かしい呼び方。果たして、最後にこの名を呼んだのはいつだっただろうか？ 全く思い出せない。

「・・・てよ」

「え？」

薫が何かを呟く。だけど、その呟きは恐ろしく小さくて、私の耳には届かない。そして、再度薫の声が聞こえ、その内容を理解する。

「その呼び方は、恥ずかしいからやめてよ。ちーちゃん……」

「ぷっ。ふ、ふふ、ふふふふ」

「もう、笑わないでよ……」

「だって、ふふっ、だって……」

「もう。さすがに怒るよ」

「ご、ごめんさい。だけど、そっちの方があなたらしいわよ。かおちゃん」

「だからその呼び方はやめてよ……」

なんだか、懐かしい気分だった。まるで、三人仲良く遊んでいたあの頃に戻ったかのような、懐かしい気分だった。本当に、懐かしい。そして、その後も私達は仲良く二人で帰路を歩いた。本番はもう近い。だけど、きつと私達なら大丈夫でしょう。私にはすでに大成功するという確信があつた。根拠の無い確信が。

そして、ついにその時はやってきた。文化祭本番。私達の舞台の時間が。

「いよいよ本番ですね！ジブンは裏方からお二人を支えますから、頑張ってきて下さいね！では、ジブンはこれから大事な仕事がありますので！」

そう言つて早足で駆けていく麻弥ちゃん。大事な仕事。おそらく機材などの最終チェックでしょう。麻弥ちゃんは、照明などの裏方仕事を引き受けてくれている。その仕事の徹底っぷりは凄い。照射角どころか、タイミングを秒単位、役者の歩数単位で調整しているほど。その仕事っぷりには本当に驚かされる。

「さて、では私達も最終チェックといこうか。千聖、コンディションはどうだい？」

「ええ、お陰様で万全よ」

「そうか、それは良かった」

「ただいまより、演劇部による特別講演、ロミオとジュリエットを開演いたします」

進行役の子の声が聞こえる。いよいよ始まる。何度経験しても、この開演前の緊張感は無くなる事が無い。だけど、嫌いでは無い。心地よい緊張感が私を包む。

「そうだ千聖。実は、今回の公演にはサブテーマを設けているんだ」

「サブテーマ？」

「ああ。それは、愛こそ全て、さ」

愛こそ全て？確かにロミオとジュリエットには似合いそうなサブテーマかもしれない。だけど、態々サブテーマにまでして強調する意味はあるのだろうか？正直わからな

い。「さて、では行くでしょう。エスコートするよ。お姫様」

「ええ、よろしくお願いするわね。王子様」

そして、公演は幕を開けた。予想していたことだけれど、公演は順調に進んでいった。順調すぎるぐらいに。序盤、中盤、何一つミスも無く、終盤まで物語は進んでいく。そして、物語は終盤も終盤。ロミオの最後のシーンに入っていた。

祭壇の上で横になる私と、それを見つめるロミオ。私は現在仮死状態に陥っている。ここのシナリオは、この劇でのオリジナル要素になっていた。本来ならば、ジュリエットの墓の前でロミオが自殺をするシーン。

だけど、私は今祭壇の上で寝ていた。これは、薫の発案。墓の前でロミオ一人が自殺するよりも、ジュリエットが見える位置にいる状態の方がお客さんにもより一層悲劇のイメージを持ってもらえるはずという発案。なるほど、確かに一理ある。

そして、ロミオが小瓶を取り出す。あの中身は毒薬。あれを飲んでロミオは自殺する。だけど、ジュリエットはまだ死んでいない。今はまだ仮死状態になっているだけ。蘇ったジュリエットは、ロミオの死を知り、悲しみに暮れてロミオの短剣を使い後追

自殺をする。これがこの先の物語。そして、今ロミオが毒薬を飲む。

「ま、待て！」

はずだった。その行為は乱入者による声で邪魔されてしまった。こんなシナリオ、私にはしらない。予期せぬ事態？ けどなんでだろう。凄く聞いたことある声だった気がする。私は、薄らと目を開けて、声が聞こえた方向を確認してみた。

「誰だ！」

「ぼ、僕は怪盗ハロハッピー！ そ、その娘は頂く！」

そこにいたのは、謎の仮面を被った人物だった。聞き間違いでも見間違いでも無ければ、間違いなくあれは彼。一体何をしてるのよ。物語は最終局面へと突入していく。

第34演目 ゆずれない願い

新学期が始まり、数週間が経過した。

暦の上では既に秋。だが、気が滅入るような暑さはまだ終わりそうに無かった。吹き出した汗を拭いつつ、玄関の戸を開ける。

わかつていたことだが、その鍵は開いた状態になっていた。別に僕が家を出るときに閉め忘れたわけではない。

そもそも、僕が仕事に行く時間は、まだ家に残っていた人物がいた。僕より後に家を出た人物が。そして、今鍵が開けた状態になっている原因もその人物。

といっても、別に問題があるわけではない。もちろん、家に誰もいないのであれば、大問題だろう。不用心にも程がある。誰も居ないのであれば。

その人物は、中にいる。僕より先に帰宅している。それ以外に、鍵が開いている道理が存在しないのだから。

そして、予想通りその人物、千聖はリビングにいた。いつもならば、僕が帰ったことを察すると、玄関まで出迎えに来てくれる彼女。だが今日は、僕がリビングに入っても気づく気配が無かった。夢中になって何かを読んでいる。相当集中しているようだ。

すぐ傍に近寄っても全く気づく気配が無い。

「千聖？」

「あら、雅帰っていたのね。ごめんなさい。気づかなかったわ」

声をかけると、ようやく千聖は僕の存在に気がついたらしい。そして、彼女が読んでいた本を閉じる。そうして表紙が露わになったことで、そのタイトルを見ることが出来た。

「ロミオとジュリエット？」

「ええ。今度舞台上でジュリエット役を演じることになったのよ」

ロミオとジュリエット。それはかのシェイクスピアが手がけた戯曲だ。古今東西様々なアレンジを加えられるほどに、幅広く世界中に浸透している。そして千聖が演じるジュリエット。それはタイトルに出てくるほどに重要な人物。物語のヒロインだ。要するに、主演女優というわけだ。

「ヘージュリエット役を！すごいじゃないか！また高名な先生の舞台？」

「違うわよ。羽女の文化祭で演じるのよ」

「羽女の文化祭？」

かなり意外な舞台だった。羽女の文化祭。千聖が通っているのは花女だ。どうして、その千聖が羽女という、他校の文化祭で舞台上がるのだろうか？全くの謎だ。

「薫に依頼されたのよ。私と共に演じて欲しい、ですって」

「薫に？」

薫は現在羽女に通っている。僕の記憶が正しければ、演劇部に属していたはずだ。まあ、あの薫の事だから間違いないだろうけど。そんな薫に誘われたのだとしたら、納得ができる。だけど、それでも理解できないことはある。

「依頼されて許可したんだね。いつもなら直ぐに断りそうなのに」

そう、千聖が引き受けたことが理解できない。別に、許可したことを悪いと言っているわけではない。ただ、いつもの千聖なら断りそうなものなのにと思っただけだ。

「しつこく誘われたのよ。ここ数週間毎日ね。いつもは電話だったのだけれども、今日出先にまで直接勧誘に来たものだから、その誠意に免じて引き受けてあげたわ」

なるほど。それならば納得もいく。千聖は、基本自分に利が無いことには無関心だ。冷たいと思う人もいるかもしれないが、僕は現実主義な彼女らしくていいと思う。そんな彼女だけれども、筋を通す相手に対しては自分に利が無くても、それなりの見返りを返すこともしばしばある。

今回が良い例だろう。正直、文化祭レベルの舞台に上がるのは彼女にとって時間の無駄でしかないと言えるだろう。冷たい言い方になってしまいが、これが事実なのだ。女優白鷺千聖は、今花開いた。正直、早くもつと次元の高い舞台に上がってみたいと千聖

自身思っていることだろう。

今の彼女なら、それが現実的な選択だ。だが、彼女は文化祭という小さな舞台を選んだ。何故か？それは、薫が筋を通し、誠意を見せたからだ。薫は、基本電話で勧誘してきた。毎日しつこく勧誘していたとはいえ、それだけで千聖の心が動くことは決して無かつただろう。

だが、薫はそれだけで無く、千聖の前に直接姿を見せた。その行動が、千聖の心を動かした。ある意味では、薫の粘り勝ちとも言えるだろう。タイミングが良かったとも言える。おそらく、最初の勧誘から姿を見せていたとしても、千聖は動かなかつただろうから。

「なるほど。それでロミオとジュリエットを読んでたわけだ」

「ええ。時間が無いから、少しでも多く知識を頭に詰め込めるようにね」

彼女は役を演じる際、いつも知識を蓄える所から始める。少しでも多くの役、物語に對する知識を得て、それを演技に応用していくのだ。だからこそ、彼女はそこから本番の日まで、毎日飽きもせずロミオとジュリエットを読み漁っていた。少しでもジュリエットに近づけるために。毎日。毎日。

そして、文化祭当日を迎えた。

僕はこの日、一般客として文化祭見物に来ていた。有り難いことに、今日は一日オフ。仕事のことを気にせずのんびり過ごすことができる。そんな僕は今日、珍しく伊達メガネをかけていた。もちろん、変装のためだ。

といつても、実は僕は街中で黒城雅だと気づかれることは少ない。顔つきに特徴が無いうえに、千聖が言うには、ステージに立っている僕と普段の僕とは、放っているオーラが全く違うため、気づくのが難しいらしい。気づかれる場合も、大抵この低い身長が原因になっている。泣きたい。

といつても、もちろん例外はある。実際に会話する場合だ。以前の海の家でも、僕からお客さんに話しかけたために、黒城雅だと気づかれてしまった。さすがに、真正面から顔を合わせて話すと、わかるらしい。

そして今日僕が訪れているのは文化祭。お祭りだ。もちろん、いろんなお店に寄るつもりだ。それだと、さすがに僕のことバレてしまうかもしれない。そうならないための変装だ。因みに、今日は僕一人できている。千聖は、舞台の打ち合わせ等で公演が終わるまで自由にできないらしい。

「占いの館やっています。よろしくお願ひします」

そして、まずどこから行こうかと辺りを探索していると、いきなり知り合いを発見した。どうやら彼女は、自クラスのチラシ配りをしているらしい。

「お疲れ様友希那」

「・・・雅じゃない。一瞬誰だかわからなかったわ」

彼女、湊友希那のクラスはどうやら占いをしているらしい。占いか。千聖はあまりそういうった類いのことが好きでは無いが、僕は割とこういつた類いのものが好きだったりする。とはいっても、別に言われる結果を信じるつもりは毛頭無い。何を言われるかわからない、その言われるまでの課程のドキドキ感が好きなのだ。そういう意味では千聖とあまり大差が無いかもしれない。

「ちようどいいわ。雅、あなた占っていかないかしら？今なら待ち時間無しで占えるわよっ。」

「ほんと？それは嬉しいな。じゃあ折角だから占ってもらおうかな」
「わかったわ。着いてきなさい」

そして、僕は友希那の案内に従い、館内に足を踏み入れる。そこは薄暗い部屋だった。その中央に、台に置かれた水晶玉と、ローブを顔が隠れるように着飾った魔女スタイルの女生徒がいた。思っていたよりも本格的な作りのようだ。

「いらつしやいませ。当館では、3つの占いから1つを選択していただきます」
そう言つて、その女生徒は何やら紙を取り出した。そこには、占いの種別と料金が書かれていた。

一つ目が、今日の運勢三百円。まあ、オーソドックスな占いだらう。無難とも言える。
二つ目が、恋愛占い三百円。これまたオーソドックスな占いだ。女子高生なら皆食いつきそうな占いだらう。

三つ目が、スペシャルシークレット占い一万円。なんだこれは？一つだけ値段がおかしい。文化祭で請求されるような金額では明らかにない。

「えつと、このスペシャルシークレット占いというのは？」

「その名の通り、特別な占いです。残念ながら、内容はシークレットです。当クラスのある生徒の発案で決まった占いです。キャッチフレーズはこの占いに、全てを賭ける覚悟はある？です」

なんでだらう。なんとなく誰の発案かわかつた気がする。だけど、絶対値段設定はもつと下げた方がいいと思うんだけど。少なくとも、0を一つ無くそう。

「ああ、じゃあ今日の運勢で」

「はい畏まりました。前払いで三百円お願いします」

言われた通りに彼女に三百円を渡す。すると彼女は、水晶玉に向かつて手を翳し、何

やら呪文を唱え始めた。

「はあー、キラキラドキドキルンツテキテハカナクブシドーフヘフエツグツテソイヤ」

何やら不思議な呪文を女生徒が唱えると、水晶玉が急に光り出す。その光は段々と強くなり、終いには目を開けているのも辛いほどの、強烈な物になる。僕は思わず目を閉じてしまった。

「見えました」

そして、女生徒がそう言うと、光は段々と収縮を見せる。一体、どうやったら水晶玉をこんなに光らせる事ができるんだろう。謎の技術だ。

「今日のあなたは、良い友人を持ってたと実感する日になりますね。特に、恋愛面が強く浮き出ています。そちらの方面で、ご友人と何か良い出来事があると水晶玉に出ていきます。ラッキーアイテムとして、仮面と出ていきますね」

仮面って何？そんなもの普通は持っていないと思うけど。でも、なんだか本格的な占いだ。思っていたよりも楽しめた。僕はそのまま、意気揚々と館を後にした。でも、本当にスペシャルシート占いでなんだったんだろう？

館を後にした僕は、今度は喫茶店に来ていた。ここは先ほどの館と同じくどうやら二年生が出店しているらしい。2—A。確か日菜ちゃんがここに所属していたと記憶している。

「いらつしやいー!…つてあれ?」

と、噂をしていると、いきなり出迎えてくれたのは日菜ちゃんだった。見慣れない白いエプロン姿が、どこか新鮮味を覚えさせる。

「あー!みや」

「シー!一応お忍びで来てるから、あまり目立ちたくないんだ」

「そうなの?芸能人って大変だねー」

「日菜ちゃんも芸能人なはずなんだけど…」

日菜ちゃんは相変わらずなようだ。独特な雰囲気を持つ彼女。その雰囲気が実に日菜ちゃんらしいとも言える。

「じゃあ、ここの席に座って!注文は何にするー?」

「そうだね。じゃあ折角だから日菜ちゃんのオススメにしようかな」

「おっけー!まかせといてー!」

そう言って、厨房と思われる場所に駆けていく日菜ちゃん。なんでだろう？何故か少し心配になってきた。それから数分が経つ。すると、日菜ちゃんが漸く顔を出す。

「おまたせー！日菜ちゃん特製サイエンスパープルだよ！」

「サイエンス、パープル？」

そう言う日菜ちゃんの手握られていたのはフラスコだった。中には何かが入っている。極めて黒に近い紫色。そんな色をした液体が、フラスコの中で泡立っていた。さらには、フラスコからは夥しい湯気が出ている始末。一体これはなんなのか？

「えっと、日菜ちゃんこれは？」

「この喫茶店、色んなオリジナルドリンクを提供してるんだよねー。それでこれは、あたしが考えたドリンク！名付けてサイエンスパープル！」

「えっと、因みに何を入れたか聞いても？」

「それは企業機密だよー」

「いつからこの店は企業になったの？」

「だけど、果たしてこれは飲めるのだろうか？明らかに、胃に入れてはいけないような様相を保っている。」

「さあさあ！雅君、騙されたと思ってグイッと一気にいっちゃって！さあさあ！」

そう言って、眩しいほどにキラキラした目でこちらを見つめてくる日菜ちゃん。正

直、目を合わせられない。その純粋な目が、今は怖かった。

「さあさあー！」

「ううっ、ええい！もうどうとでもなっちゃえい！」

僕は、その純粋な目に負けた。負けて、フラスコの中身を一口、口の中に流し込む。

「・・・あれ？」

騙されたと思って更にもう一口。口の中に広がる味は、とても形容できる物では無かった。苦いような、甘いような、辛いような、酸っぱいような、とても言い表せないような味。もしかしたら、その全ての要素が混ざり合っていたのかもしれない。だけど、一つだけ確かなことがあった。

「・・・美味しい？」

そう、何故かそれはとても美味に感じた。感想なんてとてもじゃないが言葉に出来ない。だけど、何故か一言、それだけは確実に言えた。何故か美味しいと。

「でしよー！本当に美味しいんだよ！あたしが喜んできたから作ったのに、誰もわかってくれないんだよー！誰も飲んでくれないし、メニューにも入れてくれないし！」
「いや、ヒナ。さすがにその見た目は誰も飲まないって。厨房で作り出した時から、雅が倒れないか心配だったよー」

そう言つて、登場したのはリサちゃんだった。どうやら彼女もこのクラスだったらし

い。その手には、何やら皿が持たれている。

「やつほー雅、元気してた？これ、ヒナの面倒を見てくれたお礼だよー」

リサちゃんが手に持っていたのは、パンケーキだった。キツネ色の表面がとても輝いて見える。見ただけで思わず美味しいと言ってしまいそうになるほどの綺麗なパンケーキだった。

「むうー、リサちー、あたしは子供じゃないんだけど」

「いやいや、今日の日菜見てたら子供っぽいつて思っちゃうつて。雅ならきつと飲んでくれるつて嬉しそうにはしゃいじゃつて、アタシ達は気が気じゃ無かつたんだぞー」

「だって、本当にそう思つたんだもーん。雅君見た瞬間すつごくくるんつてきたんだから」
「あはは、リサちゃんありがとう。お礼は有り難く頂くよ」

「うんうん、遠慮せずに食べちゃつて。アタシの自信作だよ。でも、本当にあれを飲んじゃうとは思わなかつたよ。ほんと、お人好しなのはいいけど、そんなんだといつか痛い目にあうよー?」

「それをリサちーが言う?」

「何ヒナ?なんか言つたのはこの口かなー?」

「んにゃー!いひゃいひゃい!ヒシャちーいひゃいつて!」

日菜ちゃんのほつぺを縦横無尽に引つ張るリサちゃん。日菜ちゃんの顔を見る限り、

本当に痛そうだ。

「あの……」

そんな二人の様子を見てると、後ろから声をかけられる。そこには、見慣れない女生徒が立っていた。それも、一人だけじゃ無い。数人の女生徒がそこに立っていた。

「あの、厨房で氷川さんが雅君雅君つてずっと言っていたから気になっちゃって、雅様ですよね？あ、あの私大ファンなんです！サイン下さい！」

なるほど。彼女は僕のファンらしい。そして、他の女生徒も似たようなことを僕に言ってくる。なるほどなるほど。僕の存在がバレちゃったか。そして、そのバレた原因は、全員共通で一人の女の子らしい。

「……日菜ちゃん？」

「あはは、ごめんなさい」

結局、僕はその後女生徒達と、数人のお客さんにサインをせがまれるハメになってしまった。ついでに言っておくと、リサちゃんのパンケーキは、日菜ちゃんのドリンクとは別の意味で言葉に出来ないほど美味しかった。

喫茶店を後にした僕は、その後校内を彷徨っていた。劇の開演まではもう少しだけ時間がある。その残りの時間を校内散策に当てていた。他校というのは、なんだか探索してみたくなる。自分の学校との違いを探すだけで、なんだか楽しかった。そして、しばらく歩き回っていると、また知り合いに出くわした。

「つぐみちゃん、お疲れ様」

「あ、雅さんいらつしやいませー!」

つぐみちゃんだ。その腕には、生徒会と書かれた腕章が付けられている。生徒会だけに、文化祭の実行委員も務めているらしい。

「お仕事申中だった?」

「いいえ、今ちようど休憩に入った所です!」

そう言うつぐみちゃん。すると、不意に誰かのお腹の鳴く音が聞こえてくる。出所は、誰だかわかっている。目の前で、真っ赤になってお腹を押さえている彼女だ。

「す、すみません。朝から何も食わずに働いてたから・・・」

「ありやりや。それは本当に大変だね。そうだ、さつきリサちゃんにお土産でもらったんだ。はい、パンケーキ。よかつたら食べて」

「わあー!リサ先輩のパンケーキですか?このパンケーキ文化祭が始まる前から校内で

評判だったんですよ！いいんですか？ありがとうございます！」

そう言つて、パンケーキを一口頬張るつぐみちゃん。その顔が一瞬で幸せに包まれたような表情に変わる。

「お、美味しい……！これは、もしかしたらうちで出してるのよりも美味しいかも。どうやって作ってるんだろう？今度リサ先輩に教えてもらおうかな」

「どうやら、食べながらお菓子の研究も怠っていないらしい。今日もつぐみちゃんは、元氣につぐつてるようだ。」

「おつす、つぐ！差し入れ持ってきたぞ！つてあれ？」

「おー、どうもーす」

「……お久しぶりです」

「み、み、み、みや」

「シー。一応お忍びで来てるから、目立ちたくないんだ」

やつてきたのは、巴ちゃん、モカちゃん、蘭ちゃん、ひまりちゃんの残りのAfternoonのメンバーだった。巴ちゃんの手には、どうやらお好み焼きだろう。美味しそうに湯気を立てた紙皿が持たれていた。

「わあー、みんなありがとう！」

「どうせつぐみの事だから、朝から何も食べずに働いてたんでしょ？そう思つて皆で

「買って来た」

「うん、さつき雅さんに差し入れを頂くまでペコペコで」

「おー、今日もつぐつてるねー」

「つぐるのもいいけど、倒れるのだけはやめてくれよ?」

「それで、それで、雅様はどうしてここに?」

「うん、元々千聖の劇を見に来ただけど、その前に色々とお店を回ってたんだよね。その途中でつぐみちゃんに会ったんだ」

「はむ、雅さん、リサ先輩のパンケーキを持ってきてくれたんだよ?」

「えー!あの噂のパンケーキを!」

「リサさんのパンケーキ、すつごく美味しかったなー」

「なんだ、モカももう食べたのかよ。アタシはまだ行けてないんだよなー」

「なんならまた行きますかー。あたしももう一回食べたいなー」

「じゃあ、そうしようか。次、そこに行こう」

そんな会話を繰り返しながらも、美味しそうにお好み焼きまで平らげていくつぐみちゃん。よつぽどお腹が空いていたのだろう。パンケーキを食べた後だというのに、その食事ペースは衰えを全く見せない。

「羽沢さん、休んでるところごめん。演劇部のお客さんの整理が追いついてないの。ご

めんどけどヘルプに回ってくれる?」

「わかった!」

つぐみちゃんがお好み焼きを食べていると、そんな声がかげられる。どうやら、彼女の休憩はもう終わりらしい。

「まだ休憩中だつて言うのに大変だな」

「ほんと、倒れないでよ」

「それじゃー、あたし達はお邪魔にならないようにー、パンケーキを食べに行きますかー」

「リサ先輩のパンケーキ、うう早く食べたい!」

「じゃあ僕は、劇に行こうかな。まだ少し早いけど、今の話を聞く限りもうお客さんが詰めてかけてそうだしね」

「じゃあ雅さん一緒に行きましょうか。みんな、ごちそうさま!」

「うん、そうだね。それじゃみんなまたね」

そう言つて、僕とつぐみちゃんはその場を後にした。千聖の舞台、席に着けるといいんだけど。

そこには、予想を遙かに上回るお客さんが詰めかけていた。これは計算外だった。まさか、この時点でこんなにもお客さんが詰めかけるとは思ってもみなかった。もう少し早く来てればよかった。

「それじゃあ、私は行ってきますね」

そう言つて人混みの中に消えていくつぐみちゃん。あ、今人波に流されたのが見えた。大丈夫かな？でも本当にどうしよう。このままじゃ、千聖の舞台を見ることができない。

「あ、雅さん！お待ちしてましたよ」

そう途方に暮れている僕に声がかけられた。麻弥ちゃんだ。確か、彼女は演劇部の部員だったはず。どうしてここにいるんだろう？

「麻弥ちゃん、演劇部の仕事は大丈夫なの？どうしてここに？」

「大事な仕事として、雅さんを特等席に案内するように頼まれました。ジブンに着いてきて下さい！」

そう言つて僕を先導して歩いて行く麻弥ちゃん。頼まれた？千聖にかな？よくわからないけど、どうやら舞台を拝むことができるらしい。だったら案内に従おう。僕はそ

のまま、麻弥ちゃんの案内に着いていった。

「て、ここ舞台裏じゃん」

麻弥ちゃんの先導に従い、着いていくと、通されたのはなんと舞台裏だった。しかも、照明装置が置かれている舞台上部だ。確かに特等席は特等席だ。劇もよく見える。だけれど、なんでこんなところ呢？

「ジブンは照明係ですからね。ここに案内しました。それに、下にいると気づかれてしまいますからね。ここから大人しく見ていて下さい」

「気づかれる？」

一体誰にだろう？麻弥ちゃんが何を言いたいのかわからない。と、そんなことを言っている間に劇が始まった。薫と千聖、ロミオとジュリエットが舞台に姿を現す。二人とも、流石と言うべきか、圧巻の演技力だった。見ていて引き込まれる。気づけば僕は、夢中になって舞台を見ていた。

そして、早くも舞台は終盤を迎える。どうやら、ここにはアレンジが加えられている

らしい。本来ならば、墓場の前でロミオが自殺をするシーン。だけど、そこは墓場では無かった。どこかの室内で、祭壇の上に千聖が寝ている。なるほど。この場面でジュリエットを登場させることによって、より一層悲劇的に感じる。素晴らしいアレンジだ。

「さあ雅さん出番ですよ」

「出番？」

一体なんのことだろうか？わからない。麻弥ちゃんは一体僕に何を求めているのだろうか？

「そこに置いてある衣装に着替えて舞台上がって下さい」

「え？」

ちよつと彼女が何を言っているのか理解できない。いや、本当に何を言っているんだろう？舞台上上がる？誰が？僕が？いや、なんで？

「麻弥ちゃん？一体どういう」

「ほら、時間がありませんよ？早くしちやってください」

「いや、だから説明を」

「雅さん、あなたの登場はこの舞台の台本に書いてあるんです。要するに劇の一環なんです。そんな大事な場面にあなたが登場しなければ、舞台は台無しになってしまいます。そうなるかと千聖さんが恥をかいてしまいますよ？それでもいいんですか？」

「うつ、ずるい……」

それだけは避けられないといけない。千聖に恥をかかせるくらいなら、僕が恥をかく。

「で、でもセリフがわからないんだけど……」

「大丈夫ですよ。簡単ですから。待て！僕は怪盗ハロハッピー！その娘は頂いていく！そう言つて千聖さんをお姫様だっこで抱いで笑いながら舞台袖に消えていくだけです」

「お、お姫様だっこ……」

なんて無茶ぶりだろうか。急にそんなことを言われても、心の準備ができていない。だけど、どうやらやるしか無いらしい。僕は渋々衣装を着ていく。衣装と言つても、どうやら仮面とマントだけのようだ。それを身に纏つていく。

「準備は出来ましたか？さあ、ちょうど出番ですよ。薫さんがピンを取り出したら、さっきのセリフで入って行ってください」

麻弥ちゃんにそう指示を受け、僕は舞台袖に場所を移す。どうしよう。凄く緊張してきた。そして、その時はやってくる。薫が、懐からピンを取り出した。そして、僕は意を決して舞台上上がった。

「ま、待て！」

緊張で声が裏返りそうになる。それをなんとか堪えて声を出す。

「誰だ！」

「ぼ、僕は怪盗ハロハッピー！そ、その娘は頂く！」

なんとかセリフを口に出来た。そして、僕は一目散に千聖に近づき、彼女をお姫様だっこする。そして、脇目も振らず、その場を後にした。

「ア、アハハハハハハ」

麻弥ちゃんに注文された通り、笑い声も忘れない。なお、僕に演技力を期待してはいけない。不気味な笑い方になってしまった気がする。

「じゅ、ジュリエット．．．ああ、なんてことを．．．ん？これは．．．」

舞台の方を見ると、僕がいなくなつた後、途方に暮れていた薫が、何やら床に落ちていた紙を拾い上げていた。すると、ここでナレーションが入る。その声は、麻弥ちゃんだった。

「それは、先ほどの怪盗からロミオに向けられた手紙でした。その手紙によると、なんと怪盗の正体は未来から来たロミオだということです。その手紙には、ジュリエットは必ず幸せにすると力強い文字で書かれていました。そして、更には過去に戻る方法と、ジュリエットを蘇生する方法。そしてお前もジュリエットを幸せにしろと、これまた力強い文字で書かれていたのです」

え？僕ってそういう設定だったの？いや、色々とツツコみたいことだらけで、もはやツツコむ気にもなれない。誰だ？この台本を考えたやつは。

「ああ、なんて奇跡だ．．．これは夢では無いのか．．．？本当に僕はジュリエットを幸せにしてもいいのか？ああ、なんて素晴らしい奇跡なんだ！どうかお幸せに、ジュリエット。後は頼んだよ。未来の僕。さあ、僕もジュリエットを幸せにする旅に出よう！さらばだ。この世界！もう会うことは無いだろう！」

「そう言つて、ロミオはその場を後にするのでした。その後、彼を見た者はいませんでした。ジュリエットと共に。ただ、皆には何故か確信していることがありました。きつと二人は、幸せに暮らしているのだと」

その麻弥ちゃんのナレーションを最後に、舞台の幕は下りる。そして、鳴り止まない拍手がお客さんから送られる。どうやら、あんな幕切れだったがお客さんには受けが良かったらしい。

「えつと、雅。ちゃんと説明してくれるかしら？」

「え？説明つて？僕はこれが劇の一環だつて聞いたんだけど？」

「そんな訳無いでしょ。もう、誰よこんなシナリオ考えたの」

「もちろん、私だ」

薫だ。その言葉とともに、薫が僕達の元に寄つてきた。どうやら、こんなシナリオを考えたのは薫らしい。

「でしようね。あなた以外にいないと思つたわ」

「それで、どうしてこんなシナリオにしたの？僕、何も聞かされてなかつただけど」

「なあに、君も楽しめただろ？なら良かったじゃないか」

「良くないよ！」

「はあ、あなたに真面目な回答を期待した私が間違つていたわ」

全くもつてその通りだと思う。薫にそんな答え期待するだけ無駄なような気がする。

「私には」

そう考えていると、薫が話し出した。その雰囲気は、彼女らしくなく、声色も真面目な様子がかげえる。

「誰にも、ゆずれない願いが一つあるんだ」

「ゆずれない願い？」

「そう。それは、雅、君を幸せにするのは千聖。千聖、君を幸せにするのは雅。そして二人には、幸せになってほしいという願いがね。これだけは誰にもゆずれない。例えば、劇の中であつてもね。悲劇を演じる千聖を見たくなかった。だからシナリオを変更した。雅に千聖を幸せにして欲しかった。だから雅に千聖を攫ってもらつた。つまり、そういうことさ」

「薫……」

正直、驚いた。まさか彼女がそこまで僕達のことを考えてくれていたなんて、思いもしなかった。だけど、だったら僕達にも言いたいことがある。

「だったら、最初からロミオとジュリエットを選択しなければいいじゃん」

「え？」

「そうね。それに、私を劇に誘わなければいいだけの話だわ」

「え？そ、それは、つ、つまりそういうことさ」

「どういうことよ」

「あはは、でも薫、ありがとう。まさか薫がそこまで僕達の事を思ってくれてたなんて。素直に嬉しいよ」

「そんなの当たり前じゃないか。君たちは私の大切な幼なじみなんだ。大切に思うのは当然だろう？君たちの愛こそが全て。幼なじみ達のことを陰から支える私。ああ、なんて夢い……」

「あはは、それは夢いかもしれないね」

「夢い、のかしら？」

「まあそれはともかくだ。シエイクスピアはこう言っている。ほどほどに愛しなさい。

長続きする恋はそういう恋だと。まあ、君たちに対しては、いらぬ心配だろうが、いつまでも長続きすることを願っているよ」

「ええ、余計な心配だけど有り難く受け取っておくわ。ありがとう、かおちゃん」

「あはは、懐かしい呼び方だね。そうだね。本当にありがとう。かおちゃん」

「そ、その呼び方は恥ずかしいからやめてよ二人とも・・・」

その薫の声を聞いて、僕と千聖は顔を見合わせて笑い合った。それにつられたように、薫も笑い出す。久しぶりに、この三人で笑い合った気がする。昔はよく見た光景。だけど、いつの間にかあまり見ない光景になってしまった。

だけど、本当に僕は良い友人に恵まれた。改めて実感する。僕は幸せ者だと。その後、三人で笑い合いながら、僕はそう実感するのだった。ああ、なんて幸せなんだと。強く、強く実感するのだった。

そういえば、占いの結果完璧に的中したんだけど、あの占い師さん一体何者だったんだらう？

第35演目 歌に形はないけれど

千聖の通う、花咲川女子学園高校には、年に二度文化祭がある。

初夏に一度、そして秋に一度、合わせて二度ある。非常に珍しいことであると思う。

聞いた話によれば、なんでも昔大のお祭り好きの校長が在籍していたらしい。その校長が、これまた同じくお祭り好きが集まった生徒会と共謀し、文化祭の数を増やしたのが起源らしい。

もしかしたら、その校長に対して余計なことをしてくれたと思う人もいるかもしれない。だが、そこは花の女子高生。在校生の大半がこれまたお祭り好きだったため、この校長の発案は大いに歓迎され、浸透していった。昔も、そして今も。

さて、僕がどうしてこのような話をしているかというところ、今日がその花咲川女子学園高校文化祭、秋の部当日だからだ。そして僕は当然、その祭りにかけていた。といつても、午前中少しだけ仕事が入っていたため、到着したのは昼前になってしまったが。

だが、事前に千聖の今日の予定は聞いてある。

千聖のクラスは、今日は喫茶店を開いているらしい。千聖も、午前中は自分のクラス

を手伝うと言っていた。そして、そのシフトの時間もあと数十分で終わりとなつていく。ちょうど良いタイミングではないだろうか。

僕は、千聖を迎えに、彼女のクラスまで足を運んだ。さすが、芸能人である千聖が所属しているクラスとあつてか、その店は非常に賑わつているように見受けられる。店の外には長蛇の列ができあがつていた。これは、中に入るのにもかなりの時間を要しそうだ。

「と、特別招待券をお持ちの方はこちらにお願いしまーす!」

僕が中に入るべきか、外で千聖を待つてべきか思案していると、聞き覚えのある声が見つかった。どこか弱々しい、護つてあげたくなるようなそんな声。その主はすぐに見つかった。それは花音ちゃんだった。よく見ると、この店の入り口は二カ所にわかれていた。片側の入り口には、長蛇の列ができあがつている。

だが、もう片方の、花音ちゃんがいる入り口の方には、一切人が並んでいなかった。確か花音ちゃん、特別招待券と言っていた。なんだろうそれは?

「こんにちは、花音ちゃん」

「あ、雅君いらつしやい! 特別招待券は持つてる?」

「特別招待券つてそもそも何かわかつてないんだけど、それつて何?」

「ふええ? 千聖ちゃんは雅君に渡してると言つてたけど・・・」

え？千聖が僕に？なんかあったっけ？僕は、最近の千聖との記憶を辿ってみることにした。千聖と恋愛映画のラブシーンを見てドキドキした記憶・・・は今は関係無いかな。千聖の取つてあつたプリンを知らずに食べてお説教された記憶・・・も今は必要無いかな。

千聖に、文化祭の日に絶対に持つてきてと言われて、何かを渡された記憶・・・ん？もしかして。僕は、自分の記憶に引つかかつた物をカバンから取り出した。それは、黄色い紙にMと書かれただけの簡素な物だった。

「もしかして、これ？」

「あ、そうだよ。雅君これだよ。気づかなかつた？」

「うん、普通はこんな紙がそんな大事な物だと思わないと思うよ」

あまりにも、適当過ぎないだろうか？本当に、Mと書かれている以外には何も書かれていない。ただの黄色い紙切れだ。

「あはは、そ、それじゃちよつとだけ待つててね。び、VIPカスタマーM様ご来店です！」

「いやいやちよつと待つて」

VIPつて何？そんな待遇受けるなんて聞いてないんだけど。Mつてもしかして雅のこと？一体誰がこんな制度考えたんだか・・・

「あ、準備できたみたいだから、雅君中に入って」

「あーもうどうにでもなっちゃえ・・・」

僕はやけくそ気味に扉を開けた。中は、洋風に綺麗に飾られていた。どうやら、もう一つの入り口から入る部屋とは隔てられてるらしい。そこは完全な個室になっていた。思わず、これが文化祭の喫茶店だと忘れそうになってしまふほどの、完全なる個室だった。そして僕の目の前には・・・

「お帰りなさいませ。ご主人様」

黒と白を基調とした服に身を包み、スカートと両端を軽くつまみ、同じく軽く膝を曲げてお辞儀をする天使がいた。要するに、メイド服に身を包んだ千聖がいた。誰か、今すぐカメラを持ってきてくれないだろうか？

「えっと、一応聞くけど、千聖、なんでそんな格好を？」

「あら？言っていないなかったかしら？私のクラスは喫茶店を催しているのよ」

「それは聞いたけど、そんな格好をする必要があるの？」

「ええ、もちろんよ。喫茶店は喫茶店でも、メイド喫茶だもの。当然だわ」

メイド喫茶？それは初耳なんだけど。そうとわかつていけば、もつと心の準備をしてきたのに。

「それとも、雅は私のこんな格好じゃ不満かしら？」

そう言いながら、悲しそうに下を向く千聖。いや、そんなことがあるわけがない。何故なら僕は……

「そ、そんな訳無いじゃないか！だって、その、千聖が眩しすぎて直視することができないほどなんだから……」

そう、僕は今現在千聖のことは見ることができなくなっていた。正に太陽。只管に眩しかつた。目が眩みそうなほどに。

「そ、そう。あ、ありがとう」

そう言つて、顔を真っ赤にし、今度は恥ずかしそうに下を向く千聖。そんな千聖を見て、僕までなんだか恥ずかしくなってきた。

「そ、それより、折角来てくれたのだからおもてなしするわ。ほら、座つて」

「あ、うん」

千聖に促されるまま、僕は席に座る。そして、僕が座つたのを確認すると、直ぐさま千聖は僕にメニュー表を渡してきた。

「ゆつくり見てくれていいわよ」

「うん。そうだね。もうちよつと考えてみるよ」

メニューは予想以上にバリエーションに富んでいた。それこそ、本場の喫茶店と変わりが無い。むしろ、ファミレスの域に達しているかもしれない。本当にここは文化祭の

出店なんだろうか？

「そういえば、あの特別招待券ってなんなの？」

メニューを決めている間、僕は折角だから気になっていたことを聞いてみることにした。特別招待券って本当になんなんだろうか？

「あーあれね。このクラスって、実は恋人がいる子が多いらしいのよ。それで、それを知った委員長が折角だから、恋人を個室に閉じ込めて色々しちやいなさいって言って、こんなことになったのよ」

色々って何？ 一体その委員長はこんなところで恋人達に何をさせる気なの？ そもそも、委員長って響きだけ聞けば真面目で固そうなイメージがあるんだけど、どうやらこのクラスの委員長はそうでも無いようだ。あんまり聞いたことは無い人物だけど、その一面だけを聞けば、なんともはっちゃけてそうなイメージを覚える。

その後も僕達は、用意された個室で心ゆくまで楽しい一時を過ごしていく。千聖にオムライスにケチャップでハートを書いてもらったり、あーんしてもらったり、心ゆくまで二人の時間を楽しんだ。

「あら、そろそろ時間ね。雅、着替えてくるからちよつとだけ待っててくれるかしら？」
「もちろんだよ」

そう言って、違う部屋に入っていく千聖。数分待つと、彼女は見慣れた制服に身を包

み、僕の前に現れた。

「お待たせ。それじゃ、行きましょ？」

その千聖の言葉に従い、彼女に続いて部屋を出る。すると、まだそこには花音ちゃん
がいた。

「花音、それじゃ私は行くわね。また後でね」

「うん。あ、そうだ。えっと、お持ち帰りですか？」

その花音ちゃんの発言に思わずつこけそうになってしまう。彼女は一体何を言っ
ているんだろうか？

「花音？ 一体そんな言葉誰に教わったのかしら？」

「ふ、ふええ、い、委員長に誰かが出てきたら言うようにって……」

満面の笑みを浮かべた千聖に、思わずたじろいでしまった花音ちゃん。恐怖値が限界
を超えたのか、ほんの数秒で彼女は犯人を白状した。そもそも隠すつもりも無かったと
思うけど。顔を真っ青にした花音ちゃんが言うには、どうやら委員長の指示らしい。ま
た委員長だ。一体このクラスの委員長は何を考えてるんだ……

「本当にあの委員長は……まあいいわ。それじゃあ雅、行きましょか」

「うん、そうだね。じゃあ花音ちゃん、また後でね」

「うん、楽しんできてね」

僕と千聖は、その言葉を最後に、その場を去った。だけど、本当にこのクラスの委員長ってどんな人なんだろう？

花音ちゃんと別れて少し歩くと、なんだか不気味な教室を発見する。それは、ある意味文化祭の定番と言える出し物、お化け屋敷だ。どうやら、この出し物は千聖と同じ二年生のクラスが催しているらしい。そして、その入り口には良く見知った顔があった。

「いらつしやいませー！あ、千聖ちゃん、雅君、いらつしやい」

パスパレのふわふわピンク担当こと、彩ちゃんだ。どうやら今日はクラスの出し物でお手伝いをしているらしい。

「彩ちゃん、お疲れ様」

「お疲れ彩ちゃん。ここはお化け屋敷をやってるんだね」

「うん。ウチのお化け屋敷は凄いやー。怖すぎて出てくる人皆放心状態になって出てくるからね」

え？何それ？凄く気になるんだけど。怖い物見たさで入ってみたくなくなってしまう。

と、そんなことを考えていたときだった。

「ひ、ひいいいいい！」

おそらく、出口と思われる場所からそんな悲鳴を上げながら二人組の男が出てくる。モヒカンに、着崩した学ラン、数個付けているピアスと、典型的な不良的容姿をした二人。そんな、度胸には自信がありそうな二人が涙を流しながら、這うように出口から出てくる。

「(ハハハ)、こんなの聞いてねーよ！ととと、トイレ！」

「もうやだよ……すいませんでした、俺明日から真面目に生きていきます……」

そんな泣き言を言いながら、逃げるようにその場を後にする二人組。うん、これは止めておいた方がいいかもしれない。

「ち、千聖、そろそろ行こうか」

「そ、そうね。他の所も回らないと行けないし、行きましようか」

そう言い残してその場を立ち去ろうとする僕達。だけど、それを良しとしない者がその場にはいた。

「千聖ちゃん、雅君、それじゃいつてらっしやい！」

「え？」

「ちよ、ちよつと彩ちゃん!？」

僕達の背中を急に押す彩ちゃん。そして、僕達の体は偶然だろうか、入り口の方に向いていた。よって、必然的に僕達は、偶然にも開け放たれていた入り口の扉に吸い込まれるかのように押し込まれてしまった。そして、僕達が入場したのを確認すると、無情にも閉まる扉。抵抗する間もなく、僕達は屋敷内に侵入してしまった。

「ちよ、ちよつと彩ちゃん！」

「ダメだ。この扉全然開かないよ。鍵が閉まつてる様子も無いのに、どうなつてるの……」

絶望に打ちひしがれる僕達。隣を見ると、千聖の表情が真っ青になつて居るのがわかる。予め言つておくが、僕達二人は決して幽霊が苦手というわけではない。むしろ、耐性がある方だ。だけど、僕達の脳裏には、先ほど見た二人組の光景が焼き付いてしまつている。その光景が、僕達二人の心に不安の種を植え付けてくる。

「み、雅……」

「はあ、行くしかないみたいだね。千聖、絶対に僕から離れないでね」

僕だつてもちろん怖い。だからと言つて、千聖を矢面に立たせる訳にはいかない。千聖に降り注ぐ火の粉は、全て僕が受け止める。そう覚悟を決め、僕は一步を踏み出した。だけど、僕は直ぐさま拍子抜けしてしまふ。出てくる仕掛けが全て使い古された古典的な物ばかりだったのだ。どこにも怖がる要素が無い。

「えっと、これは変に怖がって損したかしら？」

「そうだね。これじゃ怖がる要素が無いね。もしかしたら、さっきの二人組が大げさだったのかもしれないね」

その気を抜いていた時だった。僕達の耳に、美しい旋律が聞こえてくる。ピアノの音色だ。その音はすぐ近くから聞こえてきた。その音の聞こえる方に目を向けてみる。だけど、そこにはピアノが存在しない。その代わりに、椅子に座る人物がいた。

その顔は俯いているためわからない。だが、そんなことよりも気になる点があった。その手だ。その手が、まるでそこにピアノが存在するかのようには、軽やかに動いている。そして聞こえてくる旋律は、その動きと完全にシンクロしている。そして、その人物がゆっくりと顔を上げた。

「ひっ！」

「わっ！」

その顔は衝撃的だった。まるで、彼のお岩さんのように膨れあがった右瞼。存在しない口。鼻に突き刺さった数本の釘。あまりにも衝撃的な容貌だった。そして、その顔が知り合いのそれなのだから、より一層に恐怖を煽ってくる。その顔は、紛う事なき、白金燐子、彼女のものだった。彼女は、僕達を視界に入れてもなお、手を止めるそぶりも見せない。唯一無事な左目からは、なんの感情を読み取ることも出来ない。まるで、そ

んなものなどとつくに捨て去ったとしても言うかのように・・・

「い、今のは怖かったね」

「そ、そうね。まさか燐子ちゃんがあんなことをするなんて」

燐子ちゃんから離れた僕達は、安堵の息を吐いた。千聖の言う通り、まさか彼女があんなことをするとは思ひもしなかった。まだ、鼓動が早足になっている。今日は夢にまで出てきそうだ。

だけど、おそらくあれが最後の仕掛けだったのだろう。僕達の視界には出口と思われ扉が入った。総じて言うならば、最後の燐子ちゃんだけが怖かったぐらいだろう。とはいえ、最初の二人組のような恐がり方をするほどでもない。やはり、あの二人組が特別恐がりだったということだろう。

「無事に出られて良かったね」

「そうね。最初はどうかと思ったわ。彩ちゃんには後でお説教しておかないと・・・あら？」

出口へと着々と近づいていた僕達だった。が、そんな僕達の耳に何やら不穏な音が聞こえてくる。カツン、カツン、というような、固い床に何かこれまた固い物をたたきつけるような音。そして、コツン、コツン、という足音。おそらく革靴だろう。そんな二つの音が、暗闇の中から僕達に着実に近づいてくる。

一步、また一步と確実に近づいてくる。ゆったりとした歩みながら、確実に近づいてくる。そして、その音の主がついに姿を僕達の前に現した。その主は、これまた僕達の見知った人物だった。

「あら？紗夜ちゃん？」

「燐子ちゃんの次は紗夜ちゃんか。このクラスの知り合い全員登場かな？」

紗夜ちゃんは、一目見ただけではどんな幽霊なのがわからなかった。服装は普段の制服だ。特徴的なのは、口にしたマスクだろう。おそらくウサギだろうか？何やら可愛らしいような、そうでもないような、よくわからない生き物と、その周りに花が描かれたマスクだ。

そして、最初は上に目がいつて気づかなかつたのだが、問題は彼女の所持物にあった。バットだ。しかも、その先端付近に何本もの釘を打ち付けてある。所謂釘バットだ。そんな物騒な物を彼女は所持していた。おそらくこれが先ほどからの音の正体だろう。

「さ、紗夜ちゃんその手に持つてるものは……」

「……ません」

「え？紗夜ちゃん何か言った？」

「不純異性交遊は、許しませーん！」

「う、うわあ！」

「き、きやあ！」

その言葉を叫ぶとともに、紗夜ちゃんが片手で軽々と釘バットを持ち上げ、そして頭上に掲げて全力疾走で僕達を追いかけてきた。そのスピードは非常に早い上に、不意を突かれた故に僕達のスタートも遅れた。僕達の距離は瞬時に縮まる。

振り返る余裕もない。だが、すぐ後ろからは何かを振り下ろす気配と、ガツン、ガツン、という鈍い音が断続的にしている。隣に目を向けると、千聖が辛そうな顔をしているのが見える。千聖は、運動が苦手だ。そんな彼女に、この緊張状態での全力疾走は酷だろう。このままでは、彼女は出口まで保たないだろう。

「仕方ない。千聖、ごめんね」

「え？きやつ！」

僕は、彼女の手を取り、そして一息に僕の胸元へ抱え込んだ。俗に言う、お姫様だつこだ。この一連の動作を、走りながら行った物だから、僕は急激に体力を消耗した。千聖が軽くて良かった。千聖の体重次第では、僕の体力も保たなかっただろう。彼女の前では、口が裂けても言えないけど。

「不純異性交遊は、許しませーん！」

そんな行動をしたからか、紗夜ちゃんのスピードもさらに早くなる。このままだと、

追いつかれるのも時間の問題かもしれない。だけど、幸い出口までの距離も後僅かだ。このまま逃げ切ってみせる。出口まで後3歩、2歩、1歩、そして……

「だはー!」

出口について安堵の息を吐く。生きた心地がしなかった。今ならあの二人組の気持ちもわかる。このお化け屋敷は本当に怖い。お化けは関係無かったけど。

「み、雅、もう大丈夫だから、そろそろ降ろしてもらってもいいかしら?」

「あ、ごめん」

その千聖の言葉で、未だに彼女を抱えっぱなしなことに気がついた。慌てて彼女を降ろす。

「あ、千聖ちゃん、雅君、どうだった?ウチのお化け屋敷楽しかったでしょ?」

そんな僕達に、諸悪の根源である彩ちゃんが話しかけてきた。隣の千聖に目を向けてみると、笑顔を浮かべていた。笑顔だ。人を魅了する魔法がかかった笑顔だ。なのに何か、背筋が凍るような恐怖を覚える。それこそ、さっきの紗夜ちゃん並に。彩ちゃんに目を向けてみると、どうやら彼女も僕と同じものを感じ取ったのだろう。その体は震え、顔は真つ青になっていた。

「彩ちゃん、ちよつと向こうでお話ししましょうか」

「えつと、どんなお話しをするのかな?」

「決まってるじゃない。お説教よ」

「わーん！ごめんなさああああ！」

彩ちゃんのお説教も効果無く、彼女は千聖に引きずられていった。その後小一時間ほど、千聖のお説教は続いたのだった。まあ今回は、彩ちゃんが悪いから仕方ないかな。

それと、これは後から聞いた話だが、どうやら紗夜ちゃんは口裂け女のつもりだったらしい。確かに口裂け女の特徴であるマスクはしていた。その下まではわからなかったけど。ただ一つ言いたいのは、口裂け女は釘バットなんて持ってないということだ。

余談だが、後にここ花咲川女子学園高校には、他校の不良も震え上がらせる都市伝説が誕生することになる。花咲川の番長伝説という都市伝説が。

千聖のお説教が終わったのを確認すると、僕達は体育館に設置されたステージに向かっていた。そろそろ、ステージで行われる公演が始まる時間だ。その道の途中のことだった。また知り合いに出会ったのは。

「キヤー！薫様——！」

「あはは、可愛い子猫ちゃん達。私は決してどこにも行かないさ。いつだって君たちの傍にいる。だから、今は見逃してくれないだろうか？大切な人を待たせているんだ」

女の子達に周りを囲まれた薫だ。そんな薫が、なんとか女の子達の輪から抜け出して出てくる。ほんと、歩くだけで騒動を起こす子だ。

「ほんと、何してるのよ」

「おや？千聖と雅じゃないか。こんなところで出会うなんて、なんて偶然なんだ」

「あはは、偶然なような、そうでもないような」

「はあ、まあいいわ。時間も無いし行くわよ」

その千聖の言葉に従って、僕達はステージへと向かう。そして、ステージに着くと、その入り口でまた知り合いと合流した。

「あ、チサトさん！ミヤビさん！」

「薫さんも来たみたいだね」

イヴちゃんと花音ちゃんだ。彼女達ともここで待ち合わせをしていた。時間も良い感じ。そろそろ入ろう。

「それじゃ、皆行きましょう」

千聖を先頭に、僕達は中に入る。そこは決して、観客席では無い。舞台裏だ。本来ならステージ関係者しか入ることの無い場所。そんな場所に僕達は入っていた。

「あ、白鷺さん、お待ちしました！」

そして、その舞台裏にいた一人の女生徒が話しかけてきた。おそらく生徒会の子だろう。千聖に聞いた話だが、どうやらこのステージの司会進行を担当している子らしい。

「それで、どんなパフォーマンスを見せていただけれるんですか？」

「この五人で、ライブパフォーマンスをするわ」

「五人？」

そこで、漸く彼女は千聖以外のメンバーの存在に気がついたらしい。彼女の表情が段々と驚愕の色を彩っていく。

「み、雅様!？」

「なるほど、君もそういうタイプの子だったんだね」

なんだか最近、ファンクラブの子と縁がある気がする。それほど、世の中に浸透してくれているということだろうし、素直に嬉しいけど、ちよつと照れくさい。因みに、もう気づいているだろうが、僕達は決してステージを視聴しに来たわけではない。ステージ上で演奏をするためにやってきた。それが今日の、メインイベントだ。

「こ、こうしちゃいられません！それでは、間もなくステージが始まります！私の声に従って、ステージに上がってきて下さいね！」

その言葉を最後に彼女はその後を後にした。どうやら、司会の準備に入ったらしい。

「さて、皆、これは今日限りのスペシャルライブだよ。思いっきり楽しんじゃおう！」
「そうね。こんな機会、もう二度とあると思えないわ。そんなの、楽しまないと損よね」
「ああ、もちろんだ。輝くもの、必ずしも金ならず。今日という日を輝かしいものにして
みせよう」

「私も、精一杯頑張ります！今日は楽しみましょう！」

「ふええ、私は緊張するよ……でも、そうだよ。楽しまなきゃ勿体ないよね。私も、
頑張るよ」

「大変長らくお待たせしました！間もなく花咲川女子学園高校文化祭秋の部恒例、シー
クレットステージが始まります！」

僕達が意気込みを見せていると、そんな司会者の声が聞こえてくる。シークレットス
テージ。それが僕達が立つステージの名称。秋の部ではどうやら毎年開かれてい
らしい。シークレットの名が現す通り、内容は毎年秘密にされている。だけど、決まりと
して学園に関係のある有名人がパフォーマーとして指名されるらしい。それに、今年
は千聖が選ばれた。

千聖はパフォーマンス内容に悩んだ。悩んで悩んで、悩んだあげく、僕に白羽の矢が
立った。なんでも、指名されたのは自分だけど、パフォーマンス内容で言えば僕の方が
会場を盛り上げるのにうってつけ。だからこそ、自分はサブに回って僕にパフォーマン

スを任せるらしい。

そこまで千聖に言われては、僕も黙っていられない。彼女の期待に応えられるような、会場の熱気を最大限に引き出すような、そんなパフォーマンスを披露しないわけにはいかない。

「なんと！今回のシークレットステージ、凄い人がパフォーマンスとして来て下さってます！はつきり言わせていただきます！今日のステージこそが過去最高のステージになります！今日お集まりの皆さんは、是非歴史の生き証人になってください！それでは、お願いします！」

司会者の声に従って、僕達はステージに上がる。僕達の姿を見た観客の反応は、沈黙。ただ、期待が外れたという無念な思いからくる沈黙では決して無い。

「美咲！見て！雅^{まさ}だわ！また日本に来ていたのね！それにしても、どうして皆お人形みたいに静かになっちゃったのかしら？」

「みんな、驚いて声も出ないんだと思うよ。あたしもこころが居なかつたら同じ反応してたかもね。それにあれば、雅^{まさ}さんじゃないよ。正真正銘、雅^{みやび}さんだよ。というか、薫さんもいるし……」

まあ、凍り付いたかのような沈黙の中にも、例外はいるみたいだけど、彼女は例外だろう。だけど、いつまでも凍り付いていては盛り上がらない。是非、自分たちの熱気で

解凍してもらおう。

「みなさん！文化祭楽しんでますか！どうも、黒城雅です！知らない人は是非覚えて帰って下さい！」

その僕の声を聞き、一人、また一人と歓声を上げていく人が出てくる。そして、数秒も経てば会場は耳を劈く大歓声に包まれた。いい熱気だ。

「それじゃ、まずは挨拶代わりに一曲聞いて下さい！welcome to my world！」

この曲は、僕が一曲目の定番としてよくライブで歌う曲だ。曲自体、そういった目的で作っている。僕は基本、何かを主題に置いて曲を作る。日常の些細な風景を主題に置くことが多いのだけれど、この曲は珍しく、僕自身を主題に作った曲になっている。

僕のことを皆に知って欲しい。僕の歌を皆に知って欲しい。そういう想いを込めて作った曲。だからこそ、一曲目に相応しい。僕の声が会場に響き渡る。その声に合わせて、薫が、花音ちゃんやんが、イヴちゃんやんが、そして千聖が音を重ねる。バンドならではの協調性が、僕に高揚感を与えていた。そんな高揚感の中、一曲目の演奏が無事終了する。素晴らしい演奏になったと思う。

「改めましてこんにちは！黒城雅です！」

僕の声に、会場の皆が歓声で応えてくれる。本当に、ライブのこの空気が気持ちいい。

何度味わっても飽きそうに無い。

「それじゃ、今日僕に付き合ってくれる、素敵で最高のメンバーを紹介していきまーす！
まずはギター、薫！」

僕の紹介と共に、ソロパフォーマンスを披露する薫。その女子をも魅了する中性的な甘いマスクも相まって、非常に様になっている。

「ベース、千聖！」

そして千聖。そのソロパフォーマンスは、彼女の技量もあつて非常にレベルの高い物だった。もしかしたら、ベースの技量なら僕も既に負けているかもしれない。

「キーボード、イヴ！」

そしてイヴちゃん。半年程前までは楽器の演奏なんて全くしたこと無かった彼女。だけど、彼女の努力がそんなハンデを無に帰した。そのパフォーマンスは誰がどう見ても初心者とは思えないだろう。僕だつてそうだ。

「ドラム、花音！」

そして花音ちゃん。メンバーの中で一番気弱な彼女。だが、そのパフォーマンスは侮ることなかれ。普段の彼女からは想像も出来ない堂々とした叩きっぷりだった。そして何より、彼女の演奏を見てると、なんだか楽しい気持ちになつてくる。本当に、良いドラマーになったと思う。

「そして最後に、ボーカルは僕黒城雅です！この五人で今日は皆に夢のような時間をお届けします！バンド名はエターナル！今日一日限りのスペシャルライブをご堪能あれ！それじゃ次の曲いつてみよう！」

エターナル。意味するところは永遠。僕達のバンドとしての活動は今日一日だけで終わる。だけど、それでも、皆の思い出に永遠に残るようなバンドでありたい。そんな想いを込めてこの名前を付けた。皆の、永遠になれますようにと……

そして、時間は経ちライブも終演を迎える時間が近づいてきた。楽しい時間ほど、あつという間に過ぎていく物。本当に悲しく感じる。

「皆さん、盛り上がってますか！」

僕の声に、この日最大の歓声で応えてくれる皆。本当に素晴らしい生徒達だった。だからこそ、寂しさがより一入ひとひらに感じる。

「本当に名残惜しいですが、次が最後の曲になります！」

それを聞いて、一目でわかるほどの悲壮感が僕に伝わってくる。僕だって悲しい。寂しい。ライブの終わりはいつだってそうだ。だけど、終わらないわけにはいかない。だ
けど……

「次の曲で今日はお別れになります！だけど、これだけは覚えていて下さい。僕が歌う、いいえ、誰が歌う歌にも決して目に見えた形はありません。だけど、それでも、皆さん

の中には、皆さんの心の中にはいつまでも残り続けます！歌に形なんて、必要ありません！そんなもの無くたって、いつだって皆には見ることができるとだから！そのことを胸に留めて聞いて下さい！メモリア！」

そして、最後の演奏が始まる。曲は、僕の始まりの歌、メモリア。謝罪や懺悔の意を込めて作ったこの曲。今日はこの曲に感謝の意を込めて皆に届けよう。ありったけの感謝を込めて。

僕がそんな想いを込めて歌っていると、不意に隣で演奏している千聖と目が合った。そして、どちらからともなく僕達は近づき、背中を合わせる。いつかのライブの帰り道で彼女と約束したパフォーマンスだ。そして、僕達は二人でこの曲を歌う。別に打ち合わせなんてしていたわけではない。

なんとなく、彼女が今それをしたいと望んでいるのをわかったから、了承しただけ。いうならアドリブだ。だけど、結果的にこれで良かったと思う。会場の皆も大いに盛り上がっているのがよくわかる。

それと、先ほど感謝の意を皆に届けると言ったが、別に皆とは観客に向けてだけの話では無い。薫、イヴちゃん、花音ちゃん、そして何よりも千聖に向けてつこの歌を送りたいと僕は思っている。おそらく、その想いが彼女にも伝わったのだろう。千聖の歌からも、同じく感謝の気持ちを読み取れた。僕に向けた感謝の気持ちが。

あの日と同じだ。あの、千聖と行ったカラオケの時と同じだ。あの時、僕に向けられた感情と同じ感情。正直、今もまだ僕はその感情を向けられるのに値しているのかどうかわかっていない。

だけど、いつかは胸を張って言いたいものだ。僕は、千聖の支えになって生きています。千聖が、僕の支えになってくれているように、僕も千聖の支えになって生きていきたいと。

そんな事を考える、思い出に残るライブの一コマだった。

第36演目 夕日坂

それは、新学期が始まって直ぐのことだった。

「白鷺さん！今年度のシークレットステージ、パフォーマーに選出されましたー」

生徒会に突如呼び出された私は、そのお達しを受けることになった。この時期に、生徒会に呼び出された時点で大体覚悟はしていた。しかも、下駄箱に手紙を入れるなんて古典的な方法ながらも、内密に伝えてくるなんてもう確定事項だったでしょう。おまけに、他の生徒にバレないように生徒会に来て下さいとだけ書かれた内容文書。疑う余地も無い。まあ、封緘ふうかんにキスマークまで付けてラブレターにカモフラージュさせていたのはさすがにやりすぎだと思っただけだ。ここ、女子校なのだけだ。

それはともかく、シークレットステージというのはこの花咲川女子学園高校文化祭秋の部の恒例行事となっているステージパフォーマンスのことだ。この花女には年に二度文化祭がある。初夏に一度、秋に一度。その秋の部の終盤に催されるイベントだ。

毎年、学園に縁のある有名人をパフォーマーに据えて、ステージパフォーマンスをする。パフォーマー内容も様々。ライブステージを開く年もあれば、漫才や演劇、パントマイムなんてものをする年もある。

昨年は、一学年上に在籍する、牛込ゆり先輩を中心に組まれたガールズバンド、Gitter*Greenが見事なライブパフォーマンスを披露していた。

「詳細はわかっていると思いますが、他の生徒、他校からの共同参加者を連れてきていただけでも大丈夫です！パフォーマンス内容はパフォーマンス自身に一任します！白鷺さんのことですから、内容は演劇ですかね？」

「ふふっ、それはどうかしらね」

正直なところ、何をするかはまだ決めていない。それも当然、知らされたのは今が初めてなのだから。事前に気づいていたとは言っても、考える時間まではほとんど無かった。本当に何をしようかしら。

「それでは、生徒会からのお達しは以上です！当日、素敵なパフォーマンスを期待していただきますね！」

「ええ。期待に応えられるように頑張るわね」

その言葉を最後に、私は生徒会を後にした。本当に何をしましょうか。私の持ち味を活かすならば、生徒会の彼女も言っていた通り演劇が無難でしょう。次点で、ベースを使ったライブパフォーマンスといったところ。だけど、問題は協力者。

一人で演劇をするにも、どうしても限界がある。協力者は必要不可欠。ライブパフォーマンスだってそう。私は、ソロでのライブ経験は皆無だ。パスパレとしての、パ

ンドとしてのライブ経験しか無い。それなのに、皆を納得させるような素晴らしいパフォーマンスができるとは到底思えない。どちらにしても、協力者は必要不可欠だった。

「はあ、どうしようかしら」

私はため息を吐きながら、教室への重い足取りを進めるのだった。

「ちーちゃんーラブレターを受け取ったっていうのは本当なの!? ねえねえ、相手は一体誰からなの!? ねえねえ、あたし気になって夜しか寝れなくなっちゃうよ!」

ステージのことを思案しながら、教室に入った私を出迎えたのは賑やかな声だった。彼女はこのクラスの委員長。委員長とは言っても、決して真面目な子というわけでは無い。確かに成績はこの学園でもトップクラスに優秀。だけど、性格はごらんの通りだ。

真面目タイプでは無く、ムードメーカータイプの委員長。少しお調子者の気があるが、決して悪い子では無い。誰とでもすぐに打ち解けることの出来る、コミュニケーションの塊。噂では、バスジャックに巻き込まれたことがあるが、犯人とすつかり打ち解けて、自首

待つて、あの噂つてそんなに広まつてるの？まさかこのクラスにまで浸透しているとは思ひもなかった。

「本当なの？ねえちーちゃん、本当なの？」

「えつと、それは……」

「本当、なんだね……？はあ、同時に二回も失恋した気分だよ……」

どうして二回なのかはわからないけれど、どうやら彼女も雅のファンだったらしい。雅と付き合っている以上、同じようなことは見慣れている。だけど、同情なんてしない。誰がどれだけ、雅のことが好きでも、私の想いに勝てるわけが無いのだから。そんな弱い気持ちには同情なんてするわけがない。これは傲慢では無く、只の事実なのだから仕方ない。

「まあ、委員長ちゃんにもきつと良い出会いがその内やってくるわよ」

「あはは、あたしみたいな賑やかなだけの女に寄ってくるなんて物好き、そうはいないと
思うけれどね」

「ふふつ、それにしても、一体そんな噂、どこで広まつてるのかしら？」

「え？隣のクラスの丸山彩ちゃんが言つてたらしいけど？」

あの子は一体何をしてきているのかしら？確かに、私はそこまでこの情報を隠すつもりは無い。とはいえ、好き好んで開示するつもりも無い。だというのにあの子は。こ

れはお説教が必要みたいね。

「ふふっ、そう彩ちゃんかね。ふふっ」

「どうしたのちーちゃん？笑顔が怖いよ？あーそれにしても、あーちゃんやれーくん、みーみにガツキーやのんちゃんだけじゃなくて、ちーちゃんまで・・・ここ女子校なのにこのクラス彼氏持ち多すぎだよ！こうなったら全員纏めて祝ってやる！」

その後のホームルームで、半ば暴走した委員長ちゃんが発した鶴の一声により、文化祭の出し物がメイド喫茶に決定した。そしてこれまた委員長ちゃんの一声により、このクラスの生徒の彼氏をVIP待遇で持てなすことが決まった。どうしてこうなったのかしら？

そして、それから早くも数週間が経過した。あれから、ステージの内容はまだ決まっていなかった。本番まではまだ少し時間がある。とはいえ、早く内容を決めないと、本番に向けた練習をする時間が無くなってくる。この数週間、毎日考えた。だけど、良い案は中々浮かばない。

いいえ、正確には一つだけ私の中に答えは浮かんでいた。だけど、その案を採用することを、私は躊躇していた。その案を採用してしまつては、雅にまた迷惑をかけてしまふかもしれない。それだけは絶対に嫌だつた。

「千聖？」

そんな事を延々と考えていると、雅が私に声をかけてきた。現在は晩ご飯の後。雅と寛いでいる時間帯だ。

「雅、何かしら？」

「いや、千聖が何か考え事をしてうにいるように見えたからさ。どうしたの？何か悩み事？」

「いいえ、大した事じゃ無いの」

「そう？それにしては凄い考え込んでた気がするけど。気づいてた？何回も僕が呼んだの」

何回も？私はてつきり一度呼ばれただけだと思つていた。だけど、どうやらその一度きりでは無かつたようだ。自分でも気づいていなかったけれども、思つた以上に私の中で深刻な問題になつていたのかもしれない。

「……ごめんなさい。気づかなかつたわ」

「だよ。え。やつぱり、何かあつたんじやない？だつたら遠慮無く僕に言つてよ。僕はい

つだつて千聖の力になりたいんだ。千聖がいつも僕の力になってくれてるように、僕だつて千聖の力になりたいんだ」

雅のその言葉が今は有り難かった。私のことを心配そんな眼差しで見つめてくれる雅。それだけで、少し気分が落ち着く気がした。だけど、雅に相談することを私はしたくなかった。

「雅、ありがとう。だけど、ごめんなさい。これは私の問題なの。言つても、雅に迷惑をかけるだけだわ」

そう、これは私自身の問題。雅には何も関係が無い。それなのに、雅に相談しても、彼の迷惑になるだけ。それだけは絶対に嫌だった。

「あのね千聖。言つてくれない方が僕にとつて迷惑になるんだよ。千聖、気づいてる？最近の千聖、元気が無いよ？よく暗い顔をするようになってるよ？そんな千聖を見てると、僕は気が気じゃ無いよ。心配で堪らないよ。はつきり言つて迷惑になってるんだよ。言つてみて？僕にできる限りのことはなんでもするからさ」

「雅……」

そんな私の思考は、その雅の言葉で一瞬にして崩れ去つた。雅に言われるまで、何一つとして気づいていなかった。まさか、既に私が雅の迷惑になっていたなんて。その事実気づいたからには、私にはなんの躊躇も残つていなかった。

「わかったわ。雅、実はね……」

それから私は、雅に事のあらましを一から説明した。その間も、雅は一字一句聞き逃さないように、真摯になって耳を傾けてくれていた。そんな雅の姿勢が、嬉しかった。ああ、本気で私のことを想って、私のために考えてくれているんだなと、それだけで幸せな気持ちになれた。

「なるほどね。よくわかったよ。だけど千聖、たぶんだけでも既に千聖の中では答えができてるんじゃないの？」

その雅の言葉に、私は思わず驚愕してしまった。私が雅に説明したのは、あくまであらましだけ。私の意見等は全く説明していない。それなのに、雅に気づかれていた。雅は、人の気持ちに疎い。だけど、こうやって時々鋭い指摘をしてることがある。そういうときは、決まってカンだと言うのだから驚きを通り越して、呆れてしまう。

「……雅の言う通りよ。だけど、これだけはダメ。雅に迷惑をかけてしまうことになるわ」

「言つたはずだよ千聖。僕にできることはなんでもするつて。いいから言つてみて」

「……雅、このステージ、あなたにおまかせできないかしら？私では、皆を満足させるにも限度がある。私一人でなんとかするよりも、あなたにおまかせした方が適切かと思つたの。だから、お願いできないかしら？」

「うん、まかせておいて。千聖の期待に応えられる、素敵で最高なステージにしてみせるよ」

わかつていた。雅なら二つ返事で引き受けてくれることは。だからこそ、お願いしたくなかった。お願いしてしまうと、また次も彼の優しさに甘えたくなくなってしまうから。そんな甘い自分が、許せなかった。

「そうだわ雅。折角だからメンバーを集めて一日限りの限定バンドを結成しましょう」
「限定バンド？」

「ええ、メンバー集めは私にまかせて。お祭りに相応しい、素敵で最高なメンバーを集めてみせるわ」

だからこそ、私は少しでも雅の力になつてみせる。折角のお祭り。それに相応しいメンバーを集めてみせる。そう決意していたときには、私の不安は既に消え去っていたのだった。

「これはまた、凄いメンバーが揃ったね」

そう雅が言う。だけれども、それも仕方ないでしょう。今日は限定バンドの初顔合わせの日。そこに集まったメンバーは、私と雅、そして、花音、薫、イヴちゃんの五人。薫は、この前羽女の文化祭に出演する交換条件で勧誘した。花音は、一種の罰則で巻き込んだ。そして、メンバーの担当楽器のバランスを考えて、イブちゃんを勧誘しておいた。我ながら、凄いメンバーだと思う。色んな意味で。

「ほ、本当にこのメンバーで、学校の皆の前で演奏するの？ふ、ふええ、い、今から緊張してきたよ……」

「あはは。花音、緊張が苦痛ならば、今から本番まで練習に打ち込めばいいさ。シエイクスピアも言っている。楽しんでやる苦労は、苦痛を癒やす物だと。つまり、そういうことよ」

「あはは、まあそうだね。緊張するなら、不安が無くなるぐらい練習に打ち込めばいいね。失敗するかも、って思うから緊張するんだよ。だったら、失敗を絶対にしないって確信できるぐらいに、練習すればいいんだよ。まあ、単純な話だけだね」

「そうですね！私も緊張しますけど、それ以上に楽しみです！折角お誘いしていただいたこの機会、ブシドーの精神で頑張ります！皆さん、楽しんでいきましょう！」

「ふふつ、そうね。折角の機会だから、楽しまないと勿体ないわね。練習も、本番も。精一杯やって、楽しんで、そして最高の音を奏でましょう」

全員が決意を固め、練習に打ち込む。本番までの練習時間は限られている。一分、一秒も時間を無駄にしたくない。それに、私達が演奏するのは雅自身の曲。雅の曲は、そのクオリティも相まって奏でるのにも相応の技術が要求される。要するに、難しい。パスパレ用につ作ってくれている楽曲は、私達に合わせた難易度にしてきているからまだいい。だけど、雅自身の曲はとにかく難しかった。

だけど、決して中途半端なクオリティで妥協したくは無い。限定バンドを提唱したのは私自身。それなのに雅の足を引っ張るようなクオリティの演奏は絶対にできない。そもそも、雅の曲をそんな演奏で汚すことなんて、できるわけがない。それならば、二度と演奏できなくなっただ方がマシとさえ思える。

「薫、サビの入りが雑になってるよ。この曲のサビへの切り替えは変則的で難しいけど、だからこそ丁寧にお願い」

「わたった。心がけよう」

「イヴちゃんはまだまだ指が曲についていけないっばいね。この曲は忙しいから、まずは指が慣れるまでパートごとに練習していこう」

「うー難しいです・・・」

「花音ちゃん、この曲のドラムは凄く重要になる。リズムが変則的で難しいからこそ、ドラムが一番リズムを取り持って、皆の道標になってあげないといけない。だけど、さっ

きからリズムが全体的に遅れがちになってるよ。もうワンテンポ速いリズムを心がけて叩いてみよう」

「ふええ、これ以上は手が着いていけないよ……」

「千聖はさすがと言ったところだね。今のところ一番完成度が高い。だけど、丁寧にしよう」と心がけすぎるあまり、時々音が単調になりすぎてるよ。リズムだけじゃなくて、音の強弱もこの曲にとっては大切な要素になってくるから、場面場面で合わせた弾き方を心がけてみよう」

「ええ、わかったわ」

こうして、雅も熱心に皆のことを指導してくれている。確かに、まだ全体的にクオリティは低い物になっている。だけど、絶対に皆で本番は成功させてみせる。全員の目が語っている。雅にダメだしをされて、弱音を吐いても、絶対に諦めるものかと。この曲を自分のものにしてみせると。

「皆！このセットリストの曲を全てものにした時には、今よりもワンランクもツーランクも上の演奏ができるようになってると僕が保障するよ！だから、絶対に諦めないで、食らいついてきてね！」

その雅の言葉に、全員の目に火が付いたのがわかる。勿論、私にも。それからの私達は、本番に向けて時間が許す限り、特訓に励んでいった。その甲斐もあって、直前の通

し練習を迎える頃には、全員見違えるような演奏ができるようになっていたのだった。

そして、ついに文化祭当日を迎えた。その日私は、午前中クラスの手伝いをする事になっていった。私のクラスはメイド喫茶を催している。さすがメイド効果とでも言えはいいのかしら？私のクラスは大変な賑わいを見せていた。

ホール担当の子達が忙しく動き回っている。そんな中、私は厨房の担当に指名されていた。私の料理の腕が買われたというのもある。だけど、それ以上に私がホールに出られない理由があった。その理由は、私自身。

私は、そこそこ名の通った有名人だ。そんな私が、人前でメイド服なんて着たら、それだけで文化祭どころでは無い騒ぎになってしまう。だから、私は厨房のお手伝いだけに留まっていた。といっても、服装事態はメイド服を着ている。理由はもちろん、雅に見てもらうためだ。

「び、VIPカスタマーM様ご来店です！」

と、花音の声が厨房内に響く。VIPカスタマーというのはこのクラスの子の彼氏の

総称だ。そして、M様というのは雅のことだ。

「さあ、ちーちゃん！雅様のことを思いつきり持てなしてあげて！……あーやっぱダメ！羨ましすぎるよ！やっぱり私がちーちゃんに持てなしてもらって、雅様を私が持てなす！」

「結局どちらの立場になりたいのよ……」

そんな委員長ちゃんに向かって、呆れたため息を吐き、私は隣に用意された個室に向かう。個室に入り、しばらくすると、扉が開け放たれ雅が入ってきた。

「お帰りなさいませ。ご主人様」

私のことを見て呆然としている雅。だけど、何故かすぐに違う方を向いてしまう。どうかしたのかしら？

「えっと、一応聞くけど、千聖、なんでそんな格好を？」

「あら？言っていないなかったかしら？私のクラスは喫茶店を催しているのよ」

「それは聞いたけど、そんな格好をする必要があるの？」

「ええ、もちろんよ。喫茶店は喫茶店でも、メイド喫茶だもの。当然だわ」

実際に、雅には喫茶店を開くと言うこと以外何も伝えていない。理由はその方が面白そうだったから。雅の驚いた顔が見たかったのだけれども、思っていた反応と全く違う反応が返ってきて悲しくなる。

「それとも、雅は私のこんな格好じや不満かしら？」

そういつて、俯く私。正直、少し悲しかった。雅に喜んでもらえるかと思つてこんな格好をしたのに、お気に召さなかつたとあれば、悲しくなつてしまふ。

「そ、そんな訳無いじゃないか！だつて、その、千聖が眩しすぎて直視することができないほどなんだから……」

だけど、その悲しみはそんな雅の言葉で全て吹き飛んでしまつた。それと同時に、今度は恥ずかしさと照れくささが込み上げてくる。

「そ、そう。あ、ありがとう」

そして、今度は恥ずかしくて俯いてしまふ。恥ずかしくて、私も雅のことを直視することができない。だけど、いつまでもこのままいるわけにもいかない。

「そ、それより、折角来てくれたのだからおもてなしするわ。ほら、座つて」

「あ、うん」

私は、恥ずかしさをごまかすように雅を席に着かせた。その後も、手際よく準備を整えていく。

「ゆつくり見てくれていいわよ」

「うん。そうだね。もうちよつと考えてみるよ」

そう言つて、メニューを吟味していく雅。私もどうしてこうなつたのかわからないけ

れども、この喫茶店のメニューは非常に豊富になっている。雅の好きそうなメニューも数多く取り扱っているので、悩むのも仕方ないでしょう。

「そういえば、あの特別招待券ってなんなの？」

急に雅がそんなことを聞いてくる。そういえば、これも雅には説明していなかった。といつても、説明するほどのことでも無い気がするけれども。

「あーあれね。このクラスって、実は恋人がいる子が多いらしいのよ。それで、それを知った委員長が折角だから、恋人を個室に閉じ込めて色々しちやいなさいって言って、こんなことになったのよ」

本当に、どうしてこうなったのかしら？委員長の暴走があつたとはいえ、やっぱりこの喫茶店はどこかおかしい気がする。

「それより、注文は決まったかしら？」

「うーん、そうだね。じゃあこのオムライスにしようかな」

「わかったわ。少し待っててね」

そう言つて私は、厨房を借りに行く。私は、雅の注文だけは他の人に作らせるつもりが無かつた。私を作る。雅の舌の好みを一番知っているのは私。顧客が最も求める物を提供するの是最も重要なことでしよう。

「おまたせ、雅」

「ううん、ありがとう。．．．ってあれ？」

私が運んできたオムライスを見て不思議そうにしている雅。その反応は、私が望んでいた物だから、つい嬉しくなってしまう。

「千聖、このオムライス、ケチャップがかかってないよ？」

そう。私が運んできたオムライスにはケチャップをかけていなかった。雅が不思議がるのも当然でしょう。だけど勿論、嫌がらせでこんなことをしているわけではない。ちゃんと今からかけてあげる。

「ふふっ、今からかけてあげるわよ。待ってて」

そう言つて、私はオムライスにケチャップをかけていく。ゆつくりと、丁寧に、愛情を込めてかけていく。うん、我ながら見事な完成度だと思う。

「ほら、できたわよ」

「おー．．．」

そのオムライスには、綺麗なハートが描かれていた。我ながら惚れ惚れする出来だと思ふ。

「て、あれ？千聖、スプーンが無いよ？」

そう言う雅。だけど、それも勿論わかつている。スプーンは、私が持っているのだから。

「ふふっ、わかってるわよ。待っててね。はい、雅、あーん」

私は、オムライスを一口分すくって、雅の口元に持つて行く。所謂、あーんと呼ばれる行為だ。自分でやっててあれだけでも、これ、恥ずかしいわね。

「ち、千聖？」

「ほら、あーん」

「あ、あーん」

口を開けた雅の口の中に溢さないように気をつけながらスプーンを入れてあげる。そんな雅の顔も、茹で蛸みたいに真っ赤になっていた。たぶん、私もなっていると思うけれども。

「ふふっ、ほら、じつとしてて」

「ん、ありがとう」

雅の口元についたケチャップを紙ナプキンで拭いてあげる。その後も、そんなことを繰り返し私達は幸せな時間を満喫していった。凄く幸せな時間だった。だけれども、いつまでも続けているわけにもいかない。時間は自然に流れていくのだから。

「あら、そろそろ時間ね。雅、着替えてくるからちよつとだけ待つてくれるかしら？」
「もちろんだよ」

そう言い残して、私は厨房の中に入っていく。もちろん、着替えるためにだ。

「うー、ちーちゃんにあーんされるのも羨ましいし、雅様にあーんするのも羨ましいし、結論どっちも羨ましい！私もそんなことしたいしされたい人生だった！」

「・・・やつぱり見ていたのね」

厨房に入った私を出迎えたのは頭を抱えて蹲った委員長ちゃんだった。なんとなく察してはいたけど、どうやら一部始終を見ていたらしい。まあ、見られて減る物でもないからいいけれども。

「それじゃ、私は先に上がらせていただくわね。後はお願いね」

「はーい！楽しんできてね！」

私は直ぐさま制服に着替え、厨房を後にする。クラスの皆はまだ忙しく働いている。そんな中抜けさせていただくのはなんとも罪悪感に駆られてしまう。だけど、ステージが始まる頃には出し物は全て終わり、皆見に来てくれる。だったら、最高のステージを披露して、せめてものお返しにしましょう。そう決意を新たに、個室に入る。「お待たせ。それじゃ、行きましょ？」

そう言つて、私達は個室を後にした。外に出ると、そこにはまだ花音がいた。

「花音、それじゃ私は行くわね。また後でね」

「うん。あ、そうだ。えっと、お持ち帰りですか？」

花音のそんな発言に、思わずずっこけそうになってしまう。この子は、一体どこでそ

んなセリフを教わったのかしら？

「花音？ 一体そんな言葉誰に教わったのかしら？」

「ふ、ふええ、い、委員長に誰かが出てきたら言うようにって……」

どうやら、これもあの委員長ちゃんの仕業らしい。本当にあの委員長はなんて言葉の花音に言わせてるのよ。これは今度お説教が必要かしら？ なんてかしら？ お説教をすると何故か喜ぶ委員長ちゃんの様子が想像できた。

「本当にあの委員長は……まあいいわ。それじゃあ雅、行きましようか」

「うん、そうだね。じゃあ花音ちゃん、また後でね」

「うん、楽しんできてね」

そう言い残して、私と雅はその場を後にする。さて、どこから行きましようか？

その後の私達は、お化け屋敷で恐怖体験をしたり、彩ちゃんにお説教をしたり、女の子に囲まれた薫に呆れたりして文化祭を満喫していった。そして、ついにステージの時間がやってきた。途中で合流した皆と一緒に、私はステージへの扉を開けた。

「あ、白鷺さん、お待ちしてました！」

そしてステージの舞台裏に入ると、生徒会の子が私達を出迎えてくれた。といって、彼女からは死角になっていて、私以外のメンバーには気づいていないでしょうけど。

「それで、どんなパフォーマンスを見せていただけれるんですか？」

「この五人で、ライブパフォーマンスをするわ」

「五人？」

そこで、私の後ろに視線をこらし、漸く他のメンバーの存在に気づく。そして、その表情は一瞬で驚愕の色に変わっていった。まあ、それも当然でしょうね。

「み、雅様!」

「なるほど、君もそういうタイプの子だったんだね」

どうやらそうみたいだね。委員長ちゃんもそうだったけど、やっぱりこの学校にも雅のファンは多いように感じる。まあ、最近は女子中高生の間でカリスマ的人気になりつつあるって雑誌にも載ってたし、仕方ないのかもしれないわね。

「こ、こうしちゃいられません! それでは、間もなくステージが始まります! 私の声に従って、ステージに上がってきて下さいね!」

そう言つて、慌ただしくその場を後にする生徒会の子。おそらく、司会の準備に入つたのでしよう。

「さて、皆、これは今日限りのスペシャルライブだよ。思いつきり楽しんじゃおう！」
「そうね。こんな機会、もう二度とあると思えないわ。そんなの、楽しまないと損よね」
「ああ、もちろんだ。輝くもの、必ずしも金ならず。今日という日を輝かしいものにしてみせよう」

「私も、精一杯頑張ります！今日は楽しみましょう！」

「ふええ、私は緊張するよ・・・でも、そうだよ。楽しまなきゃ勿体ないよね。私も、頑張るよ」

「大変長らくお待ちしました！間もなく花咲川女子学園高校文化祭秋の部恒例、シークレットステージが始まります！」

そして全員で、意気込みを語っているとその声が聞こえてきた。ついに始まる。緊張していないと言えば嘘になる。だけど、不思議と嫌な感じはしなかった。心地良い緊張感と言うのかしら？逆に有り難いとすら思えた。

「なんと！今回のシークレットステージ、凄い人がパフォーマンスとして来て下さってます！はつきり言わせていただきます！今日のステージこそが過去最高のステージになります！今日お集まりの皆さんは、是非歴史の生き証人になってください！それでは、お願いします！」

ついに呼び出しがかかる。私達の出番だ。雅を先頭に、全員ステージに上がる。その

瞬間、会場は異様な静寂に包まれた。誰もが、雅を見て固まっている。それも当然でしょう。誰も予想しないような刺客が、ステージに躍り出たのだから。

「みなさーん！文化祭楽しんでますか！どうも、黒城雅です！知らない人は是非覚えて帰って下さい！」

その雅の声を聞き、徐々に沸き上がる歓声。数秒も経てば歓声の大合唱が巻き起こっていた。

「それじゃ、まずは挨拶代わりに一曲聞いて下さい！welcome to my world！」

そして、一曲目の演奏が始まる。出だしは全員順調。練習の時、全員一番苦労していたのがこの曲だった。雅自身をテーマにしたこの楽曲。そのテーマに相應しいように、この楽曲には雅の音があらゆる形で詰め込まれていた。変調的にならざるを得ないほどに。

その音達が、共存して高い水準でバランスを取り合っているのだから雅の作曲センスには脱帽してしまう。だけどその分、その変調的テンポとリズムに合わせるのに全員が苦労した。だけど、今ステージでしている演奏はどうだろう？全員、目を見張るような演奏で、この曲に食らいついていっている。

そして曲が終わる。素晴らしい演奏だったと思う。誰一人として、曲に振り回される

こと無く、しっかり食らいついていくことができている。勿論、完璧とまでは言えなかったけれども、それでも十分すぎるぐらいの完成度にはなったと思う。

「改めましてこんにちは！黒城雅です！」

雅の言葉に、張り裂けんばかりの歓声が巻き起こる。ここは本当に学校の体育館なのかしら？どこかのドームやアリーナと変わらない気がしてきた。

「それじゃ、今日僕に付き合ってくれる、素敵で最高なメンバーを紹介していきまーす！まずはギター、薫！」

雅の紹介に応じて、ソロパフォーマンスを披露する薫。その演奏技術は、本当にレベルアップを果たしていた。その技術と彼女の容姿も相まって非常に様になっている。認めたくは無いけど、不覚にもかっこいいと思ってしまった。認めたくは無いけど。

「ベース、千聖！」

雅に呼ばれて、私もソロパフォーマンスを披露する。薫にだけは負けたくない。その一心でベースを弾く。もちろん、観客に向かって愛想を振りまくことも忘れない。

「キーボード、イヴ！」

そしてイヴちゃん。最初は中々指が曲に着いていけず苦労していた彼女。だけど、それを持ち前の向上心で克服して見せた彼女。おそらく、一番練習していたんじゃないかしら？とにかく、その練習量により見事に彼女は自分の殻を打ち破って見せた。そのソ

ロパフォーマンズは、そんな彼女を体现したかのように高次元のものになっていた。

「ドラム、花音！」

そして花音。雅は言っていた。ドラムは皆の道標になつてあげないといけないと。彼女は、そんな雅の期待に見事に応えて見せた。今なら、安心して花音に私の音を任せられる。私の音をきつと導いてくれるはずだと。

「そして最後に、ボーカルは僕黒城雅です！この五人で今日は皆に夢のような時間をお届けします！バンド名はエターナル！今日一日限りのスペシャルライブをご堪能あれ！それじゃ次の曲いってみよう！」

エターナル。その意味は永遠。このバンドとしての活動は今日一日限りだけど、皆で奏でた音は永遠に忘れないと言つて、雅がつけたバンド名。他にも意味はあるみたいだけど、その意味が私は好きだった。皆で取り組んだ時間を忘れない。忘れたくない。本当に短いけど、最高の時間だった。だけど悲しいけれども、何事に対しても必ず終わりはやつてくる。

「皆さん、盛り上がってますか！」

その雅の声に対して、最大限の歓声で応える皆。おそらく皆察しているのでしょう。終わりが来るということに。

「本当に名残惜しいですが、次が最後の曲になります！」

その言葉を聞いて、明らかな悲壮感に包まれる皆。私だって悲しい。叶うならば、永遠にこの時間を過ごしたいとさえ思っている。だけど、それは決して叶わない願い。だけど、終わりは別れでは無い。

「次の曲で今日はお別れになります！だけど、これだけは覚えていて下さい。僕が歌う、いいえ、誰が歌う歌にも決して目に見えた形はありません。だけど、それでも、皆さんの中には、皆さんの心の中にはいつまでも残り続けます！歌に形なんて、必要ありません！そんなもの無くたって、いつだって皆には見ることができんだから！そのことを胸に留めて聞いて下さい！メモリア！」

歌に形なんて必要無い。本当にその通りだと思う。雅の歌は、私達の演奏はおそらくこれからも、ずっとずっと私達の中で鳴り続ける。音を奏で続ける。目に見えなくても、音を鳴らし続ける。

そして、最後の演奏が始まる。曲はメモリア。雅の始まりの歌。普段は謝罪の意を込めてこの歌を歌っている雅。だけど、今日のメモリアからは、溢れんばかりの感謝の意を感じ取ることができた。聞いてくれているお客さんに向けて。そして、私に向けての。

そんな雅と、不意に目が合った。そんな雅に私はアイコンタクトであることをお願いする。それに対して、彼は微笑みかけてくる。つまり、了承の合図だ。私達は、どちら

からともなく、お互いに近づいていく。

そして、お互いに背を預け演奏を始める。ついでに、歌声も二つに増やす。私も今日の演奏を聞いてくれた皆に、そして雅に向けて感謝の気持ちを歌に込めて送る。素晴らしい時間を与えてくれたことに對する感謝の気持ちを。

その後の会場内は、私達の演奏が全て終わった後も、鳴り止まない大歓声に包まれていたのだった。素晴らしく心に響く、大歓声に。

「うー、痛いわ・・・」

「ほら、もう少しだから頑張って」

私達は今、文化祭の全日程を終えて、帰路についていた。そんな帰り道、私は急激に訪れた筋肉痛に悩まされていた。原因は、お化け屋敷での全力疾走。あの時のダメージが今になって襲ってきた。おそらく、ステージが終了した事による緊張感の喪失が原因だと思う。適度な緊張感が解けたことよって、それまで無意識に感じないようにしていた痛みが襲ってきたのだと思う。

そして私は今、帰り道の上り坂を上っていた。綺麗な夕日に照りつけられたこの坂が、今は地獄と化していた。最初は、雅が負ぶってくれと言っていたのだけれども、それは私が拒否した。さすがに人目もあるのに、そんなことをお願いできるわけが無い。私は雅の少し後ろを、ゆっくりとした歩みでついていっていた。

「ほら、もう少しだから」

そう言つて、雅は私に顔を向けず、手だけを差し出してくれた。私は、その手を握る。私の足を気遣いながら、雅が引つ張つていつてくれる。おかげで足への負担もかなり減った気がする。

その指から、雅の鼓動が伝わってくる。その鼓動が、なんだか凄く愛おしく感じた。手を取つてくれる、雅の優しさが凄く愛おしく感じた。

そんな、ありふれた幸せが、凄く愛おしかった。

叶うことならば、この幸せが永遠に続けば良いのに。

そう思わずにはいられない、夕日照らす坂における、ありふれた日常のほんの一幕だった。

第37演目 お花畑に連れてって

それは、秋半ばの、ある日のことだった。

「おはようございます」

「皆、おはよう」

「あ、雅君、千聖ちゃん！おはよう！」

僕と千聖は、呼び出しを受けて、事務所に来ていた。そこには既に他のメンバーが集合していた。どうやら、呼び出されたのは僕達だけではなかったらしい。どうやら、到着は僕達が一番最後だったようだ。

「おはよう皆。もしかして皆も？」

「ええ。ジブン達も昨日送られてきたスタッフさんからのメールに呼ばれて来ました」

そう、僕は昨日送られてきた事務所のスタッフさんからのメールに呼ばれてやってきた。メールには簡潔に一言、明日事務所に来て下さい。大事な話があるとだけ記されていた。

「そうだったのね。ということとは皆集まった理由は……」

「はい。みんなわかりません。これはもしかして、非常事態というものでしょうか？」

「非常事態かどうかはわからないけど、なんだかこの感じ、パスパレ結成の時を思い出すね。ううつ、そう思うとなんだか緊張してきちゃった・・・」

皆の顔には、それぞれ不安の色が在り在りと浮かんでいた。それもそうだろう。理由も何も報されずに、ただ来るようにだけ言われたのだ。今聞かされるのは良い報せなのか悪い報せなのかもわからない。

人間とは基本的にネガティブな生き物だ。今から何かが起こるが、それが自分にとって良いことか悪いことかがわからない時、基本的にまず悪い方向に物事を考えてしまう。良い方向に都合よく考えられるポジティブマンは少数派だろう。悪い方向に想定しておけば、いざという時の心理的ショックを和らげられる。そういう心理的防衛本能が、精神をネガティブ方面に押し進める。

事務所内も当然、悪い空気に包まれていた。かくいう僕も、今はネガティブ方面に染められている。悪い想定ばかりが脳内を駆け巡る。おそらく、皆も僕と同じ状況に陥っているのだろう。ドンヨリとした空気に包まれているのがよくわかる。只、一人を除いて。

「うーん。あたしは大丈夫だと思っけどなー」

日菜ちゃんだ。彼女はどうかやら少数派だったらしい。只一人だけ、なんだか楽しそうにしていた。まるで、どんな良い報せが来るのかと、ワクワクしているかのように。

「日菜ちゃん、どうしてそう思うのかしら？」

「理由なんて特に無いよー。ただ、なんとなく、るんって来るようなことがあるような気があたしはするなー」

「あはは、日菜ちゃんはポジティブでいいね。私は、こういう時悪いことばつか考えちゃうよ・・・」

「お待たせしました。皆さん、集まっていますね」

そして、ついにその時はやってきた。スタッフさんが部屋に入ってくる。一体どんな報告がされるのか。聞きたくないけど聞きたい。そんな二つの相反する感情が僕の中でせめぎ合う。果たしてもたらされた報告とは・・・

「なんと、みなさんの2時間特番が決まりました！しかも地上波ですー！」

紛うことなき朗報だった。みなさんと言っても、僕以外のパスペレの皆のことだろう。僕には直接関係が無いとはいえ、朗報なのには変わりない。これも、皆がこれまで頑張ってきた努力の結果と言えるだろう。

「ええー!?地上波で特番ですか!?!」

「地上波ということは、今よりたくさんの人に見られるということですね。ジブン、考えただけで緊張してきました・・・」

「ほら、やっぱりるんってする内容だったね。おねーちゃんにも教えてあげないと!」

「あの、トクバンって何ですか？」

「皆の特集を番組でするんだよ。言い換えたら、皆の番組が作ってもらえるってことかな」

「わ、私達の番組ですか!? 素晴らしいです!」

本当に素晴らしいニュースだ。皆も大はしゃぎで喜んでいる。そんな中でも、只一人千聖だけは何やら思案顔で、俯いている。おそらく彼女のことだ。今回の話が美味しすぎて、何か裏があるのではないかと疑っているのだろう。確かに、ちよつと美味しすぎる気もする。

「しかも! 放送に合わせて新曲も発売することになりました!」

「し、新曲もですか!? ううっ、私嬉しいよ……」

「あはは! 彩ちゃん涙目になってる!」

「だ、だって……」

「フへへ、でも、彩さんの気持ちもわかりますよ。ジブンもなんだか感動しちやっつて、思わずもらい泣きしちやいそうですよ……」

「嬉しいことが一度に二つも。なるほど、これが一石二鳥というやつですね!」

「ふふっ、イヴちゃん、それはちよつと違うわよ。そうね、特番と新曲の発売のタイミングを合わせるのはいいことだと思います。だけど……」

そう言うって、僕の方に目を向けてくる千聖。おそらく、彼女も僕と同じ事を考えているのだろう。確かに、新曲の発売を同時に行うのはいいことだ。だけど、その新曲は誰が作るんだろうか？

「あの、その新曲って誰が作るんですか？」

「え？何を言ってるんですか。雅さんに決まってるじゃないですか」

そう。そんなのは聞くまでもない。当然、僕に決まっている。こんなのは只の愚問だった。だけど一つだけどうしても訴えたいことがある。

「そんな話一言も聞いてないんですけど!？」

「あはは、それはもちろん、今初めて言いましたから」

そう、してやったりと言わんばかりの顔で言ってくるスタッフさん。曲を作れと言われても、そう簡単に作り出せるものでもない。もつと余裕を持って、前もって伝えて欲しいんだけど、ここのスタッフは伝えるのが本当に遅すぎると思う。困ったものだ。

「それで、特番の内容はどのようなものでしょうか？」

「皆さんが無人島で様々なミッションに挑戦する、というものです。全てのミッションをクリアすることで、その報酬として新曲発売になります」

「え？じゃあ、達成できなかつたら新曲も無しってことですか？」

「失敗の許されないサバイバルゲームですか。ううっ、ジブン、益々緊張してきまし

た・・・」

「無人島、私達、生きて帰ってこれるのでしょうか？」

「あはは、イヴちゃん大丈夫だよ。だって只のテレビの企画だよ？命に関わるような事態に陥ったら大問題だって」

「無人島でサバイバルかー。うーん楽しそー！きつと、さつきはこれにるんってきたんだね！」

「それで、その特番、収録はいつからになるんですか？」

「3日後です！」

三日後。どうやら思ったよりも急な日程なようだ。僕も急いで新曲の準備をしないと間に合わないかもしれない。早速、今日帰ってから取りかかろう。

「3日後?!そんな急に・・・」

「これは、急いで準備をしないといけませんね。早速、帰りにホームセンターに寄って行きましょう」

「私も、お供します！」

「ねーねー。おやつは持って行っていいの？」

「ふふつ、日菜ちゃん、遠足じゃないのよ」

「皆、急な日程だけど、頑張ってきてね」

「あ、雅さんもスタッフとして同行していただきますよ」

え？このスタッフさんは何を言ってるのだろうか？只でさえ、新曲を作る時間が限られているのに、そんなことをしてる時間があるわけない。

「なんでですか!?!新曲を作る時間が欲しいんですけど・・・」

「その新曲のためです。雅さんには、無人島でサバイバルをする皆さんをモデルにして、新曲を作って欲しいのです」

なるほど。特番の放送と新曲の発売を合わせたうえで、その新曲の内容と特番の内容もリンクさせるということらしい。中々理にかなってる気もする。それはそれでアリかもしれない。

「そういうことならわかりました。僕も同行します」

「え？雅君も来るの？うーん、益々るんってきた!」

「ふふつ、雅も来てくれるのは頼もしいわね」

「ミヤビさんが援軍として来て下さるのなら、百人力ですね!」

「雅さんはスタッフとして参加するので、援護にはならないと思いますが、頼もしいのは間違いないですね」

「よーし!皆、頑張るぞー!」

「おー!」

そして、僕とパスパレの皆は、無人島へと向かうことになった。果たしてそこで待ち受けるミツシヨンとはなんなのだろうか？期待と不安を胸に、皆はその日を待つのだ。た。

そして収録日がついにやってきた。

生い茂る深い緑、どこまでも続く青い海、それに負けじと青い空、しかしそれ以外に目立った物は何も無い。人の気配も、今正にこの地に降り立った僕達以外には全く無い。まさに無人島。この島で、僕達は今日一日を過ごすことになる。

もう秋半ばだというのに、容赦ない紫外線が僕達に襲いかかってくる。本当にここは日本なのだろうか？知らぬ間に国境を越えてしまったのかとさえ思ってしまうような、絵に描いたような南国の無人島だった。

「それではパスパレの皆さんは砂浜で待機しててください。雅さんは私達の準備を手伝っていただいでよろしいでしょうか？」

「わかりました」

同行しているスタッフの人数も少ない。本当に必要最低限といった様相だ。おそらく、皆に対して助けは入らない、自分たちの力でなんとかしてみせろということを暗に示しているのだろう。同行しているスタッフさんも、僕達の知っているような事務所の関係者の人はいない。おそらく、この番組のために集められたテレビ局側のスタッフだろう。

「それでは、雅さんは離れた位置から皆さんの様子を観察して、新曲の参考にして下さいね」

「あ、はい。あの、スタッフさんのお手伝いは・・・」

「ああ、私達の方は気にしなくて大丈夫ですよ。人数は必要最低限とはいえ、皆その道のプロですから。ヘルプが無くても、自分が受け持った仕事ぐらい、自分自身の力で滞りなく熟すことぐらいできますよ。雅さんは是非、ご自身の仕事に集中して下さい。雅さんが作る曲は、この番組の締めに使わせていただきますから」

「スタッフさん・・・はい、わかりました！」

「ま、締めに使えるかどうかはパスパレの皆さん次第ですけどね」

「あはは、そうですね」

僕は、その厚意に甘え、曲作りに専念させていただくことにした。確かに、スタッフさんの言う通り、皆がミッションを成功したならば、新曲の発表も当然番組内で行う。

もつと言うなら番組の最後に宣伝として流すだろう。最後を飾るに相応しい、この企画を印象づける、象徴するような一曲を作ってみせる。といつても、皆がミッションを成功しないと意味が無いわけだけど。

「それでは雅さん、そろそろ収録を始めますので、皆さんの所に行きましようか」

「はい、わかりました」

そして、ついに収録が始まる。因みにだが、ミッションの内容については僕も全く聞いていない。パスパレと親交が深い僕から、皆に情報が漏れないようにするための対策らしい。まあ、僕としても、何も知らない状態の方が純粋なオーディエンス気分であらめ、有り難いけど。

「それでは皆さん、そろそろ撮影を始めますよ」

「あの、もう少し具体的に内容の説明をしていただけますか？」

「そのあたりは、必要があればその都度していきますから、皆さんはミッションに集中して下さい」

千聖の質問に対し、無難な返答だけに留めるスタッフさん。そのスタッフさんの対応に、千聖は僅かながらに不満そうな表情を見せていた。千聖は何事に対しても、できる限りの備えを持って、臨みたいと考えている。だからこそ、何の前情報も無いこの番組の趣旨に不満を感じているのだろう。

「はい、カメラ回りました！パスペレの皆さん、こんにちは！それでは早速、最初のミッシェンを・・・」

「あ、ちよつといいでしょうか？ジブン達はこの島について、全く知識がありません。なので、せめて規模を知るために、ミッシェンの前に島を一周させてもらえると嬉しいですよ」

発言したのは麻弥ちゃんだ。その麻弥ちゃんの発言に対して、何故かスタッフさん達は皆動きを止め、驚いたような表情を見せている。どうしたのだろうか？

「それって、森の中にも入るってこと？大丈夫かな？もし何か出てきたりしたら・・・」
「確かに、危険がある可能性もあります。ですが、それならなおさら、どこが危険なのかを知っておくのも大事だと思います。もしかしたら今いるこの場所が、一番危険ってこともあるかもしれませんから」

「なるほど、地の利を得るってことね」

「あたしは賛成だよ。お散歩みたいで、楽しそうだもん！」

「どうやら、皆の中では麻弥ちゃんの意見に賛同する方向で纏まったらしい。そして、スタッフさんもそれを見て、漸く動き出した。何か小声で会話を行っている。

「おいどうする？確か、島を探索するっていうの最初のミッシェンのはずだろ？」

「仕方ない。そのあたりは編集でなんとかするか。しかし、あの大和麻弥って子、すごい

な。この状況で、よく冷静にあんな判断ができるもんだ」

「どうやら、最初に出すミツシヨンを麻弥ちゃんが先回りで答えてしまったらしい。なるほど、番組の趣旨の裏をいきなりつかれたような形だろう。前情報が何も無いからこそ、スタッフにも意図できない事態に発展することもありえる。」

「これは、番組の趣旨を責めると言うよりも、その判断に行き着いた麻弥ちゃんを褒めるべきだろう。スタッフさんも言つてたけど、本当によくこんな状況で冷静な判断が下せるものだ。」

「そうですね、わかりました。では、皆さんに島を回る時間を与えますね」

「ありがとうございます！では、直射日光をさけて、森を通つていきましよう。強い日差しに当たつていると、それだけで体力が奪われてしまいますから」

「そう言う麻弥ちゃんを先頭に、パスパレの皆は島を歩き始めた。今まで知らなかったんだけど、麻弥ちゃんつてこんなに頼もしかったんだな。」

島を一周した皆は、少しだけ森の中に入り、休憩を取っていた。小一時間ほど歩いた

だろうか？思ったよりも歩いたように感じる。

「ひとまず、これで島は一周しましたね。特に危険なところはなさそうでよかったですね。それじゃあ、島の内側も調べてみましょうか？」

「はい！わかりました！あれ？皆さん見て下さい！向こうに、何か見えますよ！」

イヴちゃんの指差した方向に目を向けてみると、それはどうやら木造の小屋のようだった。以前に誰かが使っていたのだろうか？もしかすると、この島は最初から無人だった訳では無いのかもしれない。

「あれは、小屋のようですね。中を調べて安全そうなら、あそこを拠点にしましょうか？」

「よーし！あたしがいちばーん！」

「あ、日菜ちゃん！先にいったら危ないよ！待って！」

そう言って、小屋の中に入っていく日菜ちゃんと彩ちゃん。その後ろから、皆は苦笑いを浮かべながら着いていく。小屋の中は、思ったよりも綺麗になっていた。家具も置いてあり、少し前まで人が使っていたのではないかと推測できる。

「ここなら、マヤさんの言う通り、拠点にできそうです！」

「そうですね。それじゃあ皆さん、少しここで休憩して、これからの計画を・・・」

「ちよつと待って下さい！」

「え?」

その麻弥ちゃんの言葉に割り込んだのは、スタッフさんだった。それ以上は何も言わせないと言わんばかりの気迫すら窺える。

「ここでお待ちかねの、第一ミッションです!」

「え? 小屋に着いた途端いきなり!?!」

本当にいきなりだった。小屋についてほんの数分の出来事だった。どうやら、ノンビリさせる余裕も与えないらしい。

「それでは発表します。最初のミッションは、自分達で食べるものを集めるです」

「食べ物集め、兵糧攻めですか?」

「イヴちゃん、それはちよつと違うわよ。それよりも、やっぱり飲み物以外は自力でなんとかするしかないみたいね」

「それならまかせて! 食べ物を集めるのなら、きつと私の持つてきた凶鑑が役に立つよ!」

そう言つて、持つていたカバンの中から分厚い本を取り出す彩ちゃん。確か、今回の収録には、各自一つだけ私物を持ち込めるようになっていたはずだ。その、持ち込む私物として彩ちゃんが選んだのがこの凶鑑だったのだろう。彼女にしては、良いチョイスだ。

「彩さん、ちよつと見せて下さい。これは凄いですね！食べれるものかそうでは無いものか、わかりやすく載っています！」

「さすがアヤさんですね！」

「彩ちゃんやるー！」

「えへへ、皆の役に立ててよかったよー！」

皆も彩ちゃんを賞賛している。正直、今回の企画を聞いたときに一番心配していたのは彼女のことだった。だけど、この分なら心配無いかもしれない。

「では、食べ物を取りに行くメンバーを決めましょうか」

「え？皆で行こうよー。そっちの方が楽しいよ？」

「そうだね。皆で行った方が、たくさん食べ物が見つかると思うし」

「確かにそうですけど、ジブン達にはまだ土地勘がありません。そんな状況下で全員探索に出て、もし遭難でもしてしまったらミツシヨンの達成は不可能になってしまいます。ですので、ジブンは何人か待機しておくべきだと思います。そちらの方が、今後のミツシヨンの達成率向上にも繋がるはずですよ」

確かに、麻弥ちゃんの言う通りだ。またも、麻弥ちゃんの冷静な判断が飛び出す。彼女はいい参謀になるかもしれない。

「うん、麻弥ちゃんの言う通りだね！それじゃあ、早速班分けしよう！待機する人は誰に

するっ。」

「うーん、そうだねー。とりあえず、彩ちゃんは残った方がいいと思うな」

「え!?なんで!?!」

「それなら、私は彩ちゃんと一緒に残るわね。彩ちゃんに何かあったら心配だから」

「千聖ちゃんまで!?!」

「アヤさん、たくさん食べ物を集めてきますので、楽しみに待っていて下さいね!」

「イヴちゃんも!?!なんで私は待機班って決まってるの!?!」

「皆さん、彩さんのことが心配なんですよ。彩さんは、ジブン達を信じて待っていて下さい」

「ううっ、嬉しいけど、なんか複雑だよー!」

そして、スタッフさんも含めた皆は、彩ちゃんと千聖を残して小屋から退室していった。僕もそれに同行する。どうやら、スタッフさんは皆食糧確保班に同行するらしい。

「それでは、私達は行きますけれど、雅さんはどうされますか?ここに残っていただいても構いませんけど」

「うーん、そうですね。食糧確保班の映像は、後で見せていただけますか?」

「ええ、それはもちろんです」

「だったら、僕はここに残ります。ちょっと、立ち止まって、静かにこの島の空気を感じ

「たいので。映像は後で参考として見させていただきます」

「わかりました。それでは、また後で」

そう言つて、スタツプさん達は麻弥ちゃん達の後に着いていく。その場には、僕一人が残された。小屋の中に千聖達がいるとはいえ、今僕がいるのは外。僕の今回の仕事は、この島での出来事をモチーフにした曲作りだ。歌詞はもちろん、皆に焦点を当てて書けけれど、曲はこの島の自然の音も取り入れたい。

この島には非常に自然が多い。耳を傾けると、僕の耳に様々な情報が入ってくる。眼を瞑り、耳だけに意識を集中する。聞こえてくるのは、様々な鳥たちの囀り、風に揺れる木々の声、砂浜に押し寄せる波の音。

「きゃあああああああああああああー」

小屋から轟く愛しい人の悲鳴。・・・悲鳴？確かに今、悲鳴が聞こえた。しかも、千聖のものだ。今この場には僕しかいない。そして、小屋の中には千聖と彩ちゃんだけ。今、千聖に何かがあったとすれば、その驚異に立ち向かえるのは僕しかいない。急がないと！僕は急ぎ、小屋の中に足を踏み入れた。

「千聖！どうしたの!?!」

そう思わず叫び、小屋の中に突撃すると、途端に僕の胸元に、何か飛び込んできた。最初は、野生の猛獣でもいたのかと、思わず身構えそうになる。だけど、そんな気負い

は直ぐに霧散した。飛び込んできた誰かが、僕の胸元で震えているのだ。よく見ると、その頭髮には非常に見覚えがあった。この薄黄色の髪は間違いない。千聖だ。千聖が、僕の胸の中で震えていた。

「み、雅い……」

そして、か細い声で僕の名前を呼んでくる。本当に何があったのだろうか？

「えっと、千聖、何があったの？」

「う、ううっ……」

「……うん、ダメそうだね。彩ちゃん、何があったの？」

「あはは、実は、千聖ちゃんの足下に、急に大きな虫が現れて……」

「ああ、虫か……」

千聖は、女の子らしく虫が大の苦手だ。そんな彼女の足下にその苦手な物体、しかも特大のが急に現れたわけだ。いくら千聖でも、絶えきれずに取り乱してしまったのだから。僕は、引っ付いて離れない千聖に気を使いつつ、虫を掴み外に追い出した。

「よし、これでもう大丈夫だよ」

「え、ええ、ありがとう、雅」

「あはは、千聖ちゃん、顔真っ赤だよ」

「彩ちゃん？」

「ひっ、ごめんなさい……」

鬼のような笑顔で彩ちゃんのことを見る千聖。だけど、その顔はまだ真つ赤だった。そして、事態が一旦収まると、外から複数の足音が聞こえてきた。どうやら皆帰ってきたようだ。僕は撮影の邪魔にならないように、二人から離れた壁際に移動した。

「二人ともただいまー！ いっぱい食料集めてきたよー！」

「アヤさん、チサトさん見て下さい！ 果物をこんなに見つけましたよ！」

「お、おかえりなさいみんな。ぶ、無事で本当によかったわ」

「千聖さん、どうかしたんですか？ 顔が真つ赤ですけど？」

「実は千聖ちゃんがね」

「彩ちゃん？」

「ひっ、な、なんでもないよ。あはは」

「ふーん、おかしな彩ちゃん」

思わず言つてしまいそうになってしまった彩ちゃんを、笑顔で制止する千聖。なんだろう。日を追うごとに千聖の笑顔に凄みが増していつている気がする。

「それより、みんな大丈夫だったかしら？ 迷ったりしなかった？」

「それが、マヤさんのお陰で全然迷わなかったんです！」

「うん！ またまた麻弥ちゃん大活躍だったんだよ！」

「べ、別に大したことをしたわけでは……」

「ふふつ、それじゃあ、採ってきてもらった果物を食べながら、麻弥ちゃんの活躍を聞きましようか」

「そうですね！腹が減ってはイクサはできぬ、と言いますからご飯にしましょう！」

その後、食事を皆で取りながら麻弥ちゃんの活躍の話で盛り上がっている。僕も、離れた位置からスタッフさんが用意してくれた果物にありつく。どうやら、今回の撮影はスタッフさんも自給自足で乗り切るらしい。

「ごちそうさま！とつても美味しかったね！皆、本当にありがとう！」

「いえいえ、お役に立ててよかったです！次のミッションも、この調子でいけたらいいのですが……」

そして、その発言を合図にしたかのように、スタッフさんが動き出した。どうやら、次のミッションが始まるようだ。

「皆さん、第一のミッションクリアおめでとーございます！それでは、早速ですが次のミッションに行きたいと思います。次のミッションは、幻の花畑を探せです」

「幻のお花畑？どこにあるんだろう？この島、結構広いし、見つかるのかな？」

「うーん、何かヒントって無いのー？」

「それでは一つだけ。この小屋から向かって南にあります」

「南・・・」

「まずは方向を把握する方向を探さないといけないわね」

「あたしはあつちだと思ふな。勘だけど！」

「日菜さんの勘は信用してませんが、ここで方角を間違えてしまうと、時間のロスになりますし、遭難の危険もあります。ここは、とりあえず一度外に出て、何か手がかりを探しましょう」

そう言う麻弥ちゃんに続いて、スタッフさんも含めた僕達は小屋の外に出た。僕は今、妙なワクワク感に襲われていた。それもこれも、麻弥ちゃんに対してだ。麻弥ちゃんも、この島に来てから、冷静沈着な判断と発想で、ミッシェンを乗り越えてきた。彼女なら、きっとこの難題もクリアするだろうという期待感と、どんな発想でクリアするのだろうかというドキドキ感が合わさっている。本当に、どんな発想で乗り越えてくれるのだろうか？僕は、ミッシェンに失敗するという可能性は一切考慮していなかった。する必要も無いと思っていた。必ず成功する。そう愚直に信じていた。

「うーん、何も思い浮かばないわね。麻弥ちゃん、何かあるかしら？」

「収録前に腕時計で方角を調べる方法を探していたのですが・・・」

「その腕時計が無いですね・・・」

「はい。まさか、時計も持ち込みアイテム扱いとは・・・」

今回の収録には、全員が私物の持ち込みを固く禁じられている。全員、身につけている衣服と各自指定したたった一つの持ち込みアイテム以外は収録前にスタッフさんに没収されている。

「うーん、木に方角とか書いてあれば簡単だったのになー」

「ん？木で南を知る？あー！」

その日菜ちゃんの発言で何か閃いたのだろうか？麻弥ちゃんは、木の下に座り込んで何かを確認し始めた。

「マヤさん。急に座り込んでどうかされたのですか？」

「はい。ちよつと木の根元を確認したくて・・・」

「根元を？コケくらいしか生えてないと思うけれど・・・」

「はい。そのコケを探してまして。コケがたくさん生えているということは、そこには陽が射し込まないってことじゃないですか？ということとは、その方角がおそらく北だということですよ。ただ、一本や二本なら偶然という可能性もありますから、皆さんにも探すのを協力してもらえればより絞り込めると思います」

その麻弥ちゃんの発言を聞いて思わず僕やパスパレの皆、スタッフさんまで黙り込んでしまった。あまりにも、凄い発想だった。僕なんかじゃ、逆立ちしても思い浮かばないような、そんな別次元の発想だった。

「みなさん、どうかしました？ジブン、何か変なことを・・・」

「凄いや！麻弥ちゃん！」

「ええ、本当に。私だったら、絶対に思いつけなかったわ」

「これで、達人の域というやつですね！」

「そ、そんな対したことでは・・・」

「よし、それじゃ早速麻弥隊長の指示に従って、コケをさがそー！」

「ひ、日菜さん、隊長なんてそんな・・・」

そう謙遜しつつも、コケを探す動きを止めない麻弥ちゃん。なんだろう？なんだか段々麻弥ちゃんに貫禄のようなものを感じるようになってきた。本当に、隊長と呼ばれるに相応しい器に見える。

「よし、みなさんのおかげで早く終わりました！ありがとうございますー！」

「それで麻弥ちゃん、南はどっちだかわかったのー？」

「はい、皆さんから頂いた情報を参考にすると、こっちははずですー！」

皆を先導して進んでいく麻弥ちゃん。スタッフさんの様子を見る限り、どうやら方角は正しいようだ。流石麻弥ちゃんだ。またもその発想力で、窮地を乗り切ってみせた。まあ僕は、それ以上に日菜ちゃんが勘で指した方角と、麻弥ちゃんが導き出した方角が完全に一致していることに驚いているけど。

まあ、何はともあれ、これで無事に目的地に辿り着けそうだ。後は、麻弥ちゃんにお花畑に連れていってもらおう。

「はあ、はあ、やっと着いた！」

そう思わず溢す彩ちゃん。本当にやつとの思いだった。ここに来るまでに吊り橋があったのだけれど、その吊り橋がくせ者だった。所々穴が開いてる上に、凄く軋むのだ。そして、吊り橋といえば、絶対に必ず余分に揺らして楽しむ人がどこにでもいるだろう。パスパレの場合、それが日菜ちゃんだった。これでもかというほど吊り橋を揺らして楽しむ日菜ちゃん。それに思わずギブアップしてしまいそうになる彩ちゃん。そして、この窮地を救ったのはまたも麻弥ちゃんだった。全力疾走で吊り橋を渡り、離れていた彩ちゃんの所にやってくると、彩ちゃんを叱咤激励して、見事に全員渡りきって見せた。本当にあの時の麻弥ちゃんはかっこよかった。思わず見とれてしまうほどに。そして、そんな一幕から、僕の作曲のインスピレーションも段々浮かんできた。諦めない気持ち、ネバーギブアップ。この言葉、良いかもしれない。

「え？みんな、見て、この景色・・・」

そこには、一面の花畑が広がっていた。見渡す限り、一面の花畑。それに、花も一色や二色では無い。総計五色だろうか？五色の様々な花が咲き乱れている。これは、この世のものなのだろうか？到底信じられないような幻想的な景色がそこには広がっていた。

「すごいです・・・ヒラヒラと花びらが舞っていて、まるでカブキみたいです！」

「ホントだー！見渡す限りお花だね！るるるるんってきちやっただー！」

「ふふつ、こんな景色を見たら、疲れも忘れてしまうわね」

「はい！ジブンもすっかり疲れが吹き飛んでしまったみたいです！」

「これって、苦労したから余計に綺麗に見えるのかな？」

「そんなことないと思います！」

その通り、そんなことはないと思う。僕は、彼女達のような苦労を特にせず、この場をやってきた。だけど、今見ている景色は本当に幻想的に見える。とはいっても、僕は彼女達からどんな風にこの景色が見えているのかわからない。もしかしたら、僕以上に幻想的に見えている可能性だってある。

「皆さん本当におつかれさまでした！ここが皆さんのゴールとなります」

そのスタツフさんの言葉に、皆驚いたような表情を見せる。同時に安堵の表情も。

「ゴール?ということはつまり全部のミッションをクリアしたということですか?」
「そうです!おめでとうございます!」

「ほんとですか!?!やったー!」

「やりました!みなさん、無事に生き残れましたよ!」

「ふう、ジブンはなんだか、ホツとしました・・・」

「えー、もう終わりー?もつと冒険したかったなー」

「そうね、確かにミッションが少なかった気がするわね」

「はい。実は、ミッション自体はもつと数多くあったんですけれどもね。麻弥さんが発
表するよりも前に次々とクリアしてしまったもので・・・」

「え?そうなんですか?」

なるほど。確かに、最初の砂浜の時も、麻弥ちゃんが先にミッション内容を言っ
てしまったから、スタッフさんも慌てていた。その後も、僕達の知らない間に、麻弥ちゃん
の先読みが発動していたらしい。

「そ、そうなんですか?基本素人なもので、すみません」

「大丈夫ですよ。このままじゃ、番組として成り立たないかもしれないと思っ
ただけ、麻弥さんが逆に頑張って下さったお陰で、良い番組ができそうです」

「そんな、ジブんなんか、全然大したことは・・・」

「ううん。そんなことないよ。麻弥ちゃんは本当に凄かった。それこそ、僕も思わず見とれちゃうほどだったよ」

「み、雅さん、そんな、ジブンなんか・・・」

「あ、雅君いたんだー」

「いたよ！最初から！」

思わず、麻弥ちゃんに声をかけてしまった僕に、日菜ちゃんが言ってくる。まあ、今回はスタツフ側として空気みたいなものだったから仕方ないかもしれない。と、そんなことを考えていると、何やら急に肌寒さを感じてきた。咄嗟に、僕は千聖の方に目を向ける。そこには、まるで般若のような笑みを浮かべた千聖がいた。その笑顔が、暗に語りかけてくる。後で事情を聞くわよ、と。たぶん、麻弥ちゃんに見とれていたと言ってしまったのが原因だろう。ああ、もしかしたら僕は明日の朝日を拝めないかもしれない。いい。

「あ！そうだった！」

「彩さん、急にどうしたんですか？急に大きな声を出して」

麻弥ちゃんの言う通り、急に大きな声を出す彩ちゃん。本当に、どうしてしまったのだらう？僕は今、言い訳を考えるのに忙しいんだけど。

「新曲だよ！」

「新曲？はっ、そうでした！」

「全てのミツシオンをクリアしたってことは・・・」

「はい。皆さんの新曲は予定通り発売されます。大丈夫ですね？雅さん？」

「はい。皆のお陰で、良いインスピレーションが浮かびました。これなら良い曲が作れそうです」

「よかったですね彩さん！ジブンも嬉しいです！」

「ううっ、頑張つてよかったよー・・・」

「と、言いたいところですが、ここで最後に特別ミツシオンです！」

特別ミツシオンだと急に言い出すスタッフ。ここに来て、どうやら最後の壁が彼女達に立ち塞がるらしい。その内容とは一体・・・

「それは、山頂で新曲の告知を叫ぶです！」

「山頂で、新曲の告知？」

「はい！挑戦するのは一人！出来るだけ大きな声で叫んで下さい！」

「一人で、ですか。誰が挑戦しましょうか？」

「こういう時はもちろん・・・」

そう言つて、皆一斉に一人の少女に視線を向ける。その向ける相手は、もちろん決まっている。

「え？なんでみんな私を見てるの!？」

もちろん彩ちゃんだ。彼女以外に適任はいないだろう。

「頑張つて、彩ちゃん」

「雅君までー!？」

そして、渋々山頂に向かう彩ちゃん。ここで素直に行くあたり、本当に良い子だなと思う。そして、そんな彼女を利用した自分に少し嫌悪感が湧いてくる。まあ、僕は今回実質部外者みたいなものだけだ。

「それでは彩さん！お願いしますー！」

「ぱ、パスパレの新曲の発売が決まりましたー！やったー！楽しみにしててねー！」

その叫びは、木霊して彼方へと消えていく。最後の最後にやったー！とは、締まらない終わり方だ。まあ、それが彼女らしいとも思う。何はともあれ、これでミッションコンプリートだ。

「雅さん、お疲れ様でした。新曲の方、よろしく願いますね」

「はい。まかせてください。今日はありがとうございました。知らずの内に、お邪魔になつてたらしいませんでした」

「いえいえ、邪魔だなんてとんでもない。お陰様で、良い画えを撮らせてもらいましたよ」
確かに、良い画えが撮れたと思う。中でも、麻弥ちゃんの活躍は本当に凄かった。彼女

の新たな一面を発見できて、それだけでも素晴らしい一日になったと思う。最初は無人島と聞いて、あまり乗り気じゃ無かったけれど、これなら来てよかったと思える本当に楽しい収録だった。さあ、帰ったら早速新曲作りだ。イメージはとづくにできあがっている。後は形にするだけ。新たな音楽に命を与えよう。そう決意し、僕は今一度幻想的な花畑の光景を目に焼き付けようと、視線を向けるのだった。

さて、千聖への言い訳をどうしようかな・・・

第38演目 NO, Thank You!

これは、月明かりが照らす夜道での一幕だ。

「今日はお月様が綺麗ね」

「そうだね」

その日も、私は日課の家事を終え、雅と共に家路についていた。

季節は秋半ば。段々夜は冷え込むようになってきた。今も、否応なしに体温を奪う冷たい風が吹き込んでいる。だけれども、繋いだ手から流れ込んでくる温もりが、私に体温を分け与えてくれていた。

「だけど、千聖の方が何倍も綺麗だよ」

「へ？あ、ありがとう・・・」

そんな時に、雅からのそんな不意打ちをくらい、思わず気の抜けた声が出してしまった。冷たかった頬に、急激に熱が上ってくる。暗い夜道のせいで、おそらく雅には気づかれていないと思うけど、私の顔は今真っ赤になっているに違いない。

「き、急にどうしたのよ？」

「あはは、なんとなく言ってみただけ。昔見たドラマであったセリフなんだけだね。あ

のドラマのヒロインも今の千聖みたいな反応してたな。へ？って。あはつ、へ？だつて」

「雅？」

「ひつ、ごめんなさい。調子に乗りました」

「どうやら、私はからかわれたただけだったらしい。その後の雅の大笑いに、ちよつとイラツとしてしまったので、笑顔で注意しようとした瞬間に雅が謝ってくれたので、良しとしましょう。」

「そんな時だった。私達の携帯が同時にメールの受信を報せてきたのは。」

「あら？！雅もメール？」

「うん。えっと、事務所からみたいだね。明日事務所に来て下さい。大事な話がある。だつて」

「あら？！私も同じ内容みたいね。私にも来たということ、パスパレ関係かしら？」

「うーん、それだと僕も呼ばれた理由がわからないけど・・・」

「確かにそうだ。普段から、パスパレの仕事関係で事務所に呼び出しを受けることはあった。だけど、今回のように雅にまで招集がかかるのは珍しい。」

「普段から、自主的に雅がレッスン等に参加してくれることはあったが、事務所から呼び出しを受けるとなると、あのパスパレ結成の日以来のはずだ。」

それに、気になる点はもう一つある。それは、メールの内容そのものだ。ただ簡潔に、事務所に来て欲しいとだけ書かれたメール。招集の理由などが全く記されていない。

これでは、招集理由が良い理由なのか悪い理由なのかもわからない。こんなことも、あのパスパレ結成の一件以来だ。嫌でも、あの日のことを、お披露目ライブのことを、あの日からの時間の止まった日々のことを思い出させられる。良いことも、悪いことも。

「まあ、明日にならないことにはどうしようもないね」

「そうね。考えたところで、答えが出るわけでも無いものね」

そう、これだけ考慮する材料が少ないとなると、いくら熟考したところで答えを導き出せるわけがない。結局は、明日にならないことには何一つとしてわからない。明日答えを聞いて、それからまた考えればいい。そう私は結論づけた。

だけど、私の中には消え去ることの無い一つの不安が確かに存在した。それは、今回の件と、あの日の件の類似性。あの結成日、正確にはその後のお披露目ライブは私に消え去ることの無い爪痕を刻んでいた。全てが解決し、幸せを掴んだ今でも消えない傷跡。夢にさえ出てくるほどに。

その日に似た状況。意識すると言う方が無理な話だ。私は、そんな不安を抱えながら、凍える夜道を雅と歩むのだった。繋がる手の力は、自然と強まっていた。

そして、翌日を迎えた。

昨晩は正直なところ、あまり寝付くことができなかつた。また、あの日の夢に起こされたのだ。あの、音が止まったステージの夢に。時が止まった日々の夢に。思わず飛び起きた後は、結局一睡もすることができなかつた。おそらく、私は一生この傷跡と生きていくのだろう。これも私の罪なのだから、仕方ない。

「おはようございます」

「皆、おはよう」

「あ、雅君、千聖ちゃん！おはよう！」

事務所に入室した私と雅。そんな私達を出迎えてくれたのは彩ちゃんだった。周りを見渡してみると、既に他のメンバーは集まっていた。やはり、パスペレのメンバー全員が呼び出されたようだ。

「おはよう皆。もしかして皆も？」

「ええ。ジブン達も昨日送られてきたスタッフさんからのメールに呼ばれて来ました」

やはり、皆同じ状況だったらしい。雅と私が同時にメールを受信した時点で察しては

いたが、どうやら事務所からの一斉送信だったらしい。ということはもちろん内容も……

「そうだったのね。ということは皆集まった理由は……」

「はい。みんなわかりません。これはもしかして、非常事態というものでしょうか?」

「非常事態かどうかはわからないけど、なんだかこの感じ、パスパレ結成の時を思い出すね。ううつ、そう思うとなんだか緊張してきちゃった……」

やはり皆も内容を知らないらしい。どうやら、彩ちゃんもあの日の出来事を思い出している様子。やはり、酷似している。嫌でも、昨晚見た夢の内容を思い出してしまふ。雅の夢の妨げになった夢の内容を。そして、暗い考察が私の頭を駆け巡る。思考の海に、落ちていく。溺れていく。そして、もがき苦しむ。

「うーん。あたしは大丈夫だと思っけどなー」

そんな私を引っ張り上げたのは、そんな日菜ちゃんの発言だった。まるで、今の状況を楽しんでいるかのような、そんな明るい光に包まれた声だった。今の私とはまるで正反対。だけど、そんな彼女の声が、少しばかり私の闇を払いのけてくれるような錯覚を覚えた。

「日菜ちゃん、どうしてそう思うのかしら?」

「理由なんて特に無いよー。ただ、なんとなく、るんつて来るようなことがあるような気

があたしはするなー」

「あはは、日菜ちゃんはポジティブでいいね。私は、こういう時悪いことばつか考えちゃうよ……」

「お待たせしました。皆さん、集まっていますね」

そんな底なしにポジティブな日菜ちゃんの意見を聞いていると、スタッフさんが部屋に入ってくる。ついに答えを知る時がきた。鼓動が自然と早くなる。耳を塞ぎたくなくなる。

「なんと、みなさんの2時間特番が決まりました！しかも地上波ですー！」

しかし、そのスタッフさんからもたらされた情報は、朗報だった。その言葉を聞いて、私の中の闇が瞬時に退いていくのを感じる。そして、ついにここまで来たかという、達成感のような感情が湧いてきた。これも、皆の努力の結晶とも言えるだろう。

「ええー!?地上波で特番ですか!?!」

「地上波ということは、今よりたくさんの人に見られるということですね。ジブン、考えただけで緊張してきました……」

「ほら、やっぱりるんってする内容だったね。おねーちゃんにも教えてあげないと!」

「あの、トクバンって何ですか?」

「皆の特集を番組でするんだよ。言い換えたら、皆の番組が作ってもらえるってことか

な」

「わ、私達の番組ですか!?素晴らしいです!」

確かに素晴らしい。素晴らしいすぎる。だけど、冷静になって考えてみると、逆に美味しすぎる気もする。何か裏があるのでは無いだろうか?今度はそんな疑問が湧いてきた。

「しかも!放送に合わせて新曲も発売することになりました!」

「し、新曲もですか!?!ううっ、私嬉しいよ……」

「あはは!彩ちゃん涙目になってる——!」

「だ、だって……」

「フへへ、でも、彩さんの気持ちもわかりますよ。ジブンもなんだか感動しちやっつて、思わずもらい泣きしちやいそうですよ……」

「嬉しいことが一度に二つも。なるほど、これが一石二鳥というやつですね!」

「ふふっ、イヴちゃん、それはちよつと違うわよ。そうね、特番と新曲の発売のタイミングを合わせるのには良いことだと思います。だけど……」

そう言つて、私は雅に視線を向ける。既知の通り、私達の曲は全て雅が手がけている。勿論、新曲の制作となれば、雅に知らせがくるはずだ。だけど、私が知る限り、雅にそんな事務所からの制作依頼が入ったとは聞いていない。では、新曲は一体誰が作るのだ

ろうか？

「あの、その新曲って誰が作るんですか？」

「え？何を言ってるんですか。雅さんに決まってるじゃないですか」

なるほど。やはり、新曲は雅が制作するらしい。報せなかったのは、雅へのドッキリの目論見だろう。スタッフさんの、してやったりと言いたげな顔がその証拠だろう。この事務所のスタッフさんは、雅をからかうのが好きらしい。

「そんな話一言も聞いてないんですけど!？」

「あはは、それはもちろん、今初めて言いましたから」

まあ、雅のこの反応の良さを見ればそう考えるのもよくわかる。だけど、このままでいつまでたっても、今回の核心に辿り着かない気がしてきた。考察するにしても、核となる材料。私は、思い切ってその部分を聞いてみることにした。

「それで、特番の内容はどのようなものでしょうか？」

「皆さんが無人島で様々なミッションに挑戦する、というものです。全てのミッションをクリアすることで、その報酬として新曲発売になります」

「え？じゃあ、達成できなかつたら新曲も無しってことですか？」

「失敗の許されないサバイバルゲームですか。ううっ、ジブン、益々緊張してききました……」

「無人島、私達、生きて帰ってこれるのでしょうか？」

「あはは、イヴちゃん大丈夫だよ。だって只のテレビの企画だよ？命に関わるような事態に陥ったら大問題だって」

「無人島でサバイバルかー。うーん楽しそー！きつと、さつきはこれにるんってきたんだね！」

「それで、その特番、収録はいつからになるんですか？」

「3日後です！」

無人島でミッションに挑戦。3日後に収録という切羽詰まった日程。どうやら、考える時間もあまり許されならしい。だけど、地上波での特番というまたとないチャンス。逃す手は無い。裏があつても無くても、このチャンスだけは必ず掴んでみせる。

「3日後!?そんな急に・・・」

「これは、急いで準備をしないといけませんね。早速、帰りにホームセンターに寄って行きましょう」

「私も、お供します！」

「ねーねー。おやつは持って行っていいの？」

「ふふつ、日菜ちゃん、遠足じゃないのよ」

「皆、急な日程だけど、頑張ってきてね」

「あ、雅さんもスタッフとして同行していただきますよ」

そのスタッフさんの発言に、雅の時間が凍り付いた。まあ、新曲を作る時間も限られているのに出鼻をくじかれた訳だから、仕方ないと思う。

「なんでですか!?!新曲を作る時間が欲しいんですけど・・・」

「その新曲のためです。雅さんには、無人島でサバイバルをする皆さんをモデルにして、新曲を作って欲しいのです」

なるほど。どうやらスタッフさんの嫌がらせで雅を連れて行くわけでは無かったらしい。スタッフさんの考えも理解できるし、賛成できる。名案だとも思う。雅も、納得したと言わんばかりの表情を浮かべている。私としても、雅が同行してくれるのなら非常に心強い。正に渡りに船だ。

「そういうことならわかりました。僕も同行します」

「え? 雅君も来るの? うーん、益々るんってきた!」

「ふふつ、雅も来てくれるのは頼もしいわね」

「ミヤビさんが援軍として来て下さるのなら、百人力ですね!」

「雅さんはスタッフとして参加するので、援護にはならないと思いますが、頼もしいのは間違いないですね」

「よーし! 皆、頑張るぞー!」

「おー！」

そして、私達の無人島サバイバルへの挑戦が決まった。

無人島・・・虫が少ないといいのだけれども。

そして、収録日当日がやってきた。

暑い。上陸して最初に浮かんだ言葉はその一言だった。季節は秋半ばだというのに、容赦ない日差しが島全体を照らし付けていた。

島全体への感想としては、イメージ通りとでも言えばいいのだろうか？

生い茂る森林も、白い砂浜も、遠く広がる水平線も全て一般的な島のイメージと差異が無い。まさに、あるべき無人島の姿とも言える。

「それではパスパレの皆さんは砂浜で待機しててください。雅さんは私達の準備を手伝っていただいてよろしいでしょうか？」

「わかりました」

そのスタッフさんの指示に従い、雅が離れていく。照りつける日差しが鬱陶しい。こ

んな暑い場所で待機させず、せめて木陰にでも入らせてくれればいいのに、という不満がついてしまう。切羽詰まった日程や、全体の目的以外何も伝えられていない番組内容といい、この番組は本当に大丈夫なのだろうか？といった疑問まで湧いてくる。けど、不満ばかり溜めていてもしかたない。私に出来ることを全力でする。今はそれだけに集中しようと思う。この番組が私達にとつてのチャンスなのは間違いないのだから。

「彩さん？さつきからソワソワして、どうかしたのですか？」

麻弥ちゃんのそんな声が不意に聞こえてくる。その言葉に釣られ、彩ちゃんを見てみると、確かに落ち着きが無さそうにソワソワしている。

「あはは、さつき、スタツフさんに携帯を預けちゃったでしょ？いつも持つてる物が無いとなんだか落ち着かなくて・・・」

「スタツフさんが、私物は各自一つしか持ち込んではいけないと言っていたものね」

そう。今回の挑戦に先駆けて、スタツフさんから提示された内容として、各自一つしか私物を持ち込んではいけないという物があった。事前に申請した一つ以外は、携帯も時計も持ち込み禁止。上陸する際にスタツフさんに預けていた。

「ヒナさんは何を持ってきたんですか？」

「あたしはおねーちゃんの写真！これさえあればどんなミッションでもへっちゃらだよ！」

「あはは、日菜ちゃんって本当に紗夜ちゃんのが好きだよね」

本当にそう思う。最近、正確には七夕の頃からだっただろうか？少しだけど、紗夜ちゃんの日菜ちゃんに対する態度が柔らかくなつたように感じる。あの日、日菜ちゃんは紗夜ちゃんを七夕祭りに誘つて断られたと落ち込んでいたけれども、その後何かあつたのかしら？今度聞いてみよう。

それは置いておいて、紗夜ちゃんの写真となると、実際にはミッション攻略に使えそうな要素が全く感じられない。日菜ちゃん自身の能力には期待しているけれども、その私物には頼れそうに無い。

「千聖さんは何を持ってきたんですか？」

「私はふわふわのブランケットよ。固い地面に座らないと行けないときに役立つかと思つて」

このブランケット。実は今年の誕生日に雅にもらつたものだ。今でも大切に使つていて、汚れ一つ、皺一つついていない。今日一日乗り越えるに当たつて、何が一番手元に欲しいかを模索したときに、真つ先に浮かんだのがこのブランケットだった。

これならどんな時でも近くに雅を感じていられる。休むときも、安心して休むことが出来る。万全の体制でミッションに挑むことが出来る。ただ、大切な物だから汚れないように気をつけたい。

・・・待つて。この無人島という環境。よく考えたらまともに座つて休めるような屋内があるとは思えない。要するに、座つて休むとなると自然と屋外になつてくる。そして屋外で、汚さずにブランケットを敷ける場所があるとは思えない。つまり、ブランケットを使うわけにはいかない。もつと言うなら、もしかして私の持つてきた私物も、日菜ちゃんと同じように無意味？

「チサトさん、頭を抱えてどうかしたんですか？もしかして体調が悪いのでしょうか？」「いいえ、イヴちゃん。なんでもないのよ。なんでもないの・・・」

「あ、スタツフさんと雅さんが来ますよ。そろそろ始めるのでしようか？」

思わず頭を抱えてしまつていた私に、そんな麻弥ちゃんの声が聞こえてくる。いけない。撮影が始まるのならば頭を切り換えないと。私は女優白鷺千聖。いつまでも下を向いているわけにはいかない。私が目指すのは、いつ如何なる時も上なのだから。

「それでは皆さん、そろそろ撮影を始めますよ」

「あの、もう少し具体的に内容の説明をしていただけますか？」

「そのあたりは、必要があればその都度していきますから、皆さんはミッションに集中して下さい」

そうやつて、気持ちを切り替えた私だが、いきなり出鼻をくじかれることになつてしまった。私は、いつだつて最善の準備を行つてから本番に臨みたいと考えている。番組

に求められている役があるならば、その役を演じきって番組を引き立ててみせる。それが私の役目だと考えている。だけど、今回の番組は本当に異常だ。あまりにも情報の開示が少なすぎる。こんな状態では、私に何を求められているのかもわからない。番組に對する不信感ばかりが募っていく。

「はい、カメラ回りました！パスペレの皆さん、こんにちは！それでは早速、最初のミッシヨンを・・・」

「あ、ちよつといいでしょうか？ジブン達はこの島について、全く知識がありません。なので、せめて規模を知るために、ミッシヨンの前に島を一周させてもらえると嬉しいです」

そう発言したのは麻弥ちゃんだった。その発言に對して、何故か凍り付いたかのように動きを止めるスタッフさん。別段麻弥ちゃんがおかしなことを言ったように感じなかったけど、何かあったのだろうか？

「それって、森の中にも入るってこと？大丈夫かな？もし何か出てきたりしたら・・・」
「確かに、危険がある可能性もあります。ですが、それならなおさら、どこが危険なのかを知っておくのも大事だと思います。もしかしたら今いるこの場所が、一番危険ってこともあるかもしれませんから」

「なるほど、地の利を得るってことね」

「あたしは賛成だよ。お散歩みたいで、楽しそうだもん！」

なるほど。麻弥ちゃんの案は正に名案と言える。確かに、私達はこの島に対する知識は一切持っていない。それこそ、島の名前や、日本のどこにあるのかさえ。そんな状況でミツシオンを熟すために、無闇矢鱈に歩き回るのは只の自殺行為だろう。それならば、まず最初に島を見て学び、知識を得てから挑む方がよっぽど効率的で安全と言えるだろう。そう私が感心していると、スタッフさん達の声が聞こえてくる。小声ながらも、耳をすませば内容を聞き取ることができた。

「おいどうする？ 確か、島を探索するっていうの最初のミツシオンのはずだろ？」

「仕方ない。そのあたりは編集でなんとかするか。しかし、あの大和麻弥って子、すごいな。この状況で、よく冷静にあんな判断ができるもんだ」

どうやら、麻弥ちゃんが先回りしてミツシオンを言ってしまった為に戸惑っていたらしい。スタッフさんの言う通り、麻弥ちゃんの判断力は凄い。私だったら、絶対にそんな判断はできなかつたでしょう。麻弥ちゃんの意外な長所を垣間見た瞬間だった。

「そうですね、わかりました。では、皆さんに島を回る時間を与えますね」

「ありがとうございます！ では、直射日光をさけて、森を通っていきましよう。強い日差しに当たっていると、それだけで体力が奪われてしまいますから」

私達は、そんな麻弥ちゃんの背中を追って島の探訪に向かうのだった。心なしか大き

く見えるその背中を追って。

小一時間ほど歩いただろうか？島を一周歩くことが出来た私達は、木陰で少しばかりの休憩を取っていた。勿論、私は座ることができないので立ったままだけだ。

「ひとまず、これで島は一周しましたね。特に危険なところはなさそうでしたのでよかったですね。それじゃあ、島の内側も調べてみましょうか？」

「はい！わかりました！あれ？皆さん見て下さい！向こうに、何か見えますよ！」

そうイヴちゃんが言う。その指差す先にあったものは、小屋だろうか？木造の建物のように見える。

「あれは、小屋のようですね。中を調べて安全そうなら、あそこを拠点にしましょうか？」

「よーし！あたしがいちばん！」

「あ、日菜ちゃん！先にいったら危ないよ！待って！」

駆け足で進む日菜ちゃんを追いかける私達。日菜ちゃんに続いて中に入る。小屋の

中は思っていたよりも綺麗だった。少し埃っぽくは感じるが、ここは無入島。そんな贅沢は言っていられない。休める建物があるだけ有り難い。

「ここなら、マヤさんの言う通り、拠点にできそうです！」

「そうですね。それじゃあ皆さん、少しここで休憩して、これからの計画を・・・」

「ちよつと待つて下さい！」

「え？」

私達が本格的に休憩に入ろうとしていた時だった。小屋にスタッフさんの声が響き渡ったのは。心なしか、その声からは強い気迫を感じた。

「ここでお待ちかねの、第一ミッションです！」

「え？小屋に着いた途端いきなり!？」

おそらく、先ほど麻弥ちゃんにミッションのスタートを遮られてしまったせいだろう。気合のこもった宣言だった。その気合が空回りしているような気もしないでもないけれど、今は置いておこう。

「それでは発表します。最初のミッションは、自分達で食べるものを集めるです」

「食べ物集め、兵糧攻めですか？」

「イヴちゃん、それはちよつと違うわよ。それよりも、やっぱり飲み物以外は自力でなんとかするしかないみたいね」

「それならまかせて！食べ物を集めるのなら、きつと私の持ってきた凶鑑が役に立つよ！」

食べ物集め。私が今回の収録にて最も危惧していた部分だ。最初、私は食べ物ぐらいは用意してくれていると高をくくっていた。しかし、実際にはそんなに甘い収録では無かった。渡されたのは飲み水だけ。食料になるようなものは何も無かった。その時点で、ミッションの中に食料集めが存在するだろうと予想を立てていたけれども、どうやら最初のミッションとして提示されるらしい。実際には最初では無いけれども。

だけど、その窮地もまさかの彩ちゃんのファイナルプレーでなんとかなるかもしれない。凶鑑を選んで持つてくるなんて、彩ちゃんも中々良い働きをする。

「彩さん、ちよつと見せて下さい。これは凄いですね！食べれるものかそうでは無いものか、わかりやすく載っています！」

「さすがアヤさんですね！」

「彩ちゃんやるー！」

「えへへ、皆の役に立ててよかったよー！」

本当に役に立った。それこそ、私なんかの何倍も。ダメね。自分で言つてて少し悲しくなってきた。

「では、食べ物を取りに行くメンバーを決めましょうか」

「え？皆で行こうよー。そっちの方が楽しいよ？」

「そうだね。皆で行った方が、たくさん食べ物が見つかると思うし」

「確かにそうですけど、ジブン達にはまだ土地勘がありません。そんな状況下で全員探索に出て、もし遭難でもしてしまつたらミツシヨンの達成は不可能になってしまいます。ですので、ジブンは何人か待機しておくべきだと思います。そちらの方が、今後のミツシヨンの達成率向上にも繋がるはずですよ」

なるほど。本当によく考えている。冷静に、最善の手を考えて提示してくれている。麻弥ちゃんは、サバイバルの経験でもあるのかしら？

「うん、麻弥ちゃんの言う通りだね！それじゃあ、早速班分けしよう！待機する人は誰にする？」

「うーん、そうだねー。とりあえず、彩ちゃんは残った方がいいと思うな」

「え!?なんで!？」

「それなら、私は彩ちゃんと一緒に残るわね。彩ちゃんに何かあつたら心配だから」
「千聖ちゃんまで!？」

「アヤさん、たくさん食べ物を集めてきますので、楽しみに待っていて下さいね!」

「イヴちゃんも!?なんで私は待機班って決まつてるの!？」

「皆さん、彩さんのことが心配なんです。彩さんは、ジブン達を信じて待っていて下さ

い」

「ううつ、嬉しいけど、なんか複雑だよー!」

おそらく、皆の胸中は同じでしょう。彩ちゃんに余計なことをさせてはいけません。彩ちゃんの分も皆で力を合わせて乗り切ってみせる。彩ちゃんがやる気に満ちているときは、逆に心配になってしまう。これは私達の共通認識でしょう。そして、班も決まったことで、私と彩ちゃんを残し、皆が小屋から出て行く。急に静かになる小屋。物音一つしない空間。さつきまで歩きっぱなしで少し疲れていたため、その静けさが有り難かった。食料を探しに行ってくれてる皆には悪いけれど、少し休憩させてもらおう。

「皆大丈夫かな」

彩ちゃんが不意に呟く。確かに皆のことは気にならないと言えば嘘になる。だけど私は、然程心配はしていなかった。

「大丈夫よ。麻弥ちゃんもいるのだから」

そう。麻弥ちゃんがいる。その事実が今は心強かった。麻弥ちゃんがいればきつと皆難なく帰ってこれる。そんな安心感が今はあった。

「そうだよ。今日の麻弥ちゃん凄かったもんね。きつと大丈夫だよ。・・・ひっ!」
 そんな話を彩ちゃんとしていてるときだった。急に彩ちゃんが何かに怯えたような声を上げた。その視線は私の足下に向けられているように感じる一体どうしたのだろう

か？

「彩ちゃんどうかしたの？」

「あの、千聖ちゃん。驚かないでね。今、千聖ちゃんの足下に大きくてウネウネした虫がいるの」

「・・・へ？」

彩ちゃんが何を言っているのか理解するのに、私は数秒の時間を要した。恐る恐る自身の足下に目を向ける。虫だ。どこからどう見ても立派な虫だった。360度ひっくり返して見ても、立派な虫だった。芋虫だろうか？おそらくそうだろう。私の足下を、徐々にこちらに近づいて這ってきている。見間違いでも幻覚でもなんでも無い。これは現実。夢でも妄想でも何でも無い。これは現実。現実なのだ。そう気づいたときには、芸能人白鷺千聖としての私は完全に消え去っていた。

「きやあああああああああああああああー！」

今この場にいるのは、只の女子高生白鷺千聖だ。虫が大の苦手な、どこにだっている女子高生の白鷺千聖だ。もはや私は泣き叫んで、心の中で願うことしかできなかった。助けて、雅と。

「千聖！どうしたの!?!」

程なくして願いは届いたのか、小屋の戸が開かれ彼が入ってきた。私はその姿を確認

するなり、形振り構わずに突撃することしか出来なかった。彼の胸の中に顔を埋め、只管に泣きじやくる。もはやそこには、演技派女優としての白鷺千聖は一欠片も存在していなかった。これは決して演技などでは無い。素だ。恋する女子高生、白鷺千聖としての素の姿だ。愛しの彼の胸の中で泣くことしか出来ない、無力な女の姿だ。

「み、雅い……」

そして、か細い声で彼の名前を呼ぶ。本当にこれは私の声なのだろうか？ 思わず自分で疑つてしまいそうになる。

「えっと、千聖、何があつたの？」

「う、ううっ……」

「……うん、ダメそうだね。彩ちゃん、何があつたの？」

「あはは、実は、千聖ちゃんの足下に、急に大きな虫が現れて……」

「ああ、虫か……」

それだけで、雅は全てを察してくれたのだろう。当然彼は、私が虫を大の苦手にしてゐることは知っている。直ぐに虫を追い払おうと行動に移つてくれている。だけど、私は恐怖のあまり、雅にしがみついて離れられずにいた。動きづらそうに行動する雅。申し訳ないと思いつつも、私は終始離れることができなかった。

「よし、これでもう大丈夫だよ」

「え、ええ、ありがとう、雅」

「あはは、千聖ちゃん、顔真つ赤だよ」

「彩ちゃん？」

「ひつ、ごめんなさい……」

虫がいなくなつたのを確認して、私にも平静が戻つてくる。平静が戻つてくると同時に、今まで感じていなくなつた羞恥心が湧いてくる。この場に雅しかいなかったのならば何も問題なかつただろう。だけど、この場に彩ちゃんもいたことが私の羞恥心を加速させた。恥ずかしい。まさか彩ちゃんにこんな姿を見せてしまうなんて……

「二人ともただいまー！ いっぱい食料集めてきたよー！」

「アヤさん、チサトさん見て下さい！ 果物をこんなに見つけましたよー！」

「お、おかえりなさいみんな。ぶ、無事で本当によかつたわ」

「千聖さん、どうかしたんですか？ 顔が真つ赤ですけど？」

「実は千聖ちゃんがね」

「彩ちゃん？」

「ひつ、な、なんでもないよ。あはは」

「ふーん、おかしな彩ちゃん」

帰ってきた皆の手には山ほどの果物が抱えられていた。それこそ、食べきれないほどの。流石に採ってきすぎじゃないかしら？後、彩ちゃんには改めて釘を刺しておくことを忘れない。これは帰ったら口止めりよ・・・プレゼントを贈る必要がありそうね。

「それより、みんな大丈夫だったかしら？迷ったりしなかった？」

「それが、マヤさんのお陰で全然迷わなかったんです！」

「うん！またまた麻弥ちゃん大活躍だったんだよ！」

「べ、別に大したことをしたわけでは・・・」

「ふふつ、それじゃあ、採ってきてもらった果物を食べながら、麻弥ちゃんの活躍を聞きましようか」

「そうですね！腹が減ってはイクサはできぬ、と言いますからご飯にしましょう！」

そして、私達は麻弥ちゃんの大活躍の話を聞きながら食事でありついた。皆が採ってきてくれた果物は、見たことが無い種類ながらも、絶品だった。ほどよい甘さが口の中に広がる。そして聞かされた麻弥ちゃんの話はまたも大いに感心させられる内容だった。今日一日で、麻弥ちゃんには何度驚かされただろう？おそらく、その数はまだ増えるのだろう。

「ごちそうさま！とつても美味しかったね！皆、本当にありがとう！」

「いえいえ、お役に立ててよかったです！次のミッションも、この調子でいけたらいいの

ですが……」

食事を済ませた私達。それを見計らったかのようにスタッフさんが近づいてくる。おそらく、次のミッションが告げられるのでしよう。そしてその予想は見事に的中することとなる。

「皆さん、第一のミッションクリアおめでとうございます！それでは、早速ですが次のミッションに行きたいと思います。次のミッションは、幻の花畑を探せです」

「幻のお花畑？どこにあるんだろう？この島、結構広いし、見つかるのかな？」

「うーん、何かヒントって無いのー？」

「それでは一つだけ。この小屋から向かって南にあります」

「南……」

「まずは方向を把握する方向を探さないといけないわね」

「あたしはあつちだと思ふな。勘だけど！」

「日菜さんの勘は信用してませんが、ここで方角を間違えてしまうと、時間のロスになりますし、遭難の危険もあります。ここは、とりあえず一度外に出て、何か手がかりを探しましょう」

幻の花畑。本当にそんなものがこの島に存在するのだろうか？こんな一見花畑とは無縁そうな無人島に。ヒントは南の方角。方角が正確にわかる場合はもはや只の答え

なのだけれども、今の私達には方角を知る術は皆無。とりあえず、何か手がかりを探すために皆で外に出る。出てはみたものの、本当にどこかに手がかりなんてあるのだろうか? ほう

「うーん、何も思い浮かばないわね。麻弥ちゃん、何かあるかしら?」

「収録前に腕時計で方角を調べる方法を探していたのですが・・・」

「その腕時計が無いですね・・・」

「はい。まさか、時計も持ち込みアイテム扱いとは・・・」

今回ばかりは、流石の麻弥ちゃんでもお手上げなのかもしれない。もはや、勘にまかせて、適当な方向に歩くしか無いのだろうか?

「うーん、木に方角とか書いてあれば簡単だったのになー」

「ん? 木で南を知る? あー!」

そんなことを本気で考えていたときだった。急に麻弥ちゃんが駆けだし、木の根元に座り込んだのだ。何をしているのだろうか? 普通はそういった疑問が浮かぶ場面かもしれない。だけど、今は違った。何をしてくれるのだろうか? そういった期待が私の中で膨れあがっていた。きつと、麻弥ちゃんがこの超難問を攻略してくれるという期待が。

「マヤさん。急に座り込んでどうかされたのですか?」

「はい。ちよつと木の根元を確認したくて・・・」

「根元を？コケくらいしか生えてないと思うけれど・・・」

「はい。そのコケを探してみました。コケがたくさん生えているということは、そこには陽が射し込まないってことじゃないですか？ということは、その方角がおそらく北だということですよ。ただ、一本や二本なら偶然という可能性もありますから、皆さんにも探すのを協力してもらえればより絞り込めると思います」

正に、期待通り、いえ、期待以上、想像以上の答えが返ってきた。普通そんな発想が閃くだろうか？木が怪しいと考えても、コケまで辿り着ける人がどれだけいるだろうか？少なくとも、私達には到底無理な話だっただろう。思わず、私達は驚きのあまり黙り込んでしまった。

「みなさん、どうかしました？ジブン、何か変なことを・・・」

「凄いや！麻弥ちゃん！」

「ええ、本当に。私だったら、絶対に思いつけなかったわ」

「これぞ、達人の域というやつですね！」

「そ、そんな対したことでは・・・」

「よし、それじゃ早速麻弥隊長の指示に従って、コケをさがそー！」

「ひ、日菜さん、隊長なんてそんな・・・」

そう謙遜する麻弥ちゃん。だけど、日菜ちゃんだけでは決して無い。皆が思っていることだ。今日の私達のリーダー、もとい隊長は麻弥ちゃんなのだ。私達は、そんな麻弥隊長の指示を受けて、木の根元の調査に取りかかる。大体30分ほど調べただろうか？そこで隊長から集合の合図がかかる。

「よし、みなさんのおかげで早く終わりました！ありがとうございますー！」

「それで麻弥ちゃん、南はどっちだかわかったのー？」

「はい、皆さんから頂いた情報を参考にすると、こつちのはずです！」

その麻弥ちゃんの導き出した方角を見て、周りのスタッフが驚愕に包まれているのがよくわかる。どうやら、正解らしい。私達は、意気揚々と麻弥ちゃんが導き出した道を進み始めた。その歩みに、一切の迷いは存在していなかった。

「はあ、はあ、やつと着いた！」

本当に、やつとだった。ここまで来るのにも苦労があった。吊り橋だ。いかにも危険な匂いを醸し出している吊り橋が目の前に立ちはだかったのだ。その吊り橋を渡る上

で、また麻弥ちゃんの大活躍があつただけけれど、今回は割愛させていただく。語る余裕が無いほどに私も疲れ果てていた。

「え？みんな、見て、この景色……」

彩ちゃんに言われ、その景色に目を向ける。それは、正に絶景だつた。もつと良い言葉が他にもあるかもしれない。けどおそろく、いえ、確実にどのような素晴らしい言葉を並び立てても、この景色の前では陳腐に感じることでしよう。色とりどりの咲き乱れる花、空を飛び交う花びらたち、そして見渡す限りの水平線に、その水平線に沈みゆく紅い球体。そう、この美しい風景を言葉にするならば、言葉に出来ないほどの絶景とでも言うのが適切だろう。それ以外に言い様がない。

「すごいです……ヒラヒラと花びらが舞っていて、まるでカブキみたいです！」

「ホントだー！見渡す限りお花だね！るるるるんってきちやつたー！」

「ふふつ、こんな景色を見たら、疲れも忘れてしまうわね」

「はい！ジブンもすっかり疲れが吹き飛んでしまったみたいです！」

「これって、苦労したから余計に綺麗に見えるのかな？」

「そんなことないと思います！」

ええ、きつとそれだけが理由では無いでしょう。この景色を目に映せただけでも、今日一日の苦勞の甲斐があつたのでは無いかとさえ思える。今の私からは、既に疲労とい

う概念が跡形も無く消え去っていた。

「皆さん本当におつかれさまでした！ここが皆さんのゴールとなります」

その言葉に、私は思わず納得してしまふ。この絶景が私達の目の前に浮かんでいるのだ。この絶景を前座に出来るような、そんな最終目的地が存在するだろうか？いや、存在しないだろう。ここが終着駅。そうでないとおかしい。

「ゴール？ということはつまり全部のミッションをクリアしたということですか？」

「そうです！おめでとうございます！」

「ほんとですか!? やったー！」

「やりました！みなさん、無事に生き残れましたよ！」

「ふう、ジブンはなんだか、ホツとしました・・・」

「えー、もう終わりー？もつと冒険したかったなー」

「そうね、確かにミッションが少なかつた気がするわね」

「はい。実は、ミッション自体はもつと数多くあつたんですけれどもね。麻弥さんが発表するよりも前に次々とクリアしてしまつたもので・・・」

「え？そんなんですか？」

これには流石に驚いた。確かにミッションの数が思つたよりも少ないとは私も感じていた。だけどもさか、最初のミッション以外にも麻弥ちゃん先回りしてしまつた

ミッシヨンが複数あつたなんて。

「そ、そうなんですか？基本素人なもので、すみません」

「大丈夫ですよ。このままじゃ、番組として成り立たないかもしれないと思いましたが、麻弥さんが逆に頑張つて下さったお陰で、良い番組ができそうです」

「そんな、ジブンなんか、全然大したことは・・・」

「ううん。そんなことないよ。麻弥ちゃんは本当に凄かった。それこそ、僕も思わず見とれちゃうほどだったよ」

「み、雅さん、そんな、ジブンなんか・・・」

「あ、雅君いたんだー」

「いたよ！最初から！」

雅の言葉には全面的に同意する。同意はするけど、ただ一部分だけどうしても引つかかる部分があつた。見とれたとはどういうことかしら？確かに、今日の麻弥ちゃんが輝いていたのは認める。だけど、見とれてしまったとはどういうことかしら？これはまた後で追求しないといけないわね。そういう意味を込めて雅に微笑みかけると、雅は何故か震えていた。一体どうしてしまったのかは、私にはわからない。

「あー！そうだった！」

「彩さん、急にどうしたんですか？急に大きな声を出して」

そんなどうでもいい疑問を浮かべていると、不意に彩ちゃんの声がある。その声が大きかったため、少し驚いてしまった。だけど、どうしたのかしら？急に大きな声なんか出して。

「新曲だよ！」

「新曲？はっ、そうでした！」

「全てのミッションをクリアしたってことは……」

「はい。皆さんの新曲は予定通り発売されます。大丈夫ですね？雅さん？」

「はい。皆のお陰で、良いインスピレーションが浮かびました。これなら良い曲が作れそうです」

「よかったですね彩さん！ジブンも嬉しいです！」

「ううっ、頑張つてよかったよー……」

「と、言いたいところですが、ここで最後に特別ミッションです！」

彩ちゃんに言われなくても、勿論私は覚えていた。そう、今回の収録はその新曲の発売がかかったものだった。雅も無事新曲のイメージができあがったみたいだし、問題なく発売できることでしょう。だけど、そう簡単には問屋が卸してくれないらしい。私達の前に、最後の関門が立ち塞がる。特別ミッションという関門が。

「それは、山頂で新曲の告知を叫ぶです！」

「山頂で、新曲の告知？」

「はい！挑戦するのは一人！出来るだけ大きな声で叫んで下さい！」

「一人で、ですか。誰が挑戦しましょうか？」

「こういう時はもちろん・・・」

そう言う全員の視線は、一人の少女に向いている。彼女以上の適任はいないでしょう。

「え？なんでみんな私を見てるの!？」

勿論、それは私達のリーダー彩ちゃんだ。この場に彼女以上の適任者がいるのなら、是非聞いてみたい物だ。

「頑張つて、彩ちゃん」

「雅君までー!？」

その雅の言葉が止めとなった。洩々と彩ちゃんが山頂に向かう。その背中を見つつ私は今日一日を振り返っていた。数多のトラブルには見まわれたけれども全体的に見て素晴らしい収録になったのではないかと思う。放送自体は、麻弥ちゃんが主役になるでしょう。むしろ、そうでなければおかしい。世間には、また違った麻弥ちゃんのイメージが定着するかもしれない。勿論、良いイメージで。このまま、知的アイドルとして駆け上がれるだろうか？きつと駆け上がるだろう。

「それでは彩さん！お願いしますー！」

「ば、パスパレの新曲の発売が決まりましたー！やったー！楽しみにしててねー！」

そんな彩ちゃんの気の抜けるような告知と共に、今日の収録は終わりを迎える。本当に、もつと良い言葉はなかったのかしら？まあ、彩ちゃんらしくていいかもしれないけれど。私達はその後直ぐに帰り支度を済ませ、その日のうちに島を出た。帰ったらすっかり夜になっている。その日は、心地よい眠りを味わうことができたのだった。

それから、数週間が経過した。

今日は先日の特番の放送日だ。今日は雅も含めた全員で事務所のテレビに食いついている。番組は、予想通り麻弥ちゃんを中心とした内容に仕上がっていた。サバイバル初心者だという麻弥ちゃんの驚愕の知的アイデアの数々が紹介されていき、放送を見ながら麻弥ちゃん始終恥ずかしそうにしていた。

そんな中で、小屋に繋がるシーンでのことだ。

「ここで私達放送班は、Pastel*Palettesの誰にも伝えていないある

ドツキリをとあるメンバーに仕掛けてみた」

そんなナレーションと共に、小屋へと駆け足で走る日菜ちゃんと、それを追いかける私達の姿が映し出される。ドツキリ。何のことだか、私には最初さっぱり理解できなかった。皆も反応からして、疑問符を浮かべていることがよくわかる。

「我々放送班は、そのとあるメンバーに関する街角イメージを調査した。その結果を見ていただきたい」

「なんだか、落ち着いていて年齢の割に大人びている印象ですね」

「どことなく計算高そうな気がしますね」

「そうですね。なんとなくプライドが高そうな気がします」

「等々、全体的に見ると大人びているといった印象が多かった。そのメンバーの名は……白鷺千聖。彼女だ」

「え？私？」

最初、このナレーターが何を言っているのかも理解できなかった。どこか他人事のように放送を聞いていると、急に私の名前が出てくるのだから驚いた。

「チサトさん、収録で何かあったのですか？」

「いいえ、何も無かったと思うけれども……まさか」

そこで一つの可能性に私は行き着く。あった。確かに小屋で一騒動あった。まさか、

あれが？そんなわけがない。もしあれが地上波で映し出されたとなると、世間の私のイメージが。そんなわけがないと祈り、画面に目を戻す。

「今回我々がドッキリを彼女に仕掛けるに当たって、とある人物に協力を依頼した。誰もが知っている、大物司会者大木内マリ氏だ。彼女は、白鷺千聖とも面識が深く、芸能界では親子のような関係を築いているという。そんな彼女に、今回白鷺千聖の弱点を聞いてみた」

「千聖ちゃんの弱点？それなら虫ね。あの子はああ見えて虫が大の苦手なのよ。昔は小さな蜘蛛が出たぐらいで怖がって私に泣きついてきた物よ。あ、そうそう。もし番組内であの子にドッキリを仕掛けたいのなら、番組の内容はなるべくあの子に言わないことね。あの子は一流の女優よ。あの子は放送の内容から、自分が求められている役を模索して、その役を演じることが出来るの。そんな状態でドッキリを仕掛けても、役を演じてるあの子相手なら効果は薄いわよ。役に徹することで回避されるわ。だけど、その情報があまりにも希薄な場合、あの子は求められている役を導き出すことが出来ない。つまり、素のあの子が出てくるのよ。ドッキリを狙うなら、そういう状況を作りなさい」という貴重な情報を我々は得ることに成功した。その提供していただいた情報通り、彼女には極最低限の情報以外は提供せずに収録に挑んでもらった。そんな彼女に対して行うドッキリの内容は至ってシンプルだ。狭い小屋の中で、急に苦手な虫が現れると

いうものだ」

「消して！今すぐテレビを消して！」

私は、その放送内容を聞くと同時に、思わず叫んでいた。叫ばずにはいられなかった。この後に行われるのは、私に対する公開処刑以外の何物でも無い。そんな取り乱して、暴れる私を日菜ちゃんが取り押さえる。

「なにににー？あの小屋でなんかあったのー？あたしすつごく気になるなー」

言葉にはしないが、イヴちゃんと麻弥ちゃんも日菜ちゃんと同じ気持ちなのだろう。その目がこの先の内容が気になると訴えている。この後の展開を知っている彩ちゃん
は、どうしたらいいのかわからずワタワタとしており、同じく知っている雅は、頭を抱えて、

「そうか。あの時の良い画えが撮れたってこの画えのことだったのか・・・」

なんて訳のわからないことを呟えいている始末。そして、ついに放映が始まってしま
う。

「我々は、このミッシヨンにて白鷺千聖を小屋に残す策略をいくつか用意していたのだが、幸運にも彼女は自ら小屋に残る選択をしてくれたので、その計略は使用せずに済んだ。そして、スタッフが立ち去る瞬間、小屋内に大型の芋虫をバレないように放ち、準備は完了となる。ここからは、小屋に仕掛けられた隠しカメラの映像をご覧頂きたい」

「彩ちゃんどうかしたの?」

「あの、千聖ちゃん。驚かないでね。今、千聖ちゃんの足下に大きくてウネウネした虫が
いるの」

「……へ?」

「白鷺千聖の口から出たとは思えない間抜けな返事を発する。もう一度言おう。彼女は
間違いないあの白鷺千聖だ」

「きゃあああああああああああああああ!」

「そしてこれまた、白鷺千聖とは思えない悲鳴が小屋に響く。何度も言うが、彼女は間違
いなく白鷺千聖だ」

「千聖! どうしたの!?!」

「そして、ここで登場したのは今回の収録に別の目的で参加していたシンガーソングラ
イターの黒城雅だ。彼の登場は、我々放送班としても予想外な展開だった。しかし、こ
の後の展開を考えると、実に素晴らしいハプニングだったのではないかと思う。なん
と、白鷺千聖がいきなり、黒城雅に抱きついたのだ」

「み、雅い……」

「更にはか細い声まで上げる始末。名前で呼び合ってる姿を見る限り、彼女達は実に仲
が良いのだろう。そういうえば、最近では彼女達が交際しているのでは無いかという噂も

正直、黒城雅が羨ましい。つてかかれていますね」

「白鷺さん。どうか雅様のことよろしく願います。という書き込みもあります！」

「あはは、皆祝福してくれてるみたいだよ！よかったね二人とも」

「日菜ちゃん、そういう問題じゃないんだよ・・・」

そう言つて頭を抱える雅。私も今すぐに頭を抱えたい。

「えつと、千聖ちゃん。その、気をしっかり持つてね？」

これが気をしっかり持つていられるだろうか？いや、いられるわけがない。もはや私は、叫ばずにはいられなかった。

「こんなことなら、地上波なんていらぬわよ！」

その放送の反響はあまりにも大きかった。某SNSツールでは、白鷺千聖と黒城雅がトレンド入りするほどだ。そして、その日を境に私の世間からのイメージは大幅に変わるのだった。

こんなイメージいらぬわよ・・・

第39演目 歌うたいのバラッド

それはある日の放課後のことだった。

オレンジ色に彩られた商店街を僕は一人歩いていた。

オレンジ色に染まった街。決してこれは夕日が理由では無い。カボチャだ。カボチャのランタンが街のいたる場所に飾られているのだ。

そう。ハロウィンだ。今年もこの時期がやってきたのだ。とは言っても、今日がその日というわけでは無い。明日だ。明日がハロウィン当日。前日の今日からその準備で街が衣替えしているのだ。

「あら？あなたもしかして雅まさじゃない？」

今日は仕事が入っていないため、家に帰ろうと思っていた時だった。僕の背後からそのような声が聞こえてきた。雅まさ？今の声は確かに僕に向けられて発された気がした。だが、雅まさとは一体どういうことだろうか？人違いだろうか？と考えて後ろを振り向き、そこで納得する。

そこに立っていたのはこころちゃんだった。こころちゃんが腰に手を当てた状態で堂々と立っていた。そういえば、彼女には、正確には彼女のバンドには一度そのように

名乗った記憶がある。確か、その時は勘違いされたまま別れた記憶がある。どうやら彼女はまだ勘違いしたままのようだ。そして、彼女の後ろから息を切らせて追いかけてくる人物が見受けられる。どうやら美咲ちゃんのようだ。彼女は今日も苦勞が絶えないようだ。

「こころ、待つてつて。あー、今日はミッシェルじゃなくてよかつた……つてあれ?」
「美咲! 雅だわ! 雅がまた日本に来てたのよ!」

「あー、違うよこころ。その人は真正銘の黒城雅さんだよ」

「あら? そうなの? それじゃ初めましてね! あたしは弦巻こころよ! あなたが雅なのね! あなたのお話は皆から聞いているわ!」

「あーこころちゃんね。えっと、弟から話は聞いてるよ。よろしくね。美咲ちゃんも久しぶり」

「はいお久しぶりです。それとご迷惑をおかけします」

その美咲ちゃんの言葉に思わずため息が出てしまいそうになる。まるで、今から何か僕にとつて迷惑になるようなことが起こるとでもいたげな言葉に。前回の彼女との会合では本当に大変な目にあつた。まあ根本的原因是僕の幼なじみ、いや僕本人にあつたのかもしれないが。いや、僕は悪かつたのだろうか? こればかりは答えが出ない永遠の謎といえるだろう。

「そうだわ！雅、あなたもハロウイン競争に参加しなさい！」

「ハロウイン競争？」

「あはは、そうなると思つてたよ・・・雅さん、あたしから説明しますね」

僕は、美咲ちゃんからハロウイン競争についての詳細を聞いた。美咲ちゃんの説明を要約するところだ。こころちゃんが何かハロウインらしい事をしたと言いだす。そして色々試行錯誤した末、偶々出会ったポピパの沙綾ちゃんとりみちゃんを巻き込んで、二人一組のチームで誰が商店街の人に最も多くお菓子をもらえるか競争をするらしい。沙綾ちゃんは都合が合わないので不参加らしいが。

そして、他にも参加してくれるメンバーを探して今商店街を走り回っていたらしい。その結果、Afterglowの巴ちゃんとひまりちゃんが参加してくれることが決まったらしい。後、沙綾ちゃんがいなくなたけど、りみちゃんのパートナーになる代わりの人は決まっているらしい。誰かはわからないけど。

「なるほど。事情はわかったよ」

「雅さん。無理ならはつきりと断つて下さつて大丈夫ですよ。雅さんは芸能人としての立場もあるでしょうし、仕事の都合もあるでしょうから」

「うーん、そうだね。僕個人としては参加しても問題無いんだけど、パートナー次第かな？」

僕としては、明日も特に仕事が入っていないので参加するのに問題はない。だけど、問題はパートナーだ。まあ、僕の場合パートナーとして誘うのは必然的に千聖になるわけだが、その千聖が問題だ。別に、千聖に仕事が入っているわけでは無い。一応、千聖のスケジュールは把握しているが、確か明日はオフだったはずだ。

問題は、千聖の意思だ。僕が知る限り、彼女はこういう催しには参加したがるタイプでは無い。芸能人として、あまり人前で目立ったことをしたがない彼女がはたして快く参加してくれるだろうか？

「まあ、千聖に聞いてみるよ。参加できそうな場合は明日行くということだ」「わかったわ！ 仮装もしてくるのよ！」

「仮装？」

「あはは、一応ハロウィンなんで・・・あ、できたらでいいので」

「うん、まあ考えておくよ」

「そう？ 期待しているわね！ それじゃ、行きましよう美咲！」

「あ、ちよつと走らないでって・・・雅さん本当に無理だったら遠慮無く断って下さっていいですから」

「うん。その点は心配無いよ。千聖が無理って言ったら潔く断るさ」

「そうしてください。それじゃ。ちよつと、こころ待つてって・・・」

その言葉を最後に、人混みの中に消えていく美咲ちゃん。どうやら、彼女の苦難は終わらないらしい。

「さて、千聖はなんて言うかな」

正直、参加する可能性は低いと思っている。まあ、こころちゃんとも約束してしまったので、誘うだけ誘ってみよう。その結果、断られてしまった場合は仕方が無い。美咲ちゃんも言ってくれていたし、遠慮無く断らせてもらおう。僕は、その後千聖をどのように誘うか考えながら家路につくのだった。

「ハロウィン競争?」

家に帰り、晩飯を終えた僕は、早速千聖に声をかけてみることにした。帰り道で、色々千聖に効果的な誘い方を考えてみたけれども、何も思い浮かばなかったので結局直球的に誘ってみることにした。そんな言葉考える力僕には無い。

「うん。今日の帰り道でこころちゃんと美咲ちゃんに誘われてね。二人一組のチームで誰が商店街の人に一番お菓子をもらえるか勝負するんだって」

「そう。雅は参加したいの?」

「そうだね。折角誘ってもらったんだから、どちらかと言うと参加してみたいかな。まあ、こころちゃん達には千聖次第とは言つてあるけれども」

「そうね・・・」

そう呟いて、下を向いて何やら考え込む千聖。どうやら、即却下という展開は逃れたらしい。だが、それでも最終的には断られる。そう僕は考えていた。

「いいわ。参加しましょう」

「え?」

だからこそ、この千聖の返答に思わず驚いてしまった。まさか、そんな答えがいきなり返ってくるとは思っていなかったのだから。

「あら? 私が参加するのはご不満だったかしら?」

「あ、いや、そういうつもりじゃなくて・・・」

「ふふつ、冗談よ。そうね。普段だったら断っていたかもしれないわね。芸能人として軽率な行為は取れないもの。だけど、今回は特別よ。時間が無いのよ」

「時間?」

「・・・いいえ。なんでもないわ。ごめんなさい。さあ、そうと決まったら仮装を考えないといけないわね。ハロウィン競争ということは、皆仮装してくるのでしょうか?」

「あ、うん。そうだね」

僕は、千聖の言葉に疑問を覚えたが、今は聞かないことに決めた。僕が知る必要のあることならば、彼女は言ってくれるだろう。だけど、彼女は言わなかった。それは僕が知る必要の無い情報だということに違いない。気にはなる。だけど、こういう場合の彼女は決して内容を語ろうとはしない。だから、聞かない。僕は、その後そんな会話の内容なんてすっかり忘れて、仮装の内容を千聖と模索していくのだった。

そして、翌日の放課後となった。僕と千聖は、考えた結果事務所から仮装を借りることにした。事務所からは案外スムーズに許可が出たのでビックリした。まあ、その見返りに仮装した僕達の写真を事務所のホームページに載せるらしいが。先日の無人島放送以降、僕と千聖の記事や写真をホームページに載せると反響が大きくなったらしい。正直、あの番組のことは思い出したくもないけれども。

そして僕達は、衣装に着替えて商店街に向かっていた。因みに仮装は、千聖が紫をベースにした魔女衣装で、僕が狼男の仮装だ。犬耳までご丁寧に分けられて、ちよつと

恥ずかしい。千聖には、れおんみたいで可愛いと言われたけれど。男なのに、可愛いって言われるのはどうかと思う。因みに、れおんとは千聖が飼ってるゴールデンレトリバーの名前だ。

「あら？来たみたいね！」

こころちゃんだ。集合場所に到着すると、既に多くのメンバーが待機していた。おそらく僕達が最後だろうか？周りを見渡してみる。ジャック・オー・ランタンの仮装に身を包んだこころちゃん。カボチャ柄の服を着たピンクの熊の着ぐるみ。・・・着ぐるみ？なんで着ぐるみがこんなところに？

そして、羽の付いた魔法の仮装をしたりみちゃんと、その横に立った仮面を付けた人物。おそらく薫だろうか？たぶんそうだと思う。

巴ちゃんとひまりちゃんのヴァンパイアコンビもいる。更に、天使の格好をしたあちちゃんと、猫耳と尻尾まで付けた友希那。まさか友希那まで参加するなんて。意外だった。

「あ、来て下さったんですね」

熊の着ぐるみが話しかけてくる。その声で察したが、どうやら中身は美咲ちゃんらしい。どうしてそんな格好をしているのだろうか？

「あ、み、雅さんお久しぶりです。千聖先輩もこんにちには」

「おや？これは意外なお客さん達だね」

りみちゃんと薫が話しかけてくる。りみちゃんとは本当に久しぶりだ。この前の花女文化祭の時にステージ上から姿は見ていたけれども、直接話すとなると、花火大会以来だろうか？あまりポップパの皆とは会えていない気がする。薫は久しぶりというわけでも無い気がするが、薫の言う通り、僕達の登場は意外だっただろう。僕自身そう思っているのだから。

「おっと、これは強敵登場だな」

「み、み、み、雅様も参加するの!？」

そして、巴ちゃんとひまりちゃん。彼女達とは羽女文化祭以来だ。そんなに久しぶりな気はしない。相変わらずひまりちゃんには崇拜するような目で見られている。嬉しいけど、ちよつと恥ずかしい。

「雅、あなたも参加するのね」

「み、み、み、雅様も参加するの!？」

友希那とあこちゃんだ。Roseliaのメンバーとは定期的に合同練習を行っているので、久しぶりというわけでは無い。友希那とも定期的に音楽談義を行っている仲だ。あこちゃんには、毎回同じ反応をされてる気がするけど。そもそも、ひまりちゃんと反応が完全に被っているわけだが。

「うん。皆よろしくね」

「ふふつ、お手柔らかにお願いね」

「それじゃ、早速始めましょ！」

「ちよ、ちよ、ちよつと待つて下さい！」

「こころちゃんが競争を開始しようとした時だった。それに待つたをかける人物が現れた。あこちゃんだ。」

「はい！さすがにちさと先輩と雅様のコンビは強すぎると思います！だつて二人とも有名ですよ？だから、あこは平等にするためにチームをクジで決めることを提案します！」

「そう提案するあこちゃん。クジで？そうなると、千聖以外の人と組むことになるかもしれないわけか。」

「あこちゃん！それナイスアイデアだよ！」

「いいわね！面白そうだわ！」

「はー、あんたならそう言うと思つたよ……」

乗つかるひまりちゃんに、賛同を示すこころちゃんと、諦観したようなため息をつくピンクの熊、いや美咲ちゃん。こういうことにはもう慣れてしまっているのだろう。

「それじゃ、クジを用意しないとイケないわね！」

「ふつ、それならもう用意したよ」

そう言つて、自身の懐から十本の割り箸を取り出す薫。その先端には五色の色が塗られていた。いつの間に用意したのだろうか。

「すごいわ！怪盗さん！それじゃ、早速皆で引きましようか！」

「はー、あたし以外に誰があんたの面倒見るんだ・・・」

「うー、緊張するよ・・・」

「心配することは無いさ子猫ちゃん。運命とは、最も相応しい場所へと魂を運ぶもの。つまり、そういうことさ」

「お願いします。雅様と、雅様と組ませて下さい。神様仏様みや神様！」

「おいひまり。もしかしてアタシのこと忘れてないか？」

「お願いします。雅様と組ませて下さい。一生のお願いです！」

「あこ。もしかして貴方、私のこと忘れてないかしら？」

皆が様々な反応を示している。さて、僕は誰と組むことになるのだろうか？そして千聖は誰と組むことになるのだろうか？ちよつと楽しみだつたりする。

「誰と組むことになるのかな千聖？」

「・・・そうね」

「千聖？」

千聖から返ってきた返事にはなんだか元気が無かった。気になって彼女の方を見てみると、その表情もなんだか暗い気がする。

「……いいえ、なんでもないのよ」

そう言う千聖の顔には、既に笑顔が戻っていた。僕の気のせいだったのだろうか？と良いのだが。そして僕達はクジを引いていく。その結果決まったチームが……

「さあ！ いっぱいお菓子をもらいに行くわよ！」

「……と一緒か。面白くなりそうだな！」

「……ろちゃんと巴ちゃんペア。」

「美咲ちゃんと一緒に良かったあ……」

「あはは、あたしもりみと一緒に安心してけど、宇田川さん大丈夫かな……」

りみちゃんと美咲ちゃんペア。

「わーん！ 雅様と組みたかったのにー！」

「はあ、良い考えだと思っただけだな……」

ひまりちゃんとあこちゃんペア。

「友希那とか。よろしくね」

「ええ。やるからには頂点を目指すわよ」

僕と友希那ペア。

「おや？ 暗い顔をしてどうしたんだい子猫ちゃん？」

「はあ、なんでもないわ」

薫と千聖ペア。

以上の五チームだ。

「さあ、それじゃ始めましょー！」

「はい、時間を設けないと際限が無くなっちゃうので、制限時間は一時間とします」

「それじゃ、スタートよー！ 行くわよー！ 巴ー！」

「おうー！」

その言葉と共に、こころちゃんと巴ちゃんが駆けていき、あつという間に人混みの中に消えてしまう。凄いスピードだ。

「それじゃ、僕達も行くこうか」

「そうね」

そして僕達もそれに遅れて人混みに入っていく。商店街は多くのお客さんで賑わっていた。毎年この日はいつもそうだ。ハロウィンが日本社会に浸透してきた近年、全国各地でハロウィンに因んだイベントが執り行われている。その一環として、この商店街は道行くお客さんまでもが全員お菓子を持参して歩いている。いつでも誰かに渡せるようにだ。なので、態々お店を回らなくても、道行く通行人に声をかければお菓子ぐら

いもらえる。もらえるのだが・・・

「友希那。ほら、誰かに声をかけてよ」

「嫌よ。雅にお願いするわ」

「僕も、知らない人に声をかけるのはちよつと・・・」

もらえるのだが、声をかけなければ意味が無い。そんなことぐらい、僕達もわかつている。わかっているのだけど、声をかけれずにいた。僕も友希那も、見知らぬ人に気軽に声をかけることができるタイプでは無かった。二人して、気ままに商店街内をうろついているだけ。これじゃなんの意味も無い。

「そもそも、雅あなた有名人よね？なんで誰もあなたに声をかけないのよ？」

「あはは、千聖が言うには普段の僕には芸能人オーラが全く無いらしいよ」

その影響で、街中で僕が声をかけられるのは希有なことだ。開始前は、今日は仮装までして目立ってるんだから、もしかしたら気づかれるかもしれないなんて思っていたけれど、よく考えれば今日仮装しているのは僕だけでは無い。僕達以外にも、仮装している人が商店街には大勢いる。そういう人達の影響で仮装効果も帳消しになっているようだ。誰にも気づかれる気配が無い。

「あら？友希那！雅！調子はどうかしら？」

そして途方に暮れていた僕達に話しかけてくる声が聞こえてきた。こころちやんだ。

その後方から、走ってくる巴ちゃんの姿も見える。

「はあ、はあ、ちよつと待てつてこころ！なんでそんなに速いんだよ・・・」

巴ちゃんは息を切らせてこちらに向かつてくる。見るからに巴ちゃんは運動ができそう。そんな巴ちゃんが息を切らせて追いかけてきているというのに、追われるころちゃんは息を乱すどころか汗をかいているようにも見えない。こころちゃんの身体能力の異常さがわかる。

「はあ、はあ、ああ湊さん、雅さん、どうもです・・・」

「やあ、巴ちゃん。大丈夫？」

「あはは、さつき美咲にも忠告受けたんですけど、これは尋常じゃ無いですね・・・」

「・・・私のクジ運が悪くなくて良かったわ」

こもつともだ。こころちゃん自体は凄く良い子なんだけど、残念ながら今回は只のハズレ枠になってしまっているようだ。

「それで、調子はどうかしら？」

「あはは、実は全然なんだ」

「あら？こんなにいるのだから、誰にでも声をかけていいのよ？」

「それはわかっているんだけどね」

それができないから困っているのだ。できるならお菓子の一つや二つぐらいつく

にゲットしている。

「なんだか、そつちも大変そうですね」

「ええ、全くよ」

「やれやれ使えない相方だとても言いたそうに呟く友希那。お言葉だけど、これは友希那も同罪である。」

「ふーん。まあいいわ！二人も思う存分楽しみましょ！それじゃ、行くわよ巴！」

「おい待てて！それじゃ、アタシ達はこれで」

そしてまた人混みに消えていくこころちゃん達。僕はその後ろ姿を見て、巴ちゃんの無事を祈ることしかできなかった。彼女は最後まで無事こころちゃんに着いていけるのだろうか？甚だ疑問である。

そして、その後も僕達は商店街を二人で歩き回った。しかし、いつまで経っても話しかけられずにいた。友希那に至っては、それはあなたの仕事よと言わんばかりに黙している。

「あ、雅さん、湊さん、どうも」

「み、雅さん、友希那さん、こんにちは」

そして彷徨い歩いていると、今度は着ぐるみを着た美咲ちゃんと、りみちゃんに出会った。その手を見るに、少しずつだが、確実にお菓子は集まっているようだ。

「やあ、二人とも順調そうだね。見たところ、りみちゃんは知らない人に話しかけるの苦手そうだけど、美咲ちゃんが集めてるの？」

「確かにあたしが集めたのもありますけど、りみが集めたのもちゃんとありますよ？」

「み、美咲ちゃんが傍にいてくれるとんだか安心して、知らない人にもトリックオアトリートって言えたんです」

「やるわね……」

僕達にできないことを平然とやってのけるりみちゃん。思ったよりも強い子なのかもしれない。少なくとも、僕達よりは。

「お二人は、まだ何も集めてないみたいですね」

「あはは、知らない人に話しかけるのはちよつとね……」

「本当に、早く集めてくれないかしら？」

「友希那は人のこと言えないからね？」

そう返すと、態とらしく僕から視線を外す友希那。先が思いやられる。だけど、りみちゃんだつて勇気を出して頑張ってるんだ。僕にだって、やれるはずだ。やれないわけがない。

「よし、二人を見てたらなんだかやる気が出てきたよ。ありがとうね」

「なんだかよくわかりませんが、お役に立てたようなら何よりです」

「お、お二人とも頑張つて下さい」

「うん、ありがとうね。それじゃ、いこうか友希那」

「ええ」

そして、人混みに消える僕達。なんだかりみちゃんを見てるとやる気が出てきた。今なら上手く話しかけられる気がする。よし、やってみせる。

そう思っていたのだけれども、結局は話しかけることができずに、時間ばかりが無駄に過ぎていく。ああ、結局僕は弱い人間だったようだ。

「雅。さっきの威勢はどうしたの？」

「何も言い返せないけど、何もしてない友希那には言われたくない」

そして、制限時間も残り十分ほどに迫ってきていた。このままでは、0個という衝撃的な記録を作ってしまう。それだけはなんとしても避けたい。もう僕に、手段を選ぶ余裕は無かった。最終手段を選ぶ以外の余裕は。

「はあ。仕方ない。友希那。最終手段を使うよ」

「最終手段？」

「うん。人に話しかけて注意を引くことが出来ないなら、話しかける以外の方法で注意を引けばいいんだよ」

「話しかける以外の方法？そんな方法があるの？」

「友希那。僕達はシンガーだよ？シンガーの意思表示なんて一つしか無いでしょ？」

「・・・そうね。愚問だったわ」

そう。僕達はシンガーだ。歌を歌うのが本職だ。そして、僕と友希那の実力があれば人を惹きつけることなんて容易い。惹きつけてしまえばこっちのものだ。

「曲はどうするの？」

「そうだね。折角だから人の心にしみるバラード系のナンバーにしようか。僕、Roseliaのあの曲好きだな」

「・・・わかったわ。けど、あの曲はデュエットソングじゃ無いわよ？」

「即興で合わせるよ。着いてこれる？」

「当然よ。私を誰だと思ってるの？」

「・・・そうだね。愚問だったよ」

そう言つて、僕達は互いに不敵な笑みを浮かべた。僕達はシンガーだ。根つからのシンガーだ。そんな根つからのシンガーに、歌うための舞台なんて必要無い。歌いたいと思えば、そこはもうライブ会場だ。例え、そこが商店街であつても。

「準備はいいかしら？」

「うん。いつでもいいよ」

「それじゃ行くわよ。・・・軌跡」

そして、僕達の舞台が始まる。演奏するための楽器なんて当然持ち合わせていない。要するにアカペラだ。友希那の声が、僕の声が商店街に響き渡る。響き渡り、道行く人々の耳に届く。すると、一人、また一人と僕達の周りに人だかりができていった。

僕達の周りが人で埋め尽くされるのにそう時間は必要無かった。サビに入るまでもなく、三百六十度人の壁が完成する。そして、その壁はサビに入ることによってさらに厚みを増していく。僕達の歌が交わる。声が重なる。互いをさらなる高みへと押し上げる。

気持ちいい。それが僕が抱いた最大の感想だった。おそらく、友希那も同じ感想を抱いているのではないだろうか？何故なら、彼女の顔にも僕と同じ笑顔が浮かんでいたのだから。その感情は歌声からも伝わってくる。楽しいという感情と、止めどない高揚感が。

そう。高揚感だ。僕達は今、高揚していた。興奮していた。自分達の歌の更なる可能性

に出会えて。友希那とのデュエットは決して初めてというわけではない。定期的に行っている合同練習でも実践していることだ。しかし、客を前にしてというのは初だ。僕達は根っからのシンガーだ。その本領は、客を前にしてこそ発揮される。

普段の練習が戯れに過ぎないかのような完成度だった。別に、普段の練習で手を抜い

ているというわけでは無い。そんなことをすれば、Roseliaのギター担当である紗夜ちゃんにどのようなことを言われることやら。想像もしたくない。練習でも間違いないく持てる限りの力を出し切って取り組んでいる。ただ、その限界値を今は超えてしまっているだけのこと。

シンガーとは、いや、シンガーに限らずパフォーマーというのはそのような生き物なのだ。客がいることによって限界以上の力を容易く発揮できてしまう。そんな理不尽な生き物なのだ。とはいえ、そんなことができるシンガーも限られているだろうが。僕と友希那は、間違いなくその枠組みに入っている。現に、今できているのがその証拠だ。

僕だって場数を踏んできたプロだ。このような経験をするのは何も今が初めてというわけではない。しかし、ここまで自身の能力を引き出せたのは初めてだ。おそらく、これも彼女の影響なのだろう。今改めて僕は思う。彼女となら、世界の頂点を容易く狙えると。そんなことを感じている内に、僕達の舞台は幕を閉じていた。

「すげーな兄ちゃん達！こんなすげー歌生まれて初めて聞いたぜ！」

「あの、もしかして雅様ですか？こ、こんなところでお会いできるなんて・・・」

「あれ？もしかしてRoseliaの湊友希那さんですか!?!私大ファンなんです！サイン下さい！」

歌い終わった僕達は、お客さん達にもみくちやにされていた。わかつてはいたけど、

やっぱり注目を集めれば僕の正体にも気づかれる。その後僕はファンからのサイン攻めに合っていた。そして、それは友希那も一緒だった。どうやら、彼女のファンも多いようだ。まあ、あれほどの歌声を持つていれば当然だろう。そして僕は、五分ほどでなんとかお客さんの輪から抜け出して一息をついていた。

「ふう、やっと抜け出せたね。ちよつと疲れたかな」

「全くだわ。少し休みましょう」

二人して安堵の息を吐く。そして落ち着いてから、思い浮かべるのは先ほどの光景。先ほどの歌声。先ほどの高揚。本当に彼女となら頂点を目指せる。そう思うと、興奮せずにはいられなかった。行動に移さずにはいられなかった。

「友希那。さっきのパフォーマンスを見て改めて確信したよ。君となら頂点を目指せると」

「そうね。私も同じ事を思っていたわ」

やはり、彼女も同じ事を考えていたらしい。だったら話は早い。僕には何一つの迷いも存在しなかった。

「友希那。改めて言うよ。僕と一緒に頂点に上り詰めてみない？僕達なら絶対に大成するよ」

彼女への勧誘。これが僕の目標に対する最大の近道となるだろう。果ての見えない

終点への道がやつと拓けたように僕は感じていた。

「・・・そうね。雅となら間違いはないでしょうね」

彼女の反応は上々だった。間違いは無いという顔にも、輝かしい笑みが浮かんでいた。これはあるかもしれない。そう考えてもおかしくないだろう。

「だけど、私が共に頂点を目指す相手はあなたでは無いわ」

そして返ってきた返答は、僕の予想通りのものだった。また僕は振られてしまったらしい。

「そうか。うん、そうだろうね」

「はあ、わかかって誘う必要があったの？」

「あはは、少しでも可能性があったら僕は乗るよ」

「少しも無かったわよ」

どうやら、微塵も可能性は無かったらしい。悲しい事実だ。とそんなことを考えている内に、一つの疑問が湧いてきた

「そういえば、僕達どうしてあんな場所で歌ってたんだっけ？」

「どうしてって、それは集まったお客さんにお菓子をもらおうと思って・・・あ」

そこまで思い出して、僕と友希那は二人して血の気が失せていくのを感じた。そうだ。僕達の目的はお菓子だった。歌うことが目的だったわけではない。それは只の手

段だ。なのに、いつの間にか歌うことが気持ちよくて、それそのものが目的であるかのように考えていた。要するに、お菓子をもらい忘れたのだ。歌い終わった後も、サインを書くのに忙しくてすっかり忘れてしまっていた。

「ちよつと待つて。もしかして、今僕達が集めてるお菓子つて……」
「0個ね」

「せ、制限時間は……」

「後三十秒とあったところね」

「終わった……」

そうして、僕達のハロウィン競争は、0個という驚くべき成績で終演を迎えたのだつた。泣きたい。

「はーい。それじゃー1位の発表をしますよー」

そう、美咲ちゃんが言う。どうやら熊の着ぐるみは脱いだらしい。僕達の結果を聞いたときの彼女の乾いた笑みは忘れない。どうやら、気を使ってくれたのか全体への発表

は一位だけするらしい。

「1位はこころと宇田川さんペアです」

「やったわね巴！」

「そ、そうだな・・・あはは・・・」

喜ぶこころちゃんと、膝に手をつけて苦しそうにしている巴ちゃん。その膝は小刻みに震えていた。もしかしたら、今回一番の被害者は彼女かもしれない。

「ふっ、どうやら負けてしまったようだね。さすがこころだよ」

「ううっ、負けた・・・」

「あこ、お姉ちゃんに勝ちたかったな・・・」

負けて悔しがる皆。だけど、僕達には悔しさなんて微塵も無かった。それもそのはずだ。そもそも、勝負することすらできていないのだから。0個で誰に勝てと言うのだから。

「・・・違うわ」

と、皆が悔しそうにしていると、こころちゃんが急に言葉を放った。違うという否定の言葉を。一体何に向けられた言葉なのだろうか？

「勝ったとか負けたとか、そういうものはいらないわ！あたしは楽しむためにこのイベントを開いたの。それなのに勝ち負けにこだわるのはやっぱり違うわ！」

なるほど。実にこころちゃんらしい。だけど、だったら最初から競争とつけないければ良いような気もするけれど、そこに触れるのは無粋というものだろう。

「それじゃイベントの後は、皆でお菓子を食べましよう！」

そして僕は、思い思いのお菓子に齧り付いた。甘い。心が安らぐような甘さが僕の口内に広がっていく。これで、僕が実際にもらったものだったら最高だっただろう。だけど、実際に僕がもらったお菓子はここには無い。これも、誰かがもらってきてくれたものだ。悲しい事実だ。今回は残念な結果に終わってしまった。正直、悔しいという思いも少しはある。だけど、それ以上に楽しかった。

こころちゃんも言っていた通り、勝ち負けよりも楽しめたかどうかが重要だろう。そういう点では、僕達はもしかしたら勝者かもしれない。まあ、勝ち負けはどうでもいいのだが。

本当にあの歌っているときは楽しかった。自分の新たな可能性を見出せたような気がして、嬉しかった。そして僕は確信した。僕はまだまだ上を目指せると。最近僕は自信の實力に伸び悩んでいた。いくら時間を費やしても、伸びている気がしない。苦悩と言ってもいい感覚を味わっていた。だけど、今日の一件で自分の實力に自信を持てた。僕はまだまだやれる。上を目指せる。きっと近い将来に高みに上り詰めることが出来る。そのような高揚感に包まれた、素敵な素敵なハロウインの一幕だった。

第40演目 君の顔が好きだ

「千聖ちゃん、進路はどうするの?」

それは街が秋色に染められた帰り道での何気ない会話だった。花音が急にそのようなことを言うてくる。私は知っている。最近花音が進学先で悩んでいることを。花音は大学進学を目指している。しかし、花音が目指している志望校は、今の花音の学力では届かないらしい。決して花音の学力が低いわけでは無い。単純に大学のレベルが高いのだ。それで、別の大学を目指すのか、このまま今の志望校を目指すのかを悩んでいるというのが今の花音の現状。

だからだろう。急にこのような話題が出てきたのは。

「そうね。今のところは花音と同じよ。必死に受験勉強をして、大学進学を目指しているわ」

私にも、目指している大学がある。その大学も、花音の志望校ほどでは無いにしても、大学としてのレベルは十分に高い。今の私では、まだ手が届かない。それこそ、必死に受験勉強をしてやっとな手が届くような大学。決して油断はできない。

「そっか。じゃあ千聖ちゃんも、来年の今頃は遊んでる余裕なんて無いかもしれないね」

そうかもしれない。おそらく、私も花音も来年はセンター入試を受けることになるだろう。センター入試は、毎年一月頃に開催されることになる。となると、来年の今頃は必死に追い込みにかかる時期ということになる。当然、遊んでる余裕は無くなるだろう。仕事はどうしようかしら？

「私もね、来年の今頃は勉強に必死で遊んでる暇なんて無いと思うの。だけど、ハロハピの皆との活動はやめたくなって、どうしようかなって考えてるの。だけど、きつと、両立なんてできないことだよな？志望校のレベルを落とせばできると思う。だけど、そのために志望校のレベルを落とすのもなんだかおかしい気がしちやって・・・私、どうしたらいいんだろうね？」

そう告げる花音の表情は真つ暗だった。花音が受験の事で悩んでいるのは知っている。だけど、まさかここまで悩みが深刻だとは予想だにしていなかった。そして、その答えを私が言うわけにはいかないだろう。安い気持ちで、そのような重要な答えを言うべきでは無い。これは花音自身で悩んで、悩み抜いて、導き出すべき答えなのだから。部外者とも言うべき私が、土足で踏み込んでもいいような問題ではない。

「花音。ごめんさい。私にはその答えがわからないわ。これはあなた自身の問題よ。必死で悩んで、悩んで、悩み抜いて自分が納得のいく答えを見つけ出しなさい。頼りない友人でごめんさい」

「千聖ちゃん・・・。ううん、ありがとう千聖ちゃん。そうだよ。やつぱり私が自分で考えないといけない問題だよ。うん。私、頑張つて悩んでみるよ。やつぱり千聖ちゃんは頼りになるな」

「ふふつ、少しでも花音の気休めになれたのなら良かったわ」

この問題は決して簡単な問題では無い。もしかすると、入試で出題されるようなどんな問題よりも難しいかもしれない。だけど、最終的には必ず答えを導き出さないといいない。私には、そんな花音を見守ることしか出来ない。

バンドとしての活動を心配する花音。だけど、これは決して私にとつても他人事では無い。女優としての活動。パスパレとしての活動。それらの活動をどうするか。私も決めなければいけない。雅のお世話だけはその間も継続するとして、他のことに関しては何を続けて、何を止めるのかを決めないといけない。

そして、雅のことを考えて、私の脳裏にあることが思い浮かぶ。それは雅との想いで作りだ。おそらく、ともに過ごせる高校生としての秋は今年が最後だろう。今年の秋も、二度の文化祭、無人島ロケと、思い出は作ってきた。だけど、今年で最後と考えると、まだ少ない。この秋、冬で来年の分も思い出を作らなくてはいけない。そう考えると、時間が非常に少なく感じてしまう。どうして今まで気づかなかつたのだろうか？いや、気づかなかつたと言うよりは、気づかないふりをしていたのだろう。目をそらして

いたのだろう。だけど、意識してしまったからにはもう目を背けることはできない。これから一生忘れないような秋、冬の思い出を雅と作っていけばいい。

そして、明日は丁度おあつらえ向きのイベントがある。ハロウィンだ。思い出作りにしてもってこいのイベントだと言えるだろう。このハロウィンで、一生思い出として残るような体験をしてみせる。高校生として、参加できるハロウィンはこれがおそらく最後。そして、恋人になつてから参加するハロウィンはこれが初めて。きつと素敵なハロウィンになるだろう。そう確信しながら、帰り道を花音と歩くのだった。

「ハロウィン競争？」

それは、夕食後雅に明日のことを話そうと思っていた矢先のことだった。先に雅からハロウィンの話が出てきた。ハロウィン競争。その言葉を聞いただけでは、どういった内容なのか全く想像が付かない。

「うん。今日の帰り道でこころちゃんと美咲ちゃんに誘われてね。二人一組のチームで誰が商店街の人に一番お菓子をもらえるか勝負するんだって」

「そう。雅は参加したいの?」

「そうだね。折角誘ってもらったんだから、どちらかと言うと参加してみたいかな。まあ、こころちゃん達には千聖次第とは言つてあるけれども」

「そうね・・・」

なんとなく予想はしていたが、どうやら発案者はこころちゃんらしい。雅は、参加することに前向きなようだ。このような催しに参加するのは、芸能人として好ましくない。一般人の目が多い場所での目立つ行動。知名度のある人間がすると、いらぬ混乱を生み出す結果になってしまう。それは避けるべきだ。

普段の私なら、間違いなく断っていたでしょう。普段の私なら。だけど、今の私には時間が無かった。雅との思い出を作る時間が。その思い出作りに、この催しを利用させてもらおう。本来なら、もちろん二人きりの方が好ましい。だけど、今から明日の計画を二人で決めるにしても、時間が足りない。明日も学校が私達にはある。夜も遅くなつてきているし、いつまでも起きているわけにはいかない。

だったら、最初からやるのが決まっているこのイベントに参加するのも吝かやぶらではない。それに、このイベントは二人一組で行うらしい。チームが決まっているのなら、そのチームで、つまり雅と二人きりになれる時間も多くなるだろう。

「いいわ。参加しましょう」

「え？」

そう結論づけた私は、雅に参加意志を伝えた。しかし、それを聞いた雅から飛び出したのは、間の抜けたような驚きの声だった。おそらく、私は反対するものだと思っていたのでしょう。当然、その判断は正しい。だけど、今は本当に時間が無かった。おそらく、高校生活でまともに思いで作りが出来るのは後一年も無い。一年もある、と感じる人もいるかもしれないが、私にとつてその数字はあまりにも短く感じてしまった。それこそ、心に焦りを生み出すほどに。

「あら？私に参加するのはご不満だったかしら？」

「あ、いや、そういうつもりじゃなくて……」

「ふふつ、冗談よ。そうね。普段だったら断っていたかもしれないわね。芸能人として軽率な行為は取れないもの。だけど、今回は特別よ。時間が無いのよ」

「時間？」

「……いいえ。なんでもないわ。ごめんなさい。さあ、そうと決まったら仮装を考えないといけないわね。ハロウィン競争ということは、皆仮装してくるのでしょう？」

「あ、うん。そうだね」

そして、私達は明日の仮装の話をしていく。仮装が決まるまでに、私が想定していたよりも長い時間を要してしまった。仮装だけでこれだけの時間がかかった。もし、一か

ら計画を練つてとなると、やっぱり明日に差し支えるほどの時間を要していたかもしれない。そして、私達は明日の放課後事務所に、考えた仮装を借りに行くこと決めた。貸してくれるという確証は無いけれども、おそらく大丈夫でしょう。何かしらの交換条件を付けられそうだけれども。

それにしても、仮装して過ごすハロウィンなんて、小学校の時以来だから実は少し楽しみだったりする。明日は皆どんな仮装をしてくるのかしら？きつと楽しく、思い出に残るような一日になるでしょう。私はそうして、明日に思いを馳せるのだった。それが、無駄な思いになるとも知らずに。

そして、翌日の放課後がやってきた。事務所に仮装を貸してくれるように頼みにいった私達は、案の定交換条件付きでの貸し出し許可を得ることができた。その条件というのが、私達二人の仮装を事務所ホームページに掲載するというものだ。全くもって予想通りの内容だった。あの無人島番組の放映以降、私と雅の仲は公然の物となってしまうた。

その反響は大きく、私達二人の写真がホームページにアップされるだけで、相当数の反応が寄せられるようになったらしい。つまり何が言いたいかというと、私達の写真を掲載するという事は、事務所にとって非常に大きな宣伝効果を得られるのだ。そして今日はハロウィン。そんな日に仮装写真を掲載すれば、通常以上の反応を寄せられることが予想される。事務所としては、こんなに美味しい話は無い。

もしかしたら、私達に仮装を貸し出したのも、街中での宣伝効果を期待してのことかもしれない。とはいえ、背に腹は代えられない。事務所の思惑に乗せられるのは癪しやうだ、仕方ないことだと割り切ろうと思う。

そして、無事仮装を借りることができた私達は商店街を目指し歩いていた。因みに仮装は、私が魔女で雅が狼男だ。れおんみたいでなんだか可愛い。

「あら？来たみたいねー」

そして商店街に到着した私達。そこには既に多くの子供が集まっていた。いの一番にこころちやんが私達に声をかけてくる。ジャック・オー・ランタンの仮装に身を包んだこころちやん。天真爛漫な彼女と相まって、そのオレンジを基調とした仮装が非常に似合っていた。

「あ、来て下さったんですね」

そして、これまたカボチャをモチーフにした仮装に身を包んだ熊の着ぐるみ、ミツ

シエルに身を包んだ美咲ちゃん。別にそんな衣装を着なくても、着ぐるみの時点で仮装していると思うのは私だけかしら？

「あ、み、雅さんお久しぶりです。千聖先輩もこんにちは」

「おや？これは意外なお客さん達だね」

そして、私と同じ魔女タイプの仮装に身を包んだりみちちゃんと怪しい仮面を付けた人物。りみちゃんは、その小動物の様な容姿と背中に付けた羽が相まって、魔女というよりも、天使のように見える。仮面の人物は、この際割愛しましょう。

「おっと、これは強敵登場だな」

「み、み、み、雅様も参加するの!?!」

そして、二人してヴァンパイアの仮装に身を包んだひまりちゃんと巴ちゃん。巴ちゃんの言う通り、私達は強敵に該当するでしょう。この中では、世間一般的な知名度で言えば、私と雅は当然飛び抜けて高い。その気になれば、人が勝手に寄ってくるようにすることがだってできる。雅には無理かもしれないけれども。ひまりちゃんの反応は、いつも通りね。

「雅、あなたも参加するのね」

「み、み、み、雅様も参加するの!?!」

そして、猫の仮装に身を包んだ友希那ちゃんと、天使の仮装、いえ、きつと彼女のこ

とだから墮天使の仮装かしら？に身を包んだあこちゃん。人のことを言えないかもしれないけれども、友希那ちゃんが参加するのは意外だった。彼女は決してこのように催しに参加するような性格では無いと思っていたから、かなり意外だった。おそらく、あこちゃんに巻きこまれたのかしら？あこちゃんはあこちゃん、反応がひまりちゃんと完全に被っている。本当に二人とも、雅のことが好きみたいね。私としても、こんなに雅を好きでいてくれることをとても嬉しく感じる。その気持ちだが、恋愛感情にならない限りは。

「うん。皆よろしくね」

「ふふっ、お手柔らかにお願いね」

「それじゃ、早速始めましょー！」

「ちよ、ちよ、ちよつと待つて下さいー！」

早速、こころちゃんがイベントを開始しようとした時だった。それに待つたをかける人物が現れた。あこちゃんだ。

「はい！さすがにちさと先輩と雅様のコンビは強すぎると思います！だつて二人とも有名人士ですよ？だから、あこは平等にするためにチームをクジで決めることを提案します！」

そう提言するあこちゃん。待つて。それはダメ。そんなことをされては、私の今日の

計画が、雅との想い出作りが台無しになってしまふ。それは、それだけはなんとしても避けたい。

「あこちゃん！それナイスアイデアだよ！」

「いいわね！面白そうだわ！」

「はー、あんたならそう言うと思つたよ……」

しかし、私の願いとは裏腹に、とんとん拍子に話が進んでいく。周りを見ると、既に大半のメンバーが賛成、もしくは中立の立場を取っているように見える。おそらく、反対勢力は私だけ。そんな中、私が反対意見を出したところで、無意味だろう。それに、主催者であるこころちゃんが既に賛成しているのだ。ゲストである私一人の意見がまかり通るわけが無い。

「それじゃ、クジを用意しないといけないわね！」

「ふっ、それならもう用意したよ」

そう言つて、懐から十本の割り箸を取り出す仮面の人物、薫。いつの間に用意したのだろうか。もしかすると、この事態を予測して、予め用意しておいたのかもしれない。その用意周到さが今は腹立たしい。

「すごいわ！怪盗さん！それじゃ、早速皆で引きましようか！」

「はー、あたし以外に誰があんたの面倒見るんだ……」

「うー、緊張するよ……」

「心配することは無いさ子猫ちゃん。運命とは、最も相応しい場所へと魂を運ぶもの。つまり、そういうことさ」

「お願いします。雅様と、雅様と組ませて下さい。神様仏様みや神様！」

「おいひまり。もしかしてアタシのこと忘れてないか？」

「お願いします。雅様と組ませて下さい。一生のお願いです！」

「あこ。もしかして貴方、私のこと忘れてないかしら？」

様々な反応を見せる参加者達。皆、既にクジの結果に頭がいつているようだ。反対するにしても、遅すぎた。こうなってしまうては、意見が通る僅かな可能性すら残されていないだろう。黙って、クジを引くしか選択肢は残されていない。

「誰と組むことになるのかな千聖？」

「……そうね」

「千聖？」

そもそも、雅と組まないと決まったわけでは無いのだ。クジの結果、雅と組むことができる可能性だつてある。まだ、諦めるには早い。

「……いいえ、なんでもないので」

私は、覚悟を決めて心配そうにこちらを見つめる雅に視線を向けた。どうやら、気持

ちが声にも出てしまっていたらしい。私の暗い気持ち。雅にまで、余計な心配をかけてしまった。気持ちを切り替えよう。そして、皆が順番にクジを引いていく。祈るようにクジを引く私。そして全員が引き終わり、組み合わせが決定した。その結果決まったペアは……

「さあ！ いっぱいお菓子をもらいに行くわよ！」

「こころと一緒か。面白くなりそうだな！」

「こころちゃんと巴ちゃんペア。」

「美咲ちゃんと一緒で良かったあ……」

「あはは、あたしもありみと一緒にで安心したけど、宇田川さん大丈夫かな……」

りみちゃんと美咲ちゃんペア。

「わーん！ 雅様と組みたかったのにー！」

「はあ、良い考えだと思っただけだな……」

ひまりちゃんとあこちゃんペア。

「友希那とか。よろしくね」

「ええ。やるからには頂点を目指すわよ」

雅と、友希那ちゃんペア。

「おや？ 暗い顔をしてどうしたんだい子猫ちゃん？」

「はあ、なんでもないわ」

私と、薫ペア。

結果、私は雅とは別のペアになってしまった。それどころか、薫と一緒のペア。最悪だ。もはや、私にとってこのイベントが、地獄にしか思えなくなってしまうていた。こんなことなら、今日に影響しても良いから計画を最初から練るんだった。このイベントに参加するんじゃないかった。

「さあ、それじゃ始めましょー！」

「はい、時間を設けないと際限が無くなっちゃうので、制限時間は一時間とします」

「それじゃ、スタートよー！行くわよー！巴ー！」

「おうー！」

そう言つて、凄いスピードで駆けだしていくこころちゃんと、そのスピードに驚きながらも、必死に着いていく巴ちゃん。彼女達の姿は、あつという間に人混みの中に見えなくなつてしまった。そして、それに続くように他の皆も商店街の中に入っていく。その場に残っているのは、私と薫だけになった。

「それじゃ、私達も行くこうか。お姫様」

「・・・そうね」

確かに、こんなところ突つ立つていても仕方が無い。あまり気は乗らないが、行く

しか無いだろう。正直、もう帰りたいというのが本音だけれども。商店街の中を、当てもなく二人歩く。私はただ、トボトボと。薫は、歩きながらも、時々通行人や、店の人にお菓子を貰っていた。

この商店街は、近年イベント行事に力を注いでいる。ハロウィンも、そのイベントの一環だ。道行く人々の中には、仮装をしている人も少なくないし、訪れるお客さんも今日は大半がお菓子を持参している。だから、適当な人にトリックオアトリートと声をかけても、高確率でお菓子を貰えるのだ。私は、到底貰う気にならないが。

「ほら千聖。君も道行く旅人達に願いを言ってみてはどうだい？折角のお祭りなんだ。何もしないのは勿体ないだろう？かのシェイクスピア曰く、何もしなければ、何も始まらない。つまり、そういうことさ」

「……ごめんなさい。気分じゃ無いの」

到底そんな気にはならない。今の私の心には、暗い暗い暗雲が立ちこめていた。到底、薫に付き合う気分にはなれない。

「ふっ、クールなお姫様だ。暗い森を一人彷徨うお姫様か。ああ、なんて儂いんだ……」
薫のそんな発言を無視して、私は歩く。少し後ろから、儂いという薫の声が聞こえてくる。そんな声を無視して、ただただ、歩く。

「あ、千聖さんだ」

そんな私に声をかけてくる人物がいた。ひまりちゃんだ。その後ろにはあこちゃん
の姿も見える。あこちゃんの姿を見た瞬間、私の中に、恐ろしく黒い何かが生まれた気
がした。

「ちさと先輩聞いて下さい！あこ、ひーちゃんより一杯お菓子貰ってるんですよ！」

「一杯って、1個差じゃん！直ぐに追い抜いちやうよ——！」

「はあ、でも、やっぱり雅様とペア組みたかつたな。あ、ひーちゃんが嫌なわけじゃな
いんだよ？」

「わかてるよあこちゃん。私も同じ気持ちだもん。雅様と組みたかつたよね——」

「ちさと先輩はいいな。雅様といつも一緒にいられて羨ましいです」

「本当だよ！あー私も一日で良いから雅様と二人つきりで過ごしてみたいな——」

「ひーちゃんそれすつごく良い！あこも過ごしてみたい！」

「でしょ？きつと、一生の宝物になると思うな——」

「・・・て」

「え？千聖さん、何か言いました？」

「いい加減にして！」

柄にも無い、大きな声だった。声を出した私自身が驚いてしまったほどの、大きな声
だった。それを聞いたひまりちゃんとあこちゃん、薫までもが驚愕した表情を浮かべて

いる。道行く通行人までもが、近くのお店の人までもがこちらを注目している。私自身、こんな声を出したわけでは無い。しかし、抑えようにも、私の中の黒い部分は、とつくに制御できる許容量を超えてしまっていた。そして、一度決壊を始めた思いは、せき止めることができない。

「いい加減にしてよ！雅と一緒にいられて羨ましい？雅と二人つきりで過ごしたい？何も知らないくせに！私が、どんな思いで雅といるかを知らないくせに！あなたのせいで私は……私は……」

そこで、なんとか言葉をせき止める。止めないと、いつまでも言葉の暴力を続けてしまいそうだったから。二人を見てみると、哑然とした表情で私のことを見ていた。私は、そんな二人の横を何も言わずに通り返し、進む。あまり、この場所に長居はしたくなかった。

「すまないね。子猫ちゃん達。どうやら、今日のお姫様は虫の居所が悪いみたいなんだ」「いえ、きつと、私が悪いんです……私が、軽々しくあんなこと言っちゃったから……」「あこ、もしかして、悪い事しちやったのかな……？」

「そうだね、そんな迷える子猫ちゃん達の為に、一つ昔話をしようか。昔々、あるところに、天才子役と謳われた少女と、天才シンガーと賞賛された少年がいました。少女達は……」

後ろから、そんな声が聞こえてくる。だけど、私はそんな声を無視して一人歩く。薫は、彼女達と話して追ってこない。丁度良かった。今は一人になりたかったところだ。少し、一人で過ごさせてもらおう。私には、気持ちを落ち着かせる時間が必要だ。あのような事態に陥った原因は理解している。焦り、そして余裕の消失。時間が無い。その事実から生じる焦り。その焦りから直結して発生した余裕の消失。この二つの原因が私の内側に、負の感情、黒い感情を生み出した。この場に、雅がいなくて助かった。雅にだけは見られたくなかった。こんな私の、醜い感情なんて。

「あら？千聖じゃない！」

頭を冷やそうと商店街内をふらついていると、こころちやんに出会った。正直、今最も会いたくなかった人物だ。その後方には、こちらに向かって走ってくる巴ちゃん姿も見える。

「はあ、はあ、や、やと追いついた・・・」

「巴！千聖よ！千聖がいたわ！」

「はあ、はあ、白鷺さん・・・？あ、本当だ」

「あら？千聖、あなた一人かしら？怪盗さんはどこに行っちゃったのかしら？」

怪盗さん？薫の事だろうか？きつとそうだろう。薫の事は置いてきた。なんて素直に言えるわけが無い。ここは、適当にはぐらかしておこう。

「実は、人混みではぐれてしまったの」

「それは大変ですね。あの人のことだから大丈夫だと思えますけど、少し心配ですね」

「心配なんてないわ！怪盗さんなら絶対大丈夫よ！だから、千聖も暗い顔をする必要は無いわ！」

「え？」

暗い顔？私は今、そんな顔をしていたのだろうか？自分では、顔にまで心情は表れていないものだと思っていた。しかし、実際には表れていたということだろうか？私的には、商店街をうろつき、多少は気持ちが悪く落ち着いた物だと思っていた。だけど、どうやらそれは見当違いだったのかもしれない。

「ほら、笑いましょ！笑顔になりますよ！折角のハロウィンだもの！楽しまなきゃ勿体ないわ」

「……ごめんなさい。やっぱり、私にはできないわ」

到底笑う気にはなれなかった。笑顔なんて、嘘でも浮かべる気になれない。やっぱり、私の心はまだ荒天模様らしい。

「どうして出来ないかと決めつけるの？笑顔になることってそんなに難しいこと？そんなことないわ！誰だって簡単に笑顔になれるものよ！千聖だって絶対になれるわ！さあ、みんな笑顔になりましょう！世界を笑顔にするのよ！」

やつぱりこうなった。こうなることは、予想が出来ていた。だから、彼女とは会いたくなかったのだ。なんで笑顔を強要されなくてはいけないのだろうか？人には誰にだって、笑いたくなくないとき、気が悪いときが存在する。今の私のように。私の中に、また黒い感情が生まれてきた。

「笑顔笑顔って、あなたいい加減に」

「あ、こころ。あつちにミツシエルがいるぞ。行つてみようぜ」

私がまた、自身の醜い感情を吐き出してしまいそうになった時だった。巴ちゃんの声が私の声を遮る。その行為により、私の吐き出されるはずだった汚い言葉は途切れ、醜い感情は少しばかり薄れた。

「あら？本当だわ！千聖、笑顔になることは素晴らしい事よ？だから、絶対笑顔になるのよ？それじゃ行くわよ巴！ミツシエル！」

そう行つて、こころちゃんはミツシエルこと、美咲ちゃんのもとへと駆けていった。その場には、私と巴ちゃんだけが取り残された。

「……ごめんなさい。気を使わせてしまったかしら？」

「いいえ、気にしないで下さい。白鷺さん、何があつたのかはわかりませんが、こころが言う通りになんとか暗いですよ？さすがに、誰だつて心配になります。言いたくないのでしたら、無理にとは言わないですけど、アタシで良ければいつだつて力になります

よ？なんでも相談して下さい」

「ええ、ありがとう」

巴ちゃんのお陰で、いくらか気分が晴れた気がした。さすが、お姉さんといったところだろうか。非常に頼りになる。それに比べて、私は何をしているのだろうか？自分の思い通りにならず、辺りに当たり散らして。同じ姉として、情けなく感じてしまう。

昔から私はそうだ。雅が絡むと、普段の私からは想像も出来ないほど取り乱してしまうことがしばしばある。悪癖と言ってもいいかもしれない。それほど、私の中で雅を大事にしているということなのだけれども。

そして、その後も商店街を私は一人でふらついた。そして、イベントの終了まで、残り十分ほどとなったころだろうか。商店街の一角から、不意に歌声が聞こえてきた。美しい歌声が二人分。聞き覚えのある歌声が二人分。私は、その歌声に導かれるように近づいていく。人垣が高く、よく見ることが出来ない。背の低い私には、厳しい高さだ。

私は、なんとか中が見える位置は無いかと、人垣の周りをぐるりと回ってみる。そして、背伸びをすればなんとか中が見える位置を発見した。中を覗いてみると、歌っている人物が見えた。予想通りの人物だ。雅と友希那ちゃん。カリスマ的歌唱力を所持する二人の共演。まさに、圧巻のパフォーマンス。思わず、聞き入ってしまった。

そして、その曲の歌詞を聴いて、思わず私は泣きそうになってしまった。たしか、R

oseliaの軌跡だっただろうか？その歌詞を聴き、思わず共感してしまった。まるで、私と雅が今まで歩んできた軌跡を歌っているかのように感じて。今日までの、雅と過ごした日々が思い浮かぶ。その光景を思い浮かべ、泣きそうになる。人の目さえ無ければ、遠慮無く泣いていただろう。だけど、ここは人が溢れる商店街。そのような場所では、涙を流したくない。その一心で、なんとか抑えていた。

そして、感動したのはもちろんのだが、私の中には、もう一つの別の感情がこの光景を目にして生まれていた。仲睦まじくデュエットを歌う二人。本当に楽しそうに、お互いを信頼して歌っているのが見ればわかる。それこそ、見る人が見れば二人の仲を疑ってしまうほどに。

そう、あろうことか私は今、友希那ちゃんに雅を取られてしまうのではないかと心配していたのだ。雅に限って、そんなことはありえない。そう思っている。思っているのだけれども、万が一があるかもしれないと考えてしまっている自分がいる。

こんなこと、本当は微塵も考えたくない。だけど、つい不安になってしまふ。普段なら、そんな思考全く浮かんでこなかっただろう。だけど、今日の私は本当に精神的に不安定だった。こんな状態では、悪い思考しか生まれてこない。雅だって、こんな醜い私を見たら幻滅してしまうかもしれない。友希那ちゃんに気が流れてしまうかもしれない。そんなのは絶対に嫌だ。

そんな不安を抱えながら、友希那ちゃんのことを見ていると、不意に彼女と目が合った。私は、彼女から逃げるように思わず視線を逸らしてしまう。少しの間でも、彼女と目を合わせるのが怖かった。

「素晴らしい歌声だね。思わず天にでも昇ってしまいそうだ。ああ、夢い・・・」

そんなときに、不意に背後から声が聞こえた。薫だ。いつからいたのだろうか？ 全くいたことに気がつかなかった。

「ええ、本当に素晴らしいと思うわ。二人とも、同年代でも圧倒的な歌唱力の持ち主だもの。それも当然よ」

「そうだね。しかし、まさかこんな人混みで歌う人が現れるとは思わなかったよ。面白いじゃないか。私達も、乗っかってみないかい？」

「乗っかる？ まさか、歌おうとでも言うの？」

「さすがに、あの歌の直ぐ傍で歌おうなんて思わないさ。人には、自分に合った舞台という物がある。王子様達にとっては、それが歌だった。私達の場合は、演技だ。そうだろうっ」

「まさか、ここで演劇でもしようというの？ そんな時間もないし、気分でもないわ」

「なあに。私達にとっては、演劇は日常だ。自分を演じることなんて、私達には難しいことでもないだろうっ！」

「薫、あなた……」

その薫の言葉で、私は察した。薫は私に、演技をしろと言っているのだ。私自身の。普段の私自身の。

「……言ったはずよ。気分では無いと」

「では、いつその気分になるんだい？子猫ちゃん達に喚いたり、友希那に嫉妬するぐらいなら、自分を演じた方がよっぽどお姫様らしいと思うが？」

「私らしい？私らしいって何？嫉妬しない方が私らしい？演技に身を投じていた方が私らしい？祿に私のことも知らないで、知ったような口を……ハム!？」

私が、思わずまた大声を出しそうになった時だった。口を開いた瞬間に、薫が口の中に何かを放り込んでくる。すると、すぐに口内に甘い甘い味が広がっていく。その味で、私は口の中に入れられた物の正体に気がついた。

「……チョコレート？」

「少しは落ち着いたかい？甘い物は、心に安らぎを、余裕を作ってくれる。今のお姫様に、最も必要な物だろう」

薫の言う通り、少し心に平穏が戻ったように感じる。とはいっても、少しの気休め程度だろうか。

「どうだい？落ち着いたかい？」

「ええ、少しだけね」

「その少しでも十分さ。少し落ち着いたなら、冷静に考えてみるがいい。喚き散らすのは、千聖らしい行為なのかい？ 雅を取られると考えるのは、千聖らしい行為なのかい？」

「それは・・・」

そんなの、違うに決まっている。そんなことは自分でもわかっている。わかっているけれども、自分の感情を抑えきれないから困っているのだ。

「私が知っている千聖は、喚き散らしたりなどせず、悪いことには悪いと冷静に言葉を選んで注意するはずだ。雅を取られるなんて考えず、いつだって雅の事を信じて堂々と構えているはずだ」

「そんなこと・・・」

「ああ、千聖自身わかっているのだろうか？ わかっているが、自分の感情を制御できずに困っている」

「・・・ええ、そうよ」

悔しいが、全て薫の言う通りだった。まるで、私のことを見透かされているようだ。そう感じてしまう。

「何があつたのかは知らないが、随分と心に余裕が無いみたいだ。だとしたら、やっぱり方法は一つしか無いみたいだ」

「え？」

「心に余裕がある千聖を演じる。それしか方法は無い」

「はあ、あなたに期待した私が間違っていたわ」

結局は自分を演じるという謎の解決方法に行き着く。こんなことで、問題が解決するとは到底思えないのだが。

「だったら、お姫様は何か解決策があるのかい？」

「それは、無いけれども」

「だったら、騙されたと思ってやってみるといい。ほら、まずは練習をしてみよう。いつもの調子で、心に余裕がある自分をイメージして、私に話しかけてみてほしい」

「わかったわ。かおちゃん」

「ちよ、ちよつとちーちゃん！その呼び方はやめてよ！は、恥ずかしいから！」

「・・・ふふっ」

「ふっ、やっつと笑ってくれたね」

薫の言う通り、私は笑っていた。気づけば笑顔を浮かべていた。薫と話している内にいつの間にか、心に余裕が戻ってきたのかもしれない。気が抜かれたというのも理由の一つだろうが。

「うん。やっぱり私は、千聖の笑顔が好きだ。千聖には、ふくれっ面よりも笑顔の方が数

百倍似合っているよ」

「ふふっ、そうね。私もそう思うわ」

「さて、それじゃ機嫌を取り戻したところで、皆の所に戻ろうか。そろそろ時間になるころだろう」

「あら？本当ね。もうこんな時間だったのね」

確かに、時計を見てみるとまもなくイベントの終了時刻を迎える頃だった。いつの間にか、雅達の姿も見えなくなっている。

「それでは、行こうか」

「ええ、そうね。それと、一応お礼を言っておくわ。ありがとう」

「何がだい？私は礼を言われるようなことをした覚えはないのだが。まあ、一応受け取っておくよ。どういたしまして」

うん。実に私達らしいやりとりだったと思う。こんなやり取りが出来る辺り、心に余裕が出てきた証拠だろう。焦りが無いと言えば嘘になる。だけど、同時に焦っても仕方ないとも思えるようになってきた。確かに、高校生活で雅と想い出を作る時間は残り僅かかもしれない。かといって、想い出作りを優先するあまり他の人にまで迷惑をかけるのは、雅の迷惑にまで繋がる。それはいけない。雅の迷惑になることだけは絶対にしたくない。だったら、自分の感情を制御できるようにするしかない。最悪、薫の言う通

り演技で乗り切ればいい。私は演技には、絶対の自信がある。きつとなんとかなるだろう。そして私達は、二人で皆の場所へと向かうのだった。いつの間にか、私の心には晴れ間が指していた。

「はーい。それじゃー1位の発表をしますよー」

そんな美咲ちゃんの声が聞こえてくる。どうやら、ミッシェルの着ぐるみは脱いだらしい。あんな着ぐるみをいつも着て、大変そうだなと思う。私だったら、一時間も保たない自信がある。

「1位はこころと宇田川さんペアです」

「やったわね巴！」

「そ、そうだな．．．あはは．．．」

純真無垢に喜ぶこころちゃんと、震える膝に手を付く巴ちゃん。その顔色は悪いように見受けられる。大丈夫かしら？今にも倒れそうに見えるけれども。私はもしかしたら、薫とのペアで助かったのかもしれない。

「ふっ、どうやら負けてしまったようだね。さすがこころだよ」

「ううっ、負けた・・・」

「あこ、お姉ちゃんに勝ちたかったな・・・」

負けて悔しがる皆。正直、私は勝負には一切の興味が無かったから、そんな感情は全く湧いてこない。

「・・・違うわ」

と、皆が様々な反応を見せていると、こころちゃんのそんな声が聞こえてきた。違う？一体何が違うのだろうか？

「勝ったとか負けたとか、そういうものはいらないわ！あたしは楽しむためにこのイベントを開いたの。それなのに勝ち負けにこだわるのはやっぱり違うわ！」

そうこころちゃんは言う。実にこころちゃんらしい結論と言えるのではないだろうか？それなら、最初から競争なんて銘打たなければいい話だとは言ってはいけないのでしょうね。

「それじゃイベントの後には、皆でお菓子を食べましょう！」

そして私達は、思い思いのお菓子に齧り付く。今思えば、私個人としては、お菓子を一つも獲得していなかった。このお菓子も、薫が取ってきてくれたものだ。本当に、今日私はここに何をしにきたのだろうか？自分の醜い部分をさらけ出すために来ただけ

ではないだろうか？

そして、その後私達はお菓子が食べながら、各々談笑に耽つていった。雅は今、薫と何やら話し込んでゐる。何か真面目な話をしてゐるのだろうか？ 間に入れるような雰囲気では無い。さて、私はどうしようかしら？

「あの、千聖さん」

私が、これから何をしようか考えていると、不意に誰かに声をかけられた。声がした方向を向いてみると、そこにいたのは、ひまりちゃんとあこちゃんだった。あんなことをしてしまつたばかりに、少し気まずい。

「その、ちさと先輩、あの、ごめんなさい！」

「千聖さん、ごめんなさい！」

「え？」

私は思わず驚いてしまった。まさか、謝られるとは思つていなかったものだから。彼女達は、決して悪いことをしたわけではない。むしろ、悪いのは私だ。自身に余裕が無かつたとはいえ、あんなひどいことをしてしまつたのだ。何を言われても文句は言えないと言ふのに、まさか逆に謝られるなんて、思つてもいなかった。

「その、雅様とちさと先輩のお話を聞きました。それで、ちさと先輩は、凄い覚悟を持つて雅様と一緒にいるんだつて知つて、軽い気持ちであんなことを言つちやつて、それで

その、なんだか、ちさと先輩に直ぐに謝りたかつたんです。あこのせいで、雅様と別々のペアにまでしちやつて、本当にごめんなさい！」

「私も、あちやんと同じです。千聖さんと雅様の話を聞いて、そして考えたんです。もし、私が千聖さんの立場だったら、同じ事が出来るかな？つて。そこまで、雅様のことを考えて行動できるかな？つて。たぶん、できないと思いました。それで改めてわかつたんです。千聖さんの覚悟と、想いの凄さが。それなのに、何も知らずに、考えずにあんなこと言つちやつて、本当にごめんなさい！」

そう言う二人の目からは、涙がこぼれ落ちていた。そのことからわかる。一人が、心の底から自身の行いに後悔し、謝罪しているということが。おそらく、薫の根回しだろう。不安そうな顔で私を見つめる二人。おそらく、許してもらえるかどうか不安で仕方がないのだろう。そんな心配必要ないというのに。

「二人とも、何も悪くないわ。悪いのは私よ。ごめんなさい。今日の私は、ある事情があつて自分に余裕が無かつたの。だから、二人の発言に過剰に反応してしまつたの。今思うと、本当に馬鹿なことをしたと思つているわ。本当に、ごめんなさい」

「そんな、千聖さんが謝る必要なんて、何も無いです！」

「そうですよ！悪いのはあこ達ですから！」

「ええ、二人ならそう言うと思つたわ。だから、これでもう今日のことは終わりにしま

しよう?全員が一回ずつ謝った。それでいいでしょ?これ以上は不毛よ」

「千聖さん……わかりました」

「あこ、これからは雅様だけじゃなくて千聖さんのことも応援します!」

「あら?それは今まで応援してくれていなかったということかしら?」

「え!?えつと、それは、その……」

「ふふつ、冗談よ。二人とも、これからもよろしくね」

「ちさと先輩……はい!よろしくお願ひしますっ!」

「ううつ、千聖さんと仲直りできて良かったよ——!」

その後、私達は二人と軽く談笑してからその場を離れた。二人と仲直りできてよかったと思う。あのまま、仲が拗れたらどうしようかと考えていたため、早い内に仲を修復できてよかった。

「白鷺さん、妹がご迷惑をおかけしたみたいですいません」

そして、二人の場を離れた私に話しかけてくる人物がいた。巴ちゃんだ。そして、その隣にはこころちゃんもいる。

「いいえ、迷惑をかけたのは私も一緒よ。気にしないで。それと、ごめんなさい」

「アタシに謝る必要なんて何もありませんよ。あこと仲直りしてくださいね。さつたんですよね? 良かったら、それでいいですよ。実は、さつきまであこのやつが泣きついてきて大変だっ

たんですよ。白鷺さんにひどいことをしてしまっただけ」

「ふふっ、ひどいことをしてしまったのは私も一緒なのにね」

「あら？ちゃんと笑えるようになったのね？」

私が巴ちゃんと話していると、こころちゃんが話しかけてきた。そういえば、こころちゃんには笑顔になるように言われていたのだった。今の私は、ちゃんと笑えているのかしら？

「ええ、もう大丈夫よ」

「そうみたいね？やっぱり、千聖は笑顔の方がいいわ！笑顔が似合わない人なんて、この世界にはいないもの！」

「ふふっ、こころちゃんらしい考え方ね」

「白鷺さん、ちよつといいかしら？」

そして、こころちゃんと話していると、今度は友希那ちゃんが話しかけてきた。彼女が目線が語っていた。二人で話したいと。

「それじゃ、こころちゃん、巴ちゃん、私は友希那ちゃんのところに行くわね」

「はい。あこのこと、本当にありがとうございました」

「笑顔を忘れちゃダメよ？」

友希那ちゃんに着いていくと、皆から少し離れた場所に案内された。ここなら、私達

の声は、皆に聞こえないでしょう。こんな所で、どんな話をするのだろうか？

「友希那ちゃん。それで、私に何の用かしら？」

「ええ。これだけは言っておくわ。私は猫派よ。犬には興味が無いわ」

「え？」

突然、意味のわからないことを言い出す友希那ちゃん。どういう意味だろうかと考えて、一つの推測が思い浮かぶ。

「犬って、雅の事かしら？」

今日の雅は、犬耳を付けていた。正確には狼だけでも。おそらく、雅を表しているのだろう。そして、その推測が正しいのならば、その後の展開もある程度予測ができる。

「だから、あんなに不安そうな顔をしなくてもいいわ。誰も取ったりしないわよ」

やはりそうだ。あの時、歌唱中の友希那ちゃんと目が合った時だろう。あの時に、私の考えていることが、汲み取られてしまったのだ。

「・・・そんなに、わかりやすかったかしら？」

「ええ。あんなに泣きそうな顔で見つめられたら嫌でもわかるわ。最も、今のあなたを見る限り、心配無さそうだけれども」

「そうね。皆のお陰で、だいぶ落ち着いたわ。もう、大丈夫よ」

「言う必要はないかもしれないけれども、雅を信じてあげなさい。彼は、一途な人間よ。」

音楽にも、愛にも。その想いに、ちゃんと応えてあげなさい」
「ええ、ありがとう」

それで、言いたいことを全て言い終えたのか、友希那ちゃんとは私から離れていく。雅を信じろ。雅の想いに応えろ。もちろんわかっているし、言われなくてもそのつもりだ。私は、今日精神的に不安定だったとはいえ、一時的に雅を信じることすらできなくなっていた。それだけは、絶対にダメだ。今後あつてはならない最悪の事態だ。私自身が恥ずかしくて仕方が無い。今後は、どのような事態に陥つても、雅を信じ切ってみせる。想いに応えてみせる。そう私は固く決意し、皆のもとへと戻るのだった。

その後、私達はほどよい時間で解散し、各々が帰路についていた。私も今は、雅と二人で帰路に着いている。だけど、そこには会話があまり存在しなかった。というのも、雅が先ほどから何やら考え込んでいるのだ。何やら、難しい顔をして考え込んでいる。何かあつたのだろうか？

「雅、何かあつたの？」

「うーん、そうだね。やっぱり難しく考えず、シンプルに直接聞いてみようか」

「直接聞く?」

「千聖、何があつたの?」

「え?」

急な疑問の投げかけに驚いてしまった。まさか、そんな疑問が来るとは予想していなかった。思わず気の抜けた声が出てしまう。

「薫から聞いたよ。今日の千聖がどこかおかしかつたつて。一体何があつたの?」

「別にどうもしないわ。ただ、今日はちよつとイライラしちゃつて、ストレスでも堪つているのかしら?」

「今日だけじゃない。昨日もどこか様子がおかしかつたよ?ごまかそうとしてもダメだよ。絶対答えてもらうからね」

そう言う雅の目は本気だつた。答えるまで絶対に逃がさないとその目が語りかけてくる。こうなつた時の雅からは、逃れようとするだけ無駄だ。本当に、答えるまでずつとこの調子が続くのだから。本当は、雅に余計な気を使つて欲しくなかつたために、黙つておくつもりだつた。だけど、こうなつてしまつたからには仕方ない。

「雅、実は・・・」

その後私は、雅に全てを話した。昨日の花音との会話のこと。私の受験勉強のこと。

高校生活で想い出作りできる時間が残り僅かであること。全てを話した。雅は、そんな私の話を静かに聞いていた。そして、聞き終えてからも、しばらく眼を閉じて、何やら考え込んでいる。そして、数分間その状態を続け、徐に目を開く。

「千聖、確か明日もオフだったよね？」

「ええ、そうだけど？」

明日は土曜日。学校は休みだ。そして、明日私は仕事も入っていない。所謂、完全オフというものだ。だけど、だからどうしたというのだろうか？確か、明日雅はRose Liaの皆との合同レッスンの予定が入っていたはずだ。それと、何か関係があるのだろうか？すると、雅が急に携帯を取り出し、誰かに電話をかけた始めた。一体誰に？

「あ、もしもし友希那？急にごめん。明日の合同レッスンだけど、ちよつと急用ができてちやつて、キャンセルしたいんだ。ごめん。次は絶対参加するから。え？千聖のことをもっと大切にしろつて？あはは、そんな事言われなくても当然大切にするよ。急にごめんね。それと、ありがとう。うん、それじゃまた」

そして電話を切る雅。今の会話を聞く限り、どうやら相手は友希那ちゃんだったらしい。しかし、どうして友希那ちゃんに電話を？それに、聞き間違いで無ければ、合同レッスンをキャンセルすると聞こえた。急にどうして？

「雅、今のは？」

「うん、友希那の許可も得たから、明日は思いつきり遊んじゃおう！」

「え？」

私は、事態が飲み込めずに、思わずまた気の抜けた声を出してしまう。まさか、私と遊ぶためだけに、貴重な練習時間を削るなんて。

「そんな、雅、でも……」

「遠慮は無しだよ？僕が千聖と遊びたかったからわがママを友希那に言っただけ。だから、千聖は何も気にしなくていいんだよ？これは僕のわがママなんだから」

「雅……ふふつ、ありがとう」

「あ、やつと笑ったね。昨日から千聖、笑ってもなんだか表情が暗かったよ。でも、うん、今のは綺麗な笑顔だった。やつぱり僕は、千聖の笑顔が好きだな」

「ふふつ、ありがとう」

「さあ、それじゃ明日は今日の方も含めて飛びっ切りの想い出作りをしちやおう！一生記憶に残るような思いで作っちゃおうよ！」

その、雅の優しさが嬉しかった。私は最近、雅が自分の音楽に伸び悩んでいるのを知っている。それなのに、貴重な練習よりも私を優先してくれた。その事実が、嬉しかった。ああ、私のことをこんなにも想ってくれるんだと思うと、思わず泣いてしまいたいほど、嬉しかった。

私は、きつと幸せ者なのだろう。素敵な人と出会い、素敵な軌跡を描き、素敵な人生^{みち}を歩むことができる。なんて恵まれているのだろうか。こんな日々を、大切にしたい。一日一日を、堪能していききたい。素敵な想い出をこれからも作っていききたい。そう思える十月三十一日の夕暮れだった。

いつの間にか、私の心には太陽が顔を出していた。

第41演目 いけないボーダーライン

秋も末に差し掛かったとある昼下がりのことだった。

僕はその日の仕事を終え、家路に着いていた。本来なら、今日は丸一日仕事の予定だったのだけれど、午後から予定していた雑誌の取材を担当するはずだった記者さんが、急に体調を崩してしまったために、午前中だけで引き上げることになった。最近、冬が近づくにつれて気温も下がってきた。季節の変わり目、体調管理が難しい時期だ。僕も気をつけないといけない。

「あ！雅さんだ！」

そして、商店街を歩いているときだった。不意に前方から声をかけられた。そこには香澄ちゃんが立っていた。周りを見てみると、ポピパのメンバーが全員集まっている。

「やあ皆。なんだか久しぶりだね」

「ここで会ったが三年目」

「三年も経ってねーし物騒だろうが」

「あはは、お久しぶりです」

「み、雅さんこんにちは」

りみちゃんとはこの前のハロウィンで会ったけど、他の皆とは本当に久しぶりな気がする。あの初めて会った花火大会の日以来だろうか？あの時は彼女達に本当にお世話になった。良い情報を教えて貰った。来年、機会があればまた千聖とあの神社で花火を見よう。千聖の受験勉強次第だろうけど。

因みにだが、僕は大学に進むつもりは一切無い。高校を卒業すれば、音楽に全てを費やすつもりだ。音楽と千聖以外に使う時間は不要。勿論、勉強だって例外じゃ無い。全ての受験生を敵に回しかねないかもしれないけど、正直勉強なんてしても無駄だと僕は思っている。絶対に声に出しては言えないけれども。

「皆はこれからバンドの練習？」

「そうです！これから蔵に行くんです！」

「蔵？」

「実は、有咲の家に蔵がありました。私達、いつもそこで練習してるんです」

と、沙綾ちゃんが説明をしてくれる。蔵。そういえば、彼女達と初めて会った日も、蔵の話をしていた気がする。

「そうか。確か、有咲ちゃんは蔵みたいところが好きだって言ってたね」

「ちよま、誰だそんなこと教えたや・・・そ、そんな好きとかじゃないですよ。おほほほ」

「有咲、今更猫被つても無駄だと思うけど？」

「……うるせえ」

「あはは、まあ、有咲ちゃんの素はこの前の花火大会の時にも見せてもらったから、気にしないでいいよ」

「そういう問題じゃない……」

そう言つて、頭を抱えてふさぎ込む有咲ちゃん。まあ、誰にだつて見られたくないことの一つや二つあると思う。有咲ちゃんの場合、それがあの素の姿なんだろう。そんなに気にしなくてもいいと思うんだけどな。

「あ、そうだ！私、良いこと思いついた！」

そうやって、有咲ちゃんの様子を伺つていた時だった。急に香澄ちゃんが大きな声を出したのは。良いこと、一体なんだろう？そもそも、僕にも関係あることなのだろうか？

「香澄ちゃん。何を思いついたの？」

「どうせ碌な事じゃないだろ」

「雅さん、私達のこと鍛えて下さい！」

「鍛える？」

「ほら、碌でもないことだった」

鍛えて下さいか。といつても、僕も暇というわけではない。学校に、仕事に、自分の

練習もしないといけない。正直、彼女達の練習を見る時間を作れるかどうかがわからない。

「香澄、雅さんも忙しいと思うし、流石に無理だと思うよ」

「うーん、でも雅さんに鍛えてもらったら、今よりも皆でキラキラドキドキできると思う！だから、お願いします！」

「香澄ちゃん……」

「私も、お願いします」

「おたえ、お前まで」

「私、テレビで雅さんのギターをいつも見てきた。そして思った。どうしたら、こんなに心に響く音が出せるんだろうって。雅さんの音は、いつも私の心の深いところまで響いてくる。その理由は、音楽にかける想いとか情熱とか、そういったものも確かにあると思う。だけど何よりも、その演奏技術が音に何重もの圧を持たせていた」

そう語るたえちゃん。演奏技術。それは一朝一夕で身につくような代物では無い。毎日の積み重ね、弛まぬ努力が何よりも大事になる。僕は、小さい頃から一日たりとも欠かさずにギターを弾き続けてきた。その結果が、今の僕に表れている。

「その技術に少しでも近づきたかった。その為に、雅さんのライブにだって何度も足を運んだ。出演した番組の録画だって何度も見返した。だけど、全然届かない。いつまで

経つても届かない。もうこうなったら、直接お願いするしかないと思う。私は、もっとギターが上手になりたい。今よりもずっと、上手になりたい。だから、お願いします！」

そう言つて頭を下げるたえちゃん。正直、驚いた。普段は少し抜けた、天然さんな印象のあるたえちゃん。だけど、まさかギターに対してここまでの想いと情熱を持つていたなんて。もしかしたら、あの紗夜ちゃんにも引けを取らないかもしれない。周りにいるポピパのメンバーも少し驚いた後に、たえちゃんに続いて頭を下げてきた。たえちゃんの想いに感化されたのだろう。参つたな。ここまでされたら、断れるわけがないじゃないか。

「皆、頭を上げてよ。皆の思いはわかつたから。わかつた。皆のことをできる限り鍛えてあげるよ」

「本当ですか！ありがとうございます！やったねおたえ！」

「うん。本当に、よかつた」

「きつと、おたえちゃんの想いが雅さんに伝わつたんだね」

「ま、プロの人に練習を見てもらえるなんて、そうそうできる経験じゃないからな。悪くないんじゃないか」

「そうだね。こんな機会滅多にないだろうし、張り切っちゃおうかな」

「それじゃ、今から早速見てもらおう！」

「あ、ごめん今からは無理かな？今手がけてる新曲があつて、それを今日中に仕上げたいんだ」

僕は現在、新曲を数曲作成している。今回は自分用の曲だ。その新曲が、もう少しで完成するのだ。順調にいけば、今日中にできあがるはずだ。今日はこの後、その新曲作りに取り組むつもりだ。折角午後からの予定が無くなったのだ。こういう時ぐらいは自分の時間に使いたい。

「そうですか・・・」

「あ、でも明日なら午後から空いてるよ。皆さえよければ、どうかな？」

「本当ですか！お願いします！皆も大丈夫だよね？」

「うん。バイト入ってるけど、休みにしてもらおう」

「そこはバイトに行けよ。あ、私は大丈夫です」

「私も、午後からなら大丈夫です」

「私も、大丈夫です」

どうやら、みんな大丈夫らしい。なら明日は、ポピパの皆を思いつきり鍛えてあげよう。僕にできる限りのことはしてみせる。皆の期待に応えてみせよう。と、そんなことを考えていた時だった。

「あれ？雨？」

突然の雨だった。前触れも無く、雨が降り出す。天気予報でも確か、今日は一日晴れだと言っていた。なので、傘を持って歩いている人も少ない。当然、僕も持ち合わせていない。そして雨脚は、みるみるうちに強くなってくる。

「これはマズいね。早く帰らないとビショビショになっちゃうよ。それじゃ皆、また明日ね！」

「雅さん明日はよろしくお願いします！」

皆の別れの言葉を背に受け、僕は雨の商店街を駆け抜けた。その間も、雨脚は強まる一方だった。

ポピパの皆と別れて約一時間。僕は家に辿り着くことが出来た。本来なら、十分程で着く距離。だけど、途中で雨宿りをしていたため、こんなに時間がかかってしまった。雨宿りしたはいいけど、雨は一向に止む気配がなかった。このままではいつ帰れるのかもわからない。なので、意を決して雨の中を駆け抜けてきたというわけだ。

逃げるかのように、ドアを開けて家に転がり込む。そのまま直ぐさま自室に駆け込

み、着替えを用意し浴室に向かう。早くシャワーを浴びないと風邪を引いてしまうかもしれない。只でさえ体調管理が難しい季節なのだ。少しでも早く暖まりたい。

そして浴室の扉に手をかける。この時僕は、帰って来れた安心感と、早くシャワーを浴びなければいけないという焦燥感で失念していたことがいくつもある。一つは、朝鍵を閉めて出たはずの家の鍵が開いていたこと。二つ目は、開いていたのに、誰も家の中にいないということ。

冷静になれば気づくはずだった。いるべき人物がいないということに。では、一体僕より先に鍵を開けて家に侵入した人物はどこにいったのか？おそらく、答えは一つしか無いだろう。

「・・・え？」

浴室のドアを開けると、思わずといった感じで声が出た。だが、決してこれは僕の声ではない。何故なら、僕は衝撃のあまり声すら出すことができなかつたのだから。それは、先客の声だった。

風呂上がり故に、隅々まで紅潮した白い肌。濡れそぼって、強烈な色気を放つ美しい薄黄色の髪。思わず目を奪われてしまう、女性を象徴する妖艶な二つの双丘。一糸まとわぬ僕の恋人がそこにいた。

「あの、み、雅・・・？」

「……あ、い、いめん！」

千聖の声で、正気に戻った僕は急いでドアを閉めてその場を後にする。リビングに入り、頭を落ち着けようとコップに水を注ぐ。脳裏には、ずっと先ほどの千聖の姿が浮かんでいる。思春期真っ盛りな僕にとっては、あまりにも刺激的な光景だった。

コップ一杯の水を飲み干し、心の鎮静化を図る。しかし、早まった鼓動は一向に落ちてく配を見せない。それどころか、益々気持ちが高ぶっているようにすら感じる。先ほどの光景が頭から離れない。目に焼き付いて離れない。

飲み干したばかりのコップに、直ぐさま次の一杯を注ぐ。それをまた一気に飲み干す。わかつてはいた。こんなことをしても、無駄だろうということは。案の定、高まつた気持ちは治まる気配すら見せない。

「雅」

「ひゃっ!? な、何……?」

そんな、気持ちを落ち着けようと無駄な努力を行っていたときだった。急に千聖に話しかけられた。髪もまだ緑に乾かしていかないのだろう。その髪はまだ濡れたままだった。

「何って、雅もシャワー浴びるでしょ? 私はもう出たから、入っていいわよ?」

「でも、千聖まだ髪も」

「これぐらい大丈夫よ。それより、雨でビショビショでしょ？早く暖まらないと風邪引いちやうわ。私のことは気にしなくていいから、早く暖まってきて」

「う、うん。ごめん」

その千聖の優しさに感謝し、僕は浴室に向かう。先ほどまでは動揺していてすっかり忘れていたが、千聖の言う通り僕は今びしょ濡れの状態だ。早く暖まって着替えないと本当に風邪を引いてしまう。僕は浴室に入るなり、直ぐさま服を脱ぎ捨て、かけ湯もそこそこに湯船に体を沈めた。

暖かい。先ほどまで冷え切っていた体に熱が戻ってくる。心地よい暖かさだった。けど今は、邪心とでも言うべき感情が、心地よさと共に浮かんでくる。先ほどまで、この湯船を千聖が利用していた。そう考えただけで、よからぬ妄想が浮かんでくる。

今までも、千聖の入った後の浴槽に入ることなんて数え切れないほどにあった。その際は、はつきり言って何も感じなかったのだけれど、今は違う。あのような光景を見てしまった直後なのだ。自分の意思とは無関係に、嫌でも様々な思考が浮かんでは消えてまた浮かぶ。頭から一時たりとも消えてくれない。

「雅」

「ひゃ、ひゃい!?ど、どうしたの・・・?」

浴室に千聖が入ってくる。よからぬ事を考えていただけに、思わずまた変な声で返答

してしまおう。

「どうしたのって、リビングに着替え置き忘れてたから持つてきたわよ。置いておくわね」

「あ、そっか。ありがとう」

そういえば、着替えの存在をすっかり忘れていた気がする。確か、リビングに逃げ込むなり机の上に置いたはずだ。そのまま慌ててコップを用意して、そしてまた慌ててこの浴室に逃げ込むように入っただった。着替えの存在をすっかり忘れていた。

「雅。さっきのことなら、あまり気にしないでいいわよ？ 私は全然気にしてないから、大丈夫よ？」

「あ……うん、ごめんね」

どうやら、千聖は僕の態度から先ほどのことを気にしていると思ったようだ。勿論、それもある。それも大いにあるのだけれども、気にしている方向性が違ってくる。千聖が考えているのは、おそらく罪悪感だろう。勿論それもあるのだ。だけど、今僕の心を占めているのは、感情とも呼べる代物じゃ無い。人間が持つ三大欲求の一つ、性欲、つまりただの欲望だ。

僕だって、思春期真っ盛りの清純な男子高校生だ。勿論、千聖とそういったことがしたいと考えたのは一度や二度では無い。だけど、今まではグツと堪えてくることが出来

た。僕達の間には、暗黙のルールとして、そういった行為は高校を卒業するまではしないでおうとうというものがある。

これは、もしもの間違いが起きないようにするためだ。もしもの間違いが起きてしまった場合、僕も千聖も間違いなく高校にいられなくなる。そうなってしまうと、お互いの芸能界での将来にまで悪影響を及ぼしてしまうだろう。それは、お互い本意では無い。なので、せめて最低でも高校卒業まではしないでおうとうと決めている。

今までは、そのルールを遵守したい一心でグツと堪えてくることができた。だけど、今回ばかりはマズいかもしれない。一向に欲が治まる心配が見えない。不意の事故とはいえ、あんな刺激的光景を目にしてしまったのだ。それも仕方ないことかもしれない。

湯船から上がり、頭からシャワーを浴びる。心の中では煩惱退散と念じ続けている。だけど、消えない。消えてくれない。いくら努力しても、微塵も消えてくれない。むしろ、益々強くなっているようにすら感じる。これは本気で危ないかもしれない。シャワーを止め、直ぐさま着替え、リビングに戻る。ここでは、千聖がテーブルに向かつて座り、何やら本を読んでいた。どうやら台本のような。新しいドラマのだろうか？かなり真剣に読んでいる。

僕は近くに置いてあったギターを手に取り、千聖の向かいに座る。新曲作りのため

だ。もう少しでこの曲も完成する。絶対に今日中に完成させてみせる。そのためにはこんな状態だろうが、休んでいる場合ではない。

「ご、ごめん。ギター弾いてもいいかな?」

「ええ、いいわよ」

千聖の許可も取り、ギターを弾く。ギターを弾いている間は、余計な事を考えずにいられた。ただ、音楽のことだけを考えていられた。音楽に没頭できた。それでいて、なんだかいつも以上に感性が研ぎ澄まされている気さえしてくる。おそらく、最悪な心理状態から急にいつも通りの状態に持ってこれた影響だろう。上がり幅の違い。ゼロの状態から始めたのでは無く、マイナスの状態からギターを始めたため、いつも以上に良い状態で弾けていると勘違いしてしまっているだけだろう。別段いつもとんなら変わりはしないのだ。と、そんなどうでもいいようなことを考えていると、急に頭に軽い衝撃がきた。千聖だ。千聖が僕の頭にバスタオルを被せてきたのだ。

「ち、千聖?」

「ほら、まだ髪が濡れてるじゃない。いいから、じつとしてて」

「あ、うん。ありがとう」

そう言つて、僕の髪をバスタオルで拭いてくれる千聖。その手つきは、とても優しくかった。そして、千聖が至近距離までやってきたから感じるのだろう。千聖から、非常

に良い香りが漂ってくる。おそらく、シャンプーの香りだろう。僕と同じ物を使っているはずなのに、とてもとても同じ香りだとは思えない。バニラのような、スツキリとした甘い香りが僕を刺激する。

その影響で、忘れかけていた欲がまた浮かび上がってくる。先ほどの光景がまた脳裏に蘇ってくる。到底ギターに集中なんてできる精神状態では無くなってしまった。千聖のことばかりが頭を占めている。以前友希那と初めて会った日、僕は一日のほぼ全ての時間、音楽のことを考えているという話をした。日に数度だけ、それを忘れてしまう瞬間があると。その理由が千聖であるということは、その際に語ったと思う。

いつもなら、本当にほんの数秒のことなのだ。千聖のことしか考えていない瞬間というの。大抵の場合、千聖のことを考えつつも平行して音楽のことも考えている。けど今日は違う。あの時を境に、千聖のことしか考えられなくなっている。先ほどギターに触れた時は、確かに音楽のことが頭に戻ってきていた。だけど今は違う。もう、今日は音楽に思考が戻れないかもしれない。

「はい。これでもう大丈夫よ。ギターの邪魔をしてごめんなさい」

「う、ううん。謝るなら僕の方だよ。台本覚えてたんでしょ？邪魔してごめんね」

「私なら大丈夫よ。もう台本自体は覚えてあるの。今はただ復習をしてただけ。だから気にせずギターを続けてくれていいわよ」

「う、うん。ありがとう」

千聖はそう言う。だけど、到底弾く気にはなれなかった。こんな状態で、まともに弾ける訳が無い。僕はギターをケースに直した。

「あら？ギターを弾かないの？」

「う、うん。なんだか集中できなくて」

「集中できない？珍しいわね。大丈夫？体調が悪いの？」

「な、なんでもないよ。大したことじゃないさ。そ、そうだ。テレビでも見ようか。何か面白い番組やってないかな」

僕は、気を紛らわせるためにテレビをつけることにした。千聖の気を逸らす目的もある。というよりも、そちらの目的の方が比重は大きかった。チャンネルを手に取り、電源をつける。

「あーん。いいわ。もっと私をめちゃくちゃにして！」

そして、電源をつけた瞬間に流れてきたのはまさかのドラマの濡れ場シーンだった。思わず直ぐさま電源を切ってしまう。ダメだ。気を紛らわせるところか、余計に助長してしまった。そしておそらくだが、今の僕の反応で千聖に完全に気づかれた。

千聖は、僕の様子がおかしいことにはとづくに気がついてるだろう。だけど、おそらくそれは僕の罪悪感からきてるものだと思っただけだ。だけど、今ので完全に、

僕の今の状態が見抜かれたはずだ。性欲に取り憑かれた僕の状態が。

俯いて目を瞑っている僕。千聖の方を見るのが怖い。千聖は、こんな僕を見てどう思うだろうか？見損なつただろうか？軽蔑しただろうか？千聖を見るのが怖い。その目を見るのが怖い。果たして、その目にはどんな色が映っているのだろうか？見るのが怖い。と、そんなことを考えていると僕の足に何か触れた。

恐る恐る僕は目を開ける。足に目を向けると、そこには誰かの左手が置かれていた。誰かと言つても、今この場でそんな行動をする人物は一人しかあり得ない。その手の先に目を向けると、案の定千聖がそこにいた。しかし、想定していたよりも距離が近い。

椅子に座る僕よりも、さらに下に顔がある。つまり、千聖は僕の直ぐ傍にしゃがみ込んでいた。その右手は、軽く口元に添えられ、僕が見るのを恐れていたその目は、羞恥と不安の色を在り在りと映している。さらには、その顔はまるで絵の具でも塗つたかのように真っ赤に染まっていた。そんな千聖が、上目遣いで言ってくる。

「み、雅。その、み、雅がしたいなら……私は、その、いいわよ……?」

そんなことを千聖に言われて、今の僕が耐えられる訳が無かつた。昔テレビで、男は皆けだもの獣だと言つていたのを思い出す。その時の僕は、そんなわけが無いだろうと考えていたが、今は違う。僕は今、まさに獣だけだものつた。千聖を喰らうことしか考えていない、身の毛がよだつおぞましい獣だけだものつた。

「ち、千聖。僕は……ぼ、僕は……」

「いいのよ。遠慮なんてしないで。雅……来て……」

今、僕の中の野生が解き放たれる。もう、制御できない。僕は、自身の欲望に従い、千聖へとその手を伸ばした。

ピンポーン

伸ばした手が止まる。チャイムだった。聞き間違いではないだろう。それは、チャイムだった。我が家のチャイムの音だった。

「もう。こんな時に誰よ」

「はあ。仕方ないか。ちよつと出てくるよ」

僕は、渋々ながら立ち上がり、玄関へと向かった。外はまだ雨が降っている。いつまでも、そんな中で待たせるわけにもいかないだろう。僕は、静かにその扉を開ける。

「あ、雅君！良かったー。中々出てきてくれないのかと思つたよ」

彩ちゃんだった。雨の中走ってきたのだろう。その体は雨に晒され濡れていた。

「彩ちゃん？雨の中いらつしやい。こんなところで立ち話もあれだし、まあ上がっていつてよ」

「うん！お邪魔しまーす」

本当に邪魔だよ。と、内心で毒づいてしまつたが外面に出さないように気をつけてリビングまで案内する。そこでは、千聖が既に椅子に座り直し、台本を読んでいた。おそらく、玄関での僕達の声が聞こえていたのだろう。そこには、先ほどまでの羞恥に染まつた顔は欠片も存在しなかつた。

「あら？彩ちゃんじゃない。どうしたの？」

「あ、やつぱり千聖ちゃんもいたんだ。実はさっきまで私バイトしてただけど、終わって帰ろうと思つたらこの雨でしょ？今日雨降るなんて予報で言つてなかつたから傘持つてきてなくて。それで、バイト先から家まで傘を差さず帰るのも遠いし、だったら雅君の家で雨宿りさせてもらえないかなーなんて思つただけど、ダメかな？」

なるほど。事情はわかつた。彩ちゃんは、とあるファーストフード店でアルバイトをしている。なんでも、花音ちゃんと同じバイト先らしい。そしてそのお店は、僕の家のご近所さんだったりする。歩いて三分ほどだろう。まあ、僕の家から近いということ

は、千聖の家からも近いということなのだが。おそらく、千聖も僕の家にいるだろうと
考えて、ここに真つ先に来たのだろう。その考えは大正解だ。

「うん。事情はわかったよ。そういうことなら、ゆっくりしていいよ」

「本当？ありがとー！」

「だったら彩ちゃん。お風呂に入ってくるといいわ。そんな濡れた服でいつまでもいる
と風邪引くわよ？着替えは私のを貸してあげるから。浴室に案内するわ」

「え？いいの？本当に助かるよー！ありがとー！」

そして、二人が部屋から出て行く。その場には僕だけが取り残された。ドンヨリとし
た空気が僕を包む。もう少しだったのに。もう少しで、手が届くところだったのに。結
局その手は届かなかった。

「雅……」

千聖が戻ってきて、椅子にまた座る。千聖の空気も今は重い。きつと、僕と同じ事を
考えているのだろう。来客がなければ、間違いなく僕達は……

決して、彩ちゃんが悪いわけではない。彼女も、雨の中大変だったのだ。仕方の無い
ことだろう。きつとこれは、神様が僕達の行為を止めたのだ。一度決めたルールを破る
など。高校を卒業するまではやめておけど。そう思っておかないと、やってられない。
本当に悲しい。

「え？何？この空気？」

そして、そんな僕達の状態は彩ちゃんがお風呂から出てくるまで続いていた。ああ、彩ちゃんの前でまでこんな状態でいるわけにはいかない。なんとか持ち直さないと。

「ふふつ、大したことじゃないのよ。さて、そろそろ晩ご飯の準備をするわね。彩ちゃんも食べていく？腕によりをかけて振る舞うわよ」

「え？いいの？じゃあお言葉に甘えて！何か手伝うことある？」

「気にしなくていいわよ。適当に雅と時間をつぶしてて」

そう言つて、立ち上がりエプロンをする千聖。彩ちゃんは僕の横で機嫌良さそうに鼻歌を歌っている。そうだね。僕もいつまでもこのままでいるわけにはいかない。気持ち切り替えギターを手に取る。その後は、先ほどの集中力の欠如が嘘かのように、音楽に没頭することができた。そのお陰で、なんとかその日中に新曲も完成させることができた。

その後、彩ちゃんは結局千聖が帰る時間まで我が家で過ごしていった。帰りは、千聖と一緒に彼女を家まで送っていった。その頃には、もう雨もすっかり止み、綺麗な満月が顔を出していた。

今日のことは、もう忘れようと思う。まあ、そう簡単に忘れられるわけではないのだけど、忘れるように努めようと思う。やっぱり、そういうことは、学生の間はあまりよく

ない。万が一の事態に陥ったら、お互いの将来までをも壊してしまいかねないのだから。

だから、今日のことはなかったことにして、明日からはまたいつも通りの僕達に戻ろう。いつもの、僕達らしい日常に。きつと、それが、きつと僕達にとってベストな形だと思っから。

そんな、子供と大人の境界線で彷徨う、思春期のとある一日の出来事だった。

第42演目 DEDICATE

「ああ、なんて儂い……」

それは、とある秋色も褪せてきた日のことだった。

私は、駅前にて最も関わり合いたくない人物と遭遇していた。意味もなく儂いと連呼する後ろ姿。瀬田薫がそこに立っていた。幸いにも、薫はこちらに気づいていない。今ならまだ、気づかれずに横を通り抜けられるかもしれない。

「おや？千聖じゃないか。こんなところで出会うなんて、やっぱり私達は運命に導かれていたようだね。ああ、儂い……」

「失礼していいかしら？」

通り抜けようとした際に、薫に気づかれてしまった。やはり、そう上手くはいかない。薫と出会うのは、それほど久しぶりという訳でも無い。ついこの間の、ハロウインの一件で会っている。あの時は皆に恥ずかしいところを見せた。

「ふっ、相変わらずつれないお姫様だ」

「はあ、まあ、この間はあなたにお世話になったみたいだから、一応お礼を言っておくわ。ありがとう」

「この間？なんのことだい？」

「ハロウインの件よ」

「ああ、あのことかい。だつたら尚のことわからないな。私はお礼を言われるようなことを何もしていない。ただ、ハロウインという素敵な一日を満喫していただけなのだからね。それに、お礼ならあの日にも受け取ったじゃないか」

「そうね。ただ、私が思っていた以上にお世話になつていたようだから、改めてお礼を言つておくわ。ありがとう」

あの時は、実際に薫にお世話になつた。私があちやんとひまりちゃんにしてしまつたことの火消し、精神状態が不安定だつた私の相手、雅に対する根回し。私は、確かに当日、一度薫に礼を言つていた。しかし、その時の私はこれらの内の一つ、私の相手をしてくれたことしか知らなかつた。残りの二つは、後から知つたものだ。だから、改めて礼を言う。

「まあ、お姫様がそう言うのならまた受け取つておくよ。それから、かのシエイクスピアはこう言つている。いかに美しいものでも行為によつては醜怪になる。腐つた百合は雑草よりひどい臭いを天地に放つ。つまり、そういうことさ」

「誰が腐つた百合よ」

おそらく、言葉の意味はわかつていないのでしよう。だけど、あながち間違ひという

わけでもない。先日の私が醜怪だったのは事実。我ながら、ひどいことをしてしまったと思う。あの後日、約束通り雅とはデートに行った。その後も、私達の予定が合った日は積極的に出かけたり、二人で過ごす時間を増やしている。その甲斐もあつてか、あの時に比べれば心にゆとりが出来ていると感じる。

「その様子を見る限り、もう心配はないようだね」

「あら？ 態々心配してくれていたのかしら？」

「あたりまえじゃないか。前にも言っただろう？ 私にとっては、君たちの愛こそが全て。君たちに何かあれば、当然心配する。当然悲しむ。私は、もうあの時のような二人は見たくないんだ」

「薫……」

少しからかうつもりが、私の予想に反して真面目な回答が返ってくる。薫が言うあの時とは、中学一年生時代の雅が倒れた一連の事件のことだ。あの頃は、薫が変わり始めていた頃だった。かおちゃんから、薫に。

あの頃は、薫に対して少し不信任を抱いていたが、それでもまだ毎日のように顔を合せていた。雅共々。あの頃の私達は、薫曰く相当にひどい有様だったらしい。雅についてのはわかる。あの頃の雅は、日を追うごとに、目に見えて顔色が変わっていった。ただ、薫が言うにはそれに比例するかのようにな私の顔色も変化していったらしい。自

分では全く気づいていなかった。だけど、言われてみればあの頃の私は、雅の事が心配で緑に眠れない日々が続いていた気がする。自分では普段と変わらない状態を保っていたつもりだったけど、そう思っていたのはどうやら自分だけだったらしい。

あの頃の私達が、薫にとつてはトラウマのようになっていてと以前教えてくれた。私達が、どこか手の届かない遠い地へ行つてしまふような気になつたと。それを知りつても何もすることが出来ない己の無力さに嫌気が指したと。そんなことがあつたからだろう。薫が私達の仲に敏感になつたのは。お節介とも言えるほどに気を使つてくるようになったのは。

あの事件は、多くの悲しみに包まれていた。悲劇と言つても過言ではない。だけど、私達三人の絆は間違いなくあの事件によつて深まつた。決して悪いことばかりというわけでもない。あんなものでも、私達にとつては忘れられない思い出の一つだ。

「そうね。私が間違つていたわ。ごめんさい」

「何も謝ることはないさ。君たちが幸せなら私はそれでいい。君たちには笑顔が似合う。喜劇が似合う。これからでも思うがままに、幸福に満ちた日常を満喫するがいいさ」

「ふふっ、そうね。ありがとう」

「おや？もうこんな時間か。では、私はこれからバンドの練習が待っているので失礼するよ」

「ええ、本当に、ありがとう」

薫は、そのまま颯爽と街の中へと消えていった。時に、呆れるほどの馬鹿をしでかす薫。だけど、根はあの頃のかおちゃんから何も変わっていない。本当に、私は恵まれている。雅に、薫に、パスパレの皆や千景。本当に多くの、素晴らしい人々に囲まれている。本当に、恵まれすぎていて恐怖すら覚える。

「こんなに幸せで、いいのかしら？」

その眩きに答えてくれる人はいない。だけど、きつといいのだろう。きつといいからこそ、幸せに変化が訪れないのだろう。そもそも、ダメだと言われたところで手放す物か。この幸せに、これからも存分に溺れて生きよう。私は、溢れんばかりの幸せを噛みしめ、歩を進めるのだった。

それは、雅の家まで約二百メートルという距離でのことだった。

「あーっ」

鼻先に何か冷たい物が当たったような感覚を覚えた。程なくして、その冷たい物の正

体が判明する。秋時雨、要するに雨だ。

「はあ、もう少しで着くのに」

本当にもう少しの距離。しかし、雨は決して待つてはくれない。次第に雨脚が強くなつていく。私は、いても立つてもいられず走り出した。私は運動が得意ではない。むしろ、苦手と言つて差し支えない。雅の家までは二百メートルほど。たかが二百メートルと思う人もいるだろう。だけど、私にとっては数キロにも感じられるほどの長い距離だった。

五十メートルも走れば、息が上がる。百メートルも走れば、足が言うことを聞かなくなつてくる。重い。足が重い。だけど、止まるわけにも行かない。私は、たつぷり五分ほどの時間をかけて、二百メートルもの距離を走破してみせた。鍵を開けて、玄関に倒れ込む。

「はあ、はあ、もう動けない・・・」

といつても、そのままではいられるわけがない。私は、悲鳴を上げる足に鞭を打つて、浴室へと向かった。そしてすかさず浴槽に湯を張り、湯船の準備が出来るまでの間にタオルで体を拭いていく。冬も近づき、今日は非常に冷え込んでいる。そんな気温の中、いつまでも濡れたままでいるなんて自殺行為にも等しい。丁寧に体の隅々まで拭いていく。そして程なくして、お風呂の準備が整った。私は、濡れた服を脱ぎ、直ぐさま湯船

に体を沈める。

「ふう……」

温かい。体の芯まで温まる。さつきまで冷え切っていた体に、熱が戻ってくる。お風呂に入ることを、命の洗濯だという人がいる。実はこの言葉、お風呂に入ること自体を指す訳ではない。もっと広い意味で、常日頃の苦勞から解放されて、寿命が延びるほどに何かを楽しむことを意味する。お風呂は、その内の一種というだけだ。まあ、そんなことはともかくとして、お風呂は本当に安らぎを、癒やしを与えてくれる。それこそ、本当に命が洗われているかのように。

私は、そんな洗濯をたつぶり三十分ほど満喫し、体の隅々まで丁寧に洗い、脱衣所へと出た。本当に気持ちよかった。あれほど冷え切っていたのが嘘かのように、体は熱で赤みを帯びている。さて、体をしっかりと拭いて、服を着ようかと思っていた時だった。急に浴室の扉が開いたのは。

「……え？」

思わず、素つ頓狂な声が出てしまう。扉を開けた犯人は雅だった。事態を飲み込めないのか、扉を開けた状態で、硬直している。完全に油断していた。雅はまだまだ帰ってこないものだ。今朝の段階では、帰ってくるのは夜になってからだと言っていた。しかし、今はまだ夕方になる手前といった時間。だからこそ、油断していた。しば

らくは私一人しかいないと。雅は未だに硬直している。その体はびしょ濡れだ。おそらく、雨の中走って帰ってきたのだろう。雅は未だに動かない。

「あの、み、雅……?」

「……あ、う、うめん!」

私が話しかけると、漸く動き出した。そして、扉を慌てて閉める。脱衣所の外からは、慌てて駆けていく足音が聞こえてくる。雅に裸を見られた。だからといって、私は特に気にはしない。雅と私は付き合っている。いずれは結婚もすると思う。そうなる、遅かれ早かれ、いつかは裸を見られる日が、いや見せる日がやってくるのだ。その覚悟はとつきの昔に決めている。勿論、恥ずかしいに決まっている。だけど、特段気にするほどではない。

と、そんなことを思考しながらも、私は大急ぎで服を着ていく。雅は、びしょ濡れの状態だった。いつまでもあの状態でいると風邪を引いてしまう。そうなる前に早くお風呂に入って貰わないと。髪を乾かす時間も惜しい。私は、服を着ると急ぎ脱衣所を後にした。

雅はリビングで水を飲んでいた。こちらには背中を見せている。その背中も、震えているように見える。寒いのだろうか。それも当然だろう。こんな寒い中、びしょ濡れの状態ですつといたのだ。体だつて震えるだろう。

「雅」

「ひやつ!? な、何・・・?」

雅に背後から話しかけると、何かに怯えたかのように飛び退いた。よつぼど、さつきのことを気にしているのだろうか? 私は全然気にしていないのに。まあ、事故とはいえ異性の裸を見てしまったのだから、罪悪感を覚えるのも仕方ないことかもしれない。

「何って、雅もシャワー浴びるでしょ? 私はもう出たから、入っていいわよ?」
「でも、千聖まだ髪も」

「これぐらい大丈夫よ。それより、雨でビショビショでしょ? 早く暖まらないと風邪引いちやうわ。私のことは気にしなくていいから、早く暖まってきて」

「う、うん。ごめん」

そう言うと、雅はそそくさと脱衣所へと消えていった。まるで逃げるかのように。明らかに様子がおかしい。といっても、罪悪感から来る気まずさによるものだと思うが。私はそこで、視線をテーブルに向ける。そこには、飲み干されたコップとともに雅の着替え一式が置かれていた。どうやら、慌てるあまり置き忘れていったらしい。私は、その着替えを抱えて浴室を目指す。

脱衣所の扉をノックする。が、返事は返ってこない。どうやら、既に浴室に入ったらしい。先ほどのような事故が起きないように、念には念を入れてゆっくり扉を開いてい

く。思った通り、脱衣所内に雅の姿はなかった。私は、着替えを持ってきた旨を説明するために雅に声をかける。

「雅」

「ひゃ、ひゃい!?!ど、どうしたの・・・?」

「またも、素つ頓狂な声を上げる雅。罪悪感を抱えている彼に思うのは不謹慎かもしれないが、今の声は少し面白かった。」

「どうしたのって、リビングに着替え置き忘れてたから持ってきたわよ。置いておくわね」

「あ、そっか。ありがとう」

私は、雅に説明をし、着替えを置く。そして目に入るのは、床に脱ぎ捨てられた雅の服。よっぽど早くお風呂に入りたかったのだろうか。いつもなら丁寧にたたんでくれているはずなのに、今日は床に散乱していた。私は、その衣服を片付けつつ、雅に声をかける。

「雅。さっきのことなら、あまり気にしなくていいわよ? 私は全然気にしてないから、大丈夫よ?」

「あ・・・うん、ごめんね」

その声には、やはり元気がなかった。まあ、直ぐに元に戻れというのは無理な話かも

しれない。いくら私が気にしないといっても、雅はそれを受け入れないだろう。雅は人一倍優しい。だからこそ、いざという時の罪の意識も人一倍強い。ほとぼりが冷めるまでは、まだまだ時間がかかりそうだ。

私は脱衣所を後にし、リビングに入る。夕食の準備をするには時間が少し早い。何をして時間をつぶそうかと考え、そういえば今度撮影するドラマの台本があつたと思ひ出す。内容自体はすでに完璧に覚えているため、読む必要はあまりないのだが、こういうものは何度も目を通すことによつて演技に対する新たなアイデアが生まれたりするものだ。そう思い至り、台本を静かに開く。

台本には、事細かに注釈が記されていた。もちろん記入したのは私だ。ここはこのように演じる。ここのセリフはこの部分で何秒の溜ためを作る等といった注釈が余すことなく記してある。

今度のドラマで私が演じるのはロシアからの帰国子女の役だ。その設定を活かすため、セリフにもロシア語のものが多し。最初は発音に苦労するかもしれないと思ひつていたけれども、予想以上に上手く話せたために自分でもビックリした。もしかしたら、私はロシアでも生きていけるかもしれない。なんだか、ロシアに親近感が湧いてきた気さえしてくる。いつか、実際に行つてみたいものだ。

そして、そのまましばらく台本と向かい合っていると、雅がリビングに入つてきた。

そして、近くに置いてあったギターを手に取る。雅は今、今度リリースする予定の自身の新曲を作っていた。おそらく、その続きを今からするのだろう。

「ご、ごめん。ギター弾いてもいいかな？」

「ええ、いいわよ」

ギターを弾く許可を取ってくる雅。いつもならそんな確認をせずに弾き始めている。やはり、まだ罪悪感は消えていないらしい。まあ、時間が経てば消えるでしょう。私が気にしたところでどうすることもできない。こればかりは、雅自身の問題なのだから。そこでふと、私は雅に視線を向ける。ギターを弾くのに集中している雅。私が注目したのはその髪だ。濡れている。おそらく、祿に乾かしもせずに出てきたのだろう。このまま放置しておく、風邪を引く可能性もある。そう考えて、私はタオルを手に取り立ち上がり、雅に近づく。そして、背後からタオルを雅の頭に被せた。

「ち、千聖？」

「ほら、まだ髪が濡れてるじゃない。いいから、じつとしてて」

「あ、うん。ありがとう」

そして、ゆっくりと丁寧にその髪を拭いていく。拭いていると、シャンプーの良い香りが漂ってくる。このシャンプーは、私のお気に入りなのだ。昔から愛用しており、雅にも同じ物を勧めている。このシャンプーは、なんととっても香りが良い。バニラの

ような後引く甘い香りが大好きだ。

雅は、私が髪を拭いている間ギターを中断している。邪魔しないように気を使っていたつもりだったが、この行為自体が既に邪魔になっていただろうか？だとしたら、早く終わらせないといけない。あまり、雅の邪魔はしたくない。かといって、雅の髪をこのまま濡れた状態にしておくわけにもいかない。雅には申し訳ないけれど、もう少しだけ我慢してもらおう。そして数分雅の髪を拭き続け、完璧に乾かすことができた。

「はい。これでもう大丈夫よ。ギターの邪魔をしてごめんなさい」

「う、ううん。謝るなら僕の方だよ。台本覚えてたんでしょ？邪魔してごめんね」

「私なら大丈夫よ。もう台本自体は覚えてあるの。今はただ復習をしてただけ。だから気にせずギターを続けてくれていいわよ」

「う、うん。ありがとう」

そして、雅から離れてまた元の位置に座る。雅のギターをBGMにまた台本を読もうかと思っていたのだけれども、その雅がギターを弾かずに、そのままケースに直してしまった。

「あら？ギターを弾かないの？」

「う、うん。なんだか集中できなくて」

「集中できない？珍しいわね。大丈夫？体調が悪いの？」

「な、なんでもないよ。大したことじゃないさ。そ、そうだ。テレビでも見ようか。何か面白い番組やってないかな」

珍しい。本当に珍しい。雅がギターに、音楽に対して集中しすぎることはよくあることだ。それこそ、時間を忘れてしまうほどに。しかしその逆、集中ができないというのは非常に珍しい。珍しいどころか、初めてかもしれない。そんなことが過去にあっただろうか？覚えがない。

どうやら体調が悪いというわけでもないらしい。先ほどの罪悪感が何か関係しているのだろうか？わからない。初めてのこと故に、何も原因がわからない。考えても答えが出そうにない。答えがわからないまま、雅が付けたテレビに目を向ける。

「あーん。いいわ。もつと私をめちゃくちゃにしてー！」

そこには、ドラマの濡れ場シーンが映し出されていた。艶やかな女優さんの演技が光る。私もいつか、あんなドラマに出ることもあるのだろうか？正直、雅がいる手前そっち系の描写がある作品には出たくない。

そんなことを考えていると、付けたはずのテレビが一瞬にして消された。消した犯人はもちろん雅だ。でも、なんで消したのだろうか？疑問に思い、雅の方を見てみる。そこには、俯く雅がいた。その肩は、なんだか震えているように見える。一体どうしてしまったのだろうか？

先ほどのテレビに何か原因があるのだろうか？先ほどのドラマに何か原因が。そもそも、ドラマだけが原因なのだろうか？今日の雅は様子がおかしかった。それは例の事件に対する罪悪感からくるものだと思っていた。だけど、果たして本当にそれだけが原因だったのだろうか？

そこで、私はふと気づいてしまった。二つの事象が一つの要因に繋がれる。ああそうか。今日の雅がおかしかった原因は罪悪感が原因では無かったのか。勿論、それも原因の一つとしてあるだろう。だけど、最たる原因は違う。最たる原因、それは思春期特有の性欲だろう。

おそらく、雅は不意の事故とはいえ私の裸を見てしまって、発情してしまったのだ。それ以降、私が話しかけるたびに自分の中に生まれた欲望を抑え込むのに必死になって、どこか様子がおかしくなっていたというわけだ。それなら、先ほどのドラマを見たときの反応にも納得がいく。これで間違いないだろう。

ただ、雅にとつて間違えていたことが一つある。それは、別にそんな物抑え込む必要なんて無いということだ。私達の間には、暗黙のルールがいくつもある。その内の一つに、そういった行為は高校卒業まではしないとしようものがある。だけど、そんなルール知ったことではない。雅がしたいなら、すればいい。雅のことよりも優先される暗黙のルールなんて存在しない。私は、そんな雅に従うだけ。

だからこそ、私は決意して椅子から立ち上がった。そして、雅へと近づくと、顔が熱い。今から私達がする行為を思うと、自然と体が熱くなってくる。当然ながら、私にはそういった経験が一切無い。勿論不安だ。勿論恥ずかしい。だけど、それ以上に嬉しくもあつた。ああ、私は雅に捧げることができると思うと、喜ばしくて仕方が無かつた。雅に近づき、しやがみ込む。雅は眼を瞑つて、震えていた。おそらく、私が近づいたことにも気づいていないでしょう。そんな雅の足に手を乗せる。目を開けた雅が、私のことを見て驚いたような表情を見せる。今になって、恥ずかしさが頂点に達してきた。だけど、今更引き返す気も無い。私は、勇気を振り絞つて雅に告げた。

「み、雅。その、み、雅がしたいなら……私は、その、いいわよ……?」

雅の目が、驚愕により見開かれる。そして、その体が先ほど以上に震えているように感じる。おそらくこれは、歓喜から来る震え。雅は喜んでいるのだ。嬉しいのだ。私からの許可が出て。自身が抑えてきた性欲を解き放つことができ。そして、嬉しいのは私も同じだった。いつか、こんな日が来ると思っていた。初めては勿論、いえ、これから先私が関係を持つのは雅だけだと決めている。そして、ついにその日が来た。これが嬉しくないわけがない。

「ち、千聖。僕は……ぼ、僕は……」

「いいのよ。遠慮なんてしないで。雅……来て……」

雅の手が私に迫ってくる。それを私は嬉々として受け入れる。私まで残り数十センチ。さあ、早く来て。私はもう準備できている。私まで残り数センチ。さあ、今私は、あなたに全てを捧げる。

ピンポーン

しかし、捧げることは叶わなかった。誰かがチャイムを慣らす。なんてタイミングだろうか。奇跡的間の悪さだ。

「もう。こんな時に誰よ」

「はあ。仕方ないか。ちよつと出てくるよ」

こんな雨の中態々来てるのだ。出ないわけにもいかないだろう。私はため息を一つ吐き、出ていく雅を見送る。程なくして、玄関から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あ、雅君！良かったー。中々出てきてくれないからいけないのかと思つたよ」

彩ちゃんの声だ。こんな雨の中何をしに来たのだろうか？まさか私達の邪魔をしに来たわけでもあるまい。もしかしたら、長くなるかもしれない。そう思い、私はまた椅

子に座り直す。

「彩ちゃん？雨の中いらっしやい。こんなところで立ち話もあれだし、まあ上がってらってよ」

「うん！お邪魔しまーす」

玄関からそのような会話が聞こえてくる。どうやら、本格的に上がっていくようだ。これじゃ、今日はもう雅とできないかもしれない。私はまた一つため息を吐き、側に置いてあつた台本を手を取った。それから直ぐに、二人がリビングに入ってきた。

「あら？彩ちゃんじゃない。どうしたの？」

「あ、やつぱり千聖ちゃんもいたんだ。実はさっきまで私バイトしてたんだけど、終わって帰ろうと思ったたらこの雨でしょ？今日雨降るなんて予報で言ってたから傘持ってきてなくて。それで、バイト先から家まで傘を差さず帰るのも遠いし、だったら雅君の家で雨宿りさせてもらえないかなーなんて思ったんだけど、ダメかな？」

なるほど。雨宿り目的でやってきたらしい。それは、バイト先ではできなかったのかしら？まあ、店内だとお客さんや店員さんが忙しく動き回るから邪魔になるのかもしれない。それにしても、雨宿り先に雅の家を選ぶのはどういうことかしら？

仮にも、雅は男だ。そんな一人暮らしの男の家にびしょ濡れの状態で転がり込むなんて、女として危機感が無いのではないだろうか？今回は私がいたからいいけれども、ど

ういう危機管理能力をしているのかしら？これは今度お話が必要ね。きつと、雅なら大丈夫だと思つたとか、私がいると思つたからだとか言われるのでしようけど。

「うん。事情はわかつたよ。そういうことなら、ゆっくりしていいよ」

「本当？ありがとー！」

「だつたら彩ちゃん。お風呂に入つてくるといいわ。そんな濡れた服でいつまでもいると風邪引くわよ？着替えは私のを貸してあげるから。浴室に案内するわ」

「え？いいの？本当に助かるよー！ありがとー！」

そして私は、彩ちゃんと二人リビングから出て、浴室へと向かった。それにしても、本当に何でこんな時に来てしまつたのかしら？彩ちゃんも大変だったのはわかる。だけど、どうしてもやるせない気分になつてしまう。

「ち、千聖ちゃん。なんだか顔が怖いよ・・・？」

「ふふつ、気のせいよ。ここが浴室よ。ゆっくりしていいわよ」

「うん！ありがとー！」

そして彩ちゃんを浴室に案内し、着替えを渡してリビングに戻る。そこでは、雅がドンヨリとした空気を放っていた。

「雅・・・」

そして私も、ドンヨリとした空気を放ち、椅子に座る。彩ちゃんがいるのに、そういつ

た行為をする度胸は私にも雅にも無い。最高の気分から、一瞬にして最悪の気分へと突き落とされた。本当にシヨックで泣きそうだ。

「え？何？この空気？」

そして私達は、彩ちゃんがお風呂から上がってくるまでその状態を維持し続けた。ダメね。彩ちゃんが見てるのに、早く立ち直らないと。

「ふふつ、大したことじゃないのよ。さて、そろそろ晩ご飯の準備をするわね。彩ちゃんも食べていく？腕によりをかけて振る舞うわよ」

「え？いいの？じゃあお言葉に甘えて！何か手伝うことある？」
「気にしなくていいわよ。適当に雅と時間をつぶしてて」

そして、私は立ち上がりエプロンを手に取った。夕食を丹精込めて作っていく。その後ろからは、ギターの音色が絶えず響いていた。どうやら、雅も完全に開き直ったらしい。まあ、今日みたいな日は開き直らないとやってられない。本当に、思い出しただけで泣けてくる。

その後彩ちゃんは、結局私が帰る時間まで雅の家で過ごしていった。私が帰る頃には、雨もすつかり止んでおり、綺麗な満月が顔を出していた。今日は本当に天国と地獄を味わった気分だった。

最高の気分から最悪の気分への突き落とし。本当に質の悪い冗談だ。まあ、機会はい

くらでもあるのだ。私達の未来はまだまだ長い。遅かれ早かれいつかは幸せな瞬間がやってくる。その時を、捧げる瞬間を私はノンビリ待つてればいい。気長に待つてればいい。

幸せはいつか訪れる。待つてればいつか訪れる。そう遠くない未来に。私は、その瞬間を夢想し、幸せな帰り道を堪能したのだった。雅と二人での、幸せな帰り道を。いつかくる、幸せに想いを馳せながら。雅と、二人で。

あら？彩ちゃんもいたのを忘れてたわ。ふふつ。

第43演目 Catch the Moment

冬が間近まで近づいてきた今日、その季節を現すかのように冷たい風がこの街を駆け巡っていた。肌寒い。そんな空気にも負けず、熱気に包まれた空間があった。

「まもなく、男子100M走が始まります。出場する選手の皆さんは、入場口までお集まりください」

そのアナウンスに導かれて、入場口に列を作つて並ぶ。今日は僕が通う花咲川高校の体育祭だ。僕たちの学校は、普通の学校に比べて体育祭の開催が遅い。なんでも、すっかり肌寒くなったこの時期に開催することで、寒中水泳のように精神を鍛える目論見があるらしい。意味があるのかはわからないが。そして、入場の音楽が流れてくる。

「それでは、選手入場です」

そのアナウンスに従い、列のまま走者待機位置まで移動する。僕の高校は、一学年六クラスで構成されている。体育祭は、そのクラス対抗戦で行われる。学年ごとに、順位を決め、毎年学年内のトップに輝いたクラスには商店街で使用できる一商品無料券が全員に贈られる。まあ、要するに商店街まとめてスポンサーをやってくれているようなものだ。

「次の走者の皆さん、準備してください」

この競技を担当している、実行委員の指示に従い走者位置につく。次は僕の番だ。周りを見渡すと、一緒に走る五人は、クラスは違うけど知っている生徒ばかりだった。その実力もある程度把握している。全員走力は中の下から中の上といったところだろう。これなら勝てそうだ。

「それでは、位置について！」

実行委員のその言葉が聞こえ、全員クラウチングスタートの姿勢を取る。全員見据えるのは100M先のゴールテープ。もはや隣の走者のことなど意識していなかった。

「用意、ドン！」

その声と銃声が聞こえ、全員が一斉にスタートを切る。時間にしてほんの十数秒。されども、これは男達の威信を賭した真剣勝負。この場の六人の頭には、自信が勝利した未来予想図しか思い描かれていない。だが、その未来に進むことができるのは、たった一人だけ。僕は、その未来を目指して、死に物狂いで足を動かすのだった。

「お疲れ様雅。残念だったわね」

100M走を終えた僕は、生徒に用意された応援スペースに結果報告も兼ねた顔見せをしてから、すぐに保護者観覧スペースに足を運んでいた。そこには、ブルーシートの上に座る千聖の姿があった。僕の両親は、当然のことながら来ていない。ロンドンでの仕事相変わらず忙しいらしい。渡英したきり、帰ってきたのなんて数度だけだ。体育祭程度で帰ってくるわけがない。まあ、ある意味千聖が僕の保護者みたいなものなので、この状況は正しいのかもしれない。

因みに、先ほどの100M走の結果は3位と不甲斐ないものだった。周りの実力は確かに男子の平均前後の生徒ばかりだった。だけど、僕だつて似たような実力の持ち主なのだ。平均値より少し上程度、言うなら中の上程度。同じような実力の者同士なら、その時のコンディションや運次第で順位が変わる。そして今回僕は、僅差で3位に甘んじる結果となつてしまったわけだ。

「あはは、情けないところを見せちゃったね」

「そんなこと無いわ。すごくかつこよかったわよ。ただ、ちよつと運が悪かつただけ。次は絶対勝てるわよ」

「千聖、うん。ありがとう」

「うむうむ、青春のページって素晴らしいですね」

千聖と談笑する僕。そんな僕たちに声がかけられた。千景だ。彼女は、来年この高校を受験する。そのため、学校見学の一環として、体育祭の見学にやってきたのだ。

「はあ、千景。あなたは校舎の見学でもしてきたら？先生にお願いしてるんでしょ？」

「え？そ、それは私が邪魔だということですか？」

「誰もそんなこと言つてないわよ。ただ、あなただつて学校の見学したいんでしょ？そう思つて提案しただけよ」

「うう、わかりました。ただ、姉さんに追い出されたと思ひ込んだ私は、シヨックのあまりおにいさんのファンクラブ掲示板に姉さんとの有ること無いこと書き込むかもしれないが」

「やつぱりあなたはここにいなさい。どこにもいかないで」

「え？いいんですか？それじゃお言葉に甘えて」

「あはは、千景は相変わらずだね」

やつぱり、なんというか千景ちゃんも強いと思う。あの千聖がここまで手玉に取られるのは中々見られるものではない。それだけに、千景の口の強さがよくわかる。

「ただいまより、二年生男子による借り物競争の入場準備を開始します。出場する生徒は速やかに集合してください」

と、千聖たちと談笑しているとそんなアナウンスが聞こえてきた。借り物競争。僕が出

場する競技だ。

「あ、ごめん出番だからいつてくるよ」

「あら？もう出番なの？早くないかしら？」

「うん。まあこれも戦略の内なんだよ。僕はここさえ乗り切れば最後のリレーまで出番が無いからね。リレーに向けて体力を回復しておく作戦だよ」

体育大会は、全生徒最低三つの種目に出場する決まりになっている。個人種目二つ、団体種目最低一つの決まりだ。個人種目は一人二つの決まりだけど、団体種目は最低全員一つは出場しなければいけないが、一人が何個出ても問題ない。極端な話、クラス全員一つ出る条件さえ守れば、全ての団体競技に出る生徒がいても問題ないのだ。

団体競技には、三つがある。午前の部最終競技の騎馬戦。午後の部最初の競技の綱引き。全体最終種目のリレー。それぞれが、三十人のクラスから十五人の出場が義務付けられる。そして、僕はこの中からリレーにだけ出場する。

僕は、長時間のライブを頻繁に行っていることもあり、体力には自信がある。それこそ、運動部にも負けないほどに。だけど、走力は平均レベルだ。だからこそ、大事を取つてのこの作戦だ。

早い段階で僕の個人競技を終わらせて、最後のリレーに向けて体力を回復させる。備えあれば憂いなし。つまり、そういうことだ。

「それじゃあ、行つてくるよ」

「ええ、頑張つてね」

「姉さんのことはご心配なく。私がちゃんとお守りしておきますので」

「それは余計心配になるだけよ」

「あはは、まあ、頑張つてくるよ」

そして、僕は入場口へと足を進めるのだった。次こそは絶対に勝つ。千聖にいいところを見せるために、僕は今一度気合を入れなおすのだった。

そして、借り物競争が始まった。始まったのだが、その競技は混沌とした魔境と化していた。なんと、一つのレースにつき、走破できた人が一人二人しかないのだ。六人中、一人二人だ。かなり低い確率だ。順番が近づいてくるにつれて、段々不安になってくる。この競技、本当に大丈夫なんだろうか？

「次の走者の方、準備してください」

そして、最終走者である僕たちに順番が回ってくる。周りを見れば、僕の対戦相手は

皆他クラスの走力上位勢だった。だけど、この競技に限っては走力は当てにならない。求められるのは、八割の運と二割の判断力。走力は文字通り二の次だ。

「それでは、よいい、どん！」

そして、スタートの合図が出される。全員、お題が記された紙に向けて一目散に駆け出していく。さすが、走力上位勢。早い。僕が紙が置かれたポイントに着く頃には、全員お題の確認を終えていた。

「か、門松？これは、当たりの部類なのか？いや、体育祭に持ってきてる人普通いないだろ……」

「大いなる普通……って何？え？全く想像もできないんだけど？」

「ブシドー……ブシドー？何？武士道のこと？いや、物じゃねーじゃん！」

「天才少女の姉とか無理ゲーだろ！天才少女だけでも無理ゲーだよ！」

「お題は夢い物だな。なるほど。いや、抽象的すぎてわからねーよ……」

「だけど、どうやら皆無理難題にぶち当たっているようだ。聞いてるだけでも、走破できる人がいるとは思えない。そして、僕もお題を手にする。」

「このお題は……」

お題を見た瞬間、僕はその場から駆け出していた。それは、抽象的と言えば抽象的と言えるようなお題だった。人によって、答えが様々な姿に変わるようなお題。そのお題

を見た瞬間、僕の頭には一つの答えしか思い浮かばなかった。

「え？ 雅？」

「おやおや？ もしかして、この展開は？」

「ごめん千聖。一緒に来て！」

僕は、そう言うなり千聖の手を取った。そしてすぐさまゴールを目指そうとする。

「ちよつと待つて、私今靴も履いてないから」

が、千聖から制止の声がかかった。千聖は、現在観覧席用に用意されたブルーシートの上にいる。当然、土足で上がるはずがない。だけど、今の僕の頭には一秒でも早くゴールに向かわなければ、勝たなければという使命感が渦巻いていた。悠長に千聖が靴を履く時間を待つているのも煩わしい。だからこそ、僕は思い切った行動に出た。

「千聖、ごめん！」

「え？ きやつ！」

「あらあら、これはシャッターチャンスですね」

僕は、両の腕を千聖の肩と膝裏に持つていき、そのまま抱え上げた。所謂お姫様抱っこだ。そのまま、ゴールへと一直線に進んでいく。実況席や、他生徒から歓声やヤジが飛んできているような気がするが、今はそんなの気にならない。そして僕は、千聖を抱えたままゴールテープを切ったのだった。結果、見事一位となった。

「二位おめでとうございます！念のために、お題を確認させていただきますー！」

係の子がそう言ってくる。まあ、中にはお題に関係ない物を持ってゴールする人がいるかもしれないし、仕方ないだろう。だけど、僕は今お題を渡せない事情があった。

「ごめん。渡したいのは山々なんだけど、この子の靴が無くて、降ろせないんだ。ちよつとだけ待って」

そう。僕は未だに千聖を抱えた状態のままだった。というのも、千聖の靴を置いてきてしまったのだから仕方ない。後先考えず、突っ走った結果、こうなってしまった。結局、後続がゴールしてくる気配はない。要するに、千聖が靴を履く時間を待つぐらい、どうということはない。まあ、結果論と言えば結果論だけ。

結果、千聖にも恥ずかしい思いをさせてしまった。今も、僕の胸に顔を隠して全く見せようとしない。恥ずかしすぎて、熱を持っているのだろうか？寒空の下、やたらと千聖の頭が当たっている胸元だけが熱い。

「はいはい、こうなるだろうと思って、お届けに来ましたよ」

と、そんなやりとりをしている内に、千景がやってきた。その手には千聖の靴が握られている。

「さすが千景。ありがとう」

「本当に助かったわ」

そして漸く地に足をつける千聖。その表情は、真っ赤に染まっていた。よつぼど恥ずかしかったのだろう。本当に申し訳なく思う。そして、僕は係の子にお題の紙を見せる。

「えーつと・・・お幸せに？」

「あはは、うん、ありがとう」

その言葉と一緒に、紙を返してくれる。その係の子の言葉に、白鷺姉妹は表情に疑問符を浮かべていた。まあ、お題がお題だったから仕方ない。そして、僕はそのままクラスに結果の報告だけして千聖たちと一緒に保護者観覧スペースに戻ったのだった。

千聖を連れて報告に行ったところ、クラスメートから手荒い歓迎を受けたことだけ追記しておく。

昼休みになった。

これで競技は折り返しだ。前半戦を終えて、六クラスに大きな開きは無い。まさに団子状態といった様相だ。この昼休みで鋭気を養って、後半戦にスパートをかけたいとこ

ろだ。

といつても、僕の出番は最後のリレーまではもう無い。それまでは完全にフリーの間になっている。当初の作戦通り、しっかりと休ませて貰おうと思う。とまあ、やすむのも大事だけど、まずはランチだ。腹が減つては戦は出来ぬ。空腹の状態で戦に臨んだら、イヴちゃんに怒られちゃいそうだ。というわけで、僕は千聖が作つてきてくれたお弁当を頂くことにした。

千聖が作つてきてくれたお弁当は、豪勢なお重に入れられていた。しかも三段重ねだ。そこにはお弁当の定番とも言える品々が綺麗に詰められていた。だし巻き卵にきんぴらゴボウ、ポテトサラダからたこさんウィンナーまで。見るだけでも楽しめるよな食の芸術だった。

「朝からこんなに作つてくれたの？大変だったでしょ」

「そんなこと無いわよ。仕込みは昨日のうちに済ませてたから、見た目ほど労力はかかってないわ。さあ、遠慮無く食べてね」

「はい。では遠慮無く」

「あなたは少し遠慮しなさい」

そう言つて、本当に遠慮無くおかずに手を伸ばしていく千景。ぼやつとしているとあつというまに無くなつちやいそうだ。僕も負けじとお宝に手を伸ばしていく。

「あ、千景。その唐揚げは僕が狙ってたんだぞ！」

「ふっふっふっ、甘いですねおにいさん。世の中には早い者勝ちなんていう素晴らしい言葉があるんですよ。．．．て、おにいさん、その磯辺揚げは私が狙っていた．．．」

「ふっふっふっ、甘いね千景。世の中には早い者勝ちなんて便利な言葉があるんだよ」

「むぬぬ、やりますねおにいさん」

「そう言う千景こそね」

「はいはい、量も余裕を持って作ってきたし、お弁当は逃げないわよ。もつと落ち着いて食べましょうね」

「はい」

そうやって千景とおかず争奪戦を繰り広げていると、間に入った千聖に止められる。まるでお母さんに止められる遊び盛りの兄妹みたいで少し恥ずかしい。確かに、千聖の言う通りお弁当はかなりの量が用意されている。それこそ、僕達三人で食べても、食べきれぬかわからないほどに。

その後も、三人でお弁当を食べ進めていく。最初は多すぎると思っていたお弁当も、食べ進めてみればあっさりとなくなってしまった。久々にまともな運動をしたからだろうか？いつも以上に食欲が凄まじかった気がする。だけど、流石にもう限界だ。お腹がしんどくて、しばらく動けそうにない。

「さて、では私はこれより校舎見学に行つて参りますね。お二人はお好きにラブラブしていでてください」

「別にこんなところでしないわよ」

「おや?こんなところではしない?ということはする場所もあるということですよ。それは具体的にはどのような場所です」

「いいから早く行つてきなさい!」

「あはは、千景は相変わらずだね」

「本当に、相変わらずすぎて頭が痛くなるわ」

そう言つて頭に手を置く千聖。その様子を見るに、家でも散々遊ばれているのだから。容易に想像することができ。因みにだが、体育祭中は事前に学校に申請しておくことによつて、自由に校舎内を見学することができる。そのため、毎年体育祭には来年度の入学を考えている中学生が見学を訪れている。千景もその内の一人だ。

千景が校舎見学に行つたので、その場には僕と千聖の二人だけが残された。二人きりになつたと言つても、特に何かをするわけでも無い。ただ、二人でノンビリしているだけだ。別に、千景が言うところのラブラブをするつもりも無い。今はただ、体を休めることに注力しておく。そう考え、ぼーつとしていたのだけれど、急に睡魔が襲つてきた。こここのところ、作曲が行き詰まり、夜の遅くまで活動をすることが増えてきている。

つまり、睡眠時間が減ってきている。それに合わせて、お弁当を食べて満腹になったことにより、今まで隠れていた睡魔がヒョッコリ顔を出したのだろう。ウトウトとしてきた。

「雅？眠いの？」

「うん。お腹いっぱいになったからかな。なんだか眠くなってきたや」

そう、千聖の問いかけに素直に答える。時間を確認すると、僕の出番まではまだ数時間ある。少し寝ても問題無さそう。そう思い、僕はその場に寝転がる。

「ごめん、少しだけ寝るよ」

「あ、待って。そのまま寝転がると痛いでしょう？ほら、頭乗せて」

そう言って、千聖は自信の膝を差し出してくる。確かに、僕が今寝転がろうとしていた場所は、ブルーシートが敷いてあるとはいえ、その下は直ぐに地面だ。そんなところで寝ると、頭が痛いに決まっている。だけど、千聖の提案に乗るのは、彼女に悪すぎ。「いいよ、このままで。そんなことしてもらうなんて、千聖に悪すぎるから」

「私なら気にしないわよ。それとも、私の膝の上なんかじゃ寝れないとでも言うのかしら？」

そう言って、意地の悪そうな笑みを浮かべる千聖。その言い方は卑怯だ。そんなこと言われたら、拒否できるわけが無い。

「うっ、じゃあお言葉に甘えます」

「ふふっ、はい、どうぞ」

満面の笑みを浮かべて僕に膝を差し出してくれる千聖。僕は、少し緊張しつつ、その膝に頭を乗せた。千聖は今日ミニスカートを履いてきている。そのため、彼女の素足の感触が直に頭に襲ってくる。非常にスベスベしていて、柔らかくて、バナラのような良い香りが漂ってくる。その全ての感覚が、僕をドキドキさせる。心臓が鼓動を早める。だけど、とても心地よい。安心する。幸せを実感する。ああ、千聖が直ぐ傍にいてくれる。そう感じるだけで、そのような感情が湧いてくる。気分は最高だった。

「寝心地はどうかしら?」

「うん。最高だよ」

「ふふっ、それは良かったわ」

その会話を最後に、僕の意識は睡魔によって奪い去られていく。少し緊張はあったけれども、どうやら睡魔がそれを上回ったらしい。僕の意識が完全に無くなるまで、時間が必要無かった。さあ、起きたら最後の大事な事が待っている。必ず優勝の栄冠を勝ち取ってみせる。その意気込みを最後に、僕の意識は安らかな闇へと消え去っていった。

「雅、時間よ。起きて」

次に僕の意識が覚醒したのは、千聖のその声に呼び起こされてだった。ゆっくりと目を開ける。最初に飛び込んできたのは、僕を優しくな眼差しで見下ろす千聖の顔だった。

「おはよう、雅」

「うん、おはよう千聖」

時間を確認すると、リレー開始時間の十分前とあったところだった。ちようどいい時間だろう。睡眠を取ったことにより、なんだか体も軽い。これなら、いい結果が出せそうな気がする。

「よく眠れたかしら？」

「うん。お陰様でグツスリだよ。ありがとう千聖」

「ふふつ、どういたしまして」

「ゴホン。えーラブラブしてくださいさるのは大いに結構なのですが、私がいることも忘れないで下さい」

そう、あからさまな咳払いをして千景が言う。正直に言って、彼女のことをすっかり

忘れていた。

「あら？千景いたの？ごめんなさい気づかなかったわ」

「おや？ずつといたのに気づかなかった？これはまさか私、透明人間にでもなれましてか？もしかして今なら、おにいさんが寝ていた間に姉さんがしていたことを言っても、誰にも気づかれないんじゃない？」

「ごめんなさい千景。私が悪かったわ。だからやめなさい」

千景の発言に直ぐさま反応して謝る千聖。え？僕が寝ている間に何をしていたの？
凄く気になるんだけど。

「千景、千聖は何をしていたの？」

「実はですね、姉さんは」

「ちよつと、千景、やめなさい！」

「ただいまより、二年生クラス對抗最強リレーの入場準備を行います。参加する生徒の皆さんは速やかに集合してください」

「ほら、呼ばれてるから！早く行って！」

タイミングの良いアナウンスによって、僕の疑問はうやむやにされる。千聖の行動は気になるけれども、集合に遅れるわけにはいかない。仕方なく、僕は集合場所へと足を向けた。

「雅」

「ん？何？」

「頑張つてね」

「・・・うん、勝つてくるよ」

その声を背に受け、足を進めた。今の僕には、負ける気が一切しなかった。

そして、リレーの火蓋が切つて落とされる。ただのリレーでは無い。これは最強リレーだ。各クラスから、体力測定の結果を参考に、最速の十五人がエントリーされる。そのメンバーに、僕も選ばれた。そして、僕が今回担当するのは十五走目、つまりアンカーだ。なんで僕なんかがアンカーを努めるかというと、これには歴とした作戦がある。

基本的に、他のクラスは皆第一走者を除き後に行くほど足の速くなつていくように順番を決めている。第一走者だけは走力上位の生徒を置いておき、そこからクールダウンして後半追い上げる、つまり中緩みさせるような順番になっている。そこで、僕達が考

えた作戦は、その中緩みで一氣に突き放す作戦だ。

具体的な作戦は単純だ。僕達は逆に、後半に行くほど足が遅くなっていくように順番を組んでいる。そうすることによって、先行逃げ切りを狙う作戦だ。つまり、今回でいうアンカーとは、メンバーで一番足が遅い生徒が努める、不名誉なポジションなのだ。自分で言っていて泣きたくなってきた。

現在の各クラスのポイントは、未だに団子状態となっている。このリレーでトップになったチームが、そのままクラス順位でもトップに躍り出るほどの超僅差。そして、このリレーは最終種目だ。つまり、このリレーの勝者がそのまま優勝者ということになる。不名誉アンカーとはいえ、最後にゴールテープを切るのは僕の仕事。その責任は重大だ。

そして、遂にスタートの合図が出される。先行したのは、当初の目論見通り僕達のクラスだ。そして、その差は一走、二走と進む度に広がっていく。それこそ、半周差を付けようかと言うほどに。しかし、その差が、折り返しを迎えることになると、段々縮まるようになっていく。一走、二走と進むごとに、段々と差が縮まっていく。これも、当初の目論見通りだ。だけど、いざ実際に目の当たりにしてしまふと、焦ってしまう。

そして、十四走目、つまり僕の前の走者にまでバトンが回ってきた。その頃には、トップ争いは二つのクラスに絞られていた。僕のクラスはその内の一つだ。コースに出て、

バトンが回ってくるのを待つ。隣には、トップ争いをしているクラスのアンカーが悠然とした面持ちで立っていた。スラリと伸びた長身。長い手足。自信に溢れた相貌。

彼のことは知っている。学年でもナンバーワンの俊足の持ち主、身体能力の持ち主だ。バスケ部でエースとして活躍しており、その脚力も、陸上部よりも速いというところでもない生徒だ。そんな生徒と、僕は争わなければいけないらしい。少しでも多くリードが欲しいが、そのリードも徐々に縮まっていく。その差は秒換算で三秒ほどだろうか？このハンデをもらって、この百メートルに挑む。

因みにだが、僕の百メートル記録は十四秒台後半、噂に聞くバスケ部エースの記録は十一秒台前半らしい。正直、三秒ほどのリードじゃ心許ない。勝ち筋の方が薄いように感じる。だけど、やるしかない。やれるだけ、やってみよう。それで無理なら仕方ないじゃないか。相手が悪かった。そう言うしかない。

そして、ついにバトンが僕の手に回ってくる。僕にできる限りの全力で足を動かす。腕を振る。後続との差は予測通りきっちり三秒。ここから、約十五秒間で勝者が決まる。前に、前に進む。全力で、最高速で、前に進む。後ろは振り返らない。見向きもしない。ただ、前だけを見て進む。

ゴールテープまで、後三十メートル、というところで直ぐ真後ろに気配を感じる。その距離、約一歩分。速すぎる。もう追いつかれた。次の瞬間にはもう抜かれるかもしれない。

ないような、有つて無いような、無意味な差。後三十メートル。絶望的な距離。後二十メートル。遂に、横に並んできた。そこで僕は察した。所詮無謀な勝負だったんだと。

いや、相手からしたらこんなもの、勝負ですら無かったのかも知れない。それほどまでに、最初からわかりきっていた結果。チラツと、自クラスの応援席を見てみる。わかりきっていたことだけど、皆が皆、諦めたような表情をしている。皆、これから訪れる結果を受け入れたのだ。僕を含めて。はつきり言つて、ここから勝てる確率なんて万に一つも無い。それなのに、僕の勝利を信じるなんて、どうかしている。

「雅！負けないで！」

そんな、諦めようとしていた時だった。その声が聞こえたのは。それが、誰の声かなんていうのは、確認するまでもない。僕が彼女の声を聞き間違えるなんて、そんなことあるはずがない。千聖だ。千聖の声援が、確かに聞こえた。どうやら、千聖はこんな状況でも僕の勝利を信じてくれているらしい。言つてはなんだけど、本当にどうかしていると思う。だけど……

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

僕という人間は、本当になんて単純な存在なんだろうと思う。その声援が聞こえただけで、こんなにも力が漲ってくる。やる気が湧いてくる。隣の相手を横目で窺うと、僕の突然の大声に対して、驚いているように見える。だけど、その足は決して緩まるとこ

ろを知らない。前述したとおり、ここから僕が勝つ確率なんていうのは、万に一つもない。論理的に見てもありえないことだ。

だけど、これから起こることは、決してそんな論理とかで測れるものじゃない。ただの、感情論なのだから。負けたくない。負けたくない。千聖の想いに応えたい。その気持ちだけで足を動かす。一步前よりも速く、次は更に速くと。横目で相手をまた見てみる。その表情はまた驚愕しているように見える。だけど、今度は僕の声に対してでは無い。足に対してだろう。

もう抜けると思った相手が、急に速くなり、いつまでも自分との平行線を走り続けているのだ。それは当然ビックリするだろう。後十メートル。ラストスパートだ。ここまで来たのなら負けたくない。絶対負けたくない。千聖に、勝利した僕の姿を見てもらうんだ。後五メートル。もうゴールは目と鼻の先。さあ、行け雅！勝利の栄光を、その瞬間を自分の手で掴むんだ！

そして、ゴールテープが切られる。先に切ったのは……

「……で両者ゴール！僅かな差ながら、先にゴールしたのは……な、なんと黒城雅だ！信じられません！まさかあの局面から勝利するなんて！これが愛の力なのか!？」

その実況の声を聞き、僕は自信の勝利を知る。正直、最後は走るのに夢中で、ただがむしやらに走っていたので、自分が勝ったのかどうかなんて全然わからなかった。だけ

ど、どうやら勝利したらしい。

僕はその情報を得ると、観覧席にいとある少女に向けて拳を突き出す。もちろん千聖だ。彼女も、合わせるように僕に向かって拳を突き出してくれる。その眼には薄らと涙が浮かんでいる。泣いてくれていたのだろうか？何はともあれ、彼女に勝利をプレゼントできてよかった。とはいえ、僕も彼女にプレゼントを貰ってしまった。

先ほど彼女が僕に見せてくれた、涙を浮かべながらも見せてくれた笑顔を、僕は一生忘れないだろう。正に、一生の宝物だ。それほどまでに、最高の笑顔だった。ふと、今日の借り物競走を思い出す。あのお題を見たとき、僕は真っ先に千聖が浮かんでいた。昔の僕なら、きつと違う選択をしていたかもしれない。だけど、今は千聖が真っ先に思い浮かぶ。

それほど、僕の中で彼女が、かけがえの無いものになっているということだ。これからもきつと、それは変わらないのだろう。これからもずっと、千聖を大切にして生きていきたい。そう思わせてくれる、素晴らしい青春のページだった。

第44演目 一番の宝物

「まもなく、男子1000M走が始まります。出場する選手の皆さんは、入場口までお集まりください」

そんなアナウンスが、会場内に響き渡る。今日は、雅が通う花咲川高校の体育祭だ。私は今日、雅の応援をするためにこの高校に足を運んでいた。と言っても、今日は私人では無い。

「あ、おにいさんいますね。おや？おにいさんの前の列に高身長イケメンが！これは優良物件ですね」

今日は妹の千景も一緒に来ている。千景は、来年この学校に入学するつもりだ。そのため、事前調査という形で今日は来ている。表だった名目は、校舎見学及び、生徒の雰囲気調査としているが、本人の最大の目的は、運命の人探しだ。

千景は、私と雅の関係に憧れて、自分も素敵な異性、運命の人に出会いたいと考えている。この高校を選んだのも、それが主な目的だ。この高校は、男女比率が男子に大きく偏っている。そのため、運命の人に出会える確率も高いはず、という本人談だ。運命の人探しはいいけど、本当に悪い男にだけは捕まらないようにしてほしい。

「あの高身長イケメンさん凄いですね。同走の生徒さんもおそらく走力上位に入るような人達だと思えますけど、そんな人達に圧勝ですか。これは中々、興味深い物件ですね」
「ツバをつけておくのはいいけれど、その物件って言い方なんかならないの？まるで物扱いじゃない」

「おっとこれは失礼しました。品が無かったですね。おや？姉さん、次はおにいさんの番みたいですよ」

千景に言われて、走者の方に目を向ける。確かにそこには、雅の姿があつた。その姿が見えると、観客席から黄色い声援が飛び交う。雅は当然のことながら、女性ファンが多い。声援にも、雅様と聞き慣れた愛称で声援を送る人も多い。

「さあーお聞き下さいこの声援ーこれも全て、次の走者、その内の一人に送られたものですよ！それはもちろん、皆さんご存知この男、黒城雅だ！」

実況席からも、一際大きな実況が飛んでくる。慣れた手つきで、その声援に向けて片手を軽く上げて応える雅。だけど、その意識は、視線は観客席には向けられていない。ただ一点、百メートル先に設置されたゴールテープだけを見据えている。ライブの時には劣らない、凄い集中力が今発揮されている。

「おー、これまた凄い歓声ですね。それに、歓声の大半は女の人みたいですね。まあ、当然のことですけど。姉さんも、少しは妬いちゃうんじゃないですか？」

「そんなことないわよ。今の雅を見ればわかるわ。雅にはこの歓声は聞こえていない。いえ、聞こえてはいるかもしれないけれども、意識には入っていない。今反応を返したのだから、無意識に体が反応しただけよ。決して雅が靡なびくことが無いってわかっているから、妬くも何も無いわよ」

「おー、さすが姉さん。これが正妻の余裕という奴ですか」

「正妻って、まるで側室がいるみたいと言わないでくれるかしら？」

そんなくだらないやりとりを千景としていた内に、レースがスタートする時がやってきた。雅を含めた六人の走者が、クラウチングスタートの姿勢を取る。そして、合図となるピストルの音が鳴った。最初に前に躍り出たのは雅だった。とはいっても、ほんのわずかな差だ。後続の五人もほぼ横並びの状態。

見たところ、六人の走力に大した差は無いように見える。そのまま、団子状態でゴールに突っ込んでいく。結果、雅は三位となった。結果こそ残念ではあるけれども、このレースを見ていたならわかる。ほんの少しの切欠で、この順位は違う数字に変わっていたであろうことに。

まあ、上の順位に変わる可能性は大いにあったものの、場合によっては下の順位に変わっていた可能性も十分にあった。今回はこの順位で良かったのではないだろうか？
といつても、本人は納得していないかもしれないけれども。その証拠に、こちらへ向

かつて歩いてくる雅の顔は、浮かない顔をしていた。

「お疲れ様雅。残念だったわね」

こちらに近づいてきた雅。やはりその顔は申し訳なさそうな顔をしている。大方、折角私達が応援に来ているのに、一位になった姿を見せられなくて申し訳無いと思つてい

るのだろう。そんなこと、気にしないのに。

「あはは、情けないとこを見せちゃったね」

「そんなこと無いわ。すぐくかつこよかつたわよ。ただ、ちよつと運が悪かつただけ。

次は絶対勝てるわよ」

「千聖、うん。ありがとう」

「うむうむ、青春のページって素晴らしいですね」
雅を励ましていると、千景が茶々を入れてくる。本当に、この子がいると雅とゆつくりお話することもままならない。別に、嫌なわけではないのだけれども、できたら雅と二人にしてほしいとも思う。

「はあ、千景。あなたは校舎の見学でもしてきたら？先生にお願いしてるんでしょ？」

「え？そ、それは私が邪魔だということですか？」

「誰もそんなこと言つてないわよ。ただ、あなただつて学校の見学したいんでしょ？そう思つて提案しただけよ」

「うう、わかりました。ただ、姉さんに追い出されたと思ひ込んだ私は、シヨックのあまりおにいさんのファンクラブ掲示板に姉さんとの有ること無いこと書き込むかもしれません」

「やつぱりあなたはここにいなさい。どこにもいかないで」

「え? いいんですか? それじゃお言葉に甘えて」

「あはは、千景は相変わらずだね」

本当に相変わらさず困る。昔から、この子は口が強い。私だって、芸能界という荒波で揉まれた人間。口にも自信がある。だけど、この子を相手にするとどうも勝てる気がしない。

「ただいまより、二年生男子による借り物競争の入場準備を開始します。出場する生徒は速やかに集合してください」

と、雅達とそんな他愛も無い雑談をしていると、そんなアナウンスが聞こえてくる。確か、借り物競走は雅も出場する競技だったはずだ。それにしても、出場競技の感覚が短くないだろうか? さつき、競技を終えたばかりな気がするのだけど。

「あ、ごめん出番だからいつてくるよ」

「あら? もう出番なの? 早くないかしら?」

「うん。まあこれも戦略の内なんだよ。僕はここさえ乗り切れば最後のリレーまで出番

が無いからね。リレーに向けて体力を回復しておく作戦だよ」

確かに、リレーは体育祭の目玉競技だ。最後を飾るに相応しく、配点も高めに設定されていたはずだ。優勝を狙うなら、このリレーでいかに結果を出せるようにそれまでの競技を組み立てるかも重要になってくるのかもしれない。

「それじゃあ、行ってくるよ」

「ええ、頑張つてね」

「姉さんのことはご心配なく。私がちゃんとお守りしておきますので」

「それは余計心配になるだけよ」

「あはは、まあ、頑張つてくるよ」

そう言つて、集合場所へと向かつていく雅。その背中からは、気力が満ちあふれているように感じる。よつほど、さっきの百メートル走で負けたのが悔しかったのだろう。次は絶対に負けないと意気込んでいる。そのやる気が空回りしなければいいけれども。「おにいさん大丈夫でしょうか？ なんだか少し、気合が入りすぎているようにも感じるので。少し心配ですね」

「その割には、あなた楽しそうな顔してるわね」

「ええ、それはもちろん。なんだか面白そうなことが起きそうな予感がしてるんですよ。だってほら、借り物競走と言えば、体育祭の恋愛イベントの定番じゃないですか。

二人三脚、フォークダンスと合わせて三大体育祭恋愛イベントですよ。それなのに、何かを期待しないなんて、ありえないじゃないですか」

「はあ、どうせそんなことだろうと思っただわ」

そもそも、そんな都合のいい話があるわけがない。千景が言いたいのは、借り物競走のお題で恋人に関するネタが当たるかもしれないということだ。そう簡単に当たるわけがない。もし当たったとしたら、なんだか運命的な気がして嬉しいけれども。

と、そんなことを考えている間にも、借り物競走が進んでいく。だけど、どうならお題の難易度がかなり高めに設定されているらしい。ほとんどの走者が、お題を見つけられずにギブアップしている。ゴールできる走者なんて、一組につき、一人二人ぐらいだ。そのゴールできた走者の持つて帰ってくる物も、色々とおかしい。サボテンに、蜂の巣に、ミツシエルとバラエティ色が豊かだ。そもそも、なんでミツシエルがこんなところにいるのだろうか？あの中身は美咲ちゃんなのかしら？気になるわね。因みに、蜂の巣を持つてきた生徒はその後蜂との熾烈な追加レースを行っていた。姿が見えなくなっただけど、大丈夫かしら？そして、ついに雅の番がやってくる。

スタートの合図と共に、勢いよくお題の書かれた紙に向かう雅。だけど、走力的には周りの生徒の方が上みたいだ。少し遅れて紙を拾う雅。そして、中身を確認するなり、一目散へこちらへ駆け出した。見間違いだらうか？私達の席に向かってきてる気がす

るのだけれど。そして雅は、本当に私達の席の前までやってきて、止まった。

「え? 雅?」

「おやおや? もしかして、この展開は?」

「ごめん千聖。一緒に来て!」

そう言うなり、雅は私の手を取って引つ張った。だけど、私には一つ問題があった。

「ちよつと待つて、私今靴も履いてないから」

そう。私は今、靴を履いていなかった。私達の座る観客席は、ビニールシートが敷か
れているだけの簡易的なものだ。まさか、ビニールシートの上に土足で上がっているわ
けが無い。なので、せめて靴を履く時間が欲しかった。だけど、どうやら雅はその時間
も許せなかったらしい。

「千聖、ごめん!」

「え? きやつ!」

「あらあら、これはシャッターチャンスですね」

急に何かを覚悟したかのような表情をしたかと思うと、私のことを横抱きにした。所
謂、お姫様だつこという状態だ。確かに、これなら靴はいらない。だけど、かなり恥ず
かしい。お姫様だつこ自体は、別にされるのが初めてというわけではない。以前にも文
化祭のお化け屋敷で雅にしてもらったことがある。

だけど、こんな大勢の人前でっというのはさすがに初めてだ。周りからの視線を感じてかなり恥ずかしい。そして、そのままの状態では走り始めた。すぐに、周りの視線が最も集まるグラウンドの中に入っていく。

「おーっとこれは！早くもグラウンドの中に走者が一人帰ってきました！しかし、なんでもものを持ち帰ってきたんだ！帰ってきた走者は黒城雅！そして、持って帰ってきた借り物は、顔は胸元に隠れて見えないが間違いないでしょう！今ワイドショーでも熱愛が報じられている、日本一有名な高校生カップルの片割れ、女優兼アイドル、白鷺千聖その人だ！」

グラウンドに入るなり、そんなハイテンションな実況が聞こえてくる。と同時に、観客からの歓声も聞こえてくる。女性客からの黄色い声や、羨む声。男性客からの野次にも似た声や、私への声援。マイナ斯的に聞こえる声も入っているが、それらの声も口調等から本気で言っているのでは無く、冗談目的で言っていることがわかる。

「さあ、黒城雅、ゴール目前！後続の姿は未だに見えないぞ！圧倒的！圧倒的早さで今、ゴールイン！このレース勝者は、黒城雅だ！色んな意味で勝者だな！羨ましいぞこの野郎！」

実況の野次を背に雅が今ゴールした。その間、当然ながら私はずっと抱えられている。雅の腕で抱えられている私。胸元に抱えられている私。雅の鼓動が直ぐ近くで聞

こえる。走ったため、凄く早く動いている。その音を聞いて、なんだかまた恥ずかしくなる。

「二位おめでとうございます！念のために、お題を確認させていただきますい！」

そう言つて、誰かが近づいてくる。私には、その姿が見えない。まあ、雅の胸にずっと顔を埋めてるから当然だけれども。ただ、声の内容からどのような役割をした子なのかは大体わかる。それにしても、本当に今回のお題はなんだつたのだろうか？私に関する物だとしても、色々と考えられる。少し、気になつてしまう。

「ごめん。渡したいのは山々なんだけど、この子の靴が無くて、降ろせないんだ。ちよつとだけ待つて」

そういえばそうだった。この状況に慣れてきていたせいで忘れていたけれども、私は今靴が無いのだった。雅に降ろしてもらおうにも、降ろしてもらえない。非常に困つた状況に置かれていた。

「はいはい、こうなるだろうと思つて、お届けに来ましたよ」

と、二人して困つてしていると、そんな千景の声が聞こえてきた。その内容からして、私の靴を持ってきてくれたのだろう。案の定、直ぐに雅が私を降ろしてくれて、靴を履くことができた。久々に地に足をつけることができた。自分の足で立てるって、素晴らしいことだと実感できた。

「さすが千景。ありがとう」

「本当に助かったわ」

やっぱり、今日は千景も来てくれていて助かったかもしれない。このままだと、また席まで雅に抱いていつてもらわないといけなかったかもしれない。私としては、それはそれで有りかとも思ってしまったのは秘密だ。

「えーつと・・・お幸せに？」

「あはは、うん、ありがとう」

そして、女生徒にお題の書かれた紙を見せる雅。私にはその内容は見えなかったけど、その女生徒の反応が凄く印象的だった。おそらく、何かしら抽象的な書き方で私、というよりは恋人のことを書いていたのでは無いかと思う。一体どんな書き方だったのか少し気になる。だけど、その後雅に聞いても、はぐらかされて教えてくれなかった。余計に気になってしまう。

まあ、何はともあれ雅が一位になれて嬉しかった。これで後はリレーだけらしい。それまで、鋭気を養うと雅は言っていた。そのためにはまずはお昼ご飯だ。今日は腕によりをかけて豪勢に作ってきた。雅もきつと気に入ってくれるはず。このお弁当を食べ、最後のリレーも絶対に勝ってもらおう。私はるるん気分、自分達の観客席に戻るのだった。

雅と一緒に、雅のクラスへ報告に行ったらサイン責めにあったことだけ追記しておく。

お昼休みになった。

私達三人は、ブルーシートの上でお弁当を囲んでいた。昨晚から仕込んでおいた、自慢の三段重だ。我ながら素晴らしい完成度だと思う。これならきつと、二人も満足してくれるでしょう。

「朝からこんなに作ってくれてたの？大変だったでしょ」

「そんなこと無いわよ。仕込みは昨日のうちに済ませてたから、見た目ほど労力はかかってないわ。さあ、遠慮無く食べてね」

「はい。では遠慮無く」

「あなたは少し遠慮しなさい」

そう言つて、いち早くお弁当に手を伸ばす千景に少し呆れる。でも、美味しそうに食べてくれるのでよしとしましょう。やっぱり作った身としては、美味しそうに食べて

くれるのが一番嬉しい。作った甲斐があったというもの。その顔を見せてくれたことに免じて許しましょう。

「あ、千景。その唐揚げは僕が狙ってたんだぞ！」

「ふっふっふっ、甘いですねおにいさん。世の中には早い者勝ちなんていう素晴らしい言葉があるんですよ。……て、おにいさん、その磯辺揚げは私が狙っていた……」

「ふっふっふっ、甘いね千景。世の中には早い者勝ちなんて便利な言葉があるんだよ」

「むぬぬ、やりますねおにいさん」

「そう言う千景こそね」

「はいはい、量も余裕を持って作ってきたし、お弁当は逃げないわよ。もっと落ち着いて食べましょうね」

「はい」

子供みたくに取り合いをする二人を見て、それを注意する。そんなやり取りをして、なんだか世話のかかる夫と娘を叱りつけるお母さんみたいだな、なんて考えて恥ずかしくなる。おそらく、顔もまた赤くなってしまうことでしょう。幸い、二人はお弁当に夢中で気づいていない様子。良かった。もし千景に見られていたら、どんなことを言われていたかわからない。

そしてその後も、二人の食事ペースは衰えない。余ることを想定して作ってきたはず

のお弁当が、見事に数十分で跡形も無くなっていた。正直に驚いた。特に雅の食欲は本当に凄かった。いつもの倍は食べていたのではないだろうか？体を動かして、食欲が増したのだろうか？でも、最後まで美味しそうに食べてくれたから嬉しかった。

「さて、では私はこれより校舎見学に行つて参りますね。お二人はお好きにラブラブしててください」

「別にこんなところでしないわよ」

「おや？こんなところではしない？ということはする場所もあるということですよ。それは具体的にはどのような場所です」

「いいから早く行つてきなさい！」

「あはは、千景は相変わらずだね」

「本当に、相変わらずすぎて頭が痛くなるわ」

そう言つて私は頭を抱える。千景は本当に相変わらずの調子だ。家でもよくからかわれている。あれさえなければ、良く気が利く良い子なのだけれども。まあ、本人も直す気が一切無いみたいなので、願うだけ無駄だろう。本当に、どうしてこんな風に育つちやつたのかしら。

そんな、千景に頭を悩ませている中、ふと雅を見てみると、コク、コク、と船をこいでいた。満腹になつて眠くなつてきたのだろうか？今にも寝てしまいそうな状態だ。

「雅？眠いの？」

「うん。お腹いっぱいになったからかな。なんだか眠くなってきたや」

そう言つて、我慢できないとばかりに横になろうとする雅。よつぽど眠いのだろう。その発言も、なんとか言えましたといった様相だ。寝転がれば数秒で夢の中に入つてしまふ。まいそんな気がする。

「ごめん、少しだけ寝るよ」

「あ、待つて。そのまま寝転がると痛いでしょう？ほら、頭乗せて」

しかし、雅が今寝転がろうとしていた場所はブルーシートの直ぐ下が地面になつていふ。そもそも、この観客席すら、地面の上にブルーシートを敷いただけの簡易的な作りになつていふ。寝転がると、頭の下が固くて寝にくいだろう。寝るには適していない場所だ。だから、私は雅に枕を提供することにした。枕と言つても、私の膝だ。されど、無いよりはマシだろう。

「いいよ、このままで。そんなことしてもらうなんて、千聖に悪すぎるから」

「私なら気にしないわよ。それとも、私の膝の上なんかじゃ寝れないとでも言うのかしら」

拒否されたので、少し悪戯っぽく言つてみる。勿論、雅がそんなことを思つていふなんて微塵も思つていない。ただ、雅の逃げ道を塞いだけ。こんなことを言われて、雅

が拒否できるわけが無い。我ながら、ずるいことをしているとと思う。だけど、雅が頭を痛めるよりはマシだろう。それに、困ってタジタジしている雅がなんだか可愛いので、言ってみて良かったと思う。

「うっ、じゃあお言葉に甘えます」

「ふふっ、はい、どうぞ」

そして、私の膝に頭を乗せてくる雅。丈の短いスカートを履いてきていたため、素足に雅の頭が当たった。髪の毛が太ももを撫でて、少しくすぐったい。雅の顔が直ぐ近くにある。それを見て、なんだか恥ずかしくなってくる。と同時に、幸せな気持ちにもなる。嬉しくて嬉しくて、堪らなくなってくる。

「寝心地はどうかしら?」

「うん。最高だよ」

「ふふっ、それは良かったわ」

その会話を最後に、雅は直ぐに寝息を立て始めた。よっぼど眠かったのだろう。寝付くまでに然程時間は要さなかった。そう言えば、最近雅は良く、朝隈ができていることがある。聞いてみても、最近寝付きが悪いとしか教えてくれなかった。そういうことも今日の寝付きの良さに一因しているのかもしれない。

本当ならば、このままずっと寝させてあげたい。だけど、この後雅には大仕事が残つ

ている。寝させてあげたいのは山々だが、時間になれば起こさざるを得ない。そうやって、雅の頭を優しく撫でながら、寝顔を眺めていると、気づけば一時間以上が経っていた。

雅の髪の毛の触り心地が良く、更に寝顔が可愛くて飽きがこないまま、時間ばかりが経過していた。リレーまであと三十分といったところだろうか？もう少しだけなら、寝させてあげても問題無いだろう。そう思い、雅の寝顔を再び眺める。ふと、その柔らかそうな唇に眼がいく。

付き合い始めてから、幾度も重ねてきた唇。その感触も、何度味わったって飽きが来ない。その唇に、自身の人差し指を触れさせる。そして、その人差し指を自分の口元に持って行く。

「ふ、ふっ」

そんな些細な事だけで、今まで重ねてきた唇の記憶が蘇り、自然と笑みがこぼれる。自然と幸せな気持ちになる。だけど、自分がしたことを思い返して、我ながら乙女っぽいな、なんて気持ちにもなる。誰かに見られていたらかなり恥ずかしい。

「乙女ですか」

「きゃっ！」

そしてその場面は、最悪な人物に見られていたらしい。千景が、私の前に立っていた。

驚きのあまり、その場で立ち上がりそうになってしまった。立ち上がっていたら、雅の頭をその場に落としてしまうところだった。危ないところだった。だけど、今の私の置かれた状況は、それどころでは無かった。

「ち、千景、見ていたの?」

「ええ、バツチリ見させて頂きました。姉さんって本当に見かけによらずウブで乙女っぽいですよね」

「・・・否定はしないわ」

私の顔は、今猛烈に赤くなっていることだろう。本当に、今日何度目だろうか? 正に、顔から火が出てしまいそうな状態になっていた。穴があつたら飛び込みたい。

「それより姉さん、おにいさんを起こさなくていいんですか?」

「え?」

千景に言われて時計を見る。すると、タイムテーブル通りに進めば後十分ほどでリレーが始まる時間になっていた。そろそろ雅を起こしてあげないと、マズいだろう。私は、気持ちよさそうに寝ている雅に申し訳無く思いつつも、その肩を揺らして声をかけた。

「雅、時間よ。起きて」

声をかけると、雅が徐に目を開ける。寝ぼけ眼をした雅。その表情が可愛らしくて、

また自然と笑みが浮かぶ。

「おはよう、雅」

「うん、おはよう千聖」

様子を窺ったところ、体調も良好そう。これなら、リレーでもきつと良い結果を出してくれるに違いない。

「よく眠れたかしら？」

「うん。お陰様でグツスリだよ。ありがとう千聖」

「ふふっ、どういたしまして」

「ゴホン。えーラブラブしてくださいるのは大いに結構なのですが、私がいることも忘れないで下さい」

雅とそんな何気ない会話をしていると、あからさまな咳払いをして間に千景が入ってくる。そういえば、千景もいたのをすっかり忘れていた。

「あら？千景いたの？ごめんなさい気づかなかったわ」

「おや？ずつといたのに気づかなかった？これはまさか私、透明人間にでもなれましたか？もしかして今なら、おにいさんが寝ていた間に姉さんがしていたことを言っても、誰にも気づかれないんじゃない？」

「ごめんなさい千景。私が悪かったわ。だからやめなさい」

自分でいじっておいて、直ぐにしまったと思う。そういえば、千景には取れたての新鮮な弱みを握られていたのだった。本当に、こういうことに関しては学習しない。いえ、そもそも、こうも姉に対して遠慮無く脅迫材料を使ってくる妹がおかしい。きっと千景がおかしいに決まっている。決して私は悪くない。

「千景、千聖は何をしていたの？」

「実はですね、姉さんは」

「ちよつと、千景、やめなさい！」

「ただいまより、二年生クラス對抗最強リレーの入場準備を行います。参加する生徒の皆さんは速やかに集合してください」

「ほら、呼ばれてるから！早く行つて！」

アナウンスに救われた。今私は心からそう思っていた。もう少しで千景に暴露されている所だった。本当に油断ならない。少しでも油断するとすぐにこういうことをしてくる。重ね重ね言うけれども、本当にこういうところが無ければ誇らしいほど良い妹なのに。と、そう千景のことを考えていると、雅がリレーに向かおうとしていた。そういえば、大事なことを伝えるのを忘れていた。そう思い、雅を呼び止める。

「雅」

「ん？何？」

「頑張つてね」

「・・・うん、勝つてくるよ」

そう言い残し、雅は集合場所まで歩いて行つた。その背中からは並々ならぬ気迫を感じる。どうやら、私の気持ちはちゃんと雅に力を与えられたらしい。今の雅なら、きつと勝つてくれるだろう。

「うむうむ、青春の一ページって素晴らしいですね」

「あなた、それさつきも言つてたわよ」

なんて千景の発言に呆れながらも、雅の勇姿を見守ることに意識を集中させる。しばらくすると、リレーの火蓋が切つて落とされた。雅はアンカーを努めるらしい。一番最後の走者。レースを締める重要な役割だ。まだまだ雅の出番はやってこないとはいえ、今からドキドキしてきた。

雅のクラスの作戦は先行逃げ切りらしい。とにかく序盤に速い人を揃えて、序盤で一気に差を広げる作戦らしい。その作戦通り、雅のクラスは序盤で大幅なリードを稼いでいた。しかし、レースが後半に突入すると、そのリードが少しずつ縮まっていく。走者が進むごとに、縮まって、縮まって、縮まっていく。そして、雅の番まで回ってきた。

「おや？あのおにいさんと一緒に待機しているのって、百メートル走にも出た高身長イケメンさんじゃないですか」

そう千景が言う。確かに、雅と一緒に並んでいる人には見覚えがあった。百メートル走を走っていたときも見ていた。凄まじい速さで周りの生徒を圧倒していたのを覚えている。おそらく、学年で一番速いのではないだろうか？そんな人と、雅は優勝争いをするらしい。段々と前の走者が近づいてくる。そして、今雅にバトンが渡った。そしてその約三秒後にその背の高い人がバトンを受け取る。

その人は、本当に圧倒的なスピードを持っていた。雅も悪くない走りをしているけれども、そんなもの関係無いとばかりに一気に距離を縮めてくる。そしてゴールまで残り三十メートルというところで、真後ろにつけられた。

「ま、まずいわ。このまま行くと確実に負けちゃう・・・」

「そうですね。間違いないおにいさんは負けてしまうでしょうね。むー、こうなったら奥の手を使うしかありませんね」

「奥の手？まだ雅に勝つ手段は残されているの？」

藁にも縋る思いだった。雅が勝つためなら、なんだってする。そういう思いで普段は気にもとめない千景の言葉に耳を傾けた。

「ええ。単純なことですよ。姉さんがちよつと声援を送ってあげればいいんです」

「私が、声援を？」

「そうです。おにいさんがリレーに向かう際、姉さんの声援に応えておにいさんの気迫

が上がつていたでしょう？でも、どうやらそれだけではまだ物足りなかったみたいですね。ならば、もう一押しです。もう一押し声援を送ってあげればきつと・・・」

「雅！負けないで！」

「つて、躊躇無いですね」

人生でもこんな大きな声出したことあっただろうか？そう思うような声で雅に向けて声援を送っていた。千景の意見を聞くなり、私は直ぐさま実行に移していた。縄れる物なら何にだつて縄り付く。その一心で声を張り上げていた。そんな私の声が届いたのだろうか？その後の雅の走りは目を見張る物だった。あの圧倒的な走力を持った人に並べながらも、決して抜かせない。それどころか、自身が前に出ようとしているのだ。

私は、そんな雅の姿に見惚れていた。本当にかつこよかった。ただただ、かつこよかった。ライブの時に見せるかつこよさとは、また違うベクトルのかつこよさ。私は、雅がゴールする瞬間まで、そんな雅の姿に見惚れていた。そして、ついにゴールテープが切られる。結果は・・・

「ここで両者ゴール！僅かな差ながら、先にゴールしたのは・・・な、なんと黒城雅だ！信じられません！まさかあの局面から勝利するなんて！これが愛の力なのか!？」

雅の勝利。その結果を見届けると、私の眼から自然と涙がこぼれ落ちていた。

「やった、やった！雅が勝ったわ！やったわよ千景！」

「ま、まさか本当に勝つなんて信じられません……これが本当に、愛の力なんですか？」

千景が何か言っているが、そんなこと今の私の耳には届いていなかった。雅に目を向ける。すると、雅も丁度私の方に目を向けてくれる。雅が私に向けて、拳を突き出してくる。私もそんな雅に合わせて拳を突き出した。そして、顔には笑みが浮かぶ。雅も、私に負けじと笑みを浮かべる。その笑顔は、本当に眩しかった。滴る汗は、本当に美しかった。

このリレーの結果を経て、雅のクラスは無事に優勝を果たした。体育祭 MVP には、当然のことながら雅が選ばれることになった。そんな、MVP なんて制度が体育祭にあるのかなんて思ってしまったのは、きっと些細なことだろう。

夕日が照らす帰り道、私は雅と二人並んで帰っていた。千景は、いつものごとく気を使っただけか、一人で先に帰った。本当に、こういうところだけは気を使う子だ。まあ、こ

ちらとしても雅と二人でいられて嬉しいから、有り難い気遣いだとも思う。

「雅、改めてだけど、体育祭優勝とMVPおめでとう」

「うん、ありがとう。まさかMVPまで取れるなんて思ってたけどね」

おそらく、最後のリレーが決め手になったのだろう。あそこまで、感動的なフィナーレを飾られたら、誰も文句を言えないだろう。身内鼻屑を抜きにしても、私だって雅を選ぶ。それ以外ありえないだろう。と、そんなことを雅と話しながら帰っていると、不意に雅の制服のポケットから何やら紙が落ちた。

「あら？ 雅何か落としたわよ？」

「え？ あ、そうだった。体操着から着替えたときに制服のポケットに入れ直したんだっただ。ちゃんと入ってなかったのかな？」

私は、その紙を拾う。その紙には、見覚えがあった。借り物競走の時の、お題が書かれていた紙だ。あの時は、何が書かれていたのか気になっていたけれども、結局知れずじまいだった。私は、その中に書かれた文字を見してみる。そして、思わず涙が込み上げてしまった。

「わあ!?! どうしたの、千聖?!」

「ご、ごめんなさい。す、凄く嬉しくて、つい・・・」

そこに書かれていたお題は、一番の宝物。そう、確かに書かれていた。一番の宝物。

そのお題で、雅は私を選んでくれた。あの時の雅は、お題を見るなり一瞬の迷いも無く私に向かつて一直線で来てくれた。昔の雅なら、考えられなかつたであろう。間違いなく、ギターを取りにいつていたはずだ。それが、迷い無く私を選んでくれた。これを喜ばずにいれるわけがない。嬉しさのあまり、私は涙が止まらなくなつていた。

「なんだか、このお題を見た時に、千聖のことしか考えられなかつたんだよね」

「ふふつ、雅、変わったわね」

「そうかな？」

「ええ、別人かと思うぐらいに」

そう言つて二人で笑つた。でも、本当に変わったと思う。音楽のこと意外全く興味が無い雅。その常識が、少しずつ変わつていつてゐる。この半年で、まあ、言い方はおかしいかもしれないけど、人間らしくなつたと思う。音楽意外に対する感情を知らなかつた雅が、段々と感情に目覚めてきてる。素晴らしい変化じゃないだろうか？

「そういえば、優勝チーム賞とMVP賞で、商店街で使える無料券二枚もらえたんだよね。折角だから、羽沢珈琲店でも寄つて行かない？」

「ふふつ、雅の奢りね」

「あはは、そうだね。正確には違うけど」

そう言つて笑いながら、私達は商店街へと足を向けた。本当に、素晴らしく愛しい一

日になった。今日という一日が、素敵な思い出として私達にとつての宝物になったことだろう。勿論、私にとつての一番の宝物は雅だ。これだけは、この先何年、何十年経つても変わらないだろう。

だけど、物事は基本的に常に変化を遂げる物。今までは常識と思つていた物が、今まではありふれた日常と思つていた物が、突然思いもよらぬ変化を遂げることもあるかもしれない。だけど、それでもきつと、私達の愛には変化は訪れないだろう。これは決して願望でも憶測でも無い。事実だ。

根拠を述べろと言われたら、そんな物は無い。いえ、見せない。あえて言葉にするなら、魂がそうできている、といったところだろうか？自分で言つておいて、頭がおかしくなったのだろうかと思う。だけど、そんなものなのだ。根拠なんていらぬのだ。私達だけがそれを知つていればいい。

誰に言つたつて、馬鹿らしいと思われのが眼に見えているのだから。まあ、そういった人達も、数十年もすれば気づくかもしれない。ああ、本当に事実だったんだなと。そう思わせてみせるように、これからも何十年、この命尽きるまで幸せを紡いでいこう。そう私は密かに、不変の愛に誓うのだった。

第45演目 Y. O. L. O
!!!!!!

今年も残り一ヶ月を切った。

外気はすっかり冷たくなり、場所によつては連日雪が降り続けている地域もあるらしい。そんな冬色に染まったある日、僕は事務所からの招集を受けた。なんでも大事な話があるらしい。

僕にはその話について全く検討が付いていなかった。パスパレ関係のことならば、僕より先に千聖達に話が行くだろう。だけど、千聖は事務所から何も話を聞いていないらしい。となると、おそらく僕の仕事のことにについてなんだと思う。新しい仕事の予定でも入ったのだろうか？ だとしても、基本的にはその場合、マネージャーさんがメールで教えてくれるようになっていた。

事務所に直接呼び出すなんて、そんなこと今まで数えるほどしか無かった。それこそ、非常に大きな仕事が入ったときぐらいだ。まさか、年末恒例のあの歌番組へのオファーが来たのだろうか？ いや、でもあの番組は既に参加者全員公表されている。いつかは出てみたいけど、今年は無理だろう。

となると、何か大きなライブでも決まっただろうか？ 今のところ、クリスマスに大き

なライブを行うことが決定しているが、その先はまだ未定だ。来年最初のライブでも決まったのだろうか？まあ、いくら考えても答えはわからない。結局、直接聞いてみるしか無いのだろう。そうこうしている内に、事務所に着いた。僕は、ソワソワとした気持ちでその扉を開けた。

「おはようございます」

「あ、雅さんおはようございます！朝からお呼び出ししてすみません！お掛けになって下さい！」

そう言つて、事務所内のソファアに座るよう促してくるスタッフさん。何も断るような要素も無いので、それに従いソファアに座る。相変わらず、事務所内では多くのスタッフさんが慌ただしく駆け回っている。この事務所ではいつものことだ。よっぽど仕事が多いのだろうか？儲かっているようで良いことだろう。

「さて、早速ですがお話に入らせていただきます」

そう言つて、出迎えてくれたスタッフさんが話を持ちかけてくる。どうやら、今日はこのスタッフさん一人が話をしてくれるらしい。この人のことは知っている。パスペレ関係の仕事を手先に受け持ってくれているスタッフさんだ。しかし、そんな人が僕に一体どんな話があるというのだろうか？

「今回、雅さんにお話することというのは、Pastel*Palettesのことで

す

「パスパレの?」

彼が出てきたことで、そうじゃないかと思っていたが、やはりパスパレ関係のことらしい。そして、千聖達より先に僕に対して話すとなると、間違いなく彼女達の楽曲に対する話だろう。なんだろう? 次の楽曲に関する要望とかだろうか? だとしても、態々直接呼び出して話すような事でも無いだろう。ダメだ。考えてもわからない。

「はい。実は、彼女達の楽曲を他の方に作っていただくかと思ひまして」

「え?」

そして、考えていた矢先に言われた言葉に、僕の理解は追いつかなかった。彼女達の楽曲を他の人が作る? それってつまり、僕の曲以外の曲が彼女達の歌になるっていうこと。それってつまり・・・

「僕の曲はもう要らないってことですか!」

「いえいえそうじゃないですよ! 最後まで話を聞いて下さい!」

興奮した僕をスタッフさんが宥めようとしてくれる。だけど、こんなことを言われて落ち着いていられるわけがない。僕の楽曲はもう用済みと言われたようなものだ。確かに、僕の楽曲のレベルは決して高くないかもしれない。仁さんに比べれば雲泥の差だろう。だからと言って、引き下がってなんていられない。僕にだって、音楽家としての

プライドがあるのだから。

「これが落ち着いていられるわけ無いでしょ!？」

「いいえ、落ち着いて下さい! いいですか! 何も今後ずっと他の人にまかせるわけではありません! 一曲だけ、一曲だけです! 次に彼女達に歌っていただく一曲を任せるだけですから!」

「一曲?」

その言葉を聞いて、少しずつ僕の頭に上つていた血が抜けていく。なんだ。一曲だけだったのか。てつきりこれからの全ての楽曲かと思つていた。そもそも、僕がそう勘違いしたのも全部……

「言い方が悪すぎますよ……」

「あはは、すいません」

そう。スタツフさんの言い方が悪い。あんな言い方をされたら、普通は勘違いしてしまう。とはいえ、本音を言うと一曲だつて譲りたくないという気持ちがある。まあ、スタツフさんにだつて何か理由があるはずだ。それを聞いて、納得できるような内容で無ければ再度抗議してみよう。

「それで、理由を聞かせていただいても?」

「理由? そんなものあるわけ無いじゃないですか」

なるほど。あるわけが無いのか。なるほどなるほど。そんな理由があったとするならば、僕が取る道は一つ。

「それだったら徹底抗戦ですよ！絶対他の人に譲りませんからね！」

「あはは、冗談ですよ冗談。ちゃんと説明しますよ」

全く、冗談にしても質が悪すぎる。これで本当に碌でもない理由だったら流石の僕でも我慢ならない。真面目な理由を期待して、僕はスタッフさんの話に耳を傾けた。

「端的に言うのと、彼女達の成長の為です」

「成長？」

「そうです。成長です。雅さんも含めて、皆さんは本当に良く頑張つて下さっています。雅さんが作るアイドルソングも、磨きがかかってきていて素晴らしいの一言です。ですが、まだ彼女達にはバンドとしての経験値が圧倒的に足りない。そこで、少しでも皆さんの経験値上昇につなげるために、二つの計画を用意しました。それが、年内に行われるライブと、この楽曲提供の話です」

なるほど。経験からくる成長か。確かにそれなら納得もできる。確かに、他の人が作る楽曲を演奏することは、僕が作る楽曲を演奏するのともまた毛色が違って、新しい成長にも結びつくかもしれない。

「それに、これは雅さんにとっても貴重な経験になると思いますよ」

「僕にとつても?」

「ええ。今度楽曲作りを依頼しようと思っっている方は、私の調べによると、楽曲提供の経験が無いんですよ。なので、そのノウハウや楽曲作りのアドバイスを是非雅さんにお願ひしたいと考えています。教える事って、以外と良い経験になるんですよ。これって、雅さんの成長にも繋がらないでしょうか?」

なるほど。確かに、教えるという行為は、自身の復習や、新しい発見にも繋がりが、以外と良い経験になるものだ。スタツフさんが言うことにも一理ある。

「そうですね。そういうことなら、僕は大丈夫です」

「そうですね! そう言っていたらと有り難いです」

「それで、その楽曲を提供していただく人って誰なんですか?」

「雅さんもご存知かと思ひます。Afterglowの皆さんです」

Afterglowか。正直、意外な選出だと思ふ。彼女達の楽曲は王道ロックだ。アイドルとは似ても似つかない。まあ、それを言うなら僕もロック主体のシンガーな訳だけだ。

「彼女達の楽曲は、等身大の自分達を書いた歌詞が魅力です。そんな楽曲を、演奏していただくのは、彼女達にとつても素晴らしい刺激になるのではないかと思ひます」

なるほど。確かに、それは彼女達の魅力の一つだろう。あのガルジヤムの音源で、僕

は初めて彼女達の曲を聴いた。そして、思わず引き込まれた。Roseliaの皆とはまた違った魅力。ありのままの自分達を書き表した歌詞と、五人の揺るがない絆。確かに、彼女達の曲を演奏することは良い刺激になるだろう。僕も、彼女達に教えるのが楽しみになってきた。きつと、僕にとつても良い刺激になるだろう。

「それで突然なんですけど、雅さんは彼女達の連絡先をご存知ですか？」

「え？あ、はい。知ってますけど」

「それは良かった。でしたら、雅さんから彼女達に、明日この事務所に来て欲しいと伝えていただいてもよろしいでしょうか？詳しい事情についてはこの場で彼女達に説明しますのです」

それぐらいならお安いご用だろう。パスパレの皆に伝える必要もあるし、明日この場で皆に説明すればいいだろう。うん。今から明日が楽しみになってきた。

「わかりました。彼女達には僕から連絡を取っておきます」

「はい！是非お願いします！それでは、私からのお話は以上です！明日もよろしく願いますね！」

そう言つて、スタツフさんは慌ただしく事務所の奥へ駆けていった。他にも仕事があるのだろう。僕も、邪魔にならない内に帰った方が良さそうだ。それにしても、明日が楽しみだな。一体、どんな刺激が待っているだろう？きつと、間違いなくこれは良い経

験になるだろう。僕は、そのまま期待に胸を膨らませて事務所を後にするのだった。

次の日になった。

A f t e r g l o wの皆には、既に事務所に来てもらえるように了承は取っている。そして、彼女達が事務所に来る前に、パスパレの皆には事情を説明してある。皆、事情を説明したら好意的に受け取ってくれたと思う。新鮮な気持ちになって、楽しみだと言ってくれていた。

「失礼します」

そして事務所で待っていると、A f t e r g l o wの皆がやってきた。待ち合わせ時間ぴったり。素晴らしい時間調整だ。

「あ、皆いらつしやい。急に呼び出してごめんね」

「そんな、雅様からのお誘いを断れるわけじゃないじゃないですか!」

「ひーちゃん、昨日は興奮して、全然眠れなかったみたいですよー」

「も、モカ!それは言わない約束でしょ!」

「どうやら、皆いつも通りの様子だ。急な呼び出しだったけど、不満そうにしてる子は一人もない。正直、機嫌を損ねてたらどうしようかと考えていたから、安心した。」

「それで、あたし達を呼んだ理由は？」

「はい、それは事務所スタッフの私から説明させていただきますね」

「そう言つて、僕の後ろからスタッフさんがひよつこりと顔を出す。事務所にやつてきた彼女達の対応を僕がして、奥でスタッフさんとパスパレの皆で打ち合わせをする形になつていた。どうやらその打ち合わせも一区切り着いたらしい。奥からパスパレの皆も出てくる。」

「あ、皆も来てたんですね！」

「あ、つぐちゃんだー！やっほー！蘭ちゃん、るんつてくる曲作つてね！」

「曲を作る？」

「日菜ちゃん、まだ蘭ちゃん達は事情を知らないから、今から説明するんだつて」

「あれー？そうだっけー？」

「どうやら日菜ちゃんは、打ち合わせをあまり聞いてなかつたらしい。まあ、彼女にとつてはAfterglowが作つてくれる曲には興味があるけど、そこまでの過程には興味が無かつたのだろう。打ち合わせも話半分に聞いていたに違いない。」

「それで、曲を作るつてどういうことなんです？すいません、全然事情がわからなく

て」

「あ、ごめん巴ちゃん。事情がわからなくて当然だよね。今から説明するね」

「はい、それでは改めまして説明しますね。単刀直入に皆さんにさせていただきたいことを述べますと、ここにいるパスパレに楽曲を提供していただきたいのです！」

「楽曲を、提供？」

「そうです！理由としましては、パスパレの皆さんの成長促進のためです！皆さんもご存知かと思いますが、パスパレの楽曲は全て雅さんが手がけてくれます。それはそれで良いのですが、ここで一つ皆さんに殻を破って、更なるレベルに上がっていただきたいのです。そのために、雅さん以外の別の誰かに楽曲を提供していただくのは、良い刺激になるんじゃないかと考えました！」

「なるほど、Pastel*Palettesとしての事情はわかりました。それで、どうしてあたし達なんですか？楽曲提供なら、他にも良いバンドはいくらでもあると思いますけど」

「それは、皆さんの楽曲に感銘を受けたからです！等身大の自分達を描いた歌詞と、その力強いサウンドと、息びつたりなパフォーマンス。素直に素晴らしいと思いました！そして思ったんです。このバンドの楽曲を提供してもらえたら、きつとパスパレの皆さんにも最高に良い刺激になると！」

「あはは、そこまで言ってもらえるとは嬉しいですね。アタシ達を選んで下さった理由もわかりました。それじゃ最後に、アタシ達にとって今回の話を受け入れるメリットを聞いてもいいですか」

「まず第一に、皆さんの名声向上ですね。ご存知の通り、パスパレの皆さんは芸能人です。通常の高校生バンドよりも、その発信力は高いです。そんな彼女達に楽曲を提供したとなれば、当然その名前も全国に知れ渡ることになるでしょう」

「名声、ですか。でも、第一にすることは他にもあるんですよ？」

「はい。これも皆さんにとつては魅力的だと思いますよ。それは、雅さんからの指導を受けられることです」

「え？」

「マジですか!？」

「へー」

「雅さんが？」

「え、え、ええええええええええええ!？」

五者五様の反応を見せてくれる A f t e r g l o w の皆。そんなに驚くことなのか？頼まれたらいつでもしてあげるんだけどな。

「ひーちゃんうるさすぎー」

「だって、だって、雅様が教えてくれるんだよ!? こんなに嬉しいことないよー!」

「あはは、まあ、それぐらいは当然だよ。皆、楽曲提供の経験は無いよね? だったら、先輩としてきつちりコツとか教えてあげるよ」

「そういうことです。以上が皆さんに与えられるメリットです。どうでしょうか? 皆さんにとつても悪くないと思うのですが?」

「うん! 今すぐ受けよう! こんなチャンス滅多に無いよ!」

「そうだね。私もやってみたいかな?」

「うーん、あたしは、皆におまかせで、いいかなー」

「……どうする? 蘭」

「……一日だけ、考えさせてください」

「ええ、いいですよ。急にお願ひしたのはこちらなのですから、無理に今答えを下さいなんで言いません。皆さんで考えて決めて下さい。良いお返事いただけることを期待しています」

「ありがとうございます。行こう、皆」

「え? ちよつと蘭——! 受けようよ——!」

その言葉を最後に、Afterglowの皆は事務所を出て行った。明日、きつと返事を聞かせてくれるのだろう。

「それじゃ、皆さんも今日は解散ということ。明日も同じ時間に集合をお願いします」
そして、パスパレの皆も事務所を次々に出ていった。残っているのは僕と千聖だけだ。

「それじゃ、僕達も帰ろうか」

「・・・ええ、そうね」

そして、僕達も二人並んで事務所を後にする。Afterglowの件は一日お預けを食らったけど、それも仕方ない。急に決めてくれと言うのが無理な話だろう。だけど僕は、彼女達がこの話を断るとは微塵も考えていない。こんな刺激的な話、音楽に携わる者なら断れるはずが無いだろう。僕は、明日からどうやって皆を指導するかを考えながら、寒空の下を歩くのだった。

そして次の日、僕達は昨日と同じ時間に事務所に集まっていた。

そして、Afterglowの皆が来るのを待つ。昨日の内に、蘭ちゃんからは連絡が来ており、今日も同じ時間に事務所に来てくれることになっている。そして、もうま

もなく約束の時間になろうとしていた。

「失礼します」

そして昨日と同じように、Afterglowの皆が時間通りにやってきてくれる。その様相からは、どこか決意のようなものを感じ取ることが出来た。

「昨日のお話、受けさせて下さい」

そして、蘭ちゃんの口からは予想通り最高の答えを聞くことができた。予想していたこととは言え、直接その答えを聞いて少し安心してしまった。

「本当に!?良かったあ、断られたらどうしようかと思つたよお!」

「あはは!彩ちゃんは今配性なんだから!蘭ちゃん達なら受けてくれるって、あたしはわかつてたけどな!」

「皆さんが受けて下さるのなら、正に鬼に金棒ですね!」

「イヴさん、ジブン達は決して鬼という訳ではないのですが・・・」

パスパレの皆もどうやら皆が受けてくれるとわかつて安心したようだ。だけど、ここからが本番だ。Afterglowが提供する楽曲、それが一体どんな曲になるのだろうか?僕がきつちり舵取りしてあげないと。

「それじゃ早速、作曲に取りかかろうか。皆はいつもどこで作曲してるの?」

「学校の屋上だったり、つぐの家でだったり色々ありますけど、今日はこの後いつも通つ

てるスタジオを予約してます」

「うん、それじゃ早速そのスタジオに行ってみようか!・・・と言いたところだけど、まずはパスパレの皆のレッスンをみてみない? 楽曲を提供するには、やっぱり提供する人のことを知るのも大事だと思うんだよね」

「なるほど、確かに。それじゃ、彩さん、見させていただいてもいいですか?」

「うん、まかせて! それじゃ、事務所内のスタジオに移動しようか」

そして、彩ちゃんの後ろに続いて皆事務所から出て行く。まずは曲作りのための下準備だ。これもまた、彼女達には良い刺激になるかもしれない。互いに刺激し合って、お互い成長してほしい。そう思いながら、スタジオに向かうのだった。

スタジオに着くなり、早速パスパレの皆はレッスンを始めた。楽器の演奏、ボイトレ、筋トレと、Afterglowの皆が想像していたよりもハードな内容だったのだろう。蘭ちゃん達は口をポカンと開けて見入っていた。

「どう? 皆想像以上にハードなレッスンをしてるでしょ?」

「はい。正直驚きました。いつもこんなハードなレッスンを？」

「うん。確かにいつも皆ハードなレッスンをしてるけど、今はそれ以上に皆追い込んでるね。年末に、皆ライブをやるんだ。それに向けて追い込みをかけてる状態だよ」

「あ！雅様との合同ライブですよね！私もチケット欲しかったんだけど、取れなくて……」

そう。ひまりちゃんが言った通り、今回僕とパスパレの皆は合同ライブをすることになった。その話題性は十分で、チケットの入手難易度も相当なものになっている。

「あー、そういえばあこがチケットが取れたって大はしやぎしてたな」

「え!? あこちゃん取れたの!?! ううっ、裏切り者!」

「あたしはひーちゃんに、数えるのもめんどくさいぐらいに、チケットがチケットがつて聞かされたよー」

「だって、本当に欲しかったんだもん!」

「ひまり、静かに。皆のレッスンの邪魔だから」

「うっ、ごめんなさい……」

「あはは、ひまりちゃん、元気出して?」

どうやら、ひまりちゃんは相当ライブに来たかったらしい。だったら、この報酬は彼女にはちょうど良かったかもしれない。きっと、やる気の元になってくれるだろう。

かに見守つてよう。

「あれ？彩さんは何をしてるんですか？」

蘭ちゃんにそう言われて、彩ちゃんの方に目を向ける。そこには、鏡に向かつてブツと何かを言う彩ちゃんの姿があつた。

「ああ、あれはMCの練習だよ」

「MC？アイドルってそんな練習までするんですか？」

「あはは、普通はしらないと思うけどね。彩ちゃんは特別だよ。彩ちゃんは、言うことを決めておかないと、本番で上手くしゃべれなくなっちゃうんだよね」

「おー、なんだか彩さんらしいですねー」

「だな。で、蘭どうする？レッスンは十分見させて貰つただろう？このままスタジオオに行つて作曲するか？」

「待つて。最後に、皆の話を聞いてみたい」

「皆の話か。いいよ、皆！ちよつと集まつて！」

そう僕が呼びかけると、皆レッスンを中断して集まってくれた。呼んでおいてなんだけど、中断させてしまつてなんだか申し訳無い。

「どうしたの雅君？」

「うん、皆がパスパレのことをもつと知りたいから、話を聞かせてほしいんだつて」

「お話ですか？なんの話をしましょうか？」

「うーん、あたし達のことを知りたいんだったら、やっぱり結成の時の事じゃない？」

「え、あの話……」

「あまり思い出したくありません……」

結成の時の話か。確かに、あれには僕達の苦い記憶がたっぷり詰まっている。皆、話しながらないのも無理はないだろう。

「結成の話ですか？」

「……そうね。あまり良い話ではないのだけれど、聞いてくれるかしら？」

その千聖の言葉に続いてパスパレの皆は、その壮絶な結成話を語り始めた。それを終始無言で聞き入ってる Afterglowの皆。時折、息を飲む音や、ひまりちゃんの泣きじやくる声なんか聞いてくる。僕も改めて聞いて、あの時の思い出が浮かんでくる。

「……とまあ、こんなものですかね？以上がジブン達の結成話でした」

「ヒマリさん、大丈夫ですか？」

「ううっ、ひつく、だ、大丈夫だよ……」

「あの、聞いておいて、なんです、そんな辛いお話をさせてしまいました……」
「巴ちゃん気にしないで。確かにあの時は辛かったけど、今はあの出来事があって良

かったなーって思うの。あの出来事が無いと、たぶん今のパスパレは無かったと思うから」

彩ちゃんの言う通りだ。あの騒動は確かに辛かった。だけど、あの騒動があったお陰で今のパスパレがあるというのも事実だ。それに、あの事件のお陰で、僕と千聖も前に進むことができた。今では本当に感謝さえしている。僕達を成長させてくれてありがとう。

「……ありがとうございます。作曲の参考にさせていただきます」

「うんー！蘭ちゃん！お願い！」

そう言つて、蘭ちゃんを先頭に皆でスタジオを後にする。それに僕も付いていく。この後は、Afterglowの皆にレッスンをしないとイケない。

「なんか、本当に凄い話だったな」

「うーん、モカちゃんも流石にビックリしたかもー」

「ううっ、思い出したらまた涙が……」

「雅さんも、大変だったんですね……」

つぐみちゃんがそう言ってくる。確かに大変だったのは間違いない。あの時は、連日マスコミに捕まって仕事どころじゃ無かった。家から出るのすら困難な日が続いていた。まあ、ほとぼりが冷めるのも早かったけど。

「蘭、この後はスタジオに直行でいいよな？」

「うん。早く曲作りに取りかかりたい」

「・・・あ、ごめん！私先に寄りたいところあるから先に行つて！すぐに行くから！」
そう言つてつぐみちゃんはずつていつてしまった。まあ、彼女のことだから本当に直ぐにくるだろう。先にスタジオに向かつてしまおう。

「むむむー。何やらつぐがつぐつてゐる予感がー」

「馬鹿なこと言つてないで早く行くよ」

「むー蘭がひどいこと言つたー。モカちゃんの心はセンチメンタルなんだけどなー」

そんな、仲睦まじい皆の会話を聞きながら蘭ちゃんの先導に従つてスタジオへの道を歩く。なんだか、僕も早くギターに触りたくなつてきたな。そんなことを考えながら、目的地へと向かうのだった。

「曲に色はいらない、ですか」

スタジオに着いた僕達は早速皆にレッスンを行つていた。今教えているのは、アイドル

ルソングの作曲のコツについてだ。

「そう。まあこれは僕のアイドルソングの先生からの教えそのままだけだね。アイドルソングに関しては、曲に色を付けるのはアイドルそのもの。そこに、作曲者側の色は一切いらぬ。この教えが凄く好きなんだよね。言われてみて、実際に作ってみてわかるよ。アイドルソングの奥深さが」

そう。アイドルソングは本当に奥が深い。何曲も実際に作ってみてわかる。自分の色を一切加えない分、逆に多岐に渡って曲を作ることができる。それでいて、作った曲があつという間にパスパレの皆の手によって、個性豊かな、カラフルな色を付けられるのだ。その過程が堪らなく気持ちいい。今ではすっかりハマってしまっている。

「自分の色を出さない・・・難しそうですね」

「あ、蘭ちゃん達は気にしなくていいよ？今のは専属で作曲している僕の作曲スタイルだから。スタッフさんも言ってたでしょ？皆の等身大な曲が好きだって。その色をふんだんに加えて良いよ。むしろ、いつも通りの曲調、歌詞で良いよ。むしろ、その方が良いと思う」

スタッフさんもおそらく、それを望んでいるだろう。Afterglowという色が最初から付いた曲に、パスパレの色をどのように加えるか。それが、パスパレの皆への試練のようなものだろう。その答えを見つけることが出来たならば、きっと彼女達はま

た一歩成長することが出来るはずだ。

「あたし達の、曲ですか」

「アタシ達の曲で、パスパレに提供する……やっぱあの話を曲に取り入れるのが良いのかな」

「でも、あんな辛い話をどうやって曲にするの？私、出来る気がしないよー！」

「うーむ、これは難問ですなー」

そう言つて、ああでも無いこうでも無いと唸る皆。ちよつと難しく考えすぎじゃないかと思うんだけどな。

「そうだね。因みに、皆はあの話を聞いて、どう感じた？」

「あたしは、あたし達が今まで暮らしてきた世界は、なんてちっぽけだったんだらうつて思った」

「アタシも同感だな。アタシ達の今までの歩んできた道とはスケールが違ったもんな」

「うん。私達のバンドつて、本当に平和だったんだなーつて思った」

「平和、か。皆はバンド結成してから何も障害とか無かったの？」

「そんなことは無かったですよー。蘭と巴が大喧嘩したりー、つぐがつぐりすぎて倒れたりしてー、大変だったなー」

「も、モカ！それは今はいいじゃん！」

「あ、あはは。そんなこともあったっけなー」

「でも、パスパレの皆のお話を聞いたら、そんな障害も小さく見えちゃって」

「小さく見えてもいいじゃん。障害の大小はこの際関係無いよ。そんな障害があっても、結局皆は五人でバンドを続けてるんでしょ？ だったらそれでいいじゃん。大小関係無く、絆っていうのは障害を乗り越えれば乗り越えた分だけ強くなるんだよ。乗り越えたっていう、その事実が一番大事なんだ」

僕と千聖も、出会ってからこれまで、多くの障害に阻まれてきた。その度に、二人の力で乗り越えてきた。だからこそ、今では誰にも負けない強い絆で繋がっている。この絆は、まあ、種類は違うとはいえ *A f t e r g l o w* の皆にも負けるつもりはない。

「乗り越えた事実……」

「なんか、考え方が大人ですね」

「さ、さすが雅様です！」

「身長割に大きく見えますな——」

「身長はほつといて！」

これでも、毎日牛乳を飲んだり、陰ながら努力をしてるんだ。それでも伸びないものは伸びないんだから仕方ない。

「……うん、良い詞が書けそうな気がします。ありがとうございます」

「気にしないで。力になれたようで何よりだよ」

そう言つて、蘭ちゃんは今度とにらめっこしはじめた。その手はしきりにノートに何かを書き込んでゐる。本当に良いイメージが浮かんできたんだろう。心なしか、蘭ちゃんも楽しそうに見える。僕も蘭ちゃんを見ると、創作意欲が爆発しそうだ。僕も同じように、ノートにペンを走らせる作業を始めた。

「おー？ 雅さんも曲作りですかー？」

「うん。僕も新曲を丁度作ろうと思つててね。とは言つても、僕自身の曲じゃなくて、スパレの曲なんだけどね」

「へー、今度のライブでやるんですか？」

「そうできたらいひなつて思つてるよ。楽しみにしててね」

「もちろんです！ 全力で応援しますから！」

「あはは、ありがとう」

ひまりちゃん達に応援されつつ、作曲を僕はする。その合間にも、巴ちゃん達の演奏に対するアドバイスも行つていく。真剣に皆聞いてくれるので、アドバイスする方としても教え甲斐がある。そして、そんなことを数十分続けているときだった。

「遅くなつてごめんさい！」

つぐみちゃんがやつてきた。どこに寄つていたのかはわからないけど、その流してい

る汗から急いでできたことはわかる。

「あー、つくおそーい」

「ごめんモカちゃん。お詫びに、山吹ベーカリーでパン買って来たよ」

「うむ。許してしんぜよー」

「あはは、そりゃモカには効果覲面だな」

「なんで毎日そんなにパン食べて太らないの？本当に羨ましいんだけど・・・」

「それはー毎日ひーちゃんが眠ってる間にあたしの摂取カロリーをひーちゃんに送りつけてるからだよー」

「怖いこと真面目に言わないで！」

摂取カロリーを送りつけるって、どんな魔法を使っているんだろうか？神様でも無い限り不可能だろう。実はモカちゃんの正体はモカ神様っていう神様だったりして。そんなわけ無いか。

「あれ？雅さんも作曲ですか？」

そんな馬鹿なことを考えていると、つくみちゃんが僕のノートを覗き込んでいた。作詞自体は、既にイメージはできあがっていたからスムーズにできている。もう、ほぼほぼ完成している状態だ。

「うん。僕もパスパレの皆に一曲贈ろうかと思ってね」

「へー。ふふっ」

と、僕のノートを覗き込んでいたつぐみちゃんが急に笑い出した。なんだろう？何かおかしいなフレーズでもあったのだろうか？

「どうしたの？何かおかしいなところでもあった？」

「いいえ、ごめんなさい。ただ、やっぱり雅さんは雅さんだなって思つて」

僕は僕？よくわからない。まあ、歌詞におかしな所があつたわけでも無いみたいだし、別にいいや。とそこで、ふと時計を見る。あらもうこんな時間か。

「ごめん皆。僕これから Rosealia と合同練習の予定が入つてるんだよね。先に帰らせてもらうよ。本当にごめんね？」

「・・・湊さん達と？」

何気ないことを言つただけのはずだった。友希那達と練習する予定があるのも事実だ。その事実を言つただけなんだけど、なんだろう？なんとなく蘭ちゃんの様子が少し変わったような気がする。

「湊さんとは、いつも練習を一緒にしてるんですか？」

「え？あ、うん。週に一度はしてるかな？」

「週に一度雅様と練習!?あ、あこちゃん羨ましますよ・・・」

「あはは、そういえばあこのやつそんなこと言つてたな」

「紗夜さんからもこの前聞いたよ。凄く勉強になるから有り難いって」

「おー、これがRoseliaの秘密というやつですかー？」

秘密ってほどでも無い気がするけどな。現にあこちゃんや紗夜ちゃんも普通に話してるみたいだし。そういうえば、友希那もこの前雑誌のインタビュで他のバンドが取り入れてないような練習を聞かれて、僕との合同練習って答えたって言ってたっけ。それは取り入れてないじゃなくて、取り入れれないの間違いでしょってツッコんだ覚えがある。

「・・・なら、あたし達とも合同練習してください。今回の件が終わってからも、ずっと」「え？あ、うん。都合が合えば、いつでもするよ」

そういうえば、千聖が言った気がする。蘭ちゃんは、友希那にライバル心を燃やしてるって。なるほど。だから友希那達と合同練習してるって聞いて対抗心を燃やしてるわけか。まあ、合同練習するぐらい、どうってことないし、別にいいけど。逆に、彼女達の音楽は、聞いてて好きだし、これも僕の成長に繋がるかもしれないと考えると、ありだと思う。

その後は、明日何時に集合するかを取り決めて僕はスタジオを後にした。しばらくはAfterglowの皆とは毎日レッスンすることになる。そして今回の一件が終わってからも、彼女達と定期的に合同練習する約束をしたし、彼女達と関わる機会も自

然と増えるだろう。僕は、明日は彼女達にどんなことを教えてあげようかと考えつつ、Roseliaが待つスタジオへと向かった。

蘭ちゃん達とのことを友希那に言ったら、合同練習の頻度を増やそうかと言われたことを追記しておく。僕の都合も考えて欲しい。

それから数日が経過した。その後も、Afterglowの作曲は順調に進み、ついに完成した曲のお披露目をする事になった。

「これが私達からPastel*Paletteに贈る曲、Y. O. L. O!!!!です」

そう言つて、蘭ちゃんが予め録音してきた音源を流す。事前に聞かせてもらつてたけど、本当に良い曲に仕上がった。Afterglowの良さをふんだんに詰め込んだ至極の一曲に仕上がっている。はつきり言つて、大好きな曲だ。

「す、凄い！こんな良い曲、本当に私達がもらつていいの？」

「勿論です。そのために作つたんですから」

「エモーい曲ができましたなー」

「Y. O. L. O!!! どういう意味なのでしょう?」

「You Only Live Onceの略で、人生は一度きりつて意味です! 皆で一生懸命考えました!」

「つぐつてば、一番張り切つてたもんね」

「だな! 完成が早くなつたのもつぐのお陰だしな」

「スーパーツぐつてたもんね」

「だ、だつて大事な初日に遅れちゃつたんだもん! 遅れを取りもどさないとして頑張るよー!」

「あはは、つぐみちゃんらしいね」

「皆、本当にありがとう! この曲、大事にするね!」

パスパレの皆の顔には、自然と笑顔が浮かんでいた。本当に良い曲は、無条件に人を魅了し、笑顔にする。皆が力を合わせて作ったこの曲が、それだけ良い曲に仕上がったという証拠だろう。本当に、僕が提供して欲しかったぐらいの名曲だ。僕も彼女達に負けてられないな。そう思い、僕も一枚のCD音源を手に取るのだった。

第46演目 ゆら・ゆらRing-Dong-Dance

e

その日の雅は、少し様子がおかしかった。

まるで遠足前の子供かのように、そわそわしている様子。いてもたってもいられないような、落ち着きのない様子。よつほど、楽しみなことがあったのだろうか？その様子は顔にまで現れていた。

「雅、何かいいことでもあったの？そんなニヤついて」

「うん、そうだね。少し楽しみなことがあったんだけど、内容は明日まで秘密ね」

なんだろう？ 凄く気になる。とは言っても、今の私にはあまりその内容に興味は湧かなかった。実は、楽しみで楽しみでソワソワしているのは私も一緒だった。雅みたいに、顔や態度には出していないつもりだけど、見る人が見ればわかるらしい。今日も日菜ちゃんに突っ込まれてしまった。あの子は人の気持ちには疎いのに、妙に鋭いから困る。

何故ソワソワしているかというと、先日雅との合同ライブが発表されたからだ。雅と同じステージで演奏をすることができる。そう考えただけで、ソワソワが止まらない。

文化祭でのライブとは訳が違う。あの時はミニライブだったけど、今回はフルライブだ。一緒に演奏できる曲数、時間から、規模までも何もかもが違う。これで、落ち着けと言う方が無理な話だ。

ライブに向けたレッスンでも、気持ちが悪く前に出すぎて、演奏が走りすぎていると珍しく担当の先生に注意されてしまった。その時、先生が珍しい物を見るような顔をしていたのが印象的だった。最も、他のパスパレの皆も同じ顔をしていたけれども。

それもそうだろう。私自身、演奏技術と、リズムの正確性に関してはメンバーの誰にも、たとえ日菜ちゃんであつても負けていない自信がある。普段のレッスンでも、注意を受けたことなど、只の一度も無かった。そんな私が今回初めて注意されたのだから、そうなるのも不思議なことではない。

早くライブ当日にならないかと、そんなことばかり考えて過ごす毎日。といつても、ライブ事態まだ先の話だし、セトリすらまだ正確には決まっていけない。なんでも、雅がライブに向けてどうしても一曲作りたいらしくて、その完成を待っている。とは言つても、他の大半はセトリも決まっているのだから、ライブに向けての練習も順調だ。

だからこそ、雅が明日どんなことを言ってきたとしても問題は無い。その時の私はそう考えていた。その時の私は。

次の日、私と雅、そして他のパスパレの皆は事務所に集合していた。なんでも、今から昨日雅が言つてた内容というのを教えてくれるらしい。どうやら、雅のソワソワの理由はパスパレにもつながるものだったらしい。そして、その内容を聞いて、私は思わず説明してくれたスタッフに内容を聞き返してしまった。

「あの、すいません。もう一度聞いてもいいですか？」

「おや？千聖さんが聞いていなかっただなんて珍しいですね。大丈夫ですか？体調でも悪いのでしょうか？」

「いいえ、大丈夫です。ちょっと考え事をしていただけですから」

「だったらいいんですけれども。最近気温も下がってきてますから、体調管理には気を付けてくださいね。では、もう一度説明します。皆さんが次に発表する楽曲をAffte rglowの皆さんに作っていただくかと考えています」

やはり、聞き間違いではなかった。次の楽曲を雅が作らない。そのことが衝撃的すぎて、思わず聞き返してしまった。私がパスパレとして、アイドルとして活動してもいいと考えたのは、その楽曲を雅が作ってくれると知ったからだ。更に言うなら、雅以外が

楽曲を作るなら、アイドルとしての活動を辞退していたかもしれない。そう考えるほどに、私にとっては重要な案件だった。

今でこそ、パスパレの皆が大事に思っているから、辞めるという選択まではいかない。それでも、嫌なことに変わりはしない。それが例えAfterglowの皆だとしても、私にとって譲りたくないポイントだった。

「ミヤビさんじゃなくて、Afterglowの皆さんにですか？」

「理由をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「理由は単純。皆さんの成長のためです。皆さんは結成からこれまで、雅さんの作った楽曲しか演奏したことがありません。もちろん雅さんの楽曲はどれも素晴らしいので、それでも問題無いのですが、皆さんが更なる成長を遂げるためにも、ここで今までと違う、新たな刺激を受けてもらおうと考えました。それが、他バンドからの楽曲提供です。そこで目を付けたのが、Afterglowの皆さんでした。Afterglowの皆さんが書く、等身大の歌詞と、王道的ロックなメロディーが皆さんには良い刺激になって、成長の促進になるんじゃないかと考えたわけです」

「理由はわかりましたけど……雅君はそれでいいの？」

「大丈夫だよ彩ちゃん。僕はAfterglowの皆に楽曲提供のことや、作曲に関してレクチャーすることになってるんだ。教えるってことは、僕にとっても良い刺激にな

るし、良い勉強にもなるんだよ？だから、僕としてはアリなんだよ」

確かに、雅の成長のためには良い刺激になるのかもかもしれない。それはわかっている。わかっているし、雅のことを思えばそうするべきなのだろうけど、受け入れたくないと思っている私がいる。

「へー。いいんじゃない？なんだか面白そうだし、あたしはやりたいな」

「私も、やってみたいかな？少し不安はあるけれども、頑張ってみるよ！」

「私もやってみたいです！成長のために、いざ尋常に勝負です！」

「イヴさん別に勝負をするわけではないですよ。ジブンも、そういうことなら賛成ですね。なんだかワクワクしてきますね！ふへへ」

どうやら皆は賛成らしい。まあ、聞いたところ特にデメリットも無く、メリットしか無いように感じるので、それも当然だろう。皆にとっては、断る理由もない。

「どうやら皆さん理解してくださったようですね。それでは、この後Afterglowの皆さんに事務所に越えさせていただきます。そこでAfterglowの皆さんにも今回の説明をいたしますので、少しこのままお待ちください」

どうやら、Afterglowの皆にもまだ事情を説明していなかったらしい。私たちに事前に了承を取るために早めに集まったということだろう。私たちが断る可能性は考えなかったのだろうか？いや、もしかしたら断っても無理やり押し通すつもりだっ

たのかもしれない。

そしてその後私たちは奥の方でスタッフさんと打ち合わせをすることになった。雅を除いて。どうやら雅は、A f t e r g l o wの皆が来た時に対応するためにその場で待つてららしい。私たちはその後、今度のライブのセトリにA f t e r g l o wから提供してもらう楽曲を入れることを前提にした打ち合わせを行った。といつても、正直私は皆の話の内容があまり頭に入つてきていなかった。この期に及んで、私の中で結論が出ていない。

雅の楽曲しか演奏したくないという私と、雅のためだからという私がせめぎあつている。わかつている。前者は只のわがままでいいことは。それでも、私にとつて雅の楽曲を演奏するということはそれだけ特別なことだった。それほど、かけがえのないことだった。どうすればいいのだろう？どうすればいいのかわからない。そんな自己問答ばかりが私の頭の中に渦巻く。そして、そんな思考を続けている内に、事務所の入り口から蘭ちゃんと思われる声が聞こえてきた。その声を合図に皆で移動をする。

「それで、あたし達を呼んだ理由は？」

「はい、それは事務所スタッフの私から説明させていただきますね」

蘭ちゃんの質問に、スタッフさんが答える。予想外な方向から声が返つてきたことに對してだろう。A f t e r g l o wの皆は少しだけ驚いたような顔を見せたが、声の正

体が私達だとわかって、すぐに元の表情に戻る。

「あ、皆も来てたんですね！」

「あ、つぐちゃんだー！やつほー！蘭ちゃん、るんってくる曲作ってね！」

「曲を作る？」

「日菜ちゃん、まだ蘭ちゃん達は事情を知らないから、今から説明するんだって」

「あれー？そうだっけー？」

「どうやら、日菜ちゃんはあまり説明を聞いていなかったらしい。最も、私も人のことは言えないけれども。だけど、流石に重要な部分までは聞き逃してはいないはずだ。」

「それで、曲を作るってどういうことなんですか？すいません、全然事情がわからなくて」

「あ、ごめん巴ちゃん。事情がわからなくて当然だよね。今から説明するね」

「はい、それでは改めまして説明しますね。単刀直入に皆さんにしていたきたいことを述べますと、ここにいるパスペレに楽曲を提供していただきたいのです！」

「楽曲を、提供？」

「そうです！理由としましては、パスペレの皆さんの成長促進のためです！皆さんもご存知かと思いますが、パスペレの楽曲は全て雅さんが手がけてくれています。それはそれで良いのですが、ここで一つ皆さんに殻を破って、更なるレベルに上がっていただき

たいのです。そのために、雅さん以外の別の誰かに楽曲を提供していただくのは、良い刺激になるんじゃないかと考えました！」

「なるほど、Pastel*Palettesとしての事情はわかりました。それで、どうしてあたし達なんですか？楽曲提供なら、他にも良いバンドはいくらでもあると思いますけど」

「それは、皆さんの楽曲に感銘を受けたからです！等身大の自分達を描いた歌詞と、その力強いサウンドと、息びったりなパフォーマンス。素直に素晴らしいと思いました！そして思ったんです。このバンドの楽曲を提供してもらえたら、きっとパスパレの皆さんにも最高に良い刺激になると！」

「あはは、そこまで言ってもらえるとは嬉しいですね。アタシ達を選んで下さった理由もわかりました。それじゃ最後に、アタシ達にとって今回の話を受け入れるメリットを聞いてもいいですか」

「まず第一に、皆さんの名声向上ですね。ご存知の通り、パスパレの皆さんは芸能人です。通常の高校生バンドよりも、その発信力は高いです。そんな彼女達に楽曲を提供したとなれば、当然その名前も全国に知れ渡ることになるでしょう」

「名声、ですか。でも、第一にすることは他にもあるんですよ？」

「はい。これも皆さんにとっては魅力的だと思いますよ。それは、雅さんからの指導を

受けられることです」

「え?」

「マジですか!」

「へー」

「雅さんが?」

「え、え、ええええええええええ!」

ひまりちゃんの絶叫に思わず耳を抑えてしまう。ひまりちゃんが雅の大ファンなこととは当然知っている。雅からの指導を受けられると聞いて叫びたくなるのもわかる。だけど、流石にうるさすぎると思う。一応ここは事務所なのだから、当然仕事中の人も多くいる。その邪魔だけはしないようにしてほしい。

「ひーちゃんうるさすぎー」

「だって、だって、雅様が教えてくれるんだよ!?!こんなに嬉しいことないよー!」

「あはは、まあ、それぐらいは当然だよ。皆、楽曲提供の経験は無いよね?だったら、先輩としてきつちりコツとか教えてあげるよ」

「そういうことです。以上が皆さんに与えられるメリットです。どうでしょう?皆さんにとつても悪くないと思うのですが?」

「うん!今すぐ受けよう!こんなチャンス滅多に無いよ!」

「そうだね。私もやってみたいかな？」

「うーん、あたしは、皆におまかせで、いいかなー」

「……どうする？ 蘭」

「……一日だけ、考えさせてください」

「ええ、いいですよ。急にお願ひしたのはこちらなのですから、無理に今答えを下さないなんて言いません。皆さんで考えて決めて下さい。良いお返事いただけることを期待しています」

「ありがとうございます。行こう、皆」

「え？ ちょっと蘭——！ 受けようよ——！」

そのまま蘭ちゃん達は、答えを保留にしたまま事務所を出て行った。まあ保留にしたとはいえ恐らく、いえ間違ひなく断ることはしないでしよう。蘭ちゃんの顔を見る限り、何か引つかかる部分があつたみたいだけど、それでも決して断るようなこととはしないと思う。

「それじゃ、皆さんも今日は解散ということ。明日も同じ時間に集合をお願いします」
そのスタッフさんの言葉を聞き、パスパレの皆は一人、また一人と事務所から出ていく。後に残されたのは私と雅だけとなった。

「それじゃ、僕達も帰ろうか」

「……ええ、そうね」

その雅の言葉に従い、私も事務所を後にする。答えの出ない自己問答を繰り返しながら、事務所を後にする。その日は、少し前を歩く雅の背中がなんだか遠く感じてしまった。

事務所を後にして数時間後、雅は別の仕事があるので一旦別れることになった。私は今日この後特に仕事は入っていない。なので、ウインドウショッピングをして時間を潰すことにした。綺麗な洋服や、可愛いアクセサリーを眺めていれば、私の曇った気分も自然と晴れてくるだろう。最初の内は私もそう考えていた。

だけど、何件店を回っても一向に気分は晴れない。私の心は、いつまでも曇天の中にいた。正直な話をすると、私がどうするべきなのか、答え自体はとっくに出ているのだ。それも、この話を聞いた時点で。

私にとって雅の夢というのは、それこそ何よりも優先するべきような事項なのだ。そしてその夢を実現させるためには、雅の成長は必要不可欠な要素となる。今回の楽曲提

供の話を、雅は時分の成長に繋がるかもしれないと考えて受けた。だから昨日からあんなにソワソワしていたのだ。

だからこそ、私からしても今回の案件を断る理由は無い。無いのだけれども、それでも、やっぱり雅以外の楽曲を受け入れたくないと考えてしまう私がいる。頭ではわかっているけど、気持ちも、心がわかってくれない。私の根幹がわかってくれない。どうすればいいのかも全く分からない。私は、本当に一体どうすればいいのだろうか？

「・・・とさん、さとさん、千聖さん！」

「え？」

そうやって考えていると、誰かが急に大きな声で私の名前を呼んでくる。その声の方を向けば、そこにはつぐみちゃんが心配そうな顔をして立っていた。

「どうしたのつぐみちゃん？こんなところまで？」

「こんなところって、ここ私の家ですよ」

「え？」

回りを見渡してみると、確かに私は羽沢珈琲店で座っていた。目の前には注文した紅茶まで置いてある。そうだった。私はウィンドウショッピングを一通り終えて、羽沢珈琲店で一休みしてから帰ろうと思ひ、寄ったのだった。そんなことまで忘れていたなんて、よほど考え事に没頭していたらしい。

「千聖さん大丈夫ですか？さつきからずっと呼んでたのに、全く聞こえてないみたいでしたし、自分が今いる場所も忘れてたみたいじゃないですか。体調が優れないようでしたら、お薬取つてきますよ？」

「ごめんなさい。ちよつと考え事に没頭してただけなの。本当に大丈夫なのよ」
「大丈夫ならいいんですけど、最近段々寒くなつてきてますから、体調には気を付けてくださいね」

そう言つてまた心配そうにこちらを見てくるつぐみちゃん。本当にこの子は誰よりも優しい子だ。だからこそ、余計な心配や迷惑をかけたくない。それに、こんな自分勝手な悩みを誰かに相談するなんてこと、できるはずもない。

「ふふつ、ありがとう。そういうえば、Afterglowの皆とのお話はもう終わったの？」

「はい。皆で意見を出し合つて、決まりました！結構時間がかかつて、こんな時間になつちやいましたけど」

「こんな時間？」

そう言われて外を見てみると、随分と暗くなつていた。時計を見て、慌てて席から立ちあがる。

「いけない！早く帰つて晩御飯の準備しないと！ありがとうつぐみちゃん。お代ここに

置いておくわね」

「あ、はい！・・・ありがとうございます！お気をつけて！」

そんなつぐみちゃんの声を背に受けて、私は帰路につく。知らない間に、随分と長居してしまっていたらしい。早く帰らないと、雅が既に帰っているかもしれない。私は、その間だけは悩みなんて忘れて足を急がせたのだった。

次の日、私たちは予定通り事務所に集合していた。日をまたいでも、私の心が晴れることは無かった。雅のため、雅のためと何度言い聞かせても、決して私の心は聞き入れてくれることはない。私は、こんなにも自分勝手な女だったのだろうか？そう考えて、自己嫌悪までしてしまっている状態。もはや重症かもしれない。

「失礼します」

そうやって今日も考え事していると、Afterglowの皆がやってきた。その顔からは、どことなく決意のようなものが見て取れる。

「昨日のお話、受けさせて下さい」

そして、予想していた通りの答えが蘭ちゃんの間から告げられた。当然だろう。こんな美味しい話を断るとは到底思えない。

「本当に!?!良かったあ、断られたらどうしようかと思つたよお!」

「あはは!彩ちゃんも心配性なんだから!蘭ちゃん達なら受けてくれるつて、あたしはわかつてたけどなー」

「皆さんが受けて下さるのなら、正に鬼に金棒ですね!」

「イヴさん、ジブン達は決して鬼という訳ではないのですが・・・」

パスパレの皆はとても嬉しそうにしている。それもそうだろう。これは、昨日言つたように私たちの成長にもつながる大事な案件なのだから。自分たちがまた一つ成長できるかもしれないと知つて、喜ばないわけがない。これが、当然の反応なのだ。

「それじゃ早速、作曲に取りかかろうか。皆はいつもどこで作曲してるの?」

「学校の屋上だったり、つぐの家でだったり色々ありますけど、今日はこの後いつも通つてるスタジオを予約してます」

「うん、それじゃ早速そのスタジオに行つてみようか!・・・と言いたところだけど、まずはパスパレの皆のレッスンを見てみない?楽曲を提供するには、やっぱり提供する人のことを知るのも大事だと思うんだよね」

「なるほど、確かに。それじゃ、彩さん、見させていただいてもいいですか?」

「うん、まかせて！それじゃ、事務所内のスタジオに移動しよっか」

その彩ちゃんの言葉に続いて、皆でスタジオに移動をする。今日は、元々これからレッスンをを行う予定だったので、この後仕事の予定は入っていない。私は、未だに晴れない心を気にしつつも、スタジオへと足を進めるのだった。

スタジオに着くなり、私たちはいつもの練習メニューを熟していった。演奏練習、ボイストレーニング、筋力トレーニングと、次々と練習を熟していく。レッスン中はいい。余計なことを考えず、ただレッスンに集中することができた。レッスン中、After glowの皆はずっと私たちのことを見学していた。時折驚いたような声も聞えてくる。想像以上にハードなレッスンを私たちが熟していたからだろう。

というのも、今の私たちは普段よりも練習量を増やしていた。年末のライブに向けての追い込みが目的だ。日時的にはまだもう少し余裕はあるのだけでも、早い内から体を慣らしていこうという目論見がある。

というのも、今度のライブは私たちにとっても過去最長時間の演奏を行う予定になっ

ている。なので、それまでに体力をつけておかないと、持たないと考えているからこそ、この早い段階から練習量を増やしていつている。

「・・・皆！ちよつと集まつて！」

私たちがそのままレッスンを続けていると、雅から集合がかかった。その直前まで、Afterglowの皆と何やら話していたみたいだから、彼女たち絡みのことだろうか？皆でレッスンを一時中断し、雅達の元へ集まる。

「どうしたの雅君？」

「うん、皆がパスパレのことをもつと知りたいたいから、話を聞かせてほしいんだって」

「お話ですか？なんの話をしましょうか？」

「うーん、あたし達のことを知りたいんだったら、やっぱり結成の時の事じゃない？」

「え、あの話・・・」

「あまり思い出したくありません・・・」

あの話は、確かに私達を知るうえで外せないものだろう。私にとつても特別なお話。思い出すのも辛いような、でも私が前に進む大きなきっかけになつてくれた大切なお話。私は今なら、あのことも良い思い出として語れるだろう。

「結成の話ですか？」

「・・・そうね。あまり良い話ではないのだけれど、聞いてくれるかしら？」

その後私たちは、あの時の話を皆で After glowの五人に話していった。最初に事務所顔合わせをしたことから、お披露目ライブに、チケット売りをした話から復権ライブの話まで一通りを話した。流石に私と雅についてのことは話していないが。あの一連の出来事は、私と雅二人だけの思い出だ。と言つても、千景にもある程度の情報知られているけれども。

「・・・とまあ、こんなものですかね？以上がジブン達の結成話でした」

「ヒマリさん、大丈夫ですか？」

「ううっ、ひつく、だ、大丈夫だよ・・・」

「あの、聞いておいて、なんですが、そんな辛いお話をさせてしまってすいません・・・」
「巴ちゃん気にしないで。確かにあの時は辛かったけど、今はあの出来事があつて良かったなーって思うの。あの出来事が無いと、たぶん今のパスパレは無かつたと思うから」

そう、あの出来事が無いと今の私たちの絆は無かつた。断言してもいい。あの壁を、私達五人、いいえ六人の力で乗り越えることができたからこそ、私たちは固いきずなで結ばれている。そう思っている。だから、あの事件は何も悪いわけではない。むしろ、良いことだったのだ。

「・・・ありがとうございます。作曲の参考にさせていただきます」

「うん！蘭ちゃん！お願い！」

蘭ちゃんはそれだけ告げると、雅達と一緒にスタジオを後にした。きつと、蘭ちゃんなら良い曲を作ってくれるだろう。だけど、私はその蘭ちゃんが作ってくれる曲を受け入れることができるのだろうか？わからない。私には全く分からない。私は一体どうすればいいのだろうか？

さつきまではレッスンに集中してて考えることはなかったのに、今になってまたそんな私の醜い思考が姿を現してきた。本当に一体どうすればいいのだろうか？そんな答えの出ない自己問答をまた繰り返す私。そして私は気づくことは無かった。そんな私を見つめる少女の視線に。

私たちは雅達が出て行った後、そのまま休息を取ることにした。正直、今は休むよりもレッスンをして、気を紛らわせたかったのだけれども。けど、体を休めることが大事なもの間違いない。適度な休息は、パフォーマンスの向上に直結するのだから。

「あの、千聖さん少し良いですか？」

すると、体を休めてる私に話しかけてくる人物がいた。それは、スタッフさんやパスパレのメンバーではなく、予想もしない意外な人物だった。

「あら？ つぐみちゃんどうしたの？ 皆とスタジオに向かったはずじゃなかったの？」

つぐみちゃんだ。確かに彼女はさつき、雅達と一緒に事務所を出て行った。それなのにここにいるということは、態々引き返してきたということになる。一体どうして？

「少し、千聖さんとお話ししたいことがありまして、皆には先にいつてもらいました。お邪魔じゃなければ、いいですか？」

「いいわよ。それなら、席を変えましようか」

私は、つぐみちゃんと話すことよって気を紛らわせることができると思い、彼女の提案に乗ることにした。パスパレの皆に少し席を外すことを告げて、スタジオから外に出る。そしてほんの少しだけ歩くと、休憩室がある。私はそこにつぐみちゃんを案内した。

パスパレの皆はいつも、ここまで歩かなくてもスタジオ内で十分休息が取れるために使用していないが、ちゃんと休憩室は完備されている。都合よく、今は誰もいないみたいだ。その休憩室内の椅子に、私とつぐみちゃんは座り、お話をすることにした。

「それで、つぐみちゃんどうしたの？」

「あ、はい。あの、その・・・千聖さん、何を悩んでるんですか？」

そのつぐみちゃんからの質問は、私の予想に無いものだった。やっぱり、昨日のあの姿を見られたからだろうか？つぐみちゃんには心配をかけてしまっているみたいだ。

「だけど、こんな内容の悩みを誰かに言えるわけもない。」

「急にどうしたの？昨日のことと言ってるのかしら？だとしたら、心配をかけてごめんなさい。だけど、本当に大丈夫なの。昨日も、疲れていただけだったのよ。今はもう大丈夫なのよ？だから心配しなくても・・・」

「じゃあなんで、さつきあんな泣きそうな顔をしてたんですか？」

そのつぐみちゃんの言葉で、私はつい、言葉が詰まってしまう。さつき。思い当たるのは雅達がスタジオから出ていく際だ。あの時、私は自分でも今悲痛な顔をしてしまっているかもしれないと感じた時が一瞬だけあった。顔には表さないように普段から心がけていたのだが、つい一瞬だけ、顔に表してしまった瞬間が確かにあった。直ぐに気づいて、表情を元に戻すように努めたのだけれども、どうやらそのほんの一瞬を、つぐみちゃんに見られてしまっていたらしい。

「どうして何も無いなら、あんな辛そうな、泣きそうな顔をしていたんですか？昨日だってそうです。私がお声をかけた時、千聖さん今にも泣き崩れてしまいそうな顔をしていました。そんなの、到底疲れていただけだと思えません。一体、どうしたんですか？私、千聖さんのことが心配で仕方ないんです。私で良ければ相談に乗ります。だから、言っ

てみてください」

そう優しく声をかけてくれるつぐみちゃん。そんな彼女の優しさが眩しくて、甘えてしまいたくなる私がいる。だけど、そんなわけにはいかない。これは、私の単なる我儘な悩みなのだから。私自身でなんとかするしかない。

「ありがとうつぐみちゃん。心配かけてごめんなさい。でも、本当に大丈夫なのよ。大丈夫だから、心配しないで……」

「そんなこと言われても、皆千聖ちゃんのことを心配で仕方ないんだよ？」

そう声をかけてきたのは、つぐみちゃんではなかった。彩ちゃんだ。いつの間にか、休憩室の入り口に、彩ちゃんが立っていた。彩ちゃんだけではない。その後ろには日菜ちゃん、麻弥ちゃん、イヴちゃん、パスパレの皆が勢揃いしていた。

「皆、どうして……」

「つぐみちゃんが気づいて、いつも一緒のあたし達が気づかないと思つた？」

「そういうことです。皆、千聖さんのことが心配なんですよ。ジブン達でお力になれることが何かあるかもしれません。ですので、なんでも言ってみてください」

「私も、一生懸命チサトさんのために頑張ります！武士に二言はありません！」

「えーつと、イヴちゃんのは何か違うような気もするけれど、私たちが千聖ちゃんに伝えたいことはそういうことだよ。私達、本当に千聖ちゃんのことを心配なの！だから、な

んでも言ってみて！」

「千聖さんは、皆に心配をかけたくないから、自分の中に悩みをとどめてるんだと思います。でも、その方が皆に余計な心配をかけてるんですよ？ここは、私たちのためだと思つて、遠慮なく言ってみてください。きつと、お力になつてみせますから！」

「皆……」

そんな、皆の心遣いが嬉しかった。ああ、私は本当に皆に愛されているんだなと思わせてくれた。そう考えると、なんだか一人で抱え込んでるのも馬鹿らしくなつてしまふ。そうだ。一人で考えてても答えが全くでないから、こんな事態になつてしまつていふのだ。だったら、誰かに答えを求めてしまえばいい。

「皆、ありがとう。それじゃあ、聞いてくれるかしら？だけど、これは本当に、私の自分勝手な悩みなの」

そして私は、皆に悩みを打ち明けた。私が話している間、皆は静かに私の話を聞いてくれた。静かに、一生懸命聞いてくれた。私の力になるために。本当に、ありがたい。

「……これが、私の悩みよ」

「千サトさん……」

「ふふつ、幻滅したかしら？」

「幻滅なんてそんな！とんでもないです！ただ、千聖さんの雅さんへの愛つてやつぱり

すごいんだなと実感してただけです」

「ふふつ、昔から本当にお二人って仲が良かったですもんね。私達五人も、千聖さん達には適わないかもって思ったことも何回かありました」

「そうね。私は本当に雅のことを愛している。だからこそ、周りの人が見たら些細なことでも、大きな悩みになってしまうこともあるのよ」

「あの、その、私達、今回のお話安請け合ひしてしまつて、ごめんなさい」

「謝らないで。つぐみちゃん達は何も悪くないの。これは本当に、ただの私の我儘なんだから」

そう、これに関しては本当に誰も悪くない。単純に、私が踏ん切りをつけれないだけなのだから。言うなら、悪いのは私なのだ。他の人は誰一人として悪くない。

「うーん、でも、皆難しく考えすぎじゃないかな?」

「え? 日菜ちゃんどういうこと?」

「あたしの知ってる雅君は、そんな状態の千聖ちゃんを放つておけるような人じゃないと思ふんだよね」

「雅が、放つておかない?」

「そうですね。私も日菜先輩の言う通りだと思ひます。千聖さんの雅さんに対する愛がすごいのはわかつてますけど、それに負けないぐらい雅さんの千聖さんに対する愛がす

「ごいのも知ってますから。だから、きつと雅さんなら千聖さんの状態を察して、何かすでに準備を進めてるんじゃないかと思うんですよね」

「そうだよね！雅君なら、絶対何かしてくれてるはずだよ！だから、千聖ちゃんも雅君のことを信じて待つてよ？」

「雅が・・・」

「雅のことは、考えたこともなかった。つぐみちゃんや、パスパレの皆が私の状態に気づいていたのだ。雅が気づいていないとは考えられない。きつと、気づかれているのだろう。だけど、こんな状態の私を立ち直らせる方法なんて、あるのだろうか？甚だ疑問である。だけど、それでもきつと雅なら、なんとかしてくれそうな気がする。何故だろう？雅のことを考えると、さつきまで悩んでいた自分が嘘みたいに気分が軽くなった気がした。」

「・・・そうね。皆、心配してくれて本当にありがとう。皆の言うとおりね。雅なら、なんとかしてくれるような気がしてきたわ。お陰で気分が少し晴れた気がするわ。本当に、本当にありがとう」

「ううん、私たちは何もしてないよ」

「そうですね。ジブン達はただ、千聖さんの話を聞いただけですから」

「はい！お礼を言われるようなことは何もしていません」

「そうそう。ま、お礼を言うとしたらあたし達にじゃなくて、つぐちゃんにじゃない?」「え!?そ、そんな、私はただ、たまたま昨日見かけた千聖さんが見たことも無いぐらい弱弱しくて、心配になっただけで・・・」

「ふふつ、つぐみちゃん、本当にありがとうね。皆も本当にありがとう」

私は、本当に良い友人に恵まれたんだと思う。こんなにも、私のことを思つて心配してくれる友人たち。本当に、近々何か恩返しをしないとイケないかもしれない。私は、その後も心から皆にありがとうと言いつけるのだった。レッスンが再開されるその時まで、言いつけるのだった。

そして、数日が経過した。その日も私たちは、事務所に集合していた。なんでも、Afterglowの皆に頼んでいた曲が完成したらしい。今日は、そのお披露目を今からすることになっていた。

「これが私達からPastel*Palettesに贈る曲、Y. O. L. O!!!!です」

その曲は、正に渾身の一曲と呼べる、最高級の一曲に仕上がっていた。思わずリズム

を刻みたくなるようなアップテンポな曲の中にグツとくるような染み入る歌詞が組み合わさって、最高のメロディーを私たちに届けてくれる。こんな曲をもらっていいのだろうか?と思わずためらってしまふような至極の一曲だ。

「す、凄い!こんな良い曲、本当に私達がもらっていいの?」

「勿論です。そのために作ったんですから」

「エモーイ曲ができましたな」

「Y. O. L. O!!!. どういう意味なのでしょう?」

「You Only Live Onceの略で、人生は一度きりって意味です!皆で一生懸命考えました!」

「つぐつてば、一番張り切つてたもんね」

「だな!完成が早くなったのもつぐのお陰だしな」

「スーパーつぐつてたもんね」

「だ、だつて大事な初日に遅れちゃったんだもん!遅れを取りもどさないとして頑張るよー!」

「あはは、つぐみちゃんらしいね」

「皆、本当にありがとう!この曲、大事にするね!」

「どうやら、他の皆もこの曲のことが気に入ったみたいだ。人生は一度きり。その通り

だ。だからこそ、人は今を一生懸命生きる。一度きりの人生で、世界に少しでも自分が生きていたという証を残すために。

「皆もこの曲のことが気に入ってくれたみたいだね。それじゃ、僕からも皆に一曲プレゼントしようかな」

そう言つて、雅は一枚のCDを取り出した。どうやら、今度のライブのための新曲ができあがつたみたいだ。ここのところずっと、曲作りに悩んでいたみたいだったけど、どうやら本番には間に合つたらしい。

「もしかして、今度のライブのための新曲？」

「うん、そうなんだけど、実はちよつと本来作る予定の曲から変わったんだ」

「変わった？内容が変わつたということですか？」

「実はそうなんだ」

「へー、どうして変えたの？」

「まあ、簡単に言うなら僕の我儘みたいなものかな」

「我儘、ですか？」

「そう。というのよね、千聖」

「え？何かしら？」

「最近なんだか千聖、元気なかつたでしょ？だから、僕からの励ましの意味も込めて、パ

スパレのためというよりも、千聖のために作ったんだ」

「私の、ため？」

「実はこの曲、ツインボーカルの曲なんだよね。一人はもちろん彩ちゃんだとして、もう一人を千聖、君にお願いしたいんだ」

その時の私は、雅が何を言っているのか最初理解ができなかった。信じられなかった。ツインボーカル。つまり、歌う人が二人いるということ。誰が？彩ちゃんと私が。何を？雅が作った曲を。そう、雅が作った曲を。

以前にも言ったことがあっただろう。私の掲げるいくつかの目標について。その目標の内の一つ。いつの日からだったか忘れたけど、気づいたら目標になっていた。ずっと、そうなればいいと思っていた。雅の造った曲を、私が歌って歌手デビューすること。その目標が、完璧にはないが、達成される。

「み、雅！」

「うわっ！」

私は嬉しさのあまり、雅にそのまま抱き着いてしまった。そして私の目からは、止めどない涙が溢れてくる。

「うわー、千聖さん大胆」

「ビュービューお熱いですなー」

「モカ、今は茶化さない」

「あはは、あのやつがいたら羨ましがってるかもな」

「良かったですね、千聖さん」

皆の声が聞こえてくるけど、今の私には全く気にならなかった。まるで、今この世界には私と雅の二人だけしかいないような、そんな自惚れのような感覚が出てくる。我儘なうえに自惚れるとか、自分で言ってる私ってどうしようもない女だな、と思ってしまう。だけど、そんなことが些細なことに思えるほどに、今は嬉しかった。本当に、本当に嬉しかった。

「それじゃ、流すよ。聞いてください。ゆら・ゆら Ring—Dong—Dance」

そして流れる音楽。とても、とても綺麗な旋律だった。とても綺麗な歌詞だった。この曲を、私が歌う。その姿を想像して、また嬉しくなってしまう。その後も私は、聞き入るようにその曲に耳を傾け続けた。その時の私は、今までの悩みのことなんて綺麗さっぱり忘れてしまっていた。恐らく、もう思い出すことも無いだろう。そんな些細な悩みなんて吹き飛ぶぐらいの歓喜が、私に舞い降りたのだから。皆には本当に迷惑をかけたと思う。心配をかけたと思う。だから今度は私が恩返ししよう。この歌を完璧に歌ってみせて。その後も私は、この曲に耳を傾け続けた。涙を流しながら、耳を傾け続けるのだった。

第47演目 涙サプライズ!

十二月二十四日

一年三百六十五日の中でも、指折りの特別な日だろう。いや、特別な日の前日といふべきだろうか。所謂クリスマススイヴ。聖なる日と言われる、クリスマスの前日。恋人たちにとつても特別な一日。そんな日に僕は、

「彩ちゃん今のは若干入りが早かったよ。逸る気持ちも歌にも出ちゃってるね。もっと落ち着いて、クレバーに。一旦深呼吸してもう一回やってみようか」

「うん、わかった!」

彩ちゃんにマンツーマン指導を行なっていた。明日十二月二十五日、この日は僕とパスパレの皆の合同ライブ当日だ。つまり、本番までに残された時間は今日を残すのみとなっている。その残り少ない時間をこうやって彩ちゃんのために使っているというわけだ。

彩ちゃんももう十分明日の準備はできている。だけど、Afterglowの皆が作ってくれた一曲、Y・O・L・O!!!に関して、まだ詰め込める余地があるからと、こうやって前日まで根を詰めているというわけだ。因みに、他の四人はなんでも他の仕事

が入っているらしい。彩ちゃんがそれを聞いてなんで私だけ入ってないの？って悲しそうにしてたけど、入ってないものは入ってないんだから仕方ない。明日の準備のために有意義に使わせてもらおう。

「うん、今のは良い感じだったね」

「ほんと？ やったー！」

「じゃあ今のが形にできるように、十回連続で今の部分やってみようか」

「み、雅君って結構スパルタだよね・・・」

スパルタ？ そうだろうか？ これも彩ちゃんのことを思って、彩ちゃんのためにやっているんだけどな。どうやら、彩ちゃんには不満だったかな？

「そっかー、十回じゃ足りなかったよね。ごめん、じゃあ百回いって」

「ううん！ 十回で十分です！ よーし！ 頑張るぞー！」

と、急に意気込む彩ちゃん。最初からそう言ってくれたらいいのにね。正直、十回なんて少ない方なんだから。そして彩ちゃんは僕に言われた通り、同じパートの練習を十回続けて行っていく。回数を重ねていくごとに、その歌声が洗練されていっているのがよくわかる。うん、この調子ならこのパートはもう大丈夫だろう。

「十回！ 雅君終わったよー！」

「うん、お疲れ様。それじゃあ、このまま次のパート行ってみようか」

「え!? もう次行くの!?!」

彩ちゃんは何を驚いているんだろう? 本番まで後一日しかないのだ。こんなところで休んでる暇はない。さあ、ジャンジャン行ってみよう。

「さあ、休んでる暇はないよ。次行くよ」

「なんか雅君、今日機嫌悪くない?」

はい? 僕の機嫌が悪い? そんなわけがない。いたっていつも通りのはずだ。何もおかしいところは無いはずだ。

「・・・そんなことないよ」

「ううん、絶対おかしいよ! 何かあったの?」

「・・・別に千聖とデートに行けなかったからっていじけてないさ」

「あ、うん」

そう、本来なら今日は千聖とデートに行こうと思っていたのだ。なのに、千聖は急な仕事が入ってしまったらしく行けず、特に予定の無くなってしまった僕はこうやって彩ちゃんのレッスンに付き合っているというわけだ。考えたら、余計に悲しくなってきた。

「なんか、ごめんね?」

「別に彩ちゃんが謝ることじゃないよ。千聖も仕事なんだから仕方ないってわかってる

「ただけどね。はあ、折角付き合い始めて最初のクリスマススイヴだったのに・・・」

「私もイヴに雅君と二人つきりだなんて、後で千聖ちゃんにお説教されそうな気がしてきたよ・・・」

「そうやって、二人でため息をつく僕たち。ため息をつけば幸せが逃げるなんて言うけれど、つく前から逃げられてるんだから、つきたくもなってしまう。はあ。」

「でも皆、なんの仕事なんだろう?」

「さあ? パスパレ全員での仕事だったら、彩ちゃんが呼ばれてないのもおかしいし、個別の仕事なのかなーって思うんだけど、四人が別々にこんなイヴの日に仕事が来るってことあるのかな?」

「今朝千聖に聞いてみたが、仕事の内容までは教えてもらえなかった。さつき事務所スタッフの人にも聞いてみたけど、トップシークレットですって言って教えてもらえなかった。トップシークレットって何? そんな重大任務でもあの四人は抱えてるの? 余計に気になってしまつて仕方ない。」

「二人ともお疲れ様」

「と、そんなことを考えていると、スタジオの扉が開き誰かが入ってくる。目を向けずともわかる。千聖だ。どうやら他の三人はいないらしい。」

「お疲れ様千聖。仕事はもう大丈夫なの?」

「ええ、大丈夫よ。雅と一緒に帰ろうと思ってここに寄ったのだけれども、まだ続きそうかしら?」

そう言われて、どうするか彩ちゃんのほうを向くと、気にしないでというように首を横に振られた。それじゃあ、彩ちゃんのお言葉に甘えて今日はこれで上がらせてもらおう。

「そうだね。それじゃあ帰ろうか。彩ちゃんまた明日ね。明日は頑張ろうね」

「うん! 最高の一日にしようね!」

「ふふつ、また明日ね彩ちゃん。それと、今度またゆつくりお話ししようね」

「ひ、ひつ!」

そういう千聖の顔は、笑顔だった。輝かしいばかりの笑顔なのに、なぜこんなにも圧力を感じるのだろうか? まるで地球の重力が何十倍にもなったように周りが重く感じる。一体、なんの話をするというのだろうか? やっぱ怖いから聞きたくない。

そして僕と千聖はそのまま事務所を後にした。外はすっかり暗くなっていた。少し前までは、この時間もまだ明るく感じたのに、今ではすっかり暗くなってしまった。

「雅、折角のイヴだし、晩御飯は外食しましょう。お店はもう予約してあるのよ」

「本当? 流石千聖! 僕、もうすっかりお腹が空いちやっただよ。早く行こう!」

「ふふつ、ええそうね」

そして僕たちは夜の街へと繰り出した。今日はクリスマスイヴ。イヴの夜はまだまだ長い。そのころには、僕の機嫌もすっかり良くなっていたのだった。

千聖に連れられてやってきた店は、僕も聞いたことのある店だった。地元カップルに大人気のオシャレなカフェレストラン。数多の雑誌にも掲載されるほどの人気店だった。カップルからの支持が高いということで、今日明日の二日間は予約が殺到し、数か月前から予約を入れておかないと間に合わないという超人気店。そんな店を千聖は予約していたらしい。

一体いつから予約していたんだろう？少なくとも今日、昨日、今月どころの話ではないはずだ。どうやら、千聖はずっと前から今日のことを計画していたらしい。誠に恐れ入る。

「このお店、去年放送してたクリスマス番組で紹介されてたのよ。その時に気になって、今年のイヴに雅と来れたらなーと思ってたの。それで、もう去年の内に予約してあったのよ」

「去年の内つて、まだ付き合う前じゃん。ここつて、カップルに大人気のお店でしょ?も
しまだ付き合つてなかつたらどうしたのさ」

「ふふつ、きつとそれでも来てたんじゃないかしら?」

えー。カップルでもないのに態々クリスマスイヴに、こんなお店に?それはちよつと
気恥ずかしいような。と思つてそのケースを想像してみたんだけど、なんでだろうか。
あまり違和感が無かつた。不思議な話だ。

「……いよいよ明日ね」

「うん。そうだね。この日のために皆できる限りの努力をしてきた。土壇場で増えた新
曲に関しても、皆驚くべき速さで習得してくれた。本当に皆、成長スピードが尋常じゃ
ないよ。ちよつと、嫉妬しちゃうな」

「そうね。皆本当にこの一年で見違えるほど成長したわ。私も、演奏に関してでは先輩だ
と思つて安心してたけど、今じゃ追いつかれないようにするのに必死よ。油断してたら
直ぐに追いつき追い抜かれちゃいそうだわ」

千聖の意見も尤もだ。^{もつと}天才型の日菜ちゃん。元々事務所のサポートドラマとして下
積みをしてきた麻弥ちゃん。上昇志向の強いイヴちゃん。超が付く努力家の彩ちゃん。
皆本当に成長が早い。だけど、何も成長が早いのは彼女達四人だけでは無い。

「だけど、千聖の成長スピードも凄いなと思うけどな。僕なんかより全然早いよ」

「そうかしら？ふふつ、きつと一番近くに最高の先生がいるからでしょうね」

最高の先生？僕のことだろうか。確かに、僕は家でも千聖にベースを教えることもある。だけど、僕もベース自体を長らく弾いていないから、今では千聖の方が上手いんじゃないかと思う。それでも、教師として務まっているのだろうか？

「本当に僕なんかが教えててもいいの？たぶん、今だったら僕よりも千聖の方がベースの実力は上だと思うよ。なんだったら、ベースの専門家に心当たりがあるから、連絡とってみるけど？」

「ううん。雅がいいの。雅じゃなきや、私は嫌よ」

そう頑なに拒む千聖。そんなことを言われると、僕だって当然嬉しくなってしまう。頑張つて、少しでも千聖の成長に繋がるように僕も努力しよう。最近は、ギターばっか弾いてたけど、ベースの勉強もまたしてみようかな？

「お食事のところすいません。少しよろしいでしょうか？」

千聖と談笑しながら、料理に舌鼓を打っていた時だった。不意に誰かが僕たちに声をかけてくる。そちらに顔を向けると、お店のスタッフさんが僕たちのテーブルの横に立っていた。

「黒城雅さんと、白鷺千聖さんですよね？本日は当店をご利用いただきありがとうございます。サインと写真撮影

をお願いできないでしょうか?」

「そう店員さんは言ってくる。そう言えばこのお店に入ったとき、やけに芸能人のサインと写真が多いと感じていた。それも、所謂芸能人カップルの。中には意外な大物までいてビックリだ。」

「このお店はね。サインと写真を提供した芸能人カップルはその後もずっと幸せになれるって言われてるのよ。現に、飾られてた写真に写ってるカップルの皆は、未だに付き合っていたり、既に結婚までしている人ばかりなのよ。破局率驚異の0パーセントというのだから流石に驚きだわ」

「そう千聖が教えてくれる。0パーセント。言葉にするのは容易だけど、実際に目標に掲げて、易々と達成できるものではない。それこそ、目に見えない不思議な力が働いているのではないか? そう思わせてくれるような絶対的説得力がある。」

「なるほど。それは良いね。是非、飾ってもらおうか」

「ふふつ、雅ならそう言ってくれると思ってたわ。それでは、お願いします」

「ご協力ありがとうございます。では、写真を撮らせていただきますので、お二人とももう少し近くに寄っていただいてよろしいでしょうか?」

「快い返事をした僕たちに向かって、スタッフさんがカメラを構える。その指示に従って、僕たちはお互いの頬がくつつくほどに顔を近づけた。僕たちの顔には、自然と笑み

が浮かび上がる。これで、僕たちの未来はきつと明るい物になってくれることだろう。そんな僕たちの未来を祝福するかのように、カメラが眩い光を放つ。

だけど、一つどうしても言っておきたいことがある。それは、別にこのような願掛けをしなくても、僕たちの未来は目が眩むほどの眩しいものになっているだろうということだ。今回の願掛けは、あくまでもおまけの様なもの。既に明るい未来が100パーセント約束されているのだから、これ以上増えようがない。

まあ、もしかすると今回の願掛けによって、限界を超え120パーセントの幸福溢れる未来になるかもしれないが。まあ、何はともあれ明るい将来が待っているのは間違いないだろう。僕たちは、その後も和気藹々と談笑しつつ、素晴らしい料理に舌鼓を打つのだった。話題は自然と、未来についてのものになっていった。

そして翌日、ついにライブ当日を迎えた。会場には既に多くのお客さんが詰めかけており、大混雑の様相を呈している。

「凄い声援だね。控室にいてもお客さんの声援が聞こえてくるや」

「そうね。皆、私たちのことを待っていてくれるのね」

「わ、私ちよっとお手洗いに行ってくる!」

「あはは、彩ちゃん十分前に行っただばかりだよ!緊張しすぎ!」

「ジブンからしたら、いつも通りでいられる日菜さんの方が不思議ですけどね。ジブンを緊張して頭が真っ白になってきました・・・」

「マヤさんフアイトです!もうすぐ合戦の時間ですよ!」

「あはは、イヴちゃん別に今から戦をするわけじゃ無いんだよ」

皆大小の違いはあれど、緊張しているようだ。僕も含めて。といつても、僕の場合は良い緊張感に包まれてると思う。緊張はパフォーマンズの敵と言う人もいるけれども、時には味方になってくれることもある。今なら、最高のパフォーマンスができそうだ。

「皆さん、時間です!舞台の方によりしくお願いします!」

そうスタッフさんが声をかけてくれる。ついに本番の時が来た。今まで積み重ねてきたものを、大観衆の目に焼き付ける時が。

「さあ皆、悔いの無いように全力で行こう!」

「はい!ブシドーの力で、絶対皆さんが満足できる演奏をしてみせます!」

「そうですね。ジブンも、悔いが残るのは流石に嫌です。ですので、全力で行きますよ!」

「わ、私も、凄く緊張して、覚えたMCも忘れちゃいそうだけど、それでも今日のライブを思いっきり楽しみたい！そのために、皆で頑張ってきたんだから！」

「あはは、皆やる気十分って感じだね。うーん、なんだかあたしもるんってきた！思いっきりぴかっつてしたステージにするからね！」

「そうね。こんなお祭り、今後参加できるかなんてわからないもの。だから、今できる最大限の演奏で、お客さんの期待に応えてみせるわ。皆、思いっきり楽しませよう！」

意気込んで僕たちは、控室を後にした。目指すは最高の舞台^{ステージ}。その場所を目指して、僕たちは一歩を踏み出した。最高の未来を、^{ステージ}夢見て。

開演五分前、僕たちは舞台袖に待機していた。開演を心待ちにしたお客さんの歓声が間近に聞こえてくる。その声を聞き、皆また緊張に包まれていく。ライブ前のこの緊張感、僕は大好きだ。緊張とも、高揚とも取れるこの感じ。この感覚がたまらなく好きだ。今から待っている舞台に、否が応でも期待感を持たせてくれる。そんな感覚が大好きだった。

「それでは、開演しますー!」

スタツフさんがその声をかけてくれる。そのタイミンで、会場に流れていたパスパレの曲が消える。そして、沸き起こる期待感の籠った歓声。そして、大音量で流されるBGM。その音楽が、会場全体に僕たちの入場を告げていた。

「皆ー行くよー!」

その僕の声に呼応するかのように、BGMのテンポが早くなる。そのテンポに合わせて会場のボルテージも上がっていく。そして、BGMが止み、一瞬静寂が訪れる会場。その会場を再び、灼熱の坩堝と化すために、僕たちは舞台上に躍り出た。

「みんなー!メリークリスマスー!」

今日はクリスマス。それに合わせて、僕たちの衣装もサンタ服をモチーフにしたものになっている。皆に、最高の音楽というプレゼントを渡しに来たサンタ楽団。それが今日のコンセプトだ。

「それじゃー挨拶代わりに一曲行くよー! welcome to my world
!」

そして始まる演奏。最初の曲は、僕のライブの定番 welcome to my world。花女の文化祭でも最初に披露した曲だ。その曲を、今日はパスパレの皆が演奏してくれている。皆、本当に今日の本番まで頑張ってくれた。今日僕が披露する曲も

全て演奏できるようになってくれた。今日の僕の曲は全て特別バージョン。演奏だけでは無い。

「少年少女よ welcome! 陽気な world が出迎える!」

そう彩ちゃんが歌う。そう、今日の僕の曲は全てパスパレの皆と歌う。彩ちゃんとだけじゃない。パートによっては千聖や日菜ちゃん、麻弥ちゃんにイヴちゃんも歌ってくれる。勿論、僕だってパスパレの曲を歌うし演奏する。正にお祭り。正にプレゼント。僕とパスパレの皆からの、盛大なクリスマスマスプレゼント。全てが特別仕様のお祭りだ。

「パーティーを始めようさあー・・・イツツ、シヨ、ターイム!」

最後のパートを全員で歌い切り、はち切れんばかりの大歓声が僕たちのパフォーマンスに伝えてくれる。だけど、まだ休ませる気は毛頭ない。

「まだまだ行くよー!。パスパレポリューションず☆!」

彩ちゃんのその紹介とともに、演奏が始まる。そして、迎える大歓声。と同時に起こるどよめき。パスパレポリューションず☆。今となつてはパスパレを代表する楽曲となつたこの曲。パスパレと言えはこの曲を挙げる人も多いだろう。そんな曲を、こんな序盤に持つてくる。パスパレのことをよく知つてるファンほどどよめく。だからこそ、裏をかいてこの序盤に持つてきた。

今日の合同ライブのタイトルは、黒城雅×Pastel*Palettes Sur

Priseparty in

Christmasとなっている。つまり、サプライズに主題を置いたライブなのだ。だからこそ、このセトリもサプライズが詰まっている。僕たちのことをよく知っているファンほど、そのサプライズに驚き、歓喜するはずだ。あまり知らない方には、そのまま僕たちの音で、声でサプライズを与えてあげればいい。想像以上に、素晴らしい音楽だったと。

そして今回のパスペレポリューション☆。この曲もまた特別なものになっている。なんとと言っても、僕も演奏し、歌うのだ。この曲を作るにあたり僕は、この曲に僕の色を入れないことをコンセプトに作曲をした。僕のアイドルソングの師匠とも呼べる人物、仁さんの教えの通りに。

この曲は、もうパスペレの五人の色に染まっている。五人の色で完成している。ただ今日は、今日だけは、ここに僕という六色目をむりやり加えこむ。その結果は、演奏が終わった後の地を割る大歓声が教えてくれる。大成功だ。文句なしの。正直、このまま余韻に浸っていたいほどの満足感だった。だけど今日のライブは、まだまだ終わらない。次のサプライズだ。

「次の曲は、僕たちの大切な友人であるバンドからお借りした曲です。聞いてください。

Neo—Aspect」

その僕の声に、また大歓声とどよめきが起こる。今日のために、友希那からこの曲を借りる許可をもらっておいだ。最も、友希那はメンバーの誰にもこのことを伝えていなかったみたいだけだ。その証拠に、観客席にいるあちゃんの顔が驚きすぎて面白いことになっている。巴ちゃんもあちゃんんほどではないけど、その顔はその驚きようを現している。あちゃん達から少し離れたところにいる他の *Afterglow* の皆も巴ちゃんと同じようになっている。ひまりちゃんの顔はさらに面白いことになっているけど。そこから更に少し離れたところには、他の *Rosealia* の皆もいた。驚愕しているリサちゃん、紗夜ちゃん、燐子ちゃんに向かって、ドヤ顔をしている友希那。その顔、ちゃんと見えてるからね。後でいじるネタにしてあげよう。

舞台の上からは、意外とお客さんの顔はよく見える。あの人、いつもライブに来てくれるお客さんだ。あの子、僕の学校の生徒だ。先生も来てる。なんてライブ中に思うことは、よくある話だ。と、まあそんな話は置いておいて、*Neo-Aspect* だ。真正銘、*Rosealia* の楽曲。その意味するところは、新たな姿。この曲によって、僕たちの新たな姿、境地をお客さんに見てもらおう。パスパレにとつては、初となるカバー曲。僕にとつても、カバー曲というのは非常に珍しい。

彩ちゃんが曲に合わせて振り付けを行う。まるで手を、仮面かのように表した振り付け。この振り付けも、事前に友希那にレクチャーしてもらっていた。紗夜ちゃんと同じ

ギターパートを弾く日菜ちゃん。色々と思うところもあるのだろう。その表情からは、哀愁のようなものを感じる。そして、最後のサビが終わり、彩ちゃんががまるで仮面が割れるかのような振り付けを行う。

「うおーおーおーおーおー！うおーおーおーおーおー！うおーおーおーおーおー！うおーおーおーおーおー！」

そして、お客さんと一緒に歌う。声の限り。僕たちに合わせて、客席から見えていく。今、この会場は正しく一体となっていた。そして、曲が終わる。惜しみない歓声と拍手が僕らを出迎えてくれる。

演奏を終えた僕たち。不意に、友希那と目が合った。彼女は、満足気に頷くことで僕達の演奏に応えてくれた。今回、Neo-Aspectを借りることに、友希那に、一つ条件を付けられていた。それは、彼女が満足のいく演奏を本番で披露すること。どうやら、その条件はちゃんと守られたようだ。

本来パスペアの皆が演奏する曲調とは全く異なるこの曲。皆、見事にやりきってくれた。正しく、新たな姿を見せてくれた。今の彼女達には、きつと無限の可能性が詰まっている。僕も、もっと色んなジャンルの音楽を彼女達に与えてあげてもいいかもしれない。

「それじゃここで、メンバー紹介行くよ！」

僕はその声に合わせて、彩ちゃんが一歩前に出る。メンバー紹介は、彼女の仕事だ。

「はい！まん丸お山に彩りを！Pastel*Palettesのボーカル丸山彩です！」

お決まりのセリフとポーズで自己紹介をする彩ちゃん。見慣れたその自己紹介。その短い時間に彩ちゃんらしさがたつぷり詰まっている。

「まずは、ギター担当の、氷川日菜ちゃん！」

「皆ー！今日もギューンとしていくから、きらつとして帰ってね！」

その言葉の通り、ギューンとギターを弾きながら挨拶する日菜ちゃん。その後には観客席に向かって手を振ってるが、体の向きと視線から見ても、紗夜ちゃんに向かって振ってるようにしか見えない。いや、きつとそうなのだろう。

「ベース担当、白鷺千聖ちゃん！」

「皆さん！今日は最後まで、私達のサプライズな演奏を楽しんでみてくださいね！」

そう言つて、歓声に手を振り応える千聖。非常に様になっている。流石の貫禄と言つたところだろうか。

「キーボード担当、若宮イヴちゃん！」

「私も、ブシドーを胸に精一杯頑張ります！私のブシドー、最後まで見ていてくださいいね

!

イヴちゃんは、そう言うのと静かにキーボードを奏でた。まるで、多くは語らずとも、この音でブシドーを皆に教えてみせるとでも言うかのように。

「ドラム担当、大和麻弥ちゃん！」

「ジブンも、今できる精一杯の音で 皆さんの期待に応えようかと思えます！ジブン達の演奏最後まで見ててください！」

そう言う麻弥ちゃんの表情は、まだ少し硬い気がする。まだ緊張が解けないのだろう。それでも、ここまでの三曲は、立派に演奏してくれた。麻弥ちゃんがリズムを作ってくれたからこそ、三曲の成功があった。それは間違いないだろう。

「そして最後は、私たちの大切な、最高の友人、ギターボーカル、黒城雅！」

千聖にそう紹介され、軽くギターを弾く。今日も相棒の調子は良さそうだ。きっと僕に、最上級の音を奏でさせてくれるだろう。

「黒城雅です！今日も皆さんに、最高の音を届けるために来ました！それじゃ早速、次の曲を聞いてください。Voice of Love」

愛の声。この夏にリリースした、僕の比較的新しい楽曲だ。告白したくても、その一歩が踏み出せない。そんな愛に悩む人を主題に置いた曲だ。そんな人へ向けた、応援歌の一面も持っている。

「とーどーけー！あいのこーえよー！さーけーべー！あいのまーまにー！」

届け、叫べの部分はお客さんも一緒に歌ってくれるようになっていく。まだライブで披露したのは数度だけど、既に定番になってきている楽曲だ。客席にマイクを向けて煽るのも定番になってきている。

「はーしーれー！あいのほーうにー！すーすーめー！あいとーもにー！めーぎーせー！あいのごーおるー！つーかーめー！あいのすーひーとをー！さーあーさけべー、マーーイラーヴー！」

そして曲が終わる。わかりやすく会場に一体感を与える曲。Neo Aspect に続き、最高の一体感を観客の皆は見せてくれた。会場の熱気もこれで最高潮に達したのではないだろうか？その後も、僕たちのライブは続いていく。観客に驚きと興奮を与えつつ続いていく。そして……

「皆さん！今日は、来てくださって本当にありがとうございます！残念で仕方ないですけど……次が最後の曲です！」

彩ちゃんのその宣言に、会場から悲壮感が漂ってくる。皆、心の底から残念に思ってくれているみたいだ。嬉しいと思うと同時に、僕も悲しくなってくる。今日のライブは、本当に最高級のものだった。いつまでもこの時間を共有していきたい。そう思うほどに。

「最後の曲は、簡単にできる振り付けもありますので、是非、一緒に踊りましょう！それでは聞いてください！ゆめゆめグラデーション！」

ゆめゆめグラデーション。この曲は、比較的最近皆に贈った曲だ。夢を追う人への応援ソング。この曲を、最後に持つてきた。この曲も、簡単な振り付けによつて、会場の一体感を増幅させる。最後の最後まで会場を一体にするセトリ。その効果は絶大で、お客様の顔はどこもかしこも綺麗な笑顔が浮かべられていた。本当に、この時間が名残惜しい。だけど、物事には必ず終焉が訪れる。それを証明するかのように、最後の曲、ゆめゆめグラデーションが終わりを迎えた。

「皆ー！今日は本当にありがとう！また、会おうね！」

僕の声が続いて、皆舞台袖へと消えていく。鳴りやまない歓声が、僕たちに特大の余韻を与えてくれる。そして、その歓声はすぐに、ある言葉の大合唱へと塗り替えられていく。

「アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！」

僕たちの音をまだ聞きたいと熱望する、この至福の時間をまだ欲する、観客たちの大合唱。その音が、僕たちを余韻から引き戻す。

「ははっ、皆まだまだ元気みたいだね」

「そうね。私達も負けてられないわね」

「あたしもまだまだ弾いていたいな。だって、今日のライブ、すっごくくびかってしてるんだもん！」

「ジブンも、最初は緊張しすぎて、楽しむ余裕もあまりなかったんですけど、今はこの時間が楽しくて仕方ないです！」

「私も同じ気持ちです！今日という日が、この熱戦がまだまだ続いてほしいです！」
「うん！そうだね！私ももつと歌っていたい！だから、行こう！」

彩ちゃんの言葉に続いて、僕たちは舞台へと再び足を進める。僕たちの姿を再び確認して、お客さんたちから今日何度目かもわからない大歓声が沸き起こる。その声が、僕たちの疲労感を拭い取ってくれる。僕たちの準備はとつくにできていた。

「皆！アンコールありがとう！それじゃ早速……」

と、僕がアンコール後最初の曲に入ろうかと思つた時だった。舞台の、いや会場の照明が一齐に消えた。まさか、ここにきて証明トラブル？そんな……折角のライブでこんなことが起こるなんて。

僕は、どうしていいのかもわからず、舞台上で立ち尽くすことしかできなかった。皆に声をかけようにも、なんて声をかけていいのかもわからない。お客さんの顔も、皆の顔も暗すぎて見えない。唯一、一番近くにいた彩ちゃんの様子だけは見えた。どうやら、彼女も僕と同じ状況らしい。どうしていいかもわからず、声を出すこともままなら

くつ、反論できない。昔から、隠しごとが苦手な僕が、彩ちゃんにバレずに普段通り生活できるかと聞かれたら、絶対できるとは答えられないだろう。自分で言つて悲しくなつてきた。

「それじゃ、彩ちゃん。火を消してくれるかしら?」

「思いつきりやつちやつてください!」

「アヤさんのブシドーを見せる時です!」

「うう……皆、本当にありがとう……」

「あはは、彩ちゃん今日もカンキワマリ、だね!」

皆の気持ちが嬉しくて、温かな涙を流す彩ちゃん。僕も思わずもらい泣きしてしまい。そうな、美しい光景がそこには広がっていた。パスパレの皆の絆が描く、美しい光景が。『そ、それじゃあ、行くね……』

そう言つて彩ちゃんは、涙を流しつつも、一息でろうそくの灯を消して見せた。それと同時に、観客席からも大きな歓声と拍手が送られてくる。

「おめでどう!」

最初に言つたのは誰だつただろうか。僕達舞台上の誰かだつたかもしれないし、観客の誰かだつたかもしれない。だけど、そんなことは本当に些細なことだ。早い遅いは関係なく、伝えたい想いは皆一緒なのだから。

その言葉は伝播し、やがて会場全体がその一言に覆いつくされる。おめでとう。皆口にする言葉は、その一言。声を揃えておめでとうと。愛情を込めておめでとうと。その後もしばらくの間。その大合唱は続くのだった。彩ちやんの涙が止まるまでずっと。ライブ中のあまりにも美しすぎる一幕。僕は、いいや、この会場で携わった全ての人は、きつと今日のこの光景を、ずっと覚えていくことだろう。何年たつても、ずっと。ああ、本当に彼女たちと出会えて良かった。そう心から思う、聖なる夜的一幕だった。

第48演目 あなたがいてくれたから

「彩ちゃんのためにサプライズをする？」

そう日菜ちゃんが口にする。今日は十二月二十四日。ライブを翌日に控えた中、私は今自宅のキッチンに立っていた。と言つても、この場所にいるのは何も私だけではない。日菜ちゃん、イヴちゃん、麻弥ちゃんの三人も一緒だ。そして私は、そこで三人に今回集まってもらった理由を説明している。

今回皆に集まってもらったのは、明日のライブで彩ちゃんのお誕生日をお祝いするサプライズを行なおうと考えており、その計画のために皆でケーキを作ろうと思ったからだ。皆には内容まで伝えていなかったけど、彩ちゃんと雅には今日のことをバレないように、仕事があると誤魔化しておいてほしいと説明してある。もちろん、スタッフさんにもちゃんと事前に計画は説明し、実行する許可もいただいている。

「なるほど。そういうことなら、ジブンは大賛成ですね」

「私もです！ 凄く、素晴らしいことだと思います！」

「うん！ なんだかおもしろそう！ すっごく、るんつてきたよ！」

皆が私の案に同意してくれるのはわかっていた。私もそうだけど、皆彩ちゃんのこと

を大切に思っている。何かしらの方法で、彩ちゃんを喜ばせたいと考えるのは、私たちにとって当然の行為なのだ。

「それじゃ、早速始めましょうか」

そして私たちは、各自分担を決め、作業に取り掛かった。正直、皆のケーキ作りに対する実力は未知数だったので、ちゃんと形になるか不安だったのだけでも、私の想像以上に皆手際が良くて、嬉しい誤算だった。

イヴちゃんは、普段からジンジャークッキーを作ってるからこそ手際が良いのはわかる。麻弥ちゃんも、普段の彼女を見てる限り、お菓子作りに関しての手際が良くて、頷ける。ただ日菜ちゃんに関しては完全に予想外だった。

「日菜さん、なんだかすごく手馴れてますね」

そう。彼女は私たちの予想以上に手馴れていた。しかも、驚くべきポイントはそれだけではなかった。

「ん？皆、じつとあたしのこと見て、どうしたの？」

今日菜ちゃんが行っている工程は、牛乳やグラニュー糖等の計量作業なのだが、彼女はかり量でしっかりとグラム単位まで計量しているのだ。お菓子作りにおいてその行いは非常に重要なことなのだけでも、まさかあの日菜ちゃんがそこまできっちり計量まですると思わず、皆で注視してしまった。

「いえ、日菜ちゃん、しつかり計量までしてて凄いと思っただけよ」

「それはもちろんするよ。お菓子作りには、力を入れなければいけないところと、入れなくていいところがあるんだよ。計量は力を入れないといけないところ。お菓子作りにとつては、すつごく大事なことももんね」

その言葉に、私はまた驚いた。お菓子作りに対する考え方までしつかりしている。日菜ちゃんの意外な一面を見た気がする。

「ひ、ヒナさん凄いです！まるで、お菓子作りの先生みたいです！」

「あはは、これはあたしが考えたんじゃないかと、お姉ちゃんの受け売りなんだけどね」
「紗夜さんのですか？」

「うん！この前、おねーちゃんにクツキ作り教えてもらったんだ！その時におねーちゃんが言ってたの！」

そういえば、この間、日菜ちゃんが練習の時にクツキーを作ったからと頂いたのを思い出した。初めて作ったと言つてた割には美味しくて、皆で日菜ちゃんのことを褒め称えたのを覚えている。あれから、まだほんの一、二か月程しか経っていないはずだ。その短い期間にも関わらず、既に多くの経験を積んできたかのような手際を見せている。そこは、流石の日菜ちゃんといったところだろう。

「でも、本当に驚いたわ。正直、日菜ちゃんのことだから、もつと大雑把にやるんじゃない

いかと心配してたのよ」

「うっ、それは……」

そう私が言うと、日菜ちゃんは急に気まずそうな顔をする。その日菜ちゃんの反応で皆察した。あ、大雑把にやって失敗した経験があるんだなと。

「そ、そう言えば、今日雅君は呼ばなかったの？」

「露骨に話題を変えましたね」

「ま、まあ、ヒナさんはやっぱりヒナさんだということがわかったので安心しました！」

「ふっ、そうね。雅だったわね。雅は、ほら、彩ちゃんにバレるかもしれないから」

「あ」

私のその言葉で、また全員が察した。雅は、隠しごとが苦手だ。隠そうと思っても、顔に出してしまうことが多い。そんな雅に、サプライズのことを話せば、彩ちゃんに隠し事がバレてしまうことも考えられる。それを避けるために、敢えて雅にも隠しておくというわけだ。

「でも、千聖ちゃんも残念だね」

「残念？何がかしら？」

「だって、折角のクリスマススイヴだよ？それなのに、雅君とデートに行けなくて、残念じゃないのかなーって」

「私もそう思います！今日は、一年に一度の特別な日なんですから！」

「千聖さん、ここはジブン達に任せていただいて、雅さんと出かけていただいても大丈夫ですよ？明日も、デートする時間なんて無いんですし」

そう、皆が私に声をかけてくれる。皆のその気遣いは非常にありがたい。私のことを考えてくれて、本当にありがたい。だけど、私は本当にこれで大丈夫なのだ。

「皆、ありがとう。だけど本当に大丈夫よ。今は、彩ちゃんのために何かをしてあげたいの」

彩ちゃんはどう思っているか知らないけれども、私は、彩ちゃんに恩を感じている。今のパスパレが、パスパレとして活動できているのは、パスパレとして纏まっていられるのは、彩ちゃんがいてくれたからだ。私は、いいえ、おそらく今日ここにいるみんながそう思っている。私は、少しでもその恩を彩ちゃんに返したい。だからこそ、今日という日を設けたのだ。

「それに、雅とは今日の夜ディナーに行くからいいのよ。それだけで、十分だわ」

「ヘーディナーか。どこに行くの？」

「このお店よ」

そう言つて、私は一冊の雑誌のページをめくり、日菜ちゃんに渡した。それを、麻弥ちゃんとイヴちゃんも覗き込み、そして皆顔を驚愕色に染め上げる。

「こ、ここ私知ってます！凄く予約するのが難しいってテレビで言っていました！」

「あたしも知ってるよ！学校でも皆、一度は行ってみたいって話題で持ちきりだったよ！」

「しかも、今日予約されてるんですか!?クリスマススイヴにこのお店を予約できるって、一体いつから予約してたんですか!?!」

「ふふっ、実は去年の内に予約してあったのよ」

「そう言うと、皆キョトンとした顔になる。まあ、普通はそういった顔になるだろうなと思う。だって去年といえは・・・」

「去年って、まだ千聖ちゃん達付き合ってたじゃなく」

「そう。私と雅はまだ付き合っていなかった。にもかかわらず、このカップル御用達の店を予約してあった。驚くのも当然だろう。」

「もし、千聖さんと雅さんがまだ付き合ってたなら、どうされてたんですか?」

「どうもしないわよ。そのままこのお店に行ってたと思うわ」

「付き合ってもいないのに、チサトさんとミヤビさんがこのお店に・・・なんででしょうか?想像しても違和感がありません・・・」

「そういえば、千聖ちゃん達って付き合う前から付き合ってたみたいなものだったもんね」

「日菜さん。言ってることがめっちゃくちゃになってますよ。間違つてはいませんか」

私と雅は、昔からなんで付き合つてないの?とよく言われてきた。それほど、傍目から見たら付き合つてるようにしか見えない状態だったのだ。思い返せば、確かにその通りだと思うことも多々ある。通い妻と一度イヴちゃんに言われたこともあつた。今思えば、その言葉を否定できる材料が一切ないという現実がわかる。

「そういうえば、ミヤビさんは今日お仕事では無いのですか?」

「ええ。今日は、事務所のスタジオで明日に向けての最終調整をするって言つてたわ。だから、終わったら事務所まで迎えに行くつもりよ」

「事務所といえ、今日千聖ちゃんの家に来る前に、あたしも事務所に寄つてきたんだけど、彩ちゃんがいたんだよね」

「彩さんが?日菜さん、今日ここに來ること彩さんに言つてませんよね?」

「大丈夫大丈夫!ちゃんと、今からお仕事だつて言つて誤魔化したから!スタツフさんも協力してくれたし、絶対バレてないよ。で、彩ちゃんんだけど、今日雅君と二人で練習するんだつて言つてたよ」

パキツ

日菜ちゃんがそう言い終わると同時に、そんな音がキツチン内に響き渡つた。三人の視線が私の手元に集まっている。音の発信源がそこなのだから、それも当然だろう。

私としたことが、ついついやってしまった。まさか、手に持っていた生卵を握りつぶしてしまふなんて。

「ち、千聖ちゃん・・・?」

「お、おかしいですね。ジブンの記憶が正しければ、人の力で生卵を握りつぶすのは不可能だったと思うのですが・・・」

「あら、ごめんなさい。そう、彩ちゃんが雅とね。雅と、イヴに、二人きりで。ふふっ」
「ひっ、ち、チサトさん、笑顔が怖いです・・・」

皆、何かにおびえるように顔を青くしている。どうしたのかしら?体調でも崩したのかしら?明日はライブ本番なのだから、体調管理には気をつけてほしいのだけでも。

まあ、そんな風にグダグダと駄弁りながらの作業だったけれども、ケーキ自体は無事に完成した。それも、素晴らしい出来になった。これで、明日へ向けての準備は完璧でしょう。その後、皆とは別れ、私は雅を迎えに行くついでに、事務所までケーキを運んだのだった。事務所までの道中で、彩ちゃんとオハナシする内容ばかり考えてたことを追記しておく。

そして、ついにライブ当日を迎えた。今日という日をどれだけ待ち望んだことか。このライブが決まった時から、気が気ではなかった。今日のことを一番に考えて、生活を送ってきた。雅と同じ舞台上上げられる。こんな日が来るなんて、当日になつても信じられなかった。だけど、これは現実。間違いない現実であることを、確かにこの耳に聞かえてくる、開演を待ち望むお客さんの声が教えてくれる。

「凄い声援だね。控室にいてもお客さんの声援が聞こえてくるや」

「そうね。皆、私たちのことを待っていてくれるのね」

「わ、私ちよつとお手洗いに行つてくる！」

「あはは、彩ちゃん十分前に行つたばかりだよ！緊張しすぎー！」

「ジブンからしたら、いつも通りでいられる日菜さんの方が不思議ですけどね。ジブンを緊張して頭が真っ白になってきました・・・」

「マヤさんフアイトです！もうすぐ合戦の時間ですよ！」

「あはは、イヴちゃん別に今から戦をするわけじゃ無いんだよ」

緊張してたり、それでもなさそうだったりする皆。総じて言えることは、いつも通りということ。この状態なら、いつも通りのパフォーマンスが期待できそうだと。

「皆さん、時間です！舞台の方によりしくお願ひします！」

そして、スタッフさんからお呼びがかかる。遂に時間がやってきた。このような機会、二度目があるのかわからない。なら、今日この機会を、悔いの無いように、全力で堪能したい。

「さあ皆、悔いの無いように全力で行こう！」

「はい！ブシドーの力で、絶対皆さんが満足できる演奏をしてみせます！」

「そうですね。ジブンも、悔いが残るのは流石に嫌です。ですので、全力で行きますよ！」

「わ、私も、凄く緊張して、覚えたMCも忘れちゃいそうだけど、それでも今日のライブを思いっきり楽しみたい！そのために、皆で頑張ってきたんだから！」

「あはは、皆やる気十分って感じだね。うーん、なんだかあたしもるんってきた！思いっきりぴかっつてしたステージにするからね！」

「そうね。こんなお祭り、今後参加できるかなんてわからないもの。だから、今できる最大限の演奏で、お客さんの期待に応えてみせるわ。皆、思いっきり楽しみましょう！」

そう私が締めくくり、控室の扉を開く。控室を出て、静かに歩き出す。歩あゆむは、栄光への道。きつとこの先に、素晴らしい栄光が待っている。私たちは、その栄光をつかみ取るため、静かに、強く、歩を進めるのだった。

開演まで、残り五分を迎えていた。開演時刻が迫ってきたこともあり、観客席から聞こえる歓声も、さらに大きくなってきた。流石に、私も少し緊張してきた。歓声の大きさに比例して、緊張が増していくように感じる。だけど、それ以上に今、楽しくて仕方がなかった。開演する前から、既に。もしこのまま、開演してしまえばどうなるのだろうか？ 私にもわからない。だけど、今以上に楽しいことが待っているのは間違いない。それだけわかっただけで、きつと十分だろう。

「それでは、開演しますー！」

スタッフさんがその声をかけてくれると同時に、会場に流されてた曲が止まる。ほんの一瞬訪れる静寂と、すぐさま湧く期待感をはらんだお客さんの声。それを後押しするかのように、BGMが流れ出す。

「皆ー行くよー！」

雅が皆に声をかける。それと同時に、まるでお客さんを煽るかのようにBGMのテンポが早くなる。早くなり、早くなり、そして止まる。止まった後に聞こえるのは、期待感が最高潮に達した、お客さんの悲鳴のような歓声だけだ。その歓声を聞きつつ、私た

ちは舞台上に躍り出た。

「みんなー！メリークリスマース！」

舞台の上に立った私達を、お客さんの大歓声が包み込む。今日はクリスマス。それに関んで、私たちの衣装はサンタ服をモチーフにした衣装になっている。

「それじゃー挨拶代わりに一曲行くよー！welcome to my world
！」

ライブの一曲目が始まる。楽しい時間の開幕を告げる曲。そこに、雅の代表曲の一つ、welcome to my worldを持つてきた。花女の文化祭でも演奏した曲。あの時は、花音も、薫も、イヴちゃんもこの曲の演奏難易度に苦い顔をしていた。その曲に、今日はパスパレの皆で挑戦する。

まあ、挑戦すると言つても、散々今日までこの曲は練習してきた。イヴちゃんと私は、既に文化祭の時にマスターしているし、日菜ちゃんと麻弥ちゃんは流石と言うべきか、あっさりと演奏できるようになってしまった。彩ちゃんは、歌えるようになるのに少し苦労していたけれども。だけど

「少年少女よwelcome！陽気なworldが出迎える！」

彩ちゃんが見事な歌唱を見せる。少し、音程がずれてしまっている部分も見受けられるけれども、それもまた愛嬌だ。彩ちゃんらしくいいことだと思う。及第点以上は聞

違いないでしょう。

「パーティーを始めようさあー．．．イツツ、シヨ、ターイムー！」

そして、最後のフレーズを全員で一緒に歌い、開幕を告げる曲の演奏が終了する。だけれど、開幕からお客さんも、私達も、休ませる気はない。

「まだまだ行くよー！ パスパレポリューションず☆ー！」

パスパレポリューションず☆は、普段のライブではこんな序盤に持つてくることは無い。私たちの、締めめの定番とも言える曲になっている。そんな曲を、この最序盤に持つてきた。正に攻めのセトリ。正にサプライズなセトリ。今日の私たちは、非常に攻撃的だ。最後の最後まで、お客さんを休ませるつもりは一切ない。勿論、私達も休む気が一切ない。そのために、この日まで体力トレーニングに精を出してきた。

その成果は間違いなく出ている。皆、以前に比べて体力が倍以上だったのでないだろうか？ おそらく、メンバーの中で一番運動ができないのは私だ。そんな私が、このセトリの演奏を最後までやりきることができるのだ。他の皆なら、更にセトリを増やしたりしても、問題なく熟せそうな気がする。正直、私は今回のセトリで精いっぱいだ。今回のライブが終わっても、体力トレーニングを続けていこうと、今決めた。

そして、パスパレポリューションず☆が終わる。攻めに攻めた開幕二曲。だけれど、何も攻めるのはこの二曲だけではない。更なる追い打ちをかける、驚きを含んだ攻めの三

おーおーおー!

お客さん達と声を揃えて歌う。会場が一体になるように歌う。新たな境地へ向けて歌う。歌って、歌って、そして終わる。曲とは、やがて終わりがくるもの。もつと演奏していた気持ちはあるけれども、そういうわけにはいかない。だけど、今日はまだまだ演奏する曲が他にもある。意識を、早く次の曲へ向けていこう。だけど、その前に「それじゃここで、メンバー紹介行くよ!」

メンバー紹介だ。ライブにおいて、大事なこと。私たちのことをよく知らずに、今日この場所に足を運んでくれるお客さんもしかしたら中にはいるかもしれない。そういう人に、私たちのことをよく知ってもらおう。また次も来てもらえるように。

「はい!まん丸お山に彩りを!P a s t e l *P a l e t t e sのボーカル丸山彩です!」

そう彩ちゃんが一步前に出て自己紹介をする。メンバー紹介は基本的に、彩ちゃんの仕事だ。私達も、この一年足らずでライブを数多く熟してきた。その数だけ、メンバー紹介を行ってきた彩ちゃん。もう慣れたものだ。

「まずは、ギター担当の、氷川日菜ちゃん!」

「皆!今日もギューインとしていくから、きらつとして帰ってね!」

自己紹介代わりにギターをかき鳴らす日菜ちゃん。今回のセトリは、雅の曲も数多く演奏しないとイケないため、私達も練習時は苦労した。だけど、やっぱり日菜ちゃんは日菜ちゃんだった。難易度の高い雅の曲も、あつという間に物にして見せた。本当に、羨ましいばかりの才能だ。

「ベース担当、白鷺千聖ちゃん！」

「皆さん！今日は最後まで、私達のサプライズな演奏を楽しんでみてくださいね！」

歓声に、手を振り応える。超満員の会場。今日の動員者数は、私たちが未だかつて経験したことのないほどの人数になっている。勿論、私達だけの力ではこれだけの人を集めることはできなかつただろう。雅の効果はやはり大きい。

「キーボード担当、若宮イヴちゃん！」

「私も、ブシドーを胸に精一杯頑張ります！私のブシドー、最後まで見ててくださいね！」

そう言つて、キーボードを奏でるイヴちゃん。イヴちゃんも、キーボードを弾く姿が様になってきた。まだキーボードを始めて一年も経っていないなんて信じられない。今日のセトリを全て熟せる時点で、もう素人とは言えないだろう。

「ドラム担当、大和麻弥ちゃん！」

「ジブンも、今できる精一杯の音で 皆さんの期待に応えようかと思えます！ジブン達の演奏最後まで見ててください！」

麻弥ちゃんは、さすがにまだ緊張しているようだ。その表情は流石に硬い。だけど、この舞台を楽しみたいという想いもひしひしと伝わってくる。きつと、彼女なら今日も最高のリズムを刻み続けてくれるだろう。

「そして最後は、私たちの大切な、最高の友人、ギターボーカル、黒城雅！」

そう私が雅を紹介する。雅の紹介だけは、私にさせてほしいと、彩ちゃんとスタッフさんをお願いしていたのだ。二人とも、すんなり許可を出してくれてありがたかった。

「黒城雅です！今日も皆さんに、最高の音を届けるために来ました！それじゃ早速、次の曲を聞いてください。Voice of Love」

自己紹介と共に、次の曲を告げる雅。Voice of Love。この曲は、この夏にリリースされたばかりの雅の新しめの曲。実は、文化祭の時もセトリに入っていた曲だ。実はこの曲、主題においてはwelcome to my worldと同じく雅本人らしい。愛に生きる道を選んだ雅本人。まあ、雅自身は恥ずかしいから、あんまりこのことを誰かに言いたくはないそうだけど。

「とーどーけー！あーのこーえよー！さーけーべー！あーのまーまにー！」

歌いながらも、マイクを観客席に向けて、観客のコールを煽る雅。その姿は、非常に

様になっていて、カッコよかった。正に、舞台上の王様。従者を鼓舞する王様の姿。この姿を見れば、皆も雅がファンから様付けで呼ばれ、ファンのことを従者と表現する意味も分かるだろう。

「はーしーれー！あーのほうにー！すーすーめー！あーととーもにー！めーぎーせー！あーのーのーおるー！つーかーめー！あーすひーとをー！さーあーさけべー、マライラヴ！」

最後のフレーズを、また全員で歌い、曲が終わる。本当に、良い曲だ。それに、お客さんたちの一体感も増している。会場内の熱気も最高潮に達したのでは無いだろうか？ だけど、まだまだ終わらない。この最高の時間は、まだ終わらない。だけど、いつかは必ず終わりが来るもの。その後、何曲も何曲も演奏し、そしてその時は、やってきた。「皆さん！今日は、来てくださって本当にありがとうございます！残念で仕方ないですけど・・・次が最後の曲です！」

彩ちゃんの声が、その時が来たことを会場内に告げる。目に見えて、気落ちするお客さん達。その気持ちは、私達も一緒だ。永遠に続けば良いとさえ思える最高の時間。だけど、永遠なんてものは願ってもやってくることはない。ならせめて、今日集まってくれたお客さんに、最高級のパフォーマンスを披露してお別れしよう。また、絶対に私達を見に来たいと思えるような、最高級のパフォーマンスを。

「最後の曲は、簡単にできる振り付けもありますので、是非、一緒に踊りましょう！それでは聞いてください！ゆめゆめグラデーション！」

彩ちゃんが曲名を告げる。ゆめゆめグラデーション。夢を追う人達への応援ソング。きつと、今日の会場に集まってくれたお客さんの中にも、必死になつて、藻掻きながら夢を追いかけている、そういった人がいるだろう。素敵なことだと思う。

正直、私にはよくわからないことだけど。私には夢というものが無い。いくつか、掲げている目標はあるけれども、夢と言えようなものはない。だから、夢を追う人の気持ちというものがあまりわからない。だけど、雅や彩ちゃんを見れば、それはきつと素晴らしいことなんだということがわかる。だって、自分の夢について語る二人は、本当に目が眩むほどに輝いているのだから。

そんな、輝いている人達のために雅が作った曲。きつと、雅自身へも向けた、自分への応援歌といった意味もあるのだろう。夢を追う全ての人に笑顔でいて欲しい。そういう思いを込めて、この素晴らしくも輝かしい曲を演奏していく。頑張れ、頑張れと想いを込めて演奏し、叶え、叶えと願いを込めて歌い、そして曲が終わる。

「皆ー！今日は本当にありがとう！また、会おうね！」

雅がそう言うのと合わせて、全員で手を振りながら舞台袖へと消えていく。終わった。楽しい時間は本当にあっという間だ。あー、また今すぐにでもあの場所に帰りたい

い。帰って、また皆で演奏がしたい。そう思わずにはいられない、最高の時間だった。まあ、その願いは現実の物となるわけだが。

「アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！」

お客さんが、魔法の言葉を唱える。私達を再度舞台に呼び戻す、とびつきりの魔法の言葉を。その魔法の言葉は、唱えられる度に、大きくなり、そして声が重なつていく。早く帰ってこい、帰ってこいと私達に呼びかける。その呼びかけに、私達が応えない訳がないだろう。

「ははっ、皆まだまだ元気みたいだね」

「そうね。私達も負けてられないわね」

「あたしもまだまだ弾いていたいな。だって、今日のライブ、すっごくくびかってしてるんだもん！」

「ジブンも、最初は緊張しすぎて、楽しむ余裕もあまりなかったんですけど、今はこの時間が楽しくて仕方ないです！」

「私も同じ気持ちです！今日という日が、この熱戦がまだまだ続いてほしいです！」

「うん！そうだね！私ももつと歌っていたい！だから、行こう！」

皆の気持ちは一緒だ。この時間を、お客さん達とまだまだ共有していたい。そのため、直ぐさま舞台へ舞い戻る。だけど、何も今日の目的は演奏することだけじゃ無い。

日菜ちゃん、麻弥ちゃん、イヴちゃん、そして少し離れた位置にいるスタッフさん達にも、雅と彩ちゃんにバレないように、アイコンタクトで合図を送る。皆、私の意思を感じ取ってくれたようで、静かに頷いてくれる。さあ、今日最大のサプライズの幕を開けよう。そう意気込み、私達は再び舞台へと舞い戻った。

「皆！アンコールありがとう！それじゃ早速……」

出迎えてくれた歓声に応えつつも、直ぐさま雅がアンコール一曲目に入ろうとした時だった。突然、会場中の照明が落ちた。勿論、これは事故などではない。スタッフさんの演出だ。突然のことに驚き、どうしていいかわからずその場で立ち尽くす雅と彩ちゃん。それは、お客さん達もそうだろう……と思うかも知れないが、実はお客さんには演出の一環で場内が真っ暗になることを事前に周知してあったのだ。お陰で、皆、大人しいものだ。だけど、ずっとこのまま暗いままなわけにもいかない。そろそろ、スタッフさん達の準備もそろそろ大丈夫みたいだ。その証拠に、スポットライトが照らされる。彩ちゃんを照らす、スポットライトが。さて、それでは私もお仕事をするとしましょうか。

「ハツピバースデートトゥーユー」

マイクを片手に、誰もが知っているあの歌を歌う。想いを込めて、あの歌を。

「ハツピバースデートトゥーユー」

声が増える。日菜ちゃんが、麻弥ちゃんが、イヴちゃんが私に会わせて歌ってくれる。「ハッピーバースデーアアーやちやーン」

四人で歌う。四人で声を合わせて歌う。だけど、四人じゃ足りない。だからこそ、多くの人々の声を集める。スポットライトが私にも照らされる。それを確認して、私は観客席にマイクを向けた。

「最後は皆さんも一緒にお願いします！セーの、ハッピーバースデートゥーユーー！」
会場全体を巻き込んだ大合唱が響き渡る。一人の少女へと向けられた、大合唱が。

「皆さん、ありがとうございます！あさって、十二月二十七日は私たちの愛すべきボーカル、丸山彩ちゃんのお誕生日です！ですので、少し早いですが、この場をお借りしてお祝いをしたいと思います！」

「え、ええええええええええええ！そ、そんなの聞いてないよ！」

それは、ずっと隠してきたのだから当然だろう。聞いてたほうが大問題だ。だけど、彩ちゃんのこんな顔を見れたのだから、隠してきて正解だったと思う。最初から言ったら、きつと彩ちゃんもこんな顔しなかったでしょう。因みにどんな顔かは想像にお任せしようかと思う。きつと、大体どんな顔かわかるでしょうけど。と、彩ちゃんの顔を眺めているとスタッフさんがある物を運んできた。昨日私達で作ったケーキだ。

「昨日私達四人で作ったのよ」

「僕にも言ってくれたらよかったのに」

「雅に言っても、直ぐ彩ちゃんにバレちゃいそうじゃない」

雅の発言を一蹴する。反論したくても、全く反論する余地も無く、雅はただ口をパクパクさせているだけに終わった。いつから雅は金魚になったのだろうか？別に、私は雅を水槽に入れて飼うような趣味は無い。

「それじゃ、彩ちゃん。火を消してくれるかしら？」

「思いつきりやつちやつてください！」

「アヤさんのブシドーを見せる時です！」

「うう・・・皆、本当にありがとう・・・」

「あはは、彩ちゃん今日もカンキワマリ、だね！」

とうとう堪えきれずに泣き出した彩ちゃん。まあ、これだけ皆で頑張ったんだから、泣くぐらいしてくれないと困る。これだけやって、涙もろい彩ちゃんを泣かせることが出来ませんでしたじゃ、私達もなんだか悲しくなってくる。私達の頑張りはなんだつたんだろうと。

「そ、それじゃあ、行くね・・・」

そして、彩ちゃんが見事一息でろうそくを消して見せた。流石ボーカル。肺活量は中々の物だ。一息で消し終わった彩ちゃんに向けて、温かい拍手と声援が送られる。

「おめでとうー！」

そして誰かがおめでとうと言うと、我先にと言わんばかりに次々とおめでとうの叫びが方々から上がり始めた。勿論、舞台上からも。今日のライブのテーマはサプライズ。そして、もう一つ。セトリの時点で決めたテーマとして、一体感というものを挙げていた。今、この会場は間違いなく一体となっていた。彩ちゃんへの想いで一体になっていた。美しい一体感で、この会場は支配されていた。その後も、おめでとうコールは彩ちゃんが落ち着くまでずっと続いた。

「彩ちゃん、もう大丈夫かしら？」

「うんっ！みんな・・・本当にありがとう！私、今日という日を一生忘れないよー！」

「きつと忘れたくても忘れられないでしょうね。ふへへ」

「でも、まだ今日という日は終わっていませんよ！アヤさん、最後まで頑張って行きましょうー！」

「そうだね！あたしももつとるんっつとしたい！だから、あたしももつともつと全力で行くよー！」

「うん！行こう！それじゃ皆おまたせ！アンコール最初の曲は、僕達の共通の友人であるバンド、Afterglowの皆がパスペレのために作ってくれた最高にエモい一曲です！聞いて下さい！Y・O・L・O!!!」

!!!

Y. O. L. O!!!! アンコール一曲目に新曲を持つてくる大胆な采配。アンコールに入っても、攻めのセトリは終わらない。最も、この選曲はそこまで責めているとも思わない。私達は皆、このY. O. L. O!!!という曲に全幅の信頼を寄せている。それだけ、素晴らしい一曲。本当に、未だにこんな良い曲をもらってしまつていいのかわからない。皆のお気に入りの一曲になつてゐる。

今日観客席には、A f t e r g l o wの皆も来てくれている。そちらに目を向けると、皆何やら、照れくさそうな、嬉しそうな、そんなどう反応するべきかわからないとつたような顔をしている。まあ、その気持ちもわからなくもない。ひまりちゃんは、大泣きして周りのお客さんにも心配されてるみたいだけど。大丈夫かしら？

そこから少し離れた場所には、R o s e l i aの皆もいる。彼女達にも目を向けてみると、友希那ちゃんは何やら、静かに笑みを浮かべていた。彼女が何を考えているのかまではよくわからない。だけど、この曲から何かを感じ取つてゐるようだ。その横では、紗夜ちゃんとりサちゃんが、そんな友希那ちゃんを見て優しそうな笑みを浮かべていた。きつと、彼女達には友希那ちゃんを感じ取つたこともわかつたのでしよう。そして、最高にエモい一曲も終わりを迎える。

「ありがとうございました！A f t e r g l o wの皆！最高にエモい一曲を本当にありがとう！」

「私達、この曲が本当に大好き！だから、これからも大切に歌わせてもらうね！皆、ありがとう！」

雅と彩ちゃんが、感謝の言葉で締めくくる。その言葉は、私達の総意。この舞台に立っている全員が、そう思っている。最高の曲、最高のお披露目になったのではないだろうか？だけど、お披露目する曲はこの曲だけでは無い。

「そして次の曲。次の曲も、初披露となる新曲です！」

アンコール新曲二連発。最もインパクトの強いお披露目会にしようと皆で決めたセトリ。そして、この曲は、私にとって特別な曲となった。

「この曲は、ツインボーカル曲です！本来は、私と千聖ちゃんて歌う曲なんですけれども、今日は特別仕様！雅君と千聖ちゃんて歌います！それでは聞いて下さい、ゆら・ゆら Ring—Dong—Dance」

彩ちゃんが曲の紹介をしてくれる。ゆら・ゆら Ring—Dong—Dance。雅が私達のために、私のために作ってくれた曲。この曲を、今日は雅と一緒に歌ってくれ。どうしてこうなったかと言うと、単なる私のわがままで。折角の機会だから、雅と二人で歌いたいとわがままを言ってしまった。だけど、そんな私のわがままを、雅が、彩ちゃんが、皆が受け入れてくれた。

私は、本当に幸せ者だと思う。多くの、最高の人達に囲まれて、最高に幸せな人生を

歩むことができています。雅がいてくれたから、私の人生は色鮮やかな物になった。彩ちゃん、日菜ちゃんが、麻弥ちゃんが、イヴちゃんがいてくれたから、パスパレとして最高のバンド生活を育むことができています。今日この会場に集まってくれた皆がいてくれたから、こんなにも最高の時間を過ごすことができた。少しでも、この恩を返したい。だから、この曲に全ての想いを乗せて歌う。

雅と背中合わせで歌唱する。小さくも大きいその背中が、私を支えてくれている。まさか、こんな日が来るなんて。大きな舞台で、雅と共演するだけに止まらず、一緒に歌うことができるなんて。夢のような時間だった。夢のような現実だった。できることなら、いつまでもこの夢の中にいたい。だけど、それは決して叶えられない願い。夢の終わりがやってくる。

「ありがとうございます！名残惜しいですけど、次が本当に最後の曲ですー！」

会場中から、悲鳴のような歓声が上がる。皆ももうわかっている。もう、夢から覚める時間が近づいているのだと。

「最後は、僕の始まりの曲を歌いたいと思います。今日という最高の一日を忘れないために。メモリア」

メモリア。シンガーソングライター黒城雅としての始まりの曲。今まで、ライブで歌われなかったことは無いのでは無いか？と考えてしまうくらいの彼の代表曲。その曲

名を聞いて、観客席からも待つてましたと言わんばかりの大歓声が起こる。

「わーすーれーえーなーいよー！僕のーつーみーをー！わーすーれーえーなーいよー！君への、かんーしやーをー！皆も一緒にー！S a y！」

「わーすーれーえーなーいよー！」

「僕のーつーみーをー！」

雅の呼びかけに応じて、今日何度目かの大合唱が起きる。今日という日を忘れないと誓う、お客さん達の大合唱が。

「わーすーれーえーなーいよー！」

「皆への、かんーしやーをー」

最後は、雅のライブアレンジで締める。最後の歌詞を君から皆に変えるのは、雅のライブの定番だ。今日集まってくれた、皆への感謝を忘れない。そう意を込めて。そして、この曲を最後に、今日のライブは終わる。

「皆――本当に今日はありがとうございました！また、黒城雅の記憶に、最高の一ページを刻むことができました！本当にありがとうございました！」

「本当に、ありがとうございました！もう、今日のライブが楽しすぎて、あの、その、何を言おうとしたかも忘れちゃったんですけど、本当に最高の一日でした！ありがとうございました！」

「皆！今日は来てくれて本当にありがとう！もう、凄く、るんってしげなっしのライブだったよ！いっぱいいるんつをありがとう！また皆でるんってしようね！」

「皆さん、今日は本当にありがとうございました！私は、今日のライブを絶対に忘れません！だから、皆さんも絶対に覚えていて下さいね。今日来て下さった皆さんがいてくれたからこそ、最高の時間でした！またいつか皆さんと同じ時間を共有したいと思っています！本当に、ありがとうございました！」

「皆さん、今日は本当にありがとうございました！皆さんにも、今日は私のブシドーが伝わったのでは無いかと思います！皆さんのブシドーもたくさん伝わってきました！本当に楽しい時間をありがとうございました！」

「皆さん！今日はジブン達のライブに来ていただいて本当にありがとうございました！最初はジブン凄く緊張してて、ちゃんとドラムを叩いているのかどうかもよくわかってなかったんですけど、緊張が解れてからは、本当に楽しくて仕方が無かったです！本当に楽しい時間をありがとうございました！ふへへ」

全員の挨拶が終わり、今日何度目かもわからない大歓声が私達に贈られる。本当に最高の時間だった。できるなら、まだもう少しだけ、この時間を過ごしたい。

「あーそうだった！僕の始まりの歌は歌ったけど、パスポレの始まりの歌を忘れてたや！」

その願いは、叶えられる。まだもう少しだけ、ほんの少しだけ、この時間を。

「そうだよ！私達のはじまりの歌も歌わせてよ！・・・というわけで、皆さん、まだ元気は残っていますか——？」

その彩ちゃんの問いかけに、大歓声が応える。元気は十分みたいだ。なら、最後のサプライズを堪能していただく。今日最後のサプライズを。

「それでは本当の本当に、最後の曲です！皆でしゅわしゅわして下さいね！聞いて下さい！しゅわりん☆どり〜みん！」

そして、始まる、本当のファイナル。地を割らんばかりのお客さん達のコールが、私達を後押しする。私達も、それに負けじと声を張り上げて歌う。音をかき鳴らす。正しく、私達とお客さん達が一体になって、会場の熱気を上げていく。今日のテーマ、サプライズと一体感の集大成。今、この会場は正しく、一つの集合体へとなっていた。個ではなく群。群ではなく個。そのような、曖昧な表現しかできないけれども、言いたいことは伝わるのでは無いだろうか？要するに、このライブは未来永劫語り継がれるような、最高のものになったということだ。

「今日は本当に、ありがとうございました！」

そして、最高の一日が幕を閉じる。お客さん達の感謝を込めたありがとうの、本日最後の大合唱を背に受けて、私達は舞台を後にした。その感謝の言葉を、深く心に刻みつ

けて。

ライブが終わり、私達は帰途についていた。今は、私と雅の二人だけ。他のメンバーとは、既に別れていた。

「本当に、今日は素晴らしい一日だったね」

「そうね。忘れたくても忘れられそうにない、最高の一日だったわ」

今日のライブは、きっと私達にとって永遠のものとなった。この先、何年、何十年と経とうとも、不意に思い出しては、笑みを浮かべるような、そんな最高の思い出。そんなことを思っていると、不意に空から白い粒が降ってきた。

「あ、雪だ」

雪だ。肌に触れる冷たさが、雪なんだぞと自己主張してくる。一つ二つ降ってくる。その後直ぐに世界は白い粒に覆い尽くされた。

「ホワイトクリスマスね」

「あはは、そうだね」

今日はクリスマス。その聖なる日を彩るに相応しい幻想的白。今日という日を忘れられない材料がまた一つ増えた。

「わーすーれーえーなーいよー」

「千聖？急にどうしたの？」

「ふふっ、なんとなく歌いたくなっただけよ」

雪が降り、時刻も夜遅く。自然と気温も落ち込んできた。身も凍る寒空の下でも、隣には雅がいてくれる。少しでも暖かくなるようにと、二人の距離も自然と近くなる。肌に触れる雅の温もりが心地良い。この温もりも、生涯忘れないでいよう。そう心に固く誓った、ホワイトクリスマスの帰り道だった。

第49演目 すきなことだけでいいです

私はその日、いつものように朝早くから雅の家に来ていた。

いつものように洗濯をし、いつものように朝食の準備をする。ただいつもと違うのは、私の服装と朝食の内容。私はその日、鮮やかな黄色い振袖に身を包んでいた。朝食もお重に入れられた縁起料理、つまりおせち料理がテーブルに並べられていた。

今日は一月一日。元旦だ。一年の始まりを告げる特別な日。かと言って、特別何かが変わるわけでもない。いつも通りの朝を過ごす。まあ、今日はこの後、雅と初詣に行く予定なので、そこが変化と言えれば変化だろうか。ただの、いつも通りのデートとも言えるが。

おせちの準備はできたが、少し作りすぎてしまったかもしれない。この量を二人で食べるのは、少し辛い物がある。まあ、おせち料理というのも元は保存食みたいなもの。数日おせち料理が続いても、特に問題は無いでしょう。

朝食の準備も整ったので、雅を起こしに行く。雅の部屋に入ると、静かに寝息をたてる雅が布団に包まっている。その体を、優しく揺する。すると、雅は徐に瞼を開ける。

「あけましておめでとう、雅」

「あけましておめでとう．．．つてもう年開けて直ぐに言ったじゃん。おはよう、千聖」
そう言えば、昨日は年明けの瞬間も雅と二人で過ごしていたのだった。その時に当然年明けの挨拶は済ませている。

「ええ、おはよう雅。朝ご飯の準備できてるわよ。早く準備して降りてきてね」

そう言つて、ダイニングへと歩を進める。温めておいたお雑煮を椀に入れ、テレビの電源を付ける。放送されているのは、どの局も普段流れている番組とは異なっている。お正月特有の、特番ばかりだ。去年は私にも出演依頼は来ていたのだけれども、今年はどここの局からお呼ばれされなかった。なんだか悲しい気持ちにはなるけれども、雅とノンビリできると考えれば悪くない。

それに、生放送には呼ばれなかっただけで、お正月のスペシャルドラマには出演させていただいた。明日放送される予定なので、雅と一緒に見ようと思つている。今回のドラマでの演技には、かなり自信がある。これを機に、更に出演オフアが増えることを期待しよう。

「お待たせ、千聖」

テレビを見て暇をつぶしていると、雅が準備を終えてダイニングに入ってくる。お腹に手をあて、如何にもお腹が空きましたと言いたそうな仕草をしている。流石食べ盛りの男子高校生といったところだろう。

「おー！見事なおせち料理！千聖、毎年ありがとうございますね」

「いいのよ。もう慣れたことだから」

私は、雅のお世話をするようになってから、毎年おせち料理も自分で作るようにしている。流石に初年は母に手伝ってもらったが、それも初年だけ。次年からは私一人で作っている。流石に作る品目が多いので大変だけど、前日から仕込みはしてあるので、そこまで苦にはなっていない。

「さあ、早速食べましょう？ふふつ、今年のは自信作よ。きつと気に入ってもらえると思うわ」

「おー！それは楽しみ！それじゃ、いただきますー！」

そう食事の挨拶を済ませると、勢いよくおせちを口の中へと掻き込んでいく雅。よっぽどお腹が空いてたらしい。数分経ってもペースが全く落ちる気がしない。

「もう、どれだけお腹空かせてたのよ」

「だつふえ、ちひゆてよのおしえ・・・」

「何言ってるかわからないわよ。口の中のものを無くしてからしゃべって」

本当に、こういうところは子供っぽいんだから。この前のライブ中は、なんだか大人びていて格好良く見えたけど、やっぱり雅は子供っぽかった。まあ、どっちの雅も好きだから別にいいんだけども。

「ん、だって、千聖のおせちは毎年の楽しみなんだもん。実は、昨日の晩ご飯も量少なくして、お腹空かせておいたんだよね」

「そ、そうだったの」

そう言えば、確かに昨日の夜、いつもに比べて食べる量が少ないなどは思っていた。まあ、こういう日もあるかと気にはいかなかったのだけれども、それが理由だったなんて。まあ、そう言われると悪い気はしないけれども。

その後も、雅は数分間ペースを緩めず食べ続け、多めに作りすぎたと思っていたおせちも、三分の二ほどが姿を消した。流石に全部食べきるのは無理だったけれども。

「ふう、ごちそうさま！ 僕もう食べれないし動けないよ」

「はい、お粗末様。それじゃ、行きましようか」

「え？ もう行くの？」

「当たり前じゃない。絶対混んでるに決まってるんだもの。早く行かないと、帰りが遅くなるわよ」

「はーい。あ、そういえば千聖」

「どうしたの雅？」

「振袖、今年も似合ってるよ」

「そ、そう？ あ、ありがとう」

不意にこんなことを言ってくるから困る。思わず顔を赤らめてしまう。そんな私を見て、してやったりといった顔をしている雅。なんだろう。なんだか少し悔しい気がしてくる。

「ほ、ほらそんなことより早く行くわよ」

「あ、ちよつと千聖待つてよ！」

だけど、今は特に反撃できる材料も無かったので諦める。赤くなつた顔をなるべく雅に見られないように玄関へと向かう。外に出ると、思つたよりも寒くなくてホツとす。全く気にならないような気温。空も快晴。絶好のお出かけ日和。今日は何か良いことが待っているかもしれない。そんなことを考えながら、神社への道を歩むのだった。雅の私を呼び止めようとする声を背に受けながら。

神社は、予想通り大混雑の様相を呈していた。右を見れば人。左を見ても人。前を見ても、後ろを見ても人人人。視界に入るのが人ばかり。私と雅は、はぐれないように手を繋ぎながら、神社の中を歩いていった。

「思った以上に人が多いね。これじゃ、お賽銭するだけでもかなり時間かかりそうだよ」
「そうね。まあ、早めに家を出たから時間もあることだし、ちよつと寄り道していきましようか」

「そうだね。お賽銭は最後で良いよね」

そう判断し、私達は神社の中を少し彷徨いてみることにした。普段はあまり立ち寄ることの無い神社。おそらく今日ここに集っている人々も、年に一度しか来ない人が大半では無いだろうか。私達だってそうだ。幼い頃には七五三で来た記憶もあるが、今はもう年に一度しか来ない。

ただ、人には人生に三度、厄年というものがある。その時は、神社でお祓いした方がいいのだろうか？ 確か女性の場合は、十九歳が最初の本厄になるらしい。その前年の十八歳は前厄、翌年の二十歳は後厄と呼ばれる。そして私は、今年十八歳。つまり、今年は前厄にあたる。

という訳でも無い。この厄年というのは、どうも数え年が基準になるらしい。数え年ということとは、実年齢から一歳が加算される。つまり、私の場合は、十九歳ということになる。要するに、今年私は、本厄なのだ。お祓いしておくべきなのだろうか？ 私は一切そのような迷信は信じないのだけでも。

昨年、前厄の年は本当に色々あった。確かに、厄と言われてもおかしくないような辛

いいこともあった。だけど、いくつか目標にしたことも達成できたわけだし、総合的にはいい年だったのではないかと思う。そう考えると、やっぱりただの迷信に過ぎないのでは無いかと考える。やっぱり、厄年がどうのなんて気にしないでおう。

「出店も本場に多いね」

「そうね。フランクフルトや焼きそばなんかの定番の食べ物もあるし、金魚すくいや輪投げなんかもあるのね」

香ばしい匂いを漂わせてる屋台から、楽しそうな賑わいを見せている屋台まで様々な縁日が側道にズラツと並んでいる。これも、初詣の醍醐味とも言えるだろう。どれもこれも楽しそうだ。

「お？そうだ。久々にあれやってみない？」

そう言つて、雅が指を指したのは射的の屋台だった。昔はお祭りとかで、雅とよくやったものだ。最近は全くやってなかったけど、確かに久々にやってみてもいいかもしれない。

「そうね。やりましようか。射的なんて本当に久しぶりね」

「最後にやったのいつだったかな？小学生のときだっけ？」

そんなに前だったのだろうか？そう思い記憶を遡ってみる。確かに最後にやったのは小学生の時だったかもしれない。中学に上がってから、全くやった覚えがない。

「そうだったかもしれないわね。ふふっ、久しぶりすぎて、できるかわからないわね」
「ま、千聖が外しても、僕が当てるから心配しないで」

そう自信満々に言つてのける雅。雅つて、そんなに射撃得意だったかしら？あまり上手かった記憶が無いのだけれども。雅の射撃の実力を思いだそうとしていると、雅がコルク銃を二つ持つてやつてくる。どうやら、私の分も払つておいてくれたらしい。

「はい、これ千聖のね」

「ええ、ありがとう」

「それじゃ、僕から行くからね。千聖、お手本を見せてあげるよ」

そう言つて、コルク銃を構える雅。集中して的就定める。どうやら狙っているのは正面にあるぬいぐるみらしい。ピンク色の熊のようなキャラクター……つてどこからどう見てもミッシェルじゃない。ミッシェルのぬいぐるみを狙っているらしい。そして狙いを研ぎ澄まして、撃った。銃から放たれたコルクは、寸分変わらずミッシェルに命中……するどころか、正面に撃ったはずだったコルクが何故か横に逸れていき、テーブルで一度バウンドし、そして……

「いでっー」

跳弾したコルクが雅の額に直撃した。どんな撃ち方したらそうなるのよ。店主さん

も顔が引きつって居るじゃない。そういうえば思い出した。雅は射撃が得意どころか、天才的に下手なんだった。流石才能を音楽に全振りしているだけのことはある。

「くそつ、もう一回!」

その後、ムキになった雅が、五回連続でコルクを撃つが、全て全く同じ軌道を描いて雅の額の同じ箇所直撃する。これは、ある意味射撃の才能に溢れているのかもしれない。段々赤くなっている雅の額が面白い。

「ふ、ふふつ」

「あー!笑うなんてひどいよ!」

「ふ、ふふつ、だつて、こんなの、ふ、ふふつ」

「ううつ、もういいよ。僕帰る」

「ご、ごめんなさい。ふう、いいわ。変わりましたよ」

「えー?千聖大丈夫なのー?」

「まあ、少なくとも雅よりはマシじゃないかしら?」

「ぐつ!」

「それじゃいくわね。雅、お手本を見せてあげるわ」

そう言つて、コルク銃を正面の獲物へと向ける。狙うは、雅と同じミツシエルのぬいぐるみ。慎重に、慎重に狙いを澄まして、角度と向きを調節し、そして撃つ。銃から放

たれたコルクは、寸分違わずミッシェルに命中……して見事その体を地面に落とした。
「やった！やったわよ雅！」

「うっそー……」

大はしやぎする私と、対照的に肩を落として落ち込む雅。思わず、射的屋台の店主さんも雅の肩に手を置いて、励ましてくれている。そんなこと気にもせず、あまりの嬉しさに大はしやぎしている私。その後、その光景は数分間続くのだった。すっかり臍を曲げた雅が、私を置いて、先に歩いて行こうとするまで続くのだった。

「ふふっ、ごめんなさい雅。つい嬉しくて」

「ふんだ。どうせ僕は射撃が下手さ」

「ほら、機嫌直して。ミッシェルあげるから」

「うっ、いいよ。それ、元々僕が取って千聖にあげるつもりだったから」

「あら、そうだったの？ふふっ、ありがとう」

どうやら私は雅からのプレゼントを自分で取ってしまったらしい。セルフプレゼントトでも言うのだろうか？意味合いとしてはそんな感じかもしれない。その後、私達はお賽銭をしに行こうと思ったのだけれども、その前にあるものが目についた。

「あら？おみくじがあるわ。引いてみましょうよ」

おみくじ。謂わば占いの一種。一年の運勢を占う運試し。去年は確か、私も雅も末吉

という反応に困る結果を引いていた。今年はきつと、大吉を引いてみせる。そう意気込み、雅と二人で籤を引く。

「ふふつ、今年はなんだか良い結果を引けそうな気がするわ」

「僕は千聖が引いたのより良い結果を引くからね。射的では負けたけどおみくじでは負けないよ！」

「おみくじで勝負してどうするのよ……」

子供っぽいことを言う雅に呆れつつ、おみくじの結果を見る。結果を見て、そして、私の顔は青くなった。

「なに、これ……」

そこに記されていた文字は、大凶。おみくじの結果の中でも、最悪の二文字。引く方が難しいとされる結果。そもそも、一般的なおみくじには、実は凶までしか結果には入っておらず、大凶は籤の中に混ざっていないのだ。この神社は、大凶を含む特殊なおみくじを取り扱う神社だったらしい。それでも、確率的にはかなり低いはずだが。

記された項目ごとの内容にも、悪い内容のことばかりが記されている。その中でも、私には気になってしかたない項目があった。それは、縁談の項目。謂わば、結婚相手や、結婚に関する出会いのことが書かれた項目。私にとっては、そんなの雅以外に考えていない。つまり、この項目に関しては雅に関する項目と言っても過言では無いだろう。そ

の項目には、こう書かれていた。

『遠ざかる。覚悟をするべき』

それを見た瞬間、私は思わず膝から力が抜け、その場にへたり込んでしまった。私は徹底して現実主義な人間だ。このような占いなどの結果を信じるようなタイプでは決して無い。だけど、だけれども、流石にこの結果を気にすると言われて、はい、わかりましたと言えるような内容では無かった。頭が真つ白になる。目の前が真つ暗になる。見たくもない現実を直視してしまったような、最悪という言葉も生温いような、到底言葉では表現できないような気分だ。立ち上がれそうにもない。そのまま、私は意識を手放そうとしたが

「ちよつと、千聖！しつかりしてよ！大丈夫!？」

「え？あ、雅……」

雅の声が、辛うじて私の意識を取り戻してくれる。だけど、気分が優れないのは間違いない。私は、未だに立ち上がれないままだった。

「大丈夫？そこにベンチがあるから、そこまで移動しよう？」

「え、ええわかったわ」

雅に言われたとおり、雅に肩を借りながら近くのベンチに腰掛ける。まだ、腰が抜けてしまったのか、まともに歩けそうにない状態だった。そんな私に、雅がホットティー

を買ってきて渡してくれる。紅茶の甘い香りと、その温かさが今の私に染み渡る。少しずつ、本当に少しずつだが、気持ちが落ち着いてきた。

たかがおみくじだと言われるかもしれない。何を取り乱しているのかと言われるかもしれない。だけどそれだけ、書かれていた内容は私にとつて衝撃的なものだった。雅と遠ざかる。そんなことは考えたことすらない。・・いや、去年一度だけあった。

パスパレお披露目ライブの失敗を経て、雅の夢の障害になつてしまふかもしれないと考えた私は、雅から距離を置くという決断を下した。今思えば、なんて愚かな選択をしたのだろうかと思う。もう二度と同じ過ちは繰り返さないと誓った。だから、遠ざかるなんてことはもうありえないと思うのだが。

「どう？少しは落ち着いた？」

「ええ、お陰様で。ありがとう」

雅が心配そうにこちらを窺ってくるので、もう心配無い旨を伝える。かなり気持ちにも余裕が出てきた。ずつと塞ぎ込んでいるわけにもいかない。折角の年に一度の初詣なのだから、楽しまなくては。だけど、その前に私には気になることがあった。

「そういえばおみくじ、雅の結果はどうだったの？」

雅の結果だ。私の結果は見た通りの内容だったが、雅の結果はどうだったのだろうか？もし、雅の結果が良好なものだったとしたら、私としてもプラスマイナスゼロで、ホッ

とした気持ちになれる。

「僕の結果？そんなのどうでもいいじゃん」

「よくないわよ。私の気が晴れないもの。いいから、見せて！」

「あ、ちよつと！」

私は、雅が未だに手に持っていたおみくじを隙を突いて奪い取る。これで気が晴れるといいな。そんな軽い気持ちで結果を見た。見てしまった。その結果を見た私は、思わずおみくじを落としてしまう。

「こ、これって……」

そこに書かれていたのは先ほども見た二文字。大凶の文字だった。内容も、私とほぼ同じ。ご丁寧にも、縁談の項目に至っては全く同じ内容が書かれていた。私は、またしても崩れ落ちそうになってしまう。

「たかがおみくじだよ」

だけど、そんな私の体を、雅の声が支えてくれる。私を倒してたまるものかと、雅の声は続けられる。

「千聖がどう思おうとも、これはたかがおみくじだよ。こんな結果で、僕達の未来は決められない。僕達の未来を決めるのは、僕達自身だ。だからこんな結果、気にするだけ無駄だよ。僕達の関係は、神様にだって阻ませやしないんだから」

「雅……」

雅のその言葉に、私の体は力を取り戻す。神様にだって阻ませない。つい吹き出しそうになつてしまふ。神様を奉つてる神社で、まさか神様に喧嘩を売るなんて。罰^{ばち}当たりもいいところだろう。だけど、そのお陰で私の体も心も軽々としたものになつた。

「そうね、そうよね。私達の関係は、誰にも阻めないわよね。神様！ 見てるかしら！ 私達の邪魔をできるものならしてみなさいよ！」

「ちよ、ちよつと千聖！ 声大きいよ！」

「ふふつ、ごめんなさい」

私の声を聞いて、周りの目が集まる。だけど、叫ばずにはいられない気分だつた。叫んだら、すっかり気分は爽快になつていた。もう、おみくじの結果なんてどうでもいい。私達の未来は、私達のもの。誰にも邪魔も干渉もさせない。

「はあ、スッキリした。それじゃ、お賽銭に行きましようか？」

「うん、そうだね。いつも通りの千聖に戻つたみたいで良かったよ」

「ふふつ、心配かけてごめんなさい。ええ、もう私は大丈夫よ」

そして私達は、お賽銭を待つ行列へと参戦する。長々と続く行列。賽銭箱は全く見えないけれども、そこは言つてしまえばたかがお賽銭。長々と時間をかけて行うような人などいないので、列が進むのは非常に早い。先の見えなかつた行列も、ものの数十分で

お賽銭箱まで辿り着いた。

お財布から小銭を取り出して賽銭箱に投げ入れて、お願いをする。願うは、雅の夢が叶いますようにと。正直、私自身の願いは去年一年でほとんど叶ってしまった。となると、私が願うのは、自然と雅の願いになる。雅の夢は、まだその階段にすら足がかかっている状態だ。今年一年で、少なくともその階段には足が届くようにと、お願いをする。

「千聖はなんてお願いをしたの？」

「それはね、秘密よ」

「えー！いじわる！」

「ふふつ、そう言う雅はなんてお願いしたの？」

「・・・僕の声が届きますように」

「え？」

意味がわからなかった。声が届きますように？なんのことだかさっぱりわからない。急に雅がそんなことを言い出すものだから、驚いて雅の顔を見る。その表情は、正に無だった。無表情。無感情。何もわからない。ゾツとするような無。私はそのとき初めて、雅が怖いと思ってしまった。

「・・・さあ行くのか」

「え？ちよつと雅！」

そして、もうここに用は無いと言わんばかりに早足で歩き出す雅。元来た人混みを掻き分けて進む。人混みが邪魔で中々前に進めない。なのに、雅はまるで人混みなど意に介していないかのように、凄いスピードで先を行く。

「ちよつと雅！待って！」

私の声が聞こえていないのか、雅に止まる気配は一切無い。その背中が人混みの中に見えなくなるまで、そう時間は要さなかった。雅に何があつたのかはわからない。けど、何かがあつたのは間違いないだろう。焦る気持ちを押しとどめて、私は人混みを掻き分け進む。掻き分け、掻き分け、漸く神社の入り口まで辿り着くことができた。そこには、私を待っていてくれたのかはわからないが、立ち尽くす雅の姿があつた。

「ちよつと雅、急にどうしたのよ。何かあつたの？」

私の声はやはり聞こえていないのか、雅は一切その問いかけに答えてくれない。今も、立ち尽くしたまま、何を考えているのかも全くわからない。

「雅？」

その私の呼びかけがやつと聞こえたのか、雅が徐にこちらを振り向く。その顔は、あの賽銭で見た時と全く同じ顔、つまり無だった。私の中に、またも恐怖が芽生える。雅と出会ってから今まで、雅の事がこんなにも怖いと思つたのは初めてだ。恐怖感と同時に

に、雅の事を怖いと思つてしまつてゐる事への罪悪感も湧いてくる。雅は本当に、一体どうしてしまつたのだらうか？疑問は尽きないが、考えたところで答えは出なかつた。

「本当にどうしたのよ？さつきから雅、変よ？」

「これでお別れだね。今までありがとう」

「え？」

私は、雅が何を言つてゐるのかが理解できなかつた。お別れ？何をふざけてゐるのだらうか？誰と誰が？そんなのこの場では二人しかいない。その言葉に、流石の私も堪忍袋の緒が切れた。

「ちよつと雅！あなた一体何を言つてゐるの！いい加減に……あれ？」

しかし、不思議なことが起こつた。私は勢いのまま雅に詰め寄ろうとした。詰め寄ろうとしたのだが、体が一切動かないのだ。手も、足も、一切動かない。まるで、立つたまま金縛りにあつたような感覚。唯一、口と頭だけは動く。動く頭で、雅に目を向ける。雅は、またも何かを口にしてゐた。だけど、なぜだか私の耳には何も聞こえない。雅の口だけが動いている。読唇術の心得など無い私には、雅の発言を聞き取ることは不可能だつた。そして、言いたいことを言い終わつたかのように、口を閉じた雅がまた振り向き、私を置いて歩き出す。

「ちよ、ちよつと、雅？ねえ、聞いてるの？雅、お、お願い！お願いだから、置いていか

ないで！」

声を張り上げ叫ぶが、雅には聞こえない。足を振り上げ歩こうとするが、前に進めない。腕を突き上げ掴もうとするが、その腕も動かない。ただただ、私には、遠ざかっていく雅の背中を見ていることしかできなかつた。

「い、いや、いや．．．いやあああああああああああああ！」

私の号哭は、決して雅に届かない。そして、雅の背中が完全に見えなくなり

「はっ！」

気づいたら自室のベッドに私はいた。何が起こつたのか、さっぱり理解できない。

「一体、何が．．．？」

何がなんだかかわからず混乱する私。混乱のままに、室内を見渡してみる。見渡した私の眼に、枕元に置かれたピンク色の物体が入る。それは間違いなく、ミツシエルのぬいぐるみだつた。私は次に、スマホを手に取り、今日の日付と時刻を確認する。そこに表示されていたのは、一月二日という日付。そして、時刻はお昼過ぎといったところだろうか。

「そうか、私．．．」

そこで私は全てを思い出した。昨日、私は雅と初詣に行った。そこで、おみくじで大凶を引いて、雅と神様に喧嘩を売つたのまでは実際にあつた出来事だ。そして、お賽銭

のあたりからは、夢だったのだ。嫌にリアルな夢だった。悪夢以外の何物でも無い。昨日夢を見た記憶が無いので、おそらくこれが私の初夢だろう。なんて初夢を見ているのだろう。最悪の一年のスタートになってしまった。

そして私が、こんな時間に家で寝ている理由。至極単純なものだ。風邪を引いた。今朝から体調を崩し、こうやって自宅療養していたのだ。全てを思い出したら、なんだか頭が痛くなってきた。今朝よりは幾分かマシになった気がするけれども、復調にはほど遠い。

もう一度寝ようかなと考えていると、私の耳に何やら物音が聞こえてきた。誰かが家の中を歩いているような音。家族、ではない。私の両親と千景は、今朝から旅行に行ってしまった。今は家にいない。私が寝込んでいるときに、薄情なものだ。まあ、元々私は一緒に行く予定も無かったし、ドタキャンしてキャンセル料を払うのも勿体ないのだから、仕方ないけれども。

では一体誰なのだろうか？まさか、泥棒？そう考え、体に自然と力が入ってしまふ。その足音は、段々と私の部屋へと近づいてくる。足音が段々大きくなる。そして、私の部屋の前で立ち止まり、誰かが声をかけてきた。

「千聖、起きてる？入って大丈夫かな？」

それは、聞き慣れた声だった。出会ってこの方、聞かなかつた日など無いのではない

だろうか？それほど、私の生活の、人生の一部になつてゐる声。そして、私が今最も聞きたかつた声。

「ええ。大丈夫よ」

返事をする、扉を開けて彼が入ってくる。私が愛する彼。黒城雅が。

「体調は大丈夫千聖……つて千聖どうしたの!？」

私を見るなり酷く取り乱す雅。私がどうしたのと聞きたい。

「それはこつちのセリフよ。どうかしたの?」

「だつて千聖、泣いてるじゃないか」

「え?」

その雅の言葉に驚き、目元に手を持って行く。そこには確かに、冷たい雫があつた。どうやら、あの夢を見た後に、雅の姿を見ることができて安心してしまつたらしい。本当に、どうしてあんな夢を見たのだろうか？まさか、神様に喧嘩を売つたことで罰でも当たつたのだろうか？だとしたら、心の狭い神様なことだ。

「大丈夫よ。ちよつと欠伸をした拍子に出ちやつただけよ」

「そうなの？だつたらいいんだけど。あんま無理をしないでね?」

「ええ、ありがとう。それにごめんなさい。ご飯を作りに行けなくて」

「そんなの気にしないでよ！いつも千聖にはお世話になつてるんだから！だから今日は

ほんの少しの恩返し。じゃん！お粥を作ってきたよ！」

「え？雅が？」

その言葉に驚いてしまう。まさか、あの雅がお粥を？ちやんと作れたのかしら？不安でしか無い。差し出された土鍋を恐る恐る見る。思っていたよりも、悪くない。真ん中に置かれた梅干しとのコントラストも素晴らしい。見事な紅白が完成している。

「これを、雅が？」

「えっへん！僕だつてやればできるんだよ！」

「ま、まあ味が悪ければ意味ないわよね。味見させていただくわ」

「そ、そこまで僕つて信用無いかな？」

無い。全く無い。普段の自分の行いを振り返つて欲しい。私は恐る恐るそのお粥を口に運んだ。

「・・・おいしい」

「でしょ！僕だつてやるときはやるんだよ！」

悔しいけど、確かに美味しかった。未だに雅が作ったなんて信じられない。悔しいので、その後は無言で食べ進める。朝から何も食べていなかったこともあり、非常にお腹が空いていた。どうやら、風邪でも食欲はあつたらしい。そのまま食べ進め、見事に完食することができた。

「ふう、ごちそうさま」

「うん！お粗末様！千聖、何か欲しいものとか無い？今日は日頃お世話になつて恩返しをしたいからね。僕にできることならなんだつてするよ！」

「ふふつ、ありがとう。そうね、それじゃ、食後のデザートにアサイーボウルが食べたいわ。作つてくれるかしら？」

「えー！そんなの僕作れないよ！しょうがないな。買ってくるから待つてよ」

「ええ、ありがとう。ついでに、紅茶もお願いね」

「はいはい。もう我が儘なお姫様なんだから」

「あら？知らなかったの？女の子はみんな、我が儘な生き物なのよ？」

そう言うのと、雅は苦笑いしながら部屋から出て行つた。アサイーボウル、紅茶、共に私の大好物だ。私は、未だにさっきの夢のことを忘れられずにいた。本当に嫌な夢だった。思い出すと身震いするほど嫌な夢だった。

そんな嫌なもの、嫌だ。だから忘れるためにも、今は好きな物のことだけ考えよう。今日は雅もずっと一緒にいてくれるらしい。それは非常に心強い。アサイーボウルに、紅茶に、雅。今は好きなことだけでいい。嫌なことに対抗するのは好きなこと。それしかないと思うから。私は、雅が帰ってくるまでの間、ずっと好きなことだけを考えて過ごすのだった。

だけど、私の中からあの夢が消えることは決して無いのだった。

第50演目 シックシックシック

千聖が風邪を引いた。

そんな連絡が千景から来たのは、一月二日の朝のことだった。姉さんが風邪を引いたので、よろしくお願ひしますとだけ書かれた短いメール。受信時刻は朝7時頃。そして、僕がメールに気づいたのは朝10時頃。気づいた時刻と言うよりは、起きた時刻と言った方が良いかもしれぬ。つまり、千聖が起こしに来なかつたので、ずっと寝てしまつていた。

確か今日から千景は、両親と旅行に行つてゐるはず。となると、自然と白鷺家には千聖だけが残されてゐることになつてゐるはず。これは千聖の一大事だ。僕が一肌脱ぐしか無い。脱ぐしか無いのだが、そもそもその話、そのためには一つ重大な欠点があつた。「看病つて、何をすればいいの?」

僕には一切の看病の経験が無かつた。お粥でも作ればいいのだろうか? だとしても、僕に料理とか、できるだろうか? まあ、やつたことが無いからと言つて、やらないわけにもいかない。千聖のピンチなんだ。日頃助けられてばかりの僕が、千聖の助けになるためのチャンス。やり方がわからないなら、僕に一つ秘策がある。とにかくその秘策に

絶つてみようと思う。

「もしもし……」

僕は、自身の打ち立てた秘策を試みるため、とある少女に電話をかけた。まあ要するに、わからないのなら誰かに学んじやおうというわけなのだ。その電話相手は、急な報せにも気にせず、快く僕の頼みを引き受けてくれた。僕は急ぎ、彼女と待ち合わせした場所へと向かうのだった。

待ち合わせ場所に着くと、どうやら目当ての少女はまだ来ていないようだった。まあ、待ち合わせ時刻よりかなり前に着いたのだから、当然と言えば当然だ。どうやら、千聖のことを思うあまり気が逸つてしまっている気がする。少し落ち着いて行動した方がいいかもしれない。まだしばらく彼女は来ないだろう。そう思っていたのだけれども、そう時間を待たない内に、彼女はやってきた。予定時刻よりかなり早い。

「やつほー雅！あけおめー！」

「あ、リサちゃんあけましておめでどう！急に呼び出してごめんね」

「いいのいいの気にしないで。それより待たせちゃったかな？こっちこそごめんね」

「ううん！それこそ問題無いよ！時間よりもかなり早いし、僕も今来たばかりだから！」
という訳で、僕が頼ったのはリサちゃんだった。おそらく、僕が気軽に連絡が取れて、尚且つ一番家庭的な子が彼女だった。まあ、リサちゃんとはずっと前から仲良くさせてもらっている。僕の親友である友希那の幼なじみ兼親友。親友の親友はそれまた親友といった感じだ。友希那と三人で、遊びに行ったりなんかもよくしている。

「それで、確か看病の仕方だったよね？教えるのは良いけど、アタシも行かなきゃいけないところあるんだよね。そこで教えるってことでいい？」

「うん！教えてもらえるならどこでもいいよ！ただその前に……」

「その前に？」

そこで、僕のお腹からグーといった音が聞こえてくる。それで、リサちゃんも察してくれたらしい。凄く恥ずかしいタイミングだったけど。

「あはは、朝ご飯、どこで食べようか？」

「あ、あはは、ど、どこがいいかな？」

恥ずかしくて、リサちゃんの顔を見れないままそう返す僕。今朝、千聖が来れなかったために、僕は朝食をまだ食べれてなかった。本当に、僕は千聖がいないと禄に食事もできないらしい。将来、紐とか呼ばれてそうで怖いんだけど。そうなるのは嫌だなと考

えつつ、僕はそのままりサちゃんの顔を見れないまま、商店街の中へと入っていくのだった。

僕とリサちゃんは、商店街内にある羽沢珈琲店へと足を運んでいた。一月二日、多くの飲食店が休みを取っている中、何故かここだけはオープンしていた。ありがたいことなんだけど、何故だか申し訳無い気にもなってくる。

「いらつしやいませ！あ、雅さんと、リサ先輩！あけましておめでとうございます！二人でつていうのは珍しいですね！千聖さんと友希那先輩はご一緒じゃないんですか？」

出迎えてくれたのはつぐみちゃんだった。こんな年始にもかかわらず、今日もお家のお手伝いをしているらしい。本当に良い子だ。

「つぐみちゃんあけましておめでとう！実は千聖が風邪を引いちゃってね」

「あけおめつぐみ！実は友希那も風邪引いちゃったんだよね」

え？友希那ちゃんも風邪引いちゃったの？それは初耳なんだけど。

「友希那も風邪引いちゃったんだ」

「そうなんだよねー。それに友希那の家今日から両親が旅行に行つててさ、誰もいないんだよね。それで、この後友希那の家に看病に行かないといけないんだけど、看病の仕方、友希那の家で教えるつてことでもいいかな?」

なるほど。リサちゃんが行かなきゃいけないところつて友希那の家だったのか。そういうことなら僕に否いなはない。まあ、元々どこにでもついていくつもりだったんだけど。それにしても、友希那の家も両親が今日から旅行に行つてるのか。千聖の家と状況が全く一緒とは、恐ろしい偶然だ。

「二人とも風邪ですか。それは大変ですね。そういうことなら、私も一緒に着いていいですか?二人のことが心配ですし、きっと私も力になれると思うんです!」

そうつぐみちゃんが言つてくれる。その申し出は非常に嬉しい。非常に嬉しいんだけど、お店の方はいいのだろうか?

「あ、お店のことは気にしなくても大丈夫です!毎年、お正月つてお客さん少ないんですよ。だから、私が抜けても全然問題無いです!」

と、つぐみちゃんが僕の考えていたことを察して答えてくれる。確かに、お正月に態々喫茶店に来ようつて思う人は少ないかもしれない。まあ、実際に僕は来ているわけだから全くいいわけではないのだろうか?」

「つぐみが手伝つてくれるなら助かるよー。実は、友希那にはちみつティーが飲みた

いって言われてるんだけどさー、アタシが作るよりつぐみがつてくれた方が美味しくできそうだし、お願いしていいかな？」

確かに、つぐみちゃんは喫茶店の娘。コーヒーや紅茶を煎れるのも手慣れているはずだ。僕も、千聖のためにつぐみちゃんに紅茶をお願いしようかな。

「確かに私も作れますけど、そういうことならお父さんをお願いするのが一番良いと思います！なんたつてプロですから！」

「あはは！そりやそうだよねー！今プロがいるお店に来てるんだつた！」

全くだ。つぐみちゃんの実家じゃないか。確かに喫茶店の娘であるつぐみちゃんも腕は確かだろうけど、その店主であるお父さんはその道のプロじゃないか。頼まない道理は無い。

「早速お父さんをお願いしてきますね！できたら直ぐに行きましょう！」

「おー！つぐみ張り切ってるねー！よろしくー！でも、直ぐには行けないかな？」
「え？」

つぐみちゃんがどうして？といった顔を向けてきたタイミングで、僕のお腹がまた鳴る。本当に、タイミングが良いのか悪いのかわからない。ただ、恥ずかしいタイミングなことだけは間違いない。

「あ、そういうえはお客さんとしてきてたんでしたね。すいませんすっかり忘れてまし

た・・・」

「あはは、気にしないで」

「本当にすいません・・・えっと、ご注文はどうしましょうか？」

「そうだね。モーニングセットってまだいけるかな？」

「ちよつと時間は過ぎてますけど、常連さんサービスでお父さんに許可もらつてきますね」

「ありがとう。お願いね」

「アタシはホットレモンティーもらおうかな？誰かさんと違って、朝ご飯は食べてきたからね」

「うっ、い、一体だ、誰のことなんだろうな？」

「さあ？誰のことなんだろうね？」

そう言つて、悪戯つ子のような顔で僕の方を見てくるリサちゃん。その顔から逃げるように顔を背けると、背けた方に回り込まれてしまった。そのニヤニヤ笑いをやめていただきたい。まあ、今は何を言われても言い返せないわけだけど。

そして、つぐみちゃんはそんな僕達のやり取りに苦笑いしてから、お父さんに二つのお願いをしいつてくれた。つぐみちゃんが注文を運んでくるのを待ちつつ、僕とリサちゃんの攻防はしばらく続くのだった。つぐみちゃんが注文を運んできたタイミング

でもたも鳴った僕のお腹。ちょっと君とはゆっくりお話をしないとイケないかもしれないね。

羽沢珈琲店での朝食を終えた僕達は、三人で友希那の家へと足を向けていた。つぐみちゃんのお父さんに、はちみつティーも作ってもらったし、お見舞い用のフルーツまでいただいでしまった。千聖の分までいただいでしまって、本当に感謝しかない。良いお父さんだと熟々つくつく思った。

「着いたよ。ここが友希那の家。合い鍵預かってるから、今開けるね」

そう言って、カバンから合い鍵を取り出すリサちゃん。そのまま鍵を開け、三人で中に入る。リサちゃんはそのまま慣れた足取りでリビングまで進んでいく。流石幼なじみ。友希那ちゃんの家の構造は完璧に把握してるらしい。

「冷蔵庫の中の物勝手に使つていいっておばさんに許可もらってるからね。まずはお粥から作つていいこっか」

「はい！リサ先生！」

「うむうむ！熱心で感心感心！それじゃ、さつさと作っていくよ！」

そう言つて、お米を取り出すリサちゃん。どうやら、まずはお米を研いでいくらしい。「雅つて、お米は研いだことある？」

「ありません！」

「おー、これは思ったよりも教えること多そうだね。友希那が雅のこと紐つて言うのもわかる気がするよ」

「え？友希那そんなこと言つてたの？」

いや、確かに将来的に呼ばれる日が来るかもつて考えたことはあつたけどさ。もう呼ばれてるの？今度友希那とはゆつくり語り合おうと思う。まあ、言い負かされる気しかなしいけど。

「だ、大丈夫ですよ！今からでも覚えればいいんです！まだ間に合いますからー！」

「つぐみちゃん、フォローありがとう」

落ち込む僕を優しくフォローしてくれるつぐみちゃん。つぐみちゃんの優しさが僕の離れた心に染み渡る。今度から、羽沢珈琲店に通う頻度増やそうかな？週一から週五ぐらいに。

「よーし！それじゃ、研ぎ方から教えていくよー！」

そう言つて、計量用のカップを取り出すリサちゃん。それにお米を掬い入れ、お箸で

飛び出ている分を落とす。

「このカップ一杯が一合。友希那一人のお粥を作るぐらいなら、この半分あれば足りるんだけど、今日はこの後皆にお昼ご飯でも振る舞おうかと思ってるからねー。その分も今研いどくよ!」

「おー! 流石リサ先生!」

「そういうことなら、私も手伝いますよ!」

「あ、じゃあ僕も」

「紐君は大丈夫だよ! 看病の仕方だけ覚えていって!」

「リサちゃんがそう言うなら……って紐君ってなに!?!」

僕の言葉を笑って受け流すリサちゃん。今日のリサちゃんは悪戯つ子モードみたいだ。まあ、親友故の距離感みたいなものだから、気にはしないけど、いつか見返してやろうと心に僕は決めた。何年、何十年後になるかわからないけど。

「それじゃ、計量も終わったし早速研いでいこうか!」

そう言つて、リサちゃんは冷蔵庫を開けた。お米を研ぐのに冷蔵庫を開ける必要があるのだろうか? 冷蔵庫の中を覗いてみる。そこには、色とりどりの食材が詰められている。友希那の両親は今日から旅行に行っていると聞いていた。それにしても、冷蔵庫の中が充実しすぎているような気がするのだけだ。

「実は、雅に会う前にあらかし予め食材買って友希那の家の冷蔵庫に詰め込んだよ。今日から、友希那の両親が帰ってくるまでこの家で生活することになりそうだからさ。流石に、何も用意せず、元からあった分だけ使ったら申し訳無いでしょ？」

なるほど。それで中身が充実していたのか。流石リサちゃん。用意周到なことだ。そしてリサちゃんは、冷蔵庫の中からあるものを取り出した。よく見るペットボトルを。

「天然水？」

「そう天然水！お米を研ぐだけなら、水道水でも大丈夫なだけだね。実際、アタシも一人だけだったらそうしてるし。だけど、お米を研ぐときはお水にも拘った方が美味しくできるんだよ。ま、炊きあがってから試してみて！」

「なるほど、参考になります！」

「そういえば、千聖もよく天然水買ってた気がしたな」

いつも天然水が冷蔵庫に入ってたけど、飲料として消費する分よりも明らかに消費が激しい気がしてた。なるほど、お米を研ぐのに使ってたのか。

「へー、千聖もやってたんだ。それじゃ、違いがわからないかももしれないね！本当は、家に浄水器でもあればもっと楽なだけだね。天然水使うのって、消費する量が多いから、自然と出費も多くなっちゃうんだよね。それなのに毎日天然水で炊いてもらって、

愛されてるねー。このこのー！」

「痛い！痛いから！」

脇腹を肘でグリグリしてくるリサちゃん。普通に痛いです。はい。それにしても、リサちゃんには良いことを教えてもらった。近いうちに浄水器を買ってくるとしよう。

「それじゃー次の行程いくよ。ここはスピード勝負！」

そう言つて、計量した米を入れたボウルとカップに移した天然水を用意するリサちゃん。スピード勝負と言われて、僕にも自然と緊張感が走る。

「いくよ？まずボウルにお水を注ぐ。そして、ボウルの底から軽く二、三回混ぜたら直ぐにお水だけを捨てる。この行程はスピードが大事だからね。あんまりのんびりしてると、ぬかの匂いまでお米が吸っちゃつて、大変なことになるからね。お水は、この後本格的な研ぎ作業に入るから、しっかり切つておいてね！」

そしてあつという間に行程を終えてしまうリサちゃん。説明しながらなのに、凄手際だ。手際が良すぎて、目で見ただけならあまりどういったことをしているのかわからないけど、リサちゃんが懇切丁寧に説明してくれるから、なんとなくこうすればいいというのわかる。

「流石リサ先輩。手慣れてますね」

「つぐみもこれぐらいできるんじゃない？」

「さ、流石にリサ先輩みたいにはできませんよ！」

「僕は門外漢です」

「あはは、じゃあ今日覚えていってよ。紐から一步脱出つてね！」

一步脱出できてもきつとまだ紐なんだろう。千聖にも、音楽以外は基本的にダメ人間って言われてるし、本格的に日常生活の改善を目指してみようかな。

「それじゃ、お米を研いでいくよ。お米を研ぐときは、猫の手！指を丸めて、優しく混ぜてあげる。この時、力を入れすぎたり、混ぜるスピードを早くしすぎると、お米が割れちゃったりするから、ダメだからね。大体二十回ぐらい混ぜたらストップね」

優しい手つきでお米を研いでいくリサちゃん。猫の手と言われて、何故か友希那を連想する。友希那の猫好きは相当なもの。うっかり猫の話題を振ってしまったら、小一時間ほどその話題から抜け出せないこともある。因みに、僕は犬派だったりする。そう前に Roselia との合同練習の時に言ったら、友希那に絶望的な顔をされてしまった。逆に、紗夜ちゃんには凄く食いつかれた。どうやら、彼女は大の犬派らしい。なんだこのギャップコンビは。

「研ぎ終わったら、次は研ぎ汁を捨てるからね。そのためにまたお水を注ぐ。この時に入れるお水は別に水道水でもいいよ。あまり、お米の味には影響しないからね」
「なるほど。水道水と天然水を使い分けるんだね」

「そういうこと。別に全部天然水でもいいんだけどね。そうすると、天然水の消費がより激しくなっちゃうからね。節約できるところで節約しておかないと」

「なるほど。勉強になります!」

いつの間にかつぐみちゃんは、紙とペンまで取り出してメモを取っていた。まるでリサちゃんの講習会みたいになってきている。

「で、水を注いだら軽く一回ぐらい底から掻き混ぜて水を捨てる。掻き混ぜる理由は、底の方に濃い研ぎ汁が溜まっているからなんだよ。それを上に出すために混ぜてあげる。で、しっかりと水を切ったらまたスピード勝負の行程に戻るよ。これを二、三回繰り返すからね」

リサちゃんは、その後言った通りにもう一度同じ行程を繰り返す。一度目の時よりは、説明を受けていた分何をやっているのかよく理解できた。本当に、リサちゃん様様だ。説明が本当にわかりやすかったから、非常に助かった。

「よし!そろそろ大丈夫かな。天然水を入れて・・・うん!良い感じ!うつすらとお米が透けるぐらいの透明度になったら終わっていいよ」

「完全に透明にしなくてもいいの?」

「完全に透明になるまでしちゃうと、お米の栄養や美味しさまで一緒に出て行っちゃうんです。だから、ちょっとだけ濁りは残ってるけど、中のお米が透けて見えるぐらいで

止めるのが一番良いんです」

「つぐみの言う通り！雅君わかったかなー？」

「はいリサ先生！つぐみ先生！」

「わ、私まで先生って呼ばなくてもいいですよ！ただ、基本的な知識を言っただけですからー！」

「そんな基本的な知識も知らなくてごめんなさい・・・」

「わ！わ！そ、そういう意味で言ったんじゃないかって！えっと、リサ先輩なんとかしてくださいー！」

「え？これアタシに振るの？えっと、まあ雅は今基本を覚えることができたんだから、米研ぎの入り口に立てたんだし、気にしなくていいんじゃない？これから、覚える一方なんだし、直ぐに一人前になれるって！」

「ううっ、はい！一人前になれるようにがんばります・・・」

確かに、後は覚えていく一方なんだし成長するしか道はないはず！ぼ、僕もやればできるんだって皆に見せるんだ！目指せ脱ポンコツ！

「よし！それじゃお粥作りに入ってくよ！まずは、研いだお米の半合を鍋に移すよ。残りはアタシ達で食べるから、炊飯器で炊いておくれ。お粥にするお米は鍋に移す前にしっかりと水気を切っておくからね。先にザルに映すよ」

ザルに映してしつかり水切りをしていくリサちゃん。その横で、つぐみちゃんが残りのお米をリサちゃんから受け取って、炊飯器にセットしてくれてる。僕がわかりやすいようにと、米研ぎからお粥作りまでの作業は全部リサちゃんがやってくれてるけど、つぐみちゃんもやっぱり手慣れたものだ。普通は誰でもできるものなんだろうか？

「それじゃあ、水切りも終わつたし、お鍋に移してお粥を作っていくよ。まずは水を注ぐ。基本はお米半合に対して600mlね。ここから、硬めがいいなら少し水を減らして、柔らかめがいいなら水を少し足してもいいよ。今回は友希那の好みに合わせて普通の硬さにするから600mlのままね」

なるほど。硬さの好みによって水の量を調節するのか。それなら、千聖も普通の量でいいかな。

「注いだら、早速火を付けるよ。中火で付けて、このまましばらく待つからね。本当にしばらくは、何もなくていいからね」

そう言つて、鍋から離れてしまうリサちゃん。まあ、火が目につく位置にいれば、多少移動しても問題無いのだろう。

「今の内にバケツに水を汲んでおこうか。あ、これはお粥の行程じゃ無いからね。看病の行程だよ」

「リサ先輩。タオルはどこに置いてあるんですか？私取ってきますよ？」

「おー！助かるよありがとう！……って言いたいんだけど、実は朝寄った時にあらかじめ用意しておいたんだよね。そのテーブルの上に置いてあるよ」

そうリサちゃんが言った方向を見ると、確かにテーブルの上に数枚のタオルが置いてあった。つぐみちゃんも何かお手伝いしたいみたいだけど、リサちゃんが先に済ませてしまつてみたいだ。

「うーん、私にお手伝いできることなかったかな？」

「そんなことないんじゃない？ほら、アタシは流石にこの後友希那に付いてあげないといけないし、雅と一緒に、千聖の看病にいつてあげたら？流石に雅一人だと大変だろうし」

「なるほど。それもそうですね！精一杯雅さんのサポート頑張りますからねー」

「つぐみちゃんがいてくれるなら心強いな。うん、よろしくねー」

流石にリサちゃんに着いてきてつて無理強いはできないけど、つぐみちゃんがいるなら本当に心強い。最強の助っ人を得た気分だ。まあ、基本的には僕一人でできるように頑張るつもりだけど。

「まあわかつてると思うけど、このお水とタオルで病人の頭を冷やしたり、体を拭いてあげたりするからね。雅、絶対友希那の体拭いてるところ見ちゃダメだからね」

「み、見ないよー」

見たらそれこそ、僕が社会的に死んでしまいうさだ。それなのに、見るわけがない。でも、千聖の体を拭くのどうしようかな？僕が拭いてあげた方がいいのかな？でもそうになると自然と千聖の

「雅、なんかいかがわしい想像してない？」

「し、してないよー！」

危なかった。リサちゃんに鋭すぎる。まさかバレそうになるなんて。これ以上は考えないように気をつけよう。

「さて、お粥もそろそろいいくらいかな？」

そして僕達は、再び鍋の中を覗き込む。覗き込むと同時に、何やら鍋の中が白く煮立ち始めた。

「お？ベストタイミングだね。こう煮立ってきたら、沸くのが近い合図だからね。お米が鍋底に引っ付かないように、しゃもじで軽く混ぜていくよ」

リサちゃんがそう言いながらしゃもじで鍋の中を混ぜていく。少しの間続けていると、鍋の中がぶくぶくと、完全に沸いてきた。

「よし沸いたね！こうなったら、火を弱火にするよ。そしてお箸を一本鍋の縁に置いて隙間が少し空くようにしてから、蓋をする。このまま三、四十分は待つからね。その間に、アタシ達のお昼ご飯の下拵えしておこっか！」

「何を作るんですか？私もお手伝いしますよ！」

「つぐみありがとねー！お礼に、リサ先輩特製カレーの作り方を伝授するよー！」

「おー！リサ先輩特製カレー楽しみー！」

「あはは、アタシは雅の先輩ではないんだけどね」

テンションが上がりすぎてつい先輩付けで呼んでしまった。そうだった。リサちゃんには先輩じゃなくて先生だった。それを言ったら、それも違うって突っ込まれそうだけど。二人は、分担して野菜を切ったりカレーの下拵えを進めていく。本当に二人とも凄い手際の良さだ。この二人の経験値が高すぎてそう見えるのか、僕の経験値が低すぎてそう見えるのかよくわからない。きっと両方なのだろう。

そして三十分ほど下拵えを進め、一度中断する。まあ、中断と言っても全て終わってしまってるわけだけど。サイドメニューのサラダに関しては既に完成してしまっていた。恐ろしく早い。

「それじゃ、お粥を開けるね。ここで試食タイム！これで、丁度良い硬さになってたらいいわけだけど」

リサちゃんが、お粥を口に運ぶ。その表情が、完成度を物語っていた。無事にできたみたいだ。

「うん！良い感じ！後は火を止めて、お塩を二つまみほど振りかけてから、軽く掻き混ぜ

てあげて、完成！好みでお漬け物や梅干しを用意するといひよ。友希那はお漬け物の方が好みだから、小皿に入れてと。それじゃ、友希那の部屋に行こうか。雅、バケツ持ってきてくれる？」

「うん！それぐらいさせてよ！」

リサちゃんに言われた通り、バケツを持ってリサちゃんの後に着いていく。そして、とある部屋の扉を開けた。そこには、ベッドに横たわる友希那の姿があった。頭には濡れタオルが乗せられている。その顔は、仄かに赤みがかっていた。

「友希那起きてる？」

「リサ、年明けから、悪いわね。それに、雅と羽沢さん？」

「どうも研修生の黒城雅です」

「あはは、成り行きでお手伝いに来ました」

「・・・よくわからないけど、ありがとう」

まあ、これだけの説明だとなんのことかわからないだろうね。だけど、あまり興味が無かったのか、それとも聞く元気も無かったのか、友希那はそれ以上聞いてこなかった。

「というわけで、お待ちかねのお昼ご飯だよ。はい、お粥。それと、つぐみのお父さんがはちみつティー作ってくれたよ。プロの作ったのはちみつティーだから、絶対美味しい

「よ」

「そう。羽沢さん、ありがとう。今度、お父さんにもお礼を言いに行かないといけないわね」

「そんな！大したことじゃないから大丈夫ですよ！」

「あはは、まあまずはご飯だよ。どう？一人で食べれそう？」

「それぐらいなら大丈夫よ。問題無いわ」

そう言つて、ベッドから起き上がる友希那。その動きは少し弱々しい。リサちゃんからお粥とスプーンを受け取り、食べ始める。その間に、リサちゃんはタオルを濡らし、水を絞っていた。つぐみちゃんのはちみつティーの準備をしている。僕は、何か手伝える事は無いかと考えてみたけど、無さそうなので少し落ち込む。結局、そのまま友希那の食事が終わるのを待つことしかできなかった。

「ごちそうさま」

「はい、お粗末様！それじゃ、アタシ達はリビングでお昼ご飯食べてるからね。ちゃんと安静にしててよ」

「ええ。私のことは気にせずゆっくりしてて」

「あはは、まあゆっくりもできないんだけどね。この後千聖の看病に行かないといけなわ」

「白鷺さんの？・・・ああ、そういうことだったのね。リサ、私のことは気にせず雅の手伝いに行つてきてくれてもいいわよ」

「流石に病人の友希那を一人にできないつて。ほら、友希那つて雅と似て音楽以外の事だとポンコツなところあるし」

「・・・雅よりはマシよ」

「ひどっ！」

どうして今の話から僕がポンコツだつて話になるんだらうか？このコンビ、なんか僕に辛辣じゃないかな？まあ、それだけ僕に気を許してくれてるつてことかもしれないけど。そう、これは親友故の距離感というやつなのだ。きつとそうなんだ。・・・そうなんだよね？

その後、僕達はリサちゃんをつぐみちゃんが作つてくれた特製カレーをご馳走になつて、リサちゃんと別れ、つぐみちゃんと二人で友希那の家を後にした。リサ先輩特製カレー、あれは美味しすぎた。リサちゃん、料理の腕では千聖に引けを取らないかもしれない。リサちゃん、恐ろしい子！

友希那の家を後にした僕とつぐみちゃんは、千聖の家へとやってきていた。時刻は丁度お昼時といったところだろうか。この後、僕は人生初のお粥作りに挑戦する。ちよつと緊張してきた。

「あんあん!」

「やあレオン久しぶりだね。後で散歩に連れて行ってあげるからね」

「あん!」

千聖の家に来ると、ゴールデンレトリバーのレオンが出迎えてくれた。レオンに会うのもなんだか久しぶりな気がする。後で思いっきり遊んであげよう。

「千聖さんの犬ですか? かわいいですね」

「あんあん!」

「わ! わ! 急にそんな飛びつかれたら、きやつ!」

レオンに飛びつかれて、後ろに転んでしまうつぐみちゃん。どうやらレオンも遊びたくて仕方が無いらしい。これは、後で行く散歩もハードなものになるかもしれない。覚悟しておこう。

「あはは、レオンは本当に人懐っこいからね。レオン、後でたくさん遊んであげるからその子を離してあげてよ」

「あん！」

「ふう、私、もうダメかもと思いました……」

「あはは、それは大げさだよ。それじゃ、中に入ろうか」

僕は、カバンから白鷺家の合い鍵を取り出した。千聖が僕の家の合い鍵を常備しているように、実は僕も白鷺家の合い鍵を常備している。まあ、使ったのなんて数えるほどだけ。

「それじゃ、入ろうか。レオン、また後でね」

「あん！」

「あはは、本当に人懐っこいですね」

「ゴールデンレトリバーって皆こうなのかな？ 他を知らないからわからないんだけど。よし！ それじゃ早速始めようか！」

僕は意気込み、お米と買ってきた天然水を用意する。米研ぎ人生初挑戦。僕は今日人生に新たな一ページを刻む。まあ、やることは小学生でもできそうなことだけ。

「わからないことがあつたらなんでも聞いて下さいね！」

「ありがとうつぐみちゃん！ でも、たぶん大丈夫かな？ リサちゃんの説明、本当にわかりやすかつたし」

実際にやったことはないのに、何故か既に経験したことがあるかのようにやるべきこ

とが頭に浮かんでくる。本当にリサちゃん様様だ。

「本当にリサ先輩、丁寧に説明してましたもんね。うーん、でもそれだと本当に私着いてきただけになっちゃうし……」

「それなら、タオルの準備お願いしていいかな？ダイニングを出て左の突き当たりにある部屋に置いてあるはずだから」

「わかりました！直ぐに取ってきますね！」

つぐみちゃんは本当に何かお手伝いがしたくて仕方が無かったらしい。ただ、タオルを取ってくるだけなのに凄い意気込んでいってくれた。その間に僕は米研ぎを進めていく。ちよつと不安に思っていたスピード勝負の行程も、無事滞り無く終えることができた。この分なら、問題無く米研ぎも終えれそうだな。

「雅さん取ってきましたよ！米研ぎは大丈夫ですか？」

「うん！もう終わるよ！……よし、これでいいかな？これぐらいの透明度でいいと思う？」

「はい！バッチリです！前から思っていましたけど、雅さんって普段からやらないだけでやれば大抵のことはできますよね？」

「あはは、よく言われるよ」

ただやらないだけ。まあ、昔から音楽以外の知識なんて別に無くてもいいかな？なん

て思ったりもしていた。だけど、今は僕も少しずつ変わってきている気がする。これも、千聖との関係が進んだ影響なのかな？今度、千聖に家事の仕方を教えて貰おうかな。熱でもあるのかって心配されそうな気がするけど。

そうこうしている内に、お粥作りも順調に進んでいっていた。後はお鍋に隙間を空けて三十分ほど弱火にして待っただけ。ここまで来たら一段落といったところだろうか？僕は、安心して大きく息を吹き出した。

「ふう、つぐみちゃん、見ててどうだった？何か間違ってたところとかない？」

「はい、全然問題無かったですよ！本当に初めてとは思えないくらいでした！」

「あはは、つぐみちゃんにそう言われると安心するな。うん、料理ってなんだか楽しいね」

「そうですね。実際に作って、誰かに美味しいって言ってもらえた瞬間は特に楽しいって思えますよ。雅さんも、きつとこの後千聖さんに言ってもらえたらそう感じるはずですよ！」

「あはは、まずは言ってもらえるかどうかだけだね」

「きつと言ってもらえますよ。千聖さんが、一生懸命作った雅さんの料理を不味いつて言うと思えませんから」

それって、不味くても無理して美味しいって言うってことだろうか？そういう意味に

聞こえるんだけど。そうつぐみちゃんに言うのと、慌てて否定しだした。その姿が、なんとも可愛らしかったので、思わず笑ってしまふ。つぐみちゃんには笑うなんてひどいって言われたけど、そう言う姿がまたまた可愛らしかったのではばらく笑いが止まらなくなつてしまった。笑い終えたころには、すっかり臍を曲げてしまったつぐみちゃんがそっぽを向いていた。

「いやー、ごめんねつぐみちゃん」

「ふんだ。もう知りません」

「いやー、慌てて否定するつぐみちゃんが可愛かったものだから」

「か、かわい!? きゅ、急に何言い出すんですか!?!」

しまった。つい口が滑つてしまった。顔を真っ赤にしてあたふたしているつぐみちゃん。そういうところが可愛らしいと思うんだけど。

「ごめんごめん。つい口が滑っちゃって」

「はあ、これは後で千聖先輩に報告しないとイケませんね。雅さんに口説かれましたっ
て」

「え、え!? そ、それだけは本当にやめてください! ち、千聖のお説教が・・・」

「あはは、冗談ですよ」

心臓に悪い冗談だ。本当に心臓が止まるかと思った。もしこんなこと千聖に知られ

たら・・・想像もしたくない。まあ、つぐみちゃんと何気ない・・・何気ないよね？うん、何気ない会話をしていたら三十分が経過した。蓋を空けて、試食をしてみる。うん、丁度良い硬さになっている。

「よし、これで塩を二つまみ振りかけて、梅干しを乗せて、完成！」

「お疲れ様です！雅さん凄いです！全然初めてには見えなかつたですよ！」

「これもつぐみちゃんとりサちゃんのお陰だね。うん、僕も一歩ポンコツから成長できたかな？・・・自分で言つて悲しくなつてくるけど」

「あはは、それでは、無事に終わったみたいなので、私は帰りますね」

「え？もう帰るの？千聖に会つていつてくれたらいいのに」

「会つていきたいんですけど、あんまりお二人の邪魔もしたくないですからね」

「あはは、気を使わせちゃつてごめんね。お礼に今度から羽沢珈琲店に通う頻度増やすよ。週五ぐらいに」

「増やしすぎじゃないですか!?!まあ、常連さん特典でサービスしますから、いつでも来て下さいね」

「うん、本当に今日はありがとうね」

そしてつぐみちゃんは僕達に気を使って一足先に帰つていったのだった。外からレオンの鳴き声とつぐみちゃんの悲鳴みたいな声が聞こえた気がしたけど、きつと気のせ

いだろう。気のせいってことにしておこう。

そして僕はお粥を持って千聖の部屋に向かった。バケツも一緒に持とうかと思ったんだけど、流石に両方一度に持つのは厳しかったからとりあえずお粥だけ。バケツはダインングに置いてきた。

「千聖、起きてる？入って大丈夫かな？」

扉越しに千聖に声をかける。声が返ってこなければきつとまだ寝ているのだろう。流石に、声が出ないほどひどい風邪だとは千景も言っただけでなかったし、きつとそうなのだろう。悪化して出なくなりましたとか言わないよね？

「ええ。大丈夫よ」

どうやら、その心配は杞憂だったようだ。中から千聖の声が返ってくる。その声を聞き、僕は扉を開け千聖の部屋へと入った。

「体調は大丈夫千聖……って千聖どうしたの!？」

そして、思わぬ光景に思わずお粥を落としてしまいそうになる。部屋に入り視界に飛び込んできたのは、涙を流す千聖の姿だった。

「それはこっちのセリフよ。どうかしたの？」

「だって千聖、泣いてるじゃないか」

「え？」

「どうやら、千聖は自分が泣いていることに気づいていなかったらしい。目元に手を持って行き、それで初めて自分が泣いていることに気づく千聖。大丈夫だろうか？」

「大丈夫よ。ちよつと欠伸をした拍子に出ちやつただけよ」

「そうなの？ だつたらいいんだけど。あんま無理をしないでね？」

「ええ、ありがとう。それにごめんなさい。ご飯を作りに行けなくて」

「そんなの気にしないでよ！ いつも千聖にはお世話になつてゐるんだから！ だから今日はほんの少しの恩返し。じゃん！ お粥を作ってきたよ！」

「え？ 雅が？」

その僕の言葉に、鳩が豆鉄砲を喰らつたような顔をする千聖。まあ、それも無理ないことだろう。僕自身、未だに自分でお粥を作つたつて信じられていない節があるのだから。

「これを、雅が？」

「えっへん！ 僕だつてやればできるんだよ！」

「ま、まあ味が悪ければ意味ないわよね。味見させていただくわ」

「そ、そこまで僕つて信用無いかな？」

「どうやら、よつほど僕は信用されていないらしい。それも仕方の無い事だと思うけど、流石に少し落ち込んでしまう。ま、これから僕も成長していくし、今に見てるとい

いさ。そして千聖は、恐る恐るといった様相で、お粥に口を運ぶ。その表情は、直ぐに驚きへと変わった。

「・・・おいしい」

「でしょ！僕だつてやるときはやるんだよ！」

なるほど。つぐみちゃんが言つてたこともよくわかる。自分が作つた料理を誰かに美味しいつて言つてもらえるのつて、こんなにも嬉しいことだつたなんて。これは確かに、ハマつてしまいそうだ。そして千聖は、そのままお粥を黙々と食べ進め、あつという間に完食してしまつた。

「ふう、ごちそうさま」

「うん！お粗末様！千聖、何か欲しいものとか無い？今日は日頃お世話になつてる恩返しをしたいからね。僕にできることならなんだつてするよ！」

「ふふつ、ありがとう。そうね、それじゃ、食後のデザートにアサイーボウルが食べたいわ。作つてくれるかしら？」

「えー！そんなの僕作れないよ！しようがないな。買つてくるから待つてよ」

「ええ、ありがとう。ついでに、紅茶もお願いね」

「はいはい。もう我が儘なお姫様なんだから」

「あら？知らなかつたの？女の子はみんな、我が儘な生き物なのよ？」

その発言は世の中の女の子を皆敵に回すんじゃないかな？まあ、今は僕しか聞いてないからいいか。僕は千聖に苦笑いを返しつつ、千聖の部屋を後にした。そして、玄関の扉を開くと、レオンにのしかかられて顔中を舐めまくられてるつぐみちゃんがいた。え？あれからずつとこの状態だったの？

「えつと……何してるの？」

「み、雅さん、助けて下さい……」

僕は、レオンをつぐみちゃんから引きはがし、つぐみちゃんに手を貸して立ち上げさせる。その顔は涎まみれになっていた。

「うう……顔中が気持ち悪い……」

「あはは、ほら、ハンカチ」

「ありがとうございます……紗夜さんには申し訳無いですけど、ちよつと犬が苦手になりそうです」

なんでだろう？それを聞いて絶望したかのように落ち込む紗夜ちゃんの姿が想像できた。おもしろそうだから、今度会った時につぐみちゃんが言ってたって報告してみようか。いや、後が色々怖そうだからやめておこう。

「よし、それじゃ気分を一新して、羽沢珈琲店に行こうか」

「え？雅さんまた家に来るんですか？本当に頻度増えるんですね」

「あはは、実は千聖にアサイーボウルと紅茶買ってきてつてお願いされちゃつてね。またつぐみちちゃんのお父さんにお願いできないかな？」

「そういうことなら大丈夫ですよ！作つておいてもらえるようにお父さんに連絡しておきますね」

「ありがとう」

つぐみちちゃんはスマホを取り出し、お父さんにメールを打ち出した。アサイーボウルか。作るのつて簡単なのかな？簡単そうだったら、今度挑戦してみようかな。今日の出来事を切欠に、僕も本格的に料理に目覚めてしまつたかもしれない。

「今度リサちゃんに、本格的に料理教えてもらおうかな」

「そういうことなら、私もお手伝いしますよー」

「うん、ありがとう」

誰かに作つた料理を美味しいと言つてもらおう。ただ、それだけのことがこんなにも嬉しいだなんて知らなかった。その相手が千聖だつたとすると、その喜びも一入だひとしお。愛する人に褒められる。なんて素敵なことなんだろう。また、千聖に喜んで貰おう。褒めて貰おう。そう決意を込めた、お正月のとある一幕だつた。

その数日後。

「雅、ほらお粥作ってきたわよ。それとお客さんよ」

「やつほー雅！お見舞いにきたよ！」

「はちみつティーを持ってきたわよ。喉に良いから、是非飲むといいわ」
「雅さん、大丈夫ですか？あまり無理をしないでくださいね」

「ううっ、リサちゃん、友希那、つぐみちゃん、それに千聖もごめんね」
風邪を引いて寝込む僕がいたのだった。本当に散々な年明けだ・・・

第51演目 星に願いを君との愛を

年が明けてから、一ヶ月ほどしたある日のことだった。

「映画を見に行きましよう」

千聖のその一言に誘われ、僕達はショッピングモールにやってきていた。時刻は12時。見る予定の映画の上映は13時から。時間にも余裕があるため僕達は先にランチを食べることにした。休日のこの日、ショッピングモールは当然の如く混み合っている。数多くのカップルから親子連れ。十人十色な人々がモール内を歩いている。それだけの人がいて、今はお昼時なのだ。当然、食事処は何処も満席状態だった。

「しょうがない。待ち時間少なそうな所探して、少しだけ待とうか」

「そうね。もっと早めに来るべきだったわね」

確かに、少し出るのが遅かったかもしれない。まあ、そんな過ぎてしまったことを気にしても仕方ない。僕達は人混みではぐれないように、手を繋ぎながら空いてそうな店を探した。そして辿り着いたのが、とある人気カレーチェーン店だった。

「ここなら待ち時間少なくて済みそうだね」

「そうね。上映時間にも十分間に合いそうね」

僕はその店でランチを済ませることに決め、席が空くまでしばらく待つことにした。しばらくと言つても、待ったのはほんの五分ほど。回転も速く、直ぐに僕は店内へと案内された。

「思つたより早く入れて良かったわね」

「そうだね。僕、もうお腹ペコペコで倒れそうだったよ」

そう言つてお腹を押さえる僕。今年に入つて、色々と食べてばかりな気がする。太らないように気をつけないと。まあ、体力トレーニングはしっかりと熟してるし、きつと大丈夫だろう。大丈夫なはずだ。大丈夫であつてほしい。

程なくして、店員さんが注文を聞きにやってくる。僕は2辛を、千聖は甘口を頼む。ちやつかりと、ご飯の量は通常の2倍の600グラムを頼む僕。千聖に少し呆れたような顔を向けられた。食べ盛りなんだから許して欲しい。

「それで、今日はどんな映画を見るの?」

実の所、僕は今日どんな映画を見るのか千聖に一切聞いていない。千聖とは、たまにこうやつて映画を見に来ることはある。まあ、主な目的は千聖の演技力向上のためのレッスンのだけけれども。だけど、いつも直前までどんな映画を見るのかは聞かないようにしている。理由としては、楽しみは直前まで取つておこうと考えているためだ。聞くタイミングとしては、今みたいな上映前の食事の場で聞く事が多い。僕の質問に対し

て、千聖が映画のタイトルを教えてくれる。

「世界の中心はタイと叫ぶって映画よ」

どうやら、僕の耳はこの短時間でおかしくなってしまったらしい。千聖は一体なんと言った？どこからどう聞いても冗談にしか聞こえないようなタイトルが聞こえてきたんだけど。

「えつと、ごめん千聖。僕の耳壊れちゃったのかもしれない。もう一回言ってくれろ？」

「世界の中心はタイと叫ぶよ」

「なんだ、壊れたのは耳じゃなくて頭だったか。理解が全くできない」

「冗談に思えるかもしれないけれど、本当にそういうタイトルの映画なのよ。通称タイチュー。今大人気の作品なのよ」

どうやら僕の頭は壊れていなかったらしい。よかった。だからと言って、理解ができたわけではないけど。一体作者は何を考えてこんなタイトルを付けたんだろう？しかも大人気って。なんだろう。凄い興味が湧いてきた。

「因みに、どんな作品なの？」

「簡単にあらすじを説明すると、東大を卒業したエリート系の主人公が、自分の夢を追いかけて、いくつもの大企業の勧誘を蹴って単身タイへ移住。そこで、地元の名家出身のヒロインと出会い、お互いに恋に落ちる。その後二人で幾多の苦難を乗り越え、逞しく

成長していくラブロマンス、っていうところかしら」

あらすじを聞く限りでは、至って普通の作品に感じてきた。なんだか面白そうに思う。どうやら、タイトルに騙されてはいけない作品らしい。

「なるほど。思ったより面白そうな作品だね」

「ええ。公開前はそのタイトルのインパクトで話題を呼んでいたのだけでも、公開してからは予想以上の作品のクオリティに注目が集まった作品よ。そして注目すべきは、このような作品にも関わらずメインの出演者は全員日本人なのよ。タイ人の登場人物も全て日本人が演じているわ。流石にエキストラはロケ地で雇ったタイ人みただけれども。異国人を演じるなんて、役者の腕の見せ所だと思うわ。要チエックポイントね」

「へ、へー。そうなんだー」

正直、僕からしたらどうでもいいポイントだった。まあ、千聖は映画鑑賞目的と言うよりも、演技勉強のために見に来てるようなもの。僕とは見るべき観点が違うのは当然だろう。

「お待たせしました。やさしいカレーのトッピングチーズ、300グラムの甘口と、ロースカツカレーのトッピングフライドチキンとビーフカツ、600グラムの2辛です」

千聖と映画のことについて話していると、注文していたメニューが運ばれてきた。う

ん、良い匂いだ。カレーの匂いは食欲を強く刺激してくれる。お腹が空いて溜まらない。
い。

「・・・ダメだわ。見てるだけで胃もたれしそう」

「え？凄く美味しいよ？千聖も食べる？」

「遠慮しておくわ。はあ、牛なのか豚なのか鳥なのか一つにしなさいよ・・・」

と、また千聖に呆れた顔をされてしまった。まあ、仕方ないよね。食べ盛りなんだから。その後も、僕達は今から見る映画のことについて話しながら、食事を進めていった。千聖が、終始胃の辺りを手で摩りながらカレーを食べていたのが印象的だった。このトッピング、美味しいのね。

食事を終えた僕達は、映画を見る前に売店に並んでいた。ドリンクを買うのが目的だ。開場まで後五分。丁度良い時間だ。

「映画と言えばポップコーンは欠かせないよね」

「あれだけ食べてまだ食べるの・・・？」

「あはは、冗談だよ。流石に僕もお腹いっぱい」

僕の冗談に頬をひくつかせる千聖。流石に僕も今はお腹がしんどい。少し残念に思うけど、ポップコーンは諦めよう。

「えっと、何にしようかな？コーラか、コーヒーか、世界の中心はタイと叫ぶコロポドリ
ンク、すいかジュース？」

「人気映画だから、劇場とコラボしてるのよ。タイは温暖な気候だから、良いスイカが育
つよ」

「それはまあわかるんだけど、今は冬だよ？」

冬真っ盛りの今、スイカとはどうなんだろう？なんとというか、風情に欠ける気がする。
る。

「でも面白そうだし、それに美味しそうだし、これでいいかな。スイカジュースくださ
い」

「それなら、私もそれにするわ。二つお願いします」

僕達は店員さんに注文をし、商品を受け取る。受け取って一口味見をしてみたが、な
るほど。これは美味しい。店員さんに聞いてみたら、材料のスイカもタイから取り寄せ
ているらしい。日本にいなながら、タイ気分が味わえるというわけだ。今日一日で僕は一
体何回タイと言ってるんだろう？

「大変長らくお待たせいたしました。13時ちょうどより上映の、世界の中心はタイと叫ぶの入場を開始いたします」

ドリンクを買い終わってしばらくすると、係の人のそんな声が聞こえてくる。その声に従い僕達は入場ゲートへと進んでいく。案内されたスクリーンに入り、座席に座る。それからしばらくすると、スクリーン内は多くの人で溢れかえっていた。休日ということもあるのだろう。どうやら座席は満席らしい。

「凄い人だね」

「ええ。それほど人気の映画みたいだもの。始まるのが待ち遠しいわ」

始まるのはまだかと心待ちにしながら、スクリーンに流れる映画の予告を眺めている。すると、とある映画の予告が流れてきた。確かこの映画は

「これって、千聖が出演している映画だよな？」

そう。確か千聖が出演していたはずだ。千聖は、そこまでメインの役では無いと言っていたけれども、そこまで脇役というわけでも無いだろう。現に、予告編に出てくる出演者のカットにも、登場シーンと名前が出ていた。大きなスクリーン一面に好きな人の顔が映るって、なんだか嬉しいけど、こそばゆい気持ちになってしまう。

「ええ、そうよ。タイトルは星が降る夜。大学に入り、天文部サークルを立ち上げた主人公。最初は、特に活動する気もなく、ただ大学でノンビリできる居場所を作るために立

ち上げたサークル。そんな彼に付き合つて、サークルに入った友人達。彼らが二回生になつたある日、天文部サークルにとある新入生の女生徒が押しかけてくる。彼女は、星が大好きな子で、サークルの皆に星の素晴らしさを徐々に教えていく。最初は面倒くさそうにしていたサークルのメンバーも、徐々に星の魅力に触れていき……この続きは是非劇場でね」

「えー、すつごい気になるんだけど」

「公開されたらまた見に行くのはどうかしら？」

「もちろん！どんな映画か気になるし、それに何より千聖が出てるからね」

「ふふつ、ありがとう」

「それで、千聖はどんな役をやつてるの？」

「私は主人公の妹役よ。主人公とは違つて、星が大好きな高校生。高校では天文部に所属してる高校三年生よ。実はサークルに入つてきた女の子、このお話のヒロインも、私の演じる子と同じ高校同じ部活に所属していたのよ。つまり、正真正銘の先輩後輩の關係という訳ね」

なるほど。つまり主人公ともヒロインとも近い關係にあるというわけか。それつて十分メインポジションに思えるんだけど？まあなんにせよ、内容も面白そうだし、公開が楽しみだな。その後も、何本か予告が上映され、そして遂にその時間がやつてきた。

物語の始まりだ。デカデカと映る東大の校舎。赤門と呼ばれるその門扉。そして、イケメン俳優が演じる主人公。なるほど。その雰囲気からもエリート風の風格が漂ってくる。場面が移り変わり、おそらく主人公の自宅だろう。自宅で、両親であろう男女と主人公が向き合っていた。

「俺、タイに行くよ。タイに行つて、ムエタイ王者になつてくる！」

えー、夢つてムエタイ王者だったの。夢を追つて移住するとは千聖に聞いてたけど、まさかの夢の内容に衝撃を受けた。当然、猛反対する両親。だけど熱く夢を語つて両親を説得する主人公。最終的には、勘当のような形で主人公を追い出してしまふ。そして、学生時代にバイトでコツコツ溜めたお金でタイへと飛ぶ主人公。そしてタイに降りたつて直ぐに、スリによつて全財産を失つてしまふ。えー、いきなり苦難だらけなんだけど。

当てもなくタイの街中を彷徨く主人公。そんな彼に声をかける人物がいた。なんでも、日本でムエタイをした時にお世話になつたタイ人のコーチらしい。しかも、元ムエタイ王者というおまけ付き。主人公から事情を聞いた彼は、主人公を家に住まわせてくれるらしい。しかも主人公のトレーニングまでしてくれる。凄く良い人だ。

それからしばらく経つたある日、街中をランニングしていた主人公は、路地裏で暴漢に襲われている女性を見かける。直ぐさま助けに入る主人公。六人いた暴漢全員を

軽々と伸してしまう主人公。直ぐさま女性に近づき、怪我が無いことを確認し安心する。だけど、暴漢はまだもう一人残っていた。物陰から飛び出した暴漢がナイフで主人公に襲いかかる。その初撃を避ける主人公。しかし何を思ったのか、暴漢は女性に向かつてナイフを刺そうとしていた。それを察知し、直ぐさま暴漢と女性の間を割って入る主人公。直ぐさま迎撃しようとするも、タイミングが悪かった。迎撃も間に合わず、腹部にナイフが刺さってしまった。避けることならできたかもしれないけど、避けてしまったら女性に刺さっていただろう。身を挺す形で女性を護った主人公。そして、ナイフが刺さりながらも、最後の一人を伸してしまう。しかし、そこで力尽きて主人公は意識を手放してしまう。

次に主人公が目覚めたのは、病院のベッドの上だった。目覚めて最初に飛び込んできたのは、あの時助けた女性の顔だった。目覚めた主人公を確認し、涙を浮かべ主人公に抱きつく女性。そこで明かされる女性の正体。その女性は、タイ国内で知らない人がいないであろう名家の一人娘だった。あの時は、なんでも身分を隠して街に一人で遊びに来てたらしい。お嬢様が突然消えてお屋敷では大騒ぎになってたらしいけど。なんともアクティブなお嬢様だ。

その後退院した後も、頻りに主人公を訪ねてくるお嬢様。誰の目から見ても、そのお嬢様が主人公にとある感情を抱いているのは明らかだった。そしてそれは、当然彼の父

親も知ることになる。お屋敷で父親と二人向かい合うお嬢様。

「いいか！ムエタイ選手なんていうのはな！どいつもこいつも野蛮な男達だ！お前に相応しいような奴らじゃない！わかったら奴から離れるんだ！」

「そんなこと、できません！だって私は、私は、父さんが言う野蛮な人の、優しさを知ってしまったのだから……！」

その後も平行線を辿る親子の論争。え？この作品ここからどうなっていくの？なんだか凄く面白くなってきた。僕は、既にその作品に見入っていた。その後も、食い入るようにその作品を見続ける。上映が終わるまで、僕はスクリーンに釘付けになっていたのだった。

上映が終わり、スクリーンから出る僕達。同時に出てきた人達は、皆口々に映画の感想を語っている。僕も語りしたい。語りたいたのだけれども、それどころでは無かった。

「いつまで泣いてるのよ」

「うー、だって、だってえ」

理由としては、感動のあまり僕が号泣しているためだ。本当に良い作品だった。特に最後の王者防衛戦のシーンは涙無しには見られなかった。現王者に何度も窮地に追い込まれる主人公。追い込まれて、追い込まれて、そして博打のような最後の一撃を放ち、現王者に逆転KO勝ちをし、夢を叶えた主人公。そして、新王者インタビューの場を借りて、ヒロインへと世紀の大プロポーズを行う。それに涙ながらにOKを出すヒロイン。思わずもらい泣きしてしまった。

その後のモノローグでの、主人公のセリフがまたグツときた。ただのちっぽけなりリングの中心。こんなちっぽけな中心が、今の俺にとつては世界の中心に等しかった。このセリフが凄く良かった。思い出したらまた思わず泣いてしまう。タイトルでちよつと馬鹿にしてごめん。蓋を空けてみたら良いタイトル、良い作品だったよ。

「はあ、思ってたような作品じゃなかったわね」

と、そんな感動の渦中にいる僕の横で冷めたため息をつく千聖。ええ？ 何この温度差？ 号泣してる僕が馬鹿みたいなんだけど？

「えっと、千聖は面白くなかったの？」

「そんなことは無かったわよ。作品としては、完成度が高く凄く面白い作品だと思うわ。良い脚本ね。ただ、演技面は及第点以下ね。特にあのヒロイン役の女優さん。演技の起伏が下手だわ。もつと感情を表に出すべき面で出さず、出さなくて良い面で出し

て、演技がちぐはぐなのよ。全ての場面がそうだったわけじゃ無いけれども、そういう場面が目立ったわ。それに、演じてるのはタイ人の役なのに、あれじゃまるつきり日本人のままよ。もっとタイ人について勉強してから出直してくるべきね」

うわ、辛辣。流石千聖。演技に関しては妥協を許さないね。話の内容は千聖も気に入ってたみただけど、演技面はダメか。僕が見る分にはあまり気にならなかつたんだけどな。周りのお客さんの反応を聞く分にも、そういう話は全く聞こえてこない。おそらく、演技に精通した人にしかわからない何かがあるのだろう。

「映画も終わったし、これからどうする？」

「実は私、もう一カ所行きたいところがあるのよ。そこに行きましょう？」

「いいけど、何処に行くの？」

「それは着いてからのお楽しみよ。それじゃ、行くわよ！」

「え、ちよつと千聖待つてよ！」

僕の手を引つ張つて急に走り出す千聖。思わず転びそうになつてしまう。そういえば、あの映画の中でもこんなシーンあつたな。アクティブなお嬢様に引つ張り回される主人公。今日の千聖は、あのお嬢様に似てアクティブモードらしい。

「千聖、急にそんなにアクティブになつちやつて、どうしたの？」

「実は、次に行くところが今日のメインだったのよ。前から雅と行きたくて、仕方なかつ

たのよね。凄く楽しみだわ！」

そう言つて、人混みを掻き分け進む千聖。そんな千聖に手を引つ張られながら着いていく僕。目的地に着くまで、そんな状態は続くのだった。そして僕達は気づくことは無かつた。そんな僕達を見つめる人物がいたことに。そんな人物に気づくのは、まだまだ先のお話。

千聖に引つ張られてやってきたのは、ショッピングモールの側にあるとある施設だつた。

「プラネタリウム？」

そう、プラネタリウム。星を見るための施設だ。でも、どうしてプラネタリウムなんかにかに？千聖つて、そんなに星に興味あつたつけ？

「今度私が出演する映画、星が降る夜。その中で私が演じてる役がさつきも言った通り星が大好きな子なのだけれども、その役を勉強する過程で、星について色々勉強したのよ。それで勉強してる内に、私も星に興味が出ちゃつて」

「それで今日見に来たと」

「ええ。実際には、私一人では既に何度か来てるのよ。今日は雅にも星の素晴らしさを知って欲しいと思つて」

なるほど。それでプラネタリウムという訳か。確かに、今までじっくり星を見た試しなんて無い。夜空を見上げるにしても、ここは都心だ。そこまで綺麗な星空が浮き上がるわけでもない。だからだろう。今まで星なんて全く興味が無かった。

「まあ、星をじっくり見る機会なんてあまり無いもんね。たまにはこういうのも、新鮮でいいかもね」

「プラネタリウムは所詮作り物とはいえ、そう馬鹿にできないわよ？ 今に雅も星の素晴らしさに取り憑かれるわ」

「えー？ それはどうだろうな。ま、楽しみにしてるよ」

そして僕達は施設内に足を運ぶ。丁度今から上映が始まるらしい。急ぎチケットを二人分購入し、入場する。開演前の場内は薄暗く、適度なドキドキ感を与えてくれる。

「今は冬の星座展を上映してるの。冬の星座は綺麗な物が多いから見物よ。色々と説明してあげるわね」

そして上映が始まる。部屋一面に広がる作り物の星空。それは、この都心では到底拝むことのできないような宝石のような輝きを放っていた。

「まず有名なのは、やっぱりオリオン座かしらね。等間隔で並んだ三つの星が特徴的よね。オリオンの帯とも呼ばれることのあるこの三つの星。それぞれ、ミンタカ、アルニラム、アルニタクという名前なのだけれども、星の明るさを表す等星の数字はどれも二等星。比較的明るい星よ」

等星。確か理科の授業で習ったな。オリオン座という名前は当然僕も知っている。けど、それに含まれる星の名前まではあまり知らないな。

「オリオン座には、星座の右肩に位置するベテルギウス、左膝上に位置するリゲルの一等星二つを始め、オリオンの帯の三つ星を含む二等星五つを擁する、比較的明るい星が多くて、都心でも見つけやすい星座だと思うわ。良かったら今夜探してみて」

「へー。有名だとは思ってたけど、見つけやすい星座でもあったんだね。なるほど」
「次はカシオペヤ座。カシオペア座とも言うわね。この星座は形が好きなのよ。シエダール、カフ、ツイー、ルクバー、附路の五つの恒星がアルファベットのWの形を作っている星座。この星座の周りには明るい星もそこまで無いから、比較的に見つけやすい星座でもあるわね」

カシオペヤ座も授業で習ったな。僕も、この星座の形は独特だなって授業中に思ったことがある。わかりやすくして良いと思う。

「星座以外だと、こんなものもあるわ。おおいぬ座のシリウス、オリオン座のリゲル、お

うし座のアルデバラン、ぎよしや座のカペラ、ふたご座のポルクス、こいぬ座のプロキオンの六つを結んだ冬のダイヤモンド」

「ダイヤモンドなんだ。大三角じゃなくて」

「そうよ。勿論、大三角もあるのだけれども、冬にはダイヤモンドもあるのよ」

冬のダイヤモンドか。それは初めて聞いたな。冬の大三角なら僕も名前は聞いたことあるけど、ダイヤモンドと呼ばれるものまであるなんて知らなかった。なんだか少し興味が湧いてきた。

「そして、雅も言ってくれた冬の大三角。これは、おおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオン、オリオン座のベテルギウスを繋げた物よ。他にも、しし座のデネボラ、うしかい座のアルクトゥールス、おとめ座のスピカを繋げた春の大三角。はくちよう座のデネブ、わし座のアルタイル、こと座のベガを繋げた夏の大三角があるわ」

「なるほど。秋の大三角は無いの?」

「秋には無いのよ。その代わり、ペガスス座の四つの星、アルフェラッツ、シエアト、マルカブ、アルゲニブを繋いだ秋の大四辺形と呼ばれる物があるわ。ペガススの大四辺形とも呼ばれるけど。他に変わりものだと、おおぐま座に含まれる北斗七星、うしかい座のアルクトゥールス、おとめ座のスピカ、そしてからす座全部を結んだ春の大曲線という物があるわね」

春の大曲線か。面白いな。機会があれば、春の星座展も見に来てもいいかもしれない。僕は、煌めく星々を眺めながら、千聖の説明に耳を傾け、目を向ける。部屋一面に輝く星々。だけどそんな星々よりも、僕には星について嬉々として語る千聖の方が輝いて見えた。

目も眩むような笑顔で、星について僕に説明してくれる千聖。暗い室内においても、その顔はよく見えた。本当に星が好きになったんだろう。その表情がそのことを物語っている。僕はその後も、千聖の説明に耳を傾けつつ、その目映い笑顔に目を奪われ続けるのだった。

外に出る頃には、すっかり空は暗くなっていた。そこには、薄らと星々の輝きも見えらる。都心故に、さつき見たほど綺麗には見えなくても、それでも中にはここにあるぞとわかりやすくアピールしてる星座もある。

「あの三つの星。あれがオリオンの帯だね」

「ええそうよ。ほら、都心でも見つけやすいでしょ？」

確かに、あれなら直ぐに見つけられる。さつき、千聖が言つてたとおりだ。特徴的で且つ、明るい星だからこその特権みたいなものだろう。

「以前に、日菜ちゃんが天体観測に行つたつて言つてたの覚えてる？」

「そういえば言つてたね。香澄ちゃんや蘭ちゃん、つぐみちゃんとこころちゃんもいたんだっけ？」

「ええ。私も、いつか行きたいなつて思つてるのよ。雅、その時は付き合つてくれるかしら？」

「もちろんだよ。どこにだつて付き合うさ」

「ふふつ、ありがとう」

とは言つても、僕も千聖も多忙な身だ。天体観測に行くとなると、どうしても泊まりがけになるだろう。そんな予定を二人合わせられるのか。難しいかもしれないけど、千聖のためだ。がんばろう。と、密かに一人決意している時だつた。

「あれ？もしかして」

空に一つ、煌めく線が流れていく。その現象を僕は知つている。実際に見たのは初めてだけど、知識としては知つている。間違いないあれは

「流れ星だ！」

間違いない。流れ星だ。綺麗な軌跡が、空を駆け抜けた。

「まさかあんな綺麗に流れ星が見えるなんて。雅、願い事は決まってる?」
「うん。もうお願いをしたよ」

願い事なんて、そんなものは最初から決まっていた。このままずっと、千聖とお互いに愛し合つて、幸せな人生を歩めますようにと。そう星に願つた。

「千聖はなんてお願いしたの?」

「私はね。雅の夢が成就しますようにって」

「僕の夢が?それはありがたいけど、千聖、自分のことお願いしなくて良かったの?」

「いいのよ。私が願いたいことは、きっと雅がお願いしてくれてると思うから」

なるほど。どうやら僕の願いの内容は千聖に完全に読まれていたらしい。確かにこの願いなら、僕達二人のどちらにとつても、効力があると思う。

「それにしても、良い物が見れたわね」

「うん、そうだね。千聖に言われて空を見上げてたお陰だね」

「ふふつ、たまには空を見上げてみるのもいいものでしょ?新しい発見があつたりして、楽しい気持ちになるかもしれないわ」

「あはは、今正にそうだったもんね」

「でしょ?それと、はいこれ」

そう言つて、千聖は何かラッピングされた箱を僕に渡してくる。これは一体?

「空けてみて」

千聖に言われ、その箱を空けてみる。中に入っていたのは、星の形をした茶色い物体だった。その正体は、誰もがよく知っているだろう。

「これは、チョコレート？」

「ええそうよ。今日は二月十四日。バレンタインデーでしょ？だから、チョコレートを作ってきたの。今日の日に合わせて、星型にしてみました」

「そうか、バレンタインか。すっかり忘れてたよ。ありがとう。星型っていうのも良いアイデアだね。今日の体験の後だと、より一層美味しそうに見えるよ」

「なんでこの体験の後に出てくる感想が美味しそうなのよ。普通綺麗に見えるとかじゃないかしら？」

「えーだって仕方ないよ。僕にとっては、花より団子ならぬ星よりチョコだからね」

そう言って、二人で笑い合った。たまには空を見上げてみるのもいい。そう教えてくれた一日だった。普段目に見えない場所も、たまに目を向けてみると、新鮮な、新しい発見があるかもしれない。下を見ているだけじゃ、何も始まらない。どうせ見るなら、何事もやっぱり、上の方が良いだろう。夢だつてそうだ。時には下に目を向けてみるのも大事だろう。だけど、それだけじゃ自身の成長には繋がらない。どうせ見るなら、遙か高みが良い。だれも手が届かないような、遙か高みが。いつかきつと、その高みを見る

だけじゃなく、手を届かせてみせる。そう密かに決意した、星が降った夜の一幕だった。